



寒明け前



—青潟大学附属シリーズ—
中学編
第四シーズン 2

舞夜じよんぬ

三人分のサイダーを用意し、上総は自室へ戻った。お客様用だし、もちろん盆に載せて持って行く。おつまみは必要ない。わざわざ手土産として持ってきてくれたお菓子がある。さっそく開こう。

上総が準備するまでもなく、すでに客人二人は包装紙を引きちぎり、さっさと菓子箱を取り出していた。大ぶりの菓子箱から、見た感じ打ち上げ花火っぽい筒型のものが、ひとつひとつ取り出されてゆく。もちろん室内で花火をあげるような物騒なことをするわけがない。

「うちのじいちゃんの弟子やってるおばちゃんが持ってきたのをくすねてきたってわけ、さ、早く食うぞ食うぞ、立村」

上総は手元に「花火筒」に似たものを手に取ってみた。手首に程よい重みがかかる。「青澗名産棒羊羹」とある。

「なんだ、羊羹か」

「そうよ。ほら、この糸を使って真中から絞るように切るときれいに食べられるよ」

轟さんがたこ糸の両端を持ち、手をばってんにして説明してくれた。

「なんで轟さんたこ糸なんて持ってるわけ？」

「箱の中に入れてたんだけど、なんだろうなって思ってね。ほら、説明書もある」

すでに天羽は直接包み紙をはいでむしゃぶって

運んできたサイダーをすぐに口へ含み、「ふああ」と息を吐いた。

「いやあ、さっぱり。どう、トドさんも一杯どうっすか」

「少しずつ楽しむのもおつまみぽくて乙なものよ」

隣で、さっき説明してくれた通り羊羹に糸を巻き付け、コイン型クッキーよろしく皿に盛りつけている轟さん。秋には目立ちすぎる原色黄色のウインドブレーカー姿の天羽と比較して、轟さんの格好は黒のトレーナーにブラックジーンズ、部屋の中でもかぶりっぱなしの野球帽。あまりにも地味だった。

上総から見て、ふたりとも九月下旬の季節感を取り入れた格好には見えなかった。

天羽と轟さん、ふたりの格好を見比べて思わずため息をついた。

鋭い轟さんに勘付かれたらしい。ちらと上総の方を見やると、

「立村くん、うちでもそういう格好してるんだ」

さっそく突っ込まれた。しかたない、答える。

「好みだからかな」

上総もしゃれた格好をしているつもりなんてない。薄茶のシャツ一枚だと風がすり抜けて寒いから上に濃い茶のベストを羽織っただけだ。ジーンズやTシャツはもともと苦手だから、似た色のものを合わせただけのことだ。ついでだ、轟さんに質問してみよう。

「轟さんどうして帽子、脱がないの」

困った風に轟さんが帽子のつばに手をやった。目まで隠した。

ちらと頷いて代わりに説明してくれたのは天羽だった。

「ほら、評議連中と俺の部屋で会議することあるだろ。めったに俺の部屋覗きにくる奴いねえけど、野郎の部屋に女子がいるってことがばれると、ほら、面倒だろが、いろいろと」評議委員長である上総に内緒で会議をしていたわけか。

上総は丸のまんま、筒型の羊羹を手に取りはがそうとした。天羽のようにかぶりつきたかった。なのに、剥げない。見かねたのか轟さんが手を伸ばし、

「やるよ、立村くん、貸して」

上総の持っている羊羹を黙ってひったくり、同じように切り分けた。

「立村くん、食べれば」

「あ、どうもありがとう」

見事五分、きれいに切り分けてくれた。お上品に一つずつかみしめた。

「つまりね、男子に変装した方が便利なのよ。髪の毛だって見せないほうが、無難だしね」——言われてみれば。

女子としては「不細工」のパーツ・二枚歯も、深海魚っぽい目も、男子用の「部品」として捉えれば、やんちゃ坊主っぽく見えるだけ。見ていて自然と落ち着く。

「まず確認したいんだけどさ」

グラスが空の天羽に、もう一本サイダーを開けてやった。

「学校では死んでも話せない話って、いったい、何」

「知ってるのはあと更科と難波だけだろ」

「今の話だと俺以外の三年評議みんな知っていそうだけど」

「ほらまたすねるんじゃないよ。ほんと立村、お前さあ」

「ガキだと言いたいんだろ、勝手にしろよ」

本当は思い切り怒鳴りつけてみたいところだけど、天羽がしゅんとする気配なんて感じられない。あきらめた。

本条先輩がいる頃から自分に貼られているレッテルは今更ながら「ガキ」のみだ。

学校祭も終り、前期評議委員会の主だった行事も一段落した。一番の懸案事項だった球技大会もなんとか片付き、なんとか後期に向けてうまくシフトしていけそうな状況にさしかかっていた。今のところ「評議委員長」としての立村上総を否定されることはほとんどなかった。もちろん裏では上総なりにいろいろと悩むこともある。落ち込むことだってあるのだが。

上総は窓を少しだけ開けた。土曜の昼下がりに、まだ気温もあたたかく、庭の花も夏っぽい匂いを残して咲いていた。あと一ヶ月くらい経つと菊が一杯に咲き誇り、父がうんざりしながら園芸鋏を片手にちょきちょきやっている姿が見られるだろう。

「ところでさ、立村」

サイダーのおかわりを満足して口に持っていく天羽。なんだか日本酒飲んでいるみたいだった

。テーブルに肘をつけてつんつんと指でグラスを叩き、上総に注意を促した。

「最近、清坂ちゃんとデート、してるのか」

「それ、私も聞きたい！」

——いったい何考えてるんだか。

サイダーを一口だけ飲み込み、さっぱり答えた。

「今日は近江さんと一緒に、どこか喫茶店で話をするとか言っていたな」

「近江さん」のところ、目一杯アクセントをつけてやった。

多大なる犠牲を払って得た、天羽にとって最愛の彼女の苗字である。

勘よく轟さんは、包まれたままの筒型羊羹で天羽をつついた。

にやにやしつつも天羽は赤くならなかった。これは意外。

「しゃあねえってとこよな。寄席だったら喜んでついて行けるけどな。お嬢さまチックなお茶会なんて、がさつな俺にはなあ」

「まあまあ、落ち込まないでって」

上総はさっき轟さんが切ってくれたコイン型羊羹を口の中に放り込んだ。

「立村くん、女子の状況とか、美里から聞いたりしないの」

「しない。最近はD組もいろいろとあってさ」

「ああ、菱本先生祝ご婚約、って奴ですなあ」

あえてそのことについては触れなくなかった。どうせ月曜になってからいろいろと、美里や貴史たちと話し合わねばならない議題なんだから。いやなことはぎりぎりまで忘れていたい。無意識ながらも本音が覗く。

轟さんのグラスが半分空になってきていた。上総は目で合図したうえで、しずしずと注いだ。水の白い泡がゆっくりとよじ登っていき、かすかな発泡音が響いた。この音を聞いている時だけはなぜか、口を利かないでいる。わずかな空白の合間、上総は言葉を整理した。

「ところで繰り返すようだけど、本日の本題だ。そろそろよいか？」

何も今日、土曜放課後、品山くんだりまで自転車で来てもらったのは、羊羹を食い合って与太話に燃えるためではなかった。今週の委員会が終わった後、天羽に、

「立村、悪いが外部シャットアウトされた場所で、ひとつ相談したいことがあるんだがな」

持ち掛けられたのがきっかけだった。

いつもだったら空いている教室か、大学学食、もしくは近所のスーパーに備え付けられている空きベンチを利用するのが常だった。それでいいんじゃないかと尋ねると、

「外にばれたらしゃれにならねえからさ。評議委員会男子部と女子部の極秘報告会ってことで、どっかい場所ねえか？ 金使わないで、人気がなく、安全なとこってな」

となると喫茶店、学校内は没だ。一番よしと判断したのが、上総の部屋だった。

「まず、第一の議題な」

天羽はぼぼんと指先でテーブルを叩いた。あぐらをかいた。

「霧島キリコの進学先が最終決定したというニュース、聞ってるか？」

「やはり、可南女子高校にか」

「ああ、正式な合格発表はまだ先だけどな、学校側でいろいろ手を回して合格確約を取り付けたらしい」

三Cの女子評議委員、霧島さんが成績不振につき、来春青湊大学附属高校への進学を断念し、他の私立女子高校へと進む。修学旅行前後から噂されていたことだった。上総も天羽からその話を、修学旅行の二日目夜に聞かせてもらった。

轟さんも頷いた。女子の問題はやはり女子から聞きたい。促した。

「どうやらね、夏休み前から、先生や親はどんどん話を煮詰めていたらしいけど、ゆいちゃん本人に伝えたのはおとといあたりみたい」

「よく隠せたよな。本当に霧島さん、昨日まで気付かなかったのか」

上総からするとそちらの方がずっと謎だ。頷き、轟さんは続けた。

「昨日ね、ゆいちゃんが職員室で先生に泣きながら訴えてるところ見ちゃったのよ。お願いだから青大附属にいさせてほしいって。その後先生がゆいちゃんを、たぶん生徒相談室だと思うんだけど連れて行って、それきり。今日ゆいちゃん学校休んでたよ」

「知らなかったな」

このふたりがなぜそんな裏事情を知り尽くしているのか、そちらもまた不思議だ。

「それだけの騒ぎになったということは、もうC組の人や主だった人たちはみな知っているってことだな」

「ゆいちゃんは絶対そんなことない、って信じてて、先週の実力テストもものすごい勢いで勉強していたわよ。まあ、結果はいつもの指定席だけ」

「今の段階で合格が決まるって早くないか。俺たちだって、青大附高の推薦が決定するのは、十一月だろ」

いくら青大附中がエレベーター式進学のため受験戦争からほぼ解放されているといってもだ。高校推薦の合格発表が九月下旬というのは早すぎる。

轟さんは首を振りながら疑問に答えてくれた。

「スポーツ推薦とかあるでしょう。本人たちの意志があれば無条件でって。ゆいちゃんの場合はまがりなりにも青大附中の生徒だし、可南でも欲しかったんじゃないかな。『成績優秀な青大附中』の生徒が入学してくれるとなったら、学校側でも嬉しいだろうし。ゆいちゃんはまだ気持ちの整理がついていないようだけど、私たちはただ黙ってそれを見守るのが一番いいと思うんだ。立村くん、どう思う？」

修学旅行四日目に教えてくれた事柄を、轟さんはまた繰り返した。

「俺もそう思う。ただそうすると後期のC組女子評議はどうなるんだろう」

天羽が口をはさんだ。

「そ、別の女子になるわな。もう更科が動いてる」

ずいぶん早いものだ。同時にちりちりと心が焦げるような痛みも一緒に感じた。

霧島さんが諸般の事情持ちの縁故入学者で、成績は入学以来最下位のままだということ。

それでも青大附中に合格できたことを誇りに思い、毎日猛勉強をして必死に学校の授業へ着いていこうとしていたこと。

また、クラス評議、人呼んで「C組のアマゾネス」と呼ばれる猛女振りを発揮していたこと。時々ぶつかり合うことはあったにしても、三年間、同じ評議委員会で協力しあっていたこと。しょせん他人のことかもしれないけれども、一緒に集まってきた評議の仲間が最後の最後で脱落していく様は、やりきれなかった。

「とにかく、キリコの件については評議委員会としては何も言わず自然に任せるとというのが俺の考えなんだがなあ、立村、どう思う」

「俺もそれがいいと思う」

どんなに手を尽くしても霧島さんが可南女子高校へ推薦入学することは決定事項なのだから、あとは残された時間を同学年の仲間としてあたたかく過ごしていく。それが一番いいことなのではないだろうか。この考え、修学旅行時から変わったことはなかった。

「その件について、女子はどうなんだろう。轟さん、何か聞いているかな」

上総とまた目が合い、轟さんは口元を隠すように笑った。

「一応、美里は知っていると思う。だから近江さんを誘って喫茶店でお茶しようってことになったんじゃないかな。私たちと同じ、作戦会議よ。ただ近江さんはもともと、ゆいちゃんのこと好きじゃないよね。だからあまり乗り気じゃないと思うし、うまく押さえてくれるんじゃないかな。その辺は心配してない。ほら、天羽くん」

またまたふくれっつらの天羽が、二本目の羊羹にかぶりつく。

「なるほどそうか。俺も前に、清坂氏にはやめるように話しておいたんだけどさ。説得力ないからな。あの人、俺の言うことなんて聞く人じゃないしさ」

「そうか、もう話してあるんだ」

言葉を濁した。

「一応、修学旅行の時」

四日目の夜、同じ部屋の中で一夜を明かしたなんて、絶対に言えない。

轟さんは天羽くんと顔を見合わせた。

「そいじゃ、第二弾に行くぜ。キリコは前座だ。キリコがいればキリオがいるってこと、立村、お前も知ってるだろう？」

——霧島さんの良く出来た弟。キリオか。

現在、青大附中一年に在学中。正式名・霧島真のことだろう。

修学旅行中、このあたりの事情は更科と難波から聞かせてもらった。

聞くところによると、霧島弟……便宜上そう呼ぶ……は頭の回転が速く、姉と似ているところは整った外見だけという話だった。

上総も何度か顔を見かけたことがある。通常、成績がよく人気のある生徒は、自動的に評議委員か生徒会役員を目指すものなのだが、霧島弟の場合は姉があの評議委員ということもあって、青大附中出世コース「評議委員長」の座を最初から拒んでいたという。どちらかという生徒会

に色気を示しているとも聞いている。

また、家庭内のさまざまな事情もあいまって、霧島弟は姉のことをとことん嫌っている。「憎んでいる」と言った方が近いのではないか。不潔、淫乱、最低女、などとありとあらゆる言葉で罵倒しているらしい。他の生徒がいる前で、「近づくな、能無し！」と罵ったという噂も耳にしている。姉の威厳もあってその時は霧島さんも言い返したらしいが、最近はどうなのだろう。特に、姉弟の立場が逆転してしまった今では、いくらプライドを持って戦っても、あっさりひねられるのがオチだろう。

「藤沖会長からある程度聞いてる。次期会長は霧島弟で決まりだろうってさ」

「なんだ、聞いてたんだ」

かなりがっかりした声。轟さんが大きくため息をついた。

「藤沖としては、生徒会長を男子態勢で進めたいというこだわりがあるし、今の二年女子副会長ははっきり言って口先だけで使えないから、この際は一年でも致し方なしってことで迎える方向で考えているらしいよ。俺も生徒会事情はよくわからないけれど、なんで女子だとまずいんだろう。仕事ができる女子がかなりいるって話だろう。今の二年生副会長にはさ」

「ま、単純に藤沖の苦手なタイプだってだけじゃねえのか？ わいわい騒いで、要求ばっかして、結局なんもできずに尻拭いさせられるってパターンがもういやなんじゃねえの」

そんなの聞いていない。もっとも男子の会長の方が、後期評議委員長としては話しやすく楽ではある。きついタイプの女子と話し合いをするのは、気が重たい。

「立村もキリオ会長で問題ないと思ってるだろ」

「まあな。でも霧島弟は本気で出る気あるのか」

肝心要のやる気が見えないと、どうしようもない。上総の確認したい点はそこだった。

天羽は腕を組んで背を伸ばし、頷いた。

「もちろん。一学期の段階で、姉貴ネタでもって難波と更科がキリオと接触していたってこと、立村、お前も修学旅行で聞いただけ。最初は評議委員会へのスカウトが目的だったんだけどなあ、姉貴と同じ空気を吸うのはこれ以上いやだって断られちゃった。更科としては、キリオのお守り方法に関する情報収集が目当てでさ。難波についてはこれはもう、言わぬが花ってところ」

言葉がない。かろうじて搾り出す。

「『愛の裏返し』とでも言うのかな」

「がんばって、としか言いようがないよね」

目の前のふたり、大きくため息をついた。

「あいつもあせってるんだよ。シャーロック・トシタケ・ホームズなりにな。この学校出て行っちゃったらもう、根本的にチャンスがなくなっちゃうわけだしな」

「だからといって、捕まえるなり怒鳴り散らすのは逆効果だと思うけどなあ。立村くん、どう思う？」

「轟さんに賛成」

「男心は複雑だねえ」

——人のこと言えるのか、天羽。

二杯もサイダーを飲み干した天羽は、当然来る自然現象のためトイレへと向かった。

その間に上総は、頭に入れておくべき事項を絞り込んだ。

その一 霧島姉が青大附中から卒業後出て行くということ。

その二 霧島弟が次期生徒会長に内定しているらしいということ。

評議委員長としての認識としては、この二点のみで差し支えないだろう。

「立村くん、ちょっとだけ気になることがあるんだけど」

天羽の脱ぎ捨てた黄色いウィンドブレーカーを摘み上げ、轟さんは上総に告げた。

こうやって話を一対一でするのは、何ヶ月ぶりだろう。修学旅行以来だろうか。

「評議関連のことかな」

「生徒会関連だけど、立村くんには影響が絶対あることだと思うんだ」

「俺に」

轟さんはちらちらと扉に目を走らせた。天羽に聞かれない話なんだろうか。

「最近ね、二年の佐賀さんがやたらと生徒会室へ出入りしているんだよね」

「佐賀さんって、評議の、新井林の」

彼女だろ、とは続けられなかった。

「そう。よく生徒会室の中のぞくと、副会長の女子を含めた三人でしゃべっているんだよね。同じ面子で休み時間、中庭あたりでも見かけるし。佐賀さんってB組だったはずなのに、なんで他のクラスの子とべたべたしてるのかなって気になったんだ」

「女子の付き合いは難しくてよくわからないけどさ」

本来ならよくあることと聞き流せばいいことだ。霧島さんのことにしてもそうだし、美里が仮に生徒会室へ入り浸っていたとしてもそれは個人の行動であって上総には関係ない。口出しする必要もない。

轟さんも重々承知しているはずだ。

なのに、なぜ上総に報告するのだろうか。

そこらへんに意味があるような気がする。

「新井林くん、佐賀さんのことについて何か言ってなかった」

聞かれても困る。互いのつきあい相手について親密に語り合うほど、上総と新井林とは仲よしではない。

「別に」

「それならいいんだけど、あともう一つ、気をつけてほしいんだけどね。立村くん、杉本さんの様子、いつも見に行ってるでしょう。様子おかしくなかった？」

「いつものとおりさ。西月さんが杉本の面倒を良く見ているみたいでさ。俺の顔は見たくないって露骨に逃げられるんだ」

「逃げるって、一体なによ、立村くんっておかしい」

そうけたけた笑わなくなっちゃっていいじゃないか。サイダーで口を軽く潤した。面白そうに上総を

じろじろ、帽子のつば下から覗いていた轟さんは、

「あくまでも噂だけど」

そう前置きして、いきなり核心を突いた。

「杉本さん、生徒会役員に立候補を狙っているらしいよ」

「まさかだろ」

思わず正座していた。無意識だった

——杉本梨南。

上総の十五年間出会った誰よりも、そのものの感情が手に取るように伝わってくる、たったひとりの女子だった。

言葉を発しなくても、そのまなざしだけで何を訴えたいのか染みってくる。喜怒哀楽、すべての感情が迫り、苦しくなる時もある。気付いたからといって、何ができるでもない。杉本の求めることをしてやれるわけもなく、ここ一年ばかりは誤解も多く、すっかり嫌われているようだ。

休み時間声をかけたりはしている。

「立村先輩のように不細工で頭が悪くて何もできない男子なんかとお話するのはいやです。清坂先輩が可哀想でなりません。こんな人なんかに！」

と、失礼きわまる言葉を浴びせられる。大抵の女子にだったら、すぐにそれきり、縁を切ってしまうだろう。

杉本に限ってそうしたくないのは、言葉の裏の寂しさと叫びが聞こえるからだった。

他の人たちに対しては全く感じないものが、杉本梨南からは唯一伝わり、上総も一緒に吞まれてしまう。

「生徒会役員立候補だって、まずそれはありえないだろ」

しばらく絶句した後、ようやく出た言葉が情けなかった。

「だってさ、杉本は現在E組の生徒だろ？」

「名目上はB組所属よ。桧山先生が今のところ、担任よ」

それはわかっている。杉本が一年時に起こしたさまざまな事件がきっかけで、二年以降はクラスも問題児が集まる特別クラス「E組」にまわされてしまった現実を。冷静に返す轟さんと比較して、上総ひとりがあたふたしているのがみっともない。気付いているけど、押さえようがない。

「桧山先生が許さないよ　ただでさえ新井林や佐賀さんがいる状況の中で、杉本を生徒会にのるのは、まずないだろうしさ」

「駒方先生が杉本さんに、生徒会立候補をけしかけているみたいなのよ。もっともこれも生徒会から貰った情報だからあてにはならないけれどもね」

轟さんの言葉ひとつひとつが、すべての正しい裏付けを持って出てくることを上総は知っていた。愛読書は海外のスパイ小説。普段は女子から上手に見下されるような立場を保ち相手を安心させ、男子には女臭さを消して「中性」感覚で接する。そのためひそかに男子の間では人望者

として通っている。上総もその事実を知ったのは修学旅行の時だった。

「轟さんというフィルターを通してているから、信じるよ。でもなんで駒方先生、そんなことするんだらうな」

「杉本さんをこれから先、他の高校に進学させる以上、成績以外のところで一度頭をがつんとやられた方がいい、と考えたよね。成績ではいくら新井林くんががんばったところでかないっこないし、いくらE組に隔離されたって杉本さんの性格はあのまんまきついまま。学校内のトップともいえる生徒会役員を目指してもらい、その上でしっかりと不信任決議で烙印を押してもらい、自分が未熟者かということを目覚めさせたいみたい」

「とんでもない話だな」

舌打ちした。上総なりによく噛み砕いてみる。

「考えられない話ではないけど、最初から落とすつもりでか。でも、もし杉本が生徒会に入ったらその時はどうするつもりなんだらうな。生徒会選挙、まだ先だけどさ。落とすもなにも、対抗馬が出ないまま信任投票で決まるケースがほとんどだろ。杉本が落ちる可能性は、良く考えると低いんじゃないかなって思うんだけどさ」

もし自分が中学二年の立場だったらまたいくらでも杉本をフォローする方法は見つかる。たとえば自分が評議委員の座を捨てて、自分で生徒会役員の何かに立候補するとか。しかし上総はすでに、来年以降青大附高へ、エスカレーター式入学を果たす予定である。中学を離れてしまえばもう、守りようがない。

「立村くんは、どうしたい？」

轟さんはかぶりっぱなしの野球帽を、つばだけぐいとひっくり返した。飛び出ているように見える目は、真正面から見ると実はちっとも違和感がない。いたずらっ子の男の子、それで十分だ。男であれば女子たちから馬鹿にされることもなかつただろう。

全く関係ないことをちらと思い、言葉も全く関係のない言葉が飛び出した。

「そういえばさ、近江さんと清坂氏って最近異様に仲いいよな」

「なに言ってるの立村くん」

あっけに取られている轟さんが何かを言おうとするのをさえぎったのは。

「おお、なんですかあ。近江ちゃんの話なら、俺抜きでするなよな」

呪文唱えたわけでもないのに、天羽が派手にドアを開けて戻ってきた。ベタぼれの彼女・近江さんの噂となったら黙っちゃいられない。

轟さんはすぐに天羽へ、

「杉本さんの件伝えといたよ」

ちゃんと報告していた。ということは、おおっぴらに語ってしまってよいわけだ。安心して話の続きをすることにした。

「生徒会改選のことだろ？ ま、立村にもこのあたりで少し、自己反省していただきたいしなあ」

「なんだよ、その自己反省って」

上総は立ち上がり、窓に向かい、縁のところに腰掛けた。じゅうたんにべったり座っている二人を見下ろす格好となる。女子が部屋に混じっていても怒られない時間帯だった。

「杉本の一件に関しては立村、俺からしたらどう見てもお前に責任があるぞ。」

「そうかな」

ちらちらと空を眺めながら右ひざを胸まで寄せて抱えた。

「二年の時なんてひでかったよなあ。トドさん、どう思う」

「いいんじゃないの」

さらっと流してくれる轟さん、ありがたい。

「もう俺たちも、立村と清坂ちゃんもう出来てるもんだと思ってたのによ、いきなり杉本べつたりになっちゃっただろ？ 評議委員長にしようと言われて出したときにゃおいら泣けてきたぞ。

立村、お前いったいなんか悪いもん食ったかって」

「別にそれが悪いかよ。それになんで清坂氏の話になるんだよ」

言い返ししながら、どうして天羽の言葉が食い込んでくる理由を探した。

杉本梨南を評議委員長にしたいと、一年前は本気で思っていた。認めよう。

だがすぐにひっこめたじゃないか。

新井林の方がいいと、個人的好き嫌いをとっぱらってきちんと指名したじゃないか。

あの頃から同期連中が、上総のやり方に疑問を持っていたであろうことは自覚していたし、当時委員長だった本条先輩にも絞られた。

評議委員長という座に杉本がふさわしくないと割り切ったのは理性の判断。

だけど別の部分で本能の判断があったっておかしくないじゃないか。

同じ感覚を持つ者同士、できるだけ居心地のいい場所に置きたいと思って、どこが悪い。

「なあトドさん」

「はいな」

夫婦漫才。近江さんよりも轟さんの方が合っていやしないか。ひそかに突っ込みを入れた。

「清坂ちゃん、去年の今ごろなんぞ可哀想だったよなあ。」

「落ち込むことが多かったようでは、あるよね」

思い当たる節が一杯あるけど、そんなの他人に関係ない。

「彼女なのにな、寝ても冷めても杉本を追い掛け回していたらな、そりゃあぎゃあすか言いたくもなるよな」

「そうねえ」

杉本のことは関係ない口げんかのことで引っぱり出すのはやめろと言いたい。

「でも、結局は清坂ちゃん、立村に惚れぬいてるから今こうやって、一緒に評議委員やってるわけだ。えらいよなあ」

「ほんとよね」

心なしか轟さんの言葉が軽く聞こえたのは気のせいかな。

風が吹き抜けたせいかな。寒い。窓辺から降りて上総は机の椅子に腰掛けた。素直に相棒・清坂美里への感謝を述べた。

「ありがたいとは思ってるよ。頭の悪い俺のしでかしたことを全部片付けてくれるからな」

「わかっているのかよ、な、トドさん」

轟さんは返事をしない。黙って上総を見上げている。目つきが鋭い。

「杉本のことをひいきしすぎた結果が、現在の状況に繋がっているってことを、もう少し自覚してほしいと俺は、評議委員の盟友として思うわけなのだよ」

天羽の演説癖は、去年のビデオ演劇「奇岩城」でたっぴりと発揮されたもの。知らぬものなし。しかも気取って、シルクハットが似合いそうな台詞回しときた。

「水鳥中学との交流にしてもそうだな。お前、杉本をなんとか出番こしらえようってことで考えたのが、交流会サークルだろ？　それが教師連中を刺激して、一気に掃き溜めE組をこしらえる口実となったのは、ひとえに立村、お前の計画ミスだろ？」

——杉本が関崎に惚れなければな。

「これから先もしもだぞ、杉本がまた馬鹿なことしでかしたらどうするんだ。お前もう高校に行ってるんだぞ。いくらお前、かばいたくたって手、出せないだろ。本条先輩だって結城先輩だって、卒業したら評議委員会にはノータッチだったろ、お前、どうするんだ」

——そうか、杉本にはあと一年、残っているんだ。

杉本のことを同学年感覚で考えていた自分。上総は苦笑した。

——高校進学したら、もう杉本と俺との接点はないんだな。

出会った二年の春から三年の秋にいたるまで、好意と嫌悪どちらの感情もぶつけられながら、側にいようと思ったたったひとりの女子だった。

恋愛感情とは違う、と思う。「付き合いたい」、「彼女にしたい」そういう気持ちともまた、異なる。抜きん出ている胸のふくらみに偶然触れて、一夜眠れなかった日を思い出したからでもない。

伝わってくる神経の響きがすべて重なってきてしまう。止めようがない。

「たかが刺がささったくらいでぎゃあぎゃあ騒がないで！」と美里ならあっさり終わらせることを、杉本なら同じく感じた上で「私も同じこと感じてます！　痛いに決まっています！」と叫ぶ。その違いだ。一緒に「痛い」と叫びたくなる。「痛い」からこそ、E組に向かい、一緒に「いたい」となるのだろうか。どんなに手を撥ね退けられても、むかつくことなく次の朝も「杉本、おはよう、元気か」と声をかけたくなる。たったひとりの人間。

それが今の上総にとっての、杉本梨南だった。

「だからだな、立村、よっく考えろ」

天羽は上総の目の前で手の平をひらひらさせて、注意を引こうとした。そんなことしなくたって聞いているっていうのに。馬鹿にするなど言いたくなる。

「杉本が妹みたいに可愛くてしょうがないっつうのは俺もよーくわかる。わかるぞ。けどな、せつかく三年間一途に尽くしてくれているマイハニー清坂ちゃんのこともう少し考えてだな、面倒みたれや」

「面倒見られているのは俺の方だよ。俺は清坂氏に何にもしてない」

「ダーリン立村がな、もっとやさしく、たとえば紅葉を眺めながら初チューするとか」

手元にはたきが置いてあった。思いっきり柄で天羽の脳天めがけて振り下ろした。両手でぱつと受け止められた。そのポーズのままで、

「立村、よおく考えてくれ」

絶体絶命、危うく「奇岩城」にてホームズに追い詰められたルパンのごとく。

「評議委員長として、お前がどうしなくちゃなんねえか、だろ。今、評議委員会の三年連中はもろ、分解状態なんだ。ここで立村、お前がぐらついてたら、一発でぐちゃぐちゃになっちまうぞ。いいかげん目を覚ませよ」

——評議委員長として、か。

天羽が口泡飛ばして演説する気持ちもわからなくはない。

もともと実力は天羽の方が上だと上総を含む誰もが口を揃えて言っていた。

本条先輩の半ば強引な手により結局、上総に委員長の座が与えられたけれども、誰もが疑問符を隠したままじっと見据えている様子は、背中からいつも感じていた。

本来ならば評議委員長に立つべき男。

実質的陰の評議委員長と言ってもいい男。

裏表なく上総のサポートに回ってくれる、男気のある奴。

そんな天羽がなぜ、そこまで懸命に叫ぶのか。

人一倍、感情の皮膚がもろい上総に、それが伝わらないわけがない。

——やはり、これがけじめかもな。

上総は決断した。

「わかった、責任を取る」

「責任？」

上総ははたきを取り戻し、机の上に置いた。

「杉本に関して起こったすべての出来事は、俺がすべてしくじったせいだ。それは認める」

「だろ、だろ？」

「杉本については俺が百パーセント責任を取る。覚悟はある」

グラスの底がテーブルを打つ音がかすかにした。側で轟さんが上総を見上げ、ゆっくり目を伏せた。なんだか見るのが苦しい。天羽だけを見つめることにした。

「そっか、ようやく覚悟してくれたか、さすが俺の見込んだ男だ！」

天羽の演説満開なり。上総はそのまま窓べの空を眺めやった。

その視線を追われているような気がしてすぐに、轟さんへ目を戻した。

「杉本にこだわっちゃってるから、お前、生徒会の連中にも水鳥中学の奴らにも、下の学年にいる連中にもなめられちゃってるんだって。立村、お前にはな、あんなしっかりもんの姉さん女房がいるんだ。清坂ちゃんの想いをしっかり受け止めてだ。お守りをしてだ。困った女子なんぞに目を向けず、尽くしてやるのが男って奴よ。そうしてやりゃあ、清坂ちゃんだって余計なことは考えねえ。いいか、お前のためにも、評議委員会のためにも、そうすりゃあみんな丸く収まるんだ。責任を取って杉本を切れ」

「お守りって、そんなんじゃないよ」

「キリコの件については、とにかくあいつが一番幸せな形でフェードアウトできるように、俺たちでがんばろうぜ。いわば三年評議のできるだけのことをしてやろうぞよ。俺も泣く泣く、清坂ちゃんのためにいとしの近江ちゃんを提供しようぞ。女子同士の友情、いいじゃねえか。あとは男子としての仕事をしっかりと立村、お前がな」

「何言ってるんだよ」

本意を伝えるつもりはなかった。

轟さんだけが羊羹の切れ端をつまみながら、上総に物言い足そうな顔をしていた。

その意がどこにあるのか、判断できない。

「轟さん、俺になんか言いたいことある？」

きっかけを作ってみた。全身黒尽くめの轟さんは、もう一度ぐいと顔をあげた。

「私は、立村くんの判断、正しいと思うよ」

前歯の隙間からしゅうしゅう息を吐きながらささやいた。ぼうしを脱ぎ、今度は後ろを額に当てる格好で被り直した。

天羽のきわめて菱本先生ばりのお説教で耳にたこができた後、上総はふたりの客人をそろそろ追い出すことにした。品山という街は昼間それほどでもないのだが、夕暮れ時になると痴漢が出たりひったくりに遭いやすかったりと、治安がかなり悪い町でもある。四時過ぎとなれば日も落ちる。いくら轟さんが男装していたとしても、女子は女子だ。襲われないとも限らない。天羽が側にいるとはいえ、いとしの近江さんでもない限り命がけで守ってくれるとは思えない。一緒に戦えとか言い出しかねないぞ、なにせこの二人は男子的要素でもっての「親友」らしいから。

「また明日な」

「よろしゅうに」

天羽流挨拶を交わした。

スニーカーの紐を恐ろしくきれいにたたんで縛る天羽が出て行かないと、轟さんも靴を履けない。靴は黒のマジックテープタイプスニーカーだった。

「あのさ轟さん、いいかな」

上総は玄関でばりばりとマジックテープをはがしている轟さんの隣にしゃがみこんだ。

「さっき言ったの、どういう意味」

息を殺すように尋ねた。

「どういう意味って？」

轟さんは上総の眼をゆっくりと見つめた。言葉を発する時に、唇から飛び出た歯が妙に白く映った。

「美里には可哀想だと思っても、はっきり言うこと。それが一番親切だと、女子として思うよ」

「轟さん」

「杉本さんを選んだ立村くんの方が、私は好きだよ」

あっけにとられたまま、上総は両膝を突いた。

すっと立ち上がった轟さんは野球帽をもう一度かぶりなおすと、

「じゃ、明日、またね」

最後は女子っぽいかすれた声で挨拶し、出て行った。

——まさか。

上総はひそかな覚悟を隠し通したつもりでいた。

天羽は気付かなかった。

轟さんは気付いていた。

月曜、放課後。三年D組の教室には清坂美里と羽飛貴史が机に寄りかかり、身振り手振りたっぷりに盛り上がっていた。扉を開ける前から美里のはしゃぐ声がもれていた。

いつものことだった。驚くこともない。

あえていえば今日は、古川こずえの姿がないことくらいだろうか。

おそらく図書館員としての仕事があるのだろう。

上総を待ちかねていたのか、美里は両手で内輪を仰ぐような身振りをしながら、

「立村くん、遅い！ もう、早くおいでよ」

わざわざ貴史の隣に身体を寄せるようにして呼んだ。

「悪い、評議の連中に断ってきた」

「何を？」

「いや、今日の話し合い出られないってさ」

厳密には天羽に「ほら、立村、お前早くな、清坂ちゃんとデートしてこい！ これから先、くそ忙しくなったらろくすっぽいちゃつけねくなるぞ！」とどつかれただけなのだが、余計なことは口にしないでおく。

「ふうん、でもこっちだって三D評議専用のの仕事だよな。ね、貴史」

「あたりまえだろうが。な、立村、早く美里を黙らせてくれよな。さっきからずうっと俺、こいつのエキサイティングトーキングに付き合わされててな、半分喉が死にそう」

——死にそうなほど話せるんだ。

心の底に滴り落ちるような言葉、一滴。

「悪かった、それでは始めるか」

上総が自分の席に腰を下ろすと、美里と貴史もそれぞれ近くの席に陣取った。さりげなく隣の席は古川こずえの席、貴史はなぜか天敵・南雲秋世の席だった。

「それにしてもなあ、俺たち、年取ったもんだよなあ」

しみじみと貴史が、両手を組んでのびをしながら呟いた。

「あの単純熱血教師の菱本ティーチャーにも、春が来たってわけか」

「なんだか信じられないよねえ、貴史、想像できる？ 菱本先生の結婚式の格好！」

やはり美里の発想は、ファッションに偏り勝ちなようだ。

上総は黙ってふたりの会話に耳を傾けていた。

清坂美里・羽飛貴史。このふたりの基本的考えをまずは見極めたいところだった。

「緊張してこちんこちんだらうなあ、笑えるぜ。嫁さんのドレスの裾踏んで思いっきりこけるかもしんねえぞ」

「まあね。それありがち。でも踏んだらだめよ！ だってお嫁さん、あれなんでしょう、ほら、

あれ」

少し言葉に詰る美里。理由はわかるが、上総はあえて助け舟を出さない。どうせ貴史が全部面倒見てくれるはずだった。

「こけたら、まずいのか？ 赤ん坊」

「おなかにいるんだよ！ まずいに決まってるじゃない！ おなか冷やしちゃだめだとか、いっぱい布巻いたりとか、いろいろするんだもん。赤ちゃんが死んじゃったら大変だよ。菱本先生、ちゃんと気づけて歩いてくれるのかな」

——それ以前に結婚式なんてできる状況なのかよ。

どうも、美里も貴史も、菱本先生の置かれた厳しい状況を理解していないように思えた。上総なりに自分の意見を口に出してもいいのだが、いつものパターンですぐ叩きのめされるような気がする。たぶんそうなるだろう。でも、もう少し様子を見てもいいような気がする。上総は片腕を机にかけたまま、ため息を気付かれぬよう小さく吐いた。

美里がちらっと上総を見た。かなりご機嫌斜めの様子だ。ごまかし笑いをひとつしておいた
「立村くんどうしたの」

「いや、なんでもない」

「あっそ」

たいして突っ込んでくる気配もなく、美里の「エキサイティングトークング」は続いた。
「それでね貴史、式はいつだって言ってたっけ」

「噂によると、来月の頭だとよ」

「えー、それって早すぎるよ！ だって、結婚が決まったのって、先月なんでしょ？」

確かに早すぎる。急がなくてはならない事情があるというだけのことだ。

「早くしねえと赤ん坊が腹から出てきちゃうだろ」

「それはそうだけど、え、だとすると、お嫁さん、おなかがぐんと出たドレス着なくちゃいけないのね。かわいそう」

——かわいそうなのは腹の中にいる子どもだろう。

心で上総はひたすら毒づいた。

——やっぱりあの男、相手のことなんも考えてないんだな。俺があいつの立場だったらお嫁さんのこと考えて、子どもが生まれるまでそっとしておいてやるのにな。

上総の心を読み取れるふたりでないことは、二年半の付き合いゆえよくわかっている。だから上総はひとり、思いを好き勝手に駆け巡らせた。

「二年半お世話になった私たち三年D組一同として、何か菱本先生にプレゼントしたくなるのは当然じゃなあい？ 立村くん」

話が一段落した後、美里が上総に声をかけてきた。半分話を聞き流し、自分の思惟にだけ集中していた上総は慌てて向き直った。かなりふくれつつらの美里の顔をまじまじと見つめた。

「ごめん、ぼおとしてた」

「しっかり聞いてよね」

口を尖らせ、頭を一振りした。よくみると美里の髪形は秋に入ってからだいぶ変わったようだ。髪の毛がだいぶ肩につくようになり、両脇をほんの少しだけつまみお下げにたらしめている。残りの髪の毛はそのままおっぱ状態。校則違反で規律委員長の南雲秋世に違反カードを切られるんじゃないかと思っていたが、どうやら色ゴムを使わないようにしていれば問題ないらしい。確認しておいてその辺はよかった。

お下げが少し揺れた。時折貴史が美里のお下げ髪をぐいとひっぱり、思いっきりひっぱたかれ返されているのが笑えた。

「怒るな怒るな。なあ立村、美里の言いたいことはつまりだな」

——お前の言いたいことでもあるだろ？

口を結んだまま上総は頷いた。また横で美里がむすっとしてにらんでいる。

「三年D組一同でひとつ、『祝・菱本先生ご婚約&ご出産』のパーティーをやろうじゃねえかってことなんだ。体よく言えば、早めのお楽しみ会ともいうな」

——そんなことやる必要あるのか？

喉まででかかった言葉を飲み込み、上総はもう一度促すように頷いた。

でないとなんか口走るか、わからない。

美里も貴史の言葉につなげるよう、こくこくと頷き返した。

「そうよ。ほら、ロングホームルームの時間あるじゃなあ？ いつも私たちが司会やるじゃなあ？ 議題は私たちふたりで決められるでしょう。菱本先生には内緒でね、議題を先生の知らないうちに決めましたってことで、教室に飾り付けして、一時間パーティーにしちゃうの。菱本先生が道徳授業するつもりで教室に入ってきたら、もうパーティー用の飾り付けされていて、黒板にはいろんな色のチョークで『菱本先生、ご結婚おめでとうございます！』って書き込んであって、で、みんなで結婚のお祝いの歌を歌ったり、誰かに漫才やってもらったり、とにかくのりのりで盛り上がるの！ どうか、これ、きっと菱本先生、喜んでくれると思うんだけどなあ。立村くん、どうか」

——「私たちふたり」って、清坂氏と羽飛だろう。

清坂美里と羽飛貴史。このふたりが絡んだイベントがしらけるなんてことは、絶対にない。だったらふたりに任せっぱなしにすればいいのだ。

上総が口を出すことではない。

そう言い切ってしまいたいのにできないのは、上総が曲がりなりにも三年D組の評議委員であるからだ。

——だから、なんで羽飛。

上総はしばらく黙っていた。まずは、貴史に言いたいけど言えないことを、ひとつゆっくりと腹の中へ吐き出すために。

——お前がD組の評議委員にならなかったんだよ。俺だって言われたようにするのに。

「清坂氏、ごめん、俺はやはり賛成できない」

思った通りふたりは、不服そうに目をぎよろつかせた。

ふさわしい人材でなくても、今の段階で三年D組の評議委員は立村上総。

上総が自分の考えを告げるならば、答えは自ずとそうになってしまう。

気まずい沈黙が一秒だけ混じり、すぐに質問攻めに遭った。まずは貴史から飛んだ質問の矢。受けて立とう。覚悟は出来ている。

「その理由を述べよ、となるわな、立村」

せっかく盛り上がりようとしていたのに水を差されたとあって、貴史の口ぶりはかなり乱暴だった。わざとらしくねちっこく言わないが、その代わりストレート。言い方によっては一発くらい張り手が飛んでくるかもしれない。それでもやはり、上総は言わざるを得なかった。

一呼吸おいて、美里を視界に入れないような角度で貴史に向き合った。

「まず、あの担任の結婚についてだけど、しょせんあれはプライベートのことだろう。冠婚葬祭は俺たち生徒にはそれほど関係ないと思うんだ」

「ちょっと待ってよ、この前南雲くんのおばあちゃんが亡くなった時、お葬式に行かなくちゃって言ったの立村くんじゃない」

がくがくと身体揺らしながら貴史が頷いている。明らかに美里の意見に賛同している。

美里の方を見ないで上総は続けた。

「生徒同士のことだったら、それぞれ付き合いがあることだし、それはそれでいいと思うんだ。先生たちについても、不幸については同じ考えでいいと思う。けど、今回の場合は結婚決まったのがいきなりだし、来月結婚式なんてまず普通、ないことだと思うんだ。そうせざるを得ない状況だったというのがあるのはわかっているけれどさ」

「結婚と葬式と、どうして違うんだあ？ 立村、説得力ねえぞ」

もちろん説得力がぜんぜんないのは自覚している。揺れそうになるが、ひたすら耐える。

「俺も噂でしか聞いていないからなんとも言えないけど、結婚相手には子どもがいるんだよな」

「そうよ、いわゆる『できちゃった結婚』よ」

美里が注射を入れてくる。上総が無視を決めこんでいるせいか、わざわざ隣に寄ってきて足元にしゃがみこむ。いやおうなく、上総の視界には口を尖らせた美里のきついまなざしが混じってくることになる。言った先から唇が震えそうになる。

「はっきり言って、嬉しいことかって俺は疑問に思うんだ」

「疑問？ そりゃあ、順番間違えたってのはあるかもしれねえけどさ、菱本ティーチャー、あれでも来年は三十路を迎えるいい年の大人だろが。きっちりと落とし前をつけて、愛するわがハニーとベイビーを守る決意をする、なんてかっこいいじゃねえか」

「そうせざるを得なかったという、可能性だってあるだろう」

ちらと美里に目を走らせた。後悔した。怒りの炎がたぎっているその瞳。怖い。

貴史の顔の方が話しやすい。怒ってはいない。啞然としているだけだ。無理やり集中した。

「そりゃ、たとえばな、本条先輩とかが、同級生を妊娠させたとか、そういう話だったらご愁傷様とか言うぜ。だけど今回は、教師だぞ、大人だぞ。まっとうな人間だぞ」

——本条先輩がまっとうな人間じゃないっていうのかよ。

上総にとっての本条先輩がどれだけ完璧な存在なのかを説明したいとは思わない。だけど侮辱

されたくはない。貴史はわかっていないようだった。

「俺からしたら、はたしてあの担任がまっとうな人間なのか、それもわからないけどな」

吐き出した。かつて菱本先生と上総の間に起こったさまざまな葛藤や出来事、頭の中に走らせて見ると激しい苦味だけが舌先ににじんできくる。

入学第一日目、初めての出席を取られた際「りつむら、かずさ、かずさでいいのか？」と問われた時以来のむかむかした感情が、消えることはなかった。

中学一年、冬。決して知られなくなかった小学時代の出来事をもとに、ロングホームルームでつるし上げられた日のこと。

中学二年、宿泊研修。放っておいてほしい人間には干渉しないことがなによりもの思いやりだと言うことを、最後まで理解してくれなかった大人。

中学三年、精一杯上総なりに努力し、自由行動最優先で計画したことを、
「すべては教師がみんなお見通し、お前らはわれわれの手の上なんだぞ！」

と自慢げに語り、

「だからもう立村、いいかげん大人になれよな」

せせら笑う、あの態度。

すべてがむかつく、腹持ち悪い。

「まあなあ、立村、お前と菱本先生、最悪の相性だもんな」

「相性なんてもんじゃない、あいつの考え方が根本的に許せないだけだ」

鼻で笑ったのは貴史だった。こいつも基本的には、菱本先生と同意見のはずである。ついでにいうなら美里もだろう。おそらく菱本先生を嫌う価値観の持ち主は、わかる範囲内で言うと上総ひとりに違いない。

「立村くん、ちょっといい？ 私、やっぱりそれっておかしいと思うよ」

きりっと引き締まった、美里の声がついと飛んだ。

上総の喉に絡まり、黙らざるを得なかった。

見ると美里は、合わせるように立ち上がり、じっと上総をにらみつけた。

「いつも思っていたんだけど、立村くん、菱本先生のことを色眼鏡で見すぎだと思う」

むっとくる。その言葉をすぐに投げ返すと何千倍にもなり跳ね返ってくるからまずは飲み込む。吐き気がする。

「立村くん、菱本先生のことを嫌いだからいつも、何かあると菱本先生は悪いんだとか、いやなこと考えてそうしているんだとか、勝手に決め付けるくせがあると思うんだ」

「実際そういうことが多いんだからしょうがないだろう」

早く話をやめてくれ。そう言いたい。視線を逸らした。

「立村くん、そうやって目をそらすの、失礼だと思うよ」

「ごめん、悪かった」

しかたない、こうなったら意地でもじいっと見つめてやる。目に力いっぱい込めて、上総は美

里に顔を向けた。満足したのか美里の口元にかすかなほころびが見えた。

「あのね、菱本先生の結婚のことだけど、もちろん難しいことはわかんないよ。そうだよ、こんなに早く結婚式が決まっちゃうって珍しいってうちの母さんたちも言ってたよ。たぶん、赤ちゃんが生まれてしまう前にしたいんだねって」

「かえってこの時期に式を挙げる方が大変だってこと、考えないのかな」

思わず口からこぼれてしまった。まずい、口を手の甲でぬぐう。意味なし。

「きつとね、お嫁さん、どうしてもウエディングドレス着たいんじゃないかなって思うんだ。だから菱本先生も、その夢叶えてあげたくて急いで式を挙げる決意したんじゃないかなあ。わかんないけど、菱本先生の性格だったら考えられると思うんだ。私も貴史も、立村くと違って菱本先生のこと好きだから、そう考えてるのよ。ほら、違うでしょ。好き嫌いだけで、こんなに事実って捉え方違っちゃうんだよ」

「俺はただ、知っている事実をそのまま解釈しただけだって」

「違うよ、すごく立村くん、物の見方が偏ってると思う。ずっと前からそう思ってたんだ」

——だったらどうしてそんな奴と付き合ってるんだよ。

あぶなく吐き出しそうになる。危険だ。本能的な言い返しを避けなくては。

日曜に決意した、ひとつのこと。時期をもう少し待つつもりでいたのに、覚悟の栓が抜けそう。シャンパンみたいに噴きあがったらどうしよう。

「本当のことは私もわかんないよ。だけど、立村くんの考えは菱本先生のことを侮辱しすぎてると思うんだ。もちろんいろいろあったからしょうがないよね。でも、菱本先生のすることをなんでもかんでも悪いって決め付けるのはよくないよ」

「決め付けてなんかないさ。俺が言いたいのはそんなことじゃない。つまり」

「つまり、何？」

貴史も一緒に上総の前に立ちふさがり、じいっと見下ろした。腰に両手を当てて。

「俺もその辺、聞きたいとこだな、立村、言いたいことあるなら言ってみろ」

——そのポーズ、なんか腹立つよな。

思い出したくもない、三年D組担任・結婚間近・熱血・菱本教諭を連想させるその格好。頼むからやめてほしかった。解放されたい、その一心で上総は口を開いた。

「うちの恥さらすようだけど、俺の両親もいわゆる、順番を間違えた結婚だったんだ」

こんなこと言いたくないが、しょうがない。どうせ恥をかくのは自分ではなくあの両親だけだ。知ったことじゃない。貴史と美里がふたり顔を見合わせて、「初耳」、一緒に呟いた。

「それで立村、お前が先に生まれたとか」

「そう、しかも式を挙げたのは九月十三日だった。もちろんうちの担任と同じ状況だということ、わかるよな」

あまり露骨に「妊娠」と使いたくない。目の前に美里がいる以上、やはりためられるものがある。こちらがこんなに気にしているというのに、美里はまったく気付きもしない。気付いてもらうことをあきらめてだいぶ経つとはいえ、やはりむなし。

「立村くんの誕生日、九月十四日だったよね？」

誕生日なんて良く覚えているものだ。驚いた。美里の呟きに調子を狂わされそうになる。小さく頷き返して流した。

「ということは、どういうことか、大体想像つくだろ」

「.....その場で、生まれたとか」

まさか、いくらあの親であってもそこまで切羽詰ってはいない。。

「一応、生まれたのは病院だった。母子手帳に病院名書いてあった」

「でも、そんなぎりぎりになんで結婚式なんて挙げたの？」

知らない。ただあの猛女・時辻沙名子だったらやりかねない。たとえその場で産気づいてもウエディングドレスを着たまま産んでしまう可能性だって多々ある。もっとも実際は、和装白無垢と聞いている。さぞ腹の中にいた上総自身、帯と紐の締め付けで息苦しい思いをしたことだろう。

「本当は十一月が出産予定日だったという話だけど、式の影響で早まったんだって話なんだ。俺もそんな昔のこと覚えているわけないからわからないけどさ。とにかく、式を無理やり挙げたのが影響したのは確かだよな」

「そうなんだ.....」

美里の瞳がほんの少し、かわいらしく揺れた。目が合い、少し微笑みを貰った。こちらも目で返事をする。すぐに目をそらし、貴史メインで話を進めた。

「うちの場合は、いろいろあって親がふたりとも二十歳そこそこで結婚せざるを得なかったし、あの担任と事情が違うと思う。だけど、やはり、本当はこういう形でやりたくなかったんじゃないかなって気がしてならないんだ。もしかしたら俺の親も、そんなに早く結婚したくなかったんじゃないかって思うし、俺が生まれてなかったらもっと違う人生送っていたんじゃないかって思うこともあるし、本当は産みたくなかったんじゃないかなって思うことも多々あるし」

「立村、お前の出生秘密はよおくわかった。で、何を言いたい？」

話をもとに戻そうとする貴史に、上総は密かに感謝した。

あぶなく、いつもの自己嫌悪癖が出てしまいそうだったから。

「つまり、あの担任にとってこの結婚は、あまり嬉しいことじゃないかもしれないって可能性を忘れちゃいけないってことなんだ」

上総はここでふたりの顔をまじまじと見つめた。やはり「信じられない」と言わんばかりの呆れ顔をしている。それは覚悟の上だ。

「俺があの担任の悪いところばかり見ているのは承知の上で言うけど、もしもそれがサプライズだった場合、生徒におめでとうって言われても、絶対に嬉しくないと思う。俺があの担任の立場だとしたら、きっとそう考えると思う。顔ではありがとうとか感謝の言葉を口走るかもしれないけれど、本当はきっと面白くないんじゃないかな。もちろんこれは想像だし、俺の見方が偏りすぎているかもしれない。だけど、そういう可能性がほんのわずかでも残っているのだったら、むしろそっとしておいてやるのが親切じゃないかという気がする。俺の言いたいことはそれだけ」

やはり無言。三角形のにらみ合い。しばらく続いた。

背中に当たるのは、まだあたたかい日差し。

十月の夕暮れ近く。見つめられているような、ほのかな温みが背中に巻きついた。

美里が先に反論した。

「あのね、立村くん。しつこいようだけど、やっぱりそれ、偏見だよ」

「なんでそう決め付けられる？」

「そう言いたいのは私たちの方」

——私「たち」ときたかよ。

ちりちり、手に汗がにじんでいるのが感じられる。貴史も大きく頷くと、今度は腕組みをし、さっきまで座っていた南雲の席に戻った。

「立村くんのお父さんとお母さんが、ぎりぎりで結婚して、式の影響で立村くんが予定日より早く生まれちゃったというのは、わかった。それは大変だったと思うよ。でもね、それと菱本先生のことと、どう関係あるの？」

詰る。たまたま流れとして両親の過去を話ただけであって、良く考えればつじつまが合わない。言葉を返せないのを見てか、美里はきびきびと言葉を連ねた。

「それに立村くんのご両親って、生まれてきてほしくないってあからさまに言ったの？」

「だいたいそんなニュアンスのことは言われてたかと」

——ああ、言われてたさ。あの人にはさ。「ほんっと、上総があんなに早く生まれてなかったら、もう二ヶ月くらい仕事できたのよ。あの後すぐキャンセルしなくちゃいけなかったってわけなのよ。あんた、どうしてあんなに早く生まれてきたのよ。反省しな！」なんてさ。こっちに文句言われたってどうしようもないってのに、なんでだよ。それに、もし俺が生まれていなかったら強引にあの人たち結婚しないですんだわけだから、離婚だってしないですんだわけだろ？

あの人たち相変わらず仲がいいからまだいいけどさ。子どもの俺がどれだけそのことで迷惑こうむっていたかわかるのかよ。

「けど、それは冗談っぽくでしょ」

否定できない。美里は上総の顔色を見るようにちょっとだけ言葉を抑え、また続けた。

「あのね、立村くん。私ずっと思ってたけど、立村くんは人のことを思いやっているふりして、本当は勝手に決め付けてるだけの様な気がするんだ」

「どういうことだよ」

腰を椅子から浮かしかけた。まずい。声を荒げてはならない。一呼吸置いた。

「つまりね、立村くんは自分が生まれてきたから迷惑をかけたんだとか、もし自分が生まれてなければこんなことにはならなかったんだとか、勝手に思っているでしょ。だけど立村くんのお父さんお母さんはぜんぜんそんなこと考えてなかったかもしれないでしょ。それと同じよ。菱本先生だって、喜んでいるのかもしれないし迷惑がっているかもしれないけど、そんなの私たちにわかるわけじゃない。私たちがわかるのって、目に見えていることだけだもん。私の見た限りだと、菱本先生、浮かれてるよ」

「人前でそんな暗い顔するわけいかないって、自分の身に置き換えてみたら」

ぴしゃり。跳ね除けられた。痛い。隣の貴史も腕のカフスあたりを押さえてぐいぐいねじっている。

「立村くんの基準と菱本先生の基準が違うことくらい、わからないわけ？」

「んだな、立村。それは美里の言う通りだ」

——ふたりの基準が同じだけだろうが！

唇が捻じ曲がっているだろう。かみ締めすぎてぐにゃぐにゃになっているかもしれない。美里の言葉はびしびしと、太鼓の撥のように上総をたたきのめした。

「できちゃった結婚だから、ほんとはもう少し結婚先にしたかったのにとか思ってるかもしれないよ。それは菱本先生の事情でしょ。私たち生徒が勝手に陰気な想像して決めつけること自体が失礼だと、私、思うよ。それより、素直に、菱本先生の赤ちゃんが生まれることをおめでとってお祝いしたいよ。だって三年間一緒だった先生だよ！ 家族が増えて嬉しくないわけじゃない！ 先生だって、喜ばないわけ、ないじゃない！」

「生まれてほしくない親だっているはずだよ。すべての親が喜ぶわけじゃ」

「立村くんの基準と一緒にしないでよ！ なんでそう暗い考え方をするのか。なんか立村くんの考え方っておかしいよ。そんなこと言われたら、私もきっとそう思われてるのかなって泣きたくなるよ。私がこうやって言ってることも、立村くんには『いじめ』だって思われてるのかなって、悲しくなっちゃうよ」

——やはりそうか。

上総はじっと美里の顔を見つめていた。目をそらすなど叱られてから、意地になって顔を見つめつづけてきた。まっすぐ突き刺さってくる美里の言葉がどれだけ上総を血まみれにして死にそうにしているのか、きっと気付くことはないだろう。隣で口を開きかけた貴史も同じだろう。上総が今、何かを考えていることを、どうして感じようとししないのだろう。

「ま、俺もそう思うところはあるわな。立村、ここんところはさ、明るくいこうぜ。なあに、菱本さんのこった。多少俺たちがはめはずしたっておおいに結構毛だらけ猫灰だらけって、感謝のちゅーくらいしてくれるかもしれんしな。だろ、美里？」

「そんなのしてほしくないけど、でも、絶対菱本先生は喜ぶと思うよ。人を喜ばせて楽しく盛り上がるのが、どうして立村くん、いやなわけ？」

二人のほうが正しいのだ。

上総の感じ方は、やはり「おかしい」のだ。

できちゃった結婚して、おなかに子どものいるお嫁さんと結婚式を急いで挙げるのが、めでたいことなのだと素直に信じられることが、むしろ自然なのだ。

そう思えず、せめてそっとしておいてやろうと考える上総自身は、やはり、「変」なのだ。

相手の心を思いやろうとすることよりも、その気持ちを押し量る行為自体が「勝手」に決め付けることになってしまい、相手を侮辱することなのだ。

そうされたくないと思う上総の方が、「おかしい人間」なのだ。

悔しさのあまり、目の前がゆがみそうだった。こんなことで誰が泣くか。

上総は素早く立ち上がり、かばんを抱えた。天井を見上げ、危うくこぼれそうな涙をこらえた。あくびしたふりをして、眠たさで目もとがうるんだ風に見せかけた。

「わかった。それならこの件は、清坂氏と羽飛に任せるよ。俺の性格上、やはりこういうイベントは苦手だしさ」

「ちょっと待ってよ、立村くん、逃げるの」

いきり立つ美里を「まあまあ、ちょいと落ち着けや」と肩に手をやり押さえる貴史。

いい構図だった。貴史の指がまた美里のお下げにかかった。ひょいと引っ張っている。またはたき返されている。

「やめなよ、貴史。あんた小学校の時とまったく成長してないよね。お下げ見たらひっぱるものって刷り込みされてなあい？」

「しょうがねえだろ、ほんとは優ちゃんの髪の毛ひっぱりてえとこだけど、しかたねえから美里で妥協してるんだ」

「最低よね、妥協ときたもんね、あんたの方こそ欲求不満、別のところで早く解消しなさいよ！」

盛り上がっている隙に上総は教室の扉から抜け出すつもりでいた。

目ざとく美里に発見された。読みが甘かった。

「立村くん、待ってよ。今日は一緒に帰るでしょう？」

一緒に叫ぶ貴史も、また冗談めかした声で脳天気な。

「そうそう、そういうこと、立村逃げんなよ」

致命傷を与えておいて、ちっとも気にせず上総と一緒に帰ろうとする美里と貴史の態度。

——いったいこの人たち、何考えてるんだらう。

いつものことではあったけれど、ふたりの気持ちを上総はつかみかねていた。

今日の帰り、本当は美里に時間を作ってもらおうつもりでいた。

日曜日に決断したことを伝えるつもりでいた。

でも、今の上総は危険だ。

かつて捧げてくれた美里の真心を、感情の赴くまますべて切り裂いてしまいそうだった。

二人きりになれるところで、改めて美里に礼を尽くし、すべての咎は上総がすべて受けると覚悟の上で、伝えたい。今日はしかし、その時ではない。

「わかった、一緒に帰ろうか」

上総は少し考え、美里と貴史に従った。

火曜日、杉本梨南のご機嫌は相変わらずだった。

天気も曇り気味、台風がそれそうでそれない距離に位置している時期だとか。雨が降らない代わりにやたらと強い風が吹いている。

「立村先輩、何のご用ですか」

そっけない挨拶はいつものことだった。気にしていたら身が持たない。何よりも「口を利いてもらえた」それだけで十分、余裕がある。最悪のご機嫌時は、一切上総の顔を見ないし、存在することすら認めようとしなのが杉本梨南たるゆえんだ。

「いや、なんとなく」

放課後のE組には杉本梨南しかいなかった。いつもだとE組担当の駒方先生と狩野先生がいるはずなのだが、何か用事でもあるのだろう。狩野先生は三年A組の担任だからまだ手間取っていると考えられるのだが。杉本ひとりがノートを広げ、なにやら書き込みをしている。科目ノートではなさそうだ。

「それでは私に用がないわけなのですね」

一本調子な言い方もいつものこと。

「あるよ。狩野先生に呼び出されているし、それに杉本にも用があるし」

「私は用がありません。目障りです。消えてください」

杉本はすぐにノートに向かい始めた。背中をぴんとのぼし、書道の教科書に載っているような「お手本」の格好をして。まっすぐに筆ならぬシャープを持ち、何かを綴っている。覗きはしなかったけれども、気になる。上総は杉本の隣席から椅子を引っ張り出し、右端にしっかりくっつけて座った。窮屈だが、自分のノート一冊広げる広さはある。

「邪魔です」

「いや、あのさ、杉本に頼みたいことあってさ」

さっき五時間目で出た数学の宿題を写したノートを取り出した。

「これ、杉本だったらあっさり解いてくれるよな。一応、三年生の数学問題集なんだけど」

杉本は上総の筆跡を一瞥した後、あきれ果てたようにため息をついた。

「こんなのも解けないのですか」

「うん、空間図形の概念からして、俺には理解できないしな。どうして杉本、それわかるのかな」

「それでよく、青大附中に合格できましたね」

「うん、俺も不思議だと思う」

逆らうつもりはなかった。他の女子相手に似たようなこと言われたらたぶん、上総はそいつと一切接触しないように心がけるだろう。でも杉本だけは別だった。何を言われても、どんなに屈辱的な言葉を浴びせられても、それが刺にならずにさらっと受け止められる。口を尖らせる杉本の顔を眺めて、ほっとしてられる。

しばらく杉本はノートをめくっていた。上総の文字は女子っぽいと言われる。書道のペン字用お手本に似ているとも言われる。女子っぽいイコール軟弱そうに見える、というのが本当のところだろうが、読めないよりはましだ。杉本もちゃんと、上総の文字を読み取り、自分のノートに問題を写し取っている。

「今から解きます。ちゃんとわかりやすく書いておきます」

「ありがとう、やはり杉本はすごいよな。そうだ、代わりにやってやろうか」

やらせっぱなしではやはりよくない。ちゃんと上総なりに交換条件を用意しておいた。

「何をですか。先輩程度の頭で何ができるというのですか」

「そうだな、二年生になったらさ、確か英語の原書授業あるだろ。俺の時はヘミングウェイの『誰がために鐘は鳴る』だったけど、今年は確か『グレート・ギャツビー』だろ」

「よくご存知ですね」

冷たく答える杉本だが、わざわざかばんを広げて原書版ペーパーボックスを取り出すところを見ると、頭にきてはいないようすだ。そうそう、原書と訳本がセットになっている本を買わされて、訳本抜きできちんと訳すように訓練されるのが、青大附中の英語教育なのだ。上総個人からすると「グレート・ギャツビー」は愛読書。暗誦できるかもしれない。

「私もそのくらいの訳、できます。先輩の数学能力と違って、人並みに努力をしております」

また単調にきつい言葉を呟く杉本。シャープを握り締め、あっさりと数列を並べていく。上総には読み取り不可能な答えを導き出していく。その片手で上総にぽん、とペーパーボックス「グレート・ギャツビー」を叩きつけ、

「もしよろしかったら先輩、お互いの訳を比べましょう。どちらが正しいかを、見極めようではありませんか」

感情がこもったら、一種、決闘の言葉。

杉本はいつも、心を込めずに残酷な言葉を呟く。

いつも別の場所に、訴える言葉が置いてあるから。

「そうだな。俺もそうしたいな。じゃあ今から一気に訳を書き込んでいくからさ、あとで読み比べしようか」

「望むところですよ」

ポニーテールの太い束を一振りした後、杉本は姿勢正しくぴっちり、罫線に乗るように文字をつづり始めた。

一点しか見つめていないその瞳も、重たそうな黒い髪も、色白ながらもほんのり赤みの差している頬も。そして、

——机にぶつかりそうで、ぶつからないんだ。

ブラウスの先がかすかに揺れている。女子しか得られない胸のふくらみの部分。

自分の指先に集中しているつもりなのに、横目でちらと覗いてしまう自分のあさましさに恥を感じる。気付かれていないことを祈り、上総はもう一度、完成した訳を読み直そうとした。

男子同士の会話でも、よく出てくる「女子たちの胸の大きさ」そのサイズについてだが、杉本

に関してはもともと嫌われてしまっているせいか、まったくネタにならなかった。胸が大きいと興奮する、とは一部の妄想に過ぎない。むしろ男子たちのほとんどは、「胸がでかすぎるのは、気持ち悪い」とも言う。胸だけではない、すべてが極端に走りすぎている杉本は、やはり男子からすると、「気持ち悪い」存在なのだろう。

その例外が、おそらく上総だろうか。

上総は一度も、梨南を「気持ち悪い」と思ったことがない。その段階で普通の男子とはずれているのだろう。抑揚のないしゃべり方も、力を込めてにらみつけるまなざしも、なにかという人を指差す不快感も、上総には些細なことではかない。

——やっぱり俺は、変わっているんだろうな。

どんなに罵られようが、

「立村先輩、解けました。今から説明させていただきます」

「ありがとう。たぶん半分も理解できないと思う」

「それで恥ずかしくないのですか、仮にも評議委員長なのに。あの新井林にどれだけ馬鹿にされてきたか、立村先輩自覚してないのですか」

「いやそれは、今更ながらしょうがないしさ」

杉本は憎まれ口を叩いた後、必ずちらと、様子をうかがう視線を送る。

初めて会った時からそのしぐさが気になっていた。

かすかに口をつぼめるようにして、怒っていないかどうか確認するように。

——きっと、怖いんだな。

誰にでもそうやっているのに、他の連中はそれを感じ取れない。一方的に感情をぶつけられているだけと勘違いしている。でも上総には透かしたようにそれが見て取れる。本当は、言った後の反応が怖いんだということを知っている。嫌われるにしても好かれるにしても、一番怖いのは無視されることなんだということ。

だから上総は、絶対に杉本の言葉を無視しないことに決めていた。

最初、出会った時からそうしてきた。

扉が開き、杉本の「空間図形」に関する説明は途中でさえぎられた。

「立村くん、来てましたか」

「あ、はい」

慌てて椅子を机から離す。杉本がきちんと立ち上がり、「きょうつけ」の姿勢で九十度体を曲げ、一礼した。上総は腰をかがめたまま、少しずつ立ち上がった。

今日、本当に用事があるのは、この先生だけなのだ、本当は。

「いいですよ、そのままです」

「いえ、大丈夫です」

上総と杉本との言葉が重なった。杉本が上総を人差し指向けながら、いつものお経を唱えているような声で答えた。

「ご用があるのでしたら、立村先輩、さっさと狩野先生の方に行ってください。邪魔です」

「いや、用事があったから」

「お相手してあげただけです。ふざけないでください」

ぴしゃりと跳ね除けられた。さすがにこれはきつい。唇をかんだ。杉本は次に狩野先生に向かうと続けた。

「中学三年において、立村先輩のレベルは少しまずいのではないのでしょうか。私が今、高校レベルの問題集で自習しているから言えることかもしれませんが、こんな簡単な問題をなぜ解けないのでしょうか」

情けなくなってくる。杉本ひとりの時に言われるのは気にならないのだが、第三者が混じるとやはり、惨めだ。やっぱり調子に乗るんじゃなかったと反省するのは、この時だ。

狩野先生は身動きせずに杉本の話聞いていた。この先生は決して、「祝・ご婚約&できちゃった結婚」の菱本先生とは違い、男子と女子がふたりで話をしていても「あらあら、相変わらずいちゃいちゃしてるなあ」とか「よっ、ご兩人！」などと掛け声を掛けたりしない。ただ、誰かがいるな、程度の認識でもって目を向けるだけだ。無関心とかそういうのではなくて、ただ見えるだけ。だから上総も、菱本先生相手の時のように慌てて立ち上がり、言い訳じみたことを口走らず逃げないですむわけだった。

「立村くん、それでは先に、生徒相談室に行ってますから、杉本さんと話をした後に来てください」

表情を崩さずに、狩野先生は白衣を着たまま、メガネを両手で直しつつ教室を出ていった。

「杉本も、いくらなんでも狩野先生の前で言うのはよしてほしいよな」

「事実をお伝えしたまでです」

「だけどさ」

少しは言い返したい気分だった。どうせこれから、狩野先生と一対一で今日の宿題に関する個人補習をしてもらう予定だった。たぶん杉本がらみのことで、変なことはつっこまれないだろうが、やはり気まずいといえば気まずい。

「俺も一応、一年年上なんだから、もう少し気遣ってほしいと思うのは、贅沢なのかな」

「贅沢に決まっています」

ぴしゃり。やっぱりはねられた。ぐいと上総をにらみつけた。

「なぜ、私なんかと話をしたがるのか理解できません。どうせ私は評議委員長にもなれない役立たずなのに、なぜそう私にからんでくるのですか。物笑いにしたいのですか」

「とんでもない、そんなこと言ってないだろ」

かなりきつい言葉だった。この辺は素直に流せない。未熟者なり。向きになってしまう。

「どうせ新井林の方が上だとお思いなのでしょう」

まだうらんでいるのか。一年前の話だぞ。慌てて言葉を捜す。あ、見つかった。

「いや、俺は杉本の淹れてくれた紅茶がおいしかったと思うよ」

まったく意味不明の繋がりだが、これで機嫌を直してほしいものだ。学校祭で杉本に担当させた喫茶店は、父母を始め年齢の高い来校者に大人気だった。手間を掛けてこしらえる珈琲と紅茶を淹れるこつ、よくぞマスターしたものだ。上総も評議委員会の仕事の合間を縫って、杉本のお

手製珈琲・紅茶を要求し、無理やり奪ってきたものだった。

「それとは関係ありません。私は能力を認められたいのです」

「だから、俺は、杉本の能力認めているつもりだけどさ」

きっぱり、杉本は話を終わらせるための呪文を一言唱えた。

「立村先輩に認められても、私の価値は上がりません。関崎さんならともかくも」

——ああそうか、そうだよな。

苦笑して、上総は教室を出ることにした。

「わかった。じゃあ今度来る時は、関崎とこの前会った時の話、しようかな」

誰も居ない教室の空気がぴしっと締まる。杉本梨南の鼓動の高まりが空気を凍らせたのか。誰も感じないみたいだが、上総は杉本の揺れが、頬に当たる空気でもってわかる。そっと肩越しに振り返ると、杉本の瞳が呼び止めている様子だった。

それはそうだろう。すでに読み通り。上総は知らん顔で杉本の顔を眺めながらさらに言葉をつないだ。

「今度の体育祭でさ、下手したらクラス対抗リレーに出る羽目になりそうだからさ。夏休みの間関崎に頼んでいろいろと、走るコツとか教えてもらっていたんだ。だからかなり、あいつにまつわる話は、持っているつもりなんだけどさ。杉本が聞いてくれないならそれでもいいけどな。また今度」

「いつですかそれは」

棒読みながらも、杉本の口調には明らかに艶が出ていた。どうしてこんなにあからさまな変化が出てくる杉本を、誰もいじらしく思わないのだろう。上総にはそれがまったく理解できなかった。好きな男子の存在だけで、ころっと変わってしまう声音を、どうして誰も気付かないのだろう。かすかに揺れる不安の漣を受け止められるのは、杉本がまったく評価しない男子の立村上総だけだ。

「杉本がいいんだったら、また今度。今日はもう時間切れだからさ。また明日にでも」

「本当に、明日、お話していただけるのですか」

ほらほら来た来た。水鳥中学生徒会副会長・関崎乙彦のことになると、杉本の態度が黒から桃色にはや代わりする。といっても上総が感じるだけで他の連中にはまったく見えない変化だが。他の奴らには別に伝わる必要もないと思う。杉本のご機嫌がよくなって得をするのは上総ひとりで十分だ。

「それなら明日、また放課後来るから、必ず時間を空けて待っているように」

人差し指をしっかりと杉本の胸真中に向け、上総はさっさと教室を飛び出した。

杉本の表情が変わるのを確認する必要なんてない。

たぶん、明日も今日と同じくらいのご機嫌良さだろう。満足だ。

廊下で古川こずえとすれ違ったのは予定外だった。

てっきりもう図書館のカウンターに納まっているものかと思っていたのに。

「あれ、どうしたのよ立村。今日は委員会じゃないんでしょうに。美里とてっきりさっさと帰っ

たんじゃないのかなって思ってたんだけどさ」

「羽飛といろいろ打ち合わせがあるみたいだよ」

「それにしてもねえ、あんた」

三年D組、これまた三年間の腐れ縁。こずえ曰く「私の弟」と上総を呼ぶ。いいんだかわるいんだか良くわからないけれど、こずえなりの親愛表現と受け取っていいだろう。もっとも上総からしたら、次に続く言葉の羅列、なんとかしてほしいと思う。

「もしかして一発、どこかで抜いてきたばかりだとか。すっごいすっきりした顔してるじゃん」

真昼間から大声で発せられる立場、なんとかしてほしい。

廊下はふたりっきりじゃないのだから。当然無視しようとしても無駄だというのも、この三年間いやというほど学んで来ている。せめて窓辺の風鳴り音でごまかすため、上総は端に寄った。こずえもくっついてきた。

「ちょっと待ちな。なに逃げてるのさ」

「今から、用事があるんだよ。悪い、また今度」

「さっきからずいぶんそわそわしてるけどさ、何かあったわけ。美里や羽飛も知らないって顔してたけどさ」

「悪かったな、数学の補習。そんな珍しいことでもないだろ」

もう開き直るしかない。葵の御紋みたいなもの。上総の数理能力のなさはもしかしたら全学年の生徒が知っているかもしれない。それでもこずえは不服そうに顔を見上げる。いったい何か用があるのだろうか。さっさと言えと言いたい。

「あんたさ、ずいぶん最近逃げ足速いんだけどねえ」

「別に逃げてるわけじゃないさ」

「何考えてるか知らないけどねえ」

くるっとスカートを膨らませてこずえは一回りし、E組……元教師研修室……の扉に手を置いた。しかたなく上総も立ち位置をずらした。

「帰りの会終わるやいなや、しっぽ振って教室飛び出して、E組に飛び込むのはどうかと思うよ」

「しょうがないだろ、数学の補習なんだからさ」

同じことを繰り返す。こずえは動じず、ぐにゃっと笑みを頬と口に浮かべた。

「そりゃさ、美里のものより、杉本さんの方がずっとおっきいけどねえ」

「何がだってさ。そんな変なとこ見てるわけないだろ」

「あーら、私、なんか言った？ おっきいものってやっぱり、ぼいんちゃんだってわかつちやつたわけ？」

凶星なり。ひっかかってしまったわが身。不覚。首のところが温くなるのがわかる。

こずえのスケベ女王としての名言を多々聞かされてきた上総は、うまく交わすコツをそれなりに覚えてきたつもりだった。最近では半々の確率で切り返しているが、なんで今油断してしまったのか、情けない。発言の数々は中学校の校舎にふさわしいものではない。男子向け・女子の前で

は開けないような雑誌の投稿欄で たっぷり拝見できるものばかり。

なんとかして立て直さねば。上総なりに話を逸らしてみた。

「それでわざわざつけてきたってわけか。妄想するのもいいかげんにしろっていいよな」

「そう顔面蒼白にならなくたっていいのにねえ。立村、あのね、浮気は男の甲斐性だけど、もう少し上手にやんなよ、上手に」

「浮気って誰がするんだよ、そんなことしてないだろ」

「ほら、もう少し、言い訳しながら教室出るとかねえ、美里に何かあとでデートの約束するとかしたりして行くとかさ」

「E組に行くだけでそんなことなんでしなくてはならないんだよ」

こずえは両腕を組み、突き出した指先でちょんちょんと襟のリボンをひっぱった。形がかすかに崩れ、蝶結びの丸みが片方つぶまった。

「だからあんたわかってないよねえ、いい？」

なんで今日こんなにつっかかってくるのだろう。こずえにそこまでつつかれる筋合いなんてないのに。たまたま今日は、狩野先生の補習だっただけであって、そんなに文句言われる筋合いなんてない。もっと言うなら、美里に言い訳なんてする必要、あるわけがない。

こずえは通りがかりの人たちから「なんじゃこりゃ」的視線を向けられながら、堂々と言い放った。

「立村、あんたがさ、前から杉本さんめんこがってるのはよっくわかるよ。そりゃあ可愛いよねえ。気が強い女子、あんた好きだもんねえ」

「だから勘違いするなよ、そんな大きい声出すなよ」

教室内の杉本に聞かれたらどうするんだ。またすねられたら大変だ。

周囲を見回し、無理やりこずえを元の窓辺に引き戻す。通りすがりの女子生徒たちは、上総の方でこそ顔と名前が一致しないものの、向こうからしたら「評議 委員長の立村」だということがばればれた。もともと上総に対して、女子たちの視線が好意を持ったものではないことも承知している。こずえの発言でまた「浮気もの」「女子の胸にどきまぎしているスケベな男子」「なんであんな奴が評議委員長やってるの」「なんであいつが清坂さんの彼氏なわけ」などなど、まとまった悪意の閃光で身体が痛くなってしまう。

「だからねえ」

解放してくれる前に大きくため息をついた梢は、短く決め、背を向けた。

「気付いてないのはあんただけなんだよ、我が弟よ」

——何が気付いてないのは俺だけなんだよ。

上総はかばんを抱えたままゆっくりと三階の生徒相談室へ向かった。

毎週放課後、狩野先生が都合のいい時、一対一でだいたい一時間程度数学の補習をしてもらうのが習慣となっていた。どうしても補習の場合、委員会よりも優先順位が上にせざるを得ないので、評議の連中には響感ものだった。狩野先生のクラス評議・天羽忠文曰く、

「うちの担任も評議委員長の立場、もっと考えてくれたってなあ、なあ、立村？」

いくら評議委員会が青大附中を牛耳っていたとはいえ、結局は教師の都合に左右される存在。これもまた、現実だ。

もっとも上総は、狩野先生と過ごす一時間の時が、それほど嫌いではなかった。

特別、何かを相談するわけでもない。クラス担任の菱本先生のようにしつこく、「なんでお前はいつも気持ちを隠してしまうんだ！ はっきり言いたいことがあれば言え！」と怒鳴るわけでもない。ただ、タイミングがふと合う時がある。どちらかわからないけれど、世間話に近い雰囲気ですらと言葉が流れる時が。それほどしゃべるわけではなくても、狩野先生は短い言葉で静かに答えを出してくれる。数学のノートに綴られることのない答えだけど、それは上総の中に太い文字で刷り込まれていた。

「遅くなりまして申し訳ございません」

ノック後、一礼して上総は生徒相談室に足を踏み入れた。何度も入ったことのある部屋だった。秋のせいか、上の方だけかすかに黄身がかっているいちょうの木が覗いていた。

狩野先生は立ち上がると軽く頷き、備え付けの小さな冷蔵庫から、缶コーヒーを二本取り出した。かすかな笑みとともに、奥のソファに腰を下ろし、上総と向かい合う格好でノートを開いた。ガラス張りの机には数学のプリントが二つ折りで置いてある。中は見えない。

「立村くん、明日までにこの問題をまず、この紙に十回、書き写してきてください。解こうと思わないで、ただ何も考えずに手写しするだけでいいです。君への宿題はこれですよ」

口籠もる。ありがたい、と言えればいいのだろうか。

かばんを脇に置き、無言で上総は頭を下げた。受け取ったプリントには、さっき杉本に解いてもらったのとはレベルのぐんと下がる問題が二題ほど載っていた。レベルが低い、とはもちろん本来他の生徒たちがやるべき宿題と比較してのことであり、上総自身からするとどれも意味不明の外国語としか思えない。

「あの、解かなくていいんですか」

言葉が震えている。どうしてだろう。わからない。

「そうです。立村くんは文章を読解する能力が優れています。問題を読むこと、理解すること、それだけを念頭に置いて、手写ししてください」

「わかりました」

なんで狩野先生がそんなことをするのか、まったく理解できなかった。

手写しなんて、こういったらなんだが小学生でもできるようなことではないか。

同じクラスの連中がみな、さっき杉本に見せたような空間図形の難しい問題をさらさら解いているというのに、上総ひとりがいつもお遊戯みたいなことをさせられている。

——俺の能力がその程度だから、しょうがないけどさ。

ちくりと痛むのが喉なのか、それとも心臓なのか。

狩野先生は上総の顔をじっと伺い、すっと斜めに視線を落とした。見ると、上総のかばんの方に向いていた。

「そういえばさっき、杉本さんに問題を解いてもらっていましたね」

——ああそうさ。散々罵倒されたよな。

杉本に罵られるのは慣れていても、現場を狩野先生に見られるのには赤面する。

答えられずうつむくしかない自分が情けない。顔色を変えずに狩野先生は続けた。

「ノートを出してもらえますか」

「はい」

しゅしゅ取り出し、広げる。何も考えずページをめくり、はっと気が付く。すでに杉本のかったりした文字で問題がすべて解かれているということに。上総の筆跡が習字のペン字を崩したような感じなのに対して、杉本の文字は四角形に収まる間違いのない形。閉じようとするが、狩野先生の長い指先で押さえられてしまった。

「見せてもらってよろしいですか」

教師に逆らえない。頷いた。片手で小さめの缶コーヒーを握り締めた。冷たい。ドキドキする感覚が、少し収まってきた。白衣姿で上総と杉本の筆跡残るノートを眺める狩野先生は、少し口元で微笑み、ページをめくって白紙を出した。

「杉本さんはきちんと解いてますね。さすがです」

——どうせ杉本は中二の段階で、高校の数学教科書を自習している奴だよ。そんなのと俺を比べるなよな。

不満たらたらの上総をやわらかく見つめると、狩野先生はシャープペンシルを持ち直した。

「明日、杉本さんに会いますか」

——そりゃあ会う。関崎の話をしなくてはならないんだからさ。

うまく言えず、上総がうつむいている間、狩野先生はいきなり白紙ページに数学の難しい数列を羅列し始めた。そこにはまったく理解できない連立方程式と、見たこともないマークとが入り混じり、象形文字に近い世界が繰り広げられているように見えた。

すべて書き終わると、狩野先生はノートを広げ、上総に手渡した。

「杉本さんの解き方は教科書通りです。間違っははけません。ですが、他にもいろいろと解く方法があることを覚えておくといいですよ。立村くん、明日、この数列を自分で手書きして、杉本さんに見せてそう話してあげてください。杉本さんには先輩として、そのくらいの助言することも必要ですよ」

——先輩として？

「コーヒーを飲んでから始めましょう。立村くん」

缶コーヒーにはどのくらいカフェインが入っているのだろう。

一口しか飲んでいないのに身体と顔全体がほおっと熱くほてってくる。

目の前の狩野先生はまったく意に介せず、穏やかな表情を保っているというのにだ。

どんなに隠そうとしてもしっぽが見える自分の言動、泣きたくなった。

——気付いてないのは、俺だけかよ。

土曜の昼下がり、心に決めたこと。

火曜日、まだ美里には告げていないのに。

この日の評議委員会は学校祭の最終総括だった。取り立てて新しく議題に上がることもなかった。ただ三C男子評議・更科の隣席が空いていた事実だけ、重たくのしかかっていた。

評議委員としての任期はまだ十月一杯まで残っている。厳密に言うと生徒会役員改選が終わるまでの間は、評議委員としての仕事をしてもらわないと困る。体育祭だってある。運営は体育委員に任せる形になるけれども、それなりに評議委員だって手助けすることもある。毎年女子の応援協力を要請されることだってある。霧島さんだって去年は、C組女子の応援に熱を入れていたじゃないか。

——たとえ、高校が別になったとしても。

霧島さんが青大附中評議の一員であることに、変わりはないのに。

評議委員会終了後、上総は三年男子だけ集めて霧島さんの件について話をするつもりでいた。

「立村くん、私、手伝うことない？」

残っていたさそうな美里には、

「今日は男子同士での話があるんだ。ごめん、またこんど」

言いくるめた。幸い隣には三A女子評議の近江さんがいる。腕をしっかりと取って、せかしている様子だった。先に帰すのに苦労はなかった。

美里たちをはじめ下級生および担当教師が居なくなったのを見届けて、上総は天羽に合図を送った。なんのことはない、扉を指差しただけだ。すぐに天羽はどら声をあげた。

「じゃあいつものとこだな、いくぞ難波、更科」

「オーライ！」

明るい声で手を上げたのは更科だった。三年C組評議委員。子犬っぽい笑顔は変わらぬまま。一年生中心の列に混じっても上級生だとは思われぬだろう。そういう童顔タイプの奴こそ、実は侮れないことを上総は経験上學んでいる。

「難波も、来るだろ」

無言で頷くものの、腰が重たそうだった。

自らを「青大附中のシャーロック・ホームズ」と呼ぶ難波は三年B組評議委員。こいつのかもし出す空気の重たさはもともと身につけているものではなく、たった今、評議委員会の開かれた教室に残されたひとつの「空白」、そこから来ている。

みな、秋仕様のブレザーにワイシャツ、ネクタイはいつもどおり緩めている。今年から冬仕様として中にベスト着用が義務付けられるようになる。十月中旬の気温では、少し暑いのではと思える肌の感覚、かすかに汗ばむ。

天羽がまず、扉を開いた。続いたのは更科。小走りに廊下へ飛び出すと、

「じゃあ、カフェテリアの席取っとく」

チワワをつないでいた綱を解き放ったように階段を駆け下りていった。

「ほらほら、どうしたホームズ」

「ばっかじゃねえの」

難波のせり心を聞きとがめた。一言問いたくなかった。ひっかかる。

「何がだよ」

言いかけたのを、天羽にさえぎられた。

「まあまあ、立村、お前も先に行けや。こういうのはな、修羅場経験者の俺の出番って訳よん」

背中をかなり強く押し出された。危うく頭からつっこみそうになる。階段でなくてよかった。一階まで降りて初めて気がついた。別に難波は上総をばかにしたわけではなかったのだと。

——難波、霧島さんのこと、相当堪えてるんだな。

「まずはだ、現実を観るってことでだ。簡単にまとめとく」

更科が取っておいてくれた四人掛けテーブルに陣取った。天羽が口火を切った。

「今、うちの近江ちゃんが清坂を連れてどっかへ行ってる。たぶん俺たちの悪いようにはしないだろうと思うんだ。そいと、トドさんも二年連中の様子見に現在、スパイ活動真っ最中ときた。

となると、あとは俺たち三年評議の意思統一をだな、せねばだな」

「わかってるよそれくらい、それで」

苛立ちながら上総はかばんを膝に載せた。もともと天羽が評議委員長としてふさわしいことを認識している上総である。主導権取られっぱなし、これはひどい。

「そうせかしなさんな、立村。一応俺たちが今なにをせねばならんのか、ってことをだな」

「要するに霧島さんを静かに高校へ送り出そう、だろう？」

少し気が立っているせいかもしれない。結論をむりやり引っ張り出したくてならなかった。

右隣の更科がこくこく頷いた。こいつは不機嫌な上総の様子を読んで、空気を和ませようとしているらしい。上総だってそのあたりの気遣いは感じているつもりだ。がまんするしかない。

左隣の難波は何も言わず、ストローを加えている。ホームズ風に煙草をくゆらしているつもりだろうが、単に葉っぱを加えて口笛吹いている不良の兄ちゃんにしか見えない。似合わない。

真正面にいる天羽は、あっさりと認めた。

「そういうこと。さすが立村、わかってるな」

「誰でもわかってるだろ。それでもこれからどうすればいいんだってことを」

「相談するんだよね、天羽？」

今度は更科が三人の顔をそれぞれ覗き込みながらうんうん頷く。

「とりあえず、近江ちゃんと立村にがんばってもらって清坂を押さえてもらおう、これはわかってるよな」

「俺で押さえられるようならば」

しぶしぶ上総は首を傾けたまま答えた。

「余計なことをせずに、まずはC組の後期女子評議を誰にするかを、更科、お前に決めてもらってわけだ」

「もう決まってる、大丈夫」

更科は、上総の知らない女子の苗字を告げた。

「クラス内での調整はもう全部終わってるよ。あとはキリコに当たらずさわらず、どうやって扱っていくか、それが問題ってところ」

「それは確かに」

上総が言いかけたとたん、左隣でばしんと机を殴る音が響いた。隣のテーブルでノートを回し読みし騒いでいる大学生がこちらを見た。

「そんな必要、ねえだろうが」

三人、みな、ストローを加えた難波を見つめた。

そういえば今日の委員会中、一度も笑わなかった。

「どういうことかな」

天羽に言を取られる前に、上総はつつこんだ。

「あいつ、もう、抜け殻だったの」

全員、言葉もなかった。

——抜け殻、そうだよな。

「不思議の国のアリス」に似た愛らしさを持つ霧島さんの表情を上総は見ていた。

今朝、そして昼休み、放課後評議委員会始まる寸前。

霧島さんはE組に朝からずっといた。更科の言うところによると、自クラスの3Cにはまったく顔を出さなかったという。ずっと西月さんや杉本を相手に泣きつづけていたという。

難波はしばらくストローをちゅうちゅう音鳴らして噛んでいた。そのままコップに差し込んだ。かき混ぜて氷をつついたあと、ぶっきらぼうに口を尖らせた。

「あいつの居場所はもうE組になっちまったんだってこと、お前らも知ってるだろうが」

「やはりそうなのか？」

もしかしたら殿池先生……3Cの担任……が手を回して、心を落ち着かせることのできる場所へ移動させたのかもしれない。確か、西月さんが天羽とトラブルを起こした時もそういう風にしたと聞いている。杉本も似たようなパターンでもって送り込まれた。もっともE組に常駐しているのは杉本だけのはずだった。

「さっき、E組見てきたけどさ。ずっと西月さんの側に座って、黙っていたんだ。俺の顔見ても反応しないしさ」

厳密に言うと、上総は杉本梨南に関崎の情報を伝えるためにE組へ向かったわけだった。だから杉本以外の女子とは口を利いていない。挨拶をしてみても、反応がなかった。

「ふうん」

西月さんのことについては、天羽も古傷が痛むのだろう。無言だった。

代わりに更科が相槌を打ちながら言う。

「あのキリコがさ、泣きながら殿池先生に訴えてるの見たら、誰もが同情すると思うよ。どんなに酷い目に合わされた経験者でもなあ。ホームズ、だろ？」

「みっともねえ」

吐き出すようにつぶやくと、難波はぐるぐるとコップの氷をかき回した。

「いいかげん、運命受け入れろ」

——どっちがだよ。

ちらと上総は難波に目で伝えてみた。当然、伝わらなかった。テレパシーなんてない。

「あんな奴、なんもできないんだから最初っから誰かに頼んで、家庭教師とかしてもらえばよかったんだ。てっきり自分の実力だと思ってのほほんとしてるんだからあんなことになるってな、ばかじゃねえの」

「難波、いいかげんにしろ」

人の悪口なんて聞いていたくもない。軽く制した。効果なかった。

「しかも評議委員会さぼりやがって！」

「ホームズ、そりゃあしょうがないだろ。ああいう騒ぎなんだからさあ」

更科もさりげなく、気を遣うように一声かけた。難波の毒舌はまったく納まるどころ知らず。

「どんなことがあったってな、評議委員会は生徒会の改選が終わるまで任期が残ってるんだぞ。後期はやらねくても、前期の任期をしっかりと納めるのが義務だろうがあ馬鹿女が！」

「難波」

向かい側に座っている天羽が立ち上がった。

まさか、殴るか。

上総は更科と目を見合わせた。いざとなったら止めねばなるまい。修学旅行の時もそうだった。難波が霧島さんを相手にわけのわからぬ言い合いをしていて、上総たちが間に入ろうとしているうちに、天羽は一発ひっぱたいて強引に終わらせた。本条先輩的な物事の納め方。上総には決してできない。

天羽はゆっくりと難波の肩に触れた。ゆっくりと指先でそれを握り締めるようなしぐさをした後、ぽんぽんと叩いた。片腕を取り、無理やり立ち上がらせた。同時に更科に流し目を送った。

「悪い、更科、こいつを例のどこへ連れてってやれ」

「例のどこってどこ」

「何するんだ！」

何をしたいかがまったく飲み込めない上総の前で、三年男子評議三人三様の反応だった。

天羽と更科が目と目で打ち合わせている一方、難波がその腕を振り払いわめこうとしている。でもどこに連れて行かれるのかわからないといった顔だ。上総も何か、言わねばならないような気がするのだが、適当な言葉が見つからない。三人立ち上がり、もみ合っている中とうとう天羽が核の言葉を発した。

「難波なあ、お前今の話、言うべき奴いるだろ？ 今、まだE組にいるかもしれんぞ」

ぴんときたらしく更科が両手を打った。

「なあ立村、評議委員会の前までは、キリコいたんだよね」

「いたよ、西月さんと一緒に」

「じゃあ話は早いや」

天羽はブレザーの上からがっちり難波の腕を抱きしめるように取った。更科も反対側に回った。天羽とふたたび意思疎通をしながら、

「そういうこと、まずは言いたいこと、本人に言うのが一番だよなあ。あ、立村、悪い、俺すぐもどってくっから、ここで席、押さえといてえな」

板についていない関西のイントネーションで上総に指示するやいなや、暴れそうな難波をふたりは強引に出口まで送り出していった。上総ひとりが席についたまま呆然としている中、おもしろげに眺めている大学生たちの笑い声と一緒に難波は引きずられていった。露骨に嫌がっている口ぶりでいながら、足はしっかりと外へ向かっているのが不思議だった。

要するに、E組へ行かせてもらうきっかけがほしかったということか。

——やっぱり天羽の一人舞台かよ。

ひがんでいるわけではない。

何か事件が起こると、指揮を取るのはいつも天羽だった。

みな、一応は評議委員長の上総の顔を見てはくれるけれども、結局のところ下級生に一声かけてまとめたり、やりたいことへの根回しを行うのは天羽だった。

だからうまくいっている。上総は評議委員長でいられる。それはわかっている。

今更いじけることなんてないはずなのに、口にふくんだ水に苦味が広がっていく。

——説明してくれたっていいだろうが。なんで難波をE組に連れていこうってことをさ。

たまたま杉本に用があって放課後、E組に立ち寄ったら霧島さんと西月さんがどんよりした顔で隣り合って座っていた。それだけ話しただけなのに。なんで天羽はどんどん先走ったことをするのだろうか。もしE組にふたりがいなかったらどうするんだろう。いや、一学期にいざこざのあった西月さんと好んで顔を合わせるつもりもないだろうに。いったい、あいつは何を考えているのだろう。

左隣に座っていた難波の、口に含んでいたストローがそのまま置きっぱなしになっている。

——せめて捨てていけよな。

結局、上総は難波の分だけコップを下げ、ストローを捨てた。

「おまたっせ、立村、どうしたどうした」

「更科たちは？」

「E組にダッシュさせてるところ。まあいいや、ふたりでのんびり飲もうや」

天羽だけがネクタイをゆるゆるにしたまま戻ってきた。ふうふう言っている。暑そうだった。手をぱふぱふさせながら、更科の席に置きっぱなしのコップを一気に飲み干した。

「何があったんだよ」

「いやなあ、あいつ、霧島姐さんがいないと聞いてもう、いらいらの極限にいたからな。何はともあれ、一対一で話をさせるのが一番かと思ってな」

「あのふたりだったらかえって泥沼になるだろ」

「いやいやそれがそうでもないと思うわけで」

どうせ上総は恋愛沙汰には疎いのだ。天羽が水を取りに行こうとするのを引き止め、上総は畳み掛けた。

「そっとしておいたほうがいいって言ったのは、お前だろう？」

「まあ、女子たちはそれの方がいいけどな」

喉の渇きが耐えられなかったのか、天羽は上総の分のコップも持って、またもう一杯水を汲んできた。半分近く一気に飲み干した。口をぬぐい、上総に笑いかけた。

「このままだと、生き別れになっちまうだろ。あいつらもな」

「生き別れって」

「ほら、霧島姐さんが評議から後期外れて、E組に吸収されて、青大附属から出ていっちゃう。この現実が奴にはどうしても受け入れられねえってわけよ。さっきの言い草聞いただろ？ もう、あいつ、どうしようもねえだよ。とにかくパニック状態。どうしていいんだかわからなくてさ、霧島キリオくんをとっ捕まえては姉貴情報を聞き出したり、E組の前をうろついたり、まあすごいんだわ」

上総はゆっくり水を口にした後、尋ねた。

「天羽、お前、難波に何をさせたい」

「そんな大層なことさせたいなんて思ってませんがな。ただ、霧島姉御を前期の任期が終わるまで評議委員会にしっかり参加させることだけだ。そうすりゃ難波だって少しは頭も冷やせるだろうし、今後の傾向と対策もそれなりに」

「けど、それは難波の都合だろう」

努めて落ち着いた口調で話したつもりだった。語尾が震えてしまう。上総は声を潜め、できるだけ感情がもれないように心がけた。天羽のテンションとは対照となるようにした。

「霧島さんの立場を考えたら、とにかく隠れていたいに決まってるさ。殿池先生がどう考えているかわからないけど、もしE組に非難させるという形を取るなら、それはそれでいいと思う。難波が今どう思っているかも想像つかないわけじゃない、でも、今一番大切にされる必要あるのは、霧島さんだろう。霧島さんがこれ以上、ずたずたに傷つかないように、俺たち三年たちが気を遣う必要、あるだろう？ 難波の気持ち以上にさ」

「いつまでも、そんな腫れ物に触るような扱いしてられるわけねえだろう。まだ半年以上青大附中に霧島いるんだぜ。そんなびくびくしてたら、俺たち息がつかっちゃう」

「あるけどさ、でもできるだけ」

上総が言葉をはさもうとすると、「まあまあ」と片手でさえぎられた。

「そんなに気になるなら、お前もE組に行ってみるか？」

天羽は上総のだいぶ水の残ったコップを下げてくれた。

しばらく無言のまま、中学校舎へ向かった。天羽がしゃらしゃらと話し掛けるのを、上総は聞き流しながら空を見上げていた。昨日は大分曇っていた空。台風一過で青く塗り替えられた秋空。少し暑いくらいだった。

「おい、聞いているのかよ」

「聞いている」

投げやりに答える。天羽とは背丈もげんこつふたつくらい違う。ずっと気になっているのになかなか背が伸びない理由はどこにあるのだろう。今度はやりの「シークレットブーツ」でも買おうかとやけっぱちで思う。

「E組はふたりの世界だ、口出すなよ」

「余計なことはしないけどさ」

「それとだ」

天羽はネクタイをはずし、視線を反対側に向けたまま、

「いいかげんお前も、あの教室に入り浸るのはやめろ」

ぴしっと、鞭を振り上げるようにネクタイの先を空へ飛ばした。風を切る音がかすかにした。

「知ってるだろ、俺の頭の出来にからんだ用事があるんだ、しょうがないだろ」

「だからって朝、昼、放課後と通う必要あるのかよ、立村」

「それはたまたまだって」

言い返そうとしたが、舌がもつれた。

「この前言ったよな。立村、責任取るってな」

返事が出来なかった。

さっき難波の肩にしたように、天羽は上総の肩へぐいと力を込めた。つままれるような感触がなにか痛かった。無理やり向かい合わされた。中学校舎と大学校舎の境目にあたる門の前だった。

。

「立村、自分が今どういう立場にいるのかわかってんのか？ 評議委員長だぞ」

「ああ、本条先輩の次のな」

「お前は青大附中の評議委員長なんだぞ」

なんで天羽に説教されなくてはならないのだろう。本条先輩でたくさんだ。

目をそらそうとした。軽い頬へのげんこつで天羽に無理やり視線を正面に戻された。

「どれだけ周りが苦労してるのか、お前わかってるのかよ。トドさんだって、難波だって更科だって」

「別に頼んだわけじゃないさ」

「杉本のことが気になるのはわからねえでもないけどな、でももう少しなんか考えろよ。お前、あいつを切るってこの前言っただろうが。このままだったら自爆するぞ」

天羽の口走った一言一言を、ひっくり返してやりたかった。

「そんなこと、いつ言った」

顔を逸らすことを許されないのならば意地でも見つめてやる。

ゆっくり上総は言い返した。

「俺は『責任を取る』、と言っただけだ」

「おい立村、馬鹿言うなよ。まさか杉本なんかと付き合う……」

「付き合うわけないだろ！」

上総は天羽の腕を振り払った。中学校舎玄関めがけてひたすら走った。生徒玄関で振り返った。

天羽は突っ立ったまま追いかけてこなかった。

——なんでみんなそういう風にしか考えないんだよ。

天羽も難波も更科も、なんで『つきあい』にこだわるのだろう。

杉本がどれだけ一途に、上総の口からこぼれる関崎の言葉を求めているのか、知っててそんなこと、できるわけがないのに。

「つきあう」という一言で、行動がみながんじがらめになってしまう

上総はただ美里と付き合っている以上杉本を守れないから、決断しただけのこと。

付き合わなくたって、上総のやり方で杉本の側にいることはできる。

ほんとに、単純で、簡単なことしかできないけど、それをしたいだけのこと。

こんな簡単なことをするために、なぜこんなに惨めにならねばならないのだろう。

青大附中に入ってから数限りなく繰り返した言葉を、上総は呟いた。

「『つきあい』ってなんだよ、そんなもの」

E組で天羽や難波と再び顔を合わせるのも鬱陶しい。杉本と話もしづらい。上履きに履き替え、上総は二階の生徒会室へと方向転換することにした。

まだ四時半だ。生徒会長・藤沖はいるだろう。

引き戸を軽く叩き、指先で細く開いた。すぐに答えが返ってきた。

「よお、立村、なんか用か」

隙間からのぞくと、男子連中が三人ほど椅子を占領し、瓶のコーラ一本に群がっているのが見えた。そのうち窓際の一番奥は生徒会長・藤沖勲（ふじおき・いさお）の指定席だった。シャツを真中まで開き、足を組んでくつろいでいる。いかり肩と筋肉が、ちらりとシャツの間からのぞいていた。毎朝毎夕、小型のダンベルで身体を鍛えている成果だろう。

目で合図だけして、上総は藤沖の隣にパイプ椅子を無理やり滑り込ませた。二年の書記と副会長ふたりとも男子だった。評議委員長に敬意を表し、ふたりともスペースを快く空けてくれた。

「今日は男子しかいないんだな」

「さっぱりするだろ」

「でもそろそろ生徒会の改選もあるし、女子たちに手伝ってもらわないとまずい時期じゃないのか」

「毎年恒例の信任投票で決まるしな。それなりに準備の真っ最中だ」

藤沖はのっぺりした面のまま、ねむたそうに答えた。

「それなりにつてさ」

「誰が立候補予定かを、ありとあらゆる情報網をもってチェックしてるぞ、生徒会長の権限でな」

もっと藤沖が、評議委員長の上総に接近して根掘り葉掘り聞き出そうとしても不思議はない。なのにつっこんだ話を意外としてこない。なぜなのか。藤沖のクラスは三年B組、難波と一緒にだし、そのあたりで情報を得ているのだろうか。評議委員長もたいしたことないということか。

「難波からいろいろ話、聞いているのか」

「天羽が黙っててもしゃべってくれるぞ」

——やっぱり天羽か。

会話が傷に染みて痛い。

上総は素早く話を逸らした。聞きたいことは山ほどあるが、まずは藤沖本人のしゃべりやすい話題から持っていこう。

「そういえば藤沖、今でもお前、例のモットーは変わってないのかな」

「ああ？」

両腕を組み、藤沖は機嫌よく笑った。いつもと同じ言葉で答えた。

「全校一丸となって応援できる集団を作り上げる。その要となる応援団を俺の手で一から作り上

げる。俺の目標は変わるわけねえだろ」

単純明快、藤沖現生徒会長の一貫したモットーだった。

青大附中で野心を抱く生徒のほとんどは、まず委員会に入って足場を築く。

藤沖はそのあたり、全く考えていなかったらしい。

委員会に入って中途半端な活動をするよりも、まずは「応援団設立」に向けての有志を集めること。そしてリーダーシップを学ぶこと。

この二点に絞込み、藤沖はすべての活動を「応援団設立」に結びつけた。

「予定では二年の春をめどに応援団結成を行う予定だったんだがな。思いっきり計算違いがあっただろ。せっかくなあ、自分たちだけではなく大人たちの許可が不可欠だから、そのあたりの準備も抜かりなく行ったのになあ。話を通すためにはまず教師受けも良くしなくてはならないだろ。腹から響くドラ声も必要だろ」

「じゃあ、今でも発声練習やっているのは、そのためか」

「二年に入ったら一気に部活結成の嘆願書、出すつもりだったんだ。まずはそれまでにだな、顔売っとかねばならねえだろう」

弱小運動部を奮い立たせ、運動部関連の行事に無関心な連中を奮い立たせるためのリーダー性も欠かせない。もちろん評議委員会を代表とする委員会連中にも、ことあるごとに協力を依頼することも忘れてはいなかったようだった。上総が藤沖と話をするようになったのは、こいつが生徒会に入る前からだった。

上総の眼からみても藤沖はえらかった。先輩たちの後ろ盾がない中で、「青大附中応援団」を作るためにだけ勉学に勤しみ、委員でないにもかかわらず自らクラスを団結させるため努力を惜しまなかった。

生徒会役員でもないのにわざわざ自分から手伝いに通っていたのも、どのように「長」として振舞うか学ぶためだった。あとは応援団設立書の提出時期を待つだけのはずだった。

全身全霊でがんばる姿を生徒会役員や教師たちの脳裏に焼き付けた結果、藤沖の「応援団設立」根回し計画は裏目に出てしまった。しかたのないことだろう。成績よく、リーダーシップも完璧、そんな人材を教師たちが見逃すはずがない。二年春の評議委員クラス改選において、難波より藤沖に票が流れ、あやうく男子評議が入れ替わるかもしれないという事態を引き起こした、B組第二の男を、そのままフリーにするわけもない。

「一年、そろそろ任期も終りに近づいているし、改めて聞くけどさ。藤沖、どうして生徒会長に立候補した？」

「応援団長の気合よりも、生徒会長のお言葉が、今のところ全校応援させやすいってことに気が付いたからに決まってる。青大附中はそういう学校だからな」

「もう応援団には未練がないのか」

「高校入ったらですぐに応援団設立申請を出す。生徒会長やっておけば、顔も広くなるし、先生がたとも話が早いだろ？ 俺の三年間はそこに費やされていたのさ。ほら、立村、もっと飲め」

コーラ瓶を指差した。となりの二年ふたりがこくこく頷く。

燃える生徒会長・藤沖勲。あっぱれである。

三年同士の会話に入っていけなくなったのだろう。

「おつかれさましたー」

二年副会長と二年書記はかばんをぶら下げてさっさと生徒会室から出て行った。片手を挙げて見送った後、藤沖は半分近くのこったコーラを上総の目の前に、どんと置いた。

「まあ、飲めや」

人が口をつけたあとのビンから飲むのはなんだかいやだ。上総は目をつぶり息を止めて一口飲んだ。口元がべとっとしているようで気持ち悪かった。

「今の段階で立候補予定者は決まっているのか。例によって生徒会内の持ち上がりで今年も決まるのか」

「それはねえなあ」

前からその話は聞いていた。確認の意味で尋ねたまでだ。

「あいつらが今度部活優先にしたいって言い出してな」

「さっきの二年役員たちか」

「まあしょうがねえよなあ。あいつら運動部だろ。ハードルで地区一位とか、全国大会に向けての水泳強化選手になるとかなったら、早く送り出すのが男だろう」

藤沖の場合、運動部の連中には甘い。さすが応援団長志願だ。

「そうなると、生徒会長はどのあたりになるんだ。藤沖も言ってたろ？ 女子を生徒会長にはしたくないってさ」

順当に行けば、現在二年副会長の渋谷名美子あたりが妥当だろう。女子だがそれなりに仕事もできるし、教師受けも決して悪くないと聞いている。ただ藤沖から聞く限り、あまり性格のよろしくない女子という印象を持っていた。かなり偏見が入っているだろうし、その辺は割り引いて考えるようにはしていたが。

藤沖はコーラ瓶を取り返ししながら、あごをひくりとさせ頷いた。

「次期評議委員長が新井林だろ。ばりばりの体育系野郎だ。嘘いつわりのねえあの性格はまんざら悪くねえが、あいつとうまくやっていくのはやっぱり、それなりの男子でないとまずいだろうな。渋谷なんか口先ばっかで何にもできやしねえ。男を馬鹿扱いして見下すくせに結局は尻拭いが男子連中といういつものパターンだぞ。新井林も、馬鹿女子を相手にしてぶっちぎれるのはいやだろう。俺もその辺きちんと人を見ているつもりだ」

「そんなに渋谷さんって、面倒な人なのかな。俺も話したことないからなんとも言えないけどさ」

直接話したことがないので、藤沖の主観に頼るしかない。

「面倒ってか、なあ」

瓶を片手で持ち上げ、藤沖は残りのコーラを一気に飲み干した。

「何かあると『それは私がやりました』『あれは私たち女子が片付けました』の連発だ。実際運んだのは男子なんだ。少しは『男子たちに手伝ってもらいました』とかな、『男子たちのおかげ

でここまでできました』くらい言え。難波もまあ、そのあたりぐちゃぐちゃ言ってるぞ。頭の悪い女子にはむかつくってな」

難波の場合対象はひとりに絞られている。そのことを藤沖は知っているのだろうか。

——お互い「男を立てない」態度にむかついているんだな。

藤沖は指先で鼻毛を抜くような真似をし、ちっちと舌を鳴らした。

「それなら会長はこの前聞いた通り、やはり難波たちが推してる、一年の霧島で決まりそうか。ほら、C組女子評議の弟」

「たぶんそうなるだろう。ただ、やっぱり一年だ。もう少し別の候補も見ておきたいところなんだが」

難波と更科が以前から、霧島さんの弟……通称キリオ君……に接近し、いろいろと話をしていることは聞いていた。成績もいいし、顔も女子受けするし、今のうちから生徒会長として活動してもらえれば、今後の青大附中も安泰だろう。水鳥中学も、現在の内川会長が任命されたのは一年の秋だったと聞く。上総もそれほど心配はしていなかった。

ただ、天羽たちにも話した通り、霧島弟のやる気有無だけが心配だった。藤沖のように先生方から担ぎ出されてそのままオーライというパターンもないわけではない。だけど本人が本当は引っ込んでいたいタイプだったら、かえって悲劇が待っている。そのあたりの読みはきちんとしてほしいと思う。今のところ、難波と更科から聞いた限りその心配はなさそうだ。

「ま、どっちにしても渋谷に威張られるよりましだ。渋谷もあきらめて、霧島ぼうやに取り入ろうとしている様子だし、それほど心配はないだろ。あとは新井林との相性だが」

「生徒会長が一年なら、いくら新井林でもきついことも言わないと思うよ」

「心配するな。俺がちゃんと押さえておく」

「押さえておくといえば、あのさ噂なんだけどさ」

上総は口籠もりながら尋ねた。やっと本題に入ることができる。

「二年から別の候補が挙がっているという話、聞いてないか」

「杉本のことだろ、やっぱり気になるか、立村」

うっとおしげに返事が返ってきた。

迫り来る「黒船」杉本梨南への対処準備が終わっているわけか。

おそらく藤沖も、上総と杉本との繋がりを気付いているだろう。天羽が情報を流しているくらいだ。「うちの評議委員長が、早く切れって言ってるのに、あの馬鹿女にこだわってやんの。もう頼むよ藤沖ちゃん、立村に一発、がつんと気合入れてやってくれよお」そのくらい言いかねない。用心深く続けた。

「駒方先生あたりが立候補を勧めているらしいとは聞いているんだ。杉本本人は何にも言わないけどさ。でも、生徒会としてはそれ、困ること、だよな」

文節を不自然に区切ってしまった。藤沖は首筋をかきながら黙って話を聞いている。

「俺も正直なところ、杉本に生徒会の雰囲気は合わないような気がするんだ。ほら、一年の頃、評議委員会で見てきたからさ。性格もつかんでいるし」

「俺は杉本がどういう女子か知らんが、生徒会向きでないというのは立村も納得してるんだな」

ずばり突っ込まれた。上総はうつむいた。まずい。こういう時に飲み物があればごまかせるのに。

藤沖は首のひっかき傷が浮き上がるくらい強く搔いた。

「まだ渋谷の方が、大人の前では礼儀正しくすること知ってると思う。杉本は新井林といろいろあってE組送りだろ。最初から問題外だろう」

「いや、それはいろいろ事情があるんだよ。」

「かぼうのは立村、お前だけだ」

決め付けられた。上総は右手を堅く握り締めたまま聞いていた。

「俺が男尊女卑思想の持ち主だとか言って罵倒する奴がいるが、よく考えてみろ。評議委員長も、規律委員長も、それから生徒会長も。主だった『長』はみな男子だろうが。感情に流されなくて、やるべきことはしっかりやってくれる女子がいるのなら、俺は喜んで生徒会長の席を譲るぞ。たとえば、そうだな、うちのクラスの轟とかだな」

「理解できるような気がするよ、それ」

轟さんが男子たちから密かに評価されているのは本当だった。

「ただヒスばかり起こして、自分らの価値を高めるためにだけ騒ぎ立てる女子だったら、最初から相手にしたくない、それだけだ。立村、そのあたり、どう思う。評議委員長として杉本という女子は、生徒会でやっていく資質があると思うか」

「それは」

「他の連中はみな、杉本を裏で立候補させないようにしてくれと頼み込んでくる。どうせ落ちるのが見え見えだから、立候補させてやれという奴もいる。だがそれを裏工作であれやこれややらかしていたら生徒会の役割なんてなくなるんじゃないのか。委員会ならまだしも、生徒会だけは正々堂々と民主的なやり方で役員を決めたい。俺は本心、渋谷に生徒会長をやらせたくないとは思っている。だが他の連中がそれでいいなら文句は言わん。それは杉本という女子に対して同じだ」

上総の顔を正面から見据えて、藤沖は次の言葉に間を置いた。

「生徒会では毎度のことながら信任投票で人員が埋まるように準備していく。外部から立候補がないという前提で、やりたい連中をまずは内枠から固めていく。だからもし杉本が立候補したらどの役でも決戦投票ということになるだろう」

「当選の可能性は、低いよな」

「立村、いいか。男子なみに根性がある女子なら、俺は喜んで生徒会に迎え入れる。全校生徒の前で、たったひとり落選なんていう恥ずかしい状況をを受け入れられるような女子だったら、『男尊女卑主義者』の俺も杉本に対する見方をたぶん変えるだろう」

藤沖は言い放った。さっきまで眠たげだったまなざしがすっきり目覚めていた。

「逃げも隠れもしない。堂々と勝負に來いと伝えておけ、立村」

しばらく違う話でお茶を濁した後、上総は生徒会室から出た。もうだいぶ外の空気も冷たくな

っていた。

藤沖の言葉を信じるならば、すでに杉本梨南の生徒会立候補は可能性大として受け取られているのだろう。そのために信任投票の準備にみな勤しんでいるというわけだ。

ひとつだけ救いなのは、生徒会役員たちが杉本の顔を見ただけで追い払おうとは思っていない、その点だけだった。できるだけ異物が近づかないように予防はするけれども、来たら来たで受け入れる覚悟はありそうだ。もちろん、そうならないために上総もできることはしなくてはならないだろう。そのための準備をしなくてはならない。延び延びにしているあの言葉を、早く美里に告げねば。上総はさっきまで握り締めていた手を、ゆっくり広げた。指先がほんのり赤かった。

——E組に行ってみるか。

三十分くらい藤沖としゃべっていた。いつものように難波が霧島さんと一戦交えていたとしても、そろそろ終結している頃だろう。天羽や更科もよけいな付き添いをせずにさっさと帰っていればいいのだが。霧島さんも、上総が昼休み様子を見た時はしょんぼりしていたけれど、天敵・難波を相手にすれば言いたいことも言うだろう。気力喪失状態の霧島さんを元気づけるためには、劇薬代わりの難波が効果的なものかもしれない。

一階まで階段を下りていこうとして、踊り場で立ち止まった。

首筋に冷たいすきま風が吹き抜ける。

さっきは天羽に、今は藤沖につつかれた鋭い痛みがのどもとに走る。

——感情に流されないで、やることはしっかりやってくれる女子。

もし「長」となる条件だとしたら。

——俺には、評議委員長になる資格なんて、最初からないんじゃないか。

「おい、だからこっち向け、俺の方を見ろって言ってるだろうが！」

階段一段目に腰掛けているのは、ふたつに髪の毛を分けた女子の頭だった。見覚えがある。昼休み、霧島さんがしていた髪型と一緒だ。上総は手すりの陰に隠れた。

「なんか言いたいことあるだろうが！ お前、こういう時いつもわめくだろ。男尊女卑がああだとかこうだとか、なーんもわかんないこと、ずっとしゃべりつづけるだろうが！」

返事はない。大声の主が青大附中の誇る難波ホームズだ。顔を見なくて声だけでわかる。

「E組なんかに隠れてねえで、顔を出せって言ってるだけだろうが！ 霧島、お前な、お前が馬鹿だってことはみんなわかってるんだ。今更お前が言い訳しなくたって全校生徒がわかってるんだぞ。今更隠すことねえだろ！ 評議の連中だって、みんなそんなこと知ってるんだ。それが証明されたからって、逃げ隠れするなんて汚ねえぞ！」

——難波、それはまずい。

仲裁に入るべきか。迷った。上総は隠れている方を選んだ。

「お前が評議から抜けるとしたって、まだ二ヶ月も任期、あるんだぞ。生徒会役員選挙の準備だってあるんだぞ。お前が突っ立って座ってるだけで十分やることあるんだぞ。人手ないんだぞ」責めているのは難波なのだが、全く霧島さんの返事がない。

「それに後期の女子評議、誰になるかわからねえけど、そいつになにをやればいいのか教える仕事だってお前、あるんだぞ！ 霧島、お前ひとりでもの投げ出して、馬鹿の二度塗りしてどうするんだ。この馬鹿が」

——難波。いくら「愛の裏返し」だったってこれはまずいよ。

こういう時、割り込むはずの天羽と更科の姿もない。

だから難波はひたすらエキサイトしているのだろう。

——やはり、止めに入るべきか。

迷っているうちに難波の口調がさらに猛々しく響いた。

「いいか、お前、評議委員なんだぞ！ 二年半も評議委員やってるんだぞ！ どんなにそれが長い期間か、お前だってよくわかってるだろうが！」

返事はない。座り込んだ霧島さんの後姿は全く動かない。ただ項垂れている。

「だから、今から来い、俺が今日の委員会の内容、全部説明してやる。どうせ明日の朝、更科が全部やってくれるだろうが、お前ひとりなんも知らないわけにはいかないだろうが！」 しばらく、間。その後、いきなり声音が変わった。

「お前なんで、なんも言い返さねえんだよ」

悪口三昧、罵声の嵐。一瞬やんだ。

「なんか言えよ！」

やはり答えはない。難波の声がかすれたように聞こえた。

「だから、霧島、いいかげんしゃべれよ、しゃべれって言うんだ！」

霧島さんの両肩に手を置き、難波が前かがみになり、激しく揺さぶっていた。かくんかくんと揺れているが、霧島さん特有の罵り声は全く聞こえない。

上総は息を殺し、霧島さんの横顔をのぞき見ようと心した。

ちらりとのぞいたその表情に、かつての激しさは全く残っていなかった。昼休みに西月さんや杉本と一緒にいる時と同じく、あきらめきった風に遠くを眺めている。

対照的に難波の顔は遠目からもゆがみこわばっていた。いつものきどった「シャーロック・ホームズ」姿はどこにもなかった。

霧島さんは揺さぶられるままでいた。ふたつに分けた髪の毛の束が前、後ろに揺れた。がっくりと難波が、両手を肩に乗せたまま項垂れた時、霧島さんはその手を軽く一度、二度と払いのけた。すっと立ち上がった。かつての霧島さんからは聞いたことのない、深みのある声で、

「私、もう、青大附中にはいけない人間だからかわらないだけよ」

それだけ言い残し、玄関の方へ向かっていった。

難波ひとり、階段前に立ち尽くしていた。

上総はもと来た階段を昇り、反対側から降りることにした。

もし今の難波と同じ状況に置かれたら、誰にも見られたくない。決まっている。

十一月に青大附高の進学内定が現三年生たちに出る予定となっている。退学ものの大事件を引き起こした奴や成績が芳しくない生徒ならともかく、一通りはみな、進学が決まっているはずだ。もちろん霧島さんのような例もないわけではないので気を抜くことはできないけれども、公立の三年生たちと比較すると今の時期はかなりのんびりしてられる。

——関崎も毎日、真夜中まで勉強していると言ってたよな。

一週間前、水鳥中学生徒会副会長の関崎と電話で話をした時、ちらとそんなことを聞いていた。関崎の第一志望は青大附高、滑り止めに公立の青潟東を受験する予定だそうだ。もっとも担任からは、公立高校を一ランク落とせと言われてしているらしい。学年トップに対してそれはないんじゃないかと上総は思うのだけど、いろいろ公立には事情があるのだろう。

——なんとか、受かりたい。だからやるべきことは、すべてやるんだ。

「がんばれ、俺も協力するからさ」

——受験するのは俺だ。立村になに協力してもらおうんだ。

ぶっきらぼうな口調は相変わらずだった。真っ正直で一本気、それでいて不器用で純情。人一倍友だちを大事にする性格の、学年万年トップ。いい奴だ。たぶんカンニングさせてやるなんて言ったら、奴に友だちの縁切られるだろう。そういうタイプだ。関崎は。

「俺ができることって言ったら、そうだな、青大附中の過去問題集とか、学校の雰囲気とかそういうのを教えることくらいかな」

——小細工したってしょうがねえ。俺は真っ向から勝負する。三年間やってきた積み重ねを全部ぶつけてやるつもりでいるんだ、俺は。

「そうか。じゃあ俺も、祈るだけにしとく」

——立村。

いきなり言葉が沈んだ。何かうっかり気に障ること言っただろうか。

——お前も、がんばれ。

何をだよ、とは言い返さず、上総は素直に受け取った。

「ありがとう」

関崎がなぜ上総に「がんばれ」と伝えたのか。

理由はだいたい勘付いていた。

——きっと俺の馬鹿さ加減が、水鳥中学にも筒抜けなんだろうな。

上総はぼんやりと机に向かい、教科書を広げた。来週の金曜が生徒会役員立候補者受付締め切りとなっている。杉本梨南をめぐる頭の痛い問題がないわけではないが、この前藤沖会長が堂々と受けて立つと言い切ってくれたのだ、おそらくなんとかなるだろう。あとは上総自身が取べきスタンスを、選ぶだけだ。

——先延ばししててどうするんだよ、俺は。

さっき風呂からあがった後で、父からもらった二枚のチケットを財布にしまった。明日からデパートで開催される「マイセン食器の歴史展」の入場券だった。大人八百円・学生五百円。自分の金ではまず行かない催しものだ。まず中学生男子が興味を持ちそうにないイベントチケットをなぜ上総に渡したのか？ 理由は簡単だ。美里と一緒にデートしろという父なりの思いやりなのだ。

——父さん、すっかりお気に入りだもんな。

去年のクリスマス近くに、こっそり美里を家に招いてふたりきりのお食事会を開いたことを、父はしっかりと記憶しているらしい。もちろん周囲が誤解するようなことなどしていないし、だからこそ父は笑顔で、

「ほら、上総、男なんだからきちんとエスコートするんだぞ」

などと頭の痛いことをほざくのだろう。顔から火が出るほど恥ずかしいとはこのことだ。しかもペアチケットをもらったのはこれが初めてではない。今年に入ってからも十回くらいだろうか。もう父から見たら、息子の恋人は美里なのだと認識がすっかりなされているのだろう。

いや、もしかしたら父の好みなのかもしれない。なんとなく、

——清坂氏って、変なとこ、母さんと似てるかもな。

ぞっとするのは、湯冷めしたからか。くしゃみを三回繰り返し、上総はぼんやりと天井を見上げた。

——どちらにしても、もう話さないとならない。清坂氏には土下座して謝らないとな。

三年近く、ずっと上総の味方でいてくれた、たったひとりの女子だった。

周囲から「立村なんかのどこがいいの」「どうして羽飛にしないのさ」とか馬鹿にされても、一瞬も揺らぐ、

「私は立村くんのこと、信じてるんだからね！ 絶対にね！」

そう、言いつづけてくれた、たったひとりの女子だった。

来週、生徒会立候補者問題が片付いたら、美里を連れてこのイベントに連れて行こう。精一杯、できる限り、レディファーストに努めよう。これが最後だ、揺らぎなく。

喉に詰った石がおなかに落っこちたような気がした。来週までは、何も考えず、ただ杉本梨南の行く末だけを見守ることにしよう。

上総は数学のノートを広げ、狩野先生に言われた通り、問題を五回書き写すことにした。解き方がわからなくても同じことばかり書いていると、自然と心に染み込んでくる。修学旅行の時やらされた「写経」に似ていた。そうだ、あの時美里はずっと意気消沈していたんだ。身体の変化に伴う不安定な精神状態で、初めて上総の前で弱さを見せた時のことを思い出し、また胸が苦しくなった。

次の朝、上総はいつものように自転車を駆って学校に向かった。少し早すぎるかとは思っているが、近所の中学生たちと顔を合わせるよりはましだ。品山町近辺を通る時はペダルを強く踏み、息が切れかける頃青潟駅前に到着する。そこいらで少し息を整えて、また一気に青潟大学附属

中学へと向かう。このあたりは自動車が多くて、うっかり気を抜くとひっかけられそうになる。あえてスピードを市街地では落とし、いつも通り朝七時五十分に到着した。

昨夜寝不足だったせいかな、息苦しい。軽い眩暈がする。

——そうだな、杉本もそろそろ来ているかな。

杉本梨南も結構早起きで、八時五分前には到着していることが多かった。

この前は難波と霧島さんのからみもあって顔を見られなかったけれども、今ならうるさい外野もないし、少しくらいなら話もできるだろう。生徒会改選の件についても本人の口からある程度話を聞きたい。評議委員長としては、当然のことだ。早めにE組の教室で待っていてもいいだろう。

空を見上げるとかすかな白い光がたらたらと滴っているように見えた。

上総は腕時計でもう一度時刻を確認した後、生徒玄関まで走ることにした。

E組の教室は一階の元「教師研修室」だった。一年教室が並ぶ一階の最奥にあたる部屋だ。以前は名前の通り、教師たちの自主学習室だと聞いていた。諸般の事情により現在は、いろいろと問題を抱えている生徒たちの「隔離室」扱いされている。杉本も、また上総もE組に通う一人だった。放課後、狩野先生とまた、個人面談が待っている。

廊下を足早に進む。ふと、人影を見た。もう杉本、学校に来ているのだろうか。早い。

「杉本か？」

口の中で小さく声を掛けようとした。すぐに違うと気が付いた。髪形と姿形が全く違う。杉本はどこか遠めでもふくよかに見えるのだが、目の前で一礼している女子はいわば「なよやか」。竹から生まれたかぐや姫、とでも言った雰囲気だった。髪形でだいたい誰か目星はついた。取り立てて会いたい女子ではなかった。近づいていくと、あどけない顔立ちで上総の苗字を呼んだ。

「佐賀さん？ 何か、用？」

二年B組・女子評議委員。佐賀はるみだった。

ちらと杉本が近くにいないかを察してみる。まだ教室にはいなさそうだった。評議委員長として何気ない風に口を開いた。

「はい、今少しよろしいですか。梨南ちゃんのことなんですけれども、先輩はご存知ですか？」

「杉本のこと、ってなんだろうな」

「はい、私、友だちから噂で聞いたことなんですけど、これお話ししておいた方がいいと思ひまして待ってました」

「人前では話せない内容か？」

佐賀は少し首を傾げるようなしぐさを見せた。髪の毛のほつれ毛をいじろうとしていた。目は一切そらさない。もともと佐賀はるみという女子は、上総に対しておどおどした態度を取ることが全くなかった。失礼なことを言うわけではない。ただ、天羽たちに対するような気の遣い方が上総に対しては全く感じられなかった。

「梨南ちゃんが、生徒会長に立候補したいという話を聞いて、私、心配になったんです」

「生徒会長？」

——どこでばれたんだ？

ばれたもなにもないか。喉もとがまたひくっとする。まずい、読まれないようにしなくては。頭の中で「クールに、静かに」そう唱えた。

「はい、私も梨南ちゃんに確認しなくちゃと思って、心配になったんです」

——まさか。なんでこの人が知ってる？

天羽たちからもらった情報のファイルを、素早くめくった。ひっかかるところ、どうして気が付かないのだろう。時間稼ぎのために上総は尋ね返した。

「なんで佐賀さんそんなこと、杉本に確認しないといけない？」

「だって、私は……。私、梨南ちゃんの友だちだったから。友だちならちゃんと、本当のこと言っただけじゃないといけないと思ったんです」

——誰が友だちなんだ？

不意に熱いものが胃から逆流するような感じがした。うっとむかつきを押しさえたくなる。でもつばを飲み込んで耐えた。目の前で佐賀はるみが語る言葉を、上総は唇をかんだまま聞いた。

「新井林くんに話そうかと思ったのですが、二Bの生徒にまで広まってしまうと大変なことになってしまいそうな気がしますし、それにできたら、梨南ちゃんにこれ以上恥をかかせたくないんです」

——なんでそこまでかぎつけてるんだ？

上総はもう一度時間稼ぎの質問を投げかけた。

「恥をかくってどういうこと」

「はい、生徒会改選で圧倒的不支持で落とされる可能性があるということです」

生徒会か。もしかしたらこの前轟さんが話していたことだろうか。ようやくたどり着いた答え。ここで少し、きつく出てもいいだろう。上総は少し穏やかに尋ねてみた。

「そういえば佐賀さん、最近生徒会室でよく話をしているようだけど、噂はそのあたりからか？」

ちろっと佐賀はるみの瞳に、鋭いものが光った。

「友だちに迷惑がかかるので、内緒にさせてください」

ぼろを出さないようにと言葉を控えたか。やはり只者ではない。同時にもうひとつの道筋が引き出される。これはやはり、あいつが絡んでいる可能性、大だろう。まだ誰も廊下を歩いていない。どこで切り札を出すべきか。

「それはどうでもいいけどさ。とにかく杉本が立候補するなんて話は、俺も聞いてないな」

ここはフェイントだ。生徒会から流れた噂を、いくらなんでも評議委員長が知らずにいるなんてこと、まずありえないはずなのに。よく考えれば上総の大嘘だということがわかるはずなのに。いや、佐賀はるみからすれば上総は出来そこないの評議委員長。何にも知らないで仰天しているとでも思っているんだろう。ならばそれでいい。馬鹿になりきることにした。

「佐賀さん、わかる範囲でいいんで、教えてくれないかな」

「立村先輩は、梨南ちゃんを止めてくれますか？」

思った通り、佐賀はるみは要求してきた。計画的言動だと確信した。

「止めるもなにも、それがデマかどうかわからない段階で何も言えないよ」

「私も、噂しか聞いていないんです。だからわかりません。でも、梨南ちゃんがこれ以上傷つくのはいやなんです。だから約束してくれませんか。梨南ちゃんを守ってください」

——どこまでほんとなんだらう。この人。

「私、新井林くんや二年B組の人たちや、その他梨南ちゃんに迷惑をかけられた人たちのことを考えるとこれ以上、彼女を守ってあげることができないのですが、やはり、ずっと友だちでいてくれた梨南ちゃんがまたずたずたになるのを見るのはいやなんです。お願いします、梨南ちゃんを助けてあげてください」

——本当に、そう思ってるのか。心の底から本当に？

うがった見方をしてしまう。杉本の方が悪いことは過去の出来事総ざらいでよくよく上総も理解しているつもりだった。幼い頃からの横恋慕、それゆえの「いじめ」、そして失恋と同時に奪われた評議委員の座。それは決して、理不尽なものではなく、当然といえば当然のものだらう。それはわかっている。素直に佐賀はるみへ共感できれば、今ここにいなくてもいいはずなのだ。それでも上総は動きたくなかった。いらだちながら話を進めた。

「事実だけでいい。杉本が来る前に早く話してくれないかな」

「はい、梨南ちゃんはE組で、駒方先生に推される形で、生徒会長に立候補することになっているそうです。普通の生徒会改選だったら問題なく信任投票で決まると思うのですが、今年はすでに何人か会長候補がいるそうです。だから、その人がいる以上、梨南ちゃんに勝ち目はありません」

「どうしてそんなこと聞いているの」

「友だちに迷惑がかかります。言えません」

「それに、杉本に勝ち目がないと、どうしてそう言い切ることができるんだ？」

「梨南ちゃんはもう、嫌われているし、みんなから馬鹿にされているからです。先輩、学校祭の時に、他の学校の生徒が梨南ちゃんをひっぱりだして走り回っていたことを覚えておられますか」

「ああ、あったなそんなこと」

ちらと、心臓あたりが痛くなった。確か学校祭の時、杉本梨南のことを心から慕っていた小学校時代の同級生男子がやってきて、じっとくっついて離れなかった時のことを思い出した。あの時の男子はなんとなく、一年時のお子さま秀才・水口要を思いださせるものがあった。杉本も最初は嫌がっていたけれど、「りなん、りなーん、一緒に行こうよ！」と騒ぐ男子に負けたのか、黙って連れられるままになっていた。慕われるお姉さん、というには相手の男子の体格が大人すぎた。

「あの時、周りの子や梨南ちゃんを知っている人たちはみな言ってたんです。やっぱり、ああい程度の男子が梨南ちゃんには合っているんだって」

「それは失礼じゃないかな」

どうしてここでひっかかってしまうのだらう。佐賀はるみの言い分は決して間違っていること

ではないのに、つい、頬が引きつってしまう刺を感じてしまう。普通の人なら何にも思わないことを、どうして自分は嘔み付きたくなってしまうのだろう。気付かなかったのか佐賀は気にもせず続けた。

「はい、人間は平等ですから当然です。あのことがなければ、まだ梨南ちゃんは生徒会長として評価される可能性があったと思うんです。梨南ちゃんのことを知らない人たちがたくさんいるうちは、うまくすれば当選するかもしれません。だけど、あの時、梨南ちゃんという人をたくさんの人たちが評価してしまって、見下してしまっただけで、それ以上の扱いをしてもらうことって難しいと思うんです。もし立候補しても、対抗候補の人は梨南ちゃん以上に知られていないですし、嫌われてもいないはずですからずっと有利です。どうでもいい人たちは、嫌われ者よりも、知らない人の方に投票するはずですよ。そうすると、梨南ちゃんはどう見ても不利ですし、さらに選挙中、顔を全校生徒にさらけ出してしまいますのでさらに嫌われてしまいます。私、思うのですがたぶん駒方先生は、梨南ちゃんをたっぷり傷つけて反省させるために、立候補させようとしているんだと思うんです。大人ってひどいです。落選確実なのに、さらに傷つけようとするなんて酷いです。梨南ちゃんが覚悟しているならそれはしょうがないと思いますけど、ただ煽り立てて、可能性があるとか言っておだてて、実は陰で舌を出しているなんて、最低だと思います」

——杉本、まさか聞いてないよな。

上総はそっと背後を確認した。いなかった。外から朝練を終わらせた部活動の生徒たちがしゃべっているのが、かすかに聞こえた。杉本の姿はなかった。声をひそめようとしたがうまくいかなかった。

「それ、誰から聞いた？」

「友だちからです。言えません」

——友だちのことは隠せて、杉本のことはあからさまかよ。

自分でもちっとも筋道が通っていないことくらい承知している。でも湧いてくるのだ、しかたない。佐賀がいじらしさを目元にあふれさせて訴える様子を、上総は冷めたまま耳に流していた。「私はもう、梨南ちゃんから嫌われていますし、何を言われてもしかたないと思っています。私のことを嫌うならそれでいいです。でも、これ以上梨南ちゃんが傷つくのを見るのは私、辛いんです。たぶん新井林くんに話しても止めてくれるとは思いますが、やはり、梨南ちゃんを大切にしてくれる人に止めてもらった方が納得すると思うんです。だから、お願いします。立村先輩、梨南ちゃんを止めてください」

——杉本が傷つくのを見て、本当に辛いと思っているんだろうか。この人。

傷つけられたのは佐賀はるみ。小学校時代無理やり親友扱いされてふりまわされて、おそらく杉本を憎みつづけても許されるのは、この人だけだろう。なのになぜ、「梨南ちゃんが傷つくのを見るのは私、辛いんです」なんだろうか。上総がもし、佐賀はるみと同じような立場に立ったら、一生杉本を許さないだろう。憎むことこそ、最大の礼儀。この人にはそのしたたかな生き方が通じないのだろうか。

上総はじっと佐賀はるみの大きな瞳を見つめつづけた。時折、訴えるようににらむ視線に退きそうになったけれど、耐えた。それが杉本への礼儀じゃないかという気がした。

「わかった、佐賀さん。どうもありがとう。佐賀さんから聞いたとは言わないで、杉本に確認してみる」

しゃべると言葉が滑っていく。どうしてかわからない。

「佐賀さんの言う通り、杉本は生徒会長に不適格だと思う」

自分に言い聞かせた。もう、杉本の逃げのびる場所はない。

佐賀はるみがすでに生徒会の役員たちと情報を交換し、これから先杉本梨南の行動を監視しようとしている以上、もう袋のねずみ。逃げ場所はない。二年B組評議委員の佐賀はるみは、次期評議委員長の新井林健吾の陰に隠れているように見えて、実は三学年の女子中一番の評価を与えられていることを、上総は知っていた。水鳥中学の交流会で、誰もが絶賛したさりげない仕切りと心配り。三年女子たちの存在を記憶しなかった他中学の連中が、「あの佐賀って女子、すごいいい子だよな」と口走ったことを、上総は聞き逃していなかった。ただ髪形が中国娘風のかわいらしい雰囲気だとか、おとなしそうで守りたくなるような風情だとか、そういうのとは別の部分で評価されている事実、上総は受け入れなくてはならなかった。

「ただ、あくまでも噂である以上、あまり広がらないようにしたほうがいいな。とにかく、今のことは、他の人たちに決して話さないようにしてくれないかな。理由はだいたいわかっていると思うけどさ」

立ち位置を変えることはない。上総は一呼吸置いた後、ゆっくりと生徒玄関ロビーまで目を向けた。女子がばたばたと玄関に入ってくるのが見えた。杉本が混じっていても不思議ではない。

「杉本がそろそろ来る。佐賀さんは教室に行ったほうがいい。それとさ」

佐賀はるみは上級生向けの、丁寧な礼をして背を向けた。背筋がぴんと伸び、誇り高らかに歩いていこうとしている。その背中に上総は、言わずにはいられなかった。

「佐川に伝えておいてくれないかな。他校のことで口出しするなってさ」

——関係ないってわかってるけどさ、しょうがないだろ。

全く動じなかった。聞こえなかったのかもしれない。佐賀はるみは歩みを止めることなく、突き当たり左側を曲がって行った。ようやく一年生たちが教室に吸い込まれていくのを、上総は突っ立ったまま眺めていた。

さっきまで滴っていた光は、いつのまにか黒い裂け目に覆われていた。窓辺から銀色の空が広がっていた。

——俺は救いようのない大間抜けだ。

なぜ、轟さんが佐賀はるみの言動に疑問を抱いていたという事実をもっと重要視しなかったのだろう？ 藤沖会長だって、轟さんの言うことには一目置いていたというのに。上総にだけこっそり教えてくれたであろうことを、どうして聞き流していたのだろう？

佐賀はるみが生徒会に出入りしている以上、杉本梨南の生徒会立候補情報が耳に入らないわけがないだろう。藤沖会長が考えている以上に女子たちの情報網は濃い。もしかしたら杉本の、決して誰にも知られたくないような過去の話すら、流されているかもしれない。

藤沖は堂々と杉本の立候補を受けて立とう、そう言ってくれた。

男子としての、上総に対する思いやりだろう。

だが、女子たちは違う。藤沖にただでさえ反発している二年女子副会長が、もし佐賀はるみの言葉を鵜呑みにして杉本に立ち向かおうとしたのならば、何が起ころかだいたい想像がつく。杉本がいくらつつぱり通したところで、後ろには佐賀がいる。「いじめられた被害者」がいる。「いじめられた」にもかかわらずあたたかい心で許すことのできる、信じられない感覚の持ち主がいる。

憎みつづけることすら許されない、そんな場所に杉本が閉じ込められたとしたら。

——地獄だ、それって。

許せない人間を憎みつづけ、かみ締めながら、杉本は強く生きようとしている。

誰にも負けたくない、それだけ信じて前に進もうとしている。

それをあっさりと「私は梨南ちゃんのことを心配なの」と、杉本の感じ方を百パーセント否定しようとする佐賀はるみ。青大附中の人々……. 松山先生も、狩野先生も、駒方先生も、たぶん美里も、誰もがその姿に拍手を送るだろう。でも上総は、決してそちら側に立つことはできない。なぜなら、杉本梨南は、「許される立場」に立つくらいなら、死んだ方がまし、そう思いつづけているから。そして上総も、「憎みつづける場所」そこに立ち続けることを選ぶ。だから、十五年間生きてこれた。馬鹿にされたっていい。青大附中という場所にしがみついてこれたのだ。

——待ってられるか。

上総はE組の教室に入った。杉本がいつも座っている席に向かった。自由席にはなっているが、常駐者の杉本には専用の机が与えられていた。教卓の真正面だった。たぶんここは変わらないだろう。かばんから財布を取り出し、少したわんだ「マイセン食器の歴史展」チケットを取り出した。ノートを一ページちぎり、三つ折りにしてチケットを包んだ。

——杉本へ 昼休み説明するので持っているように。 立村——

それだけ記し、上総は机の中に押し込んだ。

反対側の階段を一気に三階まで駆け上り、三年D組の教室にたどり着いた。

八時十分、すでに半分近くのクラス連中が揃っていた。

「立村くん、おはよ！」

美里の明るい声が迎えてくれた。いつもなら「おはよう」と自然な返事をして席につくのがいつものことだけど、そんな流暢なことやっぺられない。隣で奈良岡さんとこやかに語り合っている美里。上総は足早に近づいた。ふたりの女子、顔が少し怪訝そうに揺らいた。

「どうしたの、立村くん。なんかした？」

「清坂氏、悪い、少し付き合ってくれるか」

「なあに？」

話途中の奈良岡さんには悪いが、謝っている時間の余裕はない。息があがっている。

「どうしたの、彰子ちゃんに悪いじゃない」

「すぐに終わる」

上総はすばやく廊下に美里を連れ出した。だいぶ人通りも激しくなり、男子連中がけったいな声で「ひゅーひゅー、相変わらずお熱いねえ」などとからかい声を掛けていく。もうこれも今で聞き納めだ。

「理由はあとできちんと話す。とにかく、俺がすべて悪い。清坂氏が悪いんじゃないんだ。だから、これから俺が何しても、黙っていてくれないか」

なにがなんだか自分でもわからない。美里の顔はしばらくきょとんとしたまま、口を尖らせてじいっと上総の方を見上げていた。夏過ぎてから上総も少しは背が伸びたらしく、美里よりこぶしふたつくらい高くなった。

「なにあせって言ってるの。ちょっと今、彰子ちゃんと菱本先生のびっくりお祝いのこと、相談している最中なんだから、後にしてよね。急ぎじゃないんでしょ。もう」

「清坂氏、申し訳ない」

無理やり窓辺に引き寄せ、上総は美里へ一気に告げた。真正面から顔を見つめた。

「今を持って俺たちの『つきあい』を終わりにしたいんだ」

美里の反応は、上総が想像していたものとは全く異なっていた。

怒られるだろう、泣かれるかもしれない、殴られるかもしれない。

「ばっかみたい、何勘違いしてるんだろ。立村くん、根本的に間違えてるよね」

答えが見つからず口を開く間もなく美里は畳み掛けた。

「ひとつめ、まずそういう話はこんなところで済ませることじゃない。ふたつめ、今私すごく忙しいの。菱本先生の結婚お祝いのことですんごうで手一杯だしそんなことで時間取ってる暇ないの。みつめ、きっと杉本さんのことが心配なんだろうけど、立村くんがまた余計なことしたら本人困っちゃうよ。だって杉本さん関崎くんのことしか考えてないんだから、かえって迷惑してしまうってわかってるでしょ？」

たんと、それでもあきれ果てた風に美里は、指を折りながら続けた。

「悪いけど今の話、聞かなかったことにするから。ほら、さっさと教室に戻って、朝学習やっとなさいよ。まったく、何かと思ったらほんっと、ばっかみたい」

美里のすたすた歩いていく姿を、上総は何も言えないまま見送るだけだった。

休み時間に入る前、美里が給食のトレイを片付けながらおっかない顔で上総に言い放った。もちろん誰もが耳をそばだてている前でだった。

「立村くん、私これからものすごく忙しくなるの。だからしばらく口利かなくなるかもしれないけど、絶対に怒らないでよ！」

「怒るとかそういう問題じゃなくてさ」

人前で「だから別れるって言っただろ！」と怒鳴ることはできない。美里の出方は上総に読みきれないものだった。側で貴史もきょとんとした顔で、

「美里どうした、何あせってるんだよ」

呟いている。

「立村くんは菱本先生のお祝いの件、賛成してないでしょ。だからこの人はおっぽっというて、私たちだけで進めようよ。彰子ちゃんも手伝ってくれるし。だから！」

上総も口をはさめないでいる。どういう出方をすればいいのだろう。美里には今朝、言うべきことを言ったつもりだけど、かなり手短だったことは否めない。ちゃんと改めて土下座する必要があるとは思っている。クラス全員に「俺は清坂さんと別れたんだ」と表明する必要も、ないような気がする。なのになんでか美里の言動には理解できないところがある。

「とにかく、だから、しばらく忙しくなるけど、余計なこと絶対言わないでよ！ わかった？」

机にばしりと両手を置き、上総の顔を見据えた。

怖すぎる。

ほとんど蛇ににらまれた蛙状態。

「わかった、そうする」

——とにかく、もう少し話し合いが終わるまで内緒にしておこうってことだな。

女子同士、いろいろ問題もあるのだろう。上総と美里が付き合うこと自体がひとつの奇跡だと言う生徒もいる。つりあわないカップルだとは昔から言われてきた。やはり、準備が必要なのだろう。異存はない。

「おいおい、どうしたの立村。ずいぶん美里ご機嫌斜めなんだけど、お前なんかした？」

貴史が肘でぐいぐいと肩を押す。返事をせずに上総は立ち上がった。時計を覗いた。まだ時間がある。急がねば。

「悪いけど俺も忙しいんだ。また後で」

決して目を離してはならない、決して一人で行動させるわけにはいかない。

E組めがけて走った。階段をすっころばないように下りて、さっき食べたカレーの匂い漂う廊下を全力疾走した。

「杉本、いるか？」

到着したE組の教室には、駒方先生と狩野先生がふたり談笑していた。

その前に女子三人が机をコの字型にくっつけたまま、黙って給食ナフキンを畳んでいた。

元評議女子三人が顔を並べている。黙って上総の顔を見た。声をかけてくれたのは駒方先生だった。

「どうした上総、英語の準備か？」

「いえ、なんでもありません」

にやにやしなながら上総を眺める駒方先生。一年前の評議委員会顧問だった。だから上総のことを名前で呼ぶのだろう。菱本先生相手だったら露骨に無視をこいてもいいのだが、決して嫌いな先生ではないのでしかたなく返事する。上総は義務的返事だけした後、杉本梨南の後ろに立った。目が合うのは残りの二人、元評議委員。西月さんと霧島さん。もし霧島さんがいつもの調子だったら、

「何しつこくくっついてるのよ、立村くん、早く出ていきなさいよ、うっとおしい！ 杉本さんがいやがってるじゃない！」

怒鳴られても当然なのだが、全く何も言わないのはやはり、変わっていない状況なのだろう。難波が混乱するのもよくわかる。

用事があるのは杉本だけだ。上総は耳元にしゃがみこみ、できるだけ小さな声でささやいた。

「さっきの手紙、読んでくれたか」

「見ました」

そっけなく杉本は答え、ナフキンをかばんにしまいこんだ。

「何を言いたいのですか」

「だから、ああいう催し物、杉本、好きかなと思ってさ」

「確かに好みではあります」

相変わらず棒読み口調で杉本が答えた。視界に狩野先生がかすかに微笑むのが見えた。首から上が妙に熱い。

「ですがそれとチケットとどう関係があるのですか。たとえば立村先輩の研究課題などで必要なものがあるとか、私の能力においてお役に立てる部分があるとか」

そんな難しいことは言ってないのに。杉本にとって一番のつぼは「能力」だということを、上総は二年間でマスターしていた。

「まあ、そういうとこだ。杉本の力が借りたいなと思ってさ」

「そういうことならよくわかります。私が勉強したものを、立村先輩にお教えすればよろしいのですね」

感情の籠らない口調だが、かすかに上ずっている。杉本が好意的反応を示す時は、本人の能力や才能を絶賛された時だ。価値がある、能力がある、他の生徒よりも優れた学業成績だ、などなど。学校の中で評価される部分を刺激すると、杉本は素直に上総の方を見つめてくれる。反対に、「この前の珈琲、おいしかったよな」と「学校」とは関係のない能力を褒められても全く

喜びを見せない。おいしい珈琲を入れる腕は、杉本にとって価値を認めるべきものでないらしい。むしろ常識にすぎないのだとも。

「そういうことそういうこと。マイセンの食器ってさ、俺ぜんぜんわからないよ。杉本はそういうの得意だろ。テーブルセッティングとか」

「それはそうですが、でもなんで立村先輩がそんなことに関心を持たれるのですか」

「いや、なんとなく」

目の前で霧島さんと西月さんが顔を見合わせている。会話は無い。ただ黙って杉本梨南を見守っている。

「とにかく、ちょっとこっちに来てくれないかな」

同期のふたり、しかも女子の見つめる中で上総も、梨南を独り占めする度胸はない。

どんなことがあっても、来週の金曜までは、上総は梨南から目を離す気などない。

——杉本梨南を生徒会役員に立候補させてはならない。

生徒会役員改選は毎年、月曜から金曜昼休み、および放課後に立候補者を受け付ける形となっている。もっとも藤沖が言うには「今まで金曜以外に立候補を受け付けたことは一度もない」のだとか。つまり、月曜から木曜までは自分から立候補する生徒が誰もいないということである。だいたい木曜の放課後あたりから、「これはまずい」と判断した先生たちがめげぼしい生徒を見繕い説得し、金曜の放課後四時までに連れて行き、「立候補しろ！」と命令する。これがいつものパターンだそう。当然、決戦投票まで持ち込まれることはほとんどなく、大抵が信任投票で決着がつく。実質金曜が戦いの終り。一週間後の立会演説会は全くもって、付けたしに過ぎない。義務を果たすだけの役割だ。

——一瞬たりとも、杉本を生徒会室に近づけてはならない。

藤沖が生徒会長としてどのように、信任投票に向けての役員候補を集めているのか、そのあたりも上総は把握していた。まずは会長に霧島さんの弟。その他今までの生徒会役員たちを持ち上げる形で納めるのだという。たぶん杉本の入る隙間というのは、殆どないだろう。

しかも、生徒会役員と懇意にしている、佐賀はるみの不気味な存在も忘れてはならない。

評議委員だし、しかも次期評議委員長・新井林健吾の最愛の恋人だ。立候補することはまず考えられないが、それでもことあるごとに杉本へのやわらかな攻撃を続けることは予想できるだろう。

杉本はそれでも受けて立つだろう。決して逃げないだろう。

だが、勝ち目はない。

立候補した段階で、生徒会内部の厳しい視線で杉本はずたずたにされるに違いない。

杉本にされた「いじめ」をすべて許すことのできる、佐賀はるみのしなやかな刃でもって。

新井林のように「歯には歯を」ハムラビ法典を聞いたがる性格の奴ならば、まだ杉本も血まみれになり噛み付くことができるかもしれない。致命傷を負わせることが、もしかしたらできるかもしれない。

でも、佐賀はるみのように「私は梨南ちゃんの友だちな」と、誰にでもわかるものさしで持ってすべてを仕切られたら逃げ場がない。誰も責めることもできず、佐賀はるみを受け入れない杉本がすべて悪いと決め付けられたまま、つるされるだけだろう。

——勝ち目のない戦いを、もう二度とさせるわけにはいかない。

正しい人たちに勝てないなら、せめて逃げろ。それしか言えない。

上総はしばらく杉本を独占した後、教室を出た。さすがに一日中見張っているわけには行かないし、一応は自分も評議委員長である。やるべきことはまだ残っている。

「それでは帰り、途中まで一緒に帰ろうな」

めずらしくお下げ髪にしていた。耳がくっきりと出ている髪形、よく似合う。ささやきかけるのもこれだったら楽だ。

「別に先輩の顔を見たいとは思いません。しつこい人間は最低です」

「それでいいんだ」

杉本の罵倒にいじけている暇なんではない。とにかく次は帰り道。さっさとE組からかっさって、スーパーの試食コーナー回ってどこかで座ろう。

トイレによってその後職員室に駆け込んで先生たちの荷物を預かり、そのまま大急ぎで教室に戻りぎりぎりセーフ。三年D組の教室では、美里と貴史を中心にさっそく内密の相談が行われている様子だった。他のメンバーは古川こずえと奈良岡彰子。男子が貴史だけなのは、秘密が洩れることを恐れたのだろう。ちなみに規律委員長・南雲秋世の姿はなかった。

「いい？ 立村くん」

また甲高い声で呼ばれた。美里の方から教卓に向かって寄ってきた。上総は近寄らずに美里の出方を待った。

「今からいろいろ決めるけど、あんたはあまり関係したくないって言ってたから、私たちだけで決めちゃうね。だからしばらくあまりしゃべらなくなるけど、それはそれでいいよね」

「けど、あのさ」

そんな、教室内で響き渡るような声で言わなくたっていいじゃないか。上総は言葉を飲み込んだ。

「それにあんただって、生徒会役員選挙が終わるまでいろいろ忙しいでしょ。話があるならその後にしてほしいのよ」

高飛車に、かみつくように。

「だから、今日からしばらく、委員会以外一緒に行動しなくなるけど、変なこと思われないうにしておね！」

「変なことっていったい」

美里はじいっと上総の眼をにらみつけた。きりぎり、音がしそうだった。他の連中が陰で、「立村も可哀想に」とか「美里も早くわかれりゃいいのに」とか、それぞれの感慨を洩らしている。上総の耳には確かに響いてくる声だった。

「とにかく！ いい？ 私は今すっごく忙しいんだからね！」

もう一度唇を尖らせて、ぐいと顔を見上げた後、美里は貴史たちのグループに戻っていった。残された上総はそのまま自分の席についた。隣には南雲がにやにやしなながら座っていた。

「りっちゃん、毎度のことながらしんどいっすねえ」

「たいしたことじゃない」

次の授業の英語教科書を取り出した。

「悪いんだけどりっちゃん、今日、俺、リーダーの訳が当たってるんだけどさあ、これってまずいかなあ」

どれどれ、と目を通した。三年教科書の訳は、四月に教科書を頂いた段階でもう終わっている。南雲をはじめ他の連中にいつも上総が頼りにされる場面は、もしかしたら英語の時間直前のこの時だけかもしれない。

美里がなぜ、あんなわざとらしいそぶりで上総に噛み付いたのか。

最初はむっとしたけれど、すぐに読めた。

——俺が話したがないのを、しばらくはなんでもないかのようにクラスへ伝えるためなんだな。

もし、上総が付き合い解消の話を持ち出したとクラスの連中に知られたら、どういう反応がくるだろう？ 美里の周囲にいる女子たちはまず、英断と喝采するかもしれない。もともと上総のことを「実力がなくせに、たまたま周りのバックアップで三年間評議委員やらされている馬鹿男子」と思っているのだろう。男子たちは女子たちに比べてまだ、上総のことを評価してくれているとは思うけれども、「まあ、清坂ちゃんは立村にとって、高値の花だったのかねえ」で終わるだろう。

誰が好きとか嫌いとか、付き合ってるとか付き合っていないとか、いろいろあること。クラス内で付き合い相手を替えるたびにそれぞれトラブルが起こる。これだってよくある話。

でも、上総の場合、それだけではきっとおさまらないだろう。美里はきっと、そのあたりを見抜いたのだ。上総が一番恐れていることを、あっさり気付いて、先回りしてくれたのだ。

ありがたいと思わなくてはならないのだろう。

とりあえずは今のところ、クラスの連中から、あきれた視線を送られることはない。

人気者グループから外れて、本来いるべき一人ぼっちの席でうつむく必要もない。

——もし、清坂氏と付き合いをやめたなら。

授業が終り、評議委員会も生徒会役員改選が終わるまでしばらく中止ということもあり、上総はすばやく教室を出た。貴史に、

「おいおい、逃げるなよ、お前も来いよ」

誘われたが適当な言い訳をこしらえておいた。美里も貴史に向かって、

「いいよいいよ、乗り気じゃない人に何言ったって無駄だもん」

ありがたく受け取り、上総はE組へ駆け込んだ。すれ違う男子連中の声など一切振り切った。

「杉本、いるかな」

教室にはひとりしかいなかった。杉本が黙って分厚い本を読んでいた。息を切らせながら教卓前の席に近づき、指先でその本の表紙を持ち上げてみた。

「失礼ですね。読んでいるものを覗き込むなんて最低です」

「今日はこれで授業終了だろう。早く行こうか」

「なんで立村先輩に近寄らなくてはならないのですか」

また棒読み口調でつぶねる杉本。

「用事があるのなら早く言ってください。私はこれから用があるのです」

「何の用？」

上総は杉本梨南の机脇にしゃがみこみ、かばんを抱きかかえた。杉本の使っている手提げが膝のところに当たった。それも釣り手からはずして、自分のかばんと一緒に持った。

「別に急ぎじゃないんだろう。これから杉本を連れて少しどこか行きたいんだけどな。つきあってもらえないかな」

「評議委員会はどうされたのですか」

生徒会役員選挙が終わるまで休み、といいそうになり飲み込んだ。

意識を生徒会の話に持って行ってはならない。

「そんなのどうでもいいだろ。俺は杉本とどっか行きたいんだからさ」

「清坂先輩はどうされてるのですか」

「ああ、あの人は今、うちの担任の結婚お祝いイベントで忙しいから任せてる」

「立村先輩もお手伝いされないのですか」

「誰がするかよ」

かなり口汚くののってしまった。手の早い、女性のことなんて何にも考えてないようなあの男の末路なんて、知ったことじゃあない。

「あのさ杉本、俺は杉本と今、話がしたいんだ。それだけなんだ。だから、とにかく学校から出よう。ほら、やはり関崎のこととかあるだろう。学校で話すといろいろ差し障りがあるだろう」

ちらと、杉本は上総の方をにらんだ。

「学校で？」

「他の学校のことだけどさ、俺も一応評議委員長だし、ここでもし他の評議連中に関崎のこと話しているところ見られたら、絞られるんだ。天羽なんて怖いからな。本条先輩に告げ口されて、たぶん半殺しに遭うかもしれない」

大嘘だが、方便。

「それに、俺としてはもうひとつ知りたいんだけど、霧島さんの状況をさ」

「霧島先輩ですか」

また声が、かすれた。霧島さんは杉本にとって「やさしく美しい」先輩の一人だった。西月さんと霧島さんは、杉本が一年の頃から可愛がってくれた人たちのはずだ。今、E組で計らずも三人一緒に給食を食べているのも、そのあたりの繋がりがあるのだろう。

そしておそらくだが、霧島さんが現在置かれている状況なども、杉本は女子の特権である程度

勘付いているはずだ。鋭い杉本のことだから、なおさらだ。

「霧島さん、いろいろ今辛いところだと思うけど、俺は男子側だから余計なことを言えないんだ。だけど、せっかくだ、三年間一緒にやってきた仲間なんだから、せめてこれ以上傷つけないようにいい方法を考えたいんだ」

上総は杉本の顔を横から見上げた。お下げの髪の毛を杉本は片手でぐいとつかみ撫でた。

「ただ、あまり騒ぎにならないようにしたいんだよな。俺も女子がどういうことすれば喜んでもらえるのかわからないしさ。更科も難波も天羽も、なんとかして霧島さんがこれ以上傷つかないように」

「難波先輩は殺したいと思っているのではないのですか」

思いっきりため息をついた。あいつ、杉本のいる前で霧島さんを「愛の裏返し」で罵倒したに違いない。杉本は言葉の裏を読むことを知らない。とにかく否定だけしておく。

「思ってるわけないよ。みんな一緒にさ、卒業したいんだよ。だけど、どうしてもうまくいかないし、そこでどうしても俺は杉本の力が借りたいわけなんだ」

よかった、やっと繋がった。最初は言うつもりではなかった霧島さんの悲運。でも良く考えれば杉本は、大切な女子の先輩や友だちに対してはべらぼうに甘い。その人のためならば、自分がどんな目に遭おうとも、一生かけて守ろうとするだろう。ああ、一時期は上総もその対象に入っていたはずなのだが、いかんせん裏切り者と思われている以上、その復活もままならない。思い出したくないことにちらと触れ、上総はため息をついた。

「とにかく、そういうことで、外に出ような」

手提げを持ち、杉本のかばんもいっしょにかかえ、上総は廊下へ足早に出た。

「何をなさるのですか。荷物くらい私が持てます」

「今日は俺のたつての頼みだから、とことんサービスさせていただきます」

E組の廊下を出た時、二年の女子たちとすれ違った。ネームプレートで気が付いた程度。顔見知りの人ではなかった。上総が杉本のかばんを抱えている姿を見て、またひそひそ話をしていた。知ったことではない。杉本が戸惑うように扉の前で立ちすくんでいるのを、上総は少し立ち止まり、手で呼び寄せた。

「杉本、早く行こう」

今日はまず、これで大丈夫。明日の予定を今のうちに立てておこう。いや、一週間分、金曜までどうやって放課後の予定をつぶしていくか、それが問題だ。小遣いが正直厳しいところだが、いざとなったら父に頼んで増額を頼むのも手だ。校則違反だがお菓子をこっそり家からくすねて来て、どこかの公園で分け合って食べるのもいい。杉本相手なら、会話のねただって困らない。

——杉本梨南を生徒会役員に立候補させてはならない。

お下げ髪に突然触れたくなる衝動が走った。上総は横顔を覗き込むだけでそれに耐えた。

生徒会役員改選立候補者募集の告示が出された。

藤沖が予想していた通り、二年生たちの反応と動きは鈍いらしい。

「とりあえず役員ポストは、無事埋まって来てはいる」

「立候補した奴の受理は進んでいるだな」

上総の問いに、藤沖はコッペパンを頬ばりながら答えた。

「一応しているが、毎度のことながら明日が山場だ。教師連中が誰かをたきつけて立候補させるかもしれないが、そんなのはよくあることだ」

よくあるたって、たった一年しか経験していないのに。

一通り状況だけチェックした後、上総はすぐE組へと向かった。

候補者の名前は後で調べればいい。杉本梨南の名前が入っていなければ、それで十分だ。

「立村先輩、いったい何か御用ですか」

「昨日は楽しかったよな、杉本。今持ってるか、あれ」

別に内緒話にするようなことではない。給食の残りパンを包み、かばんにしまいこんでいる。杉本の隣にしっかりと座り、上総はそのパンを指差した。

「杉本、残したの」

「食べきれません。頭に血が回らなくなります」

「そうか、なら、残り、くれないかな」

「立村先輩、ずいぶん、いやしいのですね」

「給食食べる暇、なかったんだ」

本当のことではある。どうしても今日は先に生徒会室で藤沖と話をしなくてはならなかったからだった。早めに給食を切り上げて、ダッシュで二階に向かい、終わったらすぐ一階に飛び降りて杉本の隣へ座る。一週間、続けてきたこのパターン。どうしても節約しなくてはならないのが給食所要時間だった。一週間、パンは袋を切らないまま持ち帰っている。当然、腹も減る。

杉本はしばらく上総をにらみつけていたが、かばんに手をかけて取り出した。全く手付かずのままだった。

「どうせ家に帰っても、食べる気しませんから」

「感謝する、ありがとう」

上総はちぎりながら口に運び、その合間に話し掛けた。口に入ったまましゃべると、露骨に杉本がご機嫌を損ねるので、そのあたりは上品にするよう心がけた。

「あの絵葉書、どうしたの」

「ありがとうございます」

冷たく杉本の返事が返ってくる。

「私は物をおごられることを快く思わない人間ですが」

「おごるんじゃないよ、だって杉本、欲しそうな顔してただろ」

「確かに私はマイセンの食器の美しさに魅了されましたが」

日常の会話で「魅了」なんて言葉を使うのは、まず杉本くらいだろう。笑いをパンと一緒に噛み殺しながら、上総は耳にささやいた。

「食器の絵葉書なんて誰が買うんだかと思ってたけど自分がな」

「いかにもおごったことを自慢げに話すのはやめていただけませんか、立村先輩」

上総から机を離そうとした。冗談ではない。さらに近づく。そう汚らわしげに見つめることもないではないか。

「私は一言も、『絵葉書を買ってください』などとは申しませんでした。ただ見ていただけです。それを立村先輩が隣からさっさとひったくって、一枚四百円もするものをお求めになられたので、きっとお好みなのだろうと私は思っただけです。まさか私に、無理やり押し付けようだなんて」

「押し付けたんじゃないよ、俺が買いたくなかったから買って、杉本にあげたくなかったからあげたんだ」

「私とは一歳しか歳が違わないのに、そんな不用な出費をしてどうなさるといいますか」 なさる、ときた。いつものパターン、落ち着き払い上総は受けた。

「俺の懐具合を心配してくれてるんだったらそれは大丈夫。この前の日曜、うちの親にこき使われてバイト代かせいできたんだ。だからしばらくは杉本がほしいもの、ある程度のものであれば買えるくらいの」

あえて説明はしていない。土曜の夜、父に小遣いの増額を申し入れた時に、

「それならお母さんに頼みなさい」

と有無を言わず日曜、母のマンション部屋掃除を手伝わされただけのことだ。てっきり五千円くらいもらえるものと腹積もりしていたら、なんと現在使われていない五百円札で、

「あんたにはこれだけあれば十分なのよ。まったく、色気づいてもう。上総、あんた、彼女を大切にするのはいいけど、本能で変なことやらかしたらただじゃ置かないわよ！」

嫌味たっぷりに渡された。どうりでずっしり重たい袋だと思ったものだ。

屈辱に耐えて得た軍資金、せっかくだ、有意義に使わないでどうするというのだ！

「いいかげんになさいませ！」

きっとにらみ据える杉本の大きな瞳。声に抑揚がないぶん眼の隅がひきつるのが目だつ。

「私は男子から物を施されるようなほど、レベルが低くありません！」

「じゃあもし、同じものを関崎からもらったら杉本はどうする？」

この戦術「困った時の関崎頼み」。上総は密かに名付けていた。

「あのお方と先輩とは格が違います！」

「それなら、関崎からもらったものと思って受け取ればいいだろ。ついでに俺のことも関崎と同じだと思えば、別に何の問題もないのではないかなと」

「先輩、少し頭おかしくなられたのではないのでしょうか」

杉本は軽く首を振ると、席を立った。まずい、逃がしてはならない。

「いいかげん私に張り付いてべたべたしたがるのはおやめください。先日、お誘いいただいた件については心より感謝いたします。私もマイセンの食器は眼の保養となりました。しかし、一緒に立村先輩がくっついてこられたせいで、その輝きもだいぶ色あせたことは確かでしょう。しかも、私を見下すような態度まで」

「だから、あれは、俺が杉本に」

「何を考えてらっしゃるのですか。外に出たら出たで、いきなり私の髪の毛を解けなどとおっしゃるし」

「いや、それの方が、杉本らしいなと思ったしさ」

このあたりも、自分がなんでそんな気持ちになったのかがわからないので言い訳しづらい。外に出たら不気味なくらいの夕焼け空が広がっていたので、もし杉本がおさげ髪を解き思いっきりきらきら輝かせたまま歩いたらきれいだろうな、そう思ったから素直に口にただけのことだ。美の問題であって、別に悪意はない。

「学校帰りだというのに、校則違反を勧めて、いったいなんになるというのですか！ もう結構でございます。さっさとお帰りください！」

杉本はさっと指を扉に向けた。と同時に、後ろの方で様子をうかがっていたらしい西月さんと霧島さんが対で近づいてきた。杉本の背中に忍び寄り、それぞれ片手を肩にかけた。西月さんがその片方で杉本のお下げに編みこんだ髪の手先を軽くなで、反対側の霧島さんは上総を何も感情のこもらない眼でちらと見つめた。

——難波がいくら罵倒したって、効果ないって証拠だよな。

「先輩、ありがとうございます。別のところできれいな空気を吸わせてください」

こっくりふたりで頷くのがいまましい。かといって、同期の評議委員・元評議委員の前で、杉本しか知らない会話を交わす根性もない。

それに、女子同士だったらたぶん大丈夫だろう。まかりまちがっても生徒会室へ向かい、立候補の申し込みをすることは思えない。放っておいて大丈夫だ。

「わかった、杉本、放課後また来るから、一緒に帰ろう」

「うるさいです！」

連れ立って静かに廊下へ出た杉本の後姿に、上総はそっと片手を挙げて見送った。

扉が閉まる寸前、ちらと細めの視線を送ってきたのを、上総はしっかりと受けとった。

生徒会役員選挙、立候補受付時間は限られていた。毎年そうなのだが、昼休みと放課後十六時までと定められていた。その時間帯、杉本の行動を狭め、眼を離さないようにすることが一番の問題解決方法だった。

そのためにはまず、放課後学校から連れ出し、四時過ぎまで一緒に話ができる場所で時間をつぶす。昼休みはとにかく時間の許す限り、E組で過ごす。もちろん評議委員としての義務や体育の授業前の着替え、トイレに行ったりする時間は必要だし、そのあたりを見極めなくてはならないが。とりあえず一週間は無事、杉本を生徒会室から引き離すことができそうだった。あと一日だけなんとかかすれば、うまく乗り切れるだろう。

——あとは、藤沖が全役員を信任投票に持っていければ、完璧だ。

うっかりポストが埋まらなくて、その隙間について杉本が「再募集」の時にまた立候補しようとしたらもとの木阿弥だ。だが藤沖もそれほど心配していないようすだったし、あまり心配することもないだろう。

二分間ですること……トイレに寄ることと、次の授業に関係する荷物を先生から預かり運ぶこと……を終わらせ、上総は三年D組の教室へ戻った。扉を開けると一瞬、静まり返り、すぐまたもとのざわめきに戻る。上総が帰ってきたことへの、何か意思表示に違いない。

教卓へ次の授業、社会で使う年表と教科書を載せ、自分の席に着いた。

すばやく美里が目の前に飛んできた。評議委員同士、いつものこととたぶん思われているだろう。無表情で上総は受けた。

「立村くん、生徒会役員選挙が終わってからでいい？」

「なにが」

問い返すと、美里はまたおかつぱの髪の毛をふるふると振った。一週間前ほどいらだっていないのは、口調にも現れていた。聞いただけでは、落ち着いた感じだった。

「菱本先生のお祝いのことと、あと、杉本さんのこと」

「杉本のことか」

機械的に繰り返した。さっき杉本がちらと上総に振り返った瞳を思い出した。

「どうせいろいろあるんだろうから、きちんと聞くけど、菱本先生のごことが終わってからね」

一週間、美里とはほとんど口を利いていなかった。美里が堂々と教室で「菱本先生のお祝いの件で忙しいから！」と言い放ってくれたから、まだふたりの間に亀裂が生じたことは気付かれていないらしい。まだ「別れた」わけではないと思われているらしい。

ただ、昼休みおよび放課後、E組で飛び回っている姿を毎日見られている以上、ばれるのは時間の問題だろう。現に、一瞬の静けさがよぎったのも、上総に聞かれない話をみんながしていたからに違いない。

「でね、杉本さん、大丈夫だった？ 元気だった？」

返事に困った。なんでそんなことを聞くんだろう。

「立村くん、そういえば杉本さんのことが心配だから、デパートに連れて行って元気ださせようとしてるんだよね？ 大変だよね、立村くん、大丈夫、こんど私も杉本さんのこと見てあげるから」

「そんなのはいいよ」

思わず声が荒くなった。元に戻すため、慌てて舌打ちする。

「とにかく、杉本さんのことは、私も心配だから。小春ちゃんやゆいちゃんのこともあるし。だから、あとでそのことも話そうね」

美里の思惑が読みきれず、上総は黙ったまま頷いた。

——つまり、杉本と昨日「マイセン展」に出かけたことを、清坂氏は知っているというわけか。何を言いたいんだろう？

上総は隣の南雲をちょんちょんとつついた。髪の毛が完全に規律委員長とは言いがたい長さに伸びている。「パール・シティ」のIKUにこの数ヶ月でどんどん似てきたと巷の噂だった。なんとなくだが上総もそれには気づいていた。修学旅行前まではそれでもきちんと揃える形でまとめてはいた。今はもう、髪の毛の先をぴんぴんはねるようにしている。南雲曰く「遊び毛って言うんだよ」。似合っているのかどうかはわからないが、上総はあまり真似をしたくないスタイルではある。

「どうしたのりっちゃん」

「さっきまで俺の噂、みんなしてたのか」

小声で、反対隣の古川こずえには聞かれないように、耳に口をくっつけた。

南雲は、嘘を言わない。

「どうしてそんなこと聞きたいのかなあ、りっちゃん」

「聞きたくないわけないだろ」

にやっと南雲は唇の脇にえくぼをこしらえた。上総の肩をつつき返し、

「ちょい耳貸して」

まず息を吹きかけた。

「なんでりっちゃんE組参りしてるのか、ってそれだけ」

それだけわかれば十分だ。

「ありがとう、そういうことだったか」

「けどさ、清坂さんが説明してくれてるから、別になんとも思っちゃあいらないよん」

「清坂氏が説明？」

美里の方を振り返ろうとしたら、南雲にむりやり肩を抱かれた。

「なんかいろいろ、生徒会と評議委員会同士の相談があって、そのからみもあるんだよ、ってこと言ってたよ」

上総はゆっくりと呼吸を整えた。

「それだけか」

「そ、それだけ。りっちゃん安心しなさい。大丈夫、ほんとのことは誰も知らないみたいだよ」

「そうか」

慌てて周囲を見渡した。失言だ。聞かれてないか。

「大丈夫、りっちゃん、心配めさるな」

——ほんとのことって、どういうことだよ！

南雲はそれ以上何も言わず、歴史の教科書を取り出し、蛍光ペンで黒い文字を塗りつぶし始めた。もっと問い詰めたいのに、菱本先生が威勢良く入ってきたため途中になってしまった。

息苦しい時間が過ぎ、帰りのホームルームが終わってから上総はすぐに教室を飛び出した。昼休みと一緒にいた。うっかり天羽たちと顔を合わせたら何を言われるかわからないし、評議委員会もまず、生徒会役員選挙が終わるまではほとんど身動きが取れる状態ではない。

「杉本、いるかな」

杉本の姿はなかった。めずらしい。E組の教室はもぬけの殻だった。

——まずい、生徒会室か？

西月さんも霧島さんも、普段は自分たちの教室で過ごしていると聞く。駒方先生もいなかった。狩野先生はまだ三Aの教室から戻って来ていなかった。まずは大急ぎで二階の階段を駆け上り生徒会室を覗き込んだ。なんとまだ、鍵がかかっている。確か選挙準備期間中から開票までの間は、念のために鍵をかけておくのだと藤沖が話していた。

——と、いうことは、まだ申し込んでいないんだな。

もう帰っているということは考えられない。杉本は曲りなりにも上総と約束したのだ。「明日もどこか行こうな」という上総の言葉に、不承不承ながらも頷いたのだ。つまり「約束」をしたわけだ。約束を杉本は意地でも守る子だ。だから、どんなに上総の言葉が理屈に叶っていなくても、杉本は待っていてくれるはずだ。

あとと思いつく先は、どこだろう。音楽室か、それとも職員室か。

思いつく場所をすべて探しまくることにした。途中三Dの教室の前を通り、貴史とすれ違った

。

「おいおい、立村、どうしたんだよ。ちょうど今、菱本先生のおめでたでさあ」

「悪い、俺は今それどころじゃないんだ」

振り切って、次に図書館、家庭科室、中庭を走りぬけた。杉本がいそうな部屋をしらみつぶしに当たった。三年女子たちが杉本を連れてかくまってやっているような場所を、思いつくまま探していった。

杉本を見つけたのは、中庭を出た渡り廊下の戸口だった。

空がだいぶ曇り加減だった。背中に呼びかけた。杉本が振り向き、九十度の礼をした後、またすたすた歩いていこうとした。追いかけた。

「杉本、ちょっと待ってくれ」

「私には用事がございません。さっさと消えてください」

「いや、俺には用事があるんだ」

また一、二年の男子と女子たちが連れ立って中庭に吸い込まれていく。放課後、図書館よりも呼吸しやすい場所ということで、最近カップルが集まりやすい傾向にある中庭。手っ取り早いということもあって、上総は杉本のかばんを無理やりかかえ、さっさと中庭へと向かった。振り返ってきちんと約束を確認しておいた。

「杉本さ、昨日約束しただろう」

「何をですか」

答えず、広い中庭の端にかたまっている、真っ黒い椅子っぽい石の場所へ杉本を誘導した。どんなに杉本が激昂しても、約束と言う言葉を口にすれば決して逆らわないことを上総は知っていた。

堅くて冷たいところを覗けば、応接間の一人がけ椅子になりそうな大きな石が三個、コの字型に並んでいた。窓からは一年C組の教室札が小さく見える。他のベンチや腰掛けられそうな場所は、学内のカップルたちに占拠されていた。まあここだったら人目にもつかないだろうし、せいぜい気付かれても一年の生徒くらいだ。二年連中や三年の知り合いと顔を合わせたらとんでもないことになる。運がよい。上総は素早く杉本を引っ張り込んだ。

「どこ行ってたんだよ」

「別になんでもありません」

ぴしっと撥ね付けられた。

「教室に行ったけどいないからさ、どうしたのかと思ったよ」

「立村先輩こそ、なんでこんなに私に張り付こうとするのですか」

「話したいことがあったから」

のらりくらしと交わしながら、上総は杉本の顔をそっと見つめた。かなりいらいらしているようすとみた。生理日か、などと予想するのは女子に失礼なのでやめておく。ただ少し、やわらかく扱わないとご機嫌が一気に悪くなるだろう。やはり和風喫茶「おちうど」でおいしいあんみつをご馳走してあげるのが一番よさそう。そこで霧島さんの状況についてとか、E組での様子とか、いろいろ聞き出すのも手だ。

「これから、『おちうど』に行くか？」

まずは、お誘いをかけることにした。

「私はやらねばならない用事があるのです」

生徒会室にだろうか。いやいや、それは「やらねばならない用事」ではなく「やってはいけないこと」だ。上総は聞き流しながら杉本を見つめた。言いたいことを言わせておいて、あとで切り札を出すことにする。杉本の目が釣り上がっている。これは早めに学校から連れ出さないとまずいだろう。

「先輩には関係のないことです。いいかげん解放していただいけませんか」

上総は少し間を置いた。

「杉本、昨日約束しただろ？ 今日是一緒にどこかいこうってさ。杉本も頷いただろう」

「約束」の単語だけをゆっくりと繰り返した。

「でも昨日十分私はお付き合いしたではないですか。デパートの食器展は楽しいものでしたが、立村先輩が相手であった分感動が差し引かれました」

ああわかってるよ、関崎相手でなかったからだろう。相変わらず杉本梨南の想いは水鳥中学生徒会に向かい一直線だ。なぜか関崎に対して苛立ちを感じないのは、あいつの性格のよさを実感しているからだろう。

——わかった、杉本。俺が関崎の合格をとことん祈願してやるからさ。

心の中でささやきつつも、上総は表情を変えないよう注意しつつ笑みをこしらえた。

「ごめんごめん、けどさ、せっかく招待券もらったしさ。無理やりつき合わせてしまったお礼に、あんみつでもご馳走できればなと思った次第なんだ」

「先輩、暇ですね。評議委員長ともあろうお方が、なぜこんなに暇でいるんですか」

「今の時期は中間テストも終わったし、学内推薦も片付いたし、だいぶ楽なんだ。だから、今からゆっくり行こうか」

難物、杉本梨南。なかなか落ちようとはしない。えさでは釣れないし、もう関崎の噂も種切れになりつつある。明日にでも電話して、新しい話題を奴から引っ張り出してやろう。指先をもみしだきながら上総は杉本がひっかかってきそうな話題を検索した。

——そうだ、花森さんだ！　うちの母さんがしゃべってたことあるじゃないか！

現在、とある花街で芸の路を極めようとしている、花森なつめの情報がある。

母に部屋掃除を押し付けられていた日曜、向こうからぺらぺら話してくれた。

杉本とは文通しているらしいが、ここ数日の話題などはまだまだ耳にしていなかったらう。

「ほら、ひさびさに花森さんの話もうちの親から聞いてきたしさ」

「どうしてますか」

思った通りだった。杉本の大きな瞳がくるんと動いた。関崎の話をする時とは違う、赤ちゃんっぽい表情だった。こんな顔を普段からしていればいいのに。

「だから、その話を『おちうど』でしようって言ってるんだけどさ」

少し杉本は首を傾げた。ぷるんとお下げ髪を振った。まっすぐに上総を見つめた。

「先輩、私なんかになぜそんなしつこく張り付くのでしょうか？　立村先輩がお暇で、時間を持て余しているのはよくわかりました。私の数学能力を買って勉強を教えてほしいというのでしたら、授業の合間にいくらでも教えます。ですが放課後、少しここまでしつこくするのは、女子に対しても失礼では 아닙せんか、一種の変態とも申します」

「変態、とまで言うかな」

ぐさりと傷つくストレートの言葉。思わずめげそうになるが、こらえる。杉本とこれからずっと話をしつづけるのだから、ささいなことで傷ついてなんてられない。

「まあ、それも杉本らしくていいけどさ」

「なによりも、先輩、もっと大切なことをお忘れではないのでしょうか」

両手を重ね、背をぴんと伸ばし、目と肩両方に力を込めて杉本の言葉が続いた。

「そんなにお暇でしたら、立村先輩は清坂先輩にもっと尽くしてあげるべきではないのですか」

——やはりそれか。

「立村先輩のように頭が悪くて顔も不細工な男子に、あれだけ一生懸命尽くしてくださる方に対して、失礼すぎるのではないのでしょうか。何よりも、清坂先輩が誤解して泣いてしまわれたら、私の立つ瀬がございません」

上総はそっと杉本の眼を見返した。

おのずと背筋を伸ばしたくなった。

うす曇の雲がだんだん分厚くなり、今にも雨が降りそうな湿り気を感じた。それでいて全身が火照ってくる。自分の見えない心のどこかに、火を点された。ゆっくりと燃え上がっていくのがわかる。

——誰よりも杉本に伝えなくてはならないのに。

一週間ずっと、マイセンの食器やオペラや紅茶の話ばかりしてきた。決して離れてはならないと心に決めて、杉本を追い掛け回してきた。でもまだ、真正面から美里に告げた言葉を話したことはなかった。どこかで忘れてしまいたかったからだろうか。

杉本梨南に伝えるべき言葉は、これだということ。

上総は身体中の熱くほとぼしる炎をすべて、言葉に託した。

「清坂さんとはもう話が終わっている。俺は杉本と一緒にいたいから、こうしている。それだけだよ、杉本」

杉本の瞳は全く揺れなかった。一瞬だけ視線をそらしたが、

「何をふざけたこと言っているんですか」

上総の方をもう一度見返し、あっさり答えた。

「それよりも、花森さんのことですか」

「そう、一緒に行ってくれるなら話すよ」

「本当に、今回だけです。花森さんの話が終わったら私はお金を払い帰ります」

「だから、俺がおごりたいって言ってるだろ？」

背中あたりから誰かに見られているような気配を感じた。周囲を見渡すと、女子ふたりが一年廊下の窓からちらと頭だけ見せてすぐに消えた。気のせいだろうか。どちらにしても、これ以上の話は杉本とふたりきりで語るべきもの。かりそめの王子として姫をエスコートする最後のひと時、少しでも長くふたりでいたかった。

花森なつめの話を一刻も早く聞きだしたいのだろう。杉本はいそいそと玄関まで急ぎ、素早く靴を脱いだ。そろそろブレザーだけでは物足りない、ベストを中に着込みたい季節だった。さっきまで燃え広がっていた上総の中の炎も、少しとろ火になったようだった。

杉本梨南は上総が砂利道に降りるのを待っていた。

ゆっくりとお下げ髪のコムをはずすしぐさをした。一方、もう片方と黒いコムを取り、胸ポケットに納めた。まだ三つ編みに形作られたままの、胸のふくらみにぶつかる程度の髪を、片方ずつ広げた。なめらかにその髪が風になびいて広がった。上総をまたぐいと、にらみつけるように見つめた。

「杉本？」

「先輩はこういう形がお好きなのでしょう。花森さんの話を教えてくださるお礼に、今だけは立村先輩の好みの髪にいたします」

くい、と唇をかみ締めたまま、杉本がまっすぐ校門まで歩いていく。

——やはり、似合うよな。

決して杉本の前では口に出せない言葉を、上総は雨待ち雲に呟いた。

噂になるのは覚悟の上だった。美里の機転で今のところ上総の意味不明な行動をごまかしてもらっているようなもの、おそらく生徒会役員選挙後にはすべてが明らかになるはずだ。その後のことを上総はまだ、考えていなかった。

——とにかく、杉本を一切かかわらせないようにすれば、すべてはなんとかなるはずだ。あとでまた考えればいいさ。

「あのなあ、立村、お前って意外とお気楽野郎なんだなあ」

生徒会役員選挙立候補締め切り最終日、上総は天羽に呼び止められた。

機嫌は悪くなさそうさ。E組へ行こうとする上総に、片手をかけて、

「とにかく明日、お前の口から評議の連中に説明してくれるんだよなあ」

「もちろん、そうするさ」

とっくに情報は流れているはずなのに、天羽のひょうひょうとした態度は変わっていない。本当だったらもっと「あのな、立村、もう少し考えろよな。お前は評議委員長なんだぞ！ 本条先輩に申し訳立たないぞ！」くらい言われそうなものなのに。

「用事あるんだろ、さっさと行けよ」

一刻も早くE組へ駆け下りたい上総の気持ちをあっさり汲み取ってくれた天羽。上総にはそこも腑に落ちなかった。

詳しく考え込むひまなんてない。まずは杉本を押さえねば。

「杉本、いるかな」

教室の扉に手をかけ、上総はそっと覗き込んだ。杉本だけだった。いつも侍女のように見守っている西月さんの姿はなかった。

杉本はちらと上総をにらみつけた後、黙って窓辺に佇んだ。全身、隙だらけ。安心して傍らに立った。

「昨日は、ごちそうさまでした」

「いや、たいしたことないよ」

空を見上げたまま杉本はお礼を言ってくれた。昨日の放課後、必死の思いで「おちうど」へ連れて行き、抹茶クリームあんみつをおごったかいがあった。上総もつられて杉本の視線を追い、真っ黒く染まった雲の色に見とれた。

「これから台風が通過するそうです」

「そうなんだ」

今朝の天気予報でそんなことを聴いた記憶がある。傘はもちろん持参している。

「かっぱでお帰りになった方がよろしいと思います」

杉本はいつもの一本調子な声で、つぶやいた。

「そうだな、杉本もそうしたほうがいいと思うよ。歩きだろ」

杉本の家は徒歩で通える距離だった。自転車通学をしない主義の家庭に育っている。

「かさが使えないと大変だろ。帰り、送るよ」

「結構です」

それでも杉本の口調には、かすかなやわらぎが感じられた。昨日までの会話には一切ないものだった。厳密に言うと関崎の話題を持ち出すことでもなければ、上総には得られないものだった。

「立村先輩、お伺いしたいのですが」

「なに」

「先輩は、評議委員長として評価されることがありましたか」

視線を向けず、台風待ちの重たい空を眺めながら杉本は尋ねてきた。

「評価？」

「はい、先輩は評議委員長でなければ、評価されることもなかったはずでしょう」

——評価されたのか、俺は。

上総はそっと横顔を眺めた。視線を交わそうとしない杉本の耳元へ答えた。

「評議委員長になったって、評価なんてされなかった。それでいいと思っている」

言葉にしたとたん迫ってきた息苦しさに、上総はかろうじて耐えた。

「そうですか。評価されなかったのですね」

「杉本は評価されたいと思ってる？」

「あたりまえのことをお聞きにならないでくださいませ」

また違和感のある言葉遣いをする杉本に、上総は次ぐ言葉を見つけられずにいた。

——俺が杉本を評価するだけだったらだめなのかな。

杉本がなぜ、生徒会や評議委員会のような、青大附属における肩書きにこだわるのか、わからないでもなかった。

この学校が少し特殊なもの、輪をかけているに違いない。

青大附属において評議委員会が実質的学内での権力を持ち続けている現実と、生徒会という場所が曲がりなりにもトップクラスの生徒の集まりという事実と。そしてその肩書きさえ手に入れば、どんなに役立たずの人間でも「あの評議委員長が」「あの生徒会長が」と丁重に扱われるわけだった。上総も評議委員長という肩書きを、思いがけず手に入れた時の高揚した気持ちを忘れたわけではなかった。天羽や新井林のように、明らかにトップクラスの男子生徒がそろっている中から自分を選んでもらえるなんて、これはひとつの奇跡だった。

——でも、結局は変わらないんだよな。

「評議委員長」という名の肩書きはただの単語にすぎない、そう気付くのも早かった。

顧問の先生も、高校に進んだ先輩たちも、またクラスの女子たちも。

「評議委員長」に選ばれたからといって、今まで以上の評価を上総に与えてはくれなかった。

「頼りない、なに考えてるんだかわからない」「美里も早く振っちゃえばいいのにね」「本当は天羽くんみたいな男子がトップに立つべきだったんじゃないの」「本条が意地で推した弟分だからなあ、しょうがないだろ。本条の顔を立てねえとな」

立村上総に対する評価の厳しさを、自分自身気付かない振りをしてきたのかもしれない。

肩書きをもらえても、結局、上総は自分自身を評価されるだけのことだった。

——ろくにものも数えられず、成績も運動能力も人並み以下、人をひっぱる力もない、結局は良くできる仲間たちがフォローに回ってくれるからなんとか面目を保っているようなものなんだしな。天羽や清坂氏がいなければ、今ごろ俺は。

振り返れば、四年前の泣き虫だった自分がじっとこちらを見つめている。

寒くもないのにひとり震えながら、カーテンの陰でおびえていた自分がある。

——評議委員長？ だから？

せせら笑う声と一緒に泣き顔が浮かぶ夜。

「杉本、俺は杉本のことを評価しているつもりだけだな」

上総は杉本の横顔に直角に接した。

「本条先輩は俺のことを過剰評価してくれたんだ。だから、今までやってこれたんだ」

「本条先輩がですか」

杉本の声がかすれていた。

「本条先輩が評価してくれれば、他の生徒たちに何思われたって俺はかまわないんだ」

「私は立村先輩に評価してもらえてもちっとも価値を感じませんが」

——関崎だけか。

「それなら、どうすれば杉本に価値、認めてもらえるかな」

「今答えなくてははいけませんか」

ようやく杉本は上総の目を見つめてくれた。じっと見入った黒目がちの瞳には、かすかな揺れが浮かんでいた。

「急がないよ」

「そうですか」

杉本は教室の扉へすぐに視線を逸らし、

「西月先輩がいらしてます。失礼します」

直角に右向け、右とやったあと、小走りにE組の教室から出て行った。黒い雲が薄く、ゆっくりと広がっていた。

杉本梨南がほしがっているものが何か、上総はずっと前から知っているつもりだった。

——トップクラスの人間から与えられる、最大級の評価。

成績は誰にも文句を言わせないものなのに、誰一人認めてくれない。

「人格こそ大切、成績だけがよくても人間としては最低」と軽蔑される日々に、唇をかみつけていたのだろう。

そして杉本から見れば、トップクラスの人間とは新井林健吾であり、佐賀はるみでもある。

このふたりに最大級の評価をされない限り、杉本梨南は自分を認めることなんてできないだろう。本人がどう思っているかが、周囲からはその姿が丸見えだということも気付かずに。また

、新井林健吾も佐賀 はるみも、一滴たりとも「評価」を与えたいとは思っていないだろう。ふたりがけちなわけではない。ふたりにとって、杉本梨南は魅力のない存在だから、それだけだ。

だから杉本には、あのふたり以外のトップクラス人間からどうしても高い評価を与えられる必要があった。

今にも飢え死にしそうなほど、欲している。

——せめて関崎が与えてやればいいのにな。

その希望も今はほとんど残っていないことを上総は知っている。

——せめて俺が、関崎くらい能力があればな。

何が食べたくて何を着たいか、上総の目にはすべて見えているのになぜ、杉本に受け取ってもらえるだけの能力が自分がないのだろう。どうすれば、杉本は上総の言葉に価値を見出してくれるのだろう。生徒会に入ったって、誰も評価してくれるわけでもなく、軽蔑する人間が増えるだけなのに。上総でよければ、杉本のほしい誉め言葉はすべて、毎日、いや毎時間言ってやれるのに。

上総は教室から出た。杉本を囲んで西月さんと霧島さんが何かを話し掛けている様子だった。あのふたりがそばにいる限り、生徒会室へ駆け込むことはないだろう。軽く手を挙げて、上総は三階に向かい階段を昇り始めた。

いつもと変わらぬ時間が3Dの教室で過ぎた。あと一時間だけ、杉本の時間を上総の手で押さえておけばいい。

六時間目の鐘が鳴った。

「先生、今、少しだけいいですか」

いきなり美里が挙手をした。帰りの会の最中だった。なんだか顔色も優れない菱本先生、少し寝ぼけ眼で、

「おお、どうした清坂」

無理に明るくした笑顔を見せた。そろそろ結婚式も近いとあって、ストレスたまっているんだろう。上総の本心は「どうせ自業自得」の一言でしかない。

「来週のロングホームルームなんですけど、そろそろ委員も後期改選の時期なので、少しみんなから意見を聞いておきたいなと思ってなんです。評議委員会もそうなんですけど、生徒会とか、規律委員会とか、その他みんな」

「そうだな、でもあれだろ、どうせ後期たって、お前らはもう予約済みなんだろ」

笑いが起こった。ほとんどの場合、一年からの持ち上がりパターン……例外あり……という現実を教師もよく理解している。

「そうですけど！ でも、何が起こるかわかんないし！ だから来週のロングホームルームは、私たちに仕切らせてほしいんです！」

——私たち、か。

いつもの美里だったら「評議の私たちに」とか「立村くんと私に」とか言うはずだった。今まではそうだった。ささいな言葉の違いだが、上総にはその意味がつつと通じた。そうだ、「私

たち」だと相棒が立村上総でない可能性も大だということだろう。

特別反応を示した奴はひとりもいなかった。鈍感教師の菱本先生がもちろん気付くわけもない。こくこく頷き、ちらと上総の方を見やった。当然、上総は一切無視した。

「わかったわかった、そうだな、まずは三年折り返し地点だしな。よし、言いたいことをみんなで言わせるとするか」

「ありがとうございます！　じゃあ、これから放課後、ちょっと相談に乗ってくれるみなさん、残ってくれますか」

上総は時計をじっと見つめていた。もちろん、残る気はまったくない。美里も上総の方へ身体を一切向けなかった。

「よっし、俺、乗ったぞ！」

黙っていても、ちゃんと羽飛貴史がいるじゃないか。元気良く両手を挙げて意思表示をする奴が。

「美里ちゃん、私も手伝うね」

とっくの昔に話を煮詰めていたのだろう、奈良岡彰子もふっくらした頬を緩ませて片手を挙げた。

「うれしい！　ありがとう！　じゃあよろしくね。他のみんなもいいかな？」

このクラスの流れとしては、美里と貴史のふたりが提案し、その上に南雲や奈良岡、その他の連中が乗っかっていき、いつのまにかうまく行っているというパターンがほとんどだった。大抵の場合、上総の役割は仔細を詰めたり事務を片付けたりする程度だった。だから、ほとんど反応を示さなくても対して気になる人はいないはずだった。

——どうせ俺はいてもいなくても変わらないんだしな。

今はそれがプラスに働いている。上総は帰りの会が続いている間にかばんへ教科書を放り込んだ。隣の南雲を見ると、やっぱり同じようなことをしているではないか。ちなみに古川こずえはしかめっつらして上総と南雲を眺めている。何か言いたげだが、言わない以上こちらも答える義務はない。「なぐちゃん、今日残るのか」

「いや、ちょいとやぶ用で」

南雲はいつものさらっとした笑顔で答えた。やはり奈良岡彰子と合同で作業するのを避けている、そんな気がした。

「りっちゃんも急いでるんだろ、さっさと抜けたら」

「そんなわけいかないだろう」

思わずため息が洩れた。帰りの号令は評議委員である上総の担当だ。この二語を発しない限り、教室からは飛び出せない。

「起立・礼」

さようなら、と続く挨拶までの間が、上総には長く感じられた。

すでに廊下には人が乱れていた。階段を駆け下りる途中、他クラスの先生から呼び止められること三回。めったにないことだった。多すぎる。休止符が否応なしに入るたび、上総は片手を強

く握り締めた。うっかり「悪いけど今忙しいんだ」と交わせない内容ばかりだった。

「台風が来ているからみな、早く帰りなさい」

——それなら早く解放してくれよ。

上総が一階に下りて、E組教室に到着したのは、帰りの会が終わって三分後だった。

「杉本、いるかな」

いつものように脳天気な声をかけながら、扉を開いた。ふたり、女子生徒がいた。良く知っている二人だった。

「何か用なの」

隣り合っていたのは西月さんと霧島さんだった。暗い声で尋ねてきたのは霧島さんの方。西月さんは額を出したまま上総をじっとにらみつけていた。嫌な予感どころの話ではなかった。杉本がないのだ、当然だ。

元評議委員と現評議委員のふたりは、じっと上総を見据えている。

「あのさ杉本どこ行ったか知らないかな」

「知ってどうするの」

霧島さんの重たい声は、じわじわと腹に響いた。ヒステリックに叫ぶでもない。あの台風交じりの空に似ていた。

「いや、台風だからさ」

「杉本さんをばかにするのもいいかげんにして」

霧島さんと西月さんは立ち上がり、上総の両脇にそれぞれ回った。両手に花、とは決して言えないこの状況だった。なんとかしなくては。乗り切り方を考えたが、思いつかない。いや、この二人に用はない。杉本を捜さねば。

「ばかにしてないけど、あのさ、杉本どこに行ったか知らないかな」

上総は繰り返した。少しいらだってきた。ふたりを思いっきり払いのけたい衝動が走った。そんなことできるわけもない。じとっとしたまなざしに胸がむかむかしてきた。

「杉本さんをこれ以上傷つけないで」

感情のこもらない声で、霧島さんは答えた。ふたつわけにした子犬のような髪の毛が、その口調とは不釣合いだった。

「杉本さんをなぜ、立候補させちゃいけないの」

「立候補って、杉本そんなこと言ってたのか！」

一瞬身体がこわばる。でもかまっていられない。霧島さんの隣で瞳に涙をいっぱいためた西月さんが頷く。霧島さんがさらに言葉を発した。

「杉本さんは、私たち三年女子の惨めな思いを訴えたくて、生徒会に立候補しようとしているの。どうして立村くん、杉本さんが女子だからって理由で立候補を止めようとするの」

「そんなこと、言ってないだろ。そんな誤解してるんだったら解かねばなんないし、だから杉本、どこ行ったんだ？」

とうとう西月さんの両眼から涙があふれ出た。二列、つーっと流れ落ちた。

「杉本さんのように頭がよくて、かわいい子がなんで、男子に邪魔されなくちゃいけないの。生徒会長になっちゃ、どうしていけないの。私みたいに頭の悪い子だったら存在する価値なんてないけど、杉本さんはもっと高く評価されていていいはずよ。どうして、邪魔するの」

埒があかない。ぼろぼろ涙をこぼしたまま見つめつづける西月さんを、霧島さんはそっとひきよせるようにして、

「女子が生徒会長になっては、どうしていけないの」

震える声で、訴えた。

このふたりに何を言ったって今は無駄だ。上総はふたりを振り切り教室から飛び出した。追いかけてこようとする霧島さんを手で軽く押しおきのけようとした。止めたいのか、上総の腕をつかもうとする。一応は男子の腕力、突き飛ばしたら怪我させるかもしれない。そのくらいの理性は働いた。と、そこへ見覚えのある男子がひとり立ちすくんでいるのが見えた。小柄な男子で、どんぐり眼。

——英語で二番のあいっだ。

上総はすばやくそいつに近づき、できるかぎり早口でささやいた。

「今、西月さんが泣いてるんだ」

最後まで言う間もなく、その男子がE組の教室へ血相変えて飛び込んでいく。霧島さんがそちらに気を取られている間に、上総は一年教室を一気に駆け抜け、生徒会室に一番近い階段を二段とびで駆け上がった。

生徒会室へ様子見しようとした。引き戸の側には、現二年男子生徒会役員が待ち構えていた。上総を認めると「評議委員長」宛ての礼をした。

「杉本は来てないか」

「大丈夫です」

なにが大丈夫なのだろう。藤沖会長がどういうスタンスで見ようとも、やはり生徒会役員にとって杉本 梨南は唾棄すべき敵。

ちりちりと焦げていく胸奥の何か。上総は頷くことで言葉を飲み込んだ。

ここで待っていればたぶん、来るだろう。

時計を覗き込んだ。思わず時間を食ってしまった。今三時五十分を過ぎたところだった。あと十分、杉本がどこかで足止めされていれば、すべてが丸く収まるはずだ。職員室か、それとも友だちか。

——来るな、絶対に来るな。

——ここには、杉本を評価しようとしてくれる奴なんて、誰もいないんだ。

「会長、呼びますか？」

「いいよ」

返事を待たずに生徒会役員はそっと引き戸を開けた。その隙間から、大人数の気配が感じられ、女子の声で誰か、

「佐賀さん、来てくれてありがとう」

話し掛けているのが聞こえた。

もう疑うことはない。時計の針が四時を示すまで、上総はここから離れないことを決意した。

「まずい、すいません」

二年教室方向をじっと眺めていた生徒会役員たちが、いきなり大声をあげて生徒会室へ飛び込んだ。上総もつられて身を乗り出した。二年C組付近で立ち止まっている女子がいた。上総の顔を見つけ、一步退こうとし、その後ものすごい勢いで強行突破しようとした。

昼休みとは違う髪形だった。お下げだったのに、今はポニーテールだった。いつ直したのだろう。

「杉本、やめろ！ こっちに來い！」

手を伸ばし、腕をつかもうとした。変態と言われるかもしれないが、いざとなったら背中に抱きついてもいい。つかみ損ねて思わず、つんのめりそうになった上総の間隙を突き、杉本は生徒会室の引き戸を一気に開いた。

扉の向こうには、生徒会役員を含めた男女が群れていた。杉本の長いポニーテールが鼻先に触れそうだった。このまま無理やり階段から引きずり降ろせばいいのに。杉本の立ち位置はちょうど、戸の敷居すれすれだった。まだ入っていない。上総の方を、いつものように九十度きちっと回って向きなおし、

「いいかげんにしてください。私にしつこく付きまとうのは一種の犯罪です」

言い放った。

——犯罪？ どうせ俺は、杉本からしたら変態だろう。

「変態」扱いとっくにされている。だったら「犯罪者」扱いされたって痛くも痒くもない。

「だからもうやめろって言っただろう、杉本はこっちにいる方が絶対にいいんだ」

「要するにこうやって私がやろうとすることを、先輩は邪魔しようとするのですね」

「時間がありません。消えてください」

「だから入るなって言ってるだろう」

両手で杉本の右腕を引っ張った。振り払いはしなかった。まだ脈はある。

「立村先輩、どうしてそんなに私が立候補するのを止めようとするのですか。私だけではなく、先生たちも高く評価してくれたからこそ、私は」

「違うんだ、だからこっちこい。説明してやるから」

何度言ったらわかるのだろう。杉本の求める評価と先生たちの考えている本音とが天地ほどの差があることを。あと十分、早く過ぎろ。腕時計の針を早く回したい。杉本の腕にかかっている細い銀色の時計をひたたくり、四時に合わせて終わらせたい。

「時間がなくなります。あと十分ありますね。失礼します」

「だから話を聞けよ」

「時間がないのです、だから離してください。先生を呼びますよ」

「呼びたいなら呼べよ。聞かれて悪いことなんてない。全部説明するよ」

あと十分だけ、なんとか口げんかで流したい。すばやく計画を変更し、上総は荒っぽい口調で杉本に言い返した。日常、決して使わない言い方だし、ふだん杉本相手にそんなしゃべり方しようものなら一発で縁を切られるだろう。それはわかっている。でも、杉本の触れてはいけない部分を露骨に触ることによって、時間の感覚を失わせることによって、たった十分が風のように去るだろう。あとで怒鳴られようが殴られようが、かまわない。その上で、責任を絶対取る。

「杉本、お前何も知らないんだろう。いいか、駒方先生も狩野先生も、杉本を落とすために立候補させようとしているんだ」

上総はまず、事実をさらっと述べた。杉本の顔にほんの少し、迫るものが消えた。手ごたえあり。

「それは先輩の勝手な思い込みです」

「俺だけならそう思うだろうな。けどさ、それは生徒会の人たちも、評議も規律も、どの委員会もすべてわかっていることなんだよ」

「何をふざけたことおっしゃるのですか。先輩でもあるまいし」

「知ってるだろ、生徒会が過去三年、全部信任投票だったってこと。つまり、みな立候補の段階で決定する形になるんだ。たぶんほとんどの役職は埋まっているはずだ。立会演説会はほとんど信任するかどうかを決める場だったってことも、わかってるよな」

「立候補していけないわけがないではありませんか。だから生徒会役員告示というものがあるのです」 一本調子の声が少しだけトーン高くなった。いける、大丈夫だ。平常心をなくすなど言い聞かせる。「そうだよ、これが建前なんだ。杉本、もしもだよ、自分が投票する立場においてだよ、今まで生徒会役員をやってきた人たちが立候補してきたのに、知らない奴がいきなり顔を出して、安心して票を入れられると思うか？」

「できのよしあしです」

「杉本、お前自身、どう思ってる？ 立候補して、評価されると思うか？」

「それはやってみなくてはわからないではありませんか」

杉本は首を振った。太いポニーテールが激しく揺れた。震えている。上総は畳み掛けた。

「新井林や佐賀さんが、杉本のこと、評価してくれてると思うか？」

「あいつらには私の価値などわからないのです」

「そうだよな、わからないよきっと。けど、全校生徒も杉本の価値を理解しているとは限らないよ。二年 B組の人たちだってそうだろう。杉本がいなくなってもちっとも引き止めたいと思わなかっただろ。新井林と佐賀さんが評議になって喜んでるだろ。水鳥中学の人たちだってさ」

これは言うべきか、迷う。一瞬のためらいの後、上総は口にした。

「佐賀さんのことを高く評価して、ぜひ水鳥中学の交流会にきてほしいって言ってたんだよ。杉本の時はまったく反応なかったのにさ」

生徒会室には佐賀はるみがいる。

もしかしたらここでの会話を聞き耳立てているかもしれない。すべては計算づくだった。

「全校生徒の評価など、ひとりひとり確認したわけでもないのに」

「そうだよな、直接杉本と話をした奴はほとんどいないものな。けどさ、そうなんだよ。確認しなくたって、リーダーになる素質のある奴にはみな、黙っていても支持する人が集まってくるんだ。俺を見ればわかるだろ。俺が評議委員長だってことみんな知ってるのにさ、重要な話はみんな天羽に行くだろ。へたしたら新井林に持っていく先生もいるんだ。水鳥中学だって俺と直接接したいといってくるのは関崎だけなんだ」

無意識だった。杉本のほどけた口元があどけなかった。

「杉本、どういうことかわかるか。どんなに立派な肩書き持ってたって、人はみんなそいつの価値を見抜くんだ。杉本が生徒会役員になったって、新井林や佐賀さんが杉本を見直してくれる保証なんてないんだ」

自分を攻め立てる幼い上総の視線。突き刺さった。

——結局みんな、天羽に流れるくせに。

——結局俺は、本条先輩が無理やり推しただけの評議委員長なんだ。

「昼休みも言っただろ。こんなできそこない評議委員長がなぜ、なんとかやってるか」

声が裏返る。時計盤を覗き込む余裕なんてない。杉本の瞳をただかじりつくように見つめるだけだ。「本条先輩が認めてくれたってことだけが、俺にとってはたったひとつの支えなんだ。あの本条先輩が、新井林や天羽や難波や轟さんや更科や清坂氏を差し置いて、俺を評議委員長に選んでくれたっていう、それだけでやってきたんだ。他の奴らよりずっと価値のない俺みたいな人間を、認めてくれた相手を裏切る ことなてできないよ。杉本、約束、破ることなんて、できないだろ。それと一緒にだよ」

自分の声は、評議委員長の立村が発しているものではない。いじけて泣いてばかりいた、泣き虫上総の声だった。

「全校生徒が杉本を認めなくたってさ、俺が百パーセントの価値をやるって言ったら、どうしてもだめか？」

一歩、もう一歩近づいた。

「生徒会役員にならなくたって、E組にいたって、何したって、俺は杉本の価値を毎日認めるから。それだったらだめか？」

「だから、清坂先輩にあんな失礼なことをおっしゃったのですね」

杉本は片手をポニーテールの根元に触れながら、きりりとしたまなざしのまま答えた。

「霧島先輩がおっしゃってました。私を生徒会役員に立候補させないために、立村先輩は清坂先輩にひどいことをおっしゃられたと」

「そういうんじゃない、それはつまり」

もういい、本当のことを言ってしまうおう。周囲に人垣ができていいる。評議委員長が生徒会室で、かの問題児である杉本梨南を相手に意味不明なことばを口走っているのだ。明日はもう噂だろう。台風のごとく、駆け巡る。

「女子がトップになるのは許せないことだからという理由で、男子の誇りを傷つけられるからと

いう理由で、私を無理やり、ただの恋愛沙汰好きな女子として、見下すために」

「ふざけるな、違うって言ってるだろ！」

霧島さんはいったい何を勘違いしていたのだろう。怒りなのかそれとも絶望なのか、すべてを吐き出してしまいそうだ。

「俺をそこまで腐った人間だと思っていたのか！」

時が止まった、一瞬言葉が詰まった、その時だった。

「あんたたち、さっさと消えなさいよ！」

生徒会室から、見知らぬ女子が杉本の真っ正面、鼻先へ指を突きつけた。

三角屋根を思わせる髪型の、細い目の女子だった。胸ポケットの名札には「風見」とあった。

杉本梨南の目の前で、指を突き刺しわめき出した女子を、上総は記憶から呼び起こそうとした。二年であることは間違いない。評議、規律、その他の委員がらみで記憶に残っている女子だったかどうか。こんな個性的な髪形している女子には、全く思い当たる節がなかった。全く荒れようとしないう杉本の態度に安堵しつつ、上総は様子を見守った。片手を杉本の腕に置いたままでいた。

——風見さん、ってどこのクラスだろう。

「あんた、悪いけど立候補して、勝てると思ってるわけ？ あんた自分が先生に評価されて立候補するつもりでいるだろうけど、大嘘だってことここにいる生徒 会関係のみんな知ってるって知らないわけ？ ほーら、やっぱりだまされてるのね。みんな知ってるのよ。あんた以外みんなよ。へたしたら一年だって知ってる わよ」

「何様のつもりかしら」

全くトーンの変わらないまっすぐな声が響く。

大丈夫だ。ぶっちぎれてぱちんとひっぱたくなんてことはないだろう。いざとなったら無理やりでも引き離そう。腕に当てた自分の手に力が入った。

細い目でその女子はじっと杉本をにらみつけた。鼻の穴を膨らませるように笑った。

「杉本って言ったわよね、あんた。つくづく思うんだけど、あんたオペラが好きだとか音楽が好きだとか勘違いしたこと言ってるけど、自分の声、一度でも録音して聞いてみたことがある？」

息を呑んだのは上総だけだったようだ。杉本は全く揺れなかった。

——誰も口に出さないことを、どうして。

「とてつもない音痴だってこと、みんな知ってるからあえて知らないふりしているのにね。だからピアノを習おうとしても覚えられなかったんでしょ」

上総は杉本の横顔を覗き込んだ。動揺しているかどうか、事実を明らかにされたショックが浮き上がっていないかを読み取ろうとした。いつもだったら必ず、震えんばかりに切ない表情が浮かびあがるのに、全く驚く気配もなかった。上総の中に、ひとつの答えが出た。

——杉本は本当に、自分が音程を正確に取れないことに気付いていないのか。

「有名よ。音程取れないからでしょ？」

そと後ろの連中が反応するさまを覗き込んだ。いつのまにか風見という女子の背後には、藤沖生徒会長が立ちはだかっているのが見えた。様子をうかがいにきたのだろうか。生徒会長の権限を持ってこの女子を黙らせてほしい。でも自分だって、評議委員長長の権限を振りかざしても効果ないとわかっているのだ、しかたない。

「あの、学校祭にきた男子タイプがあんたにはお似合いなのに、何馬鹿みたいに頭のいい人ばかり追いかけてるんだかって、みんな馬鹿にしてるのよ。それも知らないで可哀想に。この前学校祭で追っかけてくれた男子いるでしょう。ああいう男子だったらいくらでも好きになってくれる

のにねえ」

側に上総がいることを全く見ていないかのようだった。

「立村程度の相手があんたにはお似合いなのよ。こいつみたいな奴を相手にして、人目につかないところでこっそりいちゃいちゃしてればいいのよ。ハルやナミーや他の人たちの迷惑にならないところでね」

呼び捨てされるまでは。

——一応、二年だよな、この子。

きりっと上総の方をねめつけた後、風見という名の女子は、杉本を指差したその手を上総に突き刺した。ちらと目が合った。ぱしっと音がしたような気がした。

かすかに杉本は反応した。上総の手を振り払うようにして、抑揚のない声で答えた。

「それは失礼じゃないかしら。私を馬鹿にしているとしか思えない言い方だわ、それにどんなに不細工で頭の悪い先輩であろうとも、一年上である以上は先輩と呼ぶべきよ」

かばってくれたのだろうが、上総としては全く嬉しくない。だけど言い返せない。いったいなんでこの女子は、一応評議委員長たる人間を呼び捨てにしようというのだろう。何か、意味があるはずだ。ここで「ちょっとそれは先輩に対してよくないんじゃないのか」と言い返したくなるのを、ぐっと飲み込む。

風見はわざとらしくせせら笑った。舞台に立っているようにだった。

「あんた馬鹿ね。先生たちがあんたを立候補させようとした理由、本気で能力を買ってくれたからとおもいこんでるわけ？ あんたの鼻をいいかげん明かしてやるために、落として痛い思いさせて反省させるために決まってるじゃないの。そんなこともわからないわけ？ きっと駒方先生けしかけたんでしょねえ。学校祭の喫茶店やった時みたいに、すごいすごい、あんたしかできないとか言って。悪いけどそんなの、他人に迷惑を掛けさせないようにするためならいくらでも嘘八百言えるのよ。わかってないわね。ほんとにあんた、十四歳？ 病院に行って調べてもらった方がいいんじゃないの？」

そっと杉本の横顔を伺うと、唇を突き出すようにして何かをいおうとし、ふと上総の手に気がつき改めて肘を振った。離したくなかった。上総は指に力を込めたまま、杉本の側に張り付こうとした。とたん全力で突き飛ばされそうになり、尻餅をつく寸前でなんとかこらえた。その際に杉本は風見の前に立ちはだかり、冷たく告げた。

「時間がないわ、どいて」

熱いのは風見の方だった。さっきまで上総が抑えていた杉本の腕を力いっぱい殴りつけた。その場所を杉本は片手で抑えるようにし、きゅっと見返す。慌てて上総も背後に立つ。

「どかないわよ。先生たちの狙い通り、悪いけどあんたが立候補した段階で落選確実のシナリオはちゃーんと組まれているってわけ。今、空いているポストはね、書記と副会長だけどそんな人の下に立つようなのいやなんでしょ。わかってるわよ」

「選挙は役員を選ぶために存在するのよ。対抗馬が出てどこが悪いわけ。こんなところで自由な選挙を邪魔して、いんちきをやり遂げようとするなんて、腐っているわ、生徒会」

「会長に立候補する？ ふうん、そうなの。勝ち目ある？ 悪いけど会長候補はね、今のところ一年の霧島くんか、もしだめなら副会長の渋谷ナミーよ。いい、どっちが立候補しても、あんたがぼろ負けするのが目に見えてるわけよ」

風見は左端で言い合いをしている男子と女子ふたりを指差して見せた。その影に佐賀はるみが隠れている。上総にはそれが見えた。見られていると気が付いたのか、わざと腰低く隠れようとしている。

「そんなことないわ」

言いながら、杉本の視線はちらちらと腕時計の方に向かっていた。

——この風見さんって人、何が目的なんだ？ まさか藤沖の差し金かよ。

いや、そんなわけがない。応援団志望の藤沖会長が、いくら杉本の立候補を歓迎しないとはいえ、手下を使って追っ払うなんて姑息な真似をするわけがない。風見の真後ろで仁王立ちしている藤沖に視線を送った。目が合った。無言だった。

——もしかして、あの渋谷さんって女子、あの人か。

黄色いヘアバンドをした額の広い女子と一緒に、やたらと顔の整った男子が、

「だから言ったでしょうが、俺のどこが会長に問題あるっていうんですか！」

「だから私とさっき話したじゃないの！」

言い合いしている。たぶんあいつが、霧島さんの弟だろう。一度しか顔を見たことないが、霧島姉と瓜二つ、すぐにわかる。

——つまり、杉本を会長に立候補させないために、渋谷さんという女子が風見さんに杉本を攻撃させたってわけか。

わからない。たったひとり、どう判断すればいいのだろう。明らかなのは、杉本がこのままでは口撃の末、大恥かかされて追い出されるだけだという事実のみ。風見という女子は杉本が見せる本当の姿をすべて見抜いている。誰もが口に出さないように気遣っていたことを、あらわにしていく。しかもここは、杉本が入るべき場所ではない。誰もかばう人もいなければ、必要とする人もいない。ただの異分子だ。杉本が必死に纏おうとしてきた、「完璧な自分」をあっさりと剥ぎ取られてしまうだろう。風見にはそれだけの力が十二分にある。それに、さらに、奥には。

——絶対に杉本が勝てない、あの人がいる。

「杉本、だからやめろ！」

もう一度上総は杉本の腕を引っ張ろうとした。こうなったらあとは力づく。手を伸ばした瞬間

「そうだ、言っとかなくちゃ」

かすかに笑みを浮かべると、風見はゆっくりと上総を指差した。

「あんたのことをね、私は先輩だなんて少しも思っていないから、隠したいだろうけど言わせていただくわ。悪いけどお似合いすぎるわよね」

——あんたってことはないだろ、いくらなんでも。

上総は制そうとした。もう、残り時間はわずか。風見に言いたいことを言わせておいて、その間に上総が杉本を抑えていれば時間稼ぎができる。それまで耐えようと決めた。

耐えられると思っていた。

「私、品山小学校に五年の時までいたのよ」

——品山小学校。

上総の、すべての謎が解けた。

「いっこ上の、救いようもないくらい泣き虫で、犯罪者で、人でなしで、あの浜野先輩を再起不能の大怪我させた馬鹿男の話を全部知ってるわけよ。聞きたい？」

——泣き虫。犯罪者。人でなし。浜野。馬鹿男。

単語がばらばらに上総の脳裏を飛び交う。目の前には風見以外にもまだたくさん人が並んでいるはずだ。なぜ何も見えないのだろう。風見の三角屋根頭すら、上総にはただの凶形にしか見えなかった。確かに感じるのは隣の杉本と、手から感じるあたたかいぬくもりだけだった。放たれる風見の言葉には、上総が三年前あのサイクリングロードから放り投げた記憶がすべて、織り込まれていた。

——なぜ、追っかけてくるんだよ、浜野。

「サッカー部のスターだった浜野先輩のこと、忘れるわけないわよねえ。私、浜野先輩の妹の友だちと仲良かったから全部聞かされたわよ。浜野先輩って、いじけ虫のあんたがこれ以上いじめられないようになっていろいろかばってくれてたそうじゃない？ ずっといじめられていて、それが本当は当然だったのに逆恨みして、クラス全員から総すかんくっていたあんたのことを、『俺がかばってやる！』って懸命に仲間に入れてあげようとしてたの、知らないで！ 有名よそれ」

——無理やりドッジボールの輪の中に放りこまれて、一方的にボールぶつけられて、脳震盪起こして保健室に運ばれて「たかがこのくらいで泣くななんて男らしくないよねえ」とか言われて笑われた俺が、馬鹿だっていうのかよ！

「誰にも遊んでももらえなくて、ちょっと話し掛けたらすぐ泣き喚いて、それでしかたなく放置してたらまわりからいじめをやったと思われて、みんなうんざりしてたってね。ひとりぼっちで本読んでいて淋しそうだから、一緒に探検ごっこに入れてやろうとか、サッカーに混ぜてあげようとか、いろいろしたみたいよ。可哀想な馬鹿男子のために、今日はあれやろう、明日はこうしてやろうって、一生懸命考えてただって！」

——放課後、十人がかりで捕まえられて、原っぱに連れて行かれて、服を脱がされて見られたくもないのにじろじろ見られて笑われて、その後無理やり浜野のその手の話を聞かされて、最後にキーパーの練習をしろとか言われて、ずっとボールをゴール前でぶつけられてたあんなことこんなこと、全部、善意だったとでもいうのか？ 逃げちゃいけないのか？ 自分の身を守るために必死に走って家に戻るのが、そんなに許されないことなのかよ！

「なのにね、最後の最後にね、どんなに一生懸命遊んであげようとしても、結局どうしようもな

くて、しかたないからみんなで静かに青大附中へ送ってあげようってしてたのに、あんた何したわけ？　なんであんなことしたわけ？　なんで、浜野先輩を土手から突き落として、足にもものすごい怪我させたわけ？」

「怪我って、それは」

目の前で弾丸をぶつけてくる風見に、何も返せない。

浜野が大怪我をしたという話も、知らないわけではなかった。

恋人の杉浦加奈子からその話はすべて聞かされていたから。

でもどのくらいひどい怪我だったかは、覚えていない。

聞きたくもない。

上総が品山小学校のグラウンドで昼休みにぶつけられたドッジボールの球と同じ程度の痛みなのだろうか。。

三百六十度飛んでくるボールを避けられず、腰を抜かしてへたり込んだあの時と同じだった。あの時と違うのは、泣き叫んでいないことだけだった。

「浜野先輩と卒業式に決闘したってというのは、見方を変えれば男らしいって言われるでしょうね。恩をあだで返されたってことさえしらなければね。一生懸命仲間に入れてあげようとして、結局しっぺがえし食わされたら普通恨むわよ。浜野先輩って本当の男だわ。『あれは男同士の決闘だったんだ、だから、もうあのことは忘れろ』って、同じクラスの連中に話したんだってよ。ふうん、そうなんだ、足のどこかわかんないけど、ひどく痛めてしまって、サッカー部でいまだレギュラーに入ることができなくなったって噂聞いたけど、それって、誰のせいなのかなって思ったわ。みな、その話聞いた人、口を揃えて言うわよ。あの逆恨みの馬鹿男のせいで、将来はオリンピックのサッカー選手になれるはずだった浜野先輩が、人生棒に振ったってね」

言い返せない。何一つ、叫びたくても叫べない。三年前のように、声張り上げて泣きじゃくっていた立村上総には死んでも戻りたくない。青大附中の生徒たちの前で、そして、杉本梨南の前では、殺されたって戻りたくない。

——青大附中入試までずっと「立村は落ちるに決まってるだろ、こーんな頭悪いんだもんな。いまだにものを指で数えてるんだもんな。青大附中に受かるわけねえよ」とか毎日浜野に言われたよ。受かったら受かったで、「お前、俺の友だちがな、いっぱい青大附中に行くんだ。だから、立村、俺から逃げられると思うなよ」とか脅されて、俺はどうすればよかったんだよ。あんな奴らに最後の最後まで追いかけて、地獄の中学時代を待ってろって言うのか？　ここで復讐しないで、どこでやれっていうんだよ！　それ以外の方法なんて、あったら教えろよ。もしあの時、あいつのキャンケースを落っこさないで、そのまま言うこと聞いて青大附中に行くことになってたら、俺の中学時代三年間はすべてずたずただったに決まってる！　逃げちゃいけないかったのか？　自分の身を守って、どこがいけなかった？　どうすればよかったんだよ！

杉本はずっと上総の眼を見つめたままだった。たったひとり、顔の輪郭がはっきりと映っている。上総の側で、冷たい視線をそのままにして、ゆっくりと呟いた。

「先輩、本当ですか、人間として、そんな、最低なこと」

——俺と浜野と、どっちが人間として最低なんだよ、杉本。俺のほうなのか？　お前が見ても

、俺がやっぱり間違っているのか？

喉がかれるほど叫びたい。でも、評議委員長たる立村上総には何も言い返せなかった。

「とっくに知ってるだろう」

唇をゆがめて悪ぶるのが、今の上総には精一杯だった。

耳元で藤沖の声が聞こえた。いつのまにか風見の前にすっと滑り込み、上総を真正面から見下ろした。背が高い。大柄な藤沖。両腕を組み、

「立村、今の話、事実か」

尋ねた。

今まで隠されていたことが、本当は奇跡だったのだ。覚悟を決めよう。

上総は藤沖の眼を見つめようとした。だが、その瞳が見つからなかった。杉本以外の人間の顔が、すべて曖昧模糊なものとして映っている。目の前に映る景色も背後で噂しているであろう男子女子連中も、ただのどんぐりにしか見えない。藤沖と認識する方法は、太いがらがら声だけだった。

自分の声が、情けなく震えている。

「事実は、事実だ」

どういう答えが返ってくるかも、上総は覚悟していた。

たとえどんなにいやなことであっても、嘘をついたり汚い手を使ってまで遠ざけることはしない藤沖。杉本に正々堂々かかってこい、とメッセージを送った藤沖だ。自分の保身のために手段を選ばなかった上総を、許すわけがない。

「悪いが、もうお前とは、話をしたくない。理由はわかっているだろう」

上総は頷いた。藤沖の口元がくしゅっとゆがんだように見えた。すぐに背を向け、藤沖は生徒会の引き戸を閉めようとした。半分くらい閉めかけたところで後から風見が片手をかけ、すべりこみ、音を立てて隙間なく閉めた。

杉本はその戸をちらりと見つめ、もう一度上総と真正面に向かい合った。

なぜか杉本の目鼻立ち、輪郭ははっきりと上総の眼に映っていた。

まっすぐで、突き刺さるような大きな瞳。

襟元の赤い蝶結びリボン。

ほつれ毛一本も落ちていないりりしい耳元。

「私も、もう二度と立村先輩と話をすることはありません」

「杉本、俺はただ」

「いいかげんにしてください、立村先輩。あなたは人間として、もう近寄りたくない人です」

一本調子の言葉で杉本は上総に、縁切りを告げた。

「立村先輩と一緒にいたら、私の価値はなくなります」

杉本は戸を一気に全開した。半分跳ね返ったのを指先で抑えると、生徒会室の中へ向かい、高らかに言い放った。

「申し訳ないのですが、あと一分あります。生徒会長に立候補したいのです。もう一度言います

。私は生徒会長に立候補したいのです。申し込み用紙をお願いします」

——品山小学校。

風見の発した言葉を耳にした瞬間、杉本以外の顔がみな、同じまとまりにしか見えなくなった。本当だったら杉本を追いかけて首根っこ捕まえて引きずり出したい。上総は腕時計を覗き込んだ。あと一分弱で四時を回る。あと一分、どうして持たなかったのか。一步、足を踏み出した。しかし見えるものはただの「人」の塊だけだった。杉本の背中だということはわかる。顔がないので取り押さえていいのかどうかも判断できない。足がすくむ。奥で藤冲らしい黒い塊が見える。周囲の連中がわやわやと騒ぎ立てているのが聞こえる。音だけは聞こえるのに、姿がつかめない。水の中に沈んだ国を見ているようだ。立つだけで精一杯だった。

とたん、すばしっこく右側から女子らしい塊が走り抜け、杉本の前に立ちはだかった。何か白いものを突きつけている。

「はるみ、あんたなんでそこにいるの」

「もちろん、立候補するためよ。梨南ちゃん」

「あんたなんか、何できるというの」

「私、会長に立候補することに決めてたの。今出すわ」

——佐賀さんだ。

「もし梨南ちゃんが会長に立候補したら、私に勝てると思う？ 周りはみな、梨南ちゃんのことをいじめた悪い子だと思い込んでいるし、二年はみな梨南ちゃんの敵に回るわ。もしかしたら立村先輩たちが三年の票を取りまとめてくれるかもしれないけどそれだけよ。それに、もし副会長か書記か、それに立候補してだまって信任投票となったとしても、私の下で梨南ちゃんがまんでできる？ 私なんかの命令を聞く気になれる？ 私なんかに命令されて、がまんでできる？ 私、梨南ちゃんがそんな恥ずかしいことがまんでできるなんて思ってないわ。だからお願い、ここから出て行って。これ以上、人を傷つけないで。早く、立村先輩に謝ってあげて。今、味方でいてくれるのは、立村先輩と秋葉くんだけなのよ」

高らかに告げた佐賀はるみの勝ち誇った声が、びんびんと上総の鼓膜を叩いた。

たぶん、他の女子たちからは聞いたことのない、自信に満ちた言葉だった。

清坂美里からも、他の三年女子評議からも、そして杉本からも、落ち着きはらったその声を耳にしたことはなかった。

——杉本、戻ってこい。もう勝ち目ないんだ。

両手をこぶしにし、上総はうつむいたまま祈った。

——佐賀さんに手を伸ばそうとしたことが、杉本、すべての間違いだったんだ。

まだ戻らない識別力。

上総は目を閉じた。浮かんでくるのは小学校卒業前、決闘申し込み直前にぶつけられた、、あいつの言葉だった。

——立村、お前な、そんなうじうじしてるんじゃないやねえよ。ったくなあ、こんな何にもできねえ

馬鹿な奴がどうして青大附中に受かったんだろうな。あそこにはまだ毛も生えてねえしなあ。どうしてお前、逃げるんだ？ 俺たちが怖いのかよ。ふーん、怖いんだな。ばっかだなこいつ。俺たちとまっとうに話もできねえくせに、青大附中の連中とさしで話できると思ってるのか？ お前の母ちゃんの尻にくっついて、追っ払ってもらえると思ったら大間違いだぞ。いいか、立村、このままだったら青大附中行ってもベそかいていじけてるのが関の山って奴だろ？ 俺から逃げられると思うなよ。青大附中で逃げられると思うなよ。どんなにお前が、自分の都合いいように言い訳したって、見てる奴はみんなわかってるんだ。俺は青大附中結局受けねかったけどな、塾のダチは結構受かってるんだ。お前のこと、みーんなお見通しなんだ。そいつらにお前のこと、よっく言っとくからな。いいかげん、立村、逃げるんじゃないや！ ぶん殴りたいんだったら、いいさ、いつだって、俺が受けて立ってやる！

「あの一、すでに四時過ぎたんですが、いいですか。締め切って」

生徒会室から女子の声が聞こえた。杉本も、佐賀も言葉を発しない。かわりに藤沖らしきいがらっぽい声が、杉本を相手に引導を渡していた。

「もう用はないでしょう。外には立村がまだ待っているようだから、帰った方がいいでしょう」

杉本の肩を軽く押すようにして、藤沖らしき塊は杉本を戸口までエスコートし、敷居すれすれまで押し出した。上総は杉本の顔を見上げた。唇をかみ締め、かすかに腫れたように見える頬の赤さ。触れたらそこから膿があふれて崩れ落ちそうだった。

振り返ろうとする杉本の鼻先で、戸が派手な音を立てて閉められた。跳ね返って隙間が開くことはなかった。生徒会室の中は閉じられた。もう杉本の入る隙間は、どこにもなかった。

「杉本、あのさ」

「近づかないでください！」

上総は廊下をぐるりと見渡した。杉本以外識別できない自分の眼が、まだもとに戻っていないようだった。周囲に立つ野次馬生徒たちはみな、灰色の制服色をした円壁に見えた。その中を背筋ぴんと伸ばし、歩いていく杉本を上総は追おうとした。たったひとり、見分けのつく相手は杉本だけだった。と、ぐいと肩を捕まれた。男子だった。息が荒かった。かすれた声だった。首一つ高い相手。識別できた。

新井林健吾だった。

「立村さん、今、何があったんですか」

かろうじて「ですます体」を使っている。

「新井林、なぜここに」

「こんな騒ぎになってたら、誰かが知らせるに決まってるだろうが！」

最低限の敬語もなく、新井林は吐き捨てた。杉本とすれ違ったのだろうか。

「杉本を今、見たらろう」

「まさかあの女が生徒会に立候補？」

上総は首を振った。それだけはできた。

「どういうことっすか立村さん！ 答えろよ、おい！」

どうせわかることだろう。だんだん包囲されている壁が、ひとりひとり異なる顔に映りはじめた。ようやく識別能力が戻ってきたようだった。歯の麻酔がかかったままのような、痛くしびれるような感覚の中で上総は告げた。

「佐賀さんが、生徒会長に立候補した」

「冗談やめてくださいよ、何言ってるんだよ」

丁寧語とため口を混ぜて新井林が笑おうとする。上総は首をもう一度きつく振った。

「本当だ。たった今、佐賀さんが生徒会長に立候補した。来週の信任投票で決定だ」

「ざけんなよ、おい、あんた、正気かよ」

「嘘だと思うなら、中に入って確認してみた方がいい」

上総のネクタイを、新井林が興奮のあまり握り締めひっぱり出そうとした。その手を静かにはずし、上総は背を向けた。

もう杉本の姿はなかった。ざわめいていた野次馬の人壁もひとり、ふたりと消えていた。背中で聞いたのは、生徒会室の戸を壊さんばかりに開け閉めした新井林の怒鳴り声だった。

「佐賀、ちょっと来い！」

それ以上何が起こったのかはわからなかった。人垣の間から洩れるささやき声、

「ちょっとちょっと聞いた？ 立村委員長って……」

「有名な話じゃんかよ」

「いやー恥ずかしいよね、恥かかされてるよね。美里もあんな馬鹿と付き合うのやめればいいのにね」

ボールが三百六十度、一気に集中攻撃してくる痛み。

あの頃と違うのは、へなへなと崩れ落ちて泣き喚くことができないこと。

すでにすべての人たちの表情を読み取ることができる眼を取り戻していた。

せせら笑われる日々が明日からやってくることを、今の上総は読み取れた。

台風一過、快晴、まだ腐っていない落ち葉の匂いが、地面から漂っていた。

「立村さん、ちょっといいですか」

生徒玄関ロビーで直立不動の格好で待ち構えていたのは、新井林健吾だった。

二年B組、次期評議委員長の指名あり。すでにバスケット部キャプテンなり。

朝連の後なのか、髪が汗でしっとり濡れていた。

「話か」

あいさつもそこそこに上総は受けた。だいたい話の内容は予想がついている。昨日のことに決まっている。

「聞かれたくねえんで、ロビーでかまわないですか」

「いいよ」

柱周りに設置してあるやわらかい椅子に腰掛けた。一応は上総を評議委員会の先輩として敬う態度を取っている新井林、さぞ無理していることだろう。先に腰掛けた。新井林も玄関側寄りの隣に座り、ぴんと背筋を伸ばし上総に向き直った。

「立村さん、これから俺は、あやまらねばならないことがあるんです」

「あやまる？」

いきなり下手に出られて、戸惑った。昨日の放課後起こった出来事とその後の修羅場を、上総はすべて確認したわけではない。しかし新井林の心持ちを読み取れないほど鈍感なつもりもない。新井林にとって最愛の恋人・佐賀はるみがとんでもないどんでん返しの末、生徒会長に立候補してしまうという大事件。これを新井林はどう受け止めているのか。決して喜びあふれて応援したいというわけではないだろう。

「俺は、この半年、ずっと次期評議委員長になるってことでやってきたんですが」

無理している、舌が滑らかに動かない。途中でどもりそうになっているじゃないか。

「それを、少し早くやらせていただこうと思ってるっす、来週の評議委員会で、俺は評議委員長に立候補させていただきます」

——そうそう、それだな。

上総は無言で受けた。まだ八時前だ。生徒はまだ朝連の終わった体育系の連中しかうろついていない。込み入った話をするにはちょうどいい時間帯だった。

「そうか、わかった」

さらに何かを付け加えようとする新井林を上総は制した。

自分で用意してきたことを、伝えるだけに止めた。

「俺もたぶん、次期評議委員には選ばれる可能性がなくなっただし、それがベストだと思う」

昨夜、風呂場でめいっぱい顔を洗いながら決めた言葉を口にした。

「評議委員会があるべき姿に戻るだけだし、異論はない」

「立村さん、あんた、いったい」

動揺して口を右、左とゆがめる新井林を、上総は静かに眺め、ゆっくりと頷いた。

「こんな役立たずの三年を先輩と立ててくれてありがとう。感謝する」

立ち上がり新井林に目で感謝を伝え、三年教室への階段を昇った。新井林の様子を振り返って見ようとも思わなかった。

——あるべき姿に戻るだけだ。

たぶん、新井林はこうくるだろうと思っていた。

佐賀はるみが思いがけない展開のよしなで生徒会長に立候補し、このまま信任投票で決定することはもう疑うこともない。昨日の修羅場をどのくらいの生徒が目撃していたかはわからないが、すぐに全校生徒へ情報は広まり、おそらく今日の帰りあたりにはつぶさに上総の過去と情けない現実があらわとなっているだろう。もしかしたら昨夜の段階で電話情報が勢いよく流れているかもしれない。そこまでは上総も読みきれてはいないけれども、女子中心の噂話ネットワークが早いことは想像がついていた。

現在評議委員の佐賀はるみが生徒会長になるということは、後期評議委員に任命されることがないというのとイコールだ。また来年以降評議委員長になる予定の新井林が仮にも半年間、自分の恋人より下の平評議委員として過ごすのを耐えられるとも思えなかった。男子の本音としてもそうだし、何よりも周囲の評価からしてそうなるに決まっている。

——たぶん、新井林は評議委員長に立候補するだろうな。

一応は後期評議委員長として本来なら上総の続投が決まっているはずだった。本条先輩の絶対権力がバックボーンだったのだし、よほどのことがなければひっくりがえることもないだろう。そう思われていた。

——でも、よほどのことが起こってしまったってわけだ。

朝八時をちょうど回ったところだった。荷物を置いてから一度E組に行っておようか。杉本と顔を合わせて、にっこり返事をしてもらえるなんて期待は全くしていないけれども、様子伺いくらいは許されるような気がする。たいてい上総以外にこんな早い時間来る奴はいないはずだし、また一刺しされたとしても、他の生徒に聞かれる心配も今のところはない。

D組の教室に入ろうと、ドアノブに手をかけた。覗き込んだとたん、

「立村くん、おはよ」

美里が教卓の上に腰掛けていた。口もとを結んだまま、手を振っていた。

「清坂氏か」

「悪いんだけど今日、一時間目、さぼってもらえないかな」

「さぼるって、いったい」

「大丈夫よ。立村くん三年になってから学校一度も休んでないでしょ。欠席日数で怒られる心配ないわよ」

言われている意味がわからず。上総はまず自分の席へ向かった。かばんを机に置き、美里の座っている教卓へ近づいていった。教師の机に腰掛けるなんて非常識だなどと指摘するつもりはさらさらない。

「俺はかまわないけど、清坂氏は」

「ちょっとまずいかもしれないけどちゃんと菱本先生にメモで残しておくから。あとで私が説明しておけば、あの先生のことだもん、納得してくれるよ」

足をくねらせる格好で美里は上総を見下ろした。いつもながらつややかなおっぱ髪だが、両耳の上をヘアピンで留めているせいか、顔が少しふっくらしたように見えた。

「どうせ立村くんも、話すことがあるだろうと思うし、放課後とか休み時間だったら盗み聞きされるかもしれないでしょ。私だってそのくらいのことわかってるんだから心配しないでよ」

——やはり、もう知っているんだな。

女子たちの情報網の早さを甘く見てはいけない。肝に銘じた。

「わかった。どこで話す」

「大学の図書館ロビーだったら、中学生がいても怒られないよ。あそこ前に、貴史と一緒にいったことあるんだ。中学とか高校の人だったらいろいろと聞き耳立てるかもしれないけど、大学生は全然興味ないって顔して見ているだけだし、聞かれないですむよ」

大学図書館にはしょっちゅうひとりで出かけている。美里の言う通り、学校内で内密の話をするにはふさわしい場所だろう。全くのふたりきりではないけれども、他生徒からうるさくせつかけられることもないはずだ。かえって人目がある分、声を荒立てないですむかもしれない。

どちらにせよ、いつかは話さなくてはならないことだ。

騒ぎにならないうちに、早く。

美里はするっと床に下りた。スカートのポケットにピンクの財布を忍ばせた。

「じゃ、さっさと行こうよ。貴史たちに見られたらまたうるさいしね」

——羽飛にも話していないってことか。

判断が難しい。とにかく行くしかない。生徒玄関まで降りることにした。美里は上総を待たずにとっとこ駆け足で走っていった。

中学生徒玄関の砂利道をまっすぐ引き返す美里と自分を、怪しむ気配はまだそれほど感じなかった。たまたま知り合いと顔を合わせなかったのと、自転車置き場を避けて大学校舎へ向かったからかもしれない。昨日の出来事がなければ、おそらく「立村評議委員長、彼女の清坂さんと一緒におしのびデート」と噂される程度ですむだろう。先生たちにはあとで自習課題を山のように押し付けられるだろうが、生徒たちからの軽蔑視線は浴びないですむはずだ。

——清坂氏はどこまで知っているんだろう。

お互い、口を利かなくても不自然に見えないよう、美里が一メートル先を歩いた。

肩を並べあって歩くには、やはり抵抗がある。上総は美里の背中がさっき会ったばかりの新井林と同じく、ぴんと伸びているのに気が付いた。頭もお天道様に向けて、どうどうと髪の毛に光をたたえたままにいる。時折なびく髪の毛が、指先ひとつですぐに元に戻る。

——俺がやらかしたことを、どこまで知ってるんだろう。

美里にはどちらにせよ、きちんとけじめをつけるつもりでいた。生徒会役員選挙が無事に終わった段階で、もう一度「俺は清坂氏とつきあいを終わらせたい」「けどそれは清坂氏が悪いのではなく、自分のような頭の悪い男子がふさわしくないことを良く知っているからなのだ」「それが

あるべきすがたなのだ」と話すつもりでいた。こんなに早く、ではなかったけれども。同時に後期評議委員の件についても、もし美里が望むのなら自分は降りる覚悟もあった。たぶんそれはないだろうと思っていたけれども、振られた相手ともう最低限の会話しか交わしたくないというのだったら、それも当然のことだろうと思っている。

でも、昨日の出来事で今まで考えていたシナリオはすべて崩れた。

青空が気持ちよく広がっていた。今まで見たことないくらいの、朝の水色。

——あるべき姿に戻すだけなんだ。それが、少し早く来ただけなんだ。新井林も、清坂氏も。評議委員会も。

到着し、大学図書館の建物内に入った。青瀧大学の図書館は大学校舎にくらべてかなり大きいものだった。中学生が大学図書館を使用する場合は、入館時に生徒手帳を提示する必要がある。また大学生以外入ってはいけないブースもある。

受け付けの前で美里が立ち止まり、上総を見上げた。

「どうする？ 入っちゃう？」

「俺はそれでいいけど」

「でも、ちょっとまずいかなって思って」

誘ったのは美里の方なのに、なぜ迷うのだろう。上総はさっさと入ろうとして、生徒手帳を胸ポケットから取り出した。いきなり手でそれを抑えた。

「なんか、ここいや。ごめん立村くん、外で話そう」

「それならそれでいいけどさ」

美里は上総の腕をひっぱるようにして外へ引き出した。顔つきが少し怖かった。Tシャツとジーンズ姿の大学生たちが上総たちを見ては、

「若いねえ、可愛いねえ」

「恋してるねえ」

などと勘違いした言葉を口にしていた。やはり、そう見えるのだろうか。

図書館前のレンガ花壇側だった。ちょうど腰掛けるのにちょうどいい高さのレンガが重なっていた。上総は美里が座るのを待った。さっき新井林がしてくれたように。

「なんか、変だよ。なんで私が座るまで待ってるのよ」

「いや、一応、それが礼儀かなと思って」

「立村くん、変な礼儀にこだわりすぎだよ。いつも思うけど、なんか立村くんくだらないことばかり気にしてて、本当にしなくちゃいけないことに気が付いてないんだもん」

口を尖らせ、美里は上総の腕を無理やりひっぱった。

「一緒に座ろう。男女平等で」

そういうわけじゃないんだが。とりたてて反抗する必要はない。上総は言われた通り、美里と同じタイミングでレンガの上に腰掛けた。

「まず、私の方から話すね。立村くんも言いたいことあると思うけど、まずは黙って聞いててね

。これ、評議委員としての私の意見だから」

一呼吸置いてから切り出すつもりだったのに、美里に先手を取られてしまった。

「まず、立村くん、これから一週間、何を最優先にすべきかを、まず考えてほしいんだ。きっと今まで立村くん言いたいことたくさんあったんだろうし、私も無神経なところあったと思うけど、でも一番今やらなくちゃいけないことをね、自覚してほしいんだ」

びびり、美里の口調が鞭になる。ききっと文句を言いたくなる。でもこらえた。美里は「つきあい相手」ではなく「評議委員」としての意見を言おうとしているのだ。前期評議委員の自分は、それを聞く義務がある。

「まず、杉本さんのことなんだけど。なぜ女子を生徒会長にしたくなかったわけ？ 藤沖くんがむくれるから？ それとも二年女子の生徒会役員たちがうるさかったから？」

——霧島さんたちに何か吹き込まれたか。

情報が霧島さんたちだとしたら、話は通じる。いくら元気がなくなった霧島さんといえども、可愛い後輩のために一肌脱ぎたい気持ちは残っているだろう。そこでたまたま、上総のつきあい相手である美里を含めて相談しないわけがないだろう。ただ、かなりの可能性で、話がこんがらがっている可能性があるけれども、だ。

「別に女子が生徒会長になってはいけないとは言ってない。杉本だとまずいと思っただけであって、それは」

どこまで話せばいいだろう。迷う。言葉を切った。美里がすぐに切り返してきた。

「杉本さんだといろいろ問題が起こるからだよね。頭が良すぎて嫌われちゃってるからだよね。それに今まで立村くんが計画してきた生徒会への大政奉還を邪魔されちゃうかもしれないってことだよ。そうだよ。そうだよ。立村くんはあくまでも生徒会と評議委員会のために、杉本さんの立候補を止めようとしたのよね！」

「ね？」と疑問形で終わらせるアクセントではない。

「ね！」と強調の感嘆符をつけている口調だった。反論したくて口を開いた。

「違う、もちろんそれはかなり大きな要因だけだよ」

「黙ってって言ったでしょ！ とにかく、私の話を最後まで聞いてよ！」

美里はさらに「！」を連発した。

「いい？ つまり立村くんは男子だから、評議委員会と生徒会のために命を賭けてたってことよ。次期評議委員長は新井林くんだし、杉本さんがもし生徒会に入ったりしたらせっかくうまくいったはずの、権力移行もぐっちゃぐちゃになっちゃうかもしれないよね。そのくらい私だってわかるわよ。だけど杉本さんは生徒会長やる気まんまんだとしたら、当然立村くん、止めるよね。評議委員長として！」

また「！」だ。どうしてこうも強調構文作りたがるのだろう。

「もちろん、俺は評議委員長だけど」

一週間後には新井林に代わっているはずだが、そこまでは言わないでおいた。

「でしょでしょ！ 藤沖くんだって杉本さんが生徒会長になるのは歓迎してないに決まってるしね。だから当然、立村くんは杉本さんの立候補をじゃました、そういうことなのよね！」

「清坂氏、俺はいつ話、できるんだ」

上総はおもむろに尋ねた。このまま美里の「！」構文が続くと、完全に誤解の嵐になってしまうような気がしてきた。もちろん表向きの理由はその通りだし話は通る内容だが、そのことだけだったらもっと別のやり方だってあったはずだと言いたかった。

「私が話し終わるまで！」

美里はきっぱりと切り捨てた。

「つまりね、立村くんは評議委員長としての行動を取っただけなのよね！ それであまりにも杉本さんがかたくなだからしかたなく、私とつきあいやめた振りして」

「清坂氏、それは違う。振りじゃない」

はっきり告げなくてはならない言葉を、上総は差し込んだ。

「そのことを俺は話したくて、ここにいるんだけど」

「立村くん、もう一度言うけど、今私はね、立村くんの交際相手として話してるんじゃないの。三年D組の評議委員として、今どうしなくちゃいけないかを話しているだけなのよ」

ここだけは「！」がつかない静かな口調だった。この言い方でどうして杉本のこと話してくれないのだろうか。やり込められてかなりむかついているが、もう少し我慢してあとで言いたいことを言い放とう。上総は黙った。

「男子側からしたらそうしたい気持ちはわかるわよ。私だって中立で見守りたかったもん。だけどね、私たち三年女子にとって、杉本さんは可愛い後輩なのよ。あんないきなりE組なんか流されちゃって、誰も味方がいない中、たったひとりで戦ってるのよ。そりゃ、言い方まずいところがあったかもしれないし、いろんな人を傷つけてきたかもしれない。だけどね、杉本さん、私たち三年が卒業したら誰も守ってくれる人がいないんだよ。いい、立村くん、私たち、あと半年で卒業するんだよ！」

——わかってるってそのくらい！ だから……。

「今、私たちが杉本さんにしてあげられるのは、三年以降あの子がいられる場所をできるだけこしらえてあげることじゃないかって思うのよ。これ、小春ちゃんやゆいちゃんもものすごく心配してたの。小春ちゃんは今だに口きけないし、ゆいちゃんは青大附高に進学できないし、手紙出して勇気付けてあげることにはできるけど、苦しい時にたったひとりになっちゃうなんて、最悪じゃない！ だから私、思ったの」

ここで美里は唇を一本に結び、ぐいと上総をにらみつけた。また早口で語りだした。

「たとえもし、評議委員会や生徒会が大変なことになったとしても、もし杉本さんが生徒会長になれば、同じ学年の生徒たちが周囲にいてくれるってことになるでしょ。杉本さんは問題ある子だって先入観があるから嫌われてるけど、私たちみたいにじっくり付き合えばあの子がいい子だってことみんなわかってくれると思うの。新井林くんも、もう佐賀さんがB組で守られてるんだから杉本さんのことをいじめるなんてこと、ないと思うの。ううん、新井林くんって絶対、いじめはしたくない性格だと思うのね。だから私、立村くんには悪いけど杉本さんを生徒会長に立候補させたくなくなったってわけなの」

「ちょっと待てよ。杉本を立候補させたいって、なんでそんなことになったんだよ」

話が読めず、引きずられて上総は美里に尋ねた。完全に美里ペース。予定外。

落ち着いたまま美里は、ゆっくりと答えた。

「立村くん、ずっと杉本さんに張り付いていたでしょ。杉本さん、なんだかおかしいと思っていたみたいなの。それで木曜日、私に電話してきてね、立村くんの行動が理解できないって相談してきたの」

——杉本が清坂氏に相談した？

美里の瞳を見つめた。嘘は言っていないように見える。まっすぐで時折辛くなる眼差しはいつもどおりだった。

「そう、夜だったかな。立村くんがしつこくくっついてきて、意味不明なことばかり言うけどどうしてなんだろうって。その時に生徒会長に立候補したいとも言ってたのよ。そのあたりでだいたい、そういうことなんだなって思って杉本さんの話を全部聞いたの。杉本さん、もう一度自分の価値を取り戻したいって、そればかり言ってたの」

「あいつそんなこと言ってたのか！」

価値なんて、一瞬だってなくなることはないのに。杉本を捕まえてそう怒鳴りたい。美里の前でそれははばかられた。

「清坂氏、まさか、杉本に」

「誤解しないでよ。私、立村くんとどうのこうのって話をしたわけじゃないわよ。ただ、杉本さんはどうしても生徒会長になりたかったの。私とゆいちゃんと小春ちゃんはどうしても杉本さんに居場所を作ってあげたかったの。一年の頃と同じようにたくさんの人たちに応援されている杉本さんに戻ってほしかったの」

「それがまずいってどうして気が付かないんだよ！」

まずい、今度は自分が「！」構文を作ってしまった。美里は首を振ると、上総に向かい前かがみになり、何度も首を縦に振りながら、

「立村くんも、男子の立場で杉本さんを守ろうとしたんじゃないかって思う。こずえはそう言ってたよ。だから放っといたほうがいいって。だけど、私、そんなことおかしいと思うんだ。立村くんは男子だから守ってあげたいと思うかもしれないけど、来年以降はどうするのよ。杉本さん、E組に閉じ込められて一人ぼっちなんだよ！」

「だから俺は」

——杉本の隣に立つために。

「立村くん、杉本さんの力、女子の力を甘く見ちゃだめ！ 杉本さんはどんなに頭を押さえつけられても、すぐに立ち直るだけの力持ってる子なんだよ！ そんな子をね、男子の勝手な感覚で否定しちゃ絶対だめなの！ 私、それだけは許さないからね！ ゆいちゃんだって、小春ちゃんだって、それ気付いたからすぐに、杉本さんを立候補させようって全力尽くしたんだから。立村くんをないがしろにしたからじゃないの。あの杉本さんにもう一度、元気になってほしかったからなの！」

——違う、杉本はそんなに強くないんだ！ 見かけだけなんだ！

上総は首を振った。

——女子でトップに立つ権利があるのは、最初から佐賀さんみたいに男子女子みな味方につけられる人だけなんだ。だからあの藤沖が納得して受け入れたんだ。男子を敵に回すしかできない杉本は、いくら佐賀さんになりたくたって、指くわえたまま悔し泣きするしかできないんだ。本条先輩みたいになりたいってあがいてきた俺が、よく知っている！

だんだん頭の中に展開が繋がって来た。美里はまだ喋りつづけている。ところどころつぎはぎしながら、ひとつの結論にたどり着いた。

——杉本が木曜の夜、清坂氏に電話をかけたのは本当だろう。俺がむりやり引っ張りまわしているのを不審に思ったんだろうな。清坂氏はそこで霧島さんと西月さんに声をかけて、杉本を生徒会長に立候補させるため俺を足止めし、杉本を生徒会室へ走らせたんだろう。

「けど結局杉本さんは、立村くんのせいで全校生徒の前で大恥かかされたのよ。これは反省してよ。杉本さんをそのまま立候補させたって、結局佐賀さんが対抗馬になったんだったら勝ち目ないのは私だってわかるもん。全校男子受けがいいのは、絶対に佐賀さんだもんね。けど決選投票でそれぞれ言いたいことを言い合うのもいいと私、思ったよ。杉本さんだって佐賀さんだって言いたいことを全校生徒の前で、堂々と言い放てばよかったのよ。そのチャンスさえ奪っちゃってどうするのよいったい！」

「ああ、そうだな、俺のせいだ、全部それは」

きりきり、錐で突付かれる痛み。一晚寝て忘れたはずなのにまた蘇る。

きつつき美里の言葉はさらにつんつん続く。

「立村くん、きっとこの問題の責任をとらなくちゃって思ってるよね。だから私と別れるとか言ったんだよね、だから杉本さんを守るため付き合おうと思ってるんだよね。それ、気持ちはわかるよ。しょうがないよ。私に価値がないっていうんだったらあきらめる。けどね、今、立村くんが私とつきあいやめて杉本さんに乗り換えたとしたら、一番傷つくのは杉本さんの方だってことも、忘れちゃだめなのよ！」

目をそらし、側の雑草をつまんだ。オオバコの幅広い葉が地面に密着し広がっていた。

「もし杉本さんに立村くんがこれからアプローチしたら、どういうことが起こると思う？ 私、話にしかに聞いてないからわかんないけど、立村くんは価値のない評議委員長だと女子たちから思われちゃったわけよ。今の二年生たちにはね。藤沖くんも誤解しちゃったようだし。今の段階で立村くんは評議委員長として最低の評価をされているわけよ。もしそんな奴と付き合うことになったら、これから先杉本さん、何て言われちゃうかわかる？ 立村くんはいいのよ、卒業するんだもん。私とつきあいやめたって何が起こるってわけでもないもんね。だけど杉本さんは、立村くん程度の男子しか好きになってもらえないって傷つくだけなんだよ」

——そんな奴と付き合いつづけてきていた清坂氏はどうなんだろう。

ずいぶん言われ方だったが、しかたない。黙って聞くしかない。

「だけどね、私は立村くんの価値、百パーセントわかってるつもりだよ。これからね、たぶんク

ラスにもどったら、昨日の話が全部流れていると思うんだ。もしかしたら私が聞いてないことが情報として流れているかもしれないし、立村くんは敵が多いから話に尾ひれがついてるかもしれないよ。へたしたら評議委員としても選ばれないかもしれないよ」

「あ、それは覚悟している」

上総は冷静に答えた。さっきの新井林と同じく、用意していた答えがあった。

「俺はたぶん、評議委員から降りることになる。後任は自動的に新井林になる」

さぞびっくりすることだろう。じっと美里の表情を伺った。絶句するんじゃないかと思っていた。違っていた。期待している答えとは全く違っていた。

「立村くん、あのね」

大きくため息をつき、美里は鋭く言い返した。

「杉本さんを守りたいんだったら、評議委員長でないと無理なんだってどうしてわからないのよ！ あの子、水鳥の副会長さんのことしか考えてないよ。彼に匹敵する相手に守られるんでなかったら、かえって杉本さんにとっては迷惑だってこと、意識してよ。ほら、こっち見なさいよ、うつむいてないで！」

美里の言葉に真が含まれていることを感じていた。

——関崎と同等でない俺は、杉本に近づくことすら恥をかかせることになる。

畳み掛けるように美里は言い放った。

「今、一番最優先で考えなくちゃいけないことはなんだと思う？ 私もね、正直、いきなりつきあいやめたいって言われた時はびっくりしたけど、でも立村くんのしたいことは杉本さんを守ることでしょ。水鳥の副会長さんじゃなくて立村くんを選べて命令することじゃないでしょ。最優先すべきことは、杉本さんをこれ以上悲惨なめに合わせないってことでしょ！ 立村くんも、私もゆいちゃんも小春ちゃんも、それはよっくわかってるのよ。ほんとは私も、立村くんがどうして私のこと嫌いになっちゃったのか聞きたいけど」

「嫌いじゃないって」

「そういうのもどうだっていいの！ 杉本さんが話を聞いてくれる男子になりたいんだったら、まずは後期評議委員長の座を守りきりなさいよ。それからよ話は。それと、もし私と別れたとしたら杉本さん、自分を責めてしまうと思うよ。立村くんと私の関係を悪くしたのは自分なんだって思って、罪悪感持ちちゃうよ。立村くんがいくら杉本さんの味方になろうとしたって、心開いてくれなくなっちゃうよ。私、自分のことはどうだっていい。とにかく、今最優先なのは杉本さんの今後なの。それは私も、立村くんも、同じはずよ」

途中からもう話を聞いていられなかった。聞き流しながら上総は指先で土を掘りつづけた。小さなありが手の甲に這い上がってきた。振り落としても、またよじ登ってくる。

「私たちがこれから先どうするかは、中学卒業してからでも遅くないと思うの。はっきり言っちゃうけど、誰が好きで誰が嫌いとか、そんなねばねばしたことにこだわるよりも友だちづきあいたいんだたら、それはそれでいいよ。けどね、評議委員長に再選されるためにはとりあえず私たち、このままでいたほうがいいと思うよ。もし立村くんが私のこと遠ざけたいんだたら話は

最低限しかしないし、一緒に帰るのもいやだったら言い訳してもいい。けど、今の段階で別れたとか他の人に言っちゃ、絶対にだめよ！ 杉本さん、そんな平の生徒に守ってもらったって、惨めになっちゃうだけなんだからね。まだ杉本さんは、立村くんの本当にいいところ、気付いてないんだから！」

美里の眼が潤んでいた。

「だから、これから先は私に任せて。絶対に私、立村くんを評議委員長にする！ クラスのみんなが立村くんのことを馬鹿にしたって、小学校の頃のこと暴露したって、私は絶対に立村くんの味方なんだから、忘れないで！」

素早く手の甲で目をこすり、しらんぷりしてまた美里は唇を結んだ。

何もないまっさらな水色の空が広がっている。かすかに中学校舎の鐘の音が聞こえてきた。

上総が何も言わなくても、たぶんクラスの連中大多数が全校生徒が、そして評議委員会が。本来あるべき形にもどるため、すばやく形を整えていくことだろう。たとえ美里が上総のために心を尽くしてくれても、その動きがせき止められるとは思えない。

——清坂氏を泣かせた報いだ。

いつのまにか人差し指の爪の上まで昇ってきた蟻を、上総はうつむいたまま見据えていた。

——俺は、あるべき姿に戻るだけだ。

生徒会役員選挙立会演説会は、生徒会長候補・佐賀はるみの華舞台で幕を下ろした。すでに信任投票という「全校生徒へのお披露目」的要素の強いイベントとはいえ、今まで一介の女子評議委員だった佐賀はるみが、いかに凜としたつぼみをたたえた女子であるかを知らしめる、ひとつのきっかけとなったのは確かだった。

——誰もが自分自身でいることができるように、そして自分自身に価値があるということをみんなに伝えられるような、そんな学校生活を私はサポートする立場に立ちたいと思い、このたび立候補しました。

言葉の端々にほとぼしる、まっすぐな生命。

——私は小学校時代ずっと、自分はひとりで何もできない人間だとずっと思い込んできました。誰かに助けてもらわないと何一つ満足に出来ず、困った時は泣いてばかりいたそんな小学生でした。でも、青大附中に入学して以来、私の中で何かが変わりました。

その原因の一端が、杉本梨南にあることを、一部の生徒・教師たちは知っているだろう。槍で貫いているのだろうか、それとも気付かぬふりをして目と耳をふさいでいるのだろうか。二年B組の前列にかりうじて混じっている杉本の姿を上総は、全身に広がる神経でもって感じようとした。

——私には、何かができるということを知りました。今まで何もできなかったのは、自分にその力がなくて押さえつけられていると思い込んでいただけだったのです。私には、同じように自分に価値がないと思い込んでいる人たちを助ける力があるんじゃないか、って思うようになったのです。

杉本梨南は気が付いているだろうか。目を閉じているだろうか。

佐賀はるみの持つ能力を求めていたのが、杉本自身だったということ。

一週間、杉本に拒絶されたままの日々が続いていた。せめて佐賀はるみ、新井林健吾と同じ価値が上総自身にあれば。上総はもう一度目を閉じ、見えない腕を煙のように伸ばし、杉本の姿を探ろうとした。

もっとも、信任投票・出来レースの生徒会役員選挙に関心を持つ層は生徒の中ではそれほど多いとは思えなかった。実際大多数の生徒たちにとっては毎度おなじみの一コマに過ぎない。生徒会も委員会も部活動も、かかわっている生徒以外にはただの「時間の束」に過ぎないだろう。

評議委員長としての上総はそれを憂い、やがて肩書をなくするはずの自分は、そういうものただ願く。

「立村くん、だから大丈夫だからね！」

投票が終り教室に戻るすれ違いざま、美里が耳元にささやきすれ違っていった。この一週間、美里とも最低限の話しかしていない。返事をする間もなく貴史、こずえとかたまり何かの話で盛り上がっている様子だった。あとから奈良岡彰子、水口要も混じりひそひそ話に燃えている。

——何が大丈夫だっていうんだろう。

煙のように伸びていた、杉本梨南を求める見えない腕。

上総にまきついているのは、美里と貴史、ふたりから伸びている見えない腕。

煙はやがて消えるだろう。上総はひとり、自分の席についた。

開票作業は即日行われ、土曜の段階で当選発表が行われた。生徒会長・佐賀はるみ以下、みな全員がとりたてて論議をかもし出すことなくあっさり信任された。クラスに立候補者がいる場合はいろいろとその場の空気が変わるようだが、全く関係のない三年生たちには影響がほとんどなかった。昨年、藤沖が会長に当選した時は、当時の評議委員長・本条先輩が上総に一言、

「いいか、藤沖はああ見えて、なかなかのがんこもんだ。あいつとはトラブルおこすんじゃねえぞ。新井林ほどじゃねえが、正々堂々がモットーらしいしな」

注意してくれたことを覚えていた。本条先輩はさすがである。将来、上総が足を取られてしまった場面を透視してくれたのだろうか。本来だったら上総も本条先輩と同じように、次期評議委員長となるはずの新井林に、

「佐賀さんは新井林が思っている以上にずば抜けた能力の持ち主だ。お前のつきあい相手だからといって甘く見るんじゃない。それと、水鳥中学との交流会の時は気をつけたほうがいい。絶対に側から離すな」

くらい言ってやってもいいのだろう。余計なお世話か。今の上総にはくちばしをはさむ権利すらないだろう。

正式に佐賀生徒会長体制が決定した次の週の月曜五時間目、各クラスでは後期委員の選出が行われることになっていた。その後自動的に六時間目が臨時委員会の招集、その場でまたそれぞれの委員会ごとに集まって顔合わせとなる予定だった。

これもいつもの流れでいけば、全員前期と同じメンバーの再選で片がつく。

ただし、人間関係のいざこざ……たとえばA組の天羽と西月さんの場合など……や明らかに適任でない場合、また転校などでポストが空いた場合などでそれなりに選出のしなおしを行うこともある。その場合、大抵は評議委員が前もって事情を収集しておき、あらかじめ根回しをクラス内で行い、いざ本番の選出時にはそしらぬ顔してあっさり決定、というのが筋だった。いきなりその場で、担任を交えてもめるということは、上総の経験上まったくなかった。別に委員がみな信頼されているから、というわけではない。単に生徒たちがみな、めんどくさがりなだけだろう。だがしかし。

——今回は別だろうな。

鐘が鳴り、時刻ちょうどに菱本先生が現れた。毎年恒例の状況をよくわかっていてか、

「じゃあ、評議にまかす、さ、はじめろや」

教室隅のパイプ椅子に大また広げて座った。美里が「はい、じゃ、はじめます」と元気良く答え、貴史とこずえ、そして奈良岡彰子にそれぞれ一回ずつ頷いた。上総の方を一瞥して、

「じゃ、やろっか」

あっさりと声を掛け、

「それでは、本日は後期委員選出です」

さっさと議題を言い放った。

上総は教壇の上にあがり、黒板に「後期委員選出」と書き込んだ。

最初のうちは緑色だった黒板が、だんだん白っぽくなっていき、チョークもだんだん丸っこくなってきている。机も白木のつややかさが失せ、いつのまにか落書き、彫り込み、金属部分のさびなどが目立ってきているのに気が付いた。

「ええっと、今日はこれから、後期委員を選出するんですけど、ちょっと菱本先生いいですか？」

「評議・規律・音楽・体育」……それぞれの委員を書き込んでいると美里がいきなり、菱本先生に質問を投げかけた。めずらしい。大抵の場合、担任を煩わせることなく議題をどんどん進められるかどうか、評議の腕とされている。美里もそれを誇りとしているはずだ。少しチョークの音をききと鳴らしたくなった。

「おお、どうしたんだ？ 清坂」

なんだかこの二週間ほどやたらとねむそうな目で、菱本先生が答えた。

事情通の連中によれば「きっと毎日、結婚式の準備で死にそうなのよ」とか。

上総も振り返って美里の様子をうかがおうとした。全く視線を合わせようとせず、美里はまっすぐ菱本先生に向いたまま、

「あのう、後期の委員についてなんですけど。もうあと半年しかいないですし、たぶんこの状態だと新しく立候補する人もいないんじゃないかなって思うんです。だから、ここで立候補者だけ募ってみて、いなかったらそれで全員再選ってことでどうでしょうか」

背中を上総に向けたままだった。

——大丈夫って、このことかよ。

指が震えた。チョークを小さく、ひとかけらこぼした。

「いやあ、でもなあ。清坂。最後の半年だから、悔いのないように新しい委員へチャレンジしたいって奴も、いるかもしれないぞ。最初から決め付けるのは、やっぱりよくないぞ」

たしなめられ、美里がふいっと唇を尖らせた。

「じゃあ、聞いて見ます。それからでいいですか」

「まずはみんなにだな、立候補したい奴、いつもどおり聞いてみる」

「わかりました」

菱本先生は、美里の返事にふむふむ頷いた後、黒板に向かっている上総の方へ、

「立村、お前、立候補者を募る時ぐらい、前を向け」

びしりと厳しい言葉を投げた。聞こえない振りして無視してやろうか。

「立村、もう一度言う、ちゃんと前を見ろ」

「はい」

どうせもう、これが最後だろう。上総は黒板の際まで離れると、改めて教壇からクラスメートたちを見下ろした。

波打つ黒い頭の群れ、その中の視線を受け止めるのが怖い。

決してこの一週間ほど、トラブルが起こったわけではなかった。

あの台風上陸の日、上総が梨南と生徒会役員を相手に立ち回った茶番劇は、あっという間に全校生徒および教職員に広まった。三年D組の男子たちは対して難しい態度を取るでもなかったのだが、女子たちはやはり想像通りだった。一部の女子……美里とこずえ……を除き、すれ違うごとに「あの馬鹿評議委員長、女子を見下してるなんて最低!」「美里の彼氏のくせに、下級生に手を出そうとしてるんだよ。それもきつといやらしい目的なんだよ!」とか「あいつ人を闇討ちした挙句、怖くなって逃げ出した最低野郎なんだよ」とか。それぞれの言葉はしばしに、その意味を見つけることが多くなった。どこまで真実でどこまで嘘か、言い訳しようとは思わない。いくら自分の感じたことを伝えたとしても、「それはあんたが勝手に感じているだけ、感じてない人間が悪いように言う権利、あんたにはない!」とあっさり切り捨てられるだけだろう。それに、一番簡単な断罪の場がここにある。

杉浦加奈子が見つめる、力の籠った眼差し。

その他の女子たちが上総を見るたびゆがめる口元。

「じゃあ、この中で、立候補したい人、いますか? いたらすぐに手を挙げてください! いませんか、いませんね!」

美里が例の「!」構文でもって、強い口調で確認を繰り返した。

——あれ、清坂氏、いつもだったら各委員ごとに聞くものじゃないのか?

上総が仕切っている時はいつもそうしていた。今は美里が全く打ち合わせないままにどんどん好きなように動かしていつている。しかも、誰も文句ひとつ言わせぬスピードでだ。

「少し急ぎすぎじゃないのか」

さすがに見かねて耳元にささやこうとしたが、今度は美里の方が髪の手で勢い良く上総をぶった。

「では、居ないようですので、今回三年D組の委員は全員、再選ということになります。異議有る人、いませんね!」

またも「!」だ。菱本先生もこれはやはりまずいと思ったのか、

「おいおい、誰か真剣に手を挙げ損ねて悩んでいるのがいるかもしれないぞ。清坂、何そんなに慌ててるんだ?」

——そうだ、この点に関してのみ、あいつは正しい。

上総も頷いた。同時にすさまじい形相で美里は上総をにらみつけた。

目と口が裂けそうなほど、きりきりと釣り上がっている。

——うちの母さんより怖い。

踏み出した足が動かなくなるくらいだった。その隙をついて美里は、そそくさと「後期委員選出」と書いた文字の上に、赤いチョークで花丸を描いた。

「それでは、今日の本場の議題なんですが、時間がないのでさっさといきますね。それでは貴史、こずえ、彰子ちゃん、準備OK?」

まさにはや回しテーブルコーダー全開。上総が口をはさむ間もなく、いち早く立ち上がった貴

史が、どすのきいた声で、

「三年D組一同、全員起立！」

なんと、号令をかけた。今まで号令をかけるのは、上総と美里、評議委員だけのはずだった。今まで一度もさっさと全員足並みそろえて立ち上がるなんてこと、なかったのに。

——みんな、軍隊みたいにびしっと決まってるのはなぜなんだ？

しんと静まりかえり、菱本先生があっけにとられて腰を椅子から浮かせているのだけが間抜けだった。上総はチョークを握り締めたままぼんやりとその状況を見つめていた。隣の美里だけが満足げに、「貴史、男前！」などと呟いているのが聞こえた。

「おまえら、どうした？ いきなりなんだ、このびしっと決まった姿はなんだ？」

驚いてはいるが怒ってはいない。またいつものかくし芸とでも思ったのか。

菱本先生が貴史に声をかけた。他の生徒たちもみな、一部の男子を除いて貴史の方に顔を向けている。いつのまにか何か準備をしていたらしく、奈良岡彰子がスカートの腰周りくらいある紙袋を机の上にとんと出し、こずえと一緒になにやら取り出した。果物屋でお見舞いの御遣物にするような緑の籠に小さなマスコット人形がこんもりとつめこまれていた。添えられたビニール袋には手のひら判のクッキーがぎっしり。ピンクと青のリボンが柄に蝶結びであしらわれていた。

美里はさっそくふたりに近づき、貴史にも一緒に持つように頷いて合図をし、柄に手をかけた

。

「菱本先生、ご結婚とおめでた、おめでとうございます！ これ、三年D組一同からの、びっくりプレゼントです！ ってことで」

上総の方を一切見ずに、本来の議題をもう一度言い放った。

「これからの時間は、菱本先生へのお祝いインタビューと、三年D組一同からの色紙贈呈です！

みんな、ちゃんと描いてね！」

打ち合わせていたのか、それともちゃんと準備が終わっていたのか。

こずえが一枚、色紙らしきものを取り出し、うやうやしく菱本先生へ差し出した。黙っていればいいものを、やっぱりここは下ネタ女王の誇りあってか、

「先生、あんまり腰動かしてぎっくり腰になったらだめだよ。いい？」

「お前なあ……」

さて、あきれはてているのか、露骨にむかついているのか、どちらか。

——俺は関係ないもんな。

あの色紙の存在自体、上総は知らなかった。差し出されてもお祝いの言葉なんて書く気もなかった。しかしなんでだろう。ずいぶん手回しが早いではないか。違和感があった。他の連中はどうなのだろう？ 見渡してみたが、意外にもみな、納得顔で頷いている。いつのまにかこずえが貴史の隣にひっついて、「なっかなか、やるじゃんねえ」とか仲良しなところを見せ付けている

。

「お前ら、なんだかなあ、驚かせるなよなあ」

不意に、菱本先生がうつむいた。両手で受け取った小さなマスコット人形を摘み上げると、

「よく作ったよなあ。こんなたくさん」

くぐもった声で話し掛けた。

「これ、クラスの女子たちが一人一体ずつこしらえたんです。女の子ばかり集まっちゃったけど、男の子でも別にお人形さん、いいよね、ちっちゃいうちは。あと、このクッキー、彰子ちゃんが今朝、焼いてくれたのをそのまま持ってきたんです。彰子ちゃんのクッキーは有名なんですよ、先生。彼女と一緒に、仲良く召し上がってくださいね！ 両思いがずうっと続きますよ、ねえ、そうだよね！」

美里は他の起立した連中に同意を求めた。取り立てて返事はなかったが、どこからかばちばち拍手が聞こえ、それにあわせてみなが一斉に声を張り上げだした。

「よおっ！ 菱本っちゃん、男出したな、さっすが俺らの担任じゃん！」

「彼女泣かせるんじゃないよ！」

「これで年貢の納め時！ 浮気するんじゃないぞ！」

——ほんとにこれ、しゃれにならないんじゃないか、やめたほうがいいんじゃないか。

左の横腹がなぜかちくちく痛む。胃だろうか。上総は手で抑えた。我慢できないほどではない。教壇から降り、一步、もう一步教室の扉まで寄った。美里たちがまだ喋りつづけている。

「もう堅苦しいことはやめやめ！ ね、みんな、彰子ちゃんの持ってきてくれたクッキー食べようよ、ね。先生、今日だけは、飲食物持込禁止なんて野暮なこと、言わないでよね！」

「お前ら、なんだよ、おい」

怒るんじゃないか、いや怒ってくれたほうがすっきりする。

上総がじっと、窓際の教師お祝い劇を見つめていた時、突然菱本先生の体が前に揺れた。同時に、顔を一気に覆い、

「ありがとな、みんな、こんな俺についてきてくれてな」

しゅうっと一瞬だけ空気が白い煙に包まれた風に見えた。

——泣いてるのかよ。

ひとりだけ煙幕から離れている上総。

菱本先生が美里と貴史、その他の3D男子連中に取り囲まれて、肩を抱かれて号泣しているのを、どこか別世界の物語として眺めていた。女子たち数人がいきなりワグナーの「結婚行進曲」をアカペラで歌いだした時、オペラを愛した音程の取れない女子の顔を思い出した。また胃がちくちくと痛んだ。

感動の一時間はあっという間に過ぎ、帰りの会も適当に片がついた。掃除もクラス全員で行うことであっという間に終り、委員会に参加する奴は教室を急ぎ足で飛び出していった。

「立村くん、さ、早く、三Aに行こうよ」

「清坂氏、あれってなんだったんだ」

自分が評議委員に再選されたことを喜ぶ余裕なんてない。ついていけず戸惑うだけだった。ただわけのわからぬ煙幕のようなものをすっきりさせたい。上総は美里がすたすた三年A組の教室へ歩いていくのを追いかけた。

「ああ、たいしたことないわよ。菱本先生の結婚お祝いを繰り上げただけ」

さっきのテンション高い声とは大違いの、冷たげな口調で美里は答えた。上総の顔を横目でちらりと覗いて、

「貴史もこずえも彰子ちゃんも、賛成してくれたからよ。立村くん、自分の思い込みが間違ってたこと、あれでわかったでしょ」

「どういうことだよ」

けんかを売る気なんだろうか。声がとげとげしくなるのを感じる。抑えた。そんな感情ぶつけていい人ではない。杉本相手の二の舞になってはいけない。

美里はA組教室の前までくると、また猛烈な早口で上総に向かい、

「どうせみんな、今更面倒な委員改選なんてやりたいと思ってないし、おとといの段階でみんな、早く菱本先生のお祝いやっちゃいたって言ってたしね。だからさっさと片付けたのよ。たいしたことじゃないわよ」

「だからって、でも、めずらしくあの男も正論言ってただろ？ もし立候補したい奴がいたらって」

「あのね、立村くん。よく考えてよ。みんなあと半年しかこのクラス、存在しないのよ。だったらいいじゃない。面倒なことさっさと終わらせて、無事に半年過ごせばいいじゃない。どうせ立村くん、高校に進んだら私たちと別の教室に行くんだから。あ、こずえは一緒なんだよね。でも、大嫌いな私の顔なんて、見ないでいいもんね」

無表情無感情。唇を一本の糸のように結んだ。

「嫌じゃないよ、そういうんじゃないって、この前話しただろ？」

「だったら、普通の友だちらしくしてればいいじゃないの。別に結婚式するわけじゃないんだもの。みんなどうでもいいって思ってるよ、私と立村くんが付き合ってることだって、そんなのどうだっていいことよ。だったら、無理に付き合いやめたとかわけのわかんないこと言う必要ないじゃない。もともと、私たち、友だちとしてつきあってるんだから」

「え？」

言われた意味がすぐに飲み込めず、上総が立ち止まった時だった。

「立村さん」

完全に声変わりした、男の声。「さん」付けして呼んでくる後輩はひとりしかいない。

振り返ると、浅黒い顔で眼光鋭い奴がひとり、待っていた。

「新井林か」

「無事、だったんですか」

答えの返し方に戸惑う上総をじっと見つめ、新井林は美里へ一礼するとA組の教室へ入っていた。美里もこっくと頷き返した。

「さっきはあれでうまくいったけど、いい、立村くん」

新井林に向けたやわらかな表情とは一転して、上総には一瞬の間ももう与えない、そんな眼差しだった。

「絶対に、私は立村くんを評議委員長にするから。何があってもパニックなんか起こさないで」

「清坂氏、何度も言ってるけど、俺はもう評議委員長になることなんかどうでもいいんだって」
「黙って。今日はもう、あんたと口利く気ないから、いうとおりにして」
さらなる上総の問いを振り切り、美里は三年評議委員の座る窓際四番目の席についた。

天羽が、難波が、更科がそれぞれ上総に視線を投げた。言葉は交わさなかった。
二年の男子評議たちが軽く一礼をしつつ、聞こえないようにひそひそ話をしていた。
二年女子評議たちはいかにも首をかくっと落とした程度にあごで会釈をし、はっきり聞こえる声で「これから選挙になるんだよねえ」などとさえずりはじめた。

一年男子・女子たちは声を潜めようにもうまいぐあいに低くならず、
「いやあ、どうする選挙になっちゃったら」
「まじかよ。記録残るのかよ」

「選挙」という言葉が何度も飛び交っていた。
——清坂氏の努力には、感謝する。しなくちゃいけないんだ。けどさ。
中央列、二番目の席に座り、無言で呼吸を整えているのは新井林健吾だった。隣の席に座っている、見知らぬ女子はおそらく佐賀はるみの跡継ぎという形になるのだろう。同じことは三年C組、上総の斜め前に座っているロングヘアーのさらさら女子にも言えることだろう。名前は聞いたがどういう人なのかは全く見当がつかない。あとで更科に聞いてみよう。

——聞く必要もないだろ。俺がすべての評議委員の性格を知る必要、もうないんだからさ。
「少し黙らせるか」

振り返り、難波が更科に声をかける。天羽が聞きつけて首を振る。
「とにかく終わるまで待とうや、難波のホームズよ」
「そうだね、まずは」

更科が何かを言いかけたのを、天羽が平手打ちの真似して制した。
「更科、とにかく黙ってろよ」

「もちろんだよ。な、ホームズ」

難波は何も言わず、ちらっと上総の方に顔を向けようとし、すぐに元へ戻した。

——やっぱり、あいつらもわかっているんだ。

台風の日から一週間が経つ。

天羽には約束した通り、自分のしでかしたことだけを説明しただけだ。それ以上何も問われなかった。轟さんになじられるかと思ったが全くそれはなかった。難波、更科の取り調べにはあえて「悪い、俺の責任だ」とだけ答えた。これからどうなるか、評議委員長としての進退、および新井林健吾との一騎打ち、それも口にはしなかった。

建前上は、自動的に立村評議委員長再選が決まるはずだ。恒例で行けばの話だが。

しかし、今回は状況が異なっている。佐賀はるみが生徒会長に就任し、もともと相性の悪い立村評議委員長とぶつかったらどうなるのか。また、あの台風時事件でもって知られた立村評議委員長の人間性および、藤沖元生徒会長からはっきり断罪されたこと。暴力事件……と思われる

るふしがある……を隠し、本来 だったら入ってはいけない青大附中に入学してしまったこと。

すべて逆風に吹いているこの現実。

美里が機転を利かせて、考える間もなく三年D組の評議委員に選出されるべく持っていったもらったのはありがたいこと。でも、ここにはすでに本来評価されるべき人間・新井林健吾がいる。先輩後輩関係なく、人間性としても、リーダーとしても、上総よりはるかに上の二年生がいる。それに本来、公立では後期の委員長を選ぶ際、二年生が担当することになるのが常だという。生徒会と連動させるのが自然といえば自然だろう。

佐賀生徒会長の恋人、新井林健吾がサポートのためあえて評議委員長に就任する。

——自然な流れじゃないか。あとは立候補するかしないかだ。

新井林は筋を通した。上総もそれにきちんと答える義務がある。戦前逃亡だけはどんなことがあってもしてはなるまい。どんなに足がすくんでも、自分のあるべきすがたに戻るのみだ。

——俺と新井林の一騎打ちで、すべて答えが出る。

「それでは、本日の評議委員会を始めます」

後期最初の評議委員会。立村上総の最後のご奉公は、次期評議委員長選出だ。

後期評議委員の名前をひとりひとりチェックした後、上総は「評議委員長」とだけ一行黒板に書き込んだ。評議委員会の場合、三年前から委員長以外の選出を行わず、権力を一点集中という形にしている。他の委員会も本条先輩の無言意志によって、なんとなくそういう形になっているようだった。そのため副委員長、および書記は選ばない。

書き終え、振り返ったとたん、教室の空気が真四角に凍りついたような気がした。

煙ではなく、氷の教室。

——ここに評議委員長として立つのも、最後なんだ。

斜め奥に美里が、固い表情で上総を見守っている。

——清坂氏、申し訳ない。

二年B組の女子評議が座っている席に自然と目がいった。やはり知らない女子だった。本来ここに座るはずの女子がもうひとりいたことを、上総はまた思い出した。

「これから評議委員長選出を行います。立候補したい人は挙手をお願いします」

心臓ががたがた言うのは、それでもまだ未練があるせいかな。新井林と目が合った。一年の頃の激しい憎しみめいた色はなく、むしろ穏やかなものを感じたのは気のせいだろうか。ゆっくりと、重々しく右手を挙げた。

「次期評議委員長に立候補します」

一年評議の並ぶ列で、ざわめきが起きた。よく見ると評議委員の半数が入れ替わっている。たぶん状況を把握できていなかったのだろう。二年評議も女子たちはまた後ろを見てささやき合っているし、二年男子もまた同様。三年列だけが硬くこわばったまま、静けさを保っていた。唯一ゆるゆると頬杖ついているのは三年A組女子評議・近江さんだけだった。

「新井林、お前、立候補するのか？」

一番驚いているのは、おそらく側のパイプ椅子で足を組んで眺めていた顧問の先生だろう。生

徒たちが影で動き終えたものしか、今までは見せてこなかったけれども、今回はとうとう大人の前で一騎打ちをお見せすることになるわけだ。評議委員会の裏を大人に見せるのは悔しいがしかたあるまい。上総は新井林に静かに答えた。

「それでは二年B組の新井林くんが立候補となります。他に」

——いなければ、三年D組の僕こと立村が立候補します。

そう続くはずだった。

三年男子最前列の机が派手に鳴った。挙手もなく立ち上がった。隣の近江さんが頼杖をかくっと崩し、そいつを見据えた。

「しゃあねえ、敵は本能寺ってことで」

天羽の眩きを拾い上げたまま、上総は手にしたチョークを再び握り締めていた。

「悪い、立村、三年A組、天羽忠文。本日、後期評議委員長として立候補させていただきます！書き込んでほしいんだけど、そこんところ、よろしく！」

——天羽！

評議委員ほぼ全員のどよめきが、膨れあがると同時に、新井林が教壇の前を大またに通り過ぎ、天羽に立ちはだかった。

「天羽さん、どういうことですか、いったい何考えて」

「悪いな、俺もやっぱし、男としての野心ってもんがあったんでさ」

あいかわらずひょうひょうとした態度で、天羽は頭を搔きながら交わし、

「おいおい、立村、お前も立候補するんだろ？名前、早く書けよ。さっさと投票やろうぜ。それからってことで。あ、そうか、候補者は開票準備できないんだよな。もう投票用紙準備できるだろ、トドさん」

「あいよ」

あっさりと轟さんが返事をし、八つ切りのわら半紙を前列に配っていった。ということはすでにこれも予定に組み込まれていたということか。思考がついていかない。後ろの美里は唇をかちっと結んだまま無表情で用紙を受け取っている。

「近江ちゃん、俺はやっぱし嵐を呼ぶ男なんだよなあ、ここんところに惚れなおしてくれりゃんせ」

「……なぜ？」

近江さんの驚愕した顔を見たのは、これが初めてだった。上総はただぽかんと周囲の動揺ぶりを見つめたまま立ち尽くすだけだった。肩に手を置かれた。難波のめがね面だった。

「とにかく、席につけ。何も言うな」

更科が上総からチョークを受け取り、

「じゃあさ、これからまず三人のうちから選んでもらうってことで、どう？で、上位二人を選んで、あと決戦投票ってのは」

「わかった。それなら私、もう十枚くらいわら半紙用意してきます。先生、いいですか？」

轟さんがてきぱきと準備を進めていく中、上総はぼんやりと男子三年評議最奥の列に座った。

見上げると難波と更科がふたりで話し合っているのが見えた。ここの場所から見上げたことは、今思えば三年になってから一度もなかったはずだ。隣の美里の様子は、何も言わずただ歯を食いしばっているようにしか見えなかった。

——新井林健吾

——天羽忠文

——立村上総

予備投票の用紙が回ってきた。天羽が手を伸ばして届けてくれた。

上総はしばらく迷い、新井林の名前を書きこみ四つ折りにし、難波に渡した。

一応、本条先輩から「万が一」に備えて、複数候補者が出た場合の対応についてはメモに残していた。立候補者が予想に反して二人以上となった場合は、まず予備投票を行い上位二人に絞り込むこと。その上で一騎打ち、結果を出す。

——もし、予備投票の段階で圧倒的にひとりが引き離していたら、それで決めてもいいんじゃないでしょうか？

——だからお前は甘いついていうんだよ、よく聞け。

頭を小突かれながら、上総は本条先輩の話を聞いた。

——いいか、仮に一人勝ち状態だったとしてもだ、票が分散されるってことは、やっぱり票数が細くなっちゃうってことだろ？ 大抵、立候補者は自分に票を入れるから、よっぽどのことがない限りゼロってのはありえんわけだ。百パーセント納得済み、って結果ではないつつうわけだ。

よく理解できなかった。もともと上総は数字に弱いのだ。

——人間、三人以上分散しているとあっちゃこっちゃ迷っちゃうけどな、二人にびしっと絞ったら、あとはイエスかノーかのどちらか選べばいい。二者択一の方が、判断もしやすい。数字もはっきりと分かれる。となるとだ。

本条先輩は上総を何度もちらちら見ながら、

——お前、本当に理解してるのか？

繰り返した。

——よくわかりません。

——まあいっか。しゃあねえな。そんなことはまずねえと思うし、そういうやり方もありだっことで認識しとけ。つまりだな。

全く不安材料もないって顔で本条先輩は続けた。

——どうせそれほど僅差の結果になるなんてこたあねえよ。二者択一の場合はまず、ひとり強い奴に票が集まる。圧倒的多数ってことになったら、十分周囲に見せしめができるってわけだ。つまり権力を握った奴が誰かをしっかり念押しする役割を果たすってわけだ。選挙ってのはな。とにかく、ここで俺に逆らうものはただじゃあおかねえ、そういうことを評議委員全員に伝えるってのが、決戦投票一騎打ちの心よ。

全く理解できないまま、聞き流していた。

どうして天羽、難波、更科はそのことをしっかり覚えていたのだろう。

わからない。上総は黙って閉じたままの「評議委員会ノート」を見下ろした。

「では、開票、更科頼む」

「それでは行きますよ、えっと、立村、新井林、立村、天羽……」

よどみなく更科が、小さな箱に収めた評議委員全員の票を広げつつ、候補者の苗字を読み上げていった。難波が聞きながら「正」の字を黒板に書き込んでいく。二年男子たちが露骨に聞こえ

る声で、

「だから新井林、やめとけっていただろうがよ！」

「なんで下克上やりたがるんだか、黙ってても来年委員長だろが」

おそらく他の評議委員たちも納得の理由を挙げ、責めている。

「うるせえ」

沈み込んだ声で、それでも新井林は言い返し、唇をかみしめたまま黒板を見上げた。三年連中の並んでいる列を眺めようとはしなかった。

一方、一年評議たちの様子をうかがうと、なんだか戸惑っているようにも見えた。

——半分、新しい面子に代わっているもんな。

上総がざっと見わたした段階で、知らない顔がだいたい半分くらいいた。

——やっぱり、「評議委員会」としての機能はなくなってきてるんだよな。

二年評議も、男子はともかく女子の顔ぶれが全員前期とは異なっている。2Bのように、佐賀はるみの離脱というのものもあるだろうが、それにしても、新入りさんの多さはなんだろうか。

「えっと、立村、新井林、立村、天羽、天羽、天羽、立村……これでOK」

「ということで、結果は明らかだな」

——新井林健吾 二票

——天羽忠文 十一票

——立村上総 十一票

難波は腰に手をやりながらめがねのつるを指先で持ち上げ、

「予備投票の結果、立村と天羽が同数ってことで、決戦投票に移ります」

同時に轟さんが手早く、第二の投票用紙を先頭席に配っていった。

隣の美里は轟さんを鋭い目つきでにらみつけている。気になるが今口を聞くべきではない。美里だって言ったではないか。「今日はおんと口利く気ないから」って。

天羽が両手をぱん、と打った。

「みなさん、どうもありがとうございます。十一票、十一票、二票かあ。これはかなり厳しい戦いになりますぜ旦那、どう近江ちゃん、俺もなかなかやるだろ？」

「どうだか」

また無関心な態度に戻った3A評議の近江さんは、頬杖をついたままくるっと美里に顔を向け

、

「みんな、ひまよねえ、清坂さん、終わったら一緒に帰りましょ」

さらっと笑顔を見せた。すぐに机に向かい決戦投票用の紙に向かい、書き込みを始めた。

上総は新井林にじっと意識を向けた。目だけではなく、喉の奥から呼びかけるようにしてみた。新井林、お前、どう思う？と。テレパシーを使う能力が上総にはあるわけない。全く身動きしないままの新井林、じっとうつむいたまま、拳骨をこしらえ、二度、こつこつ椅子を叩いていた

。それでも露骨に天羽や上総に向かい噛み付いてこなかったのは落ち着いていた証拠だろう。二年評議たちが、

「しゃあねえだろ、来年があるだろが。それにお前、冬場バスケ部の方を優先するって言ってただろうが！」

などと慰めの言葉を掛けている。様子を見る限り、二年連中の票はほとんど、天羽か上総に流れたと判断していいだろう。これは一種の義務だ。無記名が原則であっても、名前をシャープで書く以上は、筆跡がしっかりと残る。すぐに投票用紙を処分するとはいえ、更科と難波は誰に入れたかをしっかり覚えている。口が堅いとは言いがたいあのふたり、これからの評議委員会において天羽派、立村派、新井林派という風にチェックを入れるに違いない。特に難波、あいつはまさに青大附中のシャーロックホームズ。筆跡鑑定はお手の物。

——難波が開票に回ったことで、救われたんだらうか。

天羽が上総に振り返り、さっきの近江さんのように一声、

「立村くーん、終わったら一緒に学食しましょ！」

品を作って呼びかけてきた。気色悪い、やめろと言いたいところだがそんな気にはなれない。無言で上総は無視しておいた。

「それでは、次の決戦投票、みなすべて書き込んだら、この箱に入れるように」

難波がティッシュボックスを指差した。その脇にまとめてあった予備投票用紙を素早く丸め、数回破ってごみ箱に捨てた。

更科が腰をかがめてまず自分の投票用紙を四つ折りにして入れ、それをもったまま一年、二年、三年の列をめぐりはじめた。

上総は投票用紙に、「天羽忠文」と書き込み、黙ってそのまま入れた。隣の美里も一心不乱に書き込んだ後、はっと顔を挙げ、

「ちょっと、更科くん」

堅い口調で呼びかけた。

「なに？」

「次の開票作業やるの、誰？」

「ええと、俺たちだけど、なんか？」

「それってまずいと思わない？ 連続して同じ開票係ってというのは、私納得いかない」

美里は立ち上がり、更科の持っているティッシュの箱を引たくると、そのまま教壇まで向かった。待ち構えていた難波は、自分の投票しようとした用紙を慌てて四つ折りにし丸めた。

「難波くん、投票したら？」

「なんで清坂、お前が割り込んでくるんだ？ 俺たちだと納得いかないのか」

「いかないわけじゃなくって、公平な選挙だったら男子だけじゃなくて、女子も入るべきだと思うんだ、だから、次、私やりたいんですけどいいですか、先生？」

——顧問を混ぜるか。

美里の場合、青大附中の教師には受けがいいのをうまく利用し、困った時には顧問に一声掛け

るという技を持っている。小学校時代は羽飛とコンビ組んで担任教師とトラブルばかり起こしていたらしいが、上総からしたらそんなの信じられなかった。現に、今も、存在を忘れられていた顧問を交えることで、自分の立場を強化しようとしている。

上総には死んでもできない裏技だった。

「そうだな、清坂。男子だけだと平等でないよな。よし、じゃあ清坂、あと誰と組む？」

「近江さんは？」

ずっと轟さんが片手を上げた。美里は首を振った。

「悪いけど、琴音ちゃんは難波くんたちと同じ立場にいると思うんだ。全く関係ない人とやるべきだと思う」

「けどそんなこと言ったら美里も」

すぐに言い返した轟さん。その声の上総には妙にはっきりと聞こえた。普段だと歯の間から不調和な息が洩れて、卑屈に見えてしまい損をすることが多いのだが。やはり美里と轟さんとの間には何かいざこざがあったに違いない。あとで、轟さんに聞いてみる必要がある。

「いいわよ、私そんな面倒なことしたくないし。ひとりでやっていいんじゃないの？ 轟さんでも」

「ううん、でもそっか、いきなりじゃ面倒よね。わかった、じゃあ私、一緒に開票する人を指名しますがいいですか？」

言葉を一度止め、美里は難波に教壇をおりるよう、人差し指で地面を指した。

「ああ？ どういうことだ？ 俺にどうしろっていうんだ」

「難波くん、悪いけど早く投票して席に着いて」

有無を言わさぬこわばった表情に、難波も言葉を返せなかったのか、箱の中に丸めた用紙を押し込み、おとなしく三年B組指定席に戻った。隣で轟さんと目と目で合図しあっている。言葉は交わさない。更科もすでに上総の前に座り、難波に、

「ホームズ、なんとかなるって」

ささやきかけていた。ふたりとも、上総と天羽、どちらにも声をかけなかった。

顧問教師が指でOKサインをした。見届けて美里は、二年の列を小首傾げたまま眺めていたが、やがて新井林へ声を掛けた。。

「新井林くん、悪いけど手伝ってほしいんだ、やっぱり一番適任だと思うんだ。公平さを考えたらね」

うつむいていた新井林が、いきなりびしっと直立不動のまま立ち上がった。

今にも敬礼しそうな勢いだ。

「俺、俺がですか」

あごをひくつかせ、美里の返事を待たず、ロボット歩きでぎくしゃくと教壇の上に昇っていった。美里がかすかに笑いかけ、さっきまで難波が手にしていた白いチョークを手渡した。

「今から私、全部読み上げていくね。『正』の字で書き込んでってね。じゃあいっくわよ。

ティッシュケースの口からほんの少し顔を出していた用紙を手にとった。

小さく丸まっている紙だった。難波が最後に投票したものと、上総はすぐに気がついた。

しわしわの紙を全員の眼に見えるよう片手に持ったまま、美里は読み上げた。

「天羽くん一票」

——難波が天羽に入れたのか。

耳にきんと響く、衝撃らしき音。

ひび割れていく、自分の耳。

上総は動かなかった。新井林が増やしていく「正」の字をじっと見据えていた。

美里が票を読み続ける。

「天羽くん、天羽くん、天羽くん、立村くん、天羽くん、天羽くん……」

天羽の列にはいつのまにか「正」の字が三個並んでいた。その隣には「立村」の苗字に票を入れた人の数が。まだ半分も開票していないはずだ。なのに、もうすでに天羽は、評議委員三学年計二十四人中半数以上の票を獲得している。

「立村くん、立村くん、天羽くん、天羽くん、立村くん……」

黒板に向かっている新井林が、チョークを持った手をぶらんと下げた。見咎めて美里が厳しく注意をした。

「結果が出てても、最後まで書いてちょうだい」

「すみません」

一年評議たちがひそやかにしゃべりはじめる。誰も止めるものはない。二年男子たちは無言でただじっと新井林の背中を見詰めている。二年女子だけが、「やっぱりねえ」と納得顔で呟くのが、上総の席から丸聞こえだった。なにせ隣の列なのだから。

轟さんがちらと上総に目を向け、次に天羽へとそのまま流した。つられて上総も天羽の様子をうかがうと、丸まった背がだんだんぴんしゃんとしてきているのが遠めでもわかった。

——だから最初からそうなることに決まってるって、言っただろ。

——これがあるべき姿なんだ。評議委員長はこうでなければならぬんだ。

「正」の字を形作ることができなかった「立村」の列。

「正」の字は四個、一本の線もあまることなく、形作られた「天羽」の列。

——天羽忠文 二十票

——立村上総 四票

本条先輩の言う通りだった。

決戦投票、二者択一は、完全なる権力の見せ場。

圧倒的多数。完璧に勝負あり。

デットヒートすら、演じることができなかった。

「以上、開票の結果、次期評議委員長は天羽くんになりました」

美里の声は冷静だった。ヒステリックにとんがることもなく、上総を壇上からにらみつけることもなかった。そのまま開票した用紙をまとめて新井林に渡し、

「新井林くんに一応票数が間違っていないかどうか確認してもらって、それで決定となります。それと、投票用紙なんですけど、すぐにやぶいて捨てて、ごみ捨て場に持っていきますから安心して下さい」

壇上から降り、美里はゆっくりと自分の席に戻っていった。通りすがりに轟さんを、そして難波をちらと見て、最後に上総へ視線を走らせた。運悪く、目が合ってしまった。

——何が言いたいんだよ。

言葉が見つからない。前に座っている更科がまた難波に何かを話し掛けているが、その言葉すら聞き取れない。音声は聞こえるのだが、その意味が繋がらない。これがいわゆる「ゲシュタルト崩壊」というものなのだろうか。横の二年女子列から向けられるぶしつけな視線と、聞こえよがしのおしゃべり、

「だよな、やっぱりそうだよなえ」

「納得って感じ？」

——そうだよな、納得だよな。

上総はひたすら、そのままじっと黒板の結果を見据えていた。

天羽が立ち上がり、一礼した。まばらな拍手。気まずい雰囲気。髪の毛を掻き毟るようなしぐさで笑いを取ろうとしているが、うまくいかないようだった。一瞬のうちに引きつった表情が上総に向けられ、すぐに笑顔をこしらえた。

「ま、今回に関しては、俺の一世一代の大勝負ってところでしたが、票を入れてくださったみなさん、どうもありがとうございますってところで、ちょっと俺もエキサイト状態なんで、今日のところはこれでお開きってことでどうでしょうか、ねえ先生」

声が震えていた。いつもの天羽ではない。顧問の方が生徒たちよりもずっと上総に目を向けているというのが鬱陶しい。

「そうだな、立村、お前もよくやってくれたがな、惜しかったな」

——惜しいだと？ 圧倒的多数じゃないか！

「いやいや、とにかく俺としても、これから立村には全力でサポートしてもらわねえと、にっちもさっちもいかねえし」

慌ててフォローしようとする天羽を、顧問は勘違いした言葉でさらに墓穴を掘る。

「いや天羽、お前はやはり評議委員長向きだと思うぞ。やはり半年、お前の活躍ぶりを見て評価したんだから、それはありがたく受け止める。それと、立村も本当によくがんばったが、ここで少し一息入れたほうがいいぞ。本当に立村、お前は限界まで努力したのを誰もが認めているんだからな」

——限界まで努力？ 半年しかやってないってのにか？

こっくり頷くしかなかった。途中からその声も、上総の耳には聞き取れなくなってきた。あの時と同じだった。杉本の前で自分の過去を暴露されたあの瞬間、周りの言葉が聞きなれない外国

語を聞いているのと同じくなってしまった。天羽のしょげ面と、うつむいたまま視線を合わせようとしない難波と更科。美里のきりりと引き締まった口元。すべてが上総には、刃として突き刺さっていった。

「そいじゃ、まずはこれで第一回評議委員会終了いたしますってことで！ ではこれからも皆の衆、どうぞよろしゅうに」

最後まで笑いが一切起きないまま、評議委員長選挙は終了した。

「悪い、今から男子評議だけで、集合を掛けていいか」

顧問、一年と二年評議が立ち去った後、手を挙げたのは難波だった。

すでにC組の新しい女子評議は轟さんに連れられて廊下に出た後だった。残っているのは男子三年評議四人と、美里、近江さんの女子ふたりだけだった。

「なんで女子は関係ないの」

「俺個人で言いたいことがあるからだ。女子には関係ない」

「関係なくないと思うけど」

美里が嘔み付いた。抑えた方がいいだろう、上総は厳しい声で制した。

「やめろよ、評議としてではないんだったら、関係ないしさ」

「立村くんは黙ってて。私、言いたいことあるんだけど」

かばんを机の上に置き、美里は難波を三秒ほど、じいっと見据えた。

「なんで、予備投票では立村くんと天羽くんが同点だったのに、最終結果、こんなに引き離されたってわけ？ ふつうに考えれば、新井林くんに戻った二票がどちらかに振り分けられるだけだから、あんな圧倒的多数で決まるなんてこと、考えられないじゃない」

「違う、清坂氏、そういうわけじゃないんだ。本条先輩が言ってたけどさ」

二者択一形式でこそ、本心があらわとなるもの、説明をしようとした。さえぎられた。

「そんなのどうだっていいの。私が知りたいのは、なんで天羽くん、いきなり立候補しようとしたの？ なんでそのあとの投票準備を琴音ちゃんが準備してたの？ なんでいきなり予備投票とか決戦投票とか思いついたわけ？ 私、そんなの全然知らなかったのに」

「いや、俺もやっぱしさあ、近江ちゃんに男ってとこ、見せたくってなあ」

明らかにごまかしだ。上総にもわかる。美里には通じない。ぴしゃっと言り返された。

「ふざけないで！ 難波くんとか更科くんがいきなり開票係に立候補した時も、手際良すぎるって思ってたの。ああいう場合、なんでいきなり立村くんを引き摺り下ろしてふたりでやろうとするわけ？ 男子と女子で組むのが自然じゃない？」

「関係ないぞそんなのは。そんなことよか男子だけで話を少しさせてくれ」

ぶっきらぼうに難波が振り切ろうとする。美里が食い下がる。上総は立ち上がりかけて、思わず天羽と目が合った。首を振る合図に、まずは留まった。

「天羽くんなんで立候補したのか、私、だいたいわかってるよ」

「はて？ なんでやんしょう」

また調子外れのおちゃらけ口調で答える天羽だが、美里には全く通じなかった。つかつか近づ

いていった美里は、近江さんにだけか細い声で、

「ごめんね近江さん」

しおらしく謝った。きょとんとしている近江さんを背にして、天羽に向かい、

「天羽くん、新井林くんを蹴落としたかったんでしょ。三年だけで決戦投票に持ち込むためにしたんでしょ」

「おい、やめろよ清坂氏」

このままだと天羽が激昂してしまうに違いない。あいつが切れた時の怖さを、西月さんの事件で上総は重々承知している。美里はその激しさを知らない。だからそんなこと言えるのだ。傷つくのは天羽もそうだが、美里も同じだ。

「立村くん、しつこいようだけど黙ってて。天羽くん、もしかして、立村くんを委員長にするために、わざと立候補したんでしょ」

「言うなよ！」

もう抑えきれず、上総は美里の肩を揺さぶり引き戻そうとした。天羽は荒れない。笑ってはいないが、鼻の頭を掻きながらうつむいている。難波も、更科も同じだった。ひとり近江さんだけが退屈そうに足をぶらんぶらんさせていたが、

「清坂さん、私もそう思ったんだけど、こういう面倒な話は男子同士でさせたほうが楽よ」

美里の側に近寄り、肩に手をかけた。されるままになっていた美里も、

「ううん、でもここできちんと話をつけておかないと、あとで困るもん」

しずかに振り切った。上総に向き合うと、

「なんか予備投票の段階でなんか変だなと思わなかった？ 立村くん。それとも気付かない振りしてたってわけ？」

「気付かないたってさ」

「私だってわかったんだよ。立村くんと天羽くんがぴたっと同じ票になるわけないって」

「でもなったんだからしょうがないだろう」

上総も言い返した。だってそれ以上言いようがない。不正でもしたとすればそれはまずいだろうが、実際問題は難波と更科が取り仕切ったわけだ。決戦投票も当の本人、美里が新井林を引っ張り出してきて行ったのだから、間違いはないはずだ。

「いい、こういうことじゃないの」

美里は上総を見捨てて次に天羽に近づいた。もう一度近江さんに、

「ごめんね」

謝り、その後正面から続けた。

「立村くんと新井林くんとだったら、票が割れるかもしれないけど、天羽くんが加わったら自動的に三年ふたりが上位に来る計算になるじゃあない？ 私がもし一年二年だったら、あとあとのこと考えても怖いから、ちゃんと三年に投票するよ。立村くんにするか天羽くんにするかどうかは決戦投票まで迷うかもしれないけど、二年には絶対入れないよね」

上総は天羽を覗き込もうとした。視線を逸らす。いやな予感がした。まさか、そんなわけがない。

「でも、決戦投票に回った場合、たぶん立村くんが今までの実績で票を集める、そう計算したんじゃない？ 天羽くん、自分のこと、それほど力がないって思ってたんじゃないの？」

「いやいやそんなあ、俺は近江ちゃんから愛の一票もらえれば」

鼻先でふん、と無視の姿勢でいる近江さんに視線を投げた。

「ふざけないでよ！ それとね難波くん、私ね、予備投票の用紙、捨てる前にちらっと見たんだけど、白紙の投票用紙が二枚混じってたのはどういうこと？」

「白紙？」

思わず問い返してしまった。難波と更科は互いに顔を見合わせ、

「そんな証拠あるのか？」

開き直るような口調で答えた。素早く美里も切り返す。

「まだ用務員室のごみ箱に投票用紙残っているはずよ。今から取りに行くけど、いいの？」

息を呑んだ上総の前で、三年男子評議は無言のままうつむいた。

「お前たち、どういうことだよ」

声に力が入らない。みなぎっている美里の言葉が、ずきずき痛い。天羽、難波、更科が顔を見合わせたけど、それ以上口を利かなかった。上総もさらに尋ねるしかなかった。

「つまり、俺を委員長にするために、票の操作、したなんてこと、ないよな」

「立村くん、だからお願い黙ってよ！」

揺らぎなく美里は言い放った。上総の眼をしっかりと見据えたまま。

「私、決戦投票の用紙読んだ時、だいたい誰が票を入れたか筆跡でわかったの。誰が誰ってここでは言わないけど、立村くんに入れたのは四票だけだったの。これは本当よ。新井林くんにも確認してもらったもん。だからなおさら予備投票がこんなに票ずれるなんてこと、ないって私思ったのよ。天羽くん」

「はあ」

力なく天羽が答える。

「つまり、予備投票の段階で、立村くんは天羽くんに水をあけられていたってことじゃないの？」

最初から、評議委員過半数の意志って天羽くんを評議委員長にしたい、そう思っていたってことじゃないの？」

頭の中が混乱していく。目の前の男子評議連中が何を考えていたのか、読めそうで読めない。なぜそんなややこしいことをする必要があったのだろう。

「清坂、どちらにしても新井林の票は最下位だった。上位二人が決戦に進んだ。それだけじゃ問題あるのか」

難波がようやく言葉を発した。美里も受け答えた。片手で机を叩いた。

「そうだね、私もそれは確かだと思うんだ。立村くんと一対一だったらどうなったかわかんないけど、天羽くんが対抗馬だとしたら、もう新井林くん勝ち目ないと思うよ。だから、新井林くんあんなに元気なかったんだよ。けどね、どうして立村くんと同点決戦にしたかったのかなって、それが不自然に思えてならなかったの。最初から天羽くんが圧倒的票数を取ってたとしたら、

その段階で決戦なんてする必要はないはずだしね。だから難波くんと更科くんの二票分を、天羽くんか立村くん、どちらか足りない方にまわせるようにってことにしたんじゃないのかな。本来は天羽くんが天羽くん十一票、立村くん九票、新井林くん二票、棄権二票。本来はそういう結果なんだよね」

「清坂氏、つまりこういうことか」

割り込み上総は、思いつくまま繰り返した。

「この選挙は俺を評議委員長に再選するための、出来レースだったってことなのか」

上総には一切答えず、美里は天羽に問い掛けた。

「結局みんなは天羽くんを選んだってことよね。難波くんも更科くんも」

ぐいと顔を挙げ、美里は上総に目一杯見開いた瞳でもって、訴えた。

「最初からみんな、こうしたかったんだもんね、しょうがないよね立村くん、あきらめようよ」

沈黙の中、上総も、天羽も、難波も、更科も口を利けずにいる。

近江さんが美里の肩を抱き寄せ何かを耳にささやいた。聞こえなかった。

「うん、そうね。そういうこと」

怪しく微笑んだ近江さんは天羽くんにさらっと言葉を投げかけた。

「悪いけど、これから清坂さんを預かっていくから、よろしくね。委員長も悪いけど」

はっと口を抑えた。空気がこわばったのがさすがに近江さんにも伝わったのだろう。

「立村くん悪いけど、清坂さんお借りするわよ」

——もう、委員長じゃない。

ふたりの女子が教室を出て行くのを見守り、さらに数秒間、空白のまま男子評議四人衆は立ち尽くしていた。

「今の話、本当なのか」

上総が口を切った。言葉を抑えようとしても、震えているのがわかる。今にも口汚く罵りそう
で怖かった。三人をひとりひとり見つめ直し、

「もしそうなら、どうしてそんなことした？」

「悪い、立村。俺の手回しが悪すぎたせいだ」

天羽は両手を机の上におき、深く頭を下げた。ゆっくり、そのまま額がつくぐらい。とうとうしゃがみこみ繰り返した。

「申し訳ねえ。俺の読み違いだ。許してくれ、頼む、頼む」

三回目の「頼む」に、かすかな涙の揺れを感じた。上総は動けなかった。

「清坂ちゃんの言う通りだ」

そのまま天羽がしゃくりあげるのを見つめていた。

「難波、更科、お前ら、どうして立村を最後までフォローしなかった？ 約束しただろが！」

「天羽、お前もいいかげん、本音を出せ」

難波が言い返した。

荒れるでもない、ただ拳骨はこしらえたまま。めがねをはずし、片手に握り締めた。

次に上総を正面から裸眼で見た。

「立村、お前はもう、限界までやっただろ」

——限界なんて、そんなまさか。

首を振る。全然、そんなの全然、やってない。本条先輩の求めるほどには何もしていない。難波のあとを引き取る形で、更科が続けた。

「あのさ、天羽。俺とホームズのふたりでさ、いろいろ話をしてたんだ。お前が立村を絶対評議委員長にしたいって言って、トドさんの提案で話がまとまった時にさ。どうして天羽は自分で立とうとしないのかなってさ」

難波がうつむき、背中を三人に向けた。更科の声が明るく響く。

「まあ冴えたやり方だとは思ったけどなあ。あまり票差を出さない形で決戦投票まで持っていけば、立村に自然と流れるだろうってことで。けど、ホームズも、俺も、それなりに考えたんだよ。けどさ。立村が百パーセントやるところを、天羽、お前なら千パーセント出しちまうんじゃないかって、俺もホームズもその点、同じ意見だったんだよね」

——俺が百パーセントで、天羽が千パーセントかよ。

難波がそのままうつむいて、めがねを壊しそうなほど握り締めている。更科はあっけらかんとさらに続ける。

「もちろん、新井林と立村の決戦投票に持ち込まれたら、俺たちはなんも考えないで立村を推したよ。これはほんと。けど立村と天羽。選べといわれた場合、どんなに天羽がいやがったって、評議委員長向きの奴を押したくるのが、本音じゃないかなって、俺思うんだよね」

「お前らやったこと、裏切りだぞ裏切り！」

「違う！」

机をひっくり返し、難波が机の脚をがたと蹴った。

「天羽、お前ほんとはずっと前からトップに立ちたかったんだろ？ 結城先輩にひいきされてたところから、本当は評議委員長やりたかったんだろ？ 立村がへまばかりしているところみて尻拭いしてて、ほんとは自分だったらもっとやれるって思ってたんだろ？ 俺たち三年間一緒にやってきたんだぞ。それを気付かないほど、節穴かと思ってたのかよ！ 青大附中のホームズをなめるなよ！」

「なんだと、言い方もう少し考えろ！」

「いいか、天羽」

難波は口調に激しさを増し畳み掛けた。近づき、あわや一発張り倒されるかもしれない距離まで天羽に頬を近づけた。

「清坂に見られていたのは計算外だった。けどな、予備選挙の段階で天羽の圧倒的勝利は確定してたんだ。けどあのままだったら立村の立場がねえってことであの時は俺と更科の二票分上乘せした。約束通りな」

「お前立村を目の前にしてそこまで言うか？」

難波は上総にふたたび顔を向けた。天羽の肩に手を置き、少しやぶにらみ気味に目を細め、頬にむりやりえくぼをこしらえた。もちろん、笑ってはいない。

「立村、お前、ほんとによくやったと思う」

大きな瞳が上総を射た。

「俺も見てて、ここまでやらせるか本条先輩って思ったぞ」

首を小さく振って、上総に語りかけた。

「だがな、努力してできることと素質でもってやれてしまうこととは違うんだ。更科が言った通り立村が百パーセント死ぬ気でやり遂げたことを、天羽は千パーセント軽く越えられる、それだけの違いが、俺には見えてる」

「だから、天羽に投票したのか？」

上総の目の前で繰り広げられている光景。すべてが異様に映っていた。難波は答えの代わりにしっかりと上総の眼を見据えたまま、静かに告げた。

「本条先輩だってここまでお前がやったこと、絶対認めてくれるに決まっている。最後の半年、本来任務につくべき男に席を譲れよ、立村」

涙目で激しく難波へ食ってかかる天羽。

苦味ばった顔で「真実」を正面から突きつける難波。

間を取るかっこうで、それでも一切揺るがず言い放つ更科。

——俺はどうすればいいんだろう。

取り残された上総は、ぼんやりしたまま三人の様子を目に留めていた。

——こんなことになるはずじゃなかったのに。

責任を取る。そう天羽と轟さんに断言したのは自分自身だというのに、その「責任」がいいかげんなやり方過ぎて、本来巻き込むべきでない奴まで巻き込んでいる。最初からそうすべきはずだったのにこだわってしまった拳句、この三人をずたずたに傷つけた。

——いや、こいつらだけじゃない。

わんわん叫びながら、目を潤ませて去った美里の訴え。

上総に裏切られたと思い込み、激しく憎んでいる杉本梨南の怒り。

——俺は、責任を取らなくてはならないんだ。

上総はかばんから黒い手帳を取り出した。父から譲り受け、読まれてはまずいところをフランス語の筆記体で書きこみ、評議委員関連のデータ関連は日本語でと使い分けている。

「天羽、これ、コピーしろよ」

肩を叩き、天羽の手に持たせた。力のなかった天羽の指先が、手帳の革表紙に触れたとたん息を吹き返したようだった。ぴんと伸びた。上総を驚いた風に見下ろした。

「立村、どういうことだ？」

「本条先輩から教えてもらったこと全部この手帳に入ってるからさ。一応、後期の予定も含めて、評議委員長として必要なことは詰め込まれているはずだから。わからなかったらあとで電話くれれば、いくらでも教える」

「おい、お前」

言いかける天羽に上総は首を振り、難波と更科、ふたりにも頷いてみせた。

「お前たちの言う通りだと思う。たぶん、俺が同じ立場だったとしても、選択は同じだったと思うんだ。だから、もう、いいだろ」

言葉を波立たせないように呟いたつもりなのに、なぜか喉の奥が詰まってくる。まずい、こんなところで醜態なんぞ見せられない。小学校時代の泣き虫なんかじゃない。一度は評議委員長まで上り詰めた立村上総が、こんなところで膝ついて泣きじゃくるわけにはいかない。

「先に帰る」

「立村、待てよ」

難波と更科が同時に呼びかけた。低音と高音が重なり、微妙な響きを耳に感じた。

「話は終わっちゃいないだろ？ まだ話すべきことがあるだろ！」

「そうだよ立村。あと半年、俺たち評議でやることたくさんあるんだよ。何もお前の能力がないって決め付けたわけじゃないし」

振り返ると、ふたりが交互に頷いている。上総は横に首を振った。

「俺が最初から気付いていればよかったんだ、申し訳ない」

A組の扉を後ろ手で閉めた。これ以上天羽たちと会話を交わしたら、一気に小学生に戻ってしまう。ひとりになりたい。駆け出そうとした。でもできなかった。

廊下の窓際に、美里が背中をぴくぴくさせながら、近江さんの胸に顔をうずめていた。

「ああ、委員長」

自然と口からこぼれてしまった、過去の肩書。訂正するのも忘れていたようだった。

上総は軽く会釈ですませようとし、背に近づいた。

美里は顔を向けようとしなかった。その背中を、近江さんは指先で何度も撫でた。

喉に詰まったものを上総はゆっくりと飲み込んだ。ぎりぎり揺れないですむ程度の低い声を絞り出した。

「近江さん、清坂さんをよろしくお願いします」

一礼し、もう一度美里の髪の毛を見つめた後、上総は階段を降りていった。

——ひとりで泣く権利なんて、俺にはない。

今年は年賀状もそれほど出さずにすんだ。母に引っ張り出されて師走のお茶会手伝いやら母の年賀状あてな書きをさせられたりとか、せいぜいその程度ですんだ。去年が忙しすぎたのだから比べたところで何にもならないとわかっていても、やはりため息がもれる。

「上総、どこに行く」

「友だちと会う」

一言だけ父に告げ、外に出た。一晩で膝くらいまで積もった雪が、庭の草木に覆い被さり、丸いオブジェに変えていた。雪かきだけはさっき終わらせた。それなりにお年玉も稼いだ。少しくらいはめはずして遊んでも、ばちは当たるまい。

「りっちゃん、お待たせ」

自転車で駅に到着したのは朝十一時近くだった。

まだ正月三が日が終わっていないのに、平気で付き合ってくれる友だちというと、南雲くらいのもんだろう。大抵みな、この時期は親戚周りだとか親に付き合っただけ帰省とか、いろいろと気ぜわしいものだという。南雲からかかってきた電話に飛びついたのは、いいかげん新しい空気を吸い込みたかったからだった。

いつもながら南雲の格好は派手だった。銀のジャンパーに漂白したジーンズ、髪の毛はわざと乱した風にブローされている。かすかに銀粉がかかっているようにも見える。見るからにきらびやかだ。いや、どうみても高校生以上に見える。

「今日はどうする？ まずはなんか昼飯、食う？」

「そうだね」

上総は言葉少なく同意し、駅の奥まったところにある焼肉屋へ向かうことにした。

「りっちゃんなんだかエネルギー足りないから、肉とか食って体力つけたほういいよ」

南雲の助言も、今は重たい。

初詣客の姿はほとんどなく、高校生くらいの集団があちらこちらでたむろって居るのが目についた。青大附属の連中がいるかもしれないと危惧したけれども、それは心配なさそうだった。南雲の歩いていく方面はどちらかというと青大附属の表向きイメージ「優等生」と相反する場所に思えたからだった。小路も狭く、また店も少し重たい雰囲気を通りだった。上総は一人できたことがあまりなかった。

「よくこの辺で遊ぶのか」

「うん、昔なじみの連中とさ。結構陰では俺もワルなもんで」

青大附属中学・規律委員長の南雲はにこやかに答える。

「けどさ、この辺結構うまい店が多いのと、あまりうちの学校の連中と顔合わせすることもないのでさ、気楽なわけなんだよね。ほら、いろいろ顔合わせるとうるさいじゃん？ やっぱ、肩書の重さって言うのかなあ」

——肩書の重さ、か。

もう自分にはないものを、改めて思った。

「だけど、ここに来ると軽く、好きなことできるってところがあるんだよなあ。ま、今日は軍資金もそれなりにあるし、りっちゃん、少しここいらでリフレッシュしましょうや！」

「ありがとう」

言葉がうまく出てこない。人前でしゃべることがこの秋以降、ほとんどなくなってしまったのだから自然といえば自然なのだけでも。

「ほら、あすこの焼肉屋、ランチが五百円なんだけどさ、すっげえ量あってうまいったらねえの。りっちゃんいこ、いこ」

自分よりもげんこつひとつ背の高い南雲を、上総は黙って見上げた。言い返すことはせず、そのまま黙ってくっついていった。すれ違う男子集団が、ちらと南雲に目を向けて、うさんくさそうな眼差しでにらんでいるのが気になった。やはり、この街でも目立つのだろう。

「さ、食おう、食おう」

いかにも街の食堂という感じの場所だった。細い小路一本入って、両隣にスナックと飲み屋が並んでいるという場所で、昼間入るのはなんだか場違いという雰囲気だった。南雲曰く、

「でもこういうとこって結構、いまの時間帯、穴場なんだよ」

だそうだ。一番奥の座敷が空いていた。黙ってそこに通された。鉄板に火を入れてもらい、油を引いてもらうのを上総はぼんやりと眺めていた。

「何にする？」

「同じでいいよ」

「じゃあ、お任せ五百円ランチで！」

手際よくにこやかに注文する南雲。最初ぶっきらぼうだった四十代くだいの女性店員が、思わず微笑んだ。上総の方を一切見ずに、すぐに厨房へ戻っていった。

「あーあ、けどよかったあ。りっちゃんいねかったらどうしようと思ったよ。だってさみんな、どっか行っちゃまって遊ぶ奴いねえんだもんなあ」

鉄板が温まるまでの間、南雲はジャンバーを脱ぎ思いっきり伸びをした。白い荒編みのセーターのみ、さっきまでのワルっぽい雰囲気が消え、どこぞの「白馬の王子さま」に生まれ変わったかのようなだった。この姿、青大附属の南雲ファン女子に見せたらすぐプロマイドをこしらえたがることだろう。ぼんやり上総は考えた。口には出さなかった。

「正月って、つまらねえよな。どこも行くところないし、公立の連中は受験で忙しいって言うしさ。ほんっと淋しいっただらないよなあ。な、りっちゃん。肉、来たよ」

さっきの女性店員が片手に野菜の盛り合わせ、もう片方に切り落とし肉の山を抱えてもってきた。南雲に笑顔で「先に野菜を焼いたほうがいいですよ」と一声かけ、上総を一瞥した後また戻っていった。

「じゃあどンドン焼こうよ焼こうよ。まずは、野菜からだなあ。俺、野菜よりも肉食いたい気分なんで、りっちゃんが遠慮してたらさっさと取るから、その点ご覚悟のほどを」

「いいよそれで」

また簡単に答えると、上総はおずおずとキャベツとにんじんの千切りを黒い鉄板に並べていった。一枚ずつ丁寧に肉を並べていき、箸を持つ手を止めた。

「最近、あの人とは会ってないのか」

「あの人？」

上総が指した「あの人」とは、決してクラスメートの奈良岡彰子でない。

すぐに勘付いたのか、南雲は大きく頷いた。

「あの人はさ、今正月にやってるどっかの応援で駆りだされて留守」

——チアリーダーやってるんだよな。

去年、何気なく聞いた話を思い起こし、上総は黙って肉をひっくり返した。まだ赤く、火が通っていなかった。

食欲旺盛な南雲に追いつかず、上総は結局野菜だけにとどまった。

「あーあ、俺ももう腹いっぱい。けどりっちゃんなんも食わないのはなんで？」

「食欲ないから」

焼肉のタレにたまねぎをつけ、残りの野菜を処理することに専念した。もちろん全く食べたくないわけではない。ただ、どうしても肉に手が伸びなかった。腕が重くてならなかった。

「そうなんだあ。ま、俺は遠慮なくいただいたんで、あとは全部食っていいよ」

「うん、食べるよ」

腹いっぱいといいながら、さっきの女性店員さんに、

「すいませーん、アイスクリームお願いしまーす！」

なんて注文している南雲の胃袋、どうなってるんだろう。

「それにしてもさ、公立の奴らほんっと大変みたいだよなあ」

「らしいな」

「三月六日が公立高校の受験日だったっけ？」

「そう、二月十五日が青大附属高校の受験日」

「そうだよなあ」

南雲はさっそく届いたバニラのアイスクリームをさくさく食べ始めた。

「ま、俺たちは三年前に地獄の受験を終らせたおかげでただいま楽な日々を過ごしているわけですしねえ」

「三年前？」

「そ。俺もあの時ばかりは、まじで勉強したからなあ。塾にまで行ったよ」

小学六年のお正月は確かにそうだった。上総も母・沙名子によってびしびしごかれつつ、泣きじゃくりながら机に向かったことを思い出した。あまり、楽しい思い出ではない。

「ご存知の通り、俺は高校進学後、地獄のような男子寮生活に入るわけだから、せめて三学期は思いっきり羽を伸ばしたいと思ってるわけ。りっちゃん頼む、お遊び、付き合っちょうだいな」

」

「付き合えるところまでなら」

さくさく、たまねぎとにんじんをかみ締める上総。

「けどさありっちゃん、英語科に決まったのはいいけどさ」

南雲はあっという間にアイスクリームを食い終わり、上総が手をつけようとしていた野菜にまで手を伸ばした。食欲、留まることを知らない。

「古川さんとも一緒だろ？ うわあ、りっちゃんしっかり姉さんに仕込まれそうだなあ」

「図らずも、だな」

去年の十一月、青大附属高校・各学科へ、三年全員それぞれの行き先が発表された。

上総が英語科に進学できたのは周囲からするとむしろ当然、というところがあったらしくそれほど驚きもなかった。むしろもうひとり、あの「下ネタ女王」古川こずえがしっかりと英語科切符を手に入れたことの方が衝撃だったらしい。確かに英語の成績は悪くなかったのだが、それでもまずは友だちの多い普通科に進むだろうと思われていたのだが。

「古川さんにその点インタビューした？」

「なんで、とは聞いたよ」

英語科に行くということは、またも上総と三年間同じクラスになるということとなる。高校の先輩から聞いたところによると、普通科の場合は毎年クラス替えがあるらしい。しかし英語科の場合は一クラスしかないこともあって、自動的に持ち上がりとなる。

「単純に、外国へ留学したいからなんだって言ってた」

「まさか海外の裏ビデオとかチェックしたいってことじゃあないかねえ」

「その辺はわからないけど」

ひとりで大笑いして、南雲はにっこりしたまま上総に尋ねた。

「あとさ、英語科行く奴って誰だっけ？」

「よくわからないよ。たぶん英語で学年十位以内に入る奴はみな、自動的に流れるんじゃないかな」

上総の覚えている範囲内で言うと、A組の片岡、B組の藤沖、あとはわからない。またもうひとつ付け加えると、

「もし水口が試験滑ったら、自動的に組み込まれるという噂も聞いているよ」

「ああ、あいつなら大丈夫だろ、あっさり受かるに決まってるって」

それまで上機嫌だった南雲が、いきなりがりりとキャベツに食いついた。口の中をもごもごさせながら呟いた。

「あれだけびっちり、勉強してる奴がな」

——奈良岡さんとな。

南雲が現在ほれ込んでいる恋人が、同じクラスの奈良岡彰子であることは周知の事実である。その一方で心が冷め、二学年上の女子先輩と付き合っているというのは影での事実でもある。上総は昨年七月前後からそのことに気付いていた。同時に南雲からもそれらしいことをちらと匂わされた。

——うっかりここで奈良岡さんを振ることになると、今度は他の女子たちからのアプローチが激しくなるし、一度は惚れこんだ奈良岡さんに苦しい思いをさせることにもなる。いろいろ考えた結果、卒業までは現在の関係を「演じて」いくつもりなんだろうな。

上総なりに南雲の説明を聞かせてもらい、納得した。

もっとも奈良岡彰子は一切勘付いていない様子で、毎朝笑顔で「あきよくん、おはよ！」なんて言いながら手を振っている。もちろん南雲も「おはよっす！」と返し、取り立ててトラブルはない。上総からしたらずいぶん見え透いたことしているもの、そう感じるのだが肝心の奈良岡彰子は全く想像すらしていないらしい。

現在、こっそり交際しているらしい二年の女子先輩とは、青大附属から離れた場所で会い、喫茶店で話をしたりしていると言う。やはり知り合いと顔を合わせるといろいろと面倒だということもあり、いわば日陰の付き合いだ。このあたりの事情については上総もあまり詳しいことは聞いていなかった。聞く必要も今のところは取り立ててなかった。

関係あることといえばひとつだけ。奈良岡彰子が二月中旬に医学部進学専門の高校へ進学が決まれば、きれいにフェードアウトになるだろうということ。そして奈良岡彰子と一緒に同じ学校を目指し、日々ガリ勉に燃えているのが、かつてのクラスの赤ん坊・水口要だということも。ほとんどの生徒がエスカレーター式で青大附高に進学決定している中、ふたりは手と手を取り合い図書室で理数系の問題集をにらめっこしている。

自然と、南雲もその場に入ることなく「見守り」ポジションのまま、楽な位置につけている。

「そういえばさ、本条さんと正月会ったんだよなあ」

口を手で拭いながら、南雲は茶をすすった。頼みもしないのに今度はお茶が出てきた。まずは南雲に、そして上総には湯のみの底が濡れた状態でどすんと置かれて。

——本条先輩か。

「あの人も演劇部の雰囲気性が性に合わないって言ってたんだよなあ。なんでも高校演劇の世界ってお約束ごとが多いのと、コンクールが目標になっちゃうからどうしてもつまらん台本を選ぶ羽目になっちゃって、なんだかうんざりしたんだと。で、これからなんか別のことやろうってことで、二学期終了後、退部届を出してきたんだって。りっちゃん、聞いてた？」

上総は首を振り、そのまま目を焼肉のタレに受けた。油が浮いていた。

「そっか。やっぱりそうだよなあ。一度青大附中・評議委員会仕込みの乗りを経験したら、そう簡単に妥協はできねえよなあって俺も思うよ。ほら、本条先輩の『忠臣蔵』すげかったもんなあ。衣装もセットも手作りとはいえ本格的だったしさ。ビデオカメラだってばりばりだったしさ」
「ああ、あれ、結城先輩の家で用意してくれたものばかりだったから」

二学年上の評議委員長だった結城先輩は、芸能プロダクションかなにかを手がけている家の息子だとかで、なぜかその手の設備は整っていた。原因はいまだにわからない。

「それがさ、本条さんいうには、まず高校演劇の場合『感動・お涙ちょうだい』この路線で行かないと青瀉地区の大会を突破できないんだって。よそはどうだかわからないけど、とにかく反戦ものとか、もんぺはかまはいたような物語が受けるんだと。本当は本条先輩、とことんテレビ

ドラマチックなエンタメを目指してたんだけど、そんなことしてたら制限時間一時間ばりばり越えちゃうし、それ以上に審査員受けが悪いってことで即却下。部員もみんな、やっぱ、地区大会優勝したいだろってことで当然、同意。本条さん孤独、ってパターン」

——本条先輩が孤独？

絶対にありえないパターンに思えた。

「まあ、話聞いてみるといろいろあったみたいだよ。やっぱし裏方の技とかそういうのは青大附属上がりの本条さんの方が断然分があったみたいだし、かといって他の部員たちからしたらそういうのは目の上のたんこぶみたいなものだしてね。俺もそのあたり、わからないわけじゃあないけどさ。想像つかないよ。本条先輩が、舞台の上でたらたら涙流しながら、『戦争はいやだー！』なんて叫んでるところなんでさ」

——絶対に、考えられない。

上総は頷いた。呟いた。

「それならこれから、どうするつもりなんだろう」

「さあ、だからさ、俺も言ったの。『本条さんそれだったら、今度生徒会あたりに立候補して、かつての青大附属評議委員長としての敏腕振るったらいかがですか』ってさ。そしたら、なんか歯切れ悪くてさあ。やっぱり、いろいろあるのかなって思った次第」

「いろいろ？」

「やっぱし青大附属とは全然、立場も状況も違うみたいだしさ」

南雲はそれ以上詳しいことを言わなかった。上総からしたら初耳のことが多かった。でもそれほどショックは受けなかった。すでに十一月以降、上総は本条先輩から連絡を断っていた。義務的に年賀状だけは出したけれど、返事はなかった。もう、一介の評議委員に降りた自分には、もう本条先輩に現在の評議委員会状況を説明する義務はない。

「じゃあ腹もいっぱいになったとこでさ。その辺のゲーセンにでも行ってみる？ ばしばしとシューティングでもやってみるとかさ。かなりストレス解消になると思うよ」

南雲が膝を崩し、お茶を飲み干そうとしている。

「この辺にあるのかな」

「あるよ。ただこの辺ってさ、ちょっと怖い人も多いから駅の方に戻った方がいいかもなあ」

通ってきた道を思い返してみた。やたらと饅売たにおいのする小路の道端。なぜか店の裏口が目立つ通り道。その中になぜか違和感を感じさせる、ピンク、もしくはオレンジ色の建物。冬なのにミニスカートでうつむいてあるく女性たちを数人見かけた。

「なぐちゃんひとつ聞きたいんだけどさ」

厨房で上総たちの様子を伺っている女性店員に聞こえぬよう、上総は前かがみになり南雲の耳まで口を近づけた。

「あのやたらと立派な建物あるだろ、あそこどこ」

「ああ、りっちゃん知らなかった？ 本条さんも連れてきたことないの？」

南雲の返事は、上総の予想していたものとほぼ同じだった。

「いわゆる連れ込み、ラブホテルって奴」

さらりと、なんのてらいもない。食事した後でよかった。全身が妙に熱くどきまきしてしまっても、変に思われなそうです。上総の顔を不思議そうに眺めたあと、南雲は片膝を立てたまま、「見かけは立派だけども、部屋は修学旅行の時使ったホテルの方がずっときれいだと俺は思うなあ」

——比較、してるのか？ それ以前に、使ったこと、あるのかよ？

相槌が打てなくなった上総に、南雲はにっこり続けてくる。いつもの南雲の口調で軽く、「たった二時間で三千円もするなんて、もったいないよなあ。ここの定食六回分食えるじゃん」ごちそうさま、そう言って手を合わせ、一礼した。

——経験してるんだ。

南雲に促されて五百円払い、雪解けでびちゃびちゃした通りを歩いた。

靴は大雪に備えて底の厚いスニーカーで決めてきた。歩くのに支障はない。

冬の晴れた空からはかすかに細かい雪が舞い降りてくる。でも冷たさを感じるほどではない。

上総はそっと自分のコートを羽織り直した。なんだか身体の中で何かがはじけてくるような感覚があった。南雲の歩いていく方向には、話題に登場した例の「ラブホテル」が並んでいるのが見えた。まだ昼過ぎたばかりのせいか、入っていこうとするものは誰もいなかった。そこの従業員らしい男性たちが雪かきしている姿だけだった。

「あのさ、なぐちゃん」

「ほいな」

「こういうところって、入る時、どうなのかな」

目でちらちら見ながら、変に思われないう上総は尋ねた。

「やはり、いろいろと年齢チェックとかされるよな」

「されないよ、よそはどうだかわかんないけど、俺はされなかった」

——俺は、って、やはり？

「ってかさ、こういうところって、顔が見えないようになってることが多いんだよね。お金を払うところだけ、手が出てくるんだ。そうだなあ、縁日のお化け屋敷みたいな乗りなんだよね。それであとは部屋を選んで、GOって感じで」

「中はどうなってるのかな。やはり、この前の修学旅行と同じ感じなのかな」

「そうだなあ。天井に鏡が貼り付けられてたり、あとやらしいビデオの番組を見ることができたり、そのくらいだよ、違ってるところは。あ、そうそう。風呂はすごくてっかい。足思いっきり伸ばせてその点はいいかもしれないよ」

南雲の口調は実にあっさりしている。ちっともねばっこいところがない。たぶん目の当たりにした正直な感想なのだろう。

——それを受けてる俺の方が、ずっと汚い奴じゃないか。

もう一度振り返り、ピンク色の建物を眺めた。すぐに目をそらし、足元を見つめた。

「時間的には、二時間くらいなのか」

「それ以上いると延長料金取られるしね」

「それですべて間に合うのか？」

言葉に詰まった様子の南雲が、上総をいぶかしがるように見る。

「すべてって、ああしたりこうしたりってことだよ」

湿気のない言葉だからこそ、頷くことができた。南雲はすぐにやわらかく答えてくれた。

「終わるよ。まあ、俺もよく入ったのが去年の夏前までだから、あまり先輩っぽいこと言えないけど。たまたま年上の人だったってのもあるのかもなあ」

——年上？

もしや、あの、例の先輩とだろうか？ 足がすくむ。

「あ、違う違う。通りすがりの人だったけど。今思えば俺もずいぶんとんでもないことやっちゃまったなって思うよ。けど、まあ、することは基本的に同じだってことわかったし、だからどうってのもないしさあ」

——通りすがりの人？

いくらなんでも正月真昼間からするような話題じゃない。

声が出ず、動けないまま上総は南雲をじっと見上げていた。

「おーい、りっちゃん、どうした？」

呼びかけるように、おだやかに南雲が声をかけてくれたけれど、上総にはそれに続く言葉が見つからなかった。

——やっぱり、みんな、経験してるんだ。

中学三年、十五歳。決してありえないことではない。

実際、修学旅行二日目朝にも、評議委員仲間の天羽から経験者としての感慨を打ち明けられていた。天羽の場合は中学二年の夏だったという。相手は当時入会していた宗教団体の女性信者で、三十四歳だったという。ちなみに上総の母と同じ歳。そちらの方にまず、衝撃を受けたことを覚えている。

天羽の場合はその後の宗教団体脱退よしなも絡み合っていて、事情を聞く限りしかたのないことだったのでという気がしていた。目の前でふたりきり、露骨に誘われたとしたら、大抵の男子は落ちるだろう。

しかし、南雲の場合は違う。

街を歩く見知らぬ女性と、自分の意志でもって、ピンク色の建物に入り、二時間それなりのことをしたという。しかも、一度や二度ではないという。

本条先輩くらいだろう、そういう奴は。今まではそう思っていた。

でも、今、上総の周りではごく自然と、みな、自分なりの肉体的元服式を迎えている。

自分が知らないだけで、もしかしたら他の連中も、どこかで。

——取り残されてるのかよ。

「なぐちゃん」

ようやく歩く気力を取り戻し、上総はコートの襟を閉め直した。

「経験した後、何か感動みたいな、あったのか」

「感動？」

戸惑いつつも、一度「そうっすねえー」と呟き、南雲は空をまっすぐ見上げた。銀粉のかかった髪の毛に、少し大きめの雪が降り、すっと溶けた。

「理屈じゃないなってとこかなあ。ほら、やっぱりその時の格好が格好だろう？」

「格好？」

すぐにイメージしてみる。

「なんてっか、『こんなもんかな』ってのと『俺は男なんだ』ってのとが入り混じったみたいでさ、もう何が起ころともどんとこい、って自信とさ」

「自信？」

感情の繋がる意味がますますわからない。上総の顔にそれが現れていたのだろう。南雲はかすかに笑い声を立てた。

「変な言い方だけど、いろんなしがらみから自由になった。それが一番大きいなあ」

——自由。

しばらく南雲と一緒にゲームセンターでふらふらした。やはり青大附属の生徒とすれ違うことはなく、かといって怖いお兄さんたちとぶつかることもなく、言われるがままにゲームに興じていた。

一番恐れていたのは本条先輩と鉢合わせすることだったが、それもなかった。

「りっちゃん、俺、コーラ買ってくるけど、どうする？」

「同じでいい、頼む」

南雲に百円玉を渡し、上総は外のガードレールに腰かけた。食事してからまだ三時間くらいしか経っていないのに、もう夕暮れ、薄暗い。雪もまた一降りしそうな気配がした。煙草のにおいと熱気で酸欠すれすれだった上総には、外気の冷ややかさがむしろ心地よかった。コートを着たまま、まだ残る汗の滾りを感じていた。

——天羽も、なぐちゃんも、みんな、自由なのか？

ひとり、心に問うた。

——だから、俺みたいなどうしようもない奴に、よくしてくれるのか？

年越し前、終業式後、三年男子評議と顔を合わせた時のやり取りを思い出した。

——こんな奴を、今でも立ててくれてるのか？ もしかしたら新井林も、だからそうなのか？

そうだろうきっと。上総が天羽の立場だとしたら、とてもだけどそんな余裕は持てそうにない。すでに天羽は後期評議委員会を自分なりのベストに組み替えした後、評議委員会のプライドを持って生徒会側と接触している。杉本を含んだ生徒会役員立候補直前のトラブルも、天羽には直接関係なかったこともあり、全く問題も起こらず進んでいるようだった。「ようだった」と推測の表現しかできないのは、上総がすでにその事情を知ってはならないと戒めているからだだった。顧問の先生からもたまに、

「立村、お前、余計な口出しするな。天羽の自由にさせてやれ」

そう助言されたりもする。自分でもそのくらいわかっている。でも、どうしても前期評議委員長としていろいろ感じずにはいられない。つい、

「本条先輩だったらこうしてるかもしれないな、どうかな」

とかささやいてしまう。もちろんあとで、自己嫌悪。天羽が笑顔で

「まあいいってことよ。立村ちゃん、どうもな！」

と受け止めてくれるたび、自分の脆弱な心に腹が立つ。

新井林も、上総が評議委員長から滑り落ちた段階で、一切つかかってこなくなった。眼中にない、といえいいのだろうか。天羽の判断で副委員長に置かれていることもあり、ポストそのものに不満はないようだった。もちろん佐賀はるみの生徒会長という現状には複雑なものもあるようだが、もともと委員会自体が三年生の仕切りとなっている以上実質的な次期委員長であることには変わらない。上総にも、一礼をする程度の礼儀はわきまえてくれているようだし、それ以上のことを求めはしない。天羽も新井林にはそれなりの凄みを利かせて接しているようだし、上総が口を出す必要は一切ない。

そして南雲。現在、規律委員長。当然再任。

「青大附属ファッションブック」冬号を発行し、その一方で規律委員会なりの仕事もきっちり行っていた。学校内の制服規律についての生徒たちの不満、および教師たちの主張、それぞれをまとめたアンケートを行った。その上で壁新聞をこしらえ、生徒たちからファッション画を募集、「別冊・青大附属ファッションブック」を発行しようとしている。教師受けのする行動と同時に、自分らのやりたいことをしっかり行っている。

これは南雲の女子受け人気におんぶしたものではなく、「規律委員長」としての南雲の手腕を評価したものだ。二学期終了段階において、南雲規律委員長は歴代規律委員長の中でも歴史に残る存在として記憶されるのではないかと、そうささやかれている。

かつての、本条評議委員長のよう。

やはり、彼らはそれなりに「自信」を持っているからだろう。

上総がどんなに欲しくても、手に入れられないものを確固とつかんでいるからだろう。

でもどうすれば、それが手に入るのだろう？

「立村なんか落ちるのは当然よね。もともと他の先輩たちも天羽先輩を一押しで評議委員長にしたいって言ってたんでしょ？ それを本条先輩が無理強いしたんでしょ？ やはりあるべきところにおさまってるのよ、みんな」

「ううん、根本的にね、なんで一年の段階で立村が評議委員に選ばれてしまったかというのが一番の謎なのよ。順当だったら羽飛だよ。それがどうして回りまわって立村になったのかというのが、不思議」

「自分に親切にしてくれた相手を逆恨みして、闇討ちして、それで平気な顔して青大附属に入学してくるんだもの、最低よね。まあ退学させる必要はないかもしれないけど、本来入るべき人がひとり落とされているってことは、自覚してほしいよねえ」

同級生、同学年、下級生、すべての女子からささやかれている言葉が、聞きたくなくても耳に入りこだました三ヶ月間だった。クラスの男子たちが今まで通り接してくれるだけでもありがたいことと思わねばならないのに、なぜ女子たちの態度をさらりと流せないのだろう。やはり、自信がないからだろう。自信なんて、どこで手に入れればいいのか？ どこかで買ってこれるものでもなし。いや、

——もしかしたら、手に入れられるのか？

上総は缶コーラを二本握り締めて戻ってきた南雲を、立ったまま迎えた。礼を言って受け取り、口をしめし、

「あのさ、なぐちゃん」

舌にぴりぴりくる感覚を、全身に広げるように感じながら、

「どうやったら、通りすがりの女の人と、そういうこと、できるのかな」

小声で尋ねてみた。

「ええっ？」

「きっかけはやはり、こうやって、歩いている人に声かけて、お茶を飲んで、それからあそこに向かう、って感じなのかな」

言葉もなく、ただ啞然と見つめている南雲を、上総はもう一度しっかり見返した。

上総の真意をどこまで察したのかはわからない。ただ、断るにも断れないものを感じたのは確からしかった。しばらく口籠もった後、

「あれ、持ってる？」

まず必需品の確認を上総にした。

「あれって？」

「だから、いわゆるエチケットの、あれだよ」

まさか、今思いついたことなのだから、準備なんてしているわけがない。南雲はため息をついた。

「じゃあ、それを手に入れてからでないは無理だよ。だって、どんな相手かわからないんだしさ。やはりそれは男側としてのエチケットではないかなと」

「どこで売ってる？」

上総はすぐに切り返した。もし南雲の話している相手が本条先輩とか天羽とか難波だとしたら、即、「じゃああれ、買ってくるか」と楽しく行くだらう。なんだか南雲の態度は、上総にその行動をあきらめさせようとしているように思えてならなかった。それが癪に障る。

「自動販売機、あるのかな。それとも薬局に行ったほうがいいのかな」

「薬局行くと、顔がばれるけどなあ、りっちゃん、それでもいい？」

「かまわない」

言い切った。南雲より前に歩こうとして、一瞬滑りそうになる。慌てて追いかけてきた南雲に肩を捕まれた。ポケットから一枚、ビニールに入ったうすっぺらい包みを渡された。

「りっちゃんそんなにあせりなさんな。わかったわかった。俺、持ってるから一枚やるよ」

「でも、それはまずくないのか？」

「今は使うことないしさ」

——相手探し、急ぐ必要ないもんな。

毒づきたかったけれどもそれはこらえた。南雲も、本条先輩も、新井林も、そういう経験ができる相手に不自由することはないだろう。自分がそうしたい、男としての自覚を味わいたい、そう思った時にすぐ手を伸ばせるだけの自信にあふれている。

でも上総はそうではない。

どんなに英語の勉強をしても、天羽や南雲や美里に気遣いされても、得られないもの。

今、この勢いがなくては、きっと永遠に手にできないだろう。

一瞬でいい。本当に、今だけでいい。

——その記憶さえあれば、俺は生きていけるかもしれない。

夕闇は濃くなっていていた。だんだん身体の奥から冷え切り、凍っていきそうだった。

上総は南雲とふたり、さっきの焼肉店近くに位置するナイトクラブ通りで、ガードレールの上に座っていた。こうしているとなんとなく、自然と声をかけてくるのだという。

「たぶん、ひとりかふたり、声かけてくると思うよ。青潟でも有名なとこだしさ、ここ」

「有名なのか？」

南雲は大きく頷き、小指で隣側のカップルを指差した。顔は見えないので年代はわからないが、女性が高校生っぽい男に声をかけたらしく、なにやら盛り上がっている。

「どうもあの二人も、逆ナンパされたばかりみたいだしさ」

「逆ナンパ？」

「俺たちは女性たちに選ばれるのを待ってりゃいいの。そうしたら軽く声かけられて、食事なんかおごってくれるかもしれないしさ。その段階でどうするか、りっちゃん判断すりゃいいよ」
じゃあひとりで待ってるよ、そのくらい言えればいいのだろう。

そのくせ、南雲と一緒にいることにほっとしているなんて、軟弱もいいとこだ。

——こんな奴だから、俺は。

上総はポケットの中に手を突っ込み、もう一度ビニールに包まれたものを握った。使い方は知っている。家にも父からほとんど手付かずのまま渡されたものがある。そして、その時の快感がどんなものかも、ある程度想像はつく。ただ目の前できちんと、手順通り進められるかどうか心配ではあった。

「まあ、ナンパされたあと、ほんとにお茶おごってくれるだけかもしれないし、話合わないなと思ったら逃げればいいし。そんなもんだよ」

「でもそういうのって、立場としては反対なんじゃないか？」

「そうでもないよ。あまりおおっぴらには言えないけど、俺たちくらいの年代好きなおばさん、結構多いんだよ」

「三十代以上？」

「も、いるね」

——母さんより年上の歳の人だったらいやだな。

せめて、二十代であることを祈りたい。

「けどさ、りっちゃん、いやだったらやめにしようよ」

「いや、いい」

唇をかみ締めた。こんなことだったらもったきちとしたスーツを着てくればよかった。今日上総が選んできたのは、ネルの青いチェックシャツに、厚めのチノパンだった。

お声かかりは思ったよりも早かった。ちょうど街のネオン放送が入れ替わった頃だった。南雲の方に、ベージュのロングコートを羽織った女性ふたりが立ち止まり、手招きをしていた。ただ明らかに南雲目当てだというのはありありと伺えた。

「なぐちゃん、呼ばれてるよ」

「ああ、黙ってこっちにくるのを待とうよ。こっちから行くと、いかにももの欲しそうに見えるし。やっぱしこの辺は、臨機応変で」

南雲は落ち着いている。全く慌てる気配がない。そのくせしっかりと女性の品定めはしている。年代はたぶん二十代前半、OLさんらしい。かなり金かけてる格好らしい。髪の毛も巻いているし、たぶん本命の彼氏探しばい。

「ま、最後まで行くとは思えないけど、友だちになるのだったらそれでもいいかな、って感じだよ。もし声かけられたら、一緒に行くか？」

「最後まで行かなくても、いいのか？」

「うん、それでもいいじゃん」

——俺はそうもいかないんだけどな。

したくてならない、そういう気持ちがあふれているわけではない。

そういう感情はむしろ、ひとり部屋の中に籠っている時の方が強い。

ただ、このままだったら自分が何もできなくなる、怖いのはそれだけ。

このまま三学期が始まり、他の自信持った男子たちに圧倒されたくない。

せめてそのための、烙印がほしい。

上総の思いをどこまで汲み取ってくれたのかわからないが、南雲はひょいとガードレールから飛び降り、彼女たちの元へ近づいた。最初、もの欲しそうに見えるから近づかないとかなんとか言ってたくせに、結局は近づいていった。上総も一緒に行こうとしたが、南雲に手で制された。

「いいよ、りっちゃん、ちょっと待ってて」

待つ間もなく、その女性たちは南雲めざして二人、通路の真中に立ちそこで一度、上総の方に目を向けた。次に南雲に。そして最後に南雲に「交渉」し始めた。

二、三分くらいだろうか。交渉は決裂したらしい。南雲に名残惜しそうな流し目を送り、最後に上総の方を見てふたりは聞こえよがしにささやいた。

「だめよ、ひとりが高校生でも、あの子明らかに中学生じゃないの。犯罪よ、犯罪」

上総は夜の街に背を向けた。南雲にも呼び止められなかった。

「てなわけで、今年からなくなったってわけなんだが、まあこれはしょうがないってところか。二年もあれだけ顔ぶれ変わっちゃったら、ビデオ演劇部作っての意思統一なんぞできるわけねもんなあ」

三学期最初の評議委員会終了後、天羽は三年男子全員を呼び集め、そのまま雪の積もる中庭へと誘った。一月に入ってから一気に振り出したどか雪は、いつのまにか中庭の椅子代わりとなっていた大理石をもつつみ、かろうじて足で踏み固めた道だけが一本、続いていた。その道をつたって反対側の廊下へと出ることもある。昼休み、一年生たちが雪合戦をしていたこともあったが、運悪く窓ガラスを割ってしまった奴がいたためにそれも厳禁となってしまった。もう雪合戦なんてする歳ではない三年生たちには、関係のないことだった。

「それは仕方ないだろ」

難波は天羽の背に呼びかけるようにし、思いっきり空に向かって伸びをした。

「要するにあれは結城先輩と本条先輩の趣味だったんだからな」

「ごもっとも。心残りなのはホームズ、お前のくせに」

「なんだと？」

気色ばむ難波を「まあまあ」となだめるのは三番目に続く更科だ。あいかわらずのほわほわした髪の毛をそのままにして、

「こんなだったら去年、『奇岩城』なんかじゃなくてさ、そのものずばり、『名探偵ホームズ』やってやればよかったのにな、そうすりゃ、ホームズの念願叶ったのに」

「うるせえ」

今日の難波はかなりいらだっていた。しっぽの方についていく上総は三人三様の挙動を見守りながら、自分の呼吸する白い息を消すように心がけた。黒いコートを深く襟立てて着込んだまま、口元を袖口で抑えた。

「しかし寒いぞ、こんなところでやることもねえだろが」

「寒いからこそ、秘密が洩れないだって、な、そうだろ、立村？」

呼びかけられて上総は立ち止まった。忘れていたかのように難波、更科が振り返りじっと見据える。天羽が続ける。

「ほら、この前コピーさせてもらったノートに書いてただろ。露骨に一部屋占拠して話をしていると壁に耳あり障子に目ありだもんだから秘密もばれやすい。なら、こういうオープンな中庭で、めったに人の来たがらないところを選ぶべし、ってな。さっすがじゃん」

「本条先輩がそう言ったのを書いただけだよ」

それだけ答え、上総は三人から目をそらした。

雪の積もった大理石からそれぞれ払いのけ、コート、ジャンパーを羽織ったまま四人まずはまとまって座った。一年廊下側の窓はしっかり締まっている。空は青く、かすかにまた雪が降り

かかってくる程度。まだ暮れてはいない冬陽の加減、少しくらいだったら座っていても大丈夫そうだった。天羽がそれぞれに、使い捨てカイロを配り、自らそれをもみしだいた。

「ま、とりあえずはってとこで、だがな」

上総をちらりと見た後、天羽は立ったまま三人を見渡した。

「とうとう俺たちの時間もあと二ヶ月ってことなんだけどな、飛ぶ鳥跡を濁さずっていうだろ。どうせ毎年三年はこの時期、なんもしないですむってわけだし、あとは可愛い後輩たちにすべてを任せてご隠居生活、ってのがいいんでないかと思うんだが、どうだろうか」

「ご隠居ったって天羽、お前それで本当にいいのか？」

発したのは難波だった。上総は黙ったまま、天羽の目を見つめるだけだった。

「三学期のメインイベントはもう一つあるだろう。水鳥中学との交流会。あれで次期の引継ぎをするんだろ？ お前がそれは仕切らないとまずいだろうが」

「ああ、あれは立村にやってもらうから俺はお役ごめん、な？」

目で問い掛けられ、そのこてこてした笑顔に上総も頷いた。

前からその約束はしていたから。ただ、難波、更科にはその話をまだしていなかったかもしれない。

「おいそれは変じゃねえのか？ だってそうだろうが。立村が交流関係全部やってたからって、現委員長は天羽、お前だぞ？ 二年連中も新井林はバスケット部のなんだかんだで忙しいから使い物にならねえし、生徒会との引継ぎもこれから進めなくちゃなんねえし、結局、天羽が先頭に立たないとまずいじゃないのか？ そうだろ、立村」

めがねの奥から鋭くにらみ据える視線。こちらにも上総は頷いた。声は出さない。

「まあまあ、けどさ、それだったらトドさんに頼むってのも手だよ。立村とトドさんのふたりにその辺を仕切ってもらってさ。新井林にもその交流会にだけは顔出してもらってさ。ほら、そうさ、生徒会も新井林とセットだったらそれほどうるさく言わないだろうしさ」

更科がまた、間を取るようにしてにっこり三人に笑いかける。相変わらずふんわりした髪の毛がくるくる揺れる。天然パーマで入学時から登録しているので、規律委員の服装点検にもひっかからないときた。

「ここだけの話、あいつら、うまく行ってるのか？ 天羽、その辺どうなんだ？」

声を潜めて難波が尋ねた。天羽にも、また上総にもそれぞれ視線を投げて。

もちろん「あいつら」とは新井林と佐賀はるみのことである。

次期評議委員長と、現生徒会長のカップル。中学三年に進級すれば同じ立場となるが、現在のところは新井林次期評議委員長の方が分が悪い。

「なんとも言いがたいところだが、人の色恋に口を突っ込むのは野暮ってもんよ」

「噂話なんかどうでもいい。あのふたりが陰悪なまま別れたりなんぞしたらどうするんだ。今のところはかろうじて、天羽の顔でもって生徒会側に圧力かけてるようなもんだが、これから先関係が悪化していたとしたら大変だぞ」

「うん、まあ、大変だな。けど、それは俺たちが卒業してからどんぱちやればいいことであって、俺たちには関係ねえよな、な？」

天羽は繰り返し上総に、「な？」と視線を投げてくる。

——自分たちで話つければいいのに。

言い返せずに、上総はただ、静かに頷くだけだった。

——あれが天羽なりの気遣いなんだ。

よくよくそれはわかっているつもりだった。

秋の評議委員長決戦選挙で二十対四の圧倒的大差をつけられて蹴落とされた自分を、天羽は自分なりに思いやりつつ、これ以上上総が奈落の底に落ちていかぬよう心にかけてくれていることを。

そうでもしなければ、おそらく上総はもっと下の下扱いで息を殺さねばならなかっただろう。たかが評議委員長の交代といえども、もともと再選が当然という認識がなされていた以上、周囲の衝撃は相当なものだったはずだ。次の日、クラスの連中から向けられた哀れみの視線を始め、女子たちの陰口が一層聞き取りやすいものになった他、すれ違う下級生たちが礼を一切しなくなったことなど、見た目にもすべてが変わってしまったという現実。上総が評議委員長という立場から離れる日々を重ねるごとに、その状況はますます広がっていった。

だからこそ、後期評議委員長として、天羽は責任を感じていたのだろう。

——これ以上、前期評議委員長をないがしろにするわけにはいかない。

と。肩に落ちる雪がすぐに溶けていくのを、上総はじっと眺めていた。

「いいか、この機会に言っておきたいことがあるんだが」

次に立ち上がったのは難波だった。おそらく座っていた石で尻が冷たくなっただけに違いない。

「天羽ももう少し、自分のやりたいようにやればいいんじゃないのか」

「やりたいようにって、ああた、俺はもうそりゃ、好き勝手にやらしていただいてまさあ」

「どこがだ、いったい」

難波は吐き捨てるように呟き、次に上総をちろっと見た。

あの評議委員長選挙以来、難波との間には、口に出しづらい何かが横たわっていた。もともとそれは隠されていたものかもしれないが、上総が評議委員長という肩書を持っていた頃には表に出てこないものだった。

「どうせあと一学期しかないんだ。天羽の言う通り、あとは二年に任せて安楽椅子探偵を気取るというのも一つの手だとは思う。だが、俺の見る限り、天羽はずっとやりたいことを抑えて人の顔色ばかり見てるような気がするんだ。そうだな、人っていうよりもだ、立村ひとりのな」

更科が「ちょっとそりゃ言い過ぎだってホームズ」と抑えようと腕を引っ張る。

天羽は聞いているのかいないのかわからないような顔でそっぽを向き口笛を吹いている。

何かを言わねばならないとはわかっている、言葉が出ないままの上総はもう一度口を袖口で拭った。難波は少しにらみつけるように上総を見据えたまま、天羽の前に立ちはだかった。

「お、どうしたよ、難波ホームズよ」

「俺の眼が節穴とでも思ったか」

息を殺して上総は背中をちらりと眺めた。

「まず天羽、お前、秋の段階でなぜ、副委員長、書記のポストを復活させた？」

「ありゃあ、そりゃま、俺ひとりでやれるわけねえだろってことで」

——やはり見抜かれていたのか。

呼吸をするにもその権利すらないように思えた。難波はまた上総に目を向けすぐに逸らした。

「副委員長を新井林にしたのはそりゃ納得だ。次期委員長だしな。あと書記がトドさんってのもまあまあ納得だ。俺からしたら副に置いた方がベストだとは思ったがその辺もあまり突っ込まないで。だがなんでだ？　なんで立村を書記に置く必要があったんだ？」

「ホームズ、そりゃわかってるだろ。やっぱり元委員長のご意見は重要だし」

更科の言葉をさっと断ち切る難波。上総を見はしなかった。天羽は知らん振りして降る雪と戯れている。いらただしげに難波は片足踏み鳴らした。

「俺は別に、ポスト復活に対して異議を唱えているわけじゃない。だがなんで、立村を無理やり書記に置く必要があったんだ？　なによりも書記ふたりも置く必要、あるのか？」

——それはそうだ。本来なら轟さんひとりで十分だ。

自覚していた。なによりも下級生たちが同じ意見をしょっちゅう口にしているのを上総は聞き知っていた。

「じゃあなんで早い段階でお前、異議唱えなかったわけ？　なんで今更？」

「簡単だろ。立村が哀れだからだろ。見え見えなことしてるなとは思ったがな」

難波は上総の方を一切振り返らずに言葉を連ねた。

「俺もあの評議委員長決戦投票には責任があるからな。天羽の気持ちもそりゃそうだろうとは思っていた。だが、天羽、あの票差を見たのか。二十対四ときた、あの差の開きをお前、もっと重大なものとしてどうして受け取れないんだ？　お前は後期評議委員長としてやるべきことを、お前の力でやり遂げる義務があるんじゃないのか？　足元のことを気遣うばかりじゃあなくてな」

——足元の邪魔な存在か。

さらに息を殺す。上総は袖口で覆ったくちびるを、強くかみ締めた。

「ホームズよ、お前勘違いもいいとこだぞ」

天羽はしばらくジャンバーのポケットに手を突っ込んだまま、空を見上げていた。そのまま目をあわさずに続けた。

「あのな、立村を書記に置いたってのはな、やっぱりこいつの文字って読みやすいつてとこと、元評議委員長の頭脳をこちらで拝借したいと、そういうところもあるわけ。だって考えてみろよ、俺みたいにいきなりぼーっとしてるまにああいうことになっちまった奴がだぜ、いきなりひとりでやっています、って燃え上がったって誰もついてきやしないだろ？　それに例の生徒会への『大政奉還』だってそうだ。ずっと立村がひとりでやってきたことを、いきなり俺が引き継ぐって無理だろ？　幸いな、立村がそういうこと全部やってくれたし、俺になんの恨みもなく協力してくれたんだからさ、それは感謝、感謝なんだけどなあ」

「お前どこまでそれ本気で言ってる？」

難波に天羽の言葉は説得力なかったらしい。全く動揺することなく立ちはだかったままだった。

「天羽、去年お前がやり遂げたこと、自分で数えてみろよ。まず例の『大政奉還』についてだが、仮に生徒会相手の折衝を立村がやったとしたら、おそらく一発でつぶされてただろうな。相手はあの佐賀会長だし、後ろには二年女子がしっかりついてるし、さらにあのキリオまでいると来た。評議委員会に対して、これほど強力な敵はいないぞ。特に立村は女子たちにとことん嫌われている存在だ。一部の女子を除外してだがな」

ここで息を次ぎ、難波は上総の様子を伺った。

伺われたほうの上総は視線を逸らすに留めた。

「あのままだったらおそらく、生徒会に今年の交流会をすべて仕切られる形になっちまっただろうな。元生徒会長・藤沖からも立村は恐れるに足らずと判断されている現実を天羽、お前はよくわかっているはずだ」

——全くその通りだな。

元生徒会長・藤沖勲が、上総のように心根の汚い人間を心から軽蔑していることを、よく知っていた。四月以降英語科で一緒のクラスになるだろうが、たぶんあいつのことだ、一切無視するだろう。考えると気持ちが重い。

「だが、天羽、お前はそこで佐賀たちにうまく圧力をかけて、青大附属中学評議委員会として交流会最後の参加を勝ち取ったってわけだ。しかも代表は立村に任せるって格好でだ。天羽の目的はそれだったんだろ？ 可哀想な立村に、せめてもの花を持たせてやりたいってな」

「かわいそう」という言葉を力込めて言い切った難波。天羽も否定せず、そのまますっとぼけた顔して空を見上げていた。

さすがに上総も一発ぶん殴ってやりたい本能がうずいた。

できないのは、言い返す言葉を持っていないからだった。

難波の言う通り、天羽が評議委員長就任後最初に手をつけたのは、

「評議委員会のポストを再構成する」

ことだった。顧問教師も反対せず、むしろひとりに権力が集中するのを避けた方がいいという判断を下した。ただし、天羽はこの点においてのみ、自分の選びたい奴を選ばせてほしいと頼んだようだ。上総もそれは確認していない。そうでなければこんな、

「副会長に新井林、書記に三年ふたり」

なんて、イレギュラーなやり方を通せるわけがない。

「本来仕切るべきは立村、お前なんだ。今回こんなことになっちまったけどさ、やっぱり、お前の力がないとやっていけねえよ」

とかなんとか言って、事後承諾を求められた際、どうしてきっぱり断らなかったのだろうか。難波の罵声を耳にするたび、周囲のひそひそ声が紛れ込んでくるたび、悔いる。

——あの時きっぱりと断っていればよかったんだ。

もっともその後、上総の出番は殆どなく、天羽がさりげなく「な、立村、こんな感じで悪かあねえか？」と確認してくるたびに頷くだけですんだ。誰一人上総に関心を持たなくなり、いつのまにか天羽を中心とした輪が評議委員会の中で出来上がっていた。上総はただ、ノートを取ることに専念するだけだった。

「立村、いいかげん答えろよ」

しばらく沈黙が続いた。難波の言葉に納得しているのか、それとも知らん顔しているのか。もともと難波の性格を知っているから、嵐が過ぎ去るのを待っているだけなのか。きっとけんか仲間の霧島さんと過ごす時間が限られているから、あせりを誰かかしらにぶつけないには無理なのだろう、と天羽はぼそっと呟いていた。でも自分にそれを堅い雪球のごとく総攻撃されてもたまったものではない。

「答えることはないよ。その通りなんだからさ」

「じゃあなんでお前、今の仕事に全力尽くさない？」

天羽にはのりりくらしと交わされるのがおち、とみたのだろう。難波は上総の前に立ちはだかった。目をそらそうとしたら「おい、こっち見ろよ」と無理やり肩を揺さぶられた。

「書記の仕事はきちんとしているつもりだけど」

「俺が言ってるのはそういうことじゃねえ！」

思いっきり頭をはたかれた。痛いのかあたたかいのかわからない感覚だった。

「俺が言いたいのはだ。なんでお前、三年D組の評議委員としての任務を果たそうとしねえのかってことだ！」

「やってるよ。そのくらいは」

天羽と更科がふたり、顔を見合わせている。が、驚きの様子ではなく頷き合っているところみると、難波の烈火に納得はしているのだろう。勝手にしろと言いたい。

「いいか、お前、評議委員長は落とされたかもしれない。けどな、三年D組の評議委員であることは辞めたわけじゃねえだろ？　なんでお前、仕事を全部、羽飛に押し付けてるんだ？」

——押し付けてるわけじゃない、向こうが勝手に。

答えようとしたのに難波はさえぎった。一方的すぎた。

「いいか立村、清坂と羽飛がいいコンビだってのはよくわかる。この前菱本先生の子どもが生まれた時もそうだしな。どんどん企画立ててったの、あいつらなんだからあいつらが進めていけばお前、やることないってのはわからないでもない。けどな、あまりにもお前、手、抜き過ぎてるんじゃないか？」

「抜いてないよ」

「嘘つけ！」

難波は足元の雪を拾い上げ、上総の頬に軽くぶつけた。さらさらと落ちてすぐ溶けた。

「あのな、お前はそれでいいかもしれないし、三年D組の連中もそれで満足してるかもしれないよな。前から言ってただろ。羽飛の方が上だから、自分は目立たない方がいいとかな。それも俺は納得するさ。ああ、羽飛の方がクラスをまとめる上ではベストだろうってな」

決して手を緩めようとしない難波に、どうして嘔み付けないのだろう。

不思議なほど、気力が萎えている。

「だが、現段階で評議はお前なんだ。たかが評議委員長から落とされたくらいでいじけてるんじゃないやねえよ。委員会ではノート取って天羽に任せてりゃそれでいいが、クラスでは違うだろ！ もっと堂々としろよ堂々と！ ったくどいつもこいつも！」

もう一度、難波は上総の肩をはたくと背を向けた。

また沈黙。空がだんだん重たい白みを帯びてきた。雪が降りそうな気配だった。靴の裏からは冷えがじんわりとよじ登って来ていた。

「立村、お前、言いたいことあるだろ、言っちまえ。他に誰もいねえから」

とぼけた口調でゆっくりと割って入ったのは天羽だった。難波の肩をぽんぽん叩き、自分の石に座らせると、今度は天羽自身が上総の前にしゃがみこんだ。更科も難波の隣にしっかり陣取り、こちらを見ていた。

「たいしたことじゃないよ。ただ、俺が居ない方がみなうまくいってるから、こちらは何もしないだけだって」

「お前が居ない方がいいって誰も言ってねえだろうが！」

また荒れる難波を、「ちょっと黙ってれ」と片手で抑えるポーズをする天羽。上総の方を見上げてもう一度、「そっか、続けろ」と促す。

「生徒会とのことだってそうだろ。俺がもし直接生徒会の人たちと話をしていたら、たぶんトラブルになっていたと思うし、難波の言った通り今年の交流会に評議委員会は参加できなかったと思う。天羽がその点、うまく話し合いに持っていったからだよ」

たぶん上総が自分で言いたいことをぶつけようとしていたら、あの佐賀はるみを始め、副会長の霧島弟、および書記の渋谷名美子、さらにその影に潜む「品山 小学校出身」の後輩・風見百合子が攻撃してくるだろう。現に今、一、二年の女子評議たちは上総のことを心底軽蔑しているのがよく伝わってくる。その理由が密かに伝えられた上総の過去であること、その噂の根源は風見らしいということ、それが全くの嘘でない以上否定はできないということ。

女子を味方につけられない以上、女性上位の生徒会と対等な話ができるとは思えない。

もちろん、元評議委員であり次期評議委員長の恋人でもある佐賀はるみは頭ごなしに却下するとは思えないにしても、上総にとって一番のアキレス腱が杉本梨南であることを知られている以上、身動きは取れない。「梨南ちゃんのためにこうしてあげてるんです」の一言で上総の行動は封じられる。その言葉は殆どの場合、間違っていないから。

そこまで口にすることはできない。上総は別の形で答えることにした。

「天羽の場合、俺と違って生徒会に借りなんてないだろ。ただ、ひたすら評議と生徒会との対等な立場を守るってことだけで十分なんだ。佐賀さんとも、他の生徒会役員たちとも個人的なトラブルはないし、純粹に今後の評議委員会と生徒会について話し合いができるはずだ。だから天羽が立ったのは、正解なんだ」

「そんなこと聞いてねえだろ！」

言ったのはそっちのくせに、と言い返したいのを上総はこらえた。難波の言いたいことが上総にはよくわからない。

「それに、クラスについても同じことだよ。一年の頃から、本来評議委員になるべきは羽飛だって声が大勢を占めてたんだ。俺もそう思っていた。たまたま本条先輩にひっぱってもらえたのと、羽飛がうまく周囲を抑えてくれたからこそ、俺は今日まで評議委員でいられたわけであって、クラスの人望はみんな、もう羽飛のものなんだ。だから」

「だからさぼっていいってわけじゃねえだろ！」

「さぼってないよ。向こうがどんどん片付けてくれるんだ。俺が口出さなくても、いつのまにか羽飛と清坂氏のふたりが予定を組んで、連絡網を回して、飾り付けなんかをしたりして。俺がそのあたりの報告をもらう段階で、もう形が出来ているんだよ。それに手を出す必要も全然ないし、ならそれでいいんじゃないの、って感じで終わるんだ」

これもその通りのことだった。美里とはあの後、ほとんど口を利いていない。向こうから一方的に報告されたり指示を出されたりするだけだ。一応、ロングクラスルームの司会だけはするけれども、大抵美里と打ち合わせたらしい羽飛が挙手をして、

「ってなわけで、菱本先生のベイビーをお祝いする歌を歌うぜ！ おら、みんな立て！」

一気にクラス全員盛り上げるべく気合を入れる。上総だけはまた、煙の外に立ったまま眺めるだけなのだが、残り全員は気持ちよさそうに歌い気持ちも舞い踊っている様子が伺いしれた。こんなことは、自分が仕切っている頃にはほとんどありえないことだった。時々美里がこちらを振り返る視線を感じるが、それはすでに無視することにしていた。

——いいよ、羽飛と清坂氏に任せておくからさ。

この一言で大抵は事足りる。菱本先生も最近では上総よりも羽飛に、クラスの一件について声をかけることが多いようだった。それもよし。今の自分がお飾りであっても、特に問題はない。

「俺がいなくてもいいっていうのは、見捨てたわけじゃないんだ」

これだけは誤解を解いておいたほうがいだろう。上総は難波に向かい、声を張り上げた。

「つまりさ、俺がやるよりも、やりたいことがどんどん丸く収まっていくから、そうしたほうがいいって思っているだけなんだ。ほら、評議委員会だってそうだし、クラスだってそうだし、新井林だってそうだろ」

今度は天羽の吐息交じりの返事が返ってきた。

「お前もずいぶん、苦労したんだってことがよくわかった。あんまりうるせえから、俺一発張ったおしてやって、やっと黙らせたんだがな」

「ほら、そういうことだよ」

上総はそれ以上言わなかった。

——張り倒すなんて、そんなことができないから、俺は今までうまくいかなかったんだ。

実際、新井林はすでに、天羽に対して一切口答えをせず、言われるままに仕事をこなしている。上総に対して先輩相手とは思えない態度をかましていたのとは正反対だった。どこかで何かがあったのだろうとにらんではいたのだが、手を出したのか。それで簡単に黙らせることができたのか。上総は絶対にやってはいけないこととして封じていたのだが、天羽にはそんな気持ちさ

らさらなかったらしい。

新井林を抑えることができれば、生徒会がらみの折衝もだいぶ楽になったことだろう。

佐賀会長を新井林に抑えさせる方向に向かわせるだけですむのだから。

——天羽忠文・後期評議委員長。その手腕見事なり。

大粒の雪が降り注いできた。まだ何か文句を言いたげな難波を、更科が、

「さあさあホームズ、帰るよ。ちょっと俺、キリコ姐さんに用事があるからE組寄るけど、お前も来る？」

など見え見えの誘いをかけている。難波も、

「あの女も救いようのねえ馬鹿だ、ったく」

とかなんとか言いながら、素早く立ち上がり雪道を駆け出すように走っていった。挨拶など一言もなかった。

取り残されたのは上総と天羽だけだった。

「難波も相変わらずなあ、キリコ姐さんに相手にされてねえから、いらついでるだけだ。その点、わかってくんろ、立村ちゃん」

まだ座ったままの上総に語りかけた。

「あと三ヶ月もねえだろ、難波の奴どうしたらいいかわからねえんだよ。見てりゃわかる。このまま霧島に嫌われたまんまで終わるか、それとも敗者復活があるか、ってところなんだがなあ。難しいところ。ま、その辺は更科もよっくわかってるようで、なんとか愛のキューピットやろうとしてるわけなんだが、なかなかねえ」

「そんなことしなくたっていいだろ。人には好みがあるんだからさ」

「そうっさなあ」

天羽はゆっくり周囲を見渡した。後ろ側の一年廊下沿い窓を眺め、人気がないのを確認した後

「お前、そんなに嫌だったら、書記から降りるか？」

にこっと顔を緩めて尋ねてきた。

言葉が次げなかった。

天羽は上総の顔をそのままにこやかに眺めた後、こっくり頷き、

「じゃあ、三学期もどうかよろしゅうたのんまっせ！ 頼りにしてまっせ、立村ちゃん！」

両肩を交互にぽんぽん叩いた後、難波たちとは反対側の出口へと駆けていった。

雪が灰色に染まりそうな空に、上総は問い掛けた。

——どうして、降りるって答えられなかったんだろう。

あと一学期しか残っていないということもあり、クラス内では文集作りの準備で一部盛り上がっている様子だった。クラス文集委員に今回は貴史が担当となり、過去三年分の「班ノート」の取りまとめ、および写真類のレイアウトなどをこまめに行っていた。相棒はもちろん美里、そしてなぜか奈良岡彰子も混じっていた。イラストおよび表紙担当は、三年D組の誇る天才画伯・金沢に任せている。こずえも仲間に入れてほしそうな顔をしているが、なぜか割り込めずにいるらしい。上総が疑問を感じて尋ねると、

「だってさあ、菱本さん言うんだよ。私がさ、英語科に進めるのは、神さまのプレゼントみたいなもんだから、この三学期必死こいて勉強しろってさ。まあね、あんたみたいに語学馬鹿ならいいけどさ、私はねえ、確かに奇跡の大逆転だったと思うよ、けどさあ、わざわざ私のためにだけ英語の補習あてがわなくなっちゃっていいと思わない？ 立村、これってどう考えたって陰謀だよねえ」

「なんで陰謀なんだよ」

修学旅行の頃から比べると髪の毛が肩につくくらいに伸びていた。あの頃は上総と後姿がほぼ変わらないといわれていて、制服を同じものにすれば全く見分けがつかないかもしれない、そんな噂まで立っていた。さすがに今はそういうことがなさそうだが。

「いやね、なんかこれ、羽飛が私を引き離したがるからなのかな、ってさ」

「そんなことはないだろう」

「羽飛と菱本さん、年齢を超えたマブダチになりつつあるじゃん？ だからね、いろいろ相談してるんじゃないかって気、すんのよね。だってさ美里と彰子ちゃんとは仲良しのまんまなのよねえ。ああ、本当だったら彰子ちゃんのポジションに私が入ってておかしくないのよね」

いつものこずえらしくない愚痴の嵐。何か変な感じがする。教室後ろの方でなにやかにやとわやわややっている連中の気配を背中をシャットアウトし、上総はさらに尋ねた。

「そういえば、奈良岡さんずいぶん最近、羽飛と行動すること多いな」

あの人高校受験するのに、と付け加えようとしたら、

「いやあ、どうなのかなあ。彰子ちゃんには南雲がいるんだから心配することないとは思うんだけどね」

南雲の真実を知っている上総としては口をつぐむ。こずえは続ける。

「やっぱし、羽飛はかっこいいんだよね、誰が見たってね」

「なんでそれを俺の前で言う必要があるんだよ」

「現実を見極めろってことよね」

机の上に英語の辞書と補習用のノート、プリント一式を揃え、こずえは抱きかかえた。

「あんたもまだまだやることあるんでしょうが、ま、童貞早くなくせとまでは言わないけどね、せめてファーストキスくらいは狙いなさいってね」

ちっとも意味不明でない言葉を置いて、こずえは教室を出て行った。

この一ヶ月で、上総にとってはあまりにも近い言葉だった。

——あと二ヶ月か。

決して居心地の悪いクラスではなかったはずだった。

入学してから二年間、いろいろあったにせよ、とりあえず小学校時代の二の舞を踏まずにすむはずだった。最後の最後で、大どんでん返しさえなければ、の話だが。

クラスで一番人気のある男子と友だちづきあいできて、学校内ではナンバー1の地位を誇る評議委員長の座を一時的にせよ手に入れて、さらに語学能力を認められて大学の授業を特別に受けることを許されて。もちろん数学に関しては苦勞したとはいえ、二年以降は狩野先生が担当となりだいぶ楽になった。あの日までは、すべてがうまくいっていたはずだった。

——もともと、こうなるはずだったんだ。だからしょうがない。

上総は後ろを振り返った。文集チームがわやわやと盛り上がっている。机の上にどんと焼き状態で山積みされているのは、大量のノートだった。近くに行かなくてもわかる。すべて過去のD組班ノートだろう。

菱本先生は入学当初から、クラスで「班ノート」を書くよう指導していた。最初はみな、うんざりしつつも順番が回ってきたらそれなりの日常を綴るようにしていたのだが、どうもそれが気に入らなかつたらしく、ある時期を境に、

「お前ら、もっと言いたいことがあるだろうが！ 本音を書け！」

とか騒ぎ出されてえらい目にあった。

特につるし上げられたのが上総だ。一年の二学期、菱本先生にこんこんとお説教されたことを、苦々しく思い出す。

「立村、お前、どうして、本当のことを書こうとしないんだ？」

「本当のことです」

「嘘つけ！ お前どうして人の顔色ばかり見て、振舞おうとする？ 前から気になってたんだがな、そういうのは生徒としてではなく、人間として最低なんだぞ。わかるか？」

わかるわけがない。第一、本音で行動したら何が起こるかわかってないのが根本的に間違っていると思う。上総は当然、菱本先生の「顔色」を読みつつ無表情で頭を下げた。さっさと話を終わらせるつもりでいた。

「いいかげんにしろ！ いいか、立村。お前と友だちになりたいって奴が、そんなに心閉じた態度されて傷つかないと思ってるのか？ 羽飛たちを見ろ。もっと友だちになりたい、もっとしゃべりたい、そう思ってるのにだ。全然心を開かないでつらっとした態度していたら、相手が傷つくんだぞ。お前ひとりで自分が可愛くてならないって顔しているが、実は相手を馬鹿にしていることと一緒にだ。どうしてそういう奴を受け入れたいと思わないんだ？」

この人たちにはわからないのだ。上総はその時、冷たくそう感じた。

本当のことを言った瞬間、すべてがこなごなに崩れ去るのを、この人たちは何にも理解しようとしな。崩れ去った後、さんざん罵って去っていく人々の本心を、誰も見つめようとはしない。だから隠す、それがそんなに悪いことなのか？

口に出すのもばかばかしくて、上総は最後まで菱本先生に仮面をつけたまま接していた。
——もしそんなに本音を出してほしいんだったら、俺はあんたを刺し殺してるさ。

その後、クラスで起こったさまざまな出来事は、すべて上総が過去を自分なりに上塗りしようとしてしくじった結果からきたものだった。しょせん、自分の能力はこんな程度なのだと思い知らされ、かろうじてお情けで救われていたようなものだった。

いじめっ子浜野の恋人が同じクラスにいるなんて想像もしてなかった。

陰で羽飛や南雲が上総をいじめないようにと、男子たちに通告していたことも。

他の男子たちからも注目の的だった清坂美里が、上総をずっと思いつづけてくれたことも。

絶対に通常だったらありえないことだった。

クラスの本来、トップに立つべき三人が命がけで上総を守ってくれたからこそ、上総はかろうじてD組ではじかれずにすんだというわけだった。

それを感謝しなくてはならないことを、上総はよく知っているつもりだ。

だから、最後まで、「ありがとう」、そう言い続けなくてはならないことも。

——どんなに喉が詰まって惨めであっても。

「えーと、一年はとりあえずこれで完了ってとこでどう？」

奈良岡彰子のやんわりした声が響いた。

「そうね、これでいいんじゃない」

「いろいろあったけどなあ。菱本さんのリクエストでは、できる限り真実を書くようにとのご沙汰なんだが、俺、真実ってわからねえからなあ」

美里と貴史のふたりは「班ノート」をめぐるごたごたを知っているはずだ。

上総は耳を済ませた。背を向けたままかばんに雑多なものをしまいこんだ。

「D組の三年間を、ってことだったらそうだよな。二年のことだったらいろいろな話があるし、書けるんだけどね」

「そうそう、二年だと宿泊研修のことだよな！」

そこまで楽しげに騒いでいた三人が、いきなりしんとした。

背中がちくんと痛い。

——さっさと帰ろう。

上総は立ち上がり、黙って教室から出て行こうとした。

邪魔をする気なんてさらさらないから。

「おい、待てよ立村」

呼び止めたのは、羽飛だった。さっさとこずえと一緒に出て行けばよかった。激しく悔いた。

振り返り、作り笑いを浮かべてみた。ほんとに何も知らないって顔をすることにした。文集作りに上総は一切タッチしていない。だから、偶然たまたま立ち上がっただけ。三人の顔をそれぞれ見ると、美里と貴史は目つき鋭く、隣の奈良岡さんが気味悪い笑顔を浮かべていた。どこが、

とはうまく言えないのだが、笑顔で迎え入れてくれるような雰囲気ではなかった。

「俺な、立村」

何かを口にしようとした貴史を、制したのは奈良岡だった。

「あのね立村くん、これ前から、美里ちゃんたちと相談していたんだけどね」

南雲がかつて「我が愛しきお姫様の笑顔」と呼んでいた表情。

上総には同じ感覚で受け入れられないものだった。奈良岡はさらににこにこしたまま続けた。

「立村くん、宿泊研修のことで、本当は言いたいこと、あったんじゃないのかなって思ったんだよね。私。他の男子たちにもいろいろ聞いたんだけど、今回の文集をきっかけに立村くん、本当の気持ちを話した方がいいんじゃないかって思うんだ」

——何考えてるんだこの人。

上総はわけのわからない顔をしたまま、奈良岡に笑いかけた。こんなところ、さっさと消えるが勝ち。

「いや、俺文集にはかかわってないから、じゃあ先に」

「待ってってるだろ！」

貴史がさらにさえぎった。美里は隣で何も言わず見守っている。奈良岡だけが異世界の人間みたいにきょとんとしたまま見上げている。

「あのなあ、立村。お前、ずうっとあれから逃げまくってるだろ？俺に対しても、美里に対しても、菱本さんに対しても。いろいろ事情があるとはあん時菱本さんにも言われたし、内緒にしろって言われたからなんも言わなかったけどな。でもお前、あのまま誤解されてて、ほんっとにいいのか？」

「誤解じゃないよ、本当のことだからしょうがない」

舌打ちしたいのをこらえて上総は答えた。

おそらく貴史が言いたいのは、二年・夏休みに上総がしでかした「バス脱出事件」の顛末についてだろう。あのことについては自分の中でやり遂げた達成感と一緒にもうけりがついている。たとえ菱本先生が理解してくれなかったとしても、貴史、美里のふたりにも意味不明であったとしても、もうそれはどうだっていい。わかってくれないなら「わかってくれない」という名のフィルターをつけて接すればいいことなのだ。そう、あの時狩野先生も教えてくれた。すべての人に「理解」されようなんて、一瞬だって思うものかとあれ以来自分を律してきた。辛いことがないとは言わないけれども、あえて飲み込んできた。

そんな忘れかけていたデータをファイルから取り出せというのだろうか。

何考えているんだろう、こいつら。

話を畳み掛けるのは奈良岡だった。またぶるんぶるんと身体をゆらすようにして、でも笑顔たっぷりに、

「私も羽飛くんの言うことに賛成なんだ。そうだよ、立村くん、このままだと誤解されたまま卒業になっちゃうんだよ。みんな心配してるしね。立村くんは気付いていないかもしれないけど、みんな立村くんが嫌われたまま卒業させたくないよって思ってるんだよ」

「嫌われた？」

認めたくない言葉が、突き刺さった。

——無神経って、このことだな。

言いたいけど黙っていた。そこまで神経質にはなりたくない。

間にはさまれた格好の美里はじっと上総を見つめるだけだった。

「ま、そういうこと。ねーさんの言う通り、お前もこの辺で言いたいこと言っちゃえばいいんじゃないねえの」

脳天気な口調で貴史も割り込んだ。ただ奈良岡と違いどこか、様子伺いしているような感じがした。上総の様子をまずは観察して、それから出方を待とうとでも言いたいのか。美里とも同じ考えなのか。どちらにしても、気持ちのいいものではない。

「気遣ってくれてありがとう、それなら先に帰るから」

別に待っているわけでもないし、上総はもう一度扉に手をかけようとした。

「だめだよ、そんなに逃げたりしたら。みんな、立村くんのこと、心配してるんだよ」

——知ったことか。

いったいこの人たちは何を考えているのだろうか？

上総には理解しがたい思考の持ち主だと、改めて感じた。

もともと奈良岡彰子とは話すこと自体あまりなかったし、性格のいい女子だという程度の認識しかなかった。あえていえば南雲が惚れぬいている最愛の人、そのくらいだった。

もちろんまっすぐで思いやりのあるいい人だ、とは思う。

美里とは違った面で、ほわっと温かみのある雰囲気がある、とは思う。

だがそれだけだ。

ルックス、外見がうんぬんというよりも、すべてがうまくいくと決め付けるその発想に上総はいつもついていけないものを感じていた。本音を言わせていただくなら、南雲の心が冷めたのもその辺にあるのだろうか、とか思ったりもする。世の中、みんなよい人と決め付けて、悪いままで認めてほしい人間の心を無理やり捻じ曲げようとするようなところが、どうも好きになれなかった。

たぶんそう感じる自分のほうがひねくれているのだろう。

だから、あえて飲み込んでいた。

「立村くん、もっとみんなに心を開いたほうがいいよ。美里ちゃんだって、ほら、羽飛くんだったものすごく心配してるんだよ」

奈良岡の、何にも勘付いていないどんとした声が、また上総を呼び止めた。仕方なく振り返ると、今度は明らかに怒りを帯びた表情の美里がにらんでいた。同じく、貴史も。

——奈良岡さんに代行してしゃべらせているわけか。

ちっと、火がどこかに点いたような気がした。斜向かいに上総は見返した。

「それはありがたいと思っているけど、俺には俺の考えがあるから。それに終わったことだから」

「終わってないんだよ。立村くんひとりで決め付けるのはよくないと思うなあ。いいかなあ。去

年の宿泊研修以来、女子たちは立村くんがどうしてあんなことをしたのかわからなくて、みんな信頼できないなあって気持ちになってしまったみたいなんだよ。もちろん嫌うってことはしないけど、やはり、もやもやしたものが残っているのは私もクラスの女子見ていて、そう思うよ」

——そうか、わかっているんだったら無視してくれればいいんだ。

毒づきたい。でも言えない。なぜなら奈良岡彰子は笑顔の女子だから。

「もちろん立村くんのように、言いたいことを無理に言わないでもいい、と思っているんだったらしょうがないけど、やはりクラスみんなは落ち着かないんだよね」

——俺はクラスのおもちゃか？

「三年間、気持ちよく友だち同士として卒業したいでしょう。一緒にいろいろなことがあって、おしゃべりして、けんかして、もちろん思い出したくないことだってあるかもしれないけどね。でも、うちのクラスでいじめが起こったことが一度もないってことだけは、誇っていいと思うよ」

——勘違いもいいかげんにしろよな。

もちろん表立ったものはなかった。だから奈良岡の言い分は間違っていない。

だが、こうやってそっとしてほしい人間の心にずかずか踏み込んでくることは許されるのだろうか。すべて終わったことを、またひっぱりだして、わかりやすい「みんな仲良し」のファイルにまとめて記念に飾ろうとする発想、耐えられなかった。

「だからね、最後の最後でみんなすっきりしないことは、きちんと終わらせておきたいんだ。あ、これね、羽飛くんや美里ちゃんが言い出したことじゃないよ。私が思ったこと、ふたりに話したただけだからね」

——なおさらタチ悪いよな。

以前、杉本梨南が奈良岡彰子に対して、

「人間はすべて悪魔の部分を持っています。それを知らないふりして、すべての事柄を平気な顔して、『私のそばにいる人はみんないい人よ！』と決め付ける神経が私には理解できません」

とかなり手厳しい評価を下していたことがあった。杉本が全校ひっくるめた嫌われ者である以上、同感する人間は数少ないだろうが上総だけはそれに共感する。

もう、話していても無駄だ。どうにでもなれ。

上総は一呼吸置いて、無理やり笑みを浮かべ、奈良岡に話し掛けた。

「わかった。そうしたいならそれでいいから。ただ俺はもう話すことなにもない。だから文集委員のみなさんで、話の内容をこしらえてくれないかな。それでいいだろう」

「それは意味ないと思うよ。当事者は立村くんだもの。立村くんのためにきちんと」

さらにしつこく食い下がる奈良岡に対し、

「俺はそれ、本当のところ、望んでないし」

一矢報いてさっさと廊下に出ようとした。今度こそ、背を向けようとした。

「立村、ちょっと待てよ。その言い方ねえだろうが」

大股で近づいてきたのは貴史だった。またか。立ち止まる上総の鼻先に顔を近づけ、貴史は、

「俺たち、ずっと今日の今日までお前の望み通り放っというてきただろう」

下手に口答えしたら泥沼にはまる。上総は黙っていた。貴史のぎらついた瞳を避け、目をそらした。その先に真っ黒い上履きのつま先ががちろちろ動いていた。

「ほんとは言いたいこと腐るほどあっても、やっぱしましういだろなっことで、俺も、美里も、クラスの連中もみんな黙ってたんだぞ」

「わかってる、悪い」

「悪いと思ってんのか、この！」

すごまれ、片腕をつかませた。逃げねば、でも動けない。ただ腕の筋肉がぴくぴくするだけ。様子を伺っている女子たちの方を覗く余裕もない。

「けどな、それがこの状況だっつのが、お前わかってねえだろうが！」

「この状況って、でも」

「俺も、美里も、菱本さんもだ。お前のことに口出ししなければ無事仲良しD組で卒業していけるだろうっつことで、何も言わないできたんだ。それ、わかるか？」

——誰がそんなこと頼んだかよ。

上総は力を込めて貴史をにらみ返した。口が開かない。

「宿泊研修のことだけじゃねえ！ 一年時の班ノート、お前結局何にも気付いてねかったようだけどな、もう全員あのことはばればれなんだぞ」

「あのことってなんだよ」

言った後で後悔した。

もうすでに、全校生徒に知られてしまったこと。恥の上塗り。

貴史は鼻をふんと鳴らした。「美里、一年時のあのノート、取ってくれ」、と後ろの美里に声をかけた。黙って美里が貴史に、一冊ノートを投げてよこした。表紙に猫のイラストが書かれている、かなりぼろぼろのものだった。自分の少し幼い手書き文字が表紙に残っている。「エグザンプル」、とか書いてあるのは当時、班名をつける習慣を押し付けられたからだろう。

「お前なあ、ここ、改めて読み返してみろ」

——十一月十四日。

いつ、こんなことを書いたのだろう。

二年前の自分が、おびえたまま、おさまっている。上総は受け取り、そこに目を落とした。

◇

十一月十四日 班ノート 立村 上総

誰にも言いたくない過去はあるだろう。いじめで自殺した中学生の話を聞きながら、いろいろ考えたことがある。

僕の経験したことに多少似ていたからだ。

理由はわからないが僕はずっと「いじめられっこ」といわれる人間だったと思う。そんなに人より目立つようなことはしなかったし、むしろ引っ込み思案だったんじゃないだろうか。でも、

されたことは、例の中学生とほとんど変わらなかった。

特に四年生の頃は、何度も死のうと思った。

五年生の時は、学校に毎日、出刃包丁を持っていった。

六年生の時は、あぶなく人を殺しそうになった。

追い詰められると、何をしでかすかわからないと、その時感じた。

でも僕はまだ救われていた。中学は青大附中に行くことになっていたし、過去のことを気にしないで友達になってくれる同級生がたくさんいた。

過去を振り捨てることができたと思う。

でも自殺した中学生の場合、小学校から高校までずっと、加害者の同級生と顔をあわせていなくてはならない。十二年間いじめられ続けるくらいなら、死を選ぶ彼の気持が、僕には痛いほど、よくわかる。

ただ、彼には自分を殺すよりも、相手を殺してほしかったと思う。罪になったとしても、生きている方がはるかに幸せだったと思う。

本当はこういうことを書くつもりではなかった。永遠に忘れてしまいたかった。でも、このクラスの人は、きっとそういう僕の過去をも受け入れてくれるだろうと、信じている。

◇

「な、これ、お前が書いたってこと、覚えてるよな。これを嘘っぱちだってことで俺たち、『裏ノート』って奴をこしらえようとしたよな。あれもうちにあるけどな、俺はそんなの持ち出す気ねえよ。あっちの方が嘘八百なんだからしょうがねえだろ」

——「裏・ノート」かよ。

二年前の自分が必死に頭を使って考え出した、保身の術。

結局はそれも杉浦加奈子に見破られ、元の木阿弥となったわけだが。

あのことも結局は自然と忘れ去られたはずと、上総は信じたかった。

それをなぜ、今になっていきなり引っ張り出そうとするのだろうか。

「お前、素直に認めればよかったんだ。あんときに。そうすりゃ、今になってわけわからん二年の女に噛みつかれなくてもよかっただろ。俺も同罪だ。お前にそう言ってやんなかったんだからな。隠すことを手伝っちゃったからな。本当だったら全部、事実関係を立村、お前に白状させて、その浜野って奴に土下座する手伝いでもして、すっきりさせて二年に上がればよかったんだな。俺もガキだったしそんなことまで頭がまわらなかつたのはほんっと馬鹿だよ。いくら逃げたって、結局は帳尻が合っちゃうんだ。俺も馬鹿だけど、立村、お前もほんっとボケだ。なんでこの段階で、きっちりけりつけようとしなかったんだよ！」

「羽飛には関係ないだろう」

——だから最初から理解し合えないんだって、どうしてわからないんだよ！

美里は一言も発していない。ただ見守るだけ。

何か言いたそうな奈良岡が美里に片手で制されている。

貴史はただ一方的にわめきつづける。

「そいで今は、こんな風にすべてが裏目に出てるってわけなんだぞ。立村、あと二ヶ月しかねえんだぞ！」

「あかないよな、二ヶ月だよな」

自分の言葉がどんどん感情を失っていく。そう、あと二ヶ月。

「だったら今しかねえってお前にもわかるだろ！ ねーさんじゃねえけどな。お前このまま心抜けたままでD組終わらせていいのかよ！ 三年間評議やったお前のプライド、そんなもんなのかよ」

「羽飛、本当はお前が評議委員やるべきだったんだ」

上総の答えは、これしかなかった。

「最初から、俺は評議委員なんかやるべきじゃなかったんだ。それ、わかっているって受けた俺が悪いんだ」

美里の方に視線を向けた。これ以上何を話すことがあるだろう。

「与えられた義務は果たす。けど、クラスの本来経つべき奴は、羽飛、お前だってわかっているだろう」

何を言われてももう教室を出ると決め、一步廊下へ出た。

三秒後、すぐに悔いた。

「ばっかやろう、逃げるな、こっち向けよ！」

廊下を駆け出してしまったのは身の危険を感じた本能からだった。

他のクラス連中や下級生たちがまだうろうろしているのに気付く間もなかった。

まさか誰もが見つめていると真ん中で、貴史が上総の名を叫びながら追いかけてくるとは思わなかった。

「いいかげん逃げたって逃げられねえんだぞ、もう、いいかげん、こっち向けっての、立村！」

——お前に言われたくなんかない！

突き当たりそうになる奴を突き飛ばし損ねて一瞬ふらついたとたん、右肩に貴史の手が触れた。払おうとし、振り返ると同時に、左頬へ強烈な痛みを感じた。何も見えなくなり、耳鳴りの中上総は天井が空から壊れて降ってきたようなものを見た。大きな寺の中でたとえば、降り注ぐ瓦礫のように見えた。

周囲のざわめき、美里の叫び、

「貴史、急所と拳固だけはやめなさいって言ったじゃないの！ ばか！」

りつむらくん、だいじょうぶ？ だいじょうぶ？ りつむらのやつ、無様に逃げてったのをなぐられてやんの。ばっかみてえ！ あれ、おきられねえの？ 打ち所悪かった？ やばいんじゃないの？ けどあいつが馬鹿だからとはばの正当防衛になるよね。

起き上がろうにも頭が割れんばかりに痛くて動けない、何度も腰を浮かせようとしてうまくいかない。一分前まで殺されかねないくらいの気迫で上総を伸していた貴史が、今、側で涙目になりながら、

「立村、大丈夫か、おい、こっち見ろよ、死ぬなよ、なあ、俺が悪かったから、頼むから起きろよ！」

背中を起こすようにして背負おうとし、保健室に連れて行こうとする。

——何を言われても、もう黙っていよう。

それだけ心に誓い、上総は目を閉じた。

保健室前の廊下には野次馬らしき生徒集団と美里、彰子、その他なぜか更科がうろうろしていた。都築先生では埒があかないところを、駆け込んできた菱本先生によって交通整理された。半泣き状態で側に突っ立っている貴史の肩をまず叩き、外に出るように顎でしゃくった後、上総の顔を覗き込んだ。目をそらした。

「立村、大丈夫か」

返事をしなかった。できないふりをした。それがまずかった。

「念のため、ご両親を呼ぶから、少し保健室で休んでろ」

——ちょっとそれだけはやめろよな！

声を出せずにいる間に、菱本先生はまたたったかと廊下に飛び出して行ってしまった。

「あの、本当に大丈夫です」

「あたりまえでしょ。立村くん、あんたはたかれてショックで腰抜かしただけよ」

實際頭を打ったわけではないし、打ち所が悪かったわけでもない。ただ、あまりにも派手に倒れすぎたので一時は大騒ぎになりかけたようだ。廊下で奈良岡彰子が高らかに菱本先生に向かいで説明する声が聞こえる。

「立村くんの言い方がもう少し思いやりあれば、羽飛くんもこんなに怒らないですんだと思うんです。もちろん暴力は悪いことだと思うんです。でも、羽飛くんがそうしたくなった気持ちも、私はわかるつもりです」

——誰がわかるかよ。

頬のひりひり感だけが残っている。ベッドに横になると、上総は両耳に指を突っ込んでうつぶせになった。顔を覆い、視界を闇に向け、堅く目を閉じた。

——今、どうやってこの場を乗り切るか。

上総に与えられた試練はまだ、続きそうだった。

おそらく夕方だと、父は仕事の真っ最中だろうし母も似たようなものだろう。まず連絡がつくとは思えない。菱本先生が勘違いしただけであって、本当は親なんて呼び出す必要もないわけだ。さっさとそのことに気付いて、早く家に帰してほしかった。

「立村、おーい、大丈夫？」

枕もとに近づいてきたのは更科らしかった。目を開けてシーツから顔をあげた。

いつもの子犬顔がのぞきこんでいた。

「今さ、お前んとこの母さんと連絡がついたらしいよ。なんかさ、うちの先生が生徒相談室まで連れて行かなくちゃって言ってたよ」

ちなみに更科の言う「うちの先生」とは、三年C組担任の殿池先生ではない。

密かに最愛なる、都築先生であることは上総も重々承知している。

「なんでだよ」

「すぐ来るらしいよ。今さっき、菱本先生としゃべってた」

——あの男、余計なことしやがって！

最悪のパターンが待ち受けていることだけはよくわかった。

「それとさ、さっき聞いたけどさ、今、羽飛と清坂が取り調べ受けてる」

「取り調べ？ どこでだよ」

「だから生徒相談室」

廊下にはもう人氣がだいぶなくなっていた。菱本先生に追っ払われたらしい。それでいてなんで更科だけが居座っているのか上総には理解できないが、それなりの事情があるのだろう。「うちの先生」こと都築先生は立ったまま何か書類を眺めている。

「悪かったな」

——せっかくのデートを邪魔してな。

おそらく更科は都築先生のいる保健室に居座り、べったりおしゃべりでもしていたのだろう。そこへ上総が運び込まれたものだからしょうがなく手伝ったりなんなりしていたのだろう。と同時に「羽飛、立村を殴りつける」事件はすべて事細かに評議委員全員に伝えられることだろう。ああいやだいやだ。何もかもいやになる。

「更科くん、ちょっといい？」

事務的な口調で都築先生が更科を呼んだ。ちっとも甘くない。

「悪いんだけど、立村くんを三階まで連れていってくれない？」

「はい」

なんだか、本当に付き合っているのかどうか謎の関係だった。更科は「俺は年上以外、感じないんだ」とか意味不明のことを口走っているけれど、実は都築先生自身何も更科に対して感じていないんじゃないだろうか。ただ、子犬を飼っている気分なだけであって。手のひらに転がされているだけじゃないだろうか。

そんなことも上総はあえて飲み込み、言われるがままに靴を履いた。

「じゃあ、行ってきまーす！」

一礼し、上総は保健室から出た。そこにはいつのまにか奈良岡と水口、そして下級生らしき男女が数人、ひそひそ話をしながら突っ立っていた。

「立村くん大丈夫？」

白々しく聞こえる奈良岡の声。

——大丈夫なわけないだろ。

それでも無意識で、首を振って笑顔を作ろうとする。

完全に青大附属で生きるためのプログラムがなされている自分に気付いた。

「先生、立村くん連れてきました」

自分ひとりだったら二回くらい深呼吸して、少しでも入るのを遅らせるだろう。更科はそんなことちっとも考えず、さっさとノックして、上総の背中をぐいと押した。

「じゃあ俺、ここで失礼するね」

頷いて礼をした後、上総は足元を見つめたまま中に入った。顔を挙げるのが恐ろしい。少しずつ視線を上げていくと、ソファーには大人が四人、そして貴史と美里、あわせて六人が腰をおろしているのが見えた。長いソファーには貴史が奥、その間に二人中年の女性が、その隣に美里。真向かいの椅子には菱本先生。そしてなんと、

「上総、早くこっちに回ってきなさい」

——こんなところで名前呼ぶなよ！

一番奥のお誕生席には、母が片方の口角をくいと挙げたまま、背を伸ばして優雅に腰掛けていた。この状況、最悪といわずしてなんと言おう。立ちすくんだまま上総はまず、状況を把握することに努めた。まずは頭を下げた方がいいだろう。見知らぬふたりの中年女性に礼をしたところ、座ったまま彼女たちが様子をおずおずと伺っているのを感じた。

——まさか、ふたりのお母さんか？

だんだん状況が上総の想像以上に大事となっていることが窺い知れた。

母の片手で小さくなっている貴史は、上総を見上げるなりいきなり、

「立村、さっきはごめん！」

立ち上がり九十度、がくっと頭を下げた。その隣にいるパーマをかけたふっくら顔の女性が立ち上がり同じく、

「うちの貴史が、もう、ごめんなさいね」

とか言いながら頭をまた続けて下げようとする。どうやらこの人が貴史の母親だということだろう。しかしその隣にいるのは誰だろう？ そのおばさんの手を握り締めて、

「ほら、落ち着いて」

とか話しているのは？ 美里がその女性の腕をひっぱり、

「黙っててよ！」

とか文句を言っている。よくよく見ると、目のきついところとかが美里にそっくりだった。これはやはり、美里の母と考えてよさそうだ。

「あ、僕は大丈夫です」

思わず丁寧な口調になってしまう。さっきまでは殴られた時の痛みと苛立ちで爆発しそうになっていたのにだ。大人を呼び込まれた以上、上総はいつものプログラム通り振舞わざるを得ない。あえて母の方を見ずに、上総は椅子の後ろを周り母のいる席の脇に腰掛けた。必然、菱本先生と並ぶ格好となる。

「羽飛くん、もう頭を挙げてちょうだいな」

母は立ち上がり「どうぞ」という風に片手を羽飛親子に差し出した。

「本日私が参りましたのは、うちの馬鹿息子に謝っていただきたいということではないのですから、先ほど申しあげましたように」

ばか丁寧な口調で、ふたりが座るまで立ったまま待ち、

「羽飛くん、利き腕どちら？」

やわらかく尋ねた。貴史も一瞬首をぴくぴく振るわせた後、

「右です」

不思議そうに答えた。真正面にいる上総と目を合わせた。避けることなく、じいっと見つめてきた。

「ありがとう。それと上総」

真っ赤な口紅も、つややか過ぎる長い髪も、この前会った時と同じだった。嫌な予感がした。同時に右頬へ鋭い痛みが走った。ソファーに背中を打ち付けてバランスを保った。隣を見た時、菱本先生がいきなり、

「立村、おい大丈夫か」

間の抜けた言葉を発していた。どちらにしても、顔を向けるための逃げ場がなかった。

「立村くん！」

美里の小さな声と、真中に座るふたりの女性が息を呑む様子。そして貴史の口がまん丸く開いていくのが、上総の目にははっきりと見えた。

——殺してやろうか。

四面楚歌、ってこういう時のことを言うのだろうか。

上総はただ、母に向き直り、黙って赤い唇に向かい、怒りを放射するだけだった。

母は微動だにせず、上総を正面から受け止める格好で座った。貴史たちに対してはお尻を向ける形になる。発射された言葉はすべて核弾頭だった。

「あんた、うちにセールス電話がかかってきた時、くどい話をそのまま聞いて、受け入れてあげる？ それともさっさと切る？」

——何言ってるんだよ、この人。

気の利いた切り返しをしたいのに、思いつかない。目にすべてのエネルギーを込めてぶつけるだけ。

「普通は切るわよね。時間をもったいないし、迷惑だし、話を聞いてあげる義務なんてないものね」

みなぎ息を呑んでいるのを、肌で感じる。自分の出方次第で母がどういう行動に出るか、なんとなくわかる。どちらにしても逃げ場はない。この場を乗り切るにはどうしたらいいのかわからず、上総は手を握り締めた。

「もしそのセールスマンが、電話切られたからといって傷ついた、悲しい、お前のせいだとか言っただけを訴えたらどうする？ 自業自得って言うわよね、普通」

——だから何が言いたいんだよ。

母の瞳がだんだん本気になってきた。自分とよく似た雰囲気眼差しとよく言われる。自分が激昂した時も、こんな顔をしているのだろうか。全く誰も受け入れられないようなこんな瞳をしているのだろうか。防弾ガラスをちりばめたようなそんな目を。

「上総、あんたがしてほしがってるのはね、そのセールスマンと同じことよ。断られて当然なのに、断った相手が悪かって逆恨みして、無理やり自分の売り物を押し売りしようとしているだけの、勘違い野郎よ。いいかげん気づきなさい」

いきなり肩を抱かれる。鳥肌が立つ。なんでいきなり割り込んでくるんだ菱本先生。

「あの、お母さん、今ここでは」

「少し黙っていただけませんか」

母にぴしゃりと撥ね付けられた。上総もその手を露骨に払いのけた。

「見苦しいところをお見せするようですよけれども、これも母親の義務ですから」

——じゃあさっさと出ていけよ。言いたいことそっちで言ってやるからさ！

貴史を筆頭に、ギャラリー一同はみな、何も言わずにじっと眼だけを向けている。

こんなところでなぜ、自分の恥をさらけ出さなければならないのだろう。

——死んだって泣くかよ。

上総は唇をかみ締めた。母だけをにらみ据えた。立村家の親子喧嘩をこんなところで再現させてたまるものか。挑発になんて、意地でも乗るものか。

母の眼差しがさらに険しくなった。いつもだったらとことん泣かされるまで責められるだろうが、すでに上総も母の監視から三年離れている。戦える。

「今、こちらで全部聞かせていただいたけれども、ここで間違っている人間はあんただけだってことがよくわかったわよ。もちろんそれはあんたを育てた私と和也くんの責任でもあるし、あんた自身にもどうしようもなかったところがあるのは理解しているつもりよ。でもね」

膝を組みなおし、鳥がくちばしの先でつしばむような顔をした。膝丈のスカートがいつのまにかたくし上がっている。第三者から見れば美人の部類に入るであろう母。背中できぞ、菱本先生は息を呑んでいるであろう。けっと笑い飛ばしたい。

「上総、あんたはいつも、周りが何もしてくれない、理解してくれない、だから当然こういうことをしているんだってことばかり言ってるでしょう。菱本先生に対してもそう、羽飛くんや美里ちゃんに対してもそう、すべて出会う人に。あんたがいわゆる普通の同年代の子とは違って、神経質だってところは重々承知しているし、有る意味それは仕方ないことだわ。でも、それを他の全く関係ない人に押し付けたり要求したりする権利は、上総、あんたには一切ないのよ」

——痛いと感じることも、やめてくれと叫ぶこともか！

この白々しい言い分。母以外誰もいなかったら、たぶん立ち上がってそのままお返ししてやったことだろう。母は目をそらさない。上総だけをじっと見つめている。いざ噛み付いたら最後、とことんなぶってやるとばかりに細長いくちばしでつつく鳥のように。

「他の人たちにとっては、あんたの繊細な感受性ってのはね、どうだっていいわけよ。いい？ 上総、あんたは自分をもっと尊重してほしい、こんな傷つきやすいぼくちゃんを真綿で包むように扱ってほしい、高級品なんだとばかりに威張りくさっているように見えるわけよ。親である私にもそれはびんびんと伝わるわ。その証明をするために、『いじめられっこ』だとか『運の悪い評議委員長』だとかいろいろな肩書を集めて、『こんなに努力しているのにどうして周りわかってくれないんだ』って一生懸命アピールしようとしているのが丸見えなわけ。わかる？」

——アピール？ そんな余裕なんてあるわけじゃないかよ！ ただこちらは痛くて死にそうだから叫んでいるだけじゃないか！

「だけど周りの人たちからしたら、そんなのちゃんちゃらおかしくて相手にする暇なんてないのよ。いい？ 他の人たちはあんたに普通以上の関心を払う義務なんてないわけだし、迷惑を掛

けられる筋合いもない。あなたの一方的にやらかす迷惑行為から身を守る権利だってあるわけよ。そうでしょう、羽飛くん」

ぶんぶん首を振っている貴史。完全に母の毒気にやられたと見える。上総は無視した。

「『どうして自分を受け入れてくれないんだ、それは親が、社会が、学校が』とかなんとか一方的に叫んでいるようだけど、あなた以外の誰もがあなた以上に大切にしたいなんて思っていないわよ。いいえ、そうね、少なくともここにいる人たちは精一杯上総のことを、尊重しよう、理解しよう、なんとか受け入れようと努力しているわけよ。わがままいっぱいのお坊ちゃまを、なんとかして仲間に入れよう、受け入れようね」

——押し付けがましい善意もかよ！

さっきちらっと見た、奈良岡彰子の白々しい笑顔が浮かぶ。

彼女もおそらく、全くの善意でもって接していることなのだろう。

上総にはただ、激しい嫌悪でしか感じられないことですらも。

そうだ、母の言う通り、上総自身の感じ方が異常なのだろう。

貴史や美里のあたたかい思いやりを、鬱陶しさでもって受け取ってしまう感性が。

でもそう感じずにはいられない。だったらせめてほっといてくれ、そう叫ぶだけでもいけないというのか。母が菱本先生、および貴史や美里と同じ世界の住人であることは上総も気付いている。理解してもらおうとは思っていない。だけど、こんなところで百パーセント全否定する必要があるのだろうか？　そこまで、感じ方の異なる人間は存在してはいけないのだろうか。

そう、青大附属において冷遇される杉本梨南と同じように。

感じ方の異なる自分は、存在してはいけないというのか。

母の厳しい叱咤は続いた。

「あなたはそれを、白々しいお仕着せだと思い込んでるでしょうね。そう感じる自分が正しいとか思い込んでいるでしょうね。そうやって上総、あなたはたくさんの人を傷つけてきたわけよ。羽飛くんの立場にもし私が立っていたとしたら、たぶんあなたを半殺しにしていたでしょうね。友だちとして精一杯の善意を仇で返されたようなものだものね」

向かいのソファでちろちろと貴史、美里が視線を交換しているのが見えた。

「上総、でもそれをあなたは絶対に認めようとしなさい。あなたがね精一杯自分が自分がと訴えていけば、ずっと被害者でいられるからね。傷つけた羽飛くんが悪い、理解しようとしなさい菱本先生が悪い、ずかずかと心の中に入り込んでこようとする他の人間たちがすべて悪い。繊細で傷つきやすいぼくちゃんをきちんと取り扱ってくれない社会が悪いってね。上総、あなたがずっと前、なんで『きらわれて』いたのかわかる？」

——嫌われていた？

「そうよ、あなたは『いじめられて』いたんじゃないの。『きらわれて』いたのよ。まずそこから考え直しなさい。あなたはねずっと、周りから迷惑がられてきたわけよ。自分を誰も面倒みてくれない、わかってくれないってすねて、他の子たちが一生懸命なじませようとしても殻から出てこなかった。ずっと殻に籠っているもんだから、他の子たちもどう接していいかわからなくて

ばたばたしている間にあなたは『いじめられた』と思い込んで恨みがましい目で見つづけたってわけ。あなたはひとりで被害者ぶっていたようだけど、他の子たちがどのくらい傷ついたか一度でも考えたことがある？ どうすればいいんだろう、どうすれば上総を仲間に入れて仲良くやっていけるんだろうって考えていた子たちの気持ちを、あなたは真剣に考えたことがある？」

——押し付けがましい善意を受け入れるのが義務だってか！

かみ合わない。母とは別次元の生き方をするしかなさそうだ。上総はこらえることにした。どんなことがあっても、受け入れる気なんてない。さっき母の手が飛んだ右の頬と、貴史にはたかれた反対側の頬、両方の熱さに攻め立てられている。

「自分のことばかり考えて、一瞬でも他の子たちの気持ちを受け入れようと努力したことがないから、何もうまくいかないわけよ。あなたが普通の子よりも何倍もハンデがあるのはわかっているしそれは私と和也くんができる限りのことをするわ。それが親の勤めだから。でもね、ここにいる菱本先生も羽飛くんも美里ちゃんもその他の子たちも、あなたにそれ以上のことをしなくてはならない義務なんて全くないの。そうよ、理解する義務なんてさらさらないので。理解しなくていいし、本当だったら無視したっていい」

——だから無視してくれって言ってるだろ！

なんでそこがわからないのか。唇をかみ締めすぎて、つばに血の味がする。

「それを上総、あなたは『理解することがあんたらの義務だ』とばかりに要求を吊り上げていったのね。ここだったら自分がしてほしいこと全部してくれるものだと思い込んでね。だから菱本先生に嫌がらせして、他の子たちの気持ちをずたずたに傷つけて、『もっと自分を丁重に扱ってくれ！』とか言ってるわけよ。そんなことずっとされつづけて、怒らないですむとしたらそれは神さまよね。上総、あなたは何様のつもり？ 『理解してほしい』ってのはね、最大のわがままなのよ。あなたのすべきことはね、その人たちと同じくらいのレベルで理解をするよう努力することなのよ」

「これ以上なにしろって言っただよ！」

理性で押さえつけていた言葉が、はじけ飛んだ。側に憎っくき菱本先生を始め第三者がずらっと並んでいるこんなところで、どうしてこらえられないのか。頭の中は火花が散り、今にも首を絞められて死にそうだ。こんなところで立村家の親子喧嘩を再現させてなるものかとこらえていたのに、どうして自分はこうも自分を裏切ってしまうのだろう。

母の口元に細い笑みの皺が浮かんだ。

「さっき言ったでしょ。あなたのしていることは、失礼千番なセールスマンが、断られた人たちを逆恨みしているのと一緒にだ。あなたには、水掛けられたって電話をがちゃりと切られたって相手を恨む権利なんてないので。でもね、そういうセールスマンにだってちゃんと逃げ場はあるのよ。理解してくれる場所はあるの。たとえば電話セールスだったらコールセンターという場所があってその上司や同僚たちが『なぜ断られたのか』とか『今度はいいお客さんに会えるといいね』とか言い合って、支えあうものなのよ。彼ら彼女らは断られた痛みを知っているし、さらにセールスの方法をレベルアップしていこうと応援することもできるのよ。それは彼ら彼女らが互いを受け入れあっているからなの。決して、断ったお客さんをうらむのではなくて、『ど

うして嫌われたのか』その理由を自分の中から見つけ出すためなのよ」

「正当な恨みも許されないってわけか」

「正当？ 勘違いするのもいいかげんになさい。上総、あんたはね、いつも自分のことしか見ていないし、自分自身を変えようなんて一度も思ってないわけ。どうしてあんたは自分自身に目を向けようとししないわけ？ 理解できないって言うのなら、どうして彼ら彼女らがそういうことを訴えようとするか、考えようとししないわけ？」

「考えてるさ、だからって」

「あんたの都合のいいように考えてるってことよね」

ちらと視線の隅で菱本先生と美里が頷き合っている。とてもだがそういうことをしている人たちの気持ちまで考えられるほど、上総は大人ではない。

「あんたの考えていることはだいたい手に取るようにわかるわ。『人のことを深く考えようとしな勘違いした人たちが、僕たちみたいな繊細で傷つきやすくてけなげな奴を勝手に決め付けようとしているんだから、当然相手が悪い』ってことでしょう。あんたは一度も、『自分ひとりを被害者に仕立て上げて、相手の精一杯の好意をつっぱねて、相手を傷つけてもそれから目をそらしっぱなし』って思ったことないのよね。そりゃあ、みんなあんたが百パーセント満足できることをしてあげられるとは限らないわ。親である私だってあんたがしてほしがってることを理解できるわけじゃないし、してやることだってできないわよ。でもそれはお互い様。理解できないからこそ、いい方法を考えようとするわけよ。さっきのセールスマンと同じ。大クレームの後どうやってこれから自分のセールストークをレベルアップしていけばいいのか、どういう風にアプローチしていけばいいのかを、自分自身の中で考えていくだけのことよ。上総、あんたは人が受け入れてくれることを当然のように要求しているわけだけど、要求する権利なんてもともとないの。あんたを受け入れられるのは、上総、あんたひとりだけだってこと、いいかげん元服の歳を過ぎてるんだから気付きなさい！」

そこまで母は、全く揺らぐことなくびしりと続けた。

——気が狂うくらいこちらだって相手側のこと考えてるさ。けど、どうしようもないってどうしてわからないんだよ！

別次元で呼吸している人たちに何を言ったって無駄だ。それはわかっている。

でもどうして人前で、とことん恥をかかせられなくてはならないのだろう？

そこまで自分は、無能なのか？

全身が熱い。どうしてここまで貶められるのか。鳳仙花の種のように一気に何かはじけ飛びそうだ。触れられたら終り、何かが終わる。

「上総、理解されないからいじけるくせをいいかげん直せってことよ」

ため息をつきながら、母は足を深く組みなおした。ハイヒールのつま先がとんがっていた。

「人間、親子であっても夫婦であっても理解できないのが当然なの。百パーセント受け入れられるなんてそれはわがまま。七十パーセントでも五十パーセントでも、受け入れられるところを探

して自分でその器をこしらえていくそれが大切な。あんたは自分が傷つきやすいからといって百パーセント受け入れろって叫んでいるけど、そんなのとんだ迷惑なの。一割でも二割でも受け入れてもらえたことを感謝する以外、あんたは他人に何も要求できないということを知りなさい」

身動きひとつしない周囲。母はゆっくりと締めた。

「自分の面倒は自分でみなさい。あんたに言いたいのはそれだけよ、上総」

——殺してやる。

母が菱本先生を始め他の人たちに一礼し、立ち上がった。

「本日はご迷惑をおかけして申し訳ございませんでした」

上総の腕を無理やり引き上げるようにし、立たせた。当然叩き落としたが母の手は簡単に離れない。ヒルのようだ。

「羽飛くん、さっき言ったように、君が罪悪感を感じる必要は全くないの。この馬鹿息子はね、実際そこまでされないと理解できないの。辛い思いさせて、ごめんなさいね」

——羽飛の奴、なんだよ、いきなりなんで真っ赤になってるんだ。

怒りよりも貴史の表情がゆでタコ状態になっているのに絶句した。まさかとは思うが、人前で「公開折檻」をやらかすような女が好みなのか、こいつは。

そして隣の、おそらく貴史の母に対しても、

「子ども同士のいさかいに親が口を出す格好になってしまいました。本来は私が加害者の母として謝るべきところです。申し訳ございません」

さらにぽかんとしている女性にも一礼した後、母は隣の美里に告げた。

「美里ちゃん」

——いつから名前と呼ぶようになったんだ。

「あ、はい、私」

どもる美里に母はやさしい笑顔を向けた。上総には絶対に向けられないものだった。この顔を向けられておそらく父は惑わされたのだろうと上総は思っている。

「あれの親としてではなく、女性として一言伝えておくわ」

「じょ、せい？」

とまどっている。上総と母を交互に眺め、側にいる美里の母らしき人にぺたりと寄り添うような格好をしている。

「上総みたいな優柔不断な男に惚れたら、美里ちゃん、あなたの本当のよさが見えなくなるわよ。親としてではないの、女の先輩として、早い段階で見切りをつけたほうがいいわ」

美里の目が大きく見開かれた。口がぽかんと開いた。もし誰もいなかったら上総は母親を蹴り飛ばしていただろう。せめて止めることだけはしたかった。

「いいかげんにしろよ！」

「お黙り」

母の目は次に上総をじっと射た。身動き取れない。自分にそっくりと言われる瞳の大きさ、ど

うみてもそうは思えない鋭さ。

「女の中から見てあんたがタイプじゃないとしてもね、上総」

肩越しに菱本先生が立ち上がり追いかけてくるのが見えた。上総は扉を開けようとした。逃げるしかない。母の言葉がそれよりも先だった。

「いやおうなしに一番愛しい男になるのが、自分の息子というもののなのよ」

三日間風呂にも入らず、食事とトイレ以外は一切部屋から出ずに過ごした。

全身がやたらと痒くてならない。部屋の暖房が効きすぎてかえって汗をかいているようだ。

部屋の中は本と脱ぎ捨てた服と、それから読みかけの雑誌と本が散乱していた。

いつもだったら片付けたくなるのが自分なのに、なぜか、その気力がなかった。

——今日で三日目なのか？

カレンダーを見上げた。すでに日付の感覚が失われていた。

母にとことん罵られ、プライドをずたずたにされた午後からずっと、上総は閉じこもるだけだった。追いかけてきた菱本先生に話すことなど何もなく、電話が鳴っても出る気もなく、父が帰ってくる前に風呂と食事を用意する気もなく。ただひとり、ベッドの中にもぐりこむだけだった。

——英語科推薦取り消しになるかもな。

もちろんそれはないだろう。三日間くらい欠席したとしても、いわゆる風邪だとかごまかせばいい。実際他クラスの連中も、インフルエンザで倒れている奴がかなりいる。あとは父がどう言うかだが、さっき部屋を覗き込みすぐに戸を締めた段階では何を考えているのかわからない。一応、菓子パン二袋くらいはテーブルにおいてあるのでそれを持ち込み、牛乳とあわせてそれを食べる。まだ、「学校に早くいきなさい」と怒鳴られてはいなかった。

父に罵られることは、生まれてから一度もなかった。

叱るのは母の役目と、決まっていた。

「上総、入るぞ」

鍵のかからない部屋というのがどれだけプライバシーを保てないものか。

せめて荷物を戸口に置いて防御すべきだった。上総はベッドにもぐりこみ、寝ている振りをした。せめて風邪で具合悪い振りをしたかった。

「狸寝入りはやめておけ、まず起きろ」

父にしては珍しく、布団を無理やり剥ぎ取った。全身、匂いそうで思わず体をこわばらせた。片手を額に当てられた。悔しいくらい健康体の自分をどうするつもりなのだろう。

「熱がないのは、わかっているな」

返事をしなかった。横を向き膝を抱えた。

「母さんからは電話があった」

「じゃあすべて知ってるんだろ」

吐き出した。ということは、いいかげんずる休みを決め込むのはやめて、さっさと学校に戻れ、とでも言いたいのだろう。父は別れた母にいまだぞっこんだし、それ以上に何のために離婚したのが謎だ。上総からしたら自分を置いてさっさとこのふたりだけ別の世界で生活してほしいか

った。

父は上総の勉強机から椅子を引っ張り出し、腰をおろした。

「母さんにはやりすぎたと釘をさしておいた。さすがに反省しているようだよ」

「言葉が取り戻せるかよ！」

父の手が毛布から外れたのを見逃さず、上総はすぐにもぐりこんだ。身体がかゆくてならない。さすがに三日間汗まみれというのは辛いので着替えてはいるのだが、脱ぎ捨てたものをすべてベッドに押し込んでいるのでさらにおいがきつくなっている。本当は早く風呂に入ってすべてをきれいにしたいのだが、そうしてしまうと何かが壊れてしまいそうな気がしてならなかった。

「ああ、上総、これから菱本先生が来るそうだ」

「あいつがなんで来るんだよ！」

今度は条件反射で飛び起きた。一体あの非常識な担任野郎、時間もわきまえずにか。棚の上の時計を見ると、まだ九時半になるかならないかだった。授業だってあるだろうが。青大附属の教師はそこまで自由があるのか。信じられなかった。

「あたりまえだろう。お前がそんなにすねているなら、担任として気になるのは当然だ」

「俺はそんなことしてないって」

「じゃあなぜ、お前学校から逃げる？」

「逃げてないって言ってるだろ！」

何を口走っているのか自分でもわからない。矛盾を突付かれて言い返せない上総自身。母にわけのわからないことを追求された時も、上総は叩きのめすことができず、貴史と美里たちの前で救いようのない恥をかかされたというわけだ。こんな無能な自分なんて、存在しないほうがいい。学校になんて、いないほうがいいに決まっている。人前でぶん殴られて、物笑いの種になった、元評議委員長なんて、見たくもないだろう。

「とにかく、これからすぐいらっしゃるそうだ。それなりの身支度はしなさい」

「会う気なんてないから。用事ないし」

「お前が用なかったとしても菱本先生にはあるんだ。いいか。きちんと話だけは聞きなさい。それとだ」

父は立ち上がり、ぐるりと部屋の中を見渡した。

「しばらく行きたくないのだったら行かなくてもいい。だが、部屋を掃除して風呂にだけは入りなさい。それが条件だ」

床におきっぱなしの皿を拾い上げ、父は机の上に載せた。

重くなった体を無理やり起こしながら、上総は着替えることにした。

薄手のトレーナーにデニムシャツでも羽織ろうかと思ったが、

——一応、あれでも担任だ。

菱本先生に敬意を表し、しかたなく制服にした。母の命で夏冬各三着ずつ用意されている制服だが、あえて小汚い方を選んで着た。礼儀は守るが、それ以上のことなんて気遣うつもりはない

。髪の毛はそれほどべとついているとは思わないが、少し前髪が裂けているような気がした。三日間鏡なんて見ていないので気になんてしてなかったが、あらためて眺めると目の周りには隈が浮いているし、口元には何かのたれみたいなのがついている。さすがに水で顔を洗うことにした。

普段の上総だったら、一日だって風呂に入らないなんてことは耐えられない。

絶対に考えられないはずだった。

でも、絶対抜けることが考えられない習慣も、こういう精神状態だとあっさり受け入れられてしまうというわけだ。自分のこだわりなんて、しょせん、そんなもの。

足の踏み場がないとはこのことだろう。散らばった本や服を拾い上げようとし、しゃがみこもうとしてやめた。父の言うことを素直に聞くなんてまっぴらだ。文句を言ってくれたとか言うけれども、しょせんあの人は母に対してぞっこんなのだ。

——どうしてあんな女と結婚したんだよ。

何度も呟きたくなる言葉を上総は、心底で唱えた。

決して表では口にしない。

一度あまりにも腹が立って、

「なんであんな人と結婚したんだよ！」

と叫んだ時、あの温厚な父に一日口を利いてもらえなくなったことがあったからだった。

ちょうど一通り着替え終わった頃、玄関のチャイムが鳴った。

——別に俺が出なくてもいいよな。

父に呼ばれたら何も言わずに居間に行けばいいことだ。

「上総、居間に来なさい」

父は短く告げた後、すぐに部屋から出て行った。またちらっと部屋の状態を確認するような視線を送っていた。ちっとも片付いていないのにあきれたのだろう。

「わかった」

目をそらしたまま上総も答えた。

あの憎き担任と直接対峙するのは初めてのことでない。毎年恒例の面談をはじめ、何度か呼び出されて暑苦しい説教をかまされることもある。そのたびに上総は流してきた。最初の一年は無表情で、次の一年は怒りを押し殺す格好で、今年は全く存在自体がないものとあきらめて。評議委員である以上、担任との接点を保たざるを得ないとはいえ、上総はできる限り逃げてきたつもりでいた。

——なのに、これかよ。

——最後の最後で、家庭訪問かよ。

家庭訪問も毎年行われていたけれども、この家までご足労いただくのは大変ということで、父と母が別の場所でお茶を飲みつつ語るような形を取っていたらしい。だからあの男がこの家に来るのは、上総の記憶する限り初めてのはずだ。

部屋を出る前に上総は締め切ったカーテンを少しだけずらした。外は真っ白い雪で覆われて

いた。三日間閉じこもっている間に、ほんのわずか顔を出していた木々の枝がすっかり雪に隠されていたらしい。冷たい窓に指を触れ、水滴が落ちてくるのを感じた時、久しぶりに突き刺さる感覚を思い出した。

重たい足を引きずるようにして、居間へと向かった。すでに戸は開け放たれていた。いかにも「早く来い」と言いたげなお迎えムード。いらいらする。上総はまず、居間のソファで両手を拝むようにして組んでいる奴に一礼した。礼儀だ。

「立村、どうした？」

——見りゃわかるだろう。

ああも露骨に顔を引きつらせなくたってよかろうに。菱本先生の脇で父が手で椅子を指差した。座れ、ということだろう。ああわかったよ、黙って銅像になってやるさ。

まじまじと菱本先生は上総を全身上から下まで眺めると、

「とにかく、元気でよかった。他の奴もみな、心配しているぞ」

——申し訳ありませんでしたって言えばいいのかよ。

悪いがそこまで口にする気はさらさらしない。父がちらと上総に目をやった。

「言いたいことがあるのだったら、きちんと言いなさい」

——言いたいことが言えたら、たぶんその場でこの会合は決裂だって。

上総は入り口側の一人がけ椅子に座ると、もう一度頭を下げた。横目で菱本先生の様子をまずは伺うことにした。なんといっても不思議なのは、この時間、二時間目、へたしたら三時間目くらいだろうに、どうしてクラス担任である菱本先生が品山くんだりまで来る必要があったのかということだった。確か社会の授業は他クラスでも受け持っているはずだ。背広を着てきたのはやはり、学校から来たということだろう。玄関先に深緑の車が留まっているのも、その推理を実証するようなものだった。

「あのシャンデリア、すごいなあ」

菱本先生はいきなり、天井から釣り下がっている照明器具を指差した。母が親戚から譲り受けたらしいごてごてしたシャンデリア。年末掃除が大変だとは口に出さないでおいた。父が苦笑しながら受けた。

「パートナーの好みです。なにせ、ああいう人ですからね」

「ああ、そうですか」

そこでなぜ、意味ありげな笑いを交わすのだろう。父が用意した缶コーヒーを菱本先生は開け、美味しそうに口へ運んだ。母がいたらこういう時、上総に命令しつつコーヒーメーカーで用意させるのだが、それをしないですんだだけでも感謝すべきなのかもしれない。

——しかしな、こいつも三年前から全く変わってないよな。

自分の年齢と二倍差の男、として遠めで見るようにしても、なぜ消えないのか嫌悪感。

同じ年齢の狩野先生に対しては素直に「教師」として深い礼ができるのに、この担任・菱本守に対しては「自分より目上の大人」とはどうしても思えない。上総はもう一度菱本先生の横顔を覗き込んだ。生後三ヶ月のひとり息子にめろめろだとか、巷では噂が聞こえてくる。好きでもな

い女性に押し切られて結婚せざるを得なかった可哀想な奴とは誰も言わないわけだ。

上総の思惟を全く読むことなく、菱本先生は上総に向き直り、膝を開き手を膝頭に乘せた。

わずかに前かがみになりながら、

「あのな、立村。まずこれだけは伝えておくぞ。お前が学校に来なかった三日間、クラスのみんなが心配していたんだ。周りには風邪だということで話をしておいたんだがな」

——だからそれでいいだろう。

口を閉ざしたまま、上総は受けた。相変わらずの情熱が鬱陶しい。

「羽飛と清坂が、まず一日目に俺のところへ飛んできた。立村があの後落ち込んでいないのか、傷ついていないのか、それを教えてほしいとな、泣きそうな顔で訴えてきたんだ。特に羽飛な、もしお前が家でさらに傷ついているんだったら、自分でちゃんと、お前の母さんに謝りに行くからって何度もそう言ってたんだ。暴力をふるってしまったのは自分であって、責められるのは羽飛自身だし、そのとばかりでお前がお母さんに叱られるのを見るのは辛いな」

——何にもわかってないよな。

貴史と美里がすぐに勘付いて訴えるというのは、上総も先読みしていた。

何かがあるとすぐ、あのふたりは組んで相談し、まず菱本先生に頼みにいくわけだ。

そして、「大人の力」を借りて上総をD組に連れ戻し、居場所を確保させようとする。

それがありがたいと思う時もないわけではない。いや、そう思いたいと言いつつ聞かせたことも何度もある。

でもそれが無理強いだったことに、今の上総は気付いている。

そういう風にしか受け止められない自分がゆがんでいるのだと、自覚もしている。

「立村、あの時は本当に辛かっただろうな」

少し砕けた口調で、菱本先生は続けた。

「お前があの日、生徒相談室に戻ってくる前にお母さんはな、羽飛と清坂のご両親に頭を下げられたんだ。本来はお前の方が被害者なのになぜかわからないでな、みな戸惑っていたんだ。そうしたらお母さんは、『これから先、自分ひとりで生きていかなければならない子どもに、なんとかして自分自身で心を守らせるための訓練をさせなくてはならない。その機会としてこの時間を使わせていただきたい』とおっしゃったんだ」

——なにが。要はあの人が考えてることったら、出来の悪い息子を叩きのめしたいだけだろが。

父とは違って完璧に自分好みのタイプではない、あの母に関して。知ったようなこと言うな、そう言いたい。

「だからあの場にいた人たちはみな、少しお母さんが言いすぎなのではないかと感じつつもあえて止めなかったんだ。それだけお前のお母さんは真剣だったからな。だがその後、改めて俺も考えた。もしだ、もし自分の息子が、立村、お前と同じ立場に立った場合、そこまで覚悟を決めて接することができるかどうかをだな」

——そんな大それたことじゃないのにな。あの人はただ、自分の理想の息子になってくれない

俺がむかついてならないだけだろうが。

とことんかみ合いそうにない。この場では一切口を利かないことに決めていた上総は、静かに菱本先生の言葉を聞くことに専念した。

「俺ならたぶん、どんな理由があろうとも、自分の息子が理不尽な傷を受けたら戦う。もちろんそれはお前のご両親も同じだ。誰だってそうだよ、自分の子どもを守りたいと思う気持ちに違いはない。ただ今回に関しては、羽飛が少し先走ってしまったというのと、俺が勘違いしてお前の倒れた状況を大げさに判断してしまったというだけであって、本当だったら羽飛とお前の頭を突き合わせて語らせるだけで十分だったはずなんだ。羽飛も、本当はああいう時に自分の感情をコントロールすることを学ばなくてはならない。暴力は何事も解決しない。そのことを改めて学ぶべきなんだ。同時にお前も、な」

——よく言うよな。

菱本先生はもともと貴史のことがお気に入りだ。本来なら評議委員は貴史に任せるべきという考えの持ち主だったはずだ。よくもまあオブラートに包みつつかばえるものだ。その言葉をすべて一枚ずつひっぺがしていき、上総はゆっくりと呼吸した。深く息を吐くと、少しは心が落ち着く。

「これは俺も卒業前、お前にきちんと話しておきたいと思っていたんだが、この機会だし言うな。立村、お前はまだ、自分を許していないだろう？」

——許す？ 何をだよ。

いきなりフェイントをかまされ、思わず顔を挙げてしまった。まずい、反応しているところを気付かれてしまう。慌てて目をそらした。遅かったらしい、父に指摘された。

「上総、聞きたいのならきちんと聞きなさい」

——聞きたくねえよ！

大人ふたりに囲まれ、自分は完全に十五歳の子ども。

惨めな気持ちが雪のように積もっていく。

上総の心の隙間をつくように、菱本先生は言葉をはさみこんでいく。

「お前自身が周囲の期待に答えられなかったと思い込んでいたのだろうかと、俺はいつも感じていたんだ。一年の頃からそうだったよな。クラス評議委員に指名され、評議委員長に任命され、いつのまにか自分はクラスのリーダーとしての活躍を期待されていた、そう思いこんでいたんだろう？」

——こいつ殺してやろうか。

上総はにらみ返した。逃げず、菱本先生もその目に反応してくる。

「俺が見た限り、立村、お前は自分のできる最大限の努力をしてきたようだし、決してそれが劣っているものとは思わなかったぞ。それどころか清坂や羽飛、南雲と協力してD組のために三年間、一生懸命尽くしてくれたことには本当に感謝している。実際、青大附中三年D組は立村がいてくれたからこそ、まとまったとも思う。その事実をまず、認めてやったらどうだろう」

——誰が認めてやれっていうんだ？

まったく理解できない価値観。何が「努力してきた」だろう？ なにが「最大限」なんだろう

？ D組がまとまった？ どこが？

——実際クラスをまとめていたのは清坂氏と羽飛となぐちゃんくらいだってこと、誰もが気付いているだろう？

「それにだ。前期評議委員長をきちんと務めてきたのも、俺たちはみな見ている。もちろん青大附中評議委員会の過渡期ということもあって、委員長交代というのは正直、辛いところもあっただろう。だがな、俺もA組の天羽によく言われるんだ。立村が居てくれたから、安心して評議委員長やれるんだってな。ありがたいことじゃないか。お前がどういう立場にいたとしても、みな受け入れたいとそう思っているんだ」

——本来は天羽が立つべき場所だったからしょうがないんだ。

「いいか、立村。いろいろあってしんどい時期だというのは、誰もが気付いているんだ。みな口には出さないがな、他の先生たちも立村のことを心配しているんだ。なんとかしてお前を無事、高校へ進ませてやりたいってな。さらに言うなら、お前がこれ以上傷つかないようにするにはどうすればいいのかということも、クラス全員が考えている。羽飛や清坂が懸命に、お前の代わりにクラスをまとめようとしているのも、立村が自分を取り戻して帰ってきてくれた時、居場所を用意しておきたいという気持ちからなんだ。よっくよっくわかるぞ」

——違うだろう。あれがあるべきすがただからなんだ。俺とは関係ない。

上総の呟きを一切無視したまま、菱本先生は言葉に酔い続けた。父の表情は何えない。自分と似ているところを持つ父が、まさか菱本先生の言葉を鵜呑みにしているとは思いたくもないが、大人は所詮、心を隠すもの。

「それにな、立村。お前は自分の中で、ずっと不要な劣等感を持ちつづけているんじゃないのかな。そう思えてならないんだ。入学した頃からずっと、青大附中が自分の居場所ではないんじゃないかとか、そんなこと思っているんじゃないのかなとな」

——居場所？ あたりまえだろう？

何をわかりきったこと言うのだろう。

思わず笑いたくなり、うつむいてこらえた。

岸壁すれすれをよちよち歩いてきた三年間、一度だってこの場所が自分のいていいところだと感じたことなんてなかった。

さらに菱本先生は、過去へとさかのぼっていく。上総の中をドリルで掘り返すように。

「俺は思うんだが立村、人間、それぞれできることとできないことがある」

ほんのわずか、前にせり出してくる菱本先生の身体を、上総はさりげなくよけた。

「お前が本当に努力してきたのは伝わって来ている。それを否定する奴は、D組には誰もいない。いないがそれと同時に、さらなる適任者がいる場合もあるだろう？ 辛いだろうが考えてくれないか？ 評議委員長に天羽が任命されたのはどうしてだか」

——わかりきっていることを掘り返すなんて何様のつもりだよ。

もちろん上総は答えなかった。

「狩野先生とも話をしたんだが、これはむしろ、お前がなぜ書記に任命されたかを考える方が

先じゃないかという結論になった。つまり、立村の適性を考えると お前、文字がきれいだろう？

読みやすい文字を書くししかも理解をきちんとしている。天羽がすっかり忘れてしまった時も、立村がサポートに入れば鬼に金棒、そういうことだ。つまり、お前の適性が優秀な書記であるということ、今の今になってみな気付いたからじゃないのかなというところだ」

——言い方変えればいくらでもいいこと言えるよな。

下手な褒め殺しを信じるほど、上総は修羅場を知らないわけではない。

「そう考えるとだ、本来立村、お前が力を発揮すべき場所というのは、『長』の立場ではなかったんじゃないかな、というところに達したわけなんだ。たまたま一年の段階で評議委員になり、上に立たざるを得なかったわけだが本来は、縁の下の力持ちとしてとことん周囲をサポートし、その上で才能を発揮する、そういうタイプなのではないかなとだ。お前が三年間ずっと、違和感を感じつつきてきたとしたらそういうところにあつたんじゃないかと俺は思うわけだ。立村いいか、お前が評議委員長から下ろされたのではないんだ。お前の能力が一番発揮できる場所に、今ようやくみんなが気付いたから、そこに誘導しただけのことなんだ。立村、お前は決して、評価を下げられたわけじゃないんだ。新しく本来の力を見出されただけなんだ、そう考えればすべての出来事が繋がってくるのじゃないかと俺は思うんだ」

——白々しいことよく言えるよな。

心に響くことなんて永遠にない言葉。髪の毛が痒い。やはり早く風呂に入って寝てしまいたい。しゃべっているのを聞いているだけで耳垢がたまりそうだ。

「これはお前にとって、辛い現実かもしれないがな。きちんと話しておくべきだと思うから言うな」

頭が完全に自己陶醉状態の菱本先生は、調子にのってさらに続けた。

「小学校時代の出来事については、実をいうとすでに、入学時から詳しい話を聞いていたんだ。それぞれ内申書というのがあって、そこでいろいろと話を聞かせてもらったりするし、さらに場合によっては、直接小学校の先生と話すこともある。そこですでにお前が小学校時代、辛い思いをしてきたことを聞いている」

——それってプライベートの保護に違反するんじゃないのか？

そこまで考えるのがやっとだった。上総はもうこらえきれずひたすら目に力を込めるだけだった。全身が熱い。汗だくだくになりそうだった。してやったりなのか、菱本先生は落ち着いて交わす。以前のように暑苦しいくらいに噛み付こうとはしないので、調子が狂う。

「その上で俺はお前に接してきたつもりなんだ。もちろん、それが正しいことかどうかはわからないし、むしろお前自身にはきついこともあったとは思う。だが、いろいろな事情が絡んでいたとしても、俺は一瞬だって立村を軽蔑したり馬鹿にしたことはなかった」

——嘘つけ！

全身をナイフにして、頭から突き刺してやりたい。

「むしろ、それで懸命に毎日戦い続けるのが痛々しいとさえ思っていたよ。本当にな。羽飛や清坂や南雲たちにもその点はわかってやってくれとよく話していたし、あいつらもわかってくれて

いたみたいだ。もちろん、それぞれ至らぬところはあつただろうが、奴らも精一杯、お前の気持ちに寄り添おうとしていたんだ。それだけはわかってやってくれないか。どんなことがあってもお前のことを嫌ったりしないし、それどころかかけがえのない仲間として受け入れたい、そう思っているんだ。たとえ評議委員長から降りる形になつたとしても、過去にいっぱい辛いことがあつたとしても、大切な仲間ということに変化なんてない。いいか立村、自分の置かれた肩書や立場がなんであれ、お前の存在価値がなくなるなんてことはない。それだけは頼むから、忘れてくれるな」

菱本先生はそこまで言い切ると、残りの缶コーヒーを飲み干した。顔が真っ赤だった。

——何もわかっちゃいない。

父、そして菱本先生の前で上総はどういう行動を取ればいいのか迷つた。

心に響く熱い言葉、なんてものはない。

ただ、冷め切った目盛りがだんだん氷点下に下がっていただけだった。

これ以上うっかり口を滑らせると、ふたたび菱本先生の求める「感動」の世界に引きずりこまれるだろう。クラスのみんながどんなことあつても迎えてくれるという幻想を、上総に押し付けるだろう。それを受け入れない上総を、責めたてるだろう。変えようとするだろう。

——死んだって、受け入れる気なんてないさ。

今の話で初めて知つたのは、菱本先生がすでに美里や貴史、南雲たちに対して、上総の面倒を見るよう頼み込んでいるという屈辱の事実だけだった。もちろん、小学校時代にやらかしたことがすべて菱本先生に伝わっているのは覚悟していた。むしろ入学取り消しにならなかつた段階でそうなのだろうとは思っていた。しかしまさか。

——俺が命がけですべて隠してきたことを、あっさりと。

——いつ、足を滑らせても不思議ではない路を歩いてきたのに、あっさり見抜いているなんて知つたようなこと、言うなよな。

陰で「あの立村がなあ、かっこつけてるようには見えて実は、あんな過去があるんだよなあ」と思われつつ、表面上では仲間扱いされていただけなのか。与えられた評議委員という役にふさわしくなるため、日々本条先輩にしがみつき教を請うていた自分がばかみたいだ。いや、最初からそうだったのだろう。自分はやはり、最初から評議委員になるべき人間ではなかつたのだ。菱本先生だってさっき言つたではないか。「長になるよりも控えて支える立場の方が向いている」と。

——わかっているさ、もし、一度も「長」になる経験がなければ。

上総は思い当たつた。

死んでも認めたくないことに。

——評議委員長に戻りたい。

「次期評議委員長はお前だ」と、本条先輩から評議委員長として指名を受けた時。

「やっぱ委員長ときたら、お前だろ？」と天羽たち同期から肩を叩かれた時。

「あの陰気男の立村ってばっかみたい」と陰で悪口言っていた下級生たちも、評議委員長に任命されてからはすれ違いざまに一礼してくれた時。

「立村くんを信頼してるよ」そう美里にささやかれた時。

「立村先輩を絶対評議委員長にします！」そう杉本梨南が叫んだ時。

評議委員長になれた段階で、この世に存在していいというお墨付きをやっともらえたような気がしていた。自分にふさわしくない、本来なるべき人材がうじゃうじゃいるにもかかわらず、それでもその肩書にしがみつきたかった。あの、誰もが認める本条先輩の弟分として可愛がられたこともそう。今まではレベルの高い連中から見下されるだけだった自分が、やっと評価してもらえたのだと、全身光に包まれるような喜びを感じた時。

すべて奪われてしまった。

もう、自分には何も残っていない。

いくら菱本先生が「本来の能力を発揮できるポジション」とか言って褒めちぎろうとも、上総が認めてほしい姿には一生見てもらえないわけだ。下級生から礼をされることもなく、委員長として丁重に同期たちから扱われることもなく、ただ「守られる」ポジションの自分に置かれるだけだ。

——最初からそうだったら、どれだけ楽だっただろう？

一度でも甘い蜜の味を知ってしまった以上、もう、上総は元には戻れない。

自分の居場所が正しいところだとしても、突き落とされるまでいた場所の空気、その清清しさを忘れることなんて、できない。

菱本先生はしばらく上総をじっと見つめていた。その後で父と向かい合い、「僕の言いたいことはすべて話しました。あとは、彼がこれから考えることです」

まず告げた。父も頷き、

「ありがとうございます。先生に受け持っていてだけで、上総も幸せ者です」

信じがたい言葉で返答した。

「時間はまだあります。ゆっくりとかけていただいて結構です。出席日数およびその他の件については、こちらでいくらでも対応ができますので、まずは彼の気持ちを最優先に考えてあげてください」

いかにも担任らしい言葉を並べ立て、最後にシャンデリアをもう一度眺めた。上総に、

「しかし、お前も気の強い女子が好きだよなあ、なんかわかるような気、するなあ」

意味不明の言葉を告げ、菱本先生は帰っていった。おそらく学校にだろう。

——また羽飛たちを呼びつけて、俺の様子がどうだったかをしゃべるんだろうな。

上総は父の物言いたげな目を無視しつつ、まずは風呂を沸かすことにした。制服をすべて丸洗いにすることにした。洗濯機は乾燥機付なので冬場でもすぐ乾く。ベッドに押し込んでいた三日分の下着類やらなんやらも全部洗濯機に押し込んだ。蛇口をひねって出しっぱなしにしている間、

部屋の中に散らばっている本やビニール袋やごみを全部拾い上げた。窓を開けて空気を入れ替えた。吹雪が部屋の中に舞い込み、寒いくらいだったが気にしなかった。

「今から風呂に入るのか？」

父が声を掛けてきたが一切無視した。

ついでに居間に散らばっている菱本先生在宅の跡をすべて片付けた。缶コーヒーを捨て、掃除機を掛けた。窓を思いっきり開けて部屋の匂い消しスプレーをがらがん吹いた。そうこうしている間に風呂が沸いた合図のブザーが鳴る。途中やりかけのまま、上総はさっさと風呂場に飛び込んだ。

三日ぶりに入る湯船の感覚と、あふれんばかりのシャンプーの白い泡を眺めながらふっくらしたきめ細かい泡を両手に掬い取った。何かに取り付かれたかのように手をこすり合わせてさらにふくらませた。小さなシャボン玉がひとつ飛んだ

手のひらにまだ形を保っている白い泡に、そっと口付けてみた。すうっと消えた。

今、欲しいものがなにかを見つけたような気がした。

——風呂からあがったら、学校に行こう。それからだ

ひとつの決意をした。

——落ちるところまで、とことん落ちてやる。

話別小説情報

たんすにぶら下がっている制服のうち、式典に着る時用にあつらえたものを選んだ。

見た目はほとんど変わらないが、袖と衿に全く汚れが残っていない。

ブレザーに腕を通してみると、ほんのわずかだがシャツのカフス部分が丸ごと外に飛び出していた。去年の春にちょうどの形でそろえたものだから、たぶん若干成長のあとはあるのだろう。

——完璧だ。

鏡をのぞきこみ、まだ生乾きの髪を櫛で梳いた。

筋がしっかり残っていた。

風呂からあがってすぐ着替えたせいか、まだぼっぼと温かい。

「上総、何している」

「今から学校に行く」

父が部屋に入ってきた。とりあえず床が見える状態となった上総の部屋を、ゆっくりと歩き回り、

「どうしていきなりそんな気になった？」

疑問を投げかけた。ふつうの親と同じく素直に「そうか、それはよかった」と流してくれればいいのだが、上総の父として十五年間顔を突き合わせてきたせいか、何かを勘付いているのかもしれない。知られてはいけない。母に気付かれていないだけでもまだましか。

「なんとなく」

「それなら、車で送っていく」

「仕事は？」

「今日は有給だ」

——ずいぶん雑誌社も暇なんだな。

自転車で行くのは長靴必要な雪の深さだけにまず無理だし、自動車もたぶん相当遅れていることだろう。知り合いに会う可能性だってある。上総はしばらく利益・不利益を両天秤にかけた後、父の誘いに素直に乗った。

菱本先生の熱いお言葉に涙したなんてことは、いくらなんでも思っていないだろう。

上総が担任を毛嫌いしていることは、両親ともどもよく知っているはずだ。

ただいかんせん、彼らが菱本先生を嫌っていないのもまた事実なのだ。

今のところは誰も上総に同調してくれそうな人がいない、それが現状だった。

車に乗り込み、黒いコートを纏い、そっと窓の外を眺めた。父の運転は母と違い、交通標識をまじめに守り、たとえ狸や狐がいきなり飛び出してきたも轢かないですみそうだ。こんな性格の違うふたりがどうして一度は結婚、なんてしてしまったのだろう。上総にとって十五年間の謎はそこである。幼い頃に聞いたことはあるのだが、もちろん教えてくれるわけでもなかった。はっきり言えるのは、自分だったら母・沙名子のような気性の激しい女性は絶対に選ばないだろうということだけだった。

計算でいくと、あと五年後に自分が恋人と結婚しても不思議がないということだろう。

両親が二十歳の時に上総が生まれたわけなのだから。

——結婚するなんて、信じられないよな。

いったい父はどうしてそんな「暴挙」に出ることができたのだろう？

そして、何を好き好んで、あの母を選んだのだろう？

「父さん」

「なんだ？」

「どうして、母さんと結婚しようなんて思ったんだよ」

以前、かっとなって叫んだ時とは違い、落ち着いて伝えたせいか父もおだやかなままだった。

「毎日、ひどいことばかり言われてさ、無能扱いされてさ、それでどうして」

「お前も大人になればわかる」

父はそれしか言わなかった。ハンドルを握ったまま、口元にかすかな微笑みを浮かべた。

「上総、人間にはみな、たくさんの顔があるんだ。気性のはげしい人もいれば、穏やかに見える人もいるわけだが、それぞれいろんな部分を見せ合っているんだよ」

「信じられないな」

父に対して母が、思いっきり甘ったれた態度を取っているとでもいうのだろうか。

否、絶対にありえない。あの「和也くんったらもう、なんでこうもいつもだらしなくしているわけなのよ！ ったく、ほら、立ち上がってここ、掃除して！ こういうところほんっとに上総そっくりなんだから！」などと頭から火が噴きそうなことを叫んでいる母に限っては。

「お前が将来、誰かを選んだ時になってからだな、そういうのがわかるのは」

——わかりたくもない。

上総はそれ以上答えなかった。助手席から窓を見つめ、これから何をするかを考えた。

三年D組の教室に戻って授業を受ける気は今のところ全くない。

貴史や美里たちと顔を合わせたいとも思わない。

本当だったら父のお言葉をありがたく受け取って、卒業式当日までずっと部屋に籠っていたいところだった。でも、あの菱本先生の来宅から何かスイッチが入ってしまった。この感覚、どこかで経験したことがあるけど、思い出せないのはなぜだろう。

「着いたぞ」

黙って降りた。車が走り去るのを背中であら聞いた。三日ぶりに見る校門と汚れた雪に覆われた地面、奥に見える生徒玄関。上総はじっと眺めた後、コートの袖に落ちる雪に眼を留めた。真っ白い結晶がひとつ、小さく残っていた。さっき風呂場で見た、シャンプーの純白な泡に近いものを感じた。

行く場所は、決まっていた。

「どうした上総、まずはまあ、その辺に座ったらどうだ？」

一階奥の教師研修室・いわゆる「E組」。

扉に手を掛け、中をのぞくとそこには駒方先生と、あとひとりだけだった。

黙って上総の顔を見つめるだけ。杉本梨南が刺繍をしながら座っていた。

——この先生、どうして俺のこと名前と呼ぶんだろうな。

いつもながらいらいらする。白髪そのものの駒方先生は、片手でなにやら鉛筆画を描きながら、笑顔で上総を迎えてくれた。

「今日は誰もいないんですか」

「いません」

返事をしたのは杉本梨南だった。もちろんいつもの無表情で冷たい視線をぶつけるだけだが、それでも向こうから返事をしてくれるとは幸先がよい。駒方先生が子細を説明してくれた。

「ゆいも小春も、ちょっと風邪をひいてしまったみたいでな。今日は梨南だけかわいそうにひとりぼっちなんだ。ちょうどよかったよかった。上総、少し梨南の相手をしてやってくれないかな」

——一応、今の時間帯は授業やってるんだろう？

五時間目に入ったばかりのところだろう。去年の自分の状況を思い返してみた。そうだった、二月といえば水鳥中学生徒会との交流会でばたばたしていたのだった。教室での出来事なんて全く覚えていないけど、杉本梨南を追いかけ、水鳥の副会長・関崎乙彦に連絡を取り、その間新井林を捕まえて状況を聞いたり、いろいろやっていたことは身体に染み付いていた。あの頃よりも体力もついたはずなのに、どうしていまは何もする気力がないのだろう。

上総は杉本の隣席に座った。今までは西月さんがいた席のはずだった。いつも西月さんは、杉本に張り付くようにして髪の毛を梳いたり、にこやかに話を聞いたりしていた。たまに霧島さんも話し掛けていたけれども、この数ヶ月ほどはお通夜のような会話のみだったはずだ。

「杉本、何やってるの？」

「見たらおわかりでしょう。刺繍です」

「あれ、今日はB組で授業受けるんじゃないのか？」

「すでに私は高校レベルの勉強してますので、今はここでの授業のみです」

そんなことできるのか、とかなり驚いた。大学の聴講をさせてもらっている上総も、なんだかんだ言って青大附中の英語授業はしっかり出ている。なんだか今、杉本の置かれている状況はちょっと根本的に何かが違うような気がする。このまま三年に進んでも同じなのだろうか。駒方先生がまた笑いながら声をかけてくる。

「種明かしするとだ、梨南はがんばりやだからあつという間に授業が終わってしまったんだよなあ。だから、空いた時間を使って、梨南の得意な刺繍をやらしてもらおうかという話になったというわけなんだよ。ほら、上手だろう？ 梨南はこういう幾何学模様のものが上手なんだよなあ」

「誰でもそうではないですか」

黒い糸を使い、ひたすら同じ幾何学模様で埋め尽くしていく絵柄は、どこぞのブランド食器をモチーフにしたように見えた。去年一緒にマイセンの食器展に出かけた際、杉本は上総に逐一柄についての説明をし続けていた。内容は全く覚えていないけれども、その博学ぶりもさることながらその時にちらと見せる、不安げな表情が印象的だった。

——聞くことしか俺にはできないからな。

「俺もすごいと思うよ。そうか、杉本はそういうのが得意だよな」

「私はこういう能力で認められても嬉しくもなんともありません」

きつとした眼差しで杉本は言い返した。めずらしく駒方先生が割って入った。

「いや、これが梨南の魅力だと思うんだがなあ、そう思うだろう？ 上総も？」

いきなり振られてもしょうがない。頷くしかない。

こうすると杉本のご機嫌を損ねることはわかっているけれども。

駒方先生は近づいてきて、ふたりの前に立ちはだかるように、机にもたれた。

「いいかい、梨南。梨南は、自分が頭のいい子でないとみんなに嫌われると思っているだろう？

賢くないと馬鹿にされると思い込んでいるんじゃないかな」

「あたりまえのことをおっしゃらないでください」

全く意にも介さず、杉本は針を動かした。くいと糸を引き、くるくると先に巻いた。

「でもな、もし梨南の成績が下がったとしても、みんなは決して梨南のことをばかにしたりしないんだけどなあ。それを、信じるのが今の梨南には必要なんだよ」

「ふざけないでください。何考えているのですか」

相変わらずぴしり、と杉本は言い返した。

「ならどうして私はこうやって追いやられているのですか。迫害されなくてはならないのですか」

「早く気付いてほしいからなんだよ」

「そんなもの必要ありません」

かなり厳しい言い方だった。もし相手が桧山先生だったら罵倒するか冷たく叩きのめすかのどちらかだろう。駒方先生はどうも、怒りの入るスイッチが壊れているみたいで、全く気にならないらしい。こういう人は杉本の周囲に殆どいない。

「いいかい梨南。梨南は頭のいい自分とか、何でもできる自分でないといやだと思ってるだろう？ だから高校のカリキュラムも自分で一生懸命勉強したし、学年でトップを取りつづけているわけなんだよなあ」

「でもその能力は認められておりませんが」

「そうだなあ。梨南、本当の梨南のよさをもっと受け入れてほしいんだけどなあ。ほら、こうやって一生懸命刺繍をしたり、お茶を淹れたり、小春やゆいたちに可愛がられたりするところとか。こういう可愛いところをもっと、他の人たちに見せていけば、みんな戻ってきて欲しいと思うんだよ」

「死んでもいやです。私は一生嫌われつづけた方がましです。ありのままの私でないものを好む人の側には行きたくありません」

にべもない。上総は黙って横顔を見つめ、手元の針がかすかに震えているのに目を留めた。

——駒方先生にはわからないんだ。

たぶん、駒方先生の言う言葉は間違っていないのだろうし、その通りにすればたぶん杉本梨南

は受け入れられるだろう。人の顔色を見るように心がけて、頭脳明晰さよりもかわいらしさを打ち出すようにして、男子たちや先生たちの言葉は反論せずに受け入れて。そうすればたぶん、これ以上嫌われずにすむに違いない。

でもそれがどんなに杉本の発する言葉を奪っているのか、駒方先生を代表とする人々は考えようとしないうけだ。もちろんE組という場所をこしらえて、見えないけれども傷ついている杉本を保護して、守っていることは評価する。でもそれは、杉本のためというよりも、杉本から被害を蒙ってきた人々を保護するためのように上総には見える。気付かないでいられれば極楽だけど、杉本梨南のように鋭い感性の持ち主にそれは丸見えだということも、この人々には理解できないのだろう。

——あの熱血教師野郎もそうだしな。

すべてが「みんな仲良く」でおさまると、みな信じている。

そうしない限りこの世界で生きてはいけないとわかっているけれども。

上総は杉本梨南の隣でじっと針の動きを見つめ続けた。

普段だったら「先輩、やはりあなたは変態なのですね」みたいなことを言われるだろうが、今日の杉本は特段とがめるでもなかった。布からつんと針先が現れて、黒い糸をくるくると巻き取って幾何学模様をこしらえていく。

「この布で何を作るんだろう」

「ベッドカバーです」

「だからこんなに大きいのか」

「刺繍する場所は隅だけですから楽です」

簡単だが答えが返ってくる。時折目をこするようにして、杉本は唇を結び直した。ブレザーの襟元がかすかに揺れた。

「上総、今日はこれからどうするんだ？ 3Dの教室、寄っていくのかい？」

また名前と呼ばれたことにむかつきつつ、上総は首を振った。

「明日からにします」

「そうか、無理することもないからなあ。まずはゆっくり休んで、それからの方がいい。そうそう、上総、あとからお前は大役をおおせつかることになるから、少し英語を紐解く訓練でもしてたらどうだ？ 大嶋教授が上総のことを絶賛していたんだぞ。中学生だというのに、あれだけきちんと読解していてさらに作品背景に関して他の大学生たちより深い読みをしているってなあ」

「たいしたことないです」

大嶋教授とは、二年前から大学授業聴講を許された際についた先生のことだった。

五十代前半、なんでもハーディあたりが専門らしく、桧山先生も学生時代に卒論でお世話になったらしい。なんとなく気に入られてはいると感じてはいるけれども、それは青大附中でしているようなガキ臭い行動を一切行っていないからだろう。

「とにかく、ここで少し英語の勉強をするのもいいぞ。菱本先生にはちゃんと言っておくからな

。あと数学類はどちらにしても狩野先生が担当してくれるからその点も安心だろう？」

上総は駒方先生の穏やかな表情をじっと見た。

なんでそんなに話が進んでいるのだろう。

いくら今日、西月さんと霧島さんがふたりとも休みだからといって。杉本ひとりだけだとやはりまずいということなのか。上総が貴史にぶん殴られた事件を駒方先生ひとりが知らないわけもないだろう。

「まあ、今日は五時間目終わるまで、ゆっくりと梨南と話をしたほうがいいなあ。ああ、菱本先生にもそれは言うておくからなあ」

駒方先生は軽く右手を挙げ、腰をかがめて教室から出て行った。

蛍光灯を付けっぱなしにし、上総は窓辺に立った。雪の膜がいつのまにかぴったりと窓枠に張り付いていた。景色も何も見えず、ただふたりきり、わずかに黄色く染まったまま包まれていた。

「大役とはなんですか」

いきなり杉本の声が響いた。

どうやら、さっきの駒方先生が話した言葉を耳にしていたらしい。

「さあ、わからない」

「英語科関係のことですか」

「どっちにしても俺には関係ないから」

ほんとに、どうだってよいことだった。雪を眺めたまま目を凝らしていると、ようやく白い膜の向こうに建物が見えた。一年教室の建ち並ぶ校舎だった。その上に二年、三年、と重なっていく。玄関口からA、B、C、Dと並ぶはずだから、現在上総たちがいる教室から見える場所はおそらくA組のはずだ。

「それにしても、お尋ねにならないのですね」

また抑揚のない声で杉本が声をかけてきた。上総も目を外からそらさずに答えた。

「何を？」

「西月先輩と霧島先輩のことです」

「風邪だろう。それ以上何を聞けっていうんだよ」

かつては重大事項だったはずなのに、全く興味を失っている。

それも肩書が消えたからだろうか。まあいいさ、あとで天羽あたりに聞けばいい。

「杉本は事情を聞いているの」

「いいえ、教えてもらえません。ただいきなりお二人が学校に来なくなったのと、難波先輩が一人で走り回っているのが気になった程度です」

そんなのいつものことだろう。上総は聞き流した。どうせふたりとも進学先は決まっているのだし、それ以上触れる必要はない。

「ずいぶん立村先輩、他人に対して無関心になられたのですね」

「そういうわけじゃないけどさ」

その通りのことを当てられた。全くもって、その通り。今の上総には、評議委員会に関する事情も、三年D組の文集づくりにまつわるよしなも、菱本先生に関するうっとおしい情報も、どうだっていいことだった。なんでつい三ヶ月前まではそのことに専念されていたのだろう？ 離れてみれば、なんでもないことばかりだったのに。すべてをこそぎはがされた今、残されたものは何があるのだろう？

またひとつ、雪が窓にひとつ、降りた。指先で叩いた。

「杉本、どうして俺が来たのか、聞かないのか？」

挑発してやりたくなった。杉本の座っている席にもう一度近づいた。立ったまま机に手をかけ、顔を覗き込んだ。

「行く場所がないからではないですか」

「かもな」

杉本の答えに頷いた。その通りなのだから、それしかない。

「でも、明日からは三年D組にお戻りになられるのでしょうか、それはそれでいいことです」

「清坂氏あたりからなにかか聞いてないのか」

じれてきてつい、口にしたくないことまで呟いてしまう。杉本も戸惑うことなくあっさりと答えた。

「聞いてますが、それは関係ないことです。私も知ったことではありません」

「そうか。ならさ」

その時、チャイムが鳴った。五時間目終了の合図だった。

おそらく駒方先生は上総がE組に現れたことを菱本先生あたりに報告しに行ったのだろう。もしかしたらまた、午前が続いて午後のお説教を聴かされるはめになるかもしれない。学校に行く以上覚悟はしていたけれども、結局D組の教室に足が向かなかったのだから、今日はもう顔を合わせたいとも思わない。E組から帰ろうと決めていた。

だけど、まだ、これっぽっちしか杉本と話をしていない。

このまま帰りたくない。

上総は杉本梨南の長いポニーテールの束に触れた。驚いたのか、目を丸くしたまま杉本は上総を見つめた。指先に伝わる滑らかな感触、杉本がどれだけ自分のストレートヘアを大切にしているかがよくわかった。すべてが杉本梨南そのものだった。

——変態と言われるだろうな。

杉本は言わなかった。ただ黙って、上総の目を見据えるだけだった。

「あのさ、杉本」

風呂場で、車の中で、そしてたった今心で繰り返した言葉を、上総は告げた。

「一緒にふたりでどこかに行こう」

シャンプーの泡を見つめ、その中に七色の光とともに見つけたのは杉本梨南の眼差しだった。車

から見える雪の結晶ひとつに、すぐ壊れてしまいそうなおののきを見つけたのも杉本梨南の仮姿か。そして今、雪のペールに包まれて、そのまま凍ってしまいそうな自分と一緒にいてくれるのは、杉本梨南だけ。

何もかもなくした自分に、一番欲しいものをくれるのは、杉本梨南だけだった。きれいごとでも、嘘っぱちでもない。ただそこにいる、それだけで上総を潤してくれるたったひとりの存在だった。

どうして今まで気付かなかったのだろう。

それがいわゆる「恋愛感情」というものなのだろうか。

わからない。そんなの知りたくもない。

上総はただ、杉本梨南とずっと一緒にいたい、それだけだった。

杉本はゆっくりと首を左に寝かせると、かばんに教科書類をすべて入れ始めた。その手を動かしたままで、

「寄り道はどうぞと申し上げたいところですが、立村先輩はどこに行かたいのでしょうか」

「どこって……？」

決めてなかった。思い出したのは財布の中身についてもだった。すべてお年玉は郵便局に貯金してしまったはずだ。お金を下ろすにもキャッシュカードが必要だしそんなの父でないと持っていない。だいたい三千円程度だろうか。

「それがわからないと私も動きようがないのですが」

ぴしゃりと杉本は畳み掛けた。廊下をわあっと誰かが走り抜ける声が聞こえた。もうここには居られない。菱本先生や貴史、美里たちと顔を合わせるのもごめん。上総はコートを一気に羽織り、杉本のコートを後ろのロッカーから持ち出し着せ掛けた。また驚いた目で上総を見つめる杉本に、

「歩きながらそれは考えよう。とにかく、急いで」

戸惑いつつも杉本が身支度を整える間、上総は片手に白いマフラーを手に取った。

繊細な編み込みが施された、細編みのものだった。コートのボタンをはめ終えた杉本に、上総は無言を言わず自分の方を向かせると、首にしっかりとマフラーをかけてやった。

言葉も出ない杉本の片手がだらんとぶら下がっている。隙ありだ。

「さ、行こう」

細い手首。指先に伝わる温かい感触。上総は握り締めた。半ば引きずるように教室の扉を開いた。と同時に目の前にはずらっと、会いたくもない連中に迎えられるのを感じた。

「立村くん！」

足がすくんだ。ほんの一瞬のことだった。

——ごめん、清坂氏。

じっと目でその意だけを伝えようとした。でも無理だとわかっていた。

「どうしてうちの教室に来ないのよ！」

叫ぶ美里に上総は首を振った。慌てて近づいてきたのは菱本先生だけだった。

」

「なんで立村、三日も休んでる？」

「みんな心配してたんだよ」

菱本先生が慌てて上総の前に立ちはだかろうとした。

「立村、来る勇気を出してくれたのか」

——勘違いもいいかげんにしろよな。

近づいてこようとする菱本先生と、それを追いやって前に出ようとする美里、その後ろで魚みたいに口をぱくぱく言わせている貴史と、きょとんとしたまま無言で突っ立っている南雲、その他三年D組の連中集団が列になり見守っている。

その中で上総は自分のしたいことを、ひとつだけした。

「先に帰ります。失礼します」

駒方先生と、近づいてきた菱本先生に一礼した後、上総はざわめきの中そのまま廊下をつきついでいった。もちろん杉本梨南の手首は離さずに。杉本も何度か振り返ったようだが、とりたてて騒ぐこともせず、黙って上総の引きずる方向に着いて来てくれた。

怖いくらい素直に、杉本梨南が隣に寄り添ってくれている。

だから上総も、何も言わずにすむ。

校門を出たところで待ってましたとばかりに到着した、青潟駅前行きのバスに乗り込み、車酔いしかけた時も杉本は上総の側から離れなかった。

「お背中、さすりましょうか」

二人がけの席で、息苦しさで戦っていた上総の耳元に杉本がささやいてくれた。

それだけで十分、駅まで耐えていられた。

バスから降りると、そこは雪で固められたつるつるした道が白く光っていた。

上総は後から降りてくる杉本に手を差し伸べ、その腕を堅く握り締めた。

「滑ったらまずいから」

それだけ伝え、上総は繁華街に向かい歩き出した。

——どこに行こうか。

とにかく駅まで出て、そこからどこかに行こう。

青潟以外のどこかへ。

でも「どこか」ってどこ？

歩いているうちに思いつくだろう。

「立村先輩、どちらへ向かわれるご予定なのですか」

杉本梨南の声に、はっと上総は振り向いた。

ぼんやり歩いているうちに、たどり着いた場所を見極めて息を呑んだ。

——ここって、なんだよといったい。

「杉本、違う、そういう意味じゃなくてさ、あの」

あわてて言いつくろう。嘘を言うわけではないのだ、なんでこんなど派手なピンク色の建物が立ち並ぶ路地まで連れて来てしまったのだろう。ちょうど昼下がりで、人通りはなく、いつぞや南雲と一緒に焼肉を食べた後たどり着いた場所。あの日と同じく路地はどことなく陰気で、おそらくホテルの従業員らしき人たちが雪かきをしている。

杉本の顔を恐る恐る見やると、ものめずらしげにあたりを見渡し、小首を傾げていた。今のところ、特段軽蔑を表した様子はない。その点だけ少しほっとした。変なこと、想像されても困る。

「あまりセンスの良くない建物だらけという気がしますが」

「だろうな」

「立村先輩はこちらにいらしたことがあるのですか」

棒読み口調の杉本に、上総もおそろおそろ答えた。

「あるわけないよ」

「そうだと思いますが、はっきり申しまして私も行きたい場所ではありません。場所を替えまし

よう」

しゃちほこばった言い方だが、引っ張られる手首が堅くなっているようだ。

——やっぱり、誤解してるぞ、杉本。

どう言い訳すればいいのだろう。もちろん誤解されるような歩き方をした上総が悪いのはわかっている。でも、全く無意識だった。たまたま南雲に連れてこられた場所がここだったからというそれだけのことだった。なんでこんなところに杉本をひっぱってこようなんて思ったのだろう。車に酔ってしまって、少し判断力が鈍ってしまったのか。

杉本はそれ以上なにも言わず、上総についてきてくれていた。

——なんで黙ってるんだろう。

杉本梨南がもともと、納得いかないことにはてこでも動かない子だというのは、上総が一番よく知っているはずだった。どんなに傷つけられても、自分の価値観にそぐわないものは一切拒絶し、たとえ殺されても悔いはないと言い切る、それが杉本梨南のはずだ。

今、上総が梨南に対してしていることは、

「立村先輩、あなたは少しおかしいのではないのでしょうか？ いったい何が目的でそのようなことをされるのですか。無意識の意識において、汚らわしい妄想を組み立てておられたのではないですか。もう二度とお会いするのもいやです、この世から消えてください」

くらい言い返されても不思議はないことだった。上総がどんなに言い訳したとしても、今歩いている場所がいわゆる、ラブホテル街であり、その中で何が行われているかをかきこい杉本はよく把握しているはずだ。上総自身がつかめていなかった本心と認めたくはない。でも、そう思われても仕方のない行動では、あるはずだ。

——なのに、なぜ。

上総は杉本を振り返り、そっと覗き込んだ。立ち止まると杉本も黙って見返した。

——どうして何も言わない？

目で訴えてみた。もちろん返事が返るはずもない。

ふたたび上総はもときた道に戻っていった。とりあえずは駅前に行こうと決めた。そこで缶ジュースでも買って、一口飲めば少しは心も落ち着くような気がした。

南雲と一緒に歩いた正月三が日の夕暮れ時、きっぱりと見知らぬ女性たちから切り捨てられた言葉を思い出し、上総は思いっきり首を振った。頭に降りかかった屈辱をはたきで落としたような感じがした。

——どうせ俺は中学生だ、大人じゃないってことだ。

「立村先輩、ひとつご相談があるのですが」

駅に到着した。周囲を見渡し、青大附属の制服を着た連中に見られないよう、長距離列車切符売り場の隅に隠れた。杉本の手首を離すと、するっと杉本は上総を隠すような格好で上総と向かい合った。

「先輩はこれから、目的の場所がおありですか」

たんたんとした、あいかわらずの棒読み口調。上総は答えられなかった。黙って杉本の瞳を覗き込み、そのゆらめきに見とれた。いつもの杉本とは違うのは、そこから責めたりなんなりしないところだった。

「ご事情は存じておりますのでお付き合いいたしますが、いくつか確認させていただいてもよろしいですか」

なんだろう、いきなり。大きな瞳がじっと上総に突き刺さる。身動きが取れない。心臓がどくどく言い始めている。かろうじて言葉を発した。

「うん、いいよ」

「立村先輩は、今日、お家に戻りたくないということですよ」

——答えれっていいのか？

髪の毛にかかった雪が溶け、杉本の髪の毛をぺたぺたとぬらしている。一滴、涙っぽく頬に垂れた。もちろん泣いてなんていないのは承知している。

「だったら、いかがでしょう。今夜、こうするというのは」

「こうするって？」

一呼吸置いて杉本はまっすぐ、長距離用列車切符販売機を指差した。近距離用切符販売機にはちょこちょこ人がたまっているが、長距離用の方にはあまりいない。

「鈍行往復切符を使用して、長距離列車で往復をいたしましょう」

「往復？」

杉本の言っている意味が掴み取れない。上総は何度か繰り返した。杉本の顔は全く揺らぐ、同時に冷静なままだった。

「つまり、私とふたりで汽車に乗り込み、終点に到着したらその場で今度は青潟に戻るのです。そして青潟についたら今度はもう一度切符を買い直して同じ目的地を往復し、また青潟に戻るのです」

「切符って、でもそれは」

「そうすれば、誤解を招く場所に行くこともなく、安全にふたりでいられるのではないのでしょうか。立村先輩の目的は、誰にも邪魔をされないところで私と一緒に空間を共有することなので、それはおかしい場所でもなくてもいい話です。ベストな方法だと思うのですがいかがでしょう」

——誤解を招く場所だってさ。

照れもはにかみもなく、きっぱり言い切る杉本梨南の口調に、上総は逆らうことができなかった。

杉本の勧める路線は、青潟駅を出発後三時間かけて終点の三桜駅に到着した後、折り返し青潟に戻るものだった。ちょうど、夜の十時前後に到着するらしい。その点、時刻表を観るたび頭の痛くなる上総にはよくわからない。ただ、杉本なりにそのあともきちんと計算しているらしく、「その次に夜行の鈍行が走ってます。どうしてもお帰りになりたくないというのでしたらそれに乗り込みなおすというのも手ではないでしょうか。夜行料金がかかりますが、鈍行でしたら朝ま

で時間をつぶせます」

とのこと。このあたりの段取りは全く上総の範疇になく、すべて杉本に任せることにした。

「けど、切符代は」

「私のお年玉がたくさん残っております。そのくらい出します」

「それはまずいよ」

「だったら先輩、いくらお持ちなのですか？ それ以外私には方法が見つかりませんが。前もって言うておきますが、私は変な場所にだけは行きたくないのです」

「連れて行くなんてそんなさ」

「でしたら私の言う通りになさってくださいませ！」

今日初めて、いつもの杉本らしいとんがった口調が飛び出した。思わずほっとしてしまうのはなんでだろう。

「それでは切符代を調達して参ります。少々お待ちくださいませ」

札をきっちりした後、杉本はいったん駅から出て行った。

杉本がいなくなった後、上総は駅構内の待合室に椅子を見つけ、腰掛けた。

授業を受ける気がさらさらなかったのかばんはほとんど空だった。

出入りするの高校生が中心で、時折パステルカラーのコートをまとった集団が通り過ぎたりもしていた。上総はぼんやりとそれを眺めていた。外はだいぶふぶいてきたのか、頭の上に白い粉を被ったまま歩いている人も結構いた。

たぶん、品山に帰るにしても、車のタイヤは相当乱れているだろうから、遅くなることは間違いない。もし真夜中に戻ったとしても父に叱られる程度ですむだろう。

——品山に杉本を連れて行くだけでもいいのかな。

ちらとそんなことを思った。

実は何も計画なんて立てていなかった。

思い切って家の中に杉本を連れ込み、ふたりきりでべったりと側にいたい、それだけだったのかもしれない。だけど、現実、自分の部屋の汚さや、父にしっかりと見張られている現状、できるわけがなかった。

——あてもないくせに。俺は何考えてるんだらう。

指摘された通り、自分はただ、いつぞやのお姉さんたちに笑われたのが悔しかっただけなのかもしれない。杉本を連れ込んでどこかのホテルで一夜を明かした っただけなのかもしれない。そんなこと一瞬だって思ったことがないと、そう言いたいけれども、それは自分の気持ちのごまかしであって、本当のところはただ、「汚らわしい」欲望だけなのかもしれない。

バスの中で杉本が何度か上総の背をさすってくれた時、片腕にコートで覆われた胸元がぺたっとくっついた。やわらかい感触が肘上に広がったことを覚えている。

——最低だな、俺は。

——そんな奴に、杉本はついてくるって言うてくれてるんだよな。

杉本が今、何を考えているのかはわからない。

ただ、上総の側に今夜だけは寄り添ってくれようとしている。

杉本なりの、意志でもって。

——あとはどうなったっていい。

このひと時だけを味わいつくし、青大附属三年間の日々を清算しよう。

時計を確認し、両手を組み合わせ、上総は目の前の時計を見上げた。ちょうど時刻は四時半を指そうとしていた。

「お待たせしました」

しゃちほこばった声で杉本が戻ってきた。約十分くらい経っていたようだった。杉本の片手には、どこで手に入れたのかポケット版の時刻表が握られていた。

「それ、買ったの」

「はい」

簡単に答え、上総がかばんを載せておいた椅子に座った。膝に時刻表を広げようとしたが小さすぎてうまくいかないようだった。それでもぱらぱら素早く繰って、

「五時ちょうどの鈍行があります。青潟から三桜行きです。到着がだいたい七時半のようです。そこで三十分くらい次の汽車には間があり、また青潟行きの折り返し運転になるようです。十一時過ぎには戻ってこれます。そしてもう一夜明かすならば」

ここで杉本は言葉を切り、上総の目を見つめた。

「あまりお勧めはしませんが、同じく夜行が一本あるようです。これは青潟から十一時二十五分発の黄葉山行き。こちらは朝七時に到着です。同じく折り返しもあります」

「でも切符代は」

恐る恐る尋ねる。いくらなんでも杉本に、そこまでお年玉を使わせるわけにはいくまい。

あっさり答えた。

「そのくらいなら十分まかなえます。すでに切符も二人分買って参りました。往復し終わってから夜行については考えておけばよいでしょう。それと、私も友だちの家に泊まると連絡をいれておきましたので、家出騒ぎにはおそくならないでしょう」

「誰の家に？」

杉本は聞こえなかったのか、さっさと話を逸らした。

「とにかく、早くホームまで行きましょう。今の時間帯ですと席を押さえられないかもしれません」

静かに立ち上がり、杉本は雪に濡れた髪の毛を指で整えた。全く表情が読めない顔ながらも、上総の方をひたすら一途に見守ってくれている。言葉の出ない上総に小首をかしげたまま見つめると、

「長時間、汽車に揺られますが大丈夫ですか」

「たぶん大丈夫」

杉本は少し考えていたようだが、上総の腕をそっと取った。

思わず心臓が跳ね上がった。

「私も、お付き合いいたします。参りましょう」

横にそっと寄り添われて初めて気付いた。杉本は髪の毛を解いていた。

ホームに到着した列車に乗り込み、すぐに二人がけの席を確保した。上総ではなく杉本がその辺は手配してくれた。鈍行列車のため特に席の指定もない。臙脂色の席に腰を下ろし、上総が窓際になるよう杉本が案内してくれた。肘掛がない席なので、杉本が隣に腰掛けると自然と体温が伝わってくるのが感じられる。お互いコートを羽織っているのに、不思議なくらい暖かった。

杉本は席についてからもかいかいしく働いた。

「まだ出発まで時間がありますので」

素早くホームに下りると、キオスクでチョコバータイプのお菓子を二本と缶ジュースを一本、持ってきた。オレンジジュースらしかった。ビニール袋ごと膝に置きっぱなしにして、そ知らぬ顔をしていた。

——俺にくれるのかな。

しかしその気配はない。ちらっとラベルを見たところからして、たぶんホットココアだろう。甘いものは普段ならあまり飲まないのだが、今はなんとなく欲しかった。

杉本がちらと上総を横目でにらみ、片手でホットココアの缶を手にした。

缶を握り締めて、またちらり。

真正面を見たまま、唇をかみ締めるようにして、またちらり。

持っている手が熱いのか、片手だけ手袋をはめ直し、素手で開けようとしている。上総の視線を明らかに意識しているのが見え見えだった。

「杉本、開けようか」

「自分で出来ます！」

「いいよ、やるからさ。その代わり、一口だけ飲ませて」

「え？」

じいっと杉本の指先を見つめ、上総は指差しながら続けた。

「なんか喉渴いたんだ、だから一口だけ、ちょうだい」

杉本はにらみつけるようないつもの眼差しで、上総を射た。

「ちょうだい、ってどういうことですか」

「だってさ、飲みたいんだけどな」

「ご自分でお求めになればいいでしょう、そのくらいのお小遣いはないのですか」

「だから、杉本が開けてくれた分を飲みたいんだ」

しばらく杉本は上総をあきれはてたように眺めていた。やがてあきらめたように、
「お好きなだけお飲みください」

軽く振って缶トップを開けた後、上総に押し付けた。

「でも杉本が飲んでからでいいよ」

「私はちゃんと自分の分を買ってきています」

かばんの中に、すでに杉本は、自分用の缶入り紅茶を持ってきていた。

——最初から押さえてあったのか。

「それと、これも勝手にお召し上がりください！」

語調厳しく杉本は、ビニール袋からチョコレートバータイプの菓子を上総の膝に置き、ふいっと通路側を向いてしまった。背を向けられる格好となってしまった。

上総はそっと口に缶ココアを運んだ。杉本梨南の背中に垂れた長い髪の毛にもたれたい衝動が走った。もちろん、そんなことしたら一気に紅茶を頭からぶっかけられるのが目に見えていたのであきらめた。

——最初っから用意してくれてたんだ。

「ありがとう」

一言だけ告げると、上総はそのままココアを飲み干した。

「雪、降ってきたよな」

窓には学校の教室で見たのと同じくらいの白い幕が、みっしりと張り付き一種の幾何学模様を綴っていた。そっくりなものを見かけたような気がして、上総はその記憶を呼び起こそうとした。杉本の横顔を覗いた。

「本当に、いいのか」

「かまいません。どうせ私が何をしても関係のないことですから」

よくわからない言葉を返してきた。杉本にしては珍しく、裏のありげな言葉だった。

窓辺の景色が少しずつ色を変え始めた。列車が動き出した。空き気味とはいえ、席はみな埋まっているようだった。言葉を交わす人は少なく、みな黙って目を閉じているかそれとも窓辺を眺めているだけだった。上総も黙っていた。杉本も声をかけてこなかった。振動でふたたび眩暈がしそうになるのを、冷たい窓ガラスに頭を乗せることでこらえた。

「立村先輩」

その冷たさに慣れてきた頃、杉本が静かにささやいた。

「ご気分悪いようでしたら、私、立ってますので横になってください」

薄目を開けて杉本を見返すと、両手でかばんとさっき買い物してきたものが入っているビニール袋を握り締め、席を立っていた。

「でも、長い時間そんなことは」

「すぐにどこか席が空くでしょうから、適当に座ります」

——ちょっと待て、ここから離れるっていうのか。

めまいも車酔いもどこかに飛んでいきそうな言葉だった。

「杉本、ここにおいで」

上総は立ち上がり、半ば強引に杉本を席につかせた。両腕をがっちり抑え、落ち着いても手を離さずにいた。逃がすものか。どこにも行かせるものか。まるで犯罪者そのものだけど、今の上総にはそれしかできない。杉本も全く抗うことなく、黙ってされるがままになっていた。

——今の杉本なら、許してくれるかもしれない。

息を整え、上総はさっきまで窓にもたれていたのと同じ格好でもって、杉本梨南の肩に頭を持

たせかけた。全体重をかけるような格好になり、杉本が横にふらつきそうになるのを上総は片手で支えた。自然と、しがみつくような感じとなる。

「こうしてるのが、一番、楽なんだ」

「わかりました」

上総は目を閉じた。頬に初めてふれた杉本の髪の毛は、少し湿っていたけれどもやわらかかった。そこから見上げる杉本の顔立ちは真正面から見た時よりもずっと寂しげだということを、上総は発見した。

いつまでこうして眠っていただけるか。心地よく、やわらかな感触がいつのまにか消えたのも気付かずにいた。かすかな甘い香りが側から離れたのも。

「次は、終点、三桜です。ご乗車のみなさま、お忘れ物のないよう、ご注意ください……」

車掌ののんびりした声で目が覚めた。すでに闇は深く、列車の揺れも緩やかなままだった。

——今、八時半くらいかな。

三時間も寝ていたというわけか。隣にいたはずの杉本はいなかった。

——トイレにでも行ったんだろうな。

車中のざわめきひとつなく、ただ通り過ぎるのは制服を来た車掌だけだった。切符をチェックされることもなかった。外は猛吹雪なのか、窓の隅に白い雪が額縁のように収まっていた。

——あとで、杉本にお弁当をご馳走しようかな。

せめてそのくらいのことはしなくてはならない。上総も立ち上がった。身支度だけしよう。コートを羽織り直し、杉本の姿を探そうとした。とたん、

「立村くん」

穏やかな、聞きなれた声に呼び止められた。上総はその声が聞こえてきた反対側斜め前の座席に身体を向けた。めがねをはずしていたのですぐにはその人が誰なのかわからなかった。

「杉本さんには子辺駅で降りてもらって、タクシーで帰ってもらいました」

端正な顔立ちのその人は、上総にやさしく微笑むと、めがねふきで銀縁の眼鏡をたんねんに拭き取り、両手でかけた。

「あと五分で到着です。切符は、預かってます。乗り換えの準備だけしましょうか」

——狩野先生が、なぜ？

上総はただ立ちすくむだけだった。

なぜ狩野先生が乗り込んできたのか、ということよりも、なぜ杉本が何も言わずに立ち去ったのか、そのことを上総はまだ、飲み込めずにいた。

鈍行で三時間かかった距離が、なぜか特急だと三十分前後で到着してしまう。時刻表を読むのが苦手な上総にはよくわからないのだが、鈍行の場合だと各駅の停車時間および乗り継ぎの待ち時間がかなり含まれていて、それほどの距離でなくても時間がかかってしまうという。

上総は狩野先生から渡されたおにぎりをそのままぼんやり抱えたまま、特急の指定席に座っていた。ちょうど七時半過ぎということもあり、いかにもサラリーマンっぽい顔をした男性たちが静かに腰掛けていた。満員だったが全席指定なので通路に誰かが覗き込もうとすることもなかった。狩野先生が通路側に座り、ちらりと腕時計を覗き込み、

「八時半前には青潟に着くでしょう」

それだけ上総に伝えた。感情の波はなく、ただ穏やかなだけの言葉だった。

答えなくても許される、その空気の中、上総はずっとうつむいたまま座っていた。

——さっきまで、確かに杉本が側にいたのに。

「杉本さんを責めないであげてください」

上総の揺れを読み取ったかのように、狩野先生はゆっくりと告げた。

「杉本さんは決して僕に告げ口をしたわけではないのです。ただ、他の人とたまたま連絡を取ったところ、僕に繋がってしまっただけなのです。そして、僕は」

言葉を切った。上総から目をそらし、

「僕の意志で、立村くんと話をしたいと考えて、ここにきたわけです」

——嘘だろ？

てっきり、菱本先生あたりに頭を下げられて追い立てられるかのように来たんだと思っていた。もしかしたら西月さんあたりに連絡を取ってそのラインから流れたのかもしれない。あれだけ派手に学校を出てきてしまった以上、天敵・菱本も黙っちゃいないだろう。上総なりにいくつかの推理はしていた。狩野先生の意志でここに来た、という選択肢だけは思いつかなかった。

驚きが顔に浮かんでいたのかもしれない。見上げた上総に狩野先生は頷いた。

「ちょうどこの時期に、君と話をする機会を得られたのは、僕にとっても必然だったと考えたからです、立村くん。だから、安心してください」

——安心って？

決して狩野先生が嫌いなわけではない。それどころか、今いる青大附属教師の中では唯一、まともに話が通じる相手だとは思っている。でも、やはり教師であることには変わらない。教師と生徒。一枚の壁。簡単に超えることはできない。狩野先生と、たとえば近江さんのように「義理の兄と妹」というのだったらまた話は違うかもしれない。だが自分と狩野先生は明らかに、教育の場でしかつながりがない。しかも、担任でもないのにだ。

——当然、あのこともみんな知ってるんだろうな。

評議委員長から降ろされて以降の上総の墮落ぶりも、特段注意されることはなかったにしても

、狩野先生はすべて見ているはずだ。数学の授業と補習以外で接する機会はなかったにしても、やはりみっともない上総自身とその言動は菱本先生を通じて耳にしているはずだ。

——もし、評議委員長だったら。

もっと堂々と、教師たちにも振舞えたら。

たまたま、肩書が欲しかった。

狩野先生はそれ以上話し掛けることもなく、分厚いかばんから文庫本を一冊取り出し、静かに読みふけりはじめた。乗り物酔いしやすい上総には絶対にできないことだった。窓辺からさっき来た景色を眺めやると、闇の中かすかに家の明かりがちらついては消えた。行きはやんでいたようで、すでに窓に張り付いたペールもはがれていた。

——どうなるんだろう。

杉本がどういう形にせよ、上総を見捨てて家に帰ったのは事実だ。

そっと寄り添い、ぐっすり三時間眠りつづけた恍惚の時が一瞬のうちに消えうせ、狩野先生という現実に戻された以上、上総はこれから先どうなるのだろうか。想像がつかなかった。もちろん担任ではないし、今の言葉を信じるのならば「自分の意志」で迎えに来てくれたのだから大事にはならないかもしれない。だが、三時間程度にせよ周囲を混乱させたのは事実だ。卒業間際とはいえ、高校推薦に影響するかもしれない。

いや、最初から、青大附属から追い出される覚悟はしていたはずだ。

だからこそ、杉本梨南を連れ出したわけなのだから。

どこまで狩野先生が勘付いているのかはわからないが、今の段階で上総には何も言い訳するべきがなかった。

ただ、杉本梨南と一緒にいたかった。

ずっと、誰もいないところで、ふたりきりになりたかった。

ただそれだけだった。

上総が見つけれられる答えはそれだけだったし、口に出すには恥ずかしい言葉だった。

「次は終点、青湊に到着します。お降りのお客様はお忘れ物のないよう……」

鈍行のアナウンスとは違い、車内にくっきり響き渡る案内の声。隣の狩野先生は、上総の方をさっきと変わらぬ穏やかなまなざしで見つめると、

「駅には、立村くんのお父さんが待っています」

絶句させるようなことを、さらりと告げた。腰にまた根が生えたように動けなくなりそうだった。まさか、父に気付かれているとは。

「父が、知っているんですか」

「最初から気付いていらしたようです」

たんたん続けた。

「立村くんを学校まで送った後に、学校へ電話をくださったようです。何かがあればすぐに連絡をという言伝でした」

ということは、すでに父も上総の思惑に気が付いていたということだろうか。

「ですが、学校にはまだ伝えていません。菱本先生にも連絡はまだ入れてません」

「連絡、するんですか」

停止信号で一時停止。流れる景色がぱちりと窓に留まった。

「明日、子細の報告をします。ですが、今夜はしません」

今夜、というところに少し厳しい響きを感じた。狩野先生はじっと動かず、上総の目を捉えると、

「今夜、一晩、時間をください。僕は君と、きちんと話をしてみたい」

ホームに降り、狩野先生の買ってくれた特急券と乗車券を手渡され、そのまま改札を通った。確か杉本が乗車券を代わりに買ってくれたはずだったが、

「すでにそれは、杉本さんに清算しておきました」

やはり上総の知らないところですべて話が終わっていたらしい。

改札から出たところで、すぐに父の姿を見つけた。思わず隠れたいくなるが、狩野先生の手が背中に回っていて動けない。そのまま父が駆け寄ってくるまで身動きが取れなかった。ベージュのコートを羽織った父は、二、三回ごほごほ咳をした後で、

「息子にご迷惑をおかけしまして、申し訳ございません」

深く頭を下げた。次に上総を見据えると、

「お前も、先に先生へ言うことがあるだろう」

「申し訳ありません」

目を伏せたまま詫びの言葉を口にした。父の様子を伺うと、とりあえずは激昂していない風に見えた。恐る恐る父の顔を見上げ、

「母さんに、連絡したの」

それだけ聞いた。父は顎のところだけを軽く振るわせると、

「してない。ほら、早く帰るぞ」

当然のごとく、狩野先生も付き従っていた。父は狩野先生に話が通じているのか、同じく頷くと駅前の駐車場まで先立って歩き始めた。道は雪に埋もれているが時折滑りそうになる。つま先とかかたに力を込めて、ふらつきながら上総は父のあとを追った。

何も会話のないまま、自宅に到着した。

「それでは、よろしくお願いします」

父と狩野先生との間にも、最低限の会話しかなく、当然のように招かれていた。どうしてだろうか。上総が一番最後に玄関へ入り、スニーカーを脱いだ時、

「部屋に入って待ってなさい」

父に指示された。

今朝よりは床が見える状態とはいえ、まだ普段の上総の部屋とは思えないくらいの散らかりぶ

りだった。整理整頓が得意だった自分とは大違いだ。灯りをつけてぐるりと見渡すと、そこにはまだかばんと雑誌の束がうずたかく積み上げられていた。あとで捨てるつもりでいるものだった。上総は床に落ちていた本を机の上に載せ、ベッドの上に座り込んだ。コートを着たままだだったので、まずはたんすに掛けて窓辺に立った。

——こんなことだったら最初から杉本をここに連れてくればよかったんだ。

一番、自分の願いを果たせる方法はそれだったのではないだろうか。

肩に頭を乗せて、ずっとやわらいだ気持ちになったあの瞬間を上総はまだ忘れられずにいた。生まれて初めて、すうっと波に揺られていく感覚を得たようだった。気持ちよく雪に降られて、暖かいものをそっと抱きしめていられる至福。もしかしたら、いわゆる男女の関係とは、それを感じるためにあるのかもしれない。手からあつという間に零れ落ち、雪のように消えていった杉本梨南の体温が恋しかった。

なんであんなに素直だったのだろう？

なんであんなにやさしかったのだろう？

本当に欲しいものはいつも、手に入れたとたんすうっと消えてしまう。

——評議委員長の座も、認めてくれる友だちも。

抱きしめることを許してくれた、杉本梨南すらも。

上総はしばらくベッドに座り込んだまま、身動きせずにいた。

動くとその端から、かすかに残る杉本梨南の記憶すらこぼれてしまいそうに思えたからだった。

。

「上総、開けるぞ」

どのくらい時間が経ったのかわからない。返事をせずにいると、父の声でもう一度、

「握り飯があるから、それでも食べてなさい」

さっき狩野先生からもらったおにぎりを食べていなかった。食欲をすっかり忘れていたせいだけど、言われてみるとかなり極限まで腹が空いている。食べ物くらいだったらもらおう。上総は戸を開けた。とたん、父の後ろに狩野先生が立っているのに気付いた。

計られたか。

慌てて閉めようとしたが遅かった。父はしっかりとドアノブを押さえたまま、

「今夜は、先生のご希望に従いなさい」

有無を言わせぬ口調で上総に命令した。

「従うって何をだよ」

「先生、よろしくお願いします」

個人のプライベート空間にのこのこ入ってこようとする菱本先生にも頭にきたが、なぜ、なぜなんだろう。狩野先生だけはそんなことを決してする人ではないと信じたかった。なのになぜ、みな、裏切るのだろうか？ なぜ、こうやってずかずかと上総を踏みにじろうとするのだろうか？ ほしい物、求めるものはすべて、失われていく。顔がゆがんでいく自分に気付き、上総は力を込めて押さえていたドアノブから手を離れた。釣られるように戸が全開した。

——もう、どうだっていい。

父が横に逸れ、狩野先生と向かい合う格好になった。

「入って、よろしいですか」

上総は頷いた。もうこの先生を慕う気持ちも、なくなってしまうのだろう。そのあきらめがふんわりと浮かんで消えた。

部屋の中が散らかり状態なのを全く気にすることなく、狩野先生はぐるりと見渡して、
「椅子を借りてよろしいですか」

丁寧に尋ねた。

「どうぞ」

了解し、自分はベッドの上に腰を降ろした。やはり礼儀は守らねばならないだろう。空気がどこことなく、こわばっていくのを感じる。自分の部屋にまさか教師を招き入れるはめになるとは思ったこともなく、さらに担任でない狩野先生だと想像すらしていなかったのだ。しかも、この部屋の汚さ。さっきちらっと見たら、洗濯し忘れた靴下が一足、ベッドの後ろにひっかかっていたのを見つけた。持ち出す時にしまい忘れたのだろう。

勉強机から自分で椅子をひっぱりだし、狩野先生は上品に腰掛けた。上総の側へ、ちょうど直角になるように持ってきた。上総の部屋は十畳くらいあるはずで、ちょうど湖をボートで漕いできたかのような感じに見えた。水鳥が泳いできたかのようにだった。

「僕なりに一度、確認しておきたかったからです」

狩野先生の眼鏡が曇っている。白いサングラスっぽい。気がついたのか、手にとりまた丁寧にハンカチで拭き取り、ポケットにしまいこんだ。眼鏡をかけているとあまり気が付かないのだが、やはりこうやってみると菱本先生と同年齢というのも納得する。どこかで見かけた歌舞伎役者の素の顔にそっくりだった。

「君が知りたいことは、なぜ僕がいきなり現れたということでしょう」

口に出せずかといってもやもやが消えないまま、上総は無言でうつむいた。

「列車の中でも話しましたが、これは全くの偶然です」

——偶然？

信じられない。ありえないだろうそんなのは。狩野先生も視線を下げて微笑み、続けた。

「杉本さんは別の女子のところへ連絡を入れましたが、それはあくまでも個人的な用事があったからだそうです。その女子はまた別の女子に連絡を入れ、たまたまそこに僕がいたというだけです」

——近江さんのところか！

そうだ、この人は近江さんの義理兄だ。

近江さんと杉本との共通知り合いとなると、ひとりしかいない。上総は唇をかんだ。

「清坂さん、ですか」

「そうです。いずれわかることですので話しておきますが、清坂さんは僕の妹にいろいろと相談

していらしいのです。君のことからいろいろなことを。ただ、今、彼女は事情があって身動き取れる状態ではなく、たまたま家にいた僕がそれを聞きつけたというだけです」

「身動き取れないって、どういうことですか」

狩野先生は言葉にせず、じっと上総を見つめた。口に出せないから察しろということだろう。上総も従った。

「杉本さんは一度、青潟に戻った段階で、清坂さんを駅まで呼び出そうとしたようです。彼女たちなりにいろいろ考えていたのでしょう。ですが、清坂さんはそんなことをしても君が喜ばないことを知っていたのですね。どうすればいいのかをおそらく、妹に相談しようとしたのだと思います」

頭の中が混乱してくる。つまり、杉本は美里にあらかじめ電話連絡かなにかして、青潟到着ホームに美里を待たせておき、その上で上総と話し合いを持たせようとしたのだろうか。最初から上総にずっと付き従う気はなかったということだろうか。あの、異様なまでの素直さはその計画を心に秘めていたからだろうか？

頭を掻き毟りたいけれどもできない、そんな上総をどこまで狩野先生は見つめていたのだろうか。うつむいて何度も飲み込もうとする上総に、狩野先生は静かに語りつづけた。

「三桜行の鈍行列車ということは、すでに聞いてましたから、途中の駅まで車で出かけてその後乗り込めばすぐに間に合いました。杉本さんもかなり驚いてましたね。まさか僕が乗り込んでくるとは思っていなかったのでしょうか。せめて終点までは一緒に行くと言い張ってましたが、教師として、また大人の義務として彼女は子辺駅で降りてもらいました。タクシーでそれほど時間もかかりませんし、女子はやはり、夜遅くなるとうろろと危険です」

——じゃあ杉本を送って一緒にタクシーに乗り込めばよかったじゃないか。

結局はみな、自分のやろうとすることをすべて、先回りしてしまうだけ。

部屋の明るさですべてを見透かされているよう。上総は目を閉じ、その屈辱に耐えた。

「立村くん、灯りを落としましょうか」

え、と答える間もなく、狩野先生は橙色の小さな灯のみに、照明を切り替えた。

シルエットだけが黒く浮かび、その中で上総は狩野先生の声に耳を澄ませた。

「おそらく立村くんが戻って来てから、そのあたりの事情も天羽くんが説明することになるでしょう。今、天羽くんを巡る環境はかなり厳しいものになっていますし、おそらく彼ひとりでそれを乗り切ることはたやすいことではないでしょう」

「天羽が？」

なぜそういう話になるのだろう。まったく読めない。かすかに揺らぐ狩野先生の影を見つめながら、上総は最後に見た天羽の姿を思い出した。いつも自信たっぷりに振る舞い、それでいてやっかみもせず上総をいつもフォローしようとしてくれる太陽のような存在だ。

そんな天羽が、上総のことを頼るわけがない。

頼る真似はするかもしれないが、本当にやるべきことはひとりでやり遂げる。

そういう奴だからこそ、本当の意味で評議委員長に選ばれたのだ。

「現在の段階で、立村くんを必要としている人がたくさんいることを、僕は知っています。自分

のクラスで起こった出来事もそうですし」

ここで言葉を切り、狩野先生はもうひとりの名を告げた。

「去年卒業した、本条くんも、君からの連絡を待っていると話していましたね。そう、今年に入ってからまもなく、駒方先生のところへ遊びに来て、そのようなことを話していましたよ」

上総は天井を見上げた。そこには橙色の電球が小さくぽっこり輝いていた。

「本条先輩、ですか」

これだけ発するのがやっとだった。息が詰まった。

「必要にしてくれてるわけ、ありません」

——あんな完璧な人が。

「評議委員長ではないから、ですか」

全く波立たない狩野先生の言葉。目の前の闇がかすかに白く揺らいだ。

「立村くん」

答えられなかった上総に、狩野先生はもう一度尋ねた。

「評議委員長に指名してくれた本条くんの期待を、裏切ってしまったからですか？」

なにかが壊れた。ぱりんと、今まで張ってきたはずの糸が切れた。

声を出さずにせめてこらえたかった。

——本条先輩。

手の届かなかった、完璧な存在。そんな人から初めてもらった存在価値。それを裏切った救いようのない自分。もう二度と、届かない場所。

止め処もなく押し寄せる涙に、上総はなすすべもなくおぼれるしかなかった。目から鼻からたらたらと顔が崩れていくような感覚に逆らうことができなかった。

こんなに激しく泣きじゃくったのは何年ぶりだろう。

——何度もしつこくわめき散らしてるじゃないか。

自問自答しながら、しゃくりあげていた。目の前には自分の担任でもない教師がひとりいて、もの言わずにずっと上総を見据えている。あきれ果てているのだろうか、それとも軽蔑しきっているのだろうか。いやなよりも、なんで担任・菱本を差し置いて上総につかつかと入ってこようとするのだろうか。何もかもわからない。しばらく上総は視界が崩壊する中、本条先輩の記憶を辿っていた。

そうだった、本条先輩は。

——あの人は、初めて俺を評価してくれた人だった。

初めて顔合わせをしたのは、もちろん第一回評議委員会の席だった。

一年生から見て二年の男子評議たちは、はるかかなたの存在に見えた。その中でも本条先輩の存在感は際立っていた。というよりも、本条先輩以外の上級生たちはみな、同じどんぐりの背比べにしか見えなかった。だから、いつのまにか目で追うようになってしまったのか。

後日知った「成績優秀・運動能力抜群・カリスマ性はナンバーワン・唯一の傷は女子との二股交際かつ一線を越えたお付き合い」などという情報なんてどうでもいい。上総のような何にもできない一年坊主を無視し、自分のやりたい通りに物事を進め、誰一人文句を言わせることなく完璧にやり遂げる能力。ありとあらゆるところで見せ付けられてきた。

だから、こんな人の弟分扱いをしてもらえとは、夢にも思っていなかった。

かなり早い段階で、他の一年生男子たちよりも目をかけてもらえたことが奇跡だった。

——立村、お前ってな、ほんつとにガキだなあ。ほら、こっち来い。俺が教えてやる。

頭をぐりぐりやられながらも、手をひっぱられ隣に座らされ、わけのわからぬまま上級生たちの話を聞かされたこともある。グラビア写真集の一ページを鼻先につきつけられつつ、「お前どいうタイプが好みなわけ？ ふうん、このあたりが反応したとこか？」なんてからかわれたりしつつも、すぐにフォローで「まあいっか、お前はまだまだガキだもんな。まあ最低限のことくらいは覚えとけ」と流してくれる。

上総のことを、一番のお気に入りとして評価してくれた、たったひとりの人だった。

それも単なる、弟分というだけではなくて、「能力」を認めてくれた人だった。

だから評議委員長に指名してもらえたのだ。

——俺には価値があるって、初めて教えてくれたんだ、本条先輩は。

本条先輩が評価してくれさえすれば、全校生徒がとことん上総を馬鹿にしたとしても、耐えられたはずだった。「あの天才本条が能力を評価して次期評議委員長に指名した」というプライド、それだけで乗り切れるはずだった。

なのに、できなかった。

すべて栄光の評議委員長として昇ることのできる階段を踏み外し、今にいたるというわけだ。

これが本来、自分のいるべき場所だと気付きながらも、一度は足の裏に感じた赤じゅうたんが恋しいと泣いている、馬鹿な自分に。

ずっと前から押さえつけようとして、でもどうしようもなく言うこと聞いてくれない子どもが激しく暴れている。同じ中学三年の中にはすでに初体験を済ませた奴だっているっていうのに、自分だけがひとり、取り残されている。

——どうして手が届かないんだろう。

——どうしていつもこうなんだろう。

無理やり息を止め、顔を上げた時、目の前に座っている狩野先生がじっと見つめているのに気が付いた。この醜態を、ずっと見つづけていたことになる。

かつては評議委員長だった自分が。

現在も名前だけは評議委員である自分が。

しょせん、今ここで醜く顔をゆがめてしゃくりあげている自分が、本来の立村上総なのだ。

——殺してやりたい。

今、もし可能ならば、ぐさぐさに自分を切りつけて。

「立村くん」

ようやく上総が頬にこぼれた涙の跡をこすった後、狩野先生は静かに声をかけてきた。慰めようとするのか。答えるのもおっくうでただ見返した。

「今日、僕が来たのは、君にお願いしたいことがあったからです」

「できることなんてないです」

いろいろな言葉を使い、狩野先生が上総を動かそうとしていることだけはわかる。

この人もやはり、菱本先生と同じ教師なのだろう。失望した気持ちをどこに隠せばいいのかわからず、上総はただそれをありのままにした。顔を伏せた。狩野先生もそれに気がついているのかどうかわからないまま、ゆっくりとひとりで語り出した。

「まず一つは、先ほど話した本条くんのことです」

——これっていいのか？ 個人のプライバシーに入りすぎじゃないのか？

喉を詰まらせながら、上総はさっき狩野先生が語った本条先輩の言葉を思い出した。

たかが、正月にひさびさの挨拶をしにきただけだというのに、勝手に後輩の説得材料になっているというわけなのか？

「駒方先生と僕、そして本条くんと三人で語り合っているうちに、やはり本条くんは一度、立村くんと話し合っただけで自分を取り戻す必要があるのではないかという結論に達したのです。これは本条くん自身も、了解していることです」

「先輩が、そんなこと」

首を振ろうとしたのに、幼児がかぶりをふるような格好になってしまった。みっともない。狩野先生は動じない。そのまま静かに続けた。

「今話したことは、立村くん、君のためというのではなく、本条くんのためです。ご存知でしょうが、本条くんは駒方先生のクラスで三年間過ごしてきて、もちろんその間にいろいろな出来事

を経験してきています。立村くん、君から見たら本条くんは尊敬する先輩でしょう。ですが見方を変えると、本条くんは駒方先生 から見たら一生徒のひとりですし、その友だちから見たら同級生、それぞれ違う顔を持っているのです」

そんなわかりきったことを説明しにきたというわけか。すでに上総の中で狩野先生は自分の理解者ではなくなったような気がした。大人を一瞬でも信じようとした自分がおろかだったと笑うべきか。上総はひょいと目をそらしたまま、ふと机の上に出しっぱなしの黒い手帳を見つけた。本条先輩から教えてもらったことや、その他評議委員会情報を自分なりに付け加えたものだった。人に見られたくない部分はすべて、英語、フランス語、ドイツ語などでごまかして書いてある。

「本条先輩が、そんなこと言うわけないです」

繰り返し呟くと、狩野先生が少し首を傾げた。

「どうして、そう決め付けられますか？」

「完璧な人が、どうして、俺なんかを、そんな」

当たり前のことをなぜ繰り返すのか。

本条先輩のように、頭脳明晰、行動力あり、運動能力抜群、その他数え切れないくらいのエネルギーを兼ね備えた人物が、この世にどのくらいいるというのだろう。

「完璧、ですか？ 君よりも、完璧なのですか」

また涙があふれてきそうになる。その完璧な人に、上総は弟分扱いされてきたのだ。本来ならば天羽がなるべき地位を自分に与えてもらえたのだ。こんな価値のない自分を、評議委員長として価値がある、そう判断してもらえたのだ。

狩野先生は、初めて首を振った。

「それは本条くんを侮辱していることになりますよ」

じっと上総を見据えて、眼鏡をはずした。真っ白い肌がすうっと闇に冴えて映った。

——やはりこの人も同じなのだ。

また、唇をかみ締めたくなる。舌に血の味がかすかに残る。

「立村くん、僕は今、決して君を変えようとは思いません」

敵意を丸出しにしにらみ据えた上総に、狩野先生は全く動じることなく続けた。

「君が受け入れられないのは当然です。僕が君の立場だとしたら、きっと同じことを感じたでしょう。ですが」

ここで言葉を切った。

「この世の中で、それはどんなに訴えたくても通用しないのです」

——通用しない？ わかりきってることじゃないか。

上総の心中つぶやきに、狩野先生はなぜか頷いた。

「君も感じているでしょう。どんなに君が自分の感じ方をこういうものだと訴えたくても、周囲の人たちは誰も受け入れようとしなないということ。そして今もそうです。君が杉本さんを連れ

て汽車に乗ったという行為を、すべての人はみな、自分の好きな形に捕らえるでしょうし、どんなに君が本当のことを訴えても一部の人にしか届きません。このことは、きっと君も理解していると思います」

——ああ、嫌と言うほどな。

「だから、明日君が学校に戻ったとして、どういうことが待ち受けているかは想像がつくでしょう。もちろん戻るかどうかは君の判断に任せますが、決して明るくみな受け入れてくれるとは、考えられないでしょう」

——たぶん全校生徒一斉に無視するだろうな。

その中にはおそらく、杉本梨南も混じっているだろう。また泣けてくる。

「立村くん、ではこれから、どうやってこの青大附属社会を歩いていくか、考えてますか？ もちろん公立の学校に逃げるという選択肢もあります。もちろんこのまま家に閉じこもるというのもひとつの方法です。どれが正しくてどれが間違っているか、それを僕が判断することはできません。教師の立場ならば当然、学校に戻るべしと伝えることができるでしょうが、君に僕がそれを押し付けることはしたくありません。なぜならば僕は」

言葉を切り、少しだけためらうそぶりを見せた。目を逸らし、眼鏡に指先で触れ、呼吸を整えた。上総はそのしぐさを、目をこすりながら見つめた。

「君を見ていると、かつての自分を思い出すからです」

——かつての自分って、いったい。

身体の重心がぐっと地面に降りていくような感覚があった。

地球の奥にがっしりと繋がったような、重たいものがある。

上総はなんだか、狩野先生の呟いた言葉を耳の中にくりかえした。

——かつての自分、かつての自分、かつての自分。

つまり。

——俺が似ている、ってことなのか？

信じられなかった。絶対ありえないことだった。

数学の教師に、しかも一回り以上年上の人にそんなことを言われる理由がわからない。

もちろん、現在の担任よりもわかってくれる感覚の持ち主だとは思っていたけれども、だからといってこの人に似ていると思ったことはなかった。

「先生が、俺に、似ている……？」

「そうです。厳密に言うならば、君は僕がしたくてもできなかったことをしようとしている、とでも言えばいいでしょうか」

ますます言っている意味がわからなかった。あっけにとられた上総を見ながら、狩野先生はかすかに笑った。安心したかのようだった。

「経験した事柄が同じものだとか、授業中に学校を抜け出したとか、委員長クラスのポジションについたとか、そういうわけではありません。むしろ僕は、目立たない存在としていつも教室の隅に座っていたタイプの子どもでした。だから、そういう生き方をしていけばうまくいくだろう

と無意識のうちに感じていたのです。わかりますか？」

なんとなく、つかめてきたような気がする。つまり、小学校の頃の上総ということか。

「特別引き立ててくれる先輩がいたわけでもありませんし、おとなしく図書館で科学書を読みながら周囲の動きをずっと観察するのが、僕の中学時代でした。そうですね、高校も殆ど変わらない生活でしたし、実際それで不便を感じたことはありません」

上総相手ではなく、どこか宙を見つめながら語りつづけていた。

「それが変わったのは大学院に進んで教師の道を選んで、その後ですが、まだその話をするには時期が早すぎます。今すぐ知る必要もないし、いつか語る機会もあるでしょう」

今度は照れを隠すようにうつむいて笑った。

「僕は君のような内面を持つタイプの人が、どうやってこの社会を歩いていけばいいか、一通りの道筋は知っているつもりです。またそうやっていけばそれなりに平穏な日々を過ごしていけるとも思います。本来、教師ならばその道を教えるのが筋でしょう。ですが、僕はあえて君にそれ以上のことを教える気はありません」

「どうしてですか」

思わず問い返した。

「僕も、君がこれから進んでいく道を追いかけてみたい。それによって自分の生き方を見直したいのです。立村くん、さっき僕は、本条くんが君を必要としていると話しましたね。君も完璧な本条くんには答えられなかったことを許せないと感じているようでした。ですが、立村くん、君が懸命に自分なりの道を見つけようとしていることによって、本条くんを始め杉本さんも、そして他の生徒たち、いや、僕自身を耕されていることに、どうか気付いてほしい。それだけをどうしても、僕は伝えたかったのです」

「そんなこと、絶対にありえない」

上総はさらに首を振った。狩野先生は何を勘違いしているのだろうか。上総とは違う道をまっすぐ進んで、きちんと職についている、それにあと何が不満があるのか？

「教師としてではありません。二十八年間生きてきた中で、どうしても僕はこれから先、君が道を切り拓いていくのかを見つめていたのです。生き方を変えろというのは、菱本先生を始め他の人々がこれから言いつづけていくでしょう。それは大人としての義務ですし、互いに人間が違う以上はそれも受け入れる義務があります。ですが、僕は、立村くん、君が青大附属を卒業してからも、どういう風に欲しいものを手にいれていくのかをずっと追いかけていきたいのです。そしてできることならば、君の得られる最良のものであってほしいし、そのためならばどんな努力も惜しみません。今はわからなくていいのです。今はこのまま、大人たちの言葉を受け入れるにしても反発するにしても、十五歳の君のままで感じてくれればいいことです。どんなに君が道に迷ったとしても、僕は君の生き方を見守る覚悟です。なぜならばそれは、僕にとって立村くん、君との出会いは必ず、教師と生徒という枠を取り払った形で繋がっていくと感じているからです。そうですね、ちょうど本条くんが話してましたね」

「本条先輩が？」

狩野先生は頷きながら、今度は眼鏡をかけた。

「立村くんとはできれば先輩後輩という関係を取り払った形で、話せるとベストだと。まあ、彼の口調については君の方がよく知っているでしょうから、真似はしませんが」

狩野先生はしばらく息を整えるように黙った。

「できれば、明日にでも学校に来てほしいというのが僕自身の正直な気持ちです。もちろん教師として、君に学校へ戻ってほしいというのもあります」

なんだかわけがわからないまま、嗚咽を続けていた。狩野先生が黙ってくれている間、上総は頬を何度もこすりながら首を振った。目の前にいてくれる狩野先生の言葉がまだ、飲み込めないようで、だけど自然としゃくりあげてしまうよう。狩野先生は続けた。

「実は、君が学校を休んでいる間にいくつか出来事があり、おそらくこれは君の力が必要だと思われま。僕はA組の担任ですしこれ以上のことは言えません。ですが、教師なりにベストな方法を考えると今のところ、立村くんに力を貸してほしい、というのもあります」

「いったいそれってなんですか」

喉を詰まらせながら上総は尋ねた。A組のこと？ 鼻が詰まって頭が朦朧としている。さっき狩野先生が話していたことからむことだろうか？ 天羽？ それとも近江さん？

「もし、明日きてくれるようなら、それなりに話をする人が出てくるでしょう。大人の仕事はもちろんすべて片付けますが、学校内で中学三年同士、力を貸してほしいということもあるものです。立村くん、もし、よければ、その時にもう一度、君に頼らせてほしいのです。かまいませんか」

——俺に、頼ったって。

狩野先生は静かに立ち上がった。片手にかかえていたコートを羽織った。そのまま動かずに上総の返事を待っていた。

——立村、たった今から、俺とお前は先輩後輩じゃねえ。もう、ため年と同じだ。忘れるな。確かに卒業した後、本条先輩はそう言ってくれたような気がする。

ごたごたが絡んでいた真っ最中だったから、忘れていた。そんなことありっこないと思っていた。いまさらどうやって信じろというのだろう。

返事をしない限り、狩野先生は動きそうにない。とにかくひとりになりたかった。そのためにはひとつしか方法がない。

「明日、学校に行きます」

途切れ途切れの声で答えた。何かもう一言、足りないような気がして、慌てて重ねた。

「約束は、守ります」

何が約束なのかわからない。ただ、自分が杉本梨南と同じ感覚の持ち主だと自負するならば。

「その時は、きちんと、答えるつもりです」

「ありがとう」

ようやく、狩野先生はドアノブに手をかけた。振り帰り際にもう一度、「ありがとう」と繰り返し微笑んだ。

——第二部 終——

上総を迎えた青大附属の校舎は、完全に冷え切っていた。

三年間通っていたのと同じ足取りで生徒玄関に入り、靴を脱ぐ。

すれ違う三年生たちが挨拶もせず、会釈だけして通り過ぎていく。

その後ろから、ひそやかな声で、

「あ、あの馬鹿、来てるよ」

はっきりと耳に残る言葉を残し、去っていく。おそらく一、二年生だろう。

——あれだけ派手な騒ぎ起こしたら、そうだよな。

三日間休み、杉本梨南を連れ去っただけ。

それだけならたぶんさほどの騒ぎにもならないだろう。狩野先生も父にそんなことを話していたようだった。あとで菱本先生にもうまく言ってくれるとも。もちろんこれは当てにしていなくても、自然といつもどおりの生活を送ることができるだろう。そう甘く見積もっていた。

甘かった、としかいいようがない。

階段を昇ると、一瞬はっと息を呑む気配がした。背中の方だ。踊り場へ振り返る。

「やあ、りっちゃん、おはよ」

脳天気な顔でゆっくり追いかけてきて並んだのは南雲だった。髪の毛の先が肩にくっついていて、長すぎるんじゃないかと思うのだが、もちろん卒業寸前の規律委員長、その辺の計算はしっかりされている。

うまく言葉が出ず、ただ頷いた。南雲は何にも知らない顔して、

「ねえ、りっちゃんさあ、今日の英語のリーダーなんだけどさあ、悪い、貸して」

「リーダー？」

「そ、俺、りっちゃんいない間さ、英語の訳ぼろぼろ。さぼってんのかお前ってすげえ怒鳴られてさあ。改めてりっちゃんのすごさを感じたわけ。さ、教室行って、ノート写させてほしいなあ」

「別にそのくらいなら」

南雲はもともと英語が得意ではない。いつも上総の訳した予習ノートおよび早い段階でこしらえた訳文ノートを全部写している。だが、三日間の間で英語の授業という、そんなに進むものなのだろうか。頭の中で繰って見るが、たった三時間しかないんじゃないだろうか。

「いやさ違う、うちの学校ってあれだろ？ 高校の授業の予習真っ最中だろ。で、教科書以外のプリントをさ、大量に渡されちゃったわけ。公立では高校三年が使うようなものってことでさ。そんなのできるわけねえよ、って思ってたんだけど、できるんだよなあ、できる奴は」

「できる奴？」

上総が問い返すと、ウインクしてのける南雲。

「下ネタ女王のあの方だけが頼りなんだけどなあ、なにせ女王様ですから、怖いったらないの」

たぶん古川こずえのことだろう。四月から英語科の同級生だ。南雲は続ける。

「『いいかげん人頼るのあんたやめな！ いいかげん自分でやる習慣つけな！ 毎日抜いたり出

したりすることはちゃんとやってるんでしょ！』とかさ」

「女王様のご機嫌斜めって訳か」

想像がつくだけに、笑うのも命がけだった。上総はひさしぶりに南雲へ笑みを返した。

まだ時間もある。ノートを南雲に渡しておいた。もともと上総にとって中学英語の授業は退屈極まりないものであり、担当の先生もそれはすべて把握してくれていた。上総にだけこっそり、大学クラスの英語教材を渡してくれた。もちろん他の生徒との兼ね合いもあるので内緒ということにはなっているが、みな知らないものはないだろう。

ゆっくりと廊下を歩くと、すれ違いざま今度は難波と顔を合わせた。ちらと上総に視線をやるが、いまいましようにすぐそっぽを向いた。相当、怒っていることが窺い知れた。南雲はそんなの知ったことかとはばかりに、ぽーんと声をかける。

「ホームズ、どうした、ご機嫌よろしくないなあ」

「うるせえ」

でも南雲に対しては片手で返事している。曇った眼鏡をはずし、指でごしごし拭きながら、突然硬直したように立ち止まった。

「おい、立村」

上総を呼び止めた。丁寧に眼鏡をかけなおし、ポケットに手を突っ込み、

「聞いてねえのか」

ひいっと、喉が鳴る。上総は答えずただ耳を傾けた。隣の南雲がへらへらしたまま二人を交互に眺めている。

「何を」

「なんでもねえよ」

尋ね返したくとも、言葉を発したらどつぼにはまりそう。上総が黙っていると難波は、数秒舌打ちを繰り返しそのまま、B組の教室へ入っていった。

「どうしたんだろ、難波、かなりきてるよ」

「わからないけどさ」

たぶん上総の心がいなさに対して、怒りをぶつけているんだらうという程度のことはわかるけれど、具体的に何が、というのが判然としない。

「たぶん、俺が嫌いなだけだよ」

一番わかりやすい答えを自分なりに出し、上総はD組に向かい歩き始めた。

昨夜、狩野先生に語られた言葉。

——実は、君が学校を休んでいる間にいくつか出来事があり、おそらくこれは君の力が必要だと思われま。僕はA組の担任ですしこれ以上のことは言えません。ですが、教師なりにベストな方法を考えると今のところ、立村くんを力に貸してほしい、というのがあります。

学校に戻ることを決意したきっかけなのだが、どこまでそれが本当なのか想像がつかなかった。何かがあったのだろう、おそらく。三年同士のトラブルがA組中心に起こったのかもしれない

。だが、上総に何かできることがあるとは思えない。

要は、狩野先生への、義理でしかない。

——もし、明日きてくれるようなら、それなりに話をする人が出てくるでしょう。大人の仕事はもちろんすべて片付けますが、学校内で中学三年同士、力を貸してほしいということもあるものです。立村くん、もし、よければ、その時にもう一度、君に頼らせてほしいのです。かまいませんか。

頼らせてほしい、と、教師が生徒に対して頼み込むくらいだ。何か事情があるのだろうとは思ふ。大人の仕事、とはどういうことだろう？ このあたりは天羽が詳しいのかもしれない。

だが、今更出来損ない元評議委員長の立村上総に何ができるだろう？

「なぐちゃん、俺がいない間、なんか三年の間で事件、起こった？」

口にしてみても心中、慌ててしまう。一番の事件といえば、上総の「杉本梨南誘拐事件」に決まっている。幸い南雲は、そんなきついつき返しをするような奴ではなかった。

「まだ噂段階だから、俺の方からはなんともなあ。あったといえばあったらしいよ」

「聞かせてもらうって、無理か？」

「うん、無理。ごめん」

あっさり南雲に謝られて、腹立てる気もなくなる。いい奴だ、やっぱり。

「だけど、噂だからすぐにりっちゃん気付くと思うよ。どこまで正しいか、ってことなら俺、後で分析することくらいはできるけどね」

ということは、南雲もそれなりに耳にしているというわけだ。

「それなら、流れてきた段階で確認するかもしれないけれども、その時はよろしく」

「OK、じゃあ、入ろ、入ろ！」

南雲は髪の毛を指先でつつる撫でた後、三年D組の扉へ手をかけた。

一瞬だけ、目の前が真っ赤に染まったような気がした。もちろん、気のせいだと思った。

外はまだ、早朝独特の銀色に光った雪の色に染まっているはずだった。

「立村くん！」

「立村！」

南雲が開けた扉の奥には、窓に持たれるようにふたりの形が、白いシルエットになり映っていた。逆光なので氷上は全く読み取れない。こちらに近づいてくる。他の生徒は誰もいない中、おかつ髪の子と、背の高い男子と、ふたりが一緒に駆け寄ってくる。

——清坂氏と、羽飛だ。

立ち止まったまま、どのくらい見つめていたのだろう。

ほんの数秒だったはずだ。南雲もびっくりしていたのか、教室へ入るのに躊躇していた様子だった。なのに、何が見えたのだろう。上総の視界に入ってきたのは、全く別のものだった。美里と貴史の姿と見極める前に、一枚の絵画が挟み込まれたような感覚だった。ご丁寧に、音声まで入っている。何が自分の中に起こったのかわからず、金縛り状態のまま上総はその絵を見据え

ていた。

「立村くん」

美里の声が重なっていくのも。

「どうして、そんなに馬鹿なのよ！」

——どうして立村、こんなにやってもわからねえんだよ！

「立村、なんで逃げたんだよ！ 俺だって」

——立村、お前どうしていつも、俺たちの言い分、聞こうとしねえんだよ！

今、目の前にいるふたりは、青大附属の友だちのはずだ。

そしてこの教室も、三年D組のはずだ。

なんで、「あいつ」の声が重なるのだろう。

なんで、小学校の六年二組教室が現れるのだろう。

めいっぱい赤いティッシュの造花が窓一杯に張り巡らされている、あの教室に。

上総は一步、退いた。ふたりから離れた。完全に白昼夢。幻覚を見ているとしか思えない。

「ごめん、少し離れてくれるか」

かろうじてそれだけ搾り出すように答えた。でも近づいてくるふたりはさらに足を踏み出し上総に密着してくる。美里が手を伸ばし、貴史が肩に手を触れた。

「言いたいことあれば、言ってくれればいいじゃない！ そんなわけわかんないことしないで！」

「そうだ、お前、どうして何にも言わねえでいくんじゃねえよ！」

何も考えられない。ふたりは確かに美里と貴史のはず。なのに近づけば近づくほど、その姿とぬくもりは、特定の誰かを思い起こさせる。永遠に忘れたい相手に重なっていく。上総は手を振り払った。後ろずさると同時、誰かにぶつかった。罵られた。反射的に謝り文句が口に出る。ただ目の前のふたりが襲い掛かるように見えてならなかった。

そんなわけ、絶対ないのに。

「りっちゃん、どうした」

「ごめん、出直してくる」

南雲のジャンパー袖に手を伸ばし、上総は息をつめて美里、貴史に声をかけた。

「あとで話す、ごめん、悪かった」

一番近い階段から駆け下りようと方向を替えた瞬間、そこには奈良岡彰子を始め、数人の女子たちが呆然とした顔でもって見つめていた。かろうじて挨拶をしようとするのは、やはりあの奈良岡だった。

「立村くん、あきよくん、おはよ！」

——近づくな、近づくな。頼むから、これ以上寄るな！

いつのまにか人が集っている。他クラスの生徒、D組の生徒、その中に天羽の顔を見つけた。声をかけてくる気配はなかった。上総は反対側の階段から、天羽の肩に軽く手を触れた後、一気

に駆け下りた。行く場所はひとつしかなかった。隠れ場所も、同じくそこしかなかった。背負ったざわめきを洗い流せる場所は、そこだけだった。

「立村先輩。おはようございます」

杉本の無機質な挨拶に、何かを言いたいはずだった。なのに出てこない。

そこにいるのは、ふたつにゆるりと結んだ髪形の杉本梨南だった。

髪の毛を解いていないけれども、ゴムをひっぱればすぐにすると落ちてきそうなくらい低い位置に結んでいる。昨日はずっと側にいた女子なのに、扉の前で入るのを迷っているうちにまた遠くなってしまいそうだった。上総はゆっくりとE組の教室に足を踏み入れた。そこには赤い光もなければ、さっきちらついた幻覚も見えない。静かな空気に充ちていた。

杉本梨南は何事もなかったかのように、ノートを取り出し何かを書き記していた。上総から逃げる気配もない。昨日あんなことがあったというのに、何もなかったかのようにだった。じくり、と痛んでくるのはなんだろうか。嫌がらせのように隣へ座った。

「昨日、どうして帰った？」

「狩野先生がいきなり現れたからです。教師の権力乱用です」

ぶっきらぼうに、それでもまっすぐ言い放った。これを信じるならば、狩野先生と打ち合わせしていたわけではなさそうだ。

「ふうん、じゃあさ、どうして、あの人きたんだ？」

八つ当たりっぽく思われてもしょうがない。それだけのことをされたんだから。

杉本も全く動揺せず、視線を上総に向け、手をきちんと膝の上に重ねた。

「私も、知りたいのですが」

「杉本が呼び出したわけじゃないだろう？」

「当たり前です」

「でも、他の女子には連絡したんだろ？ 誰とは言わないけどさ」

ねちっこい言い方でいじめていると自覚はしている。杉本の性格上、嘘が言えないのはよくよく承知している。だから白状させたい。せめてあやまらせたい。固まったザラメ雪に黒い泥だらけの長靴で足跡をどっさり残してやりたい。

「狩野先生が言ってたけどさ、杉本、どうしてそんなことしたんだよ」

杉本は目をそらそうとしない。

「最初から途中で逃げようと決めてたんだろ、どうせこんな奴ついていたら補導されるだけだつてさ」

違う、違う、何を口走ろうとしているんだらう。

コントロール不能状態の自分に上総は慌てた。だけど、止まらない。

「だから、清坂氏に連絡したんだろ」

毒入りの吐息をぶつけてやりたかった。

「ふたりに最初から組んでいたのか。それとも、向こうからそれ、言い出したのか、どっちなんだよ」

杉本梨南はゆっくり立ち上がった。

「どちらでもありません、私の意志です」

「嘘つけ！」

「嘘をついたことはありません。事実だけを申し上げます」

十四才にふさわしくない言葉を並べ、杉本は簡単に説明を始めた。

瞳には、いつもなら存在するであろう怒りもなければ、涙もなかった。

「立村先輩と行動する以上は、お付き合い相手の清坂先輩にご報告するのが筋です」

まずは上総の予想をおおよそ認めた。

「ですが、今回はそういう暇もありませんでしたから、途中駅で連絡を入れただけです」

「だからなんでそんな余計なことをするんだよ！ 俺、前に言っただろ？ 清坂氏とはとっくに」

「意思表示を双方で行わない限り、事実とは認められません」

——何が意志表明だよ。

言っている意味がわからない、というよりも、わかりたくない。上総は頬杖をついたまま杉本を見上げた。どうせきらうならどんどん罵倒すればいいのだ。杉本には豊富な語彙も、上総を罵倒するネタもたんまりとある。

「私が行ったのはひとつの義務を果たすことだけです。私の方が真実を知りたいと思っております。なぜいきなり狩野先生が現れたのか、私がわざわざ購入した切符を取り上げようとしたのか。そうです、まだ狩野先生からはその料金を頂戴しておりません。立村先輩に対しての切符代は当然、私が持つつもりでございましたが、お給料をもらっているであろう狩野先生におごってあげる筋合いはございません。私の言い分に何か文句がありますか」

よきよく見ると、狩野先生に対してだけ、かなり憤っているようすが窺い知れる。

——杉本は嘘を言わないんだ。

どこまで信じればいいのかわからないが、まずは聞くだけきくことにした。

「で、清坂氏になんて報告したんだよ」

「立村先輩は私が見張ってます、ご安心ください、です。あと」

そこで言葉を切り、杉本は小首を傾げた。ゆるいふたつわけの束が肩の上で揺らいだ。

「もし、そのお気持ちがあるなら青湊駅で乗り換えましょうかとも」

「どういう意味だ」

思わず飛び掛りたくなる。肩を揺さぶりたくなる。頭の中じゃなくて、まっすぐ立ち上がったどこかですべてを突き刺してやりたくなる。

杉本も気付いているはずなのに、あえて冷静な振りをしているのだろうか。抑揚のない言葉で続けた。

「清坂先輩はおっしゃいました。私に、あの方に対してするのと同じ事を立村先輩にしてあげてほしいと。ですから私の判断でそれに従いました」

「あの方って誰だよ」

「もちろんおひとりしかおりません」

——関崎のことかよ。

さらりと答え、目力だけはしっかりと、上総に打ち据えて。

「そのようなことをおっしゃるものですから、いらっしゃる気はないのだと判断しまして、私は立村先輩と往復するつもりでいたのです。なぜ、狩野先生が割り込んでくるのでしょうか。この学校の教師はやはり頭の悪い人間ばかりなのではないでしょうか」

「杉本、それほんと」

上総は杉本の顔をそっと覗き込んだ。かろうじて杉本より背は高いので、それができる。

「私が嘘をつくとお思いですか」

「……思わない」

黙って座った。杉本に言い返す言葉など、今はない。

しばらくふたり、隣り合ったまま座っていた。杉本は何事もなかったかのようにノートを広げ、これみよがしに難しい数学の問題を解き始めた。わざわざ上総の鼻先に突きつけるようなことをするのは、あきらかに嫌がらせとしか思えない。腹を立てる気もない。かまう気もなく、上総は机につっぷして目を閉じた。ひとりで考えた。

——杉本が清坂氏に連絡を入れ、清坂氏が直接近江さんに連絡を入れ、その繋がりで狩野先生に繋がったということか。

昨夜、狩野先生も同じようなことを説明してくれた。杉本の言い分を丸ごと信じれば、その通りだと頷ける。また美里と近江さんとは仲良しだったし、何かあった際に電話をかけてもそれは女子として自然なことだろう。天敵・菱本先生に泣きつかれなかつただけましと考えればいいのか。

いや、それ以上に衝撃なのは、杉本の態度の理由が解けてしまったこと。

——関崎に対してすることを、俺にしたというわけだもんな。それならば。

かみつくこともなく、おとなしく肩にもたれさせてくれたのも、「関崎に対して」ということならば納得だ。上総はどうしようもなく杉本の持つぬくもりがほしかったけれども、杉本は関崎にやるべきものとして与えてくれただけのことだったのだ。何か勘違いしていた自分がみっともないったらない。一瞬でも、何を夢見ていたのか。

上総は顔をあげた。何か付け加えるべきことがあるような気がした。

「杉本、聞いていいか」

「なにか」

杉本は目線をノートとシャープペンの間にはさむようにし、そのまま答えた。

「もし、今、俺が関崎だったら、何してくれる？」

「わかりません。先輩はあの方ではないです」

「いや、だから、もし、俺が関崎だったら、どうしてくれる？」

シャープペンをノートの境目にはさみ、杉本はしばらく黙りこくったが、

「このままでいます。それだけです」

「そうか」

どうやら、杉本は、まだ「関崎と同じ扱い」を上総にしてくれそうだった。

——杉本は、「振り」をすることができないんだ。

口でなんといっても、その行動は嘘にならない。そのまま上総は受け取ることに決めた。

「上総か、今日はここにいるか？」

教室に入ってきた駒方先生は、上総が杉本と並んで一緒にいるのを見ても、特別何も言わなかった。昨日の出来事を知らないわけ、決してないだろうに。たぶん狩野先生を通じてみな、立村上総情報をすべて共有しているだろう。口をきっちり結んだ。

「梨南も、今日は上総がここにいて、いいか？」

杉本にも尋ねた。こっくり頷いた。付け加えるように、

「私も、立村先輩は避難されたほうがよろしいと思います」

「そうか、そうか。梨南の許可が出たか」

にこやかに駒方先生は、絵の具でまだらになったズボンで手をこすりながら、

「そうだな、なら私たちも交代でここにいるから、まあゆっくり、やりたいことしてなさい。あとで狩野先生もいらっしゃるし、菱本先生もくるはずだしな。ここにいるかわり、大人たちから聞かれたことは、きちんと答えるんだぞ。それさえすれば、あとは卒業までここにいてもかまわないから、安心してくつろぎなさい」

——本気かよ。

なにか、すでに上総のいないところで包囲網が形成されているような気がした。

「西遊記」に出てきた、おしゃかさまの手の中にいる孫悟空と一緒にか。

かみつきたい気持ちはある。でも、今このぬくもりからは離れたくない。

「ありがとうございます」

上総は脱ぎ忘れていた黒いコートをロッカーにしまい込み、改めて杉本の隣に腰掛けた。

「それなら、まずは上総、狩野先生から渡されていた数学のプリントをまず出しなさい。それができるまで、まず解いてみることだなあ。梨南と一緒にやるか？」

頷くとにこやかに、

「それなら、机を向かい合わせにしてやろうか。ふたりだと、やはり淋しいものなあ」

小学校中学年レベルの内容で、見られて恥としか思えない内容だけど、居場所代と考えればそれでいい。上総はプリントを取り出し、机に置いた。

「わかりました」

上総が答える前に杉本が立ち上がり、素直に机をずらし向かい合わせにしてくれた。

——関崎にしてくれること、をか。

関崎といえば、来週か再来週、青瀨大学附属高校を受験するため、高校校舎にやってくるはずだ。もちろんその日は学校全体が休みになるので会うことはできそうにない。

本当だったら杉本に帰り道どこを通過して帰るかくらい教えてやってもいいのだが、今、そんなこと絶対しないと決めた。

——冗談じゃない。誰が渡すか。

杉本梨南と向かい合う静かな時間を得るのに、若干時間はかかった。まず状況報告に出かけた駒方先生が菱本先生をひっぱってきて、ふたたび熱湯浴びせるような叱咤を受けたのは想像通りだった。

「立村、お前どんなに、ほんとにどんなに3Dの連中が心配していたのか、わかってないのか！
あのあとなあ、どんなにか清坂や羽飛が」

「申し訳ありませんでした」

上総の最善なる方法はこの言葉一点張りなり。とにかく頭を下げ続けて嵐が去るのを待つ、そう決めていた。

「まあ、何事もなかったんだしな、ちょっと早く家に帰っただけだってことだろうし、なあ。上総もその点は反省しているようだから、まずはここにしばらくいるというのも手だぞ」

「立村、本当にそれでいいのか？ 逃げてていいのか？」

上総なりに様子を伺ってみた。どうやら狩野先生は子細を菱本先生にまだ報告していないらしい。上総が杉本を無理やり学校から引っ張り出した後、さっさと帰ったかなんかしたのだと、その程度のようにらしい。まかり間違っても汽車を使ってあてどのない旅をしようとたくらんだとか、そこまでの説明はなかったらしい。ありがたいことだ。もっともそれは上総の直感だが。

「逃げることも、時には必要だぞ、菱本先生もな」

ずいぶんのんびりした口調だった。たいして何か叩きのめしたいわけではなさそうなものだけでも、どうやら菱本先生には追い出し効果満点だったようで、

「あっ、すみません、いや、申し訳ございません！」

いきなり顔を真っ赤にして頭を下げるではないか。上総の方が驚いた。

さすが年の功だけあって、若造には勝ち目ないということか。いやそうになると、上総なんてまだまだ、卵から孵って間もない、ひよこもいいとこだ。しばらく無言を通した結果、

「それでは、こいつをよろしく願います」

土下座寸前まで頭を下げた後、教室を出て行った。一気に室内温度が十度ぐらい下がったような気がした。向かい合った杉本からは、

「あきらめたのですね」

単純率直な感想が洩れた。

杉本梨南を正面に見ながら、時々、

「あのさ、杉本、この英文、俺が全部訳やってやろうか？」

とか、

「この文章、スラングとか混じっててわかりづらいだろ、その辺説明してやろうか」

などとささやいてみる。

「そんな必要ございません。立村先輩こそいったい何をお考えなのですか。まだお手元の算数ド

リルが終わっていないではありませんか」

そうなのだ。杉本は上総の解いている問題を「数学」と認めてはいないのだ。

みっともなく切り返されてしばし落ち込む。なにか言い返せないだろうか。しばらく考えるがなかなか思いつかず、うやむやに黙り込む。杉本もそんな上総の様子に気を遣ってか、

「立村先輩、私が説明いたしましょうか」

緩やかに救いの手を差し伸べる。上総からすると「救いの手」に感じられるけれども、おそらく第三者からしたら「出来ない奴に対する嫌味」にしか聞こえないだろう。そういう風なふたりの間の暗号、それが心地よい。上総は言い返すことなく素直に杉本の言葉を待った。

その繰り返し。外はいつのまにか真っ白い雪に埋め尽くされていた。いつもならくっきりと映るはずの窓ガラスが、白い雪膜に覆われ、蛍光灯をぴっちりつけないと暗くてやりきれなくなりそうだった。

ふたりのやり取りを聞いているのかわからないが、駒方先生は窓を眺めながら、

「この冬一番の、降りだなあ」

スケッチブックに何かを書き込みながら、のんびりした声で呟いた。

「上総、梨南、ふたりで雪合戦でもやってこないかい」

——何考えてるんだろう、この人。

あっけにとられて口を利けずにいる上総より先に、杉本がきっぱり拒絶した。

「雪球で立村先輩に押し倒されたら困ります」

駒方先生はさすが年の功、ふんふん頷くだけだった。

——押し倒すってなんだよそれ。

杉本はそのままの顔で上総のノートへ目をやり、反対側から器用に読み取りつつ、丁寧に問題を書き写していった。そのまま、くっきりした文字で解いていった。

五時間目の鐘が鳴った。昼休みもそうだが休み時間現れるのは、好奇心に満ち溢れた知らない生徒ばかりだった。貴史も美里も、また評議委員連中も、そういう本来上総と繋がり深い連中は誰一人顔を出そうとしない。菱本先生から釘をさされているのか、それともほとぼりが冷めるのを待っているのか、どちらかだろう。上総からしたらほっとするのでそれで十分だった。

ただ、狩野先生が一度も現れないのが奇妙といえば奇妙だろうか。

あれだけ上総に「君の力が借りたい」などと強く頼み込んでいた、あの狩野先生がだ。

杉本が問題をさくさく解いている間に、上総は席を立ち駒方先生の耳元に問い掛けた。

「狩野先生は、どうなさっているのですか」

口もとを「ほ」の形に丸くつぼめ、駒方先生はいきなり肩をぐりぐり回し始め、

「今は狩野先生も、ひとがんばりせねばならない時期だからなあ。淋しいか、上総」

「いえ」

——なんでそんなこと聞かれるんだよ、やっぱり俺ってガキだってことかよ。

かなりむっとしたので、上総はすぐに席に戻った。どうせぴしゃっとやられるのなら、杉本の方がずっとましだ。廊下の足音がうっとおしく響き、中途半端に扉が揺れるのを上総は背中中で感

じつつ、頭の中でシャットアウトした。覗き込んでいるだけだろう。

「こらこらお前ら、用があるなら、堂々と入ってきなさい」

あいかわらず穏やかな声で注意する駒方先生だがそんなの通りすぎる連中誰も気にしていないらしい。ところどころ聞き取れる声で、

「あいつが戻って来てるってな」

「逃げたんだろが」

「ったく、情けねえ男」

などと、誰とは特定しないものの、露骨に罵倒する言葉を残していった。

「はい、どうぞ」

杉本がノートを上総の机へくるっと向け、立てて指を指しながら、

「いいですか、よく見てください。私がただいまから説明いたします」

かすかにきりきりした言い方で、余所見している上総を呼んだ時。

扉がしっかり開ききった音でさえぎられた。杉本自身の視線が、扉に向かった。上総も釣られた。駒方先生がやっぴりのどかに、やってきた奴の名前を呼んだ。

「忠文、よくきた、よくきた。ほらほらその辺に座るか？」

忠文とは、天羽の下の名である。

呼ばれても怒った風でもなく、天羽は頭をかきながらいつものおちゃらけ笑顔を満開にしたまま、元気良く挨拶をまずはした。

「どうも、どうも、やってまいりやした！ あのう悪いんですが、ちょっとあいつを借りてっていいっすかねえ」

頬の側に人差し指を当てるようなしぐさをした。上総のいる方を指しているように見えた。

——天羽。

目の前の杉本の表情が一気にとんがっていくのが見物だった。一番可愛がってくれた女子の先輩・西月さんと天羽との間に起こった恋愛騒動顛末を、杉本が知らないわけがない。女子には人一倍甘く、男子には数千倍辛い杉本が、天羽のことを好きになるわけがない。

「ああいいぞ。ここも授業は終わっているからなあ。上総、忠文が話、あるようだぞ」

——呼びかけなくたってわかってるさ。

窓の白い膜をちらと眺め、上総はゆっくりと天羽の方へ顔を向けた。まだまだおちゃらけ状態を保っている天羽だが、上総と目があつた瞬間、鋭い眼差しを向けてきた。

「はい」

立ち上がり、机の上のノートをそのまま広げたまま、上総は天羽の方に近づいていった。

今朝のようにいきなり、思い出したくないものを感じてしまうようなことはなかった。

「話、聞くよ」

「どうもどうも」

先生たちにだけは和やかにやり取りしているようにみせかける術、それは上総を含めた中学三年なら誰もがマスターしているものだった。天羽はその術に長けていることを、上総はとっくの昔に気付いていた。

「じゃさ、まずは、男ふたりっきりデートができる場所で、どうっしょ」

「例のところか」

「コートと手袋、持ってこいよ」

上総は頷き、コートを羽織り手袋をしっかりとめた。

「かばん置いてくのかよ」

「どうせ戻ってくるからさ」

杉本だってまだまだ、ここにいるだろう。さっさと家に戻る気なんてない。

天羽も杉本のこわばった瞳に気が付いたようだが、あえて何も言わず駒方先生にのみ、

「そいじゃ、お先に失礼いたしやす！」

へらへら仮面をつけたまま鼻歌交じりで廊下に出ていった。上総も後を追った。同時に天羽の鼻歌が途切れた。足はまっすぐ、中庭に向かっていく。

外気に触れるまで、ふたりとも口を利かずにいた。

何か、言わなくてはならないと言葉を捜しているうちに中庭へ到着し、その戸を開けて続く雪道を踏みしめた時、はじめて天羽は上総に振り返った。

「昨日、何してたんだ」

おちゃらけ味などどこにもない。怖い目だ。

「家に帰った」

「そいで」

ためらったが、三秒の判断で答えることにした。

「お前の担任と話、した」

「どこまでだ」

背を向けて再び歩き出した。やはり中庭にはほとんど人気がない。一、二年生たちはまだ実力試験などが絡んでいて身動きとれないからだろうか。それでも数人は、雪合戦用の雪球をおにぎりこしらえる要領で作り溜めている。その脇を通り過ぎた後に上総は答えた。

「俺のいない三日間、いろいろあったらしいけど、具体的なことは天羽に聞けってこと」

「そっかそっか」

いつもの大理石はすべて雪にがっしり覆われていた。払うだけでは間に合わず、手ですくって横に落とした。天羽は上総が先に腰を下ろすのを待つようにして、場所を見極めるようにぐるりと石に手を触れて回った。

「やっぱし、ここいらがよかるが」

隣にべたっと座った。すぐに石から冷たさがよじ登ってきた。石に同化してしまいそうだった

。

「噂もなんも、聞いてねえのか」

「南雲に聞いたけど教えてくれなかった」

「清坂ちゃんや羽飛は」

「喋る前に俺がE組に行った」

「逃げたって言えよ」

鼻水をすすり、天羽は手の甲でがしがしこすった。すすり上げ、両手で鼻をかんだ。

「三年評議委員会、歴史に残る最悪チームってことかよ、ったくな」

そこまで言いかけ、すぐに、

「いや、勘違いするな。立村を責めてるわけじゃねえよ」

「責めたっていいさ」

「人のこと言えるわけねえだろうが」

天羽は両手を足の間にはさみこみ、肩をつぼめた。「はっはっはっはっ」と呼吸を短く繰り返して、最後に全力疾走後の「はあっ」で締めた。

「じゃな、立村。これから話すことはな、たぶんなんだかんだ言って二、三日うちにお前んとこへ噂が流れると思うんだ。しゃあねえよな。あとはお前が判断しろよ。うちの担任が何言ったか知らんけど、結局は俺がすべて悪いってことで、チャラ」

「だから何があったんだよ」

横顔を覗きこんだ時、天羽の横顔に浮かんだ自嘲は、どこかで見たことがあると上総は感じた。修学旅行数日前に起こった天羽の女子から受けた謎の制裁を発見した時と、西月さん問題で頭を下げた時に見かけたものと、どこか似ていた。

「きっかけは難波だったんだ」

天羽は目をそらしたまま話し始めた。

「難波が去年の秋ぐらいからやたらと色気づいてやがったのは、お前も気付いてただろ。キリコ姐さんが青大附高に進学できねくなっちゃまって、しかもご本人が魂抜かれちゃった状態なもので、難波ホームズ完全に壊れちゃったってのはな」

納得いかない八つ当たりをされていたのは感じていた。上総は頷いた。

「俺も女子評議のことに関しては、ノータッチで通してきたし、ま、いろいろとすねに傷のある身なもんだから放っておけばそれでOKだと思ってた。唯一心配していたのが清坂の暴走劇だったんだが、それもお前が押さえてくれてたしな。あとは卒業式前にでも難波ホームズに想いを遂げさせるかなんかして、それでちゃんちゃんかと甘く見積もってきたってわけだ」

誰もが同じことを考えていただろう。去年、本条先輩が卒業した日のことを思い返した。

「俺は甘かった」

舌打ちし、天羽は自分の頭をぼこぼこ殴りつけるしぐさをした。

「つまりだな、俺は、女子がああいう立場に立たされた場合、何考えるかをまったく読んでなかったってわけなのだよ、立村、お前ならわかるか？ 霧島と同じ立場に立たされたとして、お前ならどうする？ 逃げるか？ 泣くか？ 殿池先生に土下座して青大附属に残してもらうよう頼み込むか？ それ以外、なにする？」

「俺だったら」

そこまで口にして、ひとつ、はっきりと浮かぶもの。

——まさか。

「C組のアマゾネス」と謳われたあの霧島さんが、でもまさかそんなことを。

いくら絶望したとはいえ、まさか。

上総ならばもしかしたら、そうするかもしれない。ひとつの行為。

「天羽、まさかだとは思いうけど」

前置きつきで、上総は答えを出した。

「自殺か」

天羽は黙った。今までずっと逸らしていた目を上総に合わせてきた。周波数がぴたりと合う。

「ご名答」

尻から冷えてきて、全身はもう、天羽と体温を少しでも交換しないと耐えられなくなっていた。自分が発した言葉に、言葉も足元の雪と同じく固まっていった。いつ溶けるのか、わからなかった。

「勘違いするな。霧島は当然、今も、生きている」

天羽はお経を唱えるようにまずは締めた。

死にたい、何度も考えたことがある。

世の中で、一度も死を考えたことのない人間がいるなんて、絶対に信じられない。

一度も殺してやりたいと思ったことのない人間がいるなんて、絶対に認められない。

そんな気持ちを一切感じたことなく過ごせる人間なんて、血が通っていない奴だ。

上総にはそうとしか思えない。だから、自然とわかる。

全身全霊で努力してそれが叶わなかったとしたら、残された道はひとつしかない。

——あともうひとつあるけど、それはまず無理だ。

天羽には言わなかったもうひとつの可能性を上総は飲み込んだ。

「俺たちが評議委員会であたふたやっていた頃あたりから、霧島はつまり、その、天国への移住計画を立てていたらしいんだな。完全に干からびきった状態で、E組に籠りっきりの間に、何かがあったんだろう。俺もその辺は詳しく聞いちゃいねえ。けどな、その時にな、一緒にいた相手が、問題だったんだ」

「相手って杉本か？」

「違う」

あっさり天羽は否定した。ほんの少しだけ息がしやすくなったような気がする。

「そいつとふたり、毎日のように死ぬことばかり考えていて、とうとう決行しようとしたのが一週間くらい前らしいんだな。名探偵シャーロック・トシタケ・ホームズのお言葉によるとだかな」

「そいつ」が誰なのか、すぐにたどり着いた。たぶん、杉本を一番可愛がっているあの女子だ。あのふたりは三年女子の中でも一番の仲良しだった。そう考えると、自然、コンビで自殺計画を立てる可能性、なくはない。

「難波はそれ、いつぐらいに気付いたんだ？」

「さあな」

天羽はふたたび目をそらした。

「たぶん、あいつは最初から霧島以外アウトオブ眼中だし、性格資質すべてにおいてホームズだから、早い段階で勘付いたと思う。俺は全然だったし、更科も似たようなもんだったけどなあ。とにかく難波は『青大附属のシャーロック・ホームズ』たる名にかけて、霧島たちの計画をかぎつけ、阻止しようとして行動を開始した。まずは第一段、これにて終了」

杉本がそういえば、昨日ちらっと話をしていたような気がする。

「やたらと難波先輩が走り回っていた」とかなんとか。

——そう考えれば、話も繋がるか。

「阻止したってことだよな」

「第一段だ、その話は。まだ第二段と続くから黙って聞け。ちなみにお前の脱走劇は第三段だけど、俺はそんなの聞く気ねえからな」

難波と霧島さんとの不可思議な気持ちの交流。上総にはまだつかみとれなかった。

ただ、難波がどうしようもなく霧島さんしか見えない状態にあることと、それが実は密かに心地よい場所だということを、上総は実体験において自覚なしに学んでいた。

天羽は第二段を、ゆっくり続けた。

「霧島の様子はよくわからんが、難波がエキサイトしているのだけは俺も気付いてた。更科もやばいと思ってたらしい。ただ俺もあの時は生徒会との腹の探り合いでいらついていたってのもあったしな。新井林を仕込むのも一苦労だし、肝心のお前は霧島と同じくらい魂なくしちまってるし、俺ひとり、四面楚歌」

否定できないので黙っていた。

「とにかく色恋沙汰の修羅場は経験済みの俺だし、まずは難波をとっつかまえて白状させたんだ。あいつも状況がかなり進んでいるのは承知していたみたいでな、ずっと休み時間、霧島から目を離さないでいたらしいんだ。お前と同じことやってたわけ、相手を代えてそこんところ」

皮肉られても、「自殺」という行為の元には何も言い返せない。

「で、とうとう決行日を難波が突き止めた。さっそく難波はおっかけしようとしたんだがな、どこにもいやしねえ。ふたりで死に行こうと約束して、待ち合わせをしたってところまではわかっていたけど、あとはよくわからなかったらしい。さすがのホームズも頭を抱えたらしいんで俺のところへ相談にきたというわけ。そしたら」

天羽は言いよどんだ。唇を拭い、鼻を手でかみ、その手を雪にごしごしこすりつけた。四回ほど繰り返した。

「近江ちゃんが」

「近江さんが？」

全く想像していなかったその名前。天羽の最愛の彼女。

「とんがった傘持ってた女子に、追い掛け回されて俺のところに逃げ込んできた」

「傘持ってた女子？」

「その日は雪じゃなくて、雨が降ってたんだ」

「いやそういうことじゃなくて、なんで」

上総の問いかけに、天羽は初めて、今まで避けていたらしい女子の名を出した。

「西月の奴、近江ちゃんをぶっ殺す気であの時、追いかけてまわしてたんだぞ！」

「まさか」

天羽の瞳に光ったのは、確かに涙だった。

「たまたま俺が視聴覚教室で近江ちゃんと待ち合わせていたからだったのと、難波がいたからだったのと、あと、誰も他にいなかったからっていう、ただそんだけの偶然があったから近江ちゃんは死なずにすんだんだ。もし俺があの時あの場所にいなかったら、たぶん近江ちゃんは、西月に、刺し殺されてたと思う。絶対、俺がいなかったら」

頭を抱え、天羽は声を震わせた。座ったまま地団駄を踏んだ。

——復讐。

さっき上総が、「追い込まれた時取る行動」のひとつとして、あえて口にしなかった二文字がくっきりと浮かんだ。

あまりにもびっくりすると、言葉が出なくなるもの。そう言った人がいる。

冷気も風も、隣にいる天羽の吐息も、すべてが凍り付いている。

——そんなこと、あっていいのか？

上総は頭の中で冷たいまま並ぶ言葉を、読み取れずにいた。

天羽は上総の顔色を見ながら、少し不満そうににらむようなそぶりをした。

「俺の言ってること、どこまで信じてるんだかな」

「信じてるけどさ、でも、もっと詳しいこと聞かないと俺だって何も判断できないし」

「あ、そうだな」

唇をかみ締めた天羽は、頷くと足元の雪を握り込んで、そのまま自分の頭に振りかけた。なかなか溶けず、頭の上が白髪に見えた。

「たまたまうちの担任が職員室にいたことと、他の生徒連中が誰もいなかったのが運よかったんだろな。難波がすっとなでて狩野先生を引っ張り出してきて、そいでなんとか納めたってのがほんとのとこ。もっとも難波もその足で即、キリコ姐さんを救いに飛び出しちまったんでややこしいことになっちまったけどな」

出来事の流れがつかめず、上総は途中、言葉をはさんだ。

「ちょっと待ってくれないか。つまり、どっちが先だったわけ。霧島さんが自殺未遂したのと、難波が追っかけたのと、近江さんが襲われたのと」

「悪い、そだな」

指を折りながら、天羽は上総の方を見た。

「まず、俺を探しに難波が視聴覚教室にきたってのが最初だ。俺と近江ちゃんとの熱い仲をあいつもよっく知ってるからなあ。そこであいつが、『霧島はどこ行った？』とか血相変えて問い詰めてな。けどわかるわけねえよな。『E組行ってくりゃあわかるんじゃないか』ってたら、『とっくに探してる』って返事するんだ。そりゃあそうだな。E組にいないから、俺のところに来たんだよな」

確かに。とりつかれてたとしか思えないくらい、難波は霧島さんのことを追いかけていた。

「この機会に俺も、あいつの本心聞いてやろうかなとか、せっかくだったら背中押してやるかとか、ちらっと思ったわけ。したらホームズ、『自殺するかもしれねえってのに』ってわめきだすんだ。あんときのホームズ見せたかったぞ。さすがにしゃれにならねえなってことで俺も真面目に聞き出したわけ」

「自殺」なんて、日常の会話でそう軽々と出していいものじゃない。

「たまたまあいつ、キリコ姐さんと西月が約束してるのを聞いちゃったみたいなんだ。放課後、駅で待ち合わせて、その後でスーパーの屋上から飛び降りるってことで話をつけてたらしい。ま、『リーズン』三階屋上ったら、冬は戸も閉まってるし今思えばはったりじゃねえかとも思うん

だがな。ただキリコのことだし、そこまで頭が回ってたとは思えねえ。難波も放置しときゃよかったんだが、そこがホームズ、愛の裏返してってとこでな」

天羽はもう一度、今度は自分の肩に雪を振りかけた。

——天羽の奴、違うんじゃないか。

上総によぎったひとつの予感。

——あいつ、もっと残酷なこと考えてたんじゃないのか。

それが何か、上総にはまだ口に出せなかった。意識だけが氷文字で綴られていくだけ。

——たとえば、西月さんが一緒だったから。

「じゃあどうするこうするって話しているうちに、突然近江ちゃんが視聴覚教室に駆け込んできたってわけ。なんてナイスタイミングとか思ってたら、西月がでっかい傘持って、廊下から飛び込んできて、まじで刺そうとするんだ」

「刺すって、いや、叩く程度じゃないのか？」

さっきから気になっていた。いくら被害者側とはいえ、天羽の口調はあまりにも西月さんを非難しすぎている。そうできる立場とはとてもだが思えないのに。それに、天羽の言葉を信じてしまうとこれは、学校内で始末できるレベルの問題ではないような気がしてくる。「刺す」と「叩く」この違いは大きすぎる。

天羽は膝をもみしだき、首を振った。

「殺意、ぜってえあったと思う。なんで近江ちゃんを追っかけまわしたのか、その理由はわからねえ。とにかく近江ちゃんを守るべく俺が立ち向かったってわけで、なんとか納まって、その間に難波が狩野先生ひっぱってきて、その後な」

——本当は「立ち向かった」その内容が問題じゃないのか。

上総は黙っていた。ずっと感じていた違和感が、だんだんわかりやすい言葉で形作られていく。ゆっくり、意味の氷が溶けていく感触がある。

「あとでホームズに聞いたところによると、連れてかれる後に難波へ、西月が待ち合わせ場所を紙で渡したらしいんだ。ほんとは目撃者だし、難波もいねえとほんとうはまずかったんだけど、事情聴取をすっぽかしてホームズ即、青潟駅に突っ走ったってわけだ。当然、霧島は西月を待ちぼうけしてたわけで、あとは二人の世界、どうなったか知らん。俺も先生たちには霧島の自殺未遂なんて話、一切しなかったし、西月はあのまま筆談しかできねえし、近江ちゃんはなんにもわからなくてただショック受けてるし、ってことで」

「じゃあ、霧島さんと西月さんがあれっきり学校に出てきてないってのは」

「キリコはとにかく、西月はもうこねえだろう。来たら、俺がたぶん理性ぶっとなじまう。たぶんだけどな、狩野先生も今度ばかりは強硬手段、選ぶに決まってる。ああ虫も殺さぬ顔してるけど狩野先生、近江ちゃん姉妹、溺愛してるしな。嫁さんも義理の妹もまとめてな」

「けど、どう考えたって、それがほんとなら警察沙汰になってるだろ？」

学校内で凶器を振り回し、天羽の言葉通り近江さんを「刺そう」としたのなら。

天羽は「ちっちち」とおどけたふうに指を一本動かした。

「そこが、我らがA組、コネクラスの力って奴。通常だったら騒ぎだよな。俺も今回ばかりは覚悟した。なんだかんだあって停学は免れねえと思った。けど、うまく狩野先生や学校側がもみ消しにまわってくれたらしいのと、あとな」

口籠もった。何か秘密があるらしい。上総はじっと見返した。知りたい。

「いいか悪いかわからねえけど、片岡がお坊ちゃんだったんでな」

「片岡って、あの」

一年の時に下着ドロをやらかして、現在英語の成績が上総に次いで二番、おそらく高校は英語科で同級生になるであろう、彼のことか。西月さんのことを一途に思う姿のいじらしさが巷では有名だ。だが会話を殆ど交わしたことのない上総には、ぴんどこないのもまた事実だ。

「あいつんち、超、すげえ、金持ちだろ。俺には想像もつかねえやり方で丸く治めたみたいなんだ。あくまでも、今のところ噂だけだな」

「噂？」

聞くべきか迷った。迷っているとは思わなかったらしく、天羽は続けた。

「西月をこのまま、片岡の実家で引き取って、向こうの学校に行かせるってことになりそうらしいんだ。それ、まじかよって思ったけど、やっぱり金持ちのやることは桁が違うよなあ。俺も、いまだ、信じられねえよん」

語尾をおどけさせて、ばんざいした後、天羽は脱力した。天を仰ぎ、「オーマイゴット!」、そう呟いた。

「ということは、西月さんは、もう青大附属に戻ってこないってことか」

少しだけ天羽の表情が軽くなった。

「そ。そういうこと。狩野先生が近江ちゃんの身内だったのが、今回一番おっきかったらしいってわけ。自分の妹を刺し殺そうとした奴を、何があったってそばに置くの、やだろ？」

「でも西月さんにだってそれなりの理由があったんじゃないか？」

「かもしれねえ。けど、あんなに血相変えて追っかけまわして、恐怖させることを俺は認められねえよ。警察沙汰にするんだったら、それなりに俺も覚悟していた。西月に対してしたことを俺もすべてしゃべるつもりでいたしな。けど、近江ちゃんのダメージ、あまりにもひでえよ。近江ちゃん、今日は学校に来ていつも通り清坂といちゃついていたけどな。でもやっぱり、傷は深いと思うんだよ。だからな」

「天羽」

上総はゆっくり、コートから雪を払い落としながら立ち上がった。

何か言わないとだめなような気がしてならない。

いきなり冷蔵庫の電源が抜かれて、氷が一気に溶け出したかのように。

「お前、西月さんを嫌うのはわかんなくもない、けどさ」

足元にしゃがみこみ雪を握り、顔に浴びせた。

「西月さんにそこまでさせたのはお前の責任だと、俺は思う。卒業前に謝れよ」

上総の言葉を、信じられなさそうな顔で聞いていた天羽は、いきなり口笛を吹き出した。妙に

ゆがんだメロディーだった。口を尖らせ、舌打ちした。

「立村もあの現場にいたら、そんなこと、言えねえぞ」

「そうだな、たぶん、言えないよな」

いなかったから、好きなように言える。

しばらく気まずい沈黙が続いた。雪の中に蹴り転がされなかったのは、天羽なりに考えるところでもあるのか。上総はもう一度隣に座りなおし、すっかり冷えた身体をさすり直した

たった三日間しか経っていないのに、青潟大学附属中学評議委員会三年たちには、とりかえしのつかない出来事が次から次へと起こっている。上総も杉本を半ば「誘拐」した形で学校から逃げ出し連れ戻された。それだけでも十分停学レベルの出来事だと自覚している。

でも、西月さんの行動が天羽の言う通りのものだとしたら、これは当然「傷害事件」だろう。もし仮に殺意が混じっていたら、もっと大事になるかもしれない。たまたま近江さんは天羽のいる教室を知っていたから逃げ込むことができ、未遂に終わったとはいえ。

——警察の介入もないのか？

天羽の口調によれば、「コネ組A組」の力でなんとか押さえられたという。狩野先生の言葉を借りればおそらく「大人の義務」として片付けようとしているのかもしれない。とてもだが三日間で片付くようなことでは、絶対ない。西月さんを退学処分にするのは納得できるものがあるし、かといってかつて一緒に評議委員を務めていた自分としてはそれを認めるのも辛い。

なによりも、この事件のあらましを、全校生徒たちはみな知っているのだろうか。

南雲もちらと口にしていた。

「噂だからすぐにりっちゃん気付くと思うよ」

狩野先生も具体的になにが、とは告げなかったけれど、天羽がかかわっていることは明言していた。近江さんの家に一緒にいた、というのもこの事件を背景にして考えれば納得だ。傷害未遂事件の被害者となった義妹を慮って、担任でもある狩野先生が側に寄り添っているのは自然な図だろう。

しかし、どうしても腑に落ちない。

なぜ、天羽は。

「天羽、ひとつだけ聞いていいか」

「どうぞどうぞ、なんなりと」

無理やり機嫌を直したような声を出す天羽。声が不自然に高い。

「もしさ、死のうとしていたのが西月さんひとりだと聞いたら、お前、どうしてた」

無言。黙っている。また口笛を吹こうとしている。

「お前、あっさり、見逃したんじゃないか」

「いやいや、そりゃあわからねえよ、人道的な立場から言って」

「違う、天羽」

さっきのようにかっとなって雪をはらはらぶつけることはしたくなかった。

最初から凍っている言葉を、上総はひとつひとつ、舌先で転がし溶かして乗せた。

「霧島さんも西月さんも、元評議であって、現評議じゃない。それに難波の勘違いだって可能性もあるだろ。いくらホームズだって間違いはあるだろうしさ。天羽は評議委員長だから当然、一緒に三年間評議やっていた霧島さんを心配して相談に乗ったんじゃないかって俺は思うんだ。けど、もし、もしもだよ、それが西月さんだったとしたら、天羽、お前、どうしてた？ 最初から」

恐ろしい。口に出していいのか凍った文字が浮かぶ。吐き出すように一気に言葉を噴いた。

「お前、見殺しにしたかったんじゃないのか？ とことん、憎い相手だったら」

「おい！」

天羽の柔和な表情が一気にこわばる。上総も退きたかった。でも退けない。

「そこまで憎まれて、それでもお前のことが西月さん好きだったとしたら、あとはどうしても恨みが近江さんに行くだろ。天羽を憎めないんだったら、西月さんは近江さんを恨んで当然だろ。天羽、お前がどうして西月さんを嫌いなのか、俺もわからないわけじゃないって正直思う。けど、死んでいいってくらい憎むのってなんかあるのか？ そこまで嫌って憎んで追い詰めて、それで責任ないってお前、どうして言える？」

全く予想していなかった言の葉かすかず。あふれ、散って、雪空に舞う。

どこにこんな言葉、しまい込んできたのだろう。

上総自身にも全くわからない。

「もちろん、近江さんはとぼっちりを受けたし、もちろんなんとかしないとまずいよな。俺も評議委員だし、そのあたりは手伝う。けど、お前はお前で、西月さんに両手ついて謝らないと前になんて進めないんじゃないか？ 嫌いなら嫌いだって、言わないでごまかすこと、できなかったのか！」

「なにほざくこのボケ！」

両手を握り締め、天羽は仁王立ちした。

今まで評議委員として一緒につきあってきて、一度も見た事のないその表情に、雪がすべて湯気になりそうだった。これが天羽忠文の本心なのか。見たことがない、でも怖くなかった。いつか、この顔を見る時がくるだろうと、どこかで確信していたからかもしれなかった。

「立村、お前の方こそなに今更訳わからんこと言い出すんだ！ そりゃあな、俺は西月のようないい子ぶった馬鹿女はくたばれって思ったぞ。たぶんお前の言う通り、見殺しにしたいって思ったろうな。けどそんなことできるかよ？ 俺はちゃんと、いやいやながらも相談に行くに決まってる。それ言うならお前のほうこそどうなんだ？ 見殺しにしようとしたこと、あるんだろ？ あるんだったら、わかるだろそんなこと！」

「ああわかるさ、よくわかるよ、殺してやりたいってな。俺は逃げたよ、その通り」

上総は石に腰掛けたまま、天羽の嵐を受け止めた。張り倒されるのは覚悟していた。腰をびしっとつけ、いざという時に備えた。

「けど、逃げられなかったのが今の俺さ。天羽、俺みたいになりたいか？」

なんで、今になって気付いたのだろう。

気付かぬうちに隠しもっていた、ひとつの答え。

小学校の卒業式後、誰もが口を揃えて言う通り、上総は逃げた。

自転車を使って行った決闘の結果、サイクリングロードから転げ落ち、明らかに打ち所の悪そうな浜野をほっぽりだして、コートを翻して全速力で逃げ去った。すべてを大人たちの仕事に任せ青大附属まで走りきったはずなのに、結局最後の最後で捕まった。

——浜野に土下座するだけの、度胸があれば。

——どんなに納得いかなくても、許せなくても、自分の罪だけでも認められれば。

どんなに青大附属で逃げようとしても、品山出身の後輩たちが追いかけてくる。もしかしたら青大附属高校入試で本品山の連中が外部入学してくるかもしれない。どこかでまたすれ違うかもしれない。どんなに隠れても、覆い隠そうとしても、眼をつぶって見ないようにしてきた「見殺し」の罪は追いかけてくる。

せめて、と杉本を連れて青潟から逃げ出そうとしたけれど、狩野先生の手で取り押さえられた自分がある。

——どんなにあがいたって、もう逃げられないんだ。

「天羽、何度も言うようだけど、俺もお前が西月さんを嫌う気持ちはわかるつもりだよ。あの人見ていると正直、D組の熱血担任を思い出すからさ」

静かに足を整え、上総は座ったまま続けた。

「嫌うのは自由だけど、表に出して傷つけてしまったら、その瞬間からもう、加害者になってしまうんだって、俺は今になった気が付いたんだ。馬鹿だよな」

自嘲した。思わずもれたのは笑みだった。天羽が一瞬、気の抜けた顔をし、握りこぶしを緩めた。

「俺はもう、このままの評価を受け入れて青大附属で生きていくつもりだけど、お前はまだ間に合うよ。よくわからないけど、まだ西月さんがらみの問題は噂でとどまっているんだろ。だから、きっちりと、ここで片をつけとけばいい。どんなに納得いかなくたって、どんなに嫌いだったって、どんなにお前の気持ちが治まらなくたってさ。近江さんからしたら加害者だけど、天羽からしたら西月さんは被害者なんだ」

「立村、どうしたんだよ、なんでそんな悟ってやがる？」

「そう、昨日の夜、狩野先生に言われた」

上総は立ち上がった。

「とにかく、三年評議委員がすごいことになっているのはよくわかった。ごめん。お前の言う通り、ずっとやる気なくしてた俺が悪かった。狩野先生にも天羽の力になってやってほしいって言われてる。俺も、そうしたいって思っている。いや、そうさせてほしいんだ」

「立村、お前」

「これから、女子情報を得るために轟さんと話をしたいんだ。天羽、悪いけど轟さんに連絡とってもらえないかな。たぶん俺より天羽の方が話、早いと思うしさ」

あっけにとられている天羽に対し、締めくくる言葉が自然と洩れた。

「俺は、責任を取る。だから天羽、お前ももう一度、考えたほうがいい」

乱れた足跡の続く中庭に、上総はゆっくりと新しい足跡を重ねていった。今できることは天羽の肩に手を触れ、軽く揺らすことくらいだった。驚いたのかどうかわからないが、天羽はされるがままになっていた。ポケットから生徒手帳を取り出すそぶりをし、

「あちゃあ、忘れてきちまってる」

とひとりごちた。

「わかった、立村。まずはトドさん含めて会議だ。けどやっぱ、お前電話しろや。そっちの方がトドさん、前歯めいっぱい出して喜ぶぜ」

確か、半年前、まだ上総が「委員長」と近江さんに呼ばれていた頃。

天羽と轟さんの前で、上総は同じことを告げた。

同じ言葉だけど包むものは全く違っていた。

——今まで逃げつづけてきたすべての出来事において、俺は責任を取る。

教室に戻り、まだ残っていた杉本の袖をひっぱりながら、

「な、今日も途中まで、一緒に帰ろう」

何度もゆさぶってみた。しかし杉本の答えはつれなかった。いつもどおりと言えばいいのだろうか。露骨にいやな顔をされ、

「立村先輩、いいかげん甘ったれるのはおやめくださいませ」

きっぱりつっぱねられてしまった。目の前には駒方先生が他の生徒と話をしているのが見えた。たぶん下級生とだろう。どうやってご機嫌を取るか案を練っているうちに、杉本はさっさと立ち上がり、

「そちらに、お待ちです」

相変わらずの棒読み口調で戸口を指した。思わず眼をそらせた際に杉本は消え去ってしまい、あとはむさい頭为天羽が残されているだけだった。にやにやししながら上総を上から下まで眺めると、

「じゃあ、立村、さっさといこか」

いきなり両肩捕まれて、ぎゅうっと抱きしめようとする。悪いが身体を触られるのは嫌いだ。手を払いのけると同時に片腕をしっかり押さえられた。やぶへびである。

「善はいそげってことでなあ。さ、今日はデートデート！」

つい二十分くらい前まで涙ぐみながら、評議委員事情の修羅場を語っていた天羽と、楽しげに鼻歌歌いながら廊下を歩いていく奴とは別人としか言いようがない。天羽にはもともとめいっぴいの光と同時にどことなく重たい闇が同居しているイメージを感じていたような気がした。いつだったろうか。思い出せずまずは切り返す言葉を。

「切り替え早いな」

「それが俺の人生って奴よ」

——切り替えか。まあいいか。

自分で口にしてみて、少しすっきりした。杉本に逃げられたと気付いた時の苛立ちがすうっと雪のように解けていく。そうさ、どうせ杉本は明日もE組で勉強しているにきまっている。上総だって三年D組の教室へ平気な顔して戻っていく気はさらさらない。それに今朝の話もあって、なんとなく暗黙の了解で、しばらくはE組でのおこもりを許されそうな気がする。上総もしくはE組の住民としてひっそり息を潜めていられそうだ。

ならば、しっかり利用させていただく心積もりだった。

だいぶ時間を食ったせいか、すれ違う同学年の連中はほとんどいなかった。天羽の腕を振り払い、だまって上総はついていくことにした。空の雪はすでにやみ、雪の半分は踏み固められていた。天羽の歩く方向はすべて、きれいに車のわだちが残り歩きやすかった。

交わす言葉も、今はない。あとで、出てくるに違いない。

さっき聞きそびれたことも、きっとあるのだろう。

天羽は口を結んだまま、学校近くの住宅街に向かっていった。こいつの住んでいる地区は青淵の高級住宅街だと聞いたことがある。歩いていける距離ではあるらしい。「らしい」としか言いようがないのは、上総が今まで一度も天羽の家へ遊びに行っていたことがなかったからだ。こぼれる話の端々から、更科、難波、轟さんの三人が作戦会議かなんかでたむろうことはあるらしいが、その中に上総は含まれていなかったらしい。少しひっかかるがどうでもいいことだ。

——天羽の家、だろうな。

なんとなく見当をつけた。やがて、刑務所レベルの高い塀に囲まれた、少し暗めの道へと出た。それまでは雪かきもちゃんとなされていて、歩きやすい雪道だったのに。一気に足首までもり、靴下に雪がどっさりまきついた。空もいつのまにか黒ずんで来ている。

「今夜も降るかな」

「かもな」

天羽はにやりと笑い、親指で塀の向こうに見える二階建ての家を指差した。

高級住宅地、よりは下町風の、古びた倉庫のような家だった。

「あすこだとあまり、邪魔されねえですむかなってとこで」

「どこだよどこ」

「あ、そっか。立村、俺のうち来たことねえもん。そっかそっか。あのな、あそこはな、俺のうちっていうよりも、じいちゃん所有の合宿所。あ、合宿所ってのも変だよな。現在は倉庫。ダンボールまみれだけど、石油ストーブもあるし、ちょっとたむろうにはちょうどいいということだな。けど夏はあっちいぞ。とにかく蒸すの。死ぬぞありゃあ」

「それだけは大丈夫そうだよな」

そのまま塀の途切れたところまで歩き、天羽の誘うまま「倉庫」もとい「合宿所」に向かった。学校の中庭程度の敷地に、小さく倉庫と物置らしきものが立ち並んでいる。確か天羽の祖父にあたる人は、著名な書道家だと聞いたことがある。たぶん書道関連の合宿所か塾かなにかだったのだろう。そう見当をつけ、上総は鉄の階段をゆっくり昇っていった。凍っているせいか滑って落ちそうになり、手すりにしがみつくと二回。

「おーい、大丈夫かーい」

「大丈夫」

慣れた風にさっさと昇ると、天羽はポケットから鍵を取り出した。一緒にマッチ箱も。ライターより目だたないにしても、見つかったら校則違反になりそうな代物だった。

「じゃあ、入れよ」

「おじゃまします」

戸を開け、冷たく埃臭い部屋に足を踏み入れた。天羽が先にスニーカーを脱ぎ捨てた。だいたい二十畳くらいはありそうなのだっぴろい部屋で右手奥に布のカーテンらしきものがぶら下がっている。眼を凝らしてみるとそれは舞台用の幕ではないだろうか。ただ、そうじゃないかと思うだけで、あとは大量のダンボールの山がうずたかく積まれている。その隙間には一束二十冊以上の分厚い本が納められている。黒地に金文字で、漢字だらけの表題が綴られている。中にはやたらとカラフルな色使いの絵画も適当にひっくるめられている。そして金の仏像らしきものが二十

体以上、これも全く心遣いがないまま床に転がっている。

——もしかして、天羽の言ったのって、あれか。

上総が思いをめぐらせている間にも、天羽はてきぱきと石油ストーブを引っ張り出し、一発で火を点していた。ストーブの小窓をにらみつけて、

「しけてねえなあ、よかったよかった」

小さく拍手なんぞしている。わざとはしゃいでいる風に見えた。ようやく上総の不信そうな目に気が付いたのだろう。言い訳し始めた。

「びびったろ。ここの、例の教団がらみのガラクタ。家の中にあるのはたまったもんじゃねえってことで、さっさと処分したってわけよ。けど、粗大ゴミ、燃えるごみ、燃えないごみ、わけのものしんどいしさ。俺ちで出したらまたお前んとこの父さん雑誌に突っ込まれるのが目に見えてるし、とりあえずここに隠してるとってわけなんだ。あ、そいでな、一階も部屋があって、そっちも使えるけど、どうする」

「いいよここで」

せっかく脱いだ靴を履き直すのは面倒だった。上総はストーブの前にかがみ込み、手袋をはめたまま手をあぶった。「その辺に座れや」と天羽も畳を叩いた。

「ありがとう」

「本当ならなあ、体育器具室あたりでこっそりってのがベストだったんだけどな。あすこ、二年の連中が使ってるらしいんだな。ほら、新井林あたりが、二年連中集めて秘密会議なんぞやらかしているらしいんだ」

「秘密会議？」

初耳だった。天羽は頷いた。手袋をはずし、小窓にあぶった。

「生徒会長やってる彼女がやたらとそこらへんうろろしてるからな、一度新井林をとっ捕まえて聞き出したわけ。どうも、あすこ、戸の向こう側に防空壕の跡みたいなかんじの部屋があるらしいんだな。けど、まあそれは第一発見者の新井林に敬意を払って、俺なりに内緒にしてやると決めたってわけ。わりいな、立村。そこんところ、内緒でたのむ」

「わかった」

やはり天羽は新井林をうまく使い、押さえ込んでいるというわけなのだろう。

なんだかまた、気が重たくなってきた。

たぶん、中庭での話第二弾をやりたいのだろうと心積もりはしていた。

天羽に水を向けようとしたところ、すぐに手で「ちがうちがう」のまねをされた。

「お前、さっき、トドさんとしゃべりたいって言っただろ」

「言ったけどさ」

「だからお前がE組で杉本とじゃれてる間に、電話一本入れといた」

さらっと答える。そんなに時間なかったように思うのだが。

「けどそれって、いきなりで」

「大丈夫ってことよ。トドさん今ごろ青潟の海を泳ぎながら、さっそく海面に顔を出そうとして

いるところを見た。あの人のうちもな、うちからすぐそばだしなあ。あ、小学校は学区が違ったから顔を合わせてねえけどな」

説明しなくてもいいのに、どうでもいいことを天羽は言っておまかせようとしている。でも何を？ 何を言い訳しているんだろう。

「俺もできれば早いほうが助かるけど、でもそんな急がなくていい」

「いいじゃねえの、善は急げって言っただろ」

同じ言葉を繰り返して、天羽は大きなあくびをした。

——天羽って、本当はどういう奴なんだろう。

ふたりでしばらく手をあぶりながら、上総は隣の天羽を横目で見た。

修学旅行の時に、早朝の廊下で「チェリーボーイ脱出発言」を耳にして仰天したのもかなり昔のことに思える。評議委員長選挙の壮絶な結末の時、最後まで上総を気遣ってくれたことも、また一、二年の頃からお笑い担当として物まねやうけないギャグの連発をして盛り上げてくれたこと、さまざまな思い出が蘇る。

でも、本当の意味で、天羽と語り合ったことというのは、殆どなかったような気がする。

難波も、更科も、轟さんも、それなりに語る機会もあったに違いない。でも、上総はそれ以上の繋がりを天羽と持ちたいと思ったことがなかったんじゃないだろうか。現在は前期・後期のそれぞれ評議委員長としてそれなりの話はする。もちろん女子ネタとかもする時はする。でも、本当のところ、天羽という男がどういふことを考え、どういふ生き方をしたがつているのか、正直つかめぬまま卒業を迎えそうだと思っていた。

——宗教がどうのこうの、って言ってたよな。

震度五以上の地震がきたら一発でお陀仏じゃなかろうかというダンボールの中に、天羽は何を詰め込んでいるのだろう。おちゃらけて「あーら、立村くーん、なーにやってんの」と声をかけ、受けを狙おうとする天羽の裏には、きっと想像もつかない重たい荷物が積まれているに違いない。もちろんそれを知ろうとする気持ちはなく、言わないならば言わないまま、そっとみまもるだけでいいとは思っている。ただ、どこかで、何か壊れかけている、そんな気はしていた。

たとえば上総のように、どうしようもなくなって、杉本の手を握り締めて学校を飛び出した時のように。

今の天羽は、何か飛び出したいと欲しているのだろうか。

それが「何」なのか分からない。

「あーれ、なに見つめてるの、立村くーん」

いきなり天羽が美里の口癖を真似した。笑うのが礼儀と思って、唇をゆるめておいた。

指先と顔だけが熱くなってきた頃、鉄階段独特のがしがしした足音が外から響いてきた。

「おっ、トドさん無事、水面から顔を出しおったな、まてまてたないま」

腰軽く浮かすと、天羽はでかい声で、

「よっしゃ、入ってこいーな」

よくわからないアクセントで呼びかけた。

「どうも、おじゃましまーす」

戸口で白い息を吐きながら現れたのは、全身頭から足まで真っ黒な、謎の人物だった。いや、轟さんだということはもちろん承知しているのだが、足元の黒い長靴と、黒いズボン、そして黒いアノラック、さいごは毛糸の黒い帽子。ここまでなぜ、黒尽くめにしてくる必要があるのだろう。

上総は軽く頷いて、歓迎の意を表した。たぶん美里にそうはできないだろうと思いつつ。

替わりに天羽は立ったまま、さっきまで自分の座っていたストーブ前を指差した。

「ここ座れや」

「どうもありがと」

帽子を脱ぎ、アノラックはそのまま、雪だけ払い、轟さんはいつものように前歯をちらつかせつつ軽い挨拶を交わした。天羽もにんまり笑いを浮かべつつ、

「ま、あれだ。今日はトドさんのだーいぶ遅れたお誕生プレゼントっつうことで、受け取ってくれやな」

轟さんはいぶかしそうに首を傾げた。

「私の誕生日、知ってるよねえ、半年近く前だって」

「だから、なんもやれなかったから、今日は特別なのだわな」

「よっくわからないけど、サンキュ、ありがたく」

何か渡したのだろうか。上総はふたりの手元をそっと覗き見た。特段プレゼントらしきものをやり取りした形跡はない。天羽も轟さんも、座り込んだままの上総を見下ろし、また納得した風にくくくした。

「じゃあな、電話で言った通り、俺は一階でテレビ観ながら寝てる。気の赴くまま、語るがよい」

「ほんとに、いいのかな」

念を押すような口ぶりで、轟さんはここだけ真面目に問い返した。

「俺が下手に説明するよか、お前の方がいいという、評議委員長の判断ってことよ、あとは頼んだ、旦那！」

——女子にいくらなんでも旦那ってのは、どういうもんだらうな。

ふたりのやりとりが終り、天羽はダンボールの裏へとするする入り込み、見えない階段を派手な音をさせつつ降りていった。あまりの軋み具合に、この家の古さを強く感じてしまった。

「まじであれ、鶯鳴りよね。階段、響いてる」

轟さんは女子らしく膝をかかえ、ストーブの小窓まん前に座り込んだ。アノラックは脱がなかった。

「まああれよ、天羽くんのお許しも出たし、私もきっちりと話す必要感じてたし。立村くんのご指名は嬉しかったよ。ありがとう」

「別にそんな、指名ってわけじゃあ」

「そういうことにしといてよ。どうせ、あと一ヶ月で高校なんだから」

言葉の終りに、かすかな寂しさをよぎらせ、轟さんはいつもの飛び出た眼を軽くこすり呟いた。
「天羽くんのプレゼント、私が一番ほしいものだったんだ。嬉しいよね」
上総をちらっと見やると、轟さんはポケットから缶コーヒーを二本、そっと取り出し畳の上に置いた。

「寒いから、あったかいもの飲もう」

手袋を脱ぎ、指先で缶に触れた。焼けるように熱い。

「ありがとう」

上総も膝をかかえ、轟さんと同じように座りなおした。

「轟さんの誕生日っていつだったっけ」

「立村くんと同じくらいよ。九月二十日」

「一週間しか変わらないのか」

「そういうことよ」

轟さんはプルトップをはずすと、口をしめらせながら大きく息を吐いた。

「卒業間際まで、知らないままだったんだよね。今日会わなければね」

轟さんと話をしておく必要は、実をいうと去年の終りくらいから感じていた。

すでに美里との間がぎくしゃくしていたというだけではなく、女子同士のいざこざやこれから先、英語科に進むに当たってどういう人たちが多いのかをチェックしておきたいと思っていたからだった。特に轟さんはB組。成績優秀者が暗黙の了解で集められたクラスの住人だ。豊富な情報量と共に、これから先上総がどれだけうまく、クラスですり抜けていくかの作戦として、得ておきたかった。

もっともそんな姑息な真似をする気は、すでに失せていた。何をしてももう無駄ならば、開き直るしかない。むしろそれよりも、天羽が抱え込み、三年評議委員たちがしでかした大事件の顛末を、女子の立場から聞かせてほしかった。それも、美里の立場ではなく、轟さんの視線からどう映っていたのかを教えてほしかった。どうしてなのかわからないが。

「天羽からある程度は聞いたんだけどさ、俺がいない間に起こったことについてなんだけど」

そこまで話すと、轟さんはすぐにこくりと頷き、缶を膝の上に載せた。

「美里からは聞いてない？」

「今日は殆どしゃべってないし、しばらく顔を合わせる気もないんだ」

轟さんはまじまじと上総の顔を眺め、次に、

「じゃあ、杉本さんとは？」

問い掛けた。

「E組で今日は一日中顔合わせた」

「そうなんだ、立村くん、自分の本能に素直だね」

「なんだかそれ、誤解を招く表現だと思うよ」

「ごめんごめん。でもいいや。じゃあ、天羽くんサイドの情報しか得てないってことになるよね

。近江さん命の天羽くんだから、きっと小春ちゃんが悪者になってるだろうね」

「なんとも言えないけどさ」

驚いた。轟さんはすでに、天羽の心理をかなり深く読み取っている。上総が三年かかって得たものを、あっさりと理解している。

「私はやっぱりこの不細工な顔してても、女子だからね。女子側の情報がどうしても多いのよ。天羽くんにも言われたのよ。女子側の立場から観てどうなのかを立村くんに説明してやってほしいってのと、あとはね」

言葉をとぎらせ、轟さんは首を振った。

「とにかく、一気に話すから、聞いててよね。ちょっと脱線するかもしれないけどね」

上総は轟さんの、ちょっとでっばった目元と、喋るたびにすうすう言う口元のほころびをじっと見つめた。指先の缶コーヒーが少しずつぬるまっていくのが感じられた。

「ゆいちゃんの話は難波くんがはっちゃきになって守っているから心配してないんだ。だからその件については一切触れないほうがいいと思う。それよりも問題は小春ちゃんと杉本さんのことなのよ」

「杉本が？」

思わず尋ねてしまった。轟さんは「なんだか立村くんらしいね」と再び微笑んだ。

「少し話を整理するけど、小春ちゃんがなぜ、近江さんを追い掛け回したかってことについて説明するね。小春ちゃんはゆいちゃんと駅で待ち合わせして、スーパーの屋上から飛び降りる約束をしていたらしいんだけど、行かなかったのよ」

「いかなかったって、つまり、誰かに霧島さんの情報を伝えに行ったとか？」

「そのあたりはわからないな。小春ちゃんしかそれはわからない」

もっともだ。てっきり担任に告げ口しに行ったとか、そういうところを想像していたのだが。

「その時にね、小春ちゃんは杉本さんに会うためE組に行ったらしいの。杉本さんが元気なかったらしくて、しばらく一緒にいたらしいという話は、他の子から聞いている」

「誰から？」

情報源はあいまいであってはならない。すぐに答えが返ってきた。早い。

「片岡くんよ。片岡くんも別の意味で小春ちゃんから目を離していないから」

「英語二番の、あいつか」

「やっぱり立村くん、覚えているところが違うよね」

ふたたび轟さんは声を立てて笑い、すぐに押さえた。

「杉本さんにしばらくべったりくっついていた後、その足ですぐ生徒会室に向かったらしいというところまでは聞いているのよ。もちろんそれも片岡くんがついていったから。でもその後、なぜか小春ちゃんは近江さんと一緒に出てきて、女子同士さっさとどこかに行っちゃったらしいんだけどね。その後で喜劇か悲劇かわからないけど、ああいうことになっちゃったらしい、今のところわかっているのはその辺よ」

「全く見当つかないな」

もちろん西月さんの行動範疇については全く理解できない。ただ、なぜ轟さんは杉本梨南の存在をいきなりクローズアップしようとしたのだろう。上総は素早く、脱走直前の杉本の様子を思い返した。そういえばここ数日、杉本の壮絶な罵倒を上総は受けていないような気がする。それどころか素直にくっついてきてくれたりもしている。今日なんてしっかりふたり向かい合って勉強したりもしていたじゃないか。

——杉本は、確かに、何か変わってきた。

「杉本に何かがあったのか？」

「私もわからないんだ。こればかりは杉本さんに聞いてみないとなんとも言えないね。でも私は杉本さんに嫌われてるようだから近づけないしね」

轟さんは首をひねりながらも話を先に進めた。

「天羽くんが話していたけど、小春ちゃんが傘を振り回して近江さんを刺そうとしていたのは本当らしいのよ。それで慌てて天羽くんが身体を張って、土下座して、近江さんを守ろうとしてなんとか収まったらしいの。もっともその場を見ているのは近江さんと天羽くん、それと小春ちゃんだけ。後から難波くんが駆け寄ってきたらしいけれどもその段階では小春ちゃん、近江さんから傘を取り上げられていたから」

「近江さんが傘を取り上げたって、やられそうになってた相手がか！」

またもやびっくりだ。上総は缶を思わずつぶしそうになり、慌てて畳に置いた。

轟さんもこのあたり、ゆっくりと二回、頷いた。

「そうなのよ。近江さんの態度はかなり落ち着いていたらしいのよね。天羽くんは近江さん命野郎だからそんなの目に入らなかったらしいけれど、私が観る限り、挑発したのは近江さんの方じゃないかなって気がするんだよね。それでかっとなった小春ちゃんが追いかけて、それで近江さんが確実に安全と思われる場所に飛び込んで、って感じみたい。天羽くんの『姫を守る騎士』みたいなヒロイックワールドを壊すのは悪いけど、小春ちゃん、近江さんの頭脳に負けただけだと思うのよね」

「でもそれで、退学なのか？」

わけがわからない。こういう数字が並びそうな論理的展開が上総にはついていけない。

「そうね。まるで私、近江さんを敵にまわしていきそうな話ぶりになっちゃうんだけどね。つまり、近江さんは小春ちゃんを怒らせてしまった後、慌てて逃げて天羽くんに盾となってもらい、さっさと落ち着かせようと思ったんじゃないの。言いたいことそれなりに近江さんもあっただろうし、小春ちゃんも口が利けないから行動で怒りをしめすしかないし。ただ、まさか傘を振り回すような行動を取るとはおもってなかっただろうな。そこらへんは近江さんの読み違いミス」

「読み違いミスですまないと思うよ。これってさ。だってその結果、西月さんは退学に」

「退学って決まってないよ。ただ、これから先それに近い形でおさまると思うけどね」

轟さんの言葉は混沌ワールドをどんどん深彫りしていった。上総には全くついていけない。

「天羽くんから聞いたと思うけど、A組の片岡くん、彼のうちは『迷路道』という名前の有名な婦人服チェーンの会社なのよ。それがどうってわけではないけど、かなりのお金持ちであること

は確かよね。それとこれは前から知ってたことだけど、小春ちゃんは今年の夏、友だち連れて片岡くんの実家に一ヶ月泊りがけで出かけたらしいのよ。せいぜい一週間じゃない？　それが一ヶ月まるまるよ。夏休み中、それも、最初の二週間は友だちと一緒にだけど、残りは片岡くんを含めて他の子たちが帰されて、あとずっと小春ちゃんと片岡くんのお母さんだけって環境のままだったの。これってすごいよね。つまり、小春ちゃんは片岡くんのお母さんに気に入られたかそれとも何か考えさせられることがあって、ってことかもしれないしね。今だに片岡くんと付き合いが続いているってことは、たぶん気に入られた可能性の方が高いと思うんだ」

それは知らなかった。美里もそんなことをちっとも話してくれなかった。

「どういう事情かわからないけれど、事件が起こってからすぐ、片岡くんの家から申し出があって、小春ちゃんを一時的に隔離させようという話になったわけなの。あと一ヶ月ちょっとで卒業だし、もちろんE組で過ごさせるという方法もないわけじゃない。けど、天羽くんの言う通り小春ちゃんの行動には殺意が否定できないということもあって、大事にしないようにこっそりと、処理をしようってことでね」

「でももし殺意があったら、警察沙汰になってるよな」

「そこがコネA組の強みよ。幸いというかなんというか、その場にいたのは当事者プラス天羽くんだけ。奇跡的にも廊下には誰もいなかったの。そして呼び出された狩野先生はA組担任かつ、近江さんの義理のお兄さん。天羽くんから聞いたところによると、近江さんのことを『紡ちゃん』ってものすごく可愛がっているようなのよ。学校では苗字だけどね」

これも知らなかった。でもそう考えていくと、昨日の出来事は自然と繋がっていく。それだけ可愛くてならない義理の妹が、クラスの女子に襲われてしまったとしたら。教師としてか、肉親としてか。どちらの立場を取るだろう。もちろん公平でなくてはならないのは、当然だけど。

「狩野先生もね、もともと小春ちゃんのことを重たく感じていたみたいでね。もちろん教師としてはえこひいきしてなかったと思う。でも、やっぱりね。いろいろあったみたい。今のところは熱出して入院中という対応をしているけど、たぶん、四月の段階で転校になると思うな」

——そんな、まさか、そんなことするわけじゃないか。

いつも公平な対応をするはずの狩野先生が、そんな身勝手な判断を下すわけがない。

絶対に信じたくなかった。缶コーヒーの端を噛んだ。

「轟さん、ひとつ聞いていいか」

「なに」

「女子の間では西月さんの行動理由ってどういうことだと思われてるのかな」

行動理由、なんて言葉は正しくないかもしれないけれども、続けた。そうだった、「動機」って言葉を使えばよかった。

「やはり、天羽の態度に対する恨み、ってことかな」

「そうだね、ただ本当のことは誰にも伝わってないはずよ。近江さんか天羽くんが口を割っていない限りね。今のところ噂としては、『小春ちゃんがとびかかって近江さんを殴りつけ、打ち所

悪くて近江さんが倒れたままになってしまった』ってことになっているはず。天羽くんをめぐる三角関係のもつれなんて、なんかワイドショーみたいな展開だとみんな思っているわね。本当はたぶん、違うのに」

「違うって、どこがどうなわけ」

肩をすくめて、轟さんは揺れる炎をじっと見つめたままつぶやいた。

「たぶん小春ちゃんは、今でも天羽くんのこと好きじゃないかな。でも、天羽くんに好かれるために一生懸命片岡くんと付き合ってるはずなんだよね。そんな小春ちゃんが、今更彼女の近江さんに恨みを晴らそうとするっていうのが、ちょっと理解できないんだ。小春ちゃんの性格だったら、最後の最後まであきらめないで、片岡くんを好きな振りをしつつ天羽くんを見つめようとするに違いないもんね」

「嘘だろ、それ」

「知らなかったの、立村くん。小春ちゃんって子はね、天羽くんに嫌われないようにするためならば、何でもするのよ。本当はそんなことすればするほど、天羽くんに嫌われてしまうってこと、最後まで気付かなかったけどね。天羽くんもきっと、そういうことしてた自分が許せないんだろうなあ。なんか、そんな気がするんだ」

「天羽が？」

こっくり頷く轟さんは、炎から目をそらし、上総の真後ろに積み重なっている大量のダンボール箱を見上げた。軽く咳を二回して、

「私、天羽くんがまだばりばりの宗教活動家だった頃から知ってるんだけどね。小春ちゃんと同じ顔してたんだよね。あの頃の天羽くんってね」

「ばりばりの宗教活動家って何時ぐらいの時」

聞いていいのだろうかかわからないが、好奇心には勝てなかった。轟さんはあっさり答えた。

「小学校六年の頃かな。ここがまだ、現役の合宿所だった頃。直接しゃべったことはなかったけどね。青大附属に入学して、向こうから声かけられた時はそりゃあ、びっくりしたよ。よく覚えてたなあってね。私の方はもちろん覚えてたし、会った時にはきちんと話をつけようって決めてたからね。まさかこんな面白い付き合いになるとは思ってなかったけどね」

くくっ、と轟さんは低く笑った。

冷え切っているだだっぴろい部屋でストーブを焚くと、半径一メートル近くだけトースト状に熱くなり、そこから一步抜けると一気に冷え切ってしまう。だから離れられなかった。上総は身動きせず、時折肩の位置をずらしながら轟さんの語りを聞いていた。

——天羽はここで、やったのかな。

ダンボールの山を眺めているうちに、修学旅行二日目の会話が蘇ってくる。

たしか、天羽は去年の夏に初体験をすませたとか言ってなかったか？

しかも、相手は上総の母と同じ年齢の女性だとも聞いた。

合宿所でなんか変な感じになってきた、とも。

——でも、落ち着かなかっただろうな。

現段階で天羽の告白を知っているのは上総だけだと思っていた。でも、ここまで情報を仕入れている轟さんが気付いていないとは思えなかった。いや、女子だしさすがに天羽だって気を遣っているような気はするけれども。ただ「ばりばりの現役宗教家」だった頃の天羽を知っているということは、ただ表っ面をなぞるだけの付き合いではないような気がする。十三歳、十四歳、そして十五歳。上総や評議委員連中が知らない中で、ふたりはどういう絆を形作っていったのだろう。興味があった。

「私のうち、はっきり言っているいろいろあって貧乏なのよね。青大附属に通えるような財力なんてないのよ。ただ私なりになんとかしなくちゃってことで勉強して、なんとか合格させてもらい、今は奨学金をもらってなんとかここにいるってわけ」

轟さんは他人事のようにさらりと呟いた。

「身内の恥だからあまり話したくないんだけど、私が小学六年の時、近所の親切ぶったおばさんにひっぱられて、この教団集會に引っ張ってこられたの。一週間くらい家に通われて恩を売られて、行かざるをえなかったみたいだけど、信用するうちの親も親よね。よく考えたらわかるじゃないってこと、全然考えようとしらないのよ。私も子どもだし、しかたなくそこに行ってきて、大人と子ども分断された中で座談會に参加し、そこで大喧嘩して飛び出してきたってわけ。いい意味で私、子どもの特権を利用したのよ。大人だったらいろいろ義理とか面倒なことがあるけど、子どもだからってことで許してもらえたってわけ」

「子どもの、特権？」

上総も繰り返した。

「そうよ。さすがに今じゃ使えない技だけど。十二歳の、育ちの悪い子どもだから何言ったって許されるってね。何しゃべったか覚えてないけど、とにかく私はこんな教団にお世話になるくらいだったら家を出て行く覚悟してたもんね。運よくうちの親も、私のわがままで顔にド口塗られる形になってしまい、それっきりその教団とは縁がなくなっちゃったってわけよ」

子どもの特権なんて、そんな風に思えるものなのだろうか。

「幼いって、いいことなんてないと思ってたけどな」

「利用できるものは利用するのが私のやり方よ。それからしばらく、うちの親には嫌味いっぱい言われたけど、そんなの知ったことじゃないよね。そのうち私の能力を買ってくれる人が出てきて、大学までの費用を出してくれるって話になって、現在はその人のおかげで青大附属に通っている状況なんだ」

「そうなんだ」

短く答えたけれど、上総にはだいたい、轟さんのポジションが見えてきた。

評議四人女子の中でも、轟さんはいつも背を丸めるようにして、様子を伺いつつ美里たちと話をしていたような気がする。もともと関心のなかった上総としては、それ以上のことを考えたりはしなかった。でも、美里や霧島さん、西月さんたちがおしゃれの話なんぞしている間、轟さんはただ様子伺いしながら頷くだけだった。

「話、あわせるの大変でなかったか？」

「大変だったよ、そりゃあね。美里もそうだけどゆいちゃんも小春ちゃんもお嬢さまでしょ？ごみの中あさって粗大ゴミを拾ってそれを古道具屋に売ってお金にするなんて経験、きつとしたことないと思うんだよね。いつも学校の帰り、評議のみんなってお茶飲みに行くでしょ。あんな無駄遣い、どうしてできるんだろうって思ってたね」

「でも轟さんも合わせてたんじゃ？」

「あれはね、こっそり天羽くんがおごってくれてたの。たまに難波くんもね」

指を折って、こくこく轟さんが頷いた。

「私があんまりにも貧乏だから、気を遣ってくれたんだね。まあありがたく受け取らないと、評議委員会に参加できなかった現実もあるし、ちょっと惨めでは、あったけど」

上総も同じく指を折ってみた。一年から評議委員会ではいつも、外の喫茶店でお茶やジュースを飲みながら語り合うのが通常だった。それが普通だと思っていたからそれほど他の人たちの懐事情を考えなかった。上総ももちろん自分が裕福だという自覚はないけれど、ジュース一本買うのも大変な状況に追い込まれたことはない。

目に見えるところで、全く経済環境の異なる人もいる。考えたことがない自分。恥だ。

「俺がもっと気付いてればよかったんだ」

「ううん、違うよ、立村くん、悪いけどそこはちょっと」

びしっと、空気を締めるように、轟さんは言い放った。

「立村くん、さっき私も言ったけど、もっと『子どもの特権』を使って楽した方がいいと思うよ。もしかして立村くん、私が話したことに対してすべて責任を感じているんじゃないかな。そういう立村くんということは私も理解しているつもりだけど、責任を無理に感じる必要は一切ないよ。私はお金がないけど、天羽くんたちにおごってもらっていたから問題なかった。それだけのことじゃない」

「でもさ、それって居心地悪かったんじゃないかなって思うけど」

「もちろん、お財布の中は厳しいよ。でもそれは私の問題。本当にまずいと思えば、私が理由つけて家に帰ればいいことなんだしね。天羽くんが今までなんでもないので振舞ってこれたのも

、そこだと思うんだよ」

いきなり天羽の話に戻り、上総は混乱した。

「天羽が、なんでもない風に、って？」

「そうだそうだ。天羽くんとのなら初め話してたんだよ。話がずれてごめんね」

少し「子どもの特権」にひっかかりを感じたけれども、ここは轟さんの言葉に従ったほうがよさそう。上総は背をストーブから少し離れた。衿元だけが焦げそうなほど熱い。

「座談会の後、天羽くんらしき子がいたのは覚えている。顔を覚えるのは早いからね」

轟さんは口調をそのまま変えずに、ゆっくりと語りつづけた。

「その後、最初の評議委員会で顔合わせて、少ししゃべっているうちに、いろいろと向こうの事情もわかってきたわけ。私は最初からこの教団とはかかわりたくないと思ってたけど、天羽くんには責任があるわけじゃあないからね。天羽くん自身も、小学五年くらいからこの状況に疑問を持ってきたらしくて、いろいろと情報を集めたい気持ちはあったらしい。それで私も協力して、陰でこっそりと」

「こっそりとかよ」

「そうよ。天羽くんはきっと青大附属で生まれ変わりたいかっただと思う。本人は意識しているかどうかわからないけど。もし、全く疑問感じないでいたとしたら、あの教団のことだからあちらこちらに布教して回ってたはずよ。信者を増やすために友だちをこさえて、その上で引っ張り出す、というのが決まりみたいな世界だから。それをしないできたでしょ。天羽くんは。きっとそうだったんだと思う」

——青大附属で生まれ変わりたい。

なにか、心にみしみしと、ひび割れが走った。

「だからなのかな。天羽くんが小春ちゃんのことあんなに嫌ったのはね」

また話が前に戻ったような気がした。

「正しいことを押し付けようとして好かれようとする小春ちゃんと、小学校時代、布教活動を自然にしていた天羽くん自身とが、そっくりに見えて耐えられなかったんだよ」

芯がつんと冷えた。割れた。

雷に打たれて真っ二つになった、大木のように。

「天羽くんは生まれ変わろうとして、毎日家の中でけんかばかりしてたらしいんだ。私が持ってくる本とか情報とかそういうのを読んで、絶対これはおかしいと思ってね。でもやっぱり私たちは『子ども』だからどうしても逆らえないってわけ。天羽くんは毎日、二重生活を送りながらそのチャンスをうかがっていたんだけどね。そのうちに去年の夏あたり、なんとか抜け出せそうなことが起こって、家族一同脱退」

「家族でか」

「そう。精神的ショックもあって、広告塔と言われていた書道家のおじいさん入院してしまい

、天羽くん自身もいろいろあったらしいよ。詳しいことは聞いてないけど。でも天羽くんは偉いよね。全く学校でそんなところを見せないで、ルパンだホームズだって騒いでたわけなんだもん。天羽くんが教団抜け出して一番嬉しかったのは、評議関連の合宿とか行事にばんばん参加できるところだって言ってたよ。天羽くんにとってようやく自由になれた時に、小春ちゃんの行動がば一んと鼻についてしまったというのかな」

「さっきも言ってたよな。西月さんの行動がって」

わかるようでわからない。上総はさえぎり尋ねた。

「小春ちゃんは天羽くんが好きになってほしいって一生懸命アピールしてたでしょ。男子にはわからないかもしれないけど、女子としては丸見えよ。これって天羽くんからすると、自分の信じている宗教団体に入ってくださいってお願いしていると同じに見えてしまったってわけよ。天羽くん、そこから逃げ出したいくて青大附属に駆け込んできたのに、待ち構えていたのは過去の自分と同じことしている女子。そんな子、好きになれる？」

「……なれないな」

「でしょ」

会話はそれだけで通じた。

「みんな、いろいろとあるんだな」

「そうだね、あるよ。あるけどね」

轟さんがふと、身を上総にまっすぐ向けた。あわてて上総も正面を向いた。

「そんなこと、今の立村くんは考える必要、一切ない」

反論するにも、どう答えたらいいかわからない勢いで、ぱしっと跳ねられた。

「立村くんはきっと、私たち三年評議がばらばらになって混乱しているのを、自分の責任だと考えていると思うんだ。それ、わからなくもないよ。前期評議委員長だったわけだし、評議委員会の権力を生徒会に返すための『大政奉還』を計画したのも立村くん。それがきっかけでこんな大騒動になってしまったのは確かにあると思うんだ。でもね、これだけは間違っただけじゃないと思うんだ」

上総の目をじっと見据えた。轟さんが口を開くたびに、かすかに息を吸ったり吐いたりするしゅうしゅうという響きが聞こえる。

「ゆいちゃん和小春ちゃんの問題、これは大人の問題だから、殿池先生や狩野先生、その他の関係者に全部預けてしまえばいい。預けなくちゃだめだよ。立村くんが自分の責任だと思って首をつっこんでも、はっきり言って、何にもならない」

「俺が心配しても、か？」

少しきつとなるが、こらえた。轟さんはまっすぐ目を見つめたまま頷いた。

「私が心配しても、天羽くんが心配しても同じ。それと、天羽くんの宗教に関する問題だって、自分自身で片付けることでしょう。立村くんが心配しても、どうしようもないの」

「じゃあ、俺はただ黙って、評議委員会が崩壊していくのを黙って見ているだけなのか？」

「だって立村くんは、ゆいちゃんや小春ちゃんや天羽くんのことを本当に心配している？ これは責めて言ってるんじゃない。一番心配したいことって、たぶんそれ以外のことじゃないかっ

て私、思うんだけどな」

——一番心配したいこと？

言われている意味がつかめない。上総はストーブに片手をかざした。熱くて指先からじんじんしびれてくる。

「たぶん、これで最後かもしれないから言うけど、立村くんは手を広げすぎ」

ほんの少しだけ轟さんは女子っぽい声に和らげた。

「真面目だから、なんでも自分の責任に持って行ってしまおうし、そういうところが立村くんのよさだと私は思っているよ。美里がいつも叫んでいるように、もっと頼れとかそんなことは言いたくない。ただ、たいして関心のない人たちの事件まで無理に背負い込むのは時間がもったいないよ」

喉仏のあたりがひくひくする。「どうして？」と言返したいのに、できないのは冷えて唇が割れているからだろうか。

「俺が、全く天羽たちのこと心配してないってことか」

「いっぱい心配しすぎて、分散してるってことよ。天羽くんのこと天羽くんが、ゆいちゃんと小春ちゃんのこと関係者が、みんな自分のやりたいように片付けてくれているわよ。それよりも、立村くんにはしかできないことがあるはずなんだ。私が見るところによるとね」

「なんだよそれ」

またいじけて膝を抱えたくなる。眼を逸らした。人差し指を思わずなめた。

「事件に全くかかわっていない立村くんだからこそ、天羽くんを助けることができると思う。これ、ほんとだよ」

上総はそのまま指を加えて轟さんの出っ歯をにらんだ。

「なんだよそれ、って。だってさっき、天羽のことを心配していないんだったら手を出すなって言ってくせに」

「天羽くんの個人的事情にくちばしをはさむべきではないけど、『評議委員長』としての天羽くんを助けることは、立村くんにはできないんじゃないかな」

轟さんはそっと上総の隣に寄り添った。

「今の評議委員会がどういう状況か、理解しているのはたぶん立村くんだけだよ。さっきちらっと言ったけど、今、生徒会とのやりとりで天羽くんが疲れきっているってのもあるしね」

「でもあいつ、ずいぶん仲良くやってるじゃないか」

上総が評議委員長だったころよりも、ずっと、滑らかにやりとりしているはずだ。

すでに書記以外の仕事をしていない上総も舌を巻いた。

「まあ、そのあたりはぬかりないよ。でもね、あの佐賀さんを守る女子の生徒会役員たち手ごわくてね。何かがあればすぐ、評議委員会をただのクラス内限定の委員会に押さえ込もうとしているんだよね。佐賀さんがどう考えているかは私も読めないけれども、たぶん来年以降はそうなるんじゃないの？」

「なったらなったら、あとは新井林が片をつけることだろ。次期評議委員長はすでに決まっているようなものだし」

「だけど、どうかな。プライド、ずたずたになっていていじけてるみたいよ。新井林くんもね」
わからなくもないが、見た感じあまりそういう気はしなかった。最近新井林も完璧に天羽オンリーにしか話をしたがらないからなおさらだろう。もう上総は評議委員会から足を洗ったようなもの。なぜ轟さんは今になって上総を引っ張り出そうとするのだろう。

その理由の方が、天羽の事情よりも詳しく知りたいことだった。

「来年のことは今の二年に全部お任せすればそれでいいと思う。ただ、問題は、このまま例の小春ちゃんの事件がばれてしまったりすると、天羽くんが酷い振りかたをしたせいだってことで、一気に三年の株が下がってしまうんだ。立村くんの言う通り、卒業したらどうだっていいよ。でも、天羽くんがもしここで評議委員長として恥をかいたとしたら、もう評議委員会を生徒会と同等の扱いしてもらうことはできなくなるし、もうひとつ言うなら」

言葉をとぎらせた。轟さんも息を大きく吐いている。

「もうひとつって」

「杉本さんのこと」

あっけないくらいさらっと呟いた。

「これはまだ、杉本さん本人から聞き出さないとわからないけれども、小春ちゃんが近江さんに襲い掛かった理由って、杉本さんと生徒会がらみのことじゃないかなって思うんだよね。私の勘だけど。決して、天羽くんと近江さんを含めた三角関係のもつれなんかじゃあ、絶対ないと思う。小春ちゃんは、天羽くんこれ以上嫌われないですむんだったらどんなことでもする子だって言ったでしょう。近江さんに酷いことをしたら、永遠に天羽くん許してもらえないことを気付かないほど、ばかじゃないと思うんだ」

——西月さんの動機が、生徒会と杉本にあったとしたら。

上総の中でぐるぐると、単語カードのようなものが回っていく。

何かが浮かんでくる。轟さんも頷いている。

「実際もう、天羽くんは小春ちゃんのこと、さっさと死んでしまえばいいとまで思っているはず。宗教活動していたころの自分と同じ顔している小春ちゃんが消えてくれて、正直ほっとしてるんじゃないの。それが正しいかどうかを説教するのは、今の立村くんには関係ないよ。天羽くんには天羽くんなりの理由があるし、それはこの三年間天羽くんの手伝いしてきた私がよくわかっているつもり。そのことは口出さないでほしいんだ」

ゆっくり、轟さんは言葉を選ぶ。

「天羽くん嫌われるという最悪のパターンを覚悟の上で、どうして小春ちゃんは傘を振り回して近江さんを追いかけまわしたのか、その原因ね」

「もし、天羽とのごたごたしたら、評議委員会はどうなる？」

「評議委員長としての面子はずたずたね」

「俺と一緒に」

否定せずに轟さんは頷いた。

「後輩たちもあきれ果てて近づかなくなって、完全にただの学級まとめ役の集まりになってしまっただけのことか」

「そういうことね。いいイメージを後輩たちには持ってもらえないだろうね」

口にしていくうちに気付いたことがある。

——俺があんなみっともない落っこち方をしたのが悪かったのか？

「生徒会としては嬉しいだろうと思うよ。ずっと天羽くんの押しでもっていろいろと不利かまされてたんだものね。ざまあみろって思っているはず。でも、もしも、もしもよ」

ぎろり、でっぴった眼と口元がゆっくり動いていった。

「生徒会が杉本さんに何かを言って傷つけ、それを小春ちゃんが見つけて、それがきっかけだったとしたら？」

「でも近江さんとは関係ないだろう」

否定していても、頭の中の単語カードはまだばらばらと広がっていく。

杉本の、いつもらしくないおとなしい表情が眼に浮かぶ。

「近江さんは佐賀さんタイプの女子、好きだからね。あの人、頭がよくて可愛い女子が大好きなのよ。美里のことをお気に入りしているのもそのせいじゃないの」

「じゃあまさか、佐賀さんと近江さんが、杉本のことを」

言いかけてぞっとした。そこまで今の二年生生徒会役員たちが腐ったことをするとは思えない。すでに結果の出た杉本梨南と佐賀はるみとのバトル。今更なぜ、杉本をまた罵倒する必要があるだろうか。誰もがみな、佐賀はるみ生徒会長を認め、応援している中で、今更なぜ、E組島流しに遭った杉本梨南を叩く必要があるのだろうか。

「その可能性、ないとは言えないよ。立村くん」

轟さんはあっさりとした。

「なんで、そんなことする必要あるんだろう」

「だって」

炎に手をかざし、小窓を指差した。

「あさって、青大附属高校の外部入試。水鳥の副会長さん、ここを受けるんだよね」

「関崎のことか」

今の話題とは全く関係のない名前だと思っていた。

「もし青大附属に合格して通うようになったら、杉本さんがどういう行動に出るか、立村くんなら想像つくよね」

無言を通すしかなかった。どうして轟さんはそこまで気が付いているのだろうか。

「それに気づいている人たちは立村くんだけじゃないんだよ」

関崎が青大附属高校に入学したら。

杉本は決して関崎に受け入れられないという事実をいやおうなしに知るはめになるだろう。関

崎と何度も語る機会を得て、おぼろげながら感じた結論だった。

——あの方にしてあげるように、させていただいているだけです。

何度も杉本が口にした言葉を思い出した。

——無理だ。

今の杉本が関崎を思い切ることなど、できるわけがない。

目の前のストーブは、まだ石油をぐんぐん食って燃え盛っている。

ほのかに赤く畳がてかっている。

上総は視線を落とした。

一週間くらいは様子を見ようと思っていた。どうせE組にいるしかないのだし、高校への推薦にも影響がないとわかった以上、無理にD組へ戻る必要もない。菱本先生が時折顔を出し、「もし、落ち着いたら、みんな心配してるからな、一時間くらいでも教室に来たらどうだ」と猫なで声で呼びかけることもある。それを聞いてからさらに甘えてしまったという部分もな

くはない。

——でも、逃げているわけではない。

言い訳かもしれない。でも轟さんから話を聞かされて、上総にはE組にいる目的がひとつ、はっきりとできたのも事実だった。

——杉本梨南から、西月さんにまつわる出来事の子細を聞き出すこと。

——生徒会がらみの出来事があるのか、それともまた佐賀はるみとのやりあいなのか。

静かに教室でノートを開く杉本を、上総は正面の席から注意深く眺めた。

今まで見てきた杉本の表情とはどことなく陰りを感じたのは、錯覚だろうか。

すでに青大附属高校の入試も終り、あとは明日の合格発表を待つだけだった。

関崎とは昨年以降連絡を特に取り合っていない。が、律儀にも年賀状は届いた。

——受験勉強中だったのに、真面目な奴だな。

昨年聞いた段階では、第一志望が青大附属高校、第二志望が公立の青潟東高校。どれも青潟ではトップクラスの高校を目指しているはずだった。進路指導の教師からは、公立高校を一ランク下げたほうがいいとのアドバイスを受けているらしいがその辺はわからない。上総もこまめに新聞の公立高校入試情報を読むようにしているが、地域のトップ公立進学高校・青潟東の倍率はかなり高めだと感じている。

——なにせ、本条先輩ですらも、大変だってくらいだからな。

どちらにしても、青大附属高校を受験したのは確かだろう。

轟さんの言う通り、杉本が心揺らがないわけがない。

そのあたりもしっかりと様子見していたのだが、今のところ取り立てて何かの動きを見出すことはできなかった。上総の方からも余計なことを口走るのは避けたかったし、とりあえずは杉本にちょっかいを出すようにノートのひっぱり合いをしては、

「立村先輩、だんだん幼児化が進んでこられたのではないですか」

冷たくあしらわれるのに徹していた。

「りっちゃん、どうも」

昼休み、給食を食べ終え、ふたりぶん給食配膳室に食器を返したところで、懐かしい声を聞いた。もちろん二週間も経っていないのに「懐かしい」なんて変な言い方だけど、上総にははるか昔に感じられた。D組のにおいだった。南雲がいつものさらりとした笑顔でもって、上総に手

を振っていた。

「ああ、お久しぶり」

南雲は近づいてきて、時計を鼻先に突きつけるようなしぐさをした。

「あのさあ、とりあえず資料ってか、授業関係のプリント、もってってくれって菱本さんに言われてるんだよね。これからE組に行ってい？」

こちらから取りにいくと言えない自分が少々情けなくもあったが、

「わかった。じゃあ、先に戻ってる」

「杉本さん、いるのかな？」

探りをかけてくるということは、南雲も上総と杉本との繋がりに興味があるということだろう。隠すこともない。

「いると思うけど、別にいいよ」

何がいいんだか。言った後、背を向けた後、自嘲した。

——杉本が俺のことを対して考えてないのは見え見えだって。

E組を訪れるのは主に、三年男子評議だった連中くらいだった。

幸いというかなんというか、今のところ羽飛も美里も顔を出すことはなかった。

こうやって南雲が声をかけてくる以外、みなじっと様子を伺っているというのがありありと見えた。菱本先生の計算かもしれない。三年間上総の性格を読んできて、その上でどうにかしておとなしくさせようとする計画なのかもしれない。そんなのに乗るか、とも思う。

E組の教室に戻り、上総は杉本と向かいあった席についた。杉本の姿はなかった。さっきまで置いてあった給食用のナフキンもしまわれていた。駒方先生も、狩野先生も今はいなかった。

——どこにいったんだろう。

上総は立ち上がり窓辺に向かった。ひとりでも淋しいと感じたことはほとんどない。ただ杉本が側にいるのといないのとでは、教室の空気温度が全然違う、そう思っただけだった。

「おまたせいたしました！ あれ、りっちゃんひとり。俺のために時間を作ってくれたのかなあ」

「まさか」

軽口を叩く南雲に、上総は窓辺にもたれたまま返事をした。自分から寄っていくことはしなかった。向こうから近づいてくるのを待った。

「ほい、これ」

「ありがとう」

二つ折りにしたプリントだいたい十五枚くらいをまとめて手渡された。

「今、クラスの様子、どうなんだろう」

「やっぱし、気になる？」

「それなりには」

とはいえ、聞いてしまうとまた引きずり込まれるかもしれない。南雲に限ってはそんなことないと思いたいのが用心に越したことはない。南雲はだいぶ伸びた髪の毛を振った。

「もう、三年生が委員会で顔出す必要ってほとんどないだろ。だからみな、好き放題やってるよ。あ、そうそう、うちのクラスの他高校受験組はみんな桜が咲いたみたい。めでたいじゃあないですか」

桜が咲いた、ということは。

「奈良岡さんも合格したんだ、よかったな」

「どうもどうも。当然水口もな」

ふたりが青潟市外の医学部専門受験用の私立高校を受験した話は聞いていた。水口も奈良岡も、ふたりとも脳天気に見えるせいかあせっている感じはなかったのだけども、合格したというのだったらそれなりにいろいろ大変だったのだろう。意識の中では「元彼氏」の南雲も少しほっとしている風に見えた。

「ということは、青潟からふたりとも出ていくってことか」

「そういうことっすね。まあいろいろあったとはいえ、めでたいじゃあないですか」

乾いた声で呟いた南雲。上総はそっと覗き込んだ。

気持ちがすっかり離れているとはいえ、青大附属中学の内部ではいまだにラブラブのカップルを演じている南雲のことだ。だいぶ疲れているような気がした。

「じゃあ、特に、あらためて話をするってことは、ないわけなんだな」

「自然消滅、だろうなあ」

「万事めでたしめでたしってところか」

「そうだなあ。俺の役目は卒業式を持って終了」

「でもさ、もしかしたら奈良岡さんの方が」

言いかけた上総を押し留め、南雲はにっと笑った。

「あの人にはさ、ほんとの意味でのナイトがいるからさ。そちらにあとはお任せさ」

よくわからない。とにかく上総が理解したのは、奈良岡さんとは遠距離恋愛をする気がさらさらないという本音だけだった。恋愛感情って、本当に理解できないものばかりだ。

「それはそうと、明日は高校の合格発表なんだけど、どこに張り出されるっけか」

南雲は露骨に話題を変えた。

「たぶん高校の門と、あそここのロビーの柱じゃないかな。去年もその辺だったしさ」

「知り合い、誰か受けてる？ りっちゃんは」

「うん、ひとり」

関崎の顔を思い浮かべ、思わず教室の扉に眼をやった。杉本はまだ戻ってきていなかった。

「俺もね、ひとり、知り合いが受けてるんだけどねえ。どんなもんだろねえ。英語科って結構外部からの入学者、多いのかなあ」

「一クラス分の人数だってことは聞いてるよ。一クラス三十人だから、まあそんな程度じゃあないかな」

南雲の顔は微妙に苦みばしってきた。

「結構取るんだなあ。ってことは、それなりの点数を取れば、結構いいせんいけるってことかあ」

「よくわからないけど」

上総はぱらぱらとプリントをめくった。殆どが国語の古文問題と英語の長文問題だった。昼以降に片付けよう。

「ところでりっちゃん、卒業式の話、もう聞ってる？」

「聞ってるって何を」

「あれ、当の張本人に何もお知らせないってか？ もう二月の終りだぜ」

大げさにそう驚かなくたっていいだろうに。上総の顔をまじまじ見つめ、南雲は上総の横顔を眺めながら、指を立てた。

「あのさ、りっちゃん、卒業式の時、英語の答辞を読むことに決まっていなかったけ？」

鐘がタイミング悪く鳴ってしまった。慌てて南雲が手を振り立ち去ったあと、入れ違いに杉本が入ってきた。一瞬立ち止まると上総の方につかつかと近づいて来て、いつものように指差しをして、

「立村先輩、何、呆然としてるのですか。早く席におつきください」

片腕を押さえつけ、ぐいぐい引っ張っていった。杉本にしてはわかりやすい行動だった。

——英語の答辞なんて、俺聞いてないよ。

戻ってこられた駒方先生に、上総はまず挙手した後子細を確認することにした。

「先生、僕が卒業式の英語の答辞って、噂があるのですがそれはなんでしょう？」

思いっきり日本語がおかしくなってしまった。

「ん？ 英語の答辞？」

「はい、今、同級生から」

南雲の名前を出すのは避けた。変にあいまいなことはさっさと明らかにしておいたほうがいい。卒業式までまだ一ヶ月近く間があるのはいいとしてもだ。たぶん南雲の勘違いだとは思っているが、一応は確認だ。

駒方先生は白髪頭を軽く振り、縦にこっくり頷き、締めた。

「そうだそうだ、上総、すっかり忘れていたぞ。あとで菱本先生から伝えていただく予定だったんだがなあ。そろそろ準備が必要なものなあ」

とぼけるのもいいかげんにしろと言いたいが、こらえて様子を伺う。

上総の思惑なんて全く考える様子もなく、駒方先生は両手を打った。

「去年の卒業式は英語の答辞なんてなかったような気がするんですが」

「そうだそうだ。去年はなあ。里希の一人舞台だったからな。先生たちもみんな、まあいいだろうということでもかせてしまったというわけなんだよ。お前も覚えてるだろう？」

よく覚えている。いわゆる卒業式の答辞は生徒会長の担当と決まっていたらしい。しかし昨年に限っては圧倒的多数の支持により本条先輩が身振り手振り交えた十分以上の熱弁を奮い大拍手をもらっていた。「答辞」なんて堅苦しいものではない、あれは一種の「演説」だと上総は感じている。

「今年の答辞は生徒会長だし、最初から勲が担当することに決まっていたんだ。だがな、去年の少し変わったやり方が生徒その他父母のみなさま、来賓のみなさまにも大人気でな、今年も青大附属、何か変わった趣向をというリクエストが来てるんだ。それでな」

「英語、ですか」

「そういうことだよ。上総、お前、この三年間、英語の成績ずうっと一番指定席だっただろう？大学の教授たちからも、上総の努力は認められていてな、冗談でよく言われるぞ。飛び級させて青潟大学の英文科に進ませろってなあ。青田刈りって奴だなあ」

上総は黙って聞いていた。どうやら、本条先輩の置き土産らしい。

「だからな、お前に今回は一肌脱いでもらいたいということで、こういうことになったわけなんだが。お前、やるか？ やってくれるかな」

これがもし、天敵菱本の言葉だとしたら、

「一ヶ月前にいきなりそんなこと言われたって、できるわけないでしょうが！」

くらい言い返してやるところだが、ご老輩の駒方先生にそんな敬老心のないようなことをするわけにはいかない。上総はしばらく考え、質問してみた。

「あの、原稿は、今すぐ作らないと間に合わないと思います。作るなら作ります」

また変な日本語になってしまった。ちらと杉本と眼が合った。きっと、

「私が手伝います」

くらい言い出すんじゃないだろうかとか期待してしまったのはくせか。茶々入れてくれてもいいのに。残念ながら杉本は淑女のまま黙り込んでいた。

「そうかそうか、上総、原案こしらえてくれるか！ これはありがたいぞ。いやな、もし他の生徒だったら、他の先生たちに頼んでまず骨組みだけでもこしらえてもらおうかと考えていたんだがなあ。上総にそれは心配ご無用か。そうそう、もちろんなあ、上総ひとりだと大変だろうから、大沢先生に推敲もお願いしておいたぞ。大学生も真っ青な男らしいスピーチをぜひ、やりとげてもらえると嬉しいぞ」

本当に駒方先生、忘れていたのだろうか。それともわざと隠し玉にしていたのだろうか。

わからない。あまりつつこんだことを聞くのは目上の人に対して失礼だろう。

上総はこれ以上質問せず、一言だけ答えた。

「やらせていただきます」

一礼し、杉本の席と向かい合わせの机に戻った。言い忘れたことを先生に席から伝えた。

「今から原稿をこしらえていいですか」

南雲からもらったプリントをまずは一気に片付けた。英語関連のプリントはお茶の子さいさい。あっさりとして終り、次は国語の古文。なぜ「更級日記」なのか？ まるで「評議委員会のことを忘れるなよ、立村」とばかりに、子犬顔の更科がまとわりついてくるみたいじゃないか。これもなんとか片付けた後、上総は杉本ののらみつけている数学のプリントをちょんちょんつついた。とっくの昔に杉本もみな、片付けているようだ。ほとんど空白、残っていない。

「あのさ杉本」

「授業中です」

「とっくに終わってるくせに」

杉本の場合はすでに、自己学習能力があるということもあり、わからないところだけ聞きに行くというやり方でどんどん先に進めているらしい。このあたりもよくわからないのだが、すでに高校の代数・幾何あたりまで進んでいるという話もある。上総には未知の世界なのであまり考えないでおいた。

向かいで相変わらず絵の具を弄っている駒方先生の眼を盗み、上総はまず、杉本の持っているプリントに一行書き込んだ。

——明日が何の日だか知ってるか？

「2.26事件にしては少し遅い日ですね」

相変わらずのまっすぐな言葉遣いで杉本は答えた。

「忘れたのか」

「なぜ、聞くのですか」

「じゃあやっぱり、わかってるんだな」

「答える義務はありません」

上総はもう一行、つなげて書いた。

——明日、ロビーの柱のところで発表がある。

杉本の視線が、上総の綴った文字の上をつうっと滑った。

「何をおっしゃりたいのですか」

「杉本が今思ったこと」

もう一度杉本は、文字を見つめ、指先で撫でた。

「合格発表があったとして、それと何の関係」

「杉本のことだから、毎日祈ってるんだろうなと、思ったんだ」

上総も負けずに、ささやき声で言い返した。

きっと杉本のことだ。毎日、関崎のためにコーヒー&紅茶断ちくらいはしているんじゃないかと思っていた。どのくらい噂が流れているかはわからないが、関崎が青大附属高校を受験し、かなりの確率で合格するのではということくらい気付いているはずだ。上総も関崎情報をもろに流しているわけではないけれども、鋭い杉本なら気付かないわけがない。

「受かってくれたらさ、杉本、嬉しいだろう」

「なぜそんなことをおっしゃいますか」

また、中学生らしくない口ぶりで杉本が言い返した。どことなくまっすぐさが定規めいて機械的な感じがする。少しだけ、違和感を感じた。気のせいだったらしいのだが。

「そうしたら関崎、高校に来てくれるからさ、少しは会うチャンスだってあるだろうしさ。もしあいつが運良く英語科に進んだとしたら、俺と同級生になるし、そうしたらまた、いろいろ教えてやるよ」

上総なりに、考えた言葉。そのつもりだった。

杉本の反応は、上総の想像と全く異なっていた。

教壇でキャンバスに絵を描いている駒方先生はまったく気づかない。

「教えていただかなくてけっこうです。お会いすることはありません」

「だって、高校行ったらあとは自由なんだし、安心して追いかけたっていいんじゃないかなとか思うんだけど」

「私が約束を破るとお思いですか。立村先輩相手でも約束は約束です」

「約束って、でも青大附高に行ったらもうそんなの関係ないだろ」

たぶん、「関崎に迷惑かけないようにするんだぞ」と言いながら指切りした、上総が二年、杉本が一年の二月、水鳥中学交流準備会の時のことだろう。でも、それはとっくの昔に時効だろう。もしそれがまだ、契約期限残っているというのだったらそんなことないと教えてやりたい。

「とにかく明日の発表によって、状況が変わる」

「変わりません」

かたくなに杉本は言い張った。握り締めたシャープペンシルをぐいとプリントに押し付け、芯を細かく折っている。

「関崎だって杉本だって、もう関係ないんだしさ」

「私は会いません」

ゆっくり、杉本は瞳を上総に向けた。今にも嘔み付きそうな顔でにらみすえた。

口元は真一文字に結ばれた。

「あの方が青大附属高校にこられるのなら、私は卒業するまでお会いする気もありません」

「なんで」

うつむいた。上総は覗き込み、杉本の手元を自分のシャープでつついた。

「どうしてだよ、反対だろ？ 公立に行ったらお前の卒業まであと一年待たないとまずいかもしれないけどさ」

「いいえ、会いません」

不意に杉本の頬が大きくくぼんだ。歯を食いしばった風に見えた。身体すべてに力が籠っていた。

「あの方が、公立に行かれるのならば、私は会いに参ります。でも、青大附属の中にいらっしゃる以上は、お会いできません。そういう約束です」

「だからなんでそう口約束にこだわるんだよ」

だんだんじれてきた。上総も声を荒立てそうになり慌てて潜めた。

「私が会いにいったら、あの方が迷惑だからだそうです。契約を結びました」

「契約？ 誰と？」

杉本の握り締めた指から、シャープが音を立ててこぼれた。握り締め直そうとしなかった。「生徒会の人間とです。私があの方に会いに行くのなら、全力で阻止するといわれました」

——生徒会か。

何かが繋がってきた。泣きたいのをこらえているような目をじっと見据えた。

「いつだよそれ、いつ言われたんだ」

「そんなの関係ございません」

「あるよ。俺はこれでもまだ評議委員だから、評議委員会がらみの問題を解決する義務はあるんだ」

全くもって意味不明の言い訳をしてしまった。とっくに役立たずだっていうのに。

「だから、確認させてほしいんだけどさ」

あてずっぽで、はったりをかけてみた。

「その直後、杉本、西月さんと会っただろう」

杉本は机の上に片手だけこぶしをこしらえた後、

「西月先輩はどうなるのでしょうか」

たんとんと尋ね返した。

「わからないよ。俺もそれ知りたい。けどそれよりも、俺が知りたいのは杉本の返事だ」

全く動かない駒方先生の様子を片耳でチェックしつつ、上総はもう一度繰り返した。

「西月さんが何かをしでかす前に、杉本、生徒会室にいたんだろ」

「そんなことよくご存知ですね」

「その後で、西月さんに会ったんだろう。何、話した？」

「話なんてしてません。西月先輩とは、筆談しかできません」

ああそうか。いまだに西月さんはメモを片手に意思疎通させているのをすっかり忘れていた。この前轟さんの教えてくれた情報と重ね合わせながら、何かが見えてきたのは気のせいだろうか。

「話戻す。生徒会の人たちにそんなわけのわからないこと言われて、杉本、引き下がったのか」

「引き下がったのではありません。私から提案したのです」

呼吸が荒い。杉本の声は完全にかすれている。泣かせてやりたい。でもできない。できるのはたぶん、関崎だけだ。

「生徒会室で私の悪口を言い合って盛り上がっている様子でしたので、私の方から入っていったのです。そんなに私を邪魔したいのだったら、私の方から先に言い切ってやれば片がつくはずでした」

「でしたって、なんで？」

下から見上げるようにして、上総は杉本の口元に意識を集中させた。

「なんて言い切ったんだ」

「青大附属にあの方が在籍してらっしゃるうちは、私の方から近づいていくことはないということです。同じように私が卒業して青大附属から縁を切るまで、どんなに近くにいらしても私はあ

の方の顔を決して見ることはありません」

「なんかよくわからないな。なんで青大附属の在籍にこだわるんだよ」

生徒会連中、もともと杉本を目の敵にしているのはわかる。

佐賀はるみ生徒会長とのからみももちろんあるだろう。

しかし、何かが匂う。変だ。

「あの方は、青潟東を第一志望とおっしゃってましたから、関係ないと思っておりました。公立の青潟東に行けば、あの方とお会いすることもできるでしょう。青大附属の人間たちと戦う必要もありません。でも」

黒いポニーテールが少し揺れた、唇が震えた。

「あの方は、青大附属が第一志望なのですか」

上総の正面で、一直線に、しんと見つめた。

「私に、あの方は、青潟東を第一志望だと教えてくださいました。でも、生徒会長のことばによると、あの方は青大附属に合格した段階で、公立高校入試を欠席すると話しておられたそうです」

くりくりしたどんぐり眼。張り倒した時の痛みが今でも指先に蘇る。ガキっぽさを装い手を変え品を替え杉本と上総を翻弄してきた、あいつの顔が蘇った。

——あいつの入れ知恵だ！

「私は、知りませんでした」

杉本の静かな告白に、上総は自分のプリントの端を思わず破いた。

——卒業式の英文答辞。

てっきり自分ですべて原稿をこしらえてやるものだとばかり思っていた。できるだけ早めに英文原稿をこしらえておこうと心していたのに、次の日の朝、駒方先生からあっけなく告げられた。

「上総、答辞のことだけどな、原稿はこちらで用意することになったから、音読して暗誦するのに専念していいぞ」

相変わらず白髪頭をぼさぼささせたまま、にこやかに駒方先生は説明した。

もちろん場所はE組だった。もちろん朝、三年D組には足を向けていない。杉本梨南はまだ教室に来ていなかった。

「僕が原稿を書かなくていいんですか」

「いやなあ、上総の英語力ならなあ、簡単に書き上げられるのは先生たちだってよく知っているぞ。原稿こしらえようとしていたのかい」

「いえ、まだです」

上総は首を振った。

「そうか、なら、まずは答辞の英文訳が届くまで少し時間がかかるかもしれないが、まあ、気楽に待ってなさい。上総が引き受けてくれるということでな、英語科の先生たちもかなり気合を入れて作ってくれるらしいぞ」

「あの、僕が訳さなくて、いいんですか？」

予想を反する駒方先生の言葉に上総は何度も念を押した。

「ああ、まずはな、日本語の答辞が出来上がってくるまでもう少し待ってもらおうと思ってな」

「日本語の答辞ですか？」

昨日の説明だと、通常の「卒業生代表答辞」は元生徒会長だった藤沖勲が読み上げることに決定しているらしい。去年の本条先輩がやらかした、芸術的な話術あふれる答辞になるとは、藤沖の性格上まず、考えがたい。応援団結成を夢見た男子の読み上げる原稿はさぞ、がっちりしたものになるだろう。

「そうだよ。勲がな、今月中に書き上げて、国語の先生たちに一通り見てもらい、それからだ」

「見てもらって何をですか」

「答辞だよ。まあなあ、せっかく読み上げるんだからきっちりと作っておいたほうが男前上がるだろう？」

そういう問題ではないと、上総は思う。

でもあえて何も言わずに頷いた。

「それをだな、あらためて英語科の先生にまわしてもらい、英語科の威信をかけて一気に英訳をし、上総の元へ持ってきてもらおうと。上総はそれを受け取った後、暗誦できるくらい読み込んで卒業式の大役を務めればいいのかいというわけだぞ」

「つまり、藤沖の書いた答辞を、英文に直してもらって、それを読むということですか」

「そういうことになるね。上総、とにかく英文答辞が完成するまでは自分の勉強に徹していいぞ。出来上がったら特訓が始まるぞ。細かい発音やら抑揚やら、たぶん大学の先生たちをお願いすることになるとは思うがな。今はまだ、中学生のまんまでいればいい」

五ヶ月前まではそんなことになると思った段階で、B組の藤沖をとっ捕まえて、「答辞、原稿、手伝おうか？ どうせ俺も英語で訳したの読まないとまずいからさ。藤沖、手伝うよ」

そう申し出ただろうに。あれから藤沖とすれ違うことはあるけれども、視線を交わしたことは全くない。このままでいくと四月からは同級生になるわけで、おそらく無視されることになるだろう。針のむしろもいいところだが、しかたない、自業自得である。

上総は納得した振りをして、「わかりました」と答えた。

「ところで上総、そういえば梨南が珍しく遅いようだが、どうしたのかな」

そんなの知るか。「わかりません」としか答えようがない。

——青大附高の合格発表が朝十時からだったこと、くらいしか、俺には説明できないよ。

昨日、杉本の口から聞かされた出来事を頭の中で何度も整理した。

——生徒会の役員たちが何かをたくらんでいたということなのか。でもなんでだ？

昨日、杉本が口走っていたことを、上総は何度もかみ締めた。

思い当たらないわけではない。もともと生徒会長の佐賀はるみと杉本梨南とは因縁があるし、現段階で佐賀が圧倒的勝利を得ている。「勝利」というのがどういうものなのか判断はしがたいけれども、少なくとも杉本よりも佐賀の方が、全校生徒および教師たちに「好かれている」のは明らかだった。学校生活において「好かれるかどうか」これはかなりのポイントとなるはずだ。すでに担任やクラスメートからも嫌われ、全校生徒から軽蔑されつくしている杉本梨南の立場を考えれば、これ以上なんで突き飛ばす必要があるだろうか。

いや、ある。

現在杉本の立場はかろうじて一部の三年女子たちによって守られている。

守られていた、といったほうが近いだろうか。

杉本がこれ以上嫌われないように、西月さんや霧島さんが懸命に守ってきていたはずだった。いくら上下関係があいまいな青大附属とはいえ、先輩たちに無碍に逆らっていいことがあるとは思えない。杉本に文句を言いたくても、まだ三年の先輩が目を光らせているとしたら、佐賀としても生徒会としても、がまんせざるを得なかったのかもしれない。

——でも、四月になったら。

みんないなくなってしまう。

誰一人、杉本をかばおうとする人が、青大附属中学の中にはいなくなってしまう。

もちろん、青大附属高校だって同じ敷地内だし、上総も様子を伺うことができないわけではない。ないが、しかし、やはり今までのようにちょくちょく教室を訪れることはできない。中学校舎に高校生が出入りすることを学校側でもあまりよく思わないはずだ。

つまり。

——杉本は、青大附中に取り残されるというわけか。

杉本の気性を考えると、確かに佐賀を筆頭とする生徒会役員たちが危惧を覚えるのも無理はないと上総は思う。ある意味、杉本が島流しとも言えるE組暮らしに素直に馴染んでいるのは、西月さんや霧島さん、その他の生徒たちが側にいたからだとも言えるだろう。決して自分が間違っていたのではなく、明らかにあいづらが悪いから、と認識することもできるだろう。しかし、三年に入ってもまだE組流し状態が続くとしたらどうなるのだろうか？

いや、E組から出されて、元のクラスに引き戻される可能性だってある。

その時、杉本は適応できるだろうか。

上総は素早く杉本梨南の様子をシュミレーションしてみた。

——今までは他の人たちが杉本の面倒を見ていたからなんとか無事に過ごすことができた。それはあると思うんだ。だけど、もしこれから先かばう人が誰一人いなくなった場合どうなるかってことだよな。佐賀さんはすでに生徒会長になっているし、周囲には友だちもいるわけだ。新井林だってこのまま評議委員長になるはずだ。

——杉本は佐賀さんや新井林に対して、死ぬほど恨みをかかえているはずだ。

——ふたりの肩書きなんて知ったことかとはばかりに、また歯向かうかもしれない。杉本が素直に反省して言うこときくわけ、絶対はない。たとえ担任の松山先生であろうとも、駒方先生でも、狩野先生でも、誰でもだ。

そしてもうひとつ。秘めていたことではあるが。

——佐賀さんは、あの、水鳥中学の佐川と繋がっているんだろうか。

今のところ佐賀はるみと新井林健吾が「付き合い」をやめたなどという情報も入ってきていない。相変わらずふたりは仲良く教室で話をしているようだし、新井林も暇さえあれば生徒会室前をたむろっている。なぜか、中に入っていこうとしないのが傍目からみて笑みを隠せないところでもあるのだが。

——どう考えても、新井林は佐賀さんのことしか考えていないわけだ。

——そんなに新井林を、佐賀さんは騙せるだろうか。

去年の二月に、佐賀はるみが水鳥中学の佐川とこっそり連絡を取り合い、杉本梨南の恋心を踏みにじろうとしていた事件を上総は忘れたことなんてなかった。

しかし、佐賀が生徒会長に就任して以来、評議委員会に対しての厳しい風当たりを考えると、彼女ひとりで考えたものではないという気もする。もちろん一緒にいる生徒会役員たちが協力しているというのものもあるだろう。しかし、それにしても。

天羽がそれに気付いているかはわからない。ただ、生徒会側の出方がかなり強気だとは感じているようだった。天羽はもともと賢い奴だからうまくやり取りしているけれども、それでもいきなり交流会を生徒会主導にするという案を、教師に持って行ってOKをもらったり、評議委員会

そのものを学級運営の中に限定してほしいという声を周囲から挙げさせたりしているようだった。もちろんそんなことを口に出したりはせず、副会長、書記たちの意見として挙げさせる形らしい。言い出しっぺは大抵が現在一年の副会長・霧島らしいと噂が流れ、

「一年なのに、すごいいっかりしてるよね。顔が美形なだけじゃあないのね、霧島くん。お姉さんが青大附属から追い出されるくらい頭悪いって聞いたけど、霧島くんはすごいできるし、さすがやること違うよね！」

などとささやいている声も聞く。佐賀はるみ生徒会長自体がお飾りの存在であり、影で動かしているのは霧島だという認識、そう思わせようとしているのが上総にはありありと見て取れた。

「私、何もできないんです。霧島くんをはじめ、他の生徒会役員の人たちがみな、よくしてくれるから私なんかでも、生徒会長やっていけるんです」

いつだったか、新聞部のインタビュー記事を読んだことがある。佐賀は何度も霧島に感謝をした後、

「あれは全部、霧島くんが提案してくれたんです。感謝してます」

と手柄をすべて預けるような言い方をしていた。霧島の様子はどうだったかは定かではない。ただ、霧島が反発して文句を言ったという話は聞いていないので、自分なりに納得はしているのだろう。

——霧島弟をうまく使うためのテクニックだ。

上総なりに観察してみた結果、

——霧島弟は一般的に受けのいいタイプ。頭がよくて、顔も女子受けしやすい。しかも評議委員会へのお誘いを蹴って生徒会に飛び込んだという気骨ありげな行動も他の生徒たちからは人気を博する秘密だろう。男子の目から見ると少しまずいんじゃないかって気もするけどさ。

女子が上に立つとなると、いろいろなトラブルが起こりやすいはずだ。藤沖もだからこそ、一緒に動いてきた女子の後輩たちを生徒会長に推さなかったと聞いている。しかし、今の段階で佐賀生徒会長を原因とするトラブルが起こったという噂は全く流れていない。

時が経てば経つほど、佐賀はるみ生徒会長の生徒間評価は、

「あんなに可愛くておとなしい人なのに、みんなに支えられて、笑顔を絶やさずにいて、努力を一生懸命にしている姿に惹かれる。性格のいい人だからこそ、霧島くんも先輩を応援しようとするんだろう、きっと」

主に一年の間でうなぎのぼりのようだった。さらに言うなら、次期評議委員長・新井林に大切に守られているという話も知らぬものはない。

「性格の悪い女子にいじめられてきたのに、その子をおおらかな気持ちで許してあげようとしているところ」も、またポイントアップのきっかけらしいとも聞いている。

現在の二年たちはさすがに杉本との繋がりを断ち切ることができず、陰でいろいろと悪口を言っている女子もいるらしい。いるらしいが、だからといって生徒会を揺るがすだけの勢力にはならない。それどころか、

「あれだけ可愛くて一生懸命な佐賀さんをやっかむお前らの方が心せまい！」

と一言で切って捨てられる。

評議委員会こそ華と呼ばれていたあの頃。

霧島弟の存在がきっかけで、藤沖でも果たせなかった全校生徒たちの「生徒会」に対する関心度アップ効果。そしておそらく、霧島弟をスターに仕立て上げたのは佐賀の計画。いや、あれはひとりで考えつけるものではないだろう。

——本条先輩ならともかくも。

あの佐賀はるみがひとりでそんな案を編み出したとは思えなかった。

——決定打はないんだけどな。

当てにならない勘だけど、裏には絶対に水鳥中学のどんぐり眼がきよろきよろしているはずだ。その眼を思いっきりはたきこんでやりたいのが本音だけでも、そういうわけには決していかないのもまた事実だ。

——関崎がいるからな。

上総にはどうしてももうひとつしっくりこなかった。

——なんで関崎は、佐川と親友なんだろう？

合わない。絶対に合わない。

「どうなさったのですか、立村先輩」

いつのまにか杉本が目の前の席についていた。かばんと一緒に、今日は黄色い手提げ袋を机の上に置いたままにしていた。机はすでに上総が向かい合わせになるように並べ直しておいた。杉本も特に嘔み付いてくる気配がないので、そのまま何も言わないでおいている。

「たいしたことないんだけどさ」

上総も素早く教科書を広げ、さっきまで考えていたことをすべて白紙に戻した。

「さっき、駒方先生に言われたんだけどさ」

まだ授業が始まらない中、上総は杉本の顔を見やりながら続けた。

「卒業式で俺が英語で答辞読むことになったのは知ってるだろ」

「はい、あれだけ大きなお声で話されてらっしゃるのですしたら」

もちろんその通りだろう。

「全部俺が原稿書くものだと思って準備してたのにな」

「先輩は英語だけは人並みにできますものね」

また抑揚のない言い方で杉本は相槌を打つ。いつものことなので腹は立たない。

「ちゃんと先生たちが原稿を用意するからこしらえなくていいのはありがたいけどな。なんで藤沖の原稿なんていう同じもの読み直さないとならないんだろうな」

「どういうことですか？」

「つまり、通常の卒業生答辞は元・生徒会長の」

ここで言葉を切った。杉本の反応を確かめた。特に変化はない。安心して続けた。

「藤沖がやることになっているわけなんだけど、次に同じ内容の文面をひたすら英語で読むのが俺の役割らしいんだ」

「そうですか。英語日本語両方わかる方には退屈ですね」

「そうだろ？ 何か、違うよな」

なんでいきなり杉本に愚痴りたくなつたのかわからない。もし目の前にいるのが杉本以外の女子だとしたら、こんなくだらないことで文句言いたくなんかない。「楽になるんだからいいじゃない。そんなことよりもっと考えることあるでしょ！」とぼっさり切られるのがオチだ。杉本だって本当は例外ではないし、それこそ血まみれになるくらい切り刻まれることもあるけれども、なぜか、上総は自分の口が押さえられなくなる。

「立村先輩がもしも、ご自分で原稿をこしらえるとしたらどんなことを書くおつもりだったのですか」

「そうだな、それもいろいろ考えたけど、日本語だと変に思われることを英語だとストレートに書いて大丈夫だろ。だから言いたいことを思いっきりつめこもうかなと思ってたんだ。たぶん聞いている人の半分は俺の英語なんて聞いているとは思えないしさ」

本音である。去年の卒業式、在校生はみな本条先輩の「答辞という名の大演説」以外記憶に残っていないんじゃないだろうか。

「だから、言いたいことを言ってやろうかなと。原稿提出の段階ではおとなしいことを書くけれど、当日本番になったら一気にしゃべりたいことをしゃべってしまうのも面白いだろうしな」

「立村先輩、何を考えておられるのですか」

あきれ果てた風に杉本は小さくあくびをし、すぐに口を押さえた。

「と、そういう想像でもしていないと、なんか落ち着かなくてさ」

本当のことを言うと、藤沖とまた顔を合わせて話をせねばならないのが憂鬱なだけだった。

同じクラスになるにせよ、男子同士、無視していてもさほど問題は起こらないと思う。しかし、「相手の原稿を英訳して読む」なんていう、コアなことをやらかすのだ。いやおうなしに「悪いんだけどさ、俺、お前の原稿読むから」と挨拶をしておかないとまずい。佐賀はるみを巡る生徒会問題でトラブルを起こし、それ以来無視をきめこんでいた藤沖に、上総の方から近寄らねばならない。これは結構しんどいことだった。

杉本はしばらく首を傾げるようにし、全身をかちりと留めた。

ゆっくりと呟いた。

「そんな低レベルなご想像をなさるよりも立村先輩。同じ内容の原稿を読まれるのでしたらたとえば、古文や漢文で読み上げるというのも一つの手ではありませんか」

「古文や漢文？」

「つまり、英語と言っても日本語と同じくどんどん言葉が変わっていつているはずですよ。どうせでしたら、英語の古文のような形で、原稿を手直しされてはいかがですか？」

「ということは、なにか？ 杉本、俺に『平家物語』とか『源氏物語』ののりで堂々と読み上げろってことか？ みんなあきれろぞ。さすがに俺もそこまで」

「私は思いついただけです。たいしたことではありません」

立ち上がり、手提げだけをぶら下げた。

「これから家庭科の授業がありますので、行ってまいります」

どうりで荷物が多いわけだ。上総は一瞬だけ敬礼をして見送った。

家庭科の授業だと、わりと教室を出入りしやすいはずだった。

杉本は即、朝十時ちょうどに何か理由をつけて教室から出て行くだろう。

そしておそらく、杉本は一階ロビーの柱に張り出されている紙に向かい走って行くだろう。

——杉本のための合格発表って感じだな。

生徒会が邪魔しようがなにしようが、杉本梨南の想い人を取り上げることなんて、できはしない。

二時間目が終り、上総はまっすぐロビーの柱まで歩いていった。

人だかりの中、B5版の小さな紙が横にぺたりと張ってあった。

「今年は英語科、二人しか入ってないね」

見終わった一年の女子たちが上総の側をすり抜けていく。青大附属中学の合格発表とは異なり、附属高校の場合はそれほど張り付いてみようとする人が多くなかった。上総は素早く人のゆるやかに詰まった方にもぐりこみ柱前まで泳いでいった。

上総はその中に混じっているはずの杉本を探した。きょろきょろしていると正面の階段を奈良岡彰子がのしのし降りてくる姿が目に入った。すぐに退散するつもりだった。相変わらず笑顔でいっぱいの奈良岡は、人にぶつかりながら柱に向かい、

「よかった！ 時也受かってる！ あきよくん！」

いつのまにか上総の隣に突っ立っていた南雲に報告していた。

「すげえ、やるじゃん」

「あとで、クッキー焼いて持っていかなくちゃ。時也、私のクッキーすごく好きなんだもの。うちの父さん母さんもよろこぶなあ。あきよくんもよかったら、時也のお祝いしない？ うちでもいいよ」

「いいな、それ。けど俺も予定が立たないからちょっと待って」

傍目には昔と同じ仲良しカップルの顔に見えた。

——俺が中学生でいられるうちに、なんとかしないとな。

今年の合格者は少なかった。

三十人くらい外部入学があるものだと予想していたが甘かった。

普通科に二十人、英語科に二人。合計二十二二人。

——関崎乙彦。

その名は、英語科合格者欄のトップに堂々と顔を出していた。

合格発表の夜、上総は水鳥中学の関崎に電話をかけた。

家族でお祝いでもやっているのか、図太い声が受話器の向こうから広がって聞こえた。それを縫うようにして、関崎のはっきり切れのある声が響いた。

——立村か。ありがとう。

「でも、英語科か」

——だめもとで受けてみただけだ。学校の連中からは奇跡だと言われている。

「二人しか受かってなかったもんな。そうだ、関崎、公立はもう受けないんだろ？」

——受けてはいけないのか。すでに願書は出している。

生真面目な関崎の受け答えに、上総は笑いを噛み殺しつつも、確認すべきことは忘れないようにしていた。

「受けたらまずいということはないだろうけど、試験ってそんなに楽しいか？」

——一度きちんと学校に向けて願書を提出した以上、受験生としてきちんと誠意を見せて受ける義務がある。

ということは、公立入試も受けるということか？ やはりこいつ、勉強が趣味なのか？

上総には信じがたかった。だが、すぐに頭を切り替えた。すべてのコンセンツは杉本に繋がっているからだ。絶対に。

「なら、三月六日は、青瀧東高校で、受けるってことか」

——そういうことになる。私立受かってても公立落ちたら話になんてならないだろう。俺はきちんと、両方合格した後で、入学をどちらにするか決める。

しゃちほこばった言い方だが、言われてみればその通りである。一度願書を提出した以上は、どんな理由があろうともきちんと答える義務、あるだろう。関崎の真面目な性格を考えればそれも納得だ。

「じゃあ、ひとつだけ聞きたいんだけどさ」

上総はあとで後悔したのだが、つい聞いてしまった。

「青大附属と青瀧東、どちらに入学したいんだ？」

——願望か。

「関崎の本心を知りたい」

——思い入れだけで言うなら。

言葉をとぎらせ、関崎は一分近く黙った後、

——青大附属だ。

ぽつりと答えた。

次の朝、E組で顔をあわせた杉本に、上総は一切外部高校入学者発表について触れないでお

いた。昨日の段階で全くの無表情だった杉本に、追い討ちをかけるような言葉を発したくなかった。杉本の表情に揺れるものは読み取れない。ただ、あんな目だつところに発表されているのだから、当然関崎の合格に関しては知っているだろうとは思っているのだが。

「立村先輩、今日は英語のお勉強ですか」

「そう、卒業式の答辞作り」

上総はわざと英語を綴ったノートを杉本の目の前でひらめかせた。一緒に入ってきたのは狩野先生だった。三年A組の授業も、数学の授業もお休みなのだろうか。一礼だけしておき、上総は杉本に思いっきり話し掛けた。狩野先生も上総の机に数学のプリントを一セット置いた後黙って自分の席についた。

黙って座られるとやはり、勉強しなくちゃという気持ちになるのが不思議だ。

クラスでぎゃあぎゃあみんなが騒いでいる時はあっさりつられるというのに。

「先生、今日はこれをやればいいですか」

上総は問い掛けた。狩野先生も半分頷こうとして、ふと首を傾げた。

「今、英語の原稿を書いているということでしたが」

「はい、英語の答辞の準備をしようと」

どうせ原稿は英語科からくるのだからそれを待てばいいとは思う。だけどやはり、よりによって藤沖の原稿待ちというのがいらいらして来て落ち着かない。自分なりにこしらえておくことにしようと決めていた。

「そうでしたか。藤沖くんの原稿はまだですか」

「まだのようです」

丁寧に答えた。狩野先生は白衣姿でしばらく上総を見つめていた。

「先に原稿がもらえるようだったら、もらってくればいいのではないですか」

「でも、英語科の先生が全訳してくれるらしいです」

不承不承上総は答えた。

「時間がかかりそうですね」

「そういう決まりになっているようです」

ひょいと杉本の方を見ると、爪だけ机の上に出すようにして、小首をかしげている。

相変わらず人をにらみ据えるような眼差しで。

狩野先生は静かに立ち上がり、膝から何かを払い落とした。白っぽいものが光った。上総の席脇に近づくと、そっと見下ろした。

「立村くん」

「はい」

「藤沖くんから直接もらったらどうでしょうか」

言葉を失い、リアクションに困る。

そんなのとっくにお見通しとばかりに、平然と狩野先生も続けた。

「それの方が、もしかしたら早いかもしれませんね」

狩野先生はさらっときわどいことを告げた後、

「それでは、このプリントをまず解いて、できたら僕を呼んでください。それと杉本さんは」
また別のプリントを一束、今度は杉本の机に載せた。

「大学入試問題も混じってますので難しいかもしれませんが、できるところまでまずは解いてみてください」

「はい、わかりました」

抑揚のない一本調子の声で返事をする杉本に、上総は顔をむしようにそむけたくなった。
——いまだに平方四辺形の面積を出す問題解いているところなんて、観られてたまるかよ。

それからしばらく、杉本とは口を利かず、数学の問題に没頭していた。

もともと上総に与えられる問題は小学校高学年レベルのものが殆どだったが、最近は少しずつ中学一年レベルのものも混じって来ていた。もっとも狩野先生が「中学一年レベルですが」と注釈をつけるだけであって本当のところはわからない。上総は素直に納得して解いているのだが、たまに答えが合っている時があり、もしかしてこれは狩野先生の陰謀なのではと思ったりもする。解けるわけがない。

目の前の杉本は、しゃかしゃかとプリントを繰り返しながら、思いつくままに答えを書き込んでいっている。はたして杉本は大学入試問題をしっかり解いていたりするのだろうか。

——集中してるよな。それにしても関崎のこと、知りたくないのかな。

「杉本、あのさ」

「なんですか」

「関崎のこと、聞いた？」

手が留まったところで上総は声をかけた。まずは様子を伺う。すうっと杉本は顔を挙げた。

「はい」

単純な一言。

「昨日、電話したんだよな」

「どなたにですか」

「決まってるだろ」

さて、どう出るか。杉本はしばらく唇を震わせていたが、やがて、

「あの方ですか」

決まった答えを口にした。

「そうだよ、知りたいか」

「そういう言い方されるのでしたら知りたくありません」

「俺が教えたいんだけどさ」

上総はもう一度、狩野先生の様子を伺った。幸い、何か書類を読み込んでメモしているらしい。

「それならおっしゃればよろしいのでは」

「関崎、青瀉東を受けるらしいよ」

切り札を出した。初めて杉本が、本気目で上総を射た。

「それは本当ですか」

「うん、本当だよ。関崎にさ、聞いたんだ。『これで青大附属高校に行くことが決まったけど、どうするんだ』ってさ。そしたら、公立も受けることに決めてるって言ってさ。別にうちの学校に来ると百パーセント決まったわけじゃあないらしいよな」

半分本当で、半分が嘘。上総は杉本の目が少し揺れたのに気が付いた。

「とにかく公立の合格発表が終わるまではどこの学校に行くかわからないらしいよ。ほら、やはりさ、うちの高校は金がかかるからいろいろ大変だって話していたしな。杉本が生徒会の連中に何言われたか知らないけどさ、関崎は公立へ行くかもしれないってことだよな」

「本当ですか」

杉本の眼がぎらりと光った。

「ああ、どちらにしても公立入試は受けるって。来月の六日だったか」

「本当なんですか」

「俺が嘘を言うと」

「おっしゃる時もあります。たとえば二年前、評議委員長に私を選びたいとおっしゃった時」

それでも、噛み付いてはこなかった。上総は無理に否定しなかった。

「ですが、あの方は本当に、公立を受けられるのですか」

「そうだって言ってるだろ」

ふと、ちくりと突き刺さる、針のような感覚。

「でも、わからないけどな。あとで決めるって話はしてたけどな」

このあたりはやはり、嘘を言いたくないので付け足しておいた。

もともと一階、一年廊下沿いということと、若干給食準備室寄りということもあり、あまり人通りが少ない場所でもある。登下校時刻をうまくずらせば、三年連中と顔を合わせずにすむ。実際上総も、直接訪問してくるまでは、羽飛と顔を合わせて会話することがほとんどなかった。

休み時間、杉本が席を立った間にすると入り込んできた難波に、上総が手を挙げたその一秒後、ささっと割り込むように貴史がネクタイを思いっきり緩めて登場した。卒業間際、すでに高校は普通科への進学が決定。多少ははめはずしてもOKかな、といった風情だ。逃げられず、上総は窓辺までまずよけた。逃げられるわけもなく、さっさと入ってきて、上総の右脇机に直接腰をおろした。にかっと笑った。

「よ、元気」

「ああ」

リアクションに悩み、まずはさりげなく答えた。一緒に難波も向かい側の椅子にこしかけ、なぜか膝を組んだ。人差し指と中指を器用に交差し、口に当てた。投げキッスの要領に見えたが難波の性格を鑑みてすぐに気が付いた。これ、キセルふかしたい気分とみた。シャーロック・トシタケ・ホームズ、健在ってところだ。

「あのさあ、立村、いつ帰ってくる？」

「帰る？」

あくのない笑顔をこしらえたまま、貴史はあっさり直球を投げた。

「美里がうるせえのなんのってな。ああ、お前知らねえか」

足を組みなおし、また貴史は機嫌よく口を開けた。

「さっきな、天羽がしゃべってたけどな、今日臨時の評議委員会と生徒会役員との話し合いがあるんだとさ。で、お前休んでる間さ、美里が代わりに出ろってうるせえからしかたなく受けちゃったんだけどな。俺、評議のことなんか全然わからねえだろ？ なあ、難波」

「わかっててもわからなくても話の核心がつかめればいいことだ」

ぶっきらぼうに難波は答えた。相変わらずむっつりしたままだった。上総をちらと一瞥した後、また指先を唇に当てた。気色悪いが、難波にとってはキセル気分なのだ。何も言うことはない。

「どうせたいしたことじゃあねえとは思うんだ。三年も最後だし、女王様集団の生徒会にまあ、最後のご挨拶ってことで集まるんじゃねえかって聞いているけどなあ。だろ、難波」

「なわけねえだろ」

今度はずいぶんときつい切り返しだった。上総は難波の顔をまじまじと見つめた。おそらく三年評議委員を巡るごたごたに関してキーマンとなるのはこいつだろう。だがもともと、上総とは少し距離を置いている難波に直接聞くのは気が引けた。

——どうせ天羽に投票したんだもんな。

感じないようにしてきたのに、うずく傷。決選投票の記憶。

表向きはそれなりにごまかしてきたつもりだけど、気付いていないとは思えない。

上総は素早く傷に吐息のしっぷをした後、できるだけ何気なく言葉をはさんだ。

「何かあったのか、難波」

「天羽から聞いたんだったらわかるだろ」

「聞いたといってもどこまで本当かわからないしさ」

天羽と轟さんから聞いた話を巻き戻してみると、おそらく評議委員会の生徒会に対する「大政奉還」大詰めってところだろうか。上総が考え天羽が進めた、「評議委員会の権力を生徒会に半分移行させ、バランスよく整えていく」やり方がかなり予想以上の展開を迎えている。それは上総も書記として気づいていた。あえて口を出さなかったのは、そんなのどうだってよくなっていただけのことである。もし自分が評議委員長でいたとしたら、どうしていただろう。ある程度の計画は頭と手帳で立てていたが、それももう過去のことだ。

難波はしばらく口をもぐもぐさせていた。やがて指先をびたっと整え、机の上に置いたまま、「要するにだ。この前のとんでもねえ出来事がきっかけでだ。天羽がつるされてるってわけだ。立村、そのくらいは聞いてないのか」

「聞いている。でも」

貴史の前でそんなことしゃべっていいのだろうか。伝えたいが愛嬌たっぷりの貴史を前にして、そんなこと聞けやしない。難波は全く意に介さぬように続けた。

「女子評議はみんな使えない奴ばかり、男子連中もアホばかり、そんな評議委員会を誰もこれ

からは全校生徒、信じませんぜよ、とばかりに生徒会長および取り巻き連中が、天羽の過去を暴露しようとしてるわけなんだ。お前そのくらいは想像つくだろ」

「ああ、そうだな」

貴史の顔を覗き込んだ。目が合った。にかっと笑う。上総も少しだけ、口元をほころばせた。

——天羽をつぶす計画だな、これは。

轟さんがストーブの炎を見つめながら語ってくれた出来事が、とうとう大きく表に出始めているということだろうか。難波がそこまで話している以上、貴史が部外者であろうと聞かれてもかまわないという判断なのだろう。割り切った。上総は窓辺に寄りかかったままさらに質問を続けた。

「例の事件と生徒会と、どういう関係があるんだ」

「つまり、天羽はな、今まで西月とのごたごたでもって男としての株を落としてるわけだ。俺は全くそう思わんが、女子連中の間では終わってるわけだ」

「でも、どうせ卒業なんだからそれまではさ」

「お前わかってるだろ。前期評議委員長やってるくせに、なに寝ぼけたこと言ってる」

わかっているからあえてつっこまない。

「つまり、西月の行動が天羽のせいだってことで、生徒会連中はたっぴりいやみを言いまくろうとしてるってわけだ。しかもな、今回はな、評議以外にもな、元生徒会の三年連中も登場する。もっとむかつくことに、希望者の一、二年も覗きにくる」

「希望者ってなんだ？」

「希望者とはつまり」

言葉を切った。難波は上総に親指を向けると、

「来年以降の生徒会参加希望者とも言う。すでに現在の生徒会は来年に向けて人材集めしてるってとこだ。まあ俺たちがやってきたことを、これから生徒会がお株奪ったってとこだ」

——なるほどね。

上総は頷いた。そうだ。本来ならば、それが上総の目的としていたことだった。

生徒会があまりにも行き当たりばったりの人員集めばかりしていて、なよなよしすぎているから、早い段階で声をかけたりして人材を集め、その上で層を厚くし、さらに一年にその熱を伝えていく。これこそ賢いやり方だと思う。本来ならばそれを新井林にも伝えたいところだったが、もうそのあたりについて上総は触れることもないだろう。

難波の話はさらに続く。

「要するにだ。俺たちの恥さらしを全部、生徒会役員連中は他の連中にアピールしたいってわけだったの。まあ俺たちはかまわん。お前の言う通り、四月からはサヨナラだ。だがな、評議委員会ってのが今まで言われていたのと違っていかに使えねえところなのかってことがばればれになると、もう、今までのようなのりではやれねえよな」

「今までののりだったって、それはしょうがないだろうし、でも新井林が」

「さあな。お前はもう投げた奴だからどうでもいいんだろうな」

かちんとくる。握りこぶしをこしらえるだけでこらえた。

難波はさらに挑発してくる。

「しかも生徒会は女子連中ばかりだ。頭の悪いどっかのばか女子とは違って、あいつらは頭が働きすぎる。天羽もめいっぱい防戦してるがぎりぎりってとこだ」

「天羽もかなわないほどってことはないだろう」

難波はしばらく上総をじっとにらみつけ、今度は人差し指をかじった。そのまま指で机を叩いた。

「どれだけ俺たちが正論を吐こうとも、あいつらは女子連中を味方につけてるわけだ。今までは評議委員会ががしっと真中押さえていたから多少ばたばたしようともなんとかあったがな。今は先生連中も、全校生徒のみなさまも、評議委員会がやってきたことの八十パーセントを取り上げて、全部生徒会の手柄にしよう決めてるわけだ。特に俺たち三年世代のばかっぷりをみりゃあ、誰もがそう思うよな」

「難波、お前、何が言いたい」

だんだん上総も、難波のいやみったらしい言い方に腹が立ってきた。

目の前にもし、貴史がいなければ声を荒げているところだ。もしや、上総を黙らせるためにあえて、部外者の貴史を連れてきたなんてことはないだろうか。

「立村、よくわからねえけどよ」

あいかわらず貴史は脳天気言葉をはさむ。

「とりあえず難波や美里が言うには、俺もそのなんだ、臨時の評議委員会に参加しなくてはならないんだとさ。冗談じゃねえよな。けど、しゃあないよな。お前が出ないんだからな。代行をださねばなんないってことだな」

——それか。

上総はずっと、貴史と向かい合った。

「代行じゃないよ。俺が思うに、羽飛、お前が三年D組の評議にふさわしい」

今まで、こういう形ではっきり口にしたことはなかった。

心に思っても、かっとなって叫んだりしたことはあっても。

顔をしかめる貴史に、上総は首を振った。

「秋から実際そうだろ。羽飛のおかげで、今、三年D組、まとまってるだろ」

「立村、何考えてるんだ？」

顔に貼り付けたままの笑顔がさくっと消えた。険しくなる貴史の表情を、しっかり見つめ、上総は窓辺から離れた。かっとなったらまた、この前のように一発食らわされるだろう。痛い思いするのはもうごめんだ。

「だから、本来の役割として出ていくべきだと思う」

「それって逃げじゃねえのか？」

意外にも貴史は腰を浮かさず、そのまま落ち着いて声をかけてきた。この前いきなり激昂した時の貴史とは大違いだ。いったい何があったのか、思わず上総は思いを巡らせた。

「三年間、立村を評議として選んだのは、悪いけど俺たち三年D組一同だと思うんだよなあ」
こうやって落ち着いて話をしてくれれば、上総もそれなりに言い返せる。

「羽飛が俺を推薦したからだろ。推薦されたら受けるしかないだろ。受けたら自動的に三年間持ち上がるのが、今までの評議委員会のシステムだったんだから、仕方ない。だからだよ、難波」
こちらは完全ににらみっぱなしの難波へのメッセージを。

「そういう間違いを正すために俺は評議委員会から生徒会への『大政奉還』をたくらんだ、って言ったら、怒るか？」

返事はなかった。教室には三人のみ。杉本梨南はまだ戻ってこない。さっさと片付けよう。

「本来評議委員になるべき人間がなれなくて、なるべきじゃない俺が三年間いついてしまった。それが根本的な間違いだったと思うんだ。難波もそれは、そう思うだろ」

——思っているに決まっている。

——決選投票の時の行動がすべて物語ってるよな。

上総はじっと難波を見据えた。嘘はつかせない。

「思わない」

一秒か二秒置いて、少しかすれた声が返ってきた。いつも聞いている難波の声とは少し違い、どすが利きすぎているような気がした。

——声変わりもう終わってるんだ。

「立村がどう考えようが俺の知ったことじゃねえ。だがな」

立ち上がり、貴史へちらと視線を流した。困ったように貴史も首をひねっている。

——いつもなら嘔み付いてくるはずなのに。

どことなく、ふたりの間に流れる空気が重たい。

「本来あるべき姿とか言ったって、そんなの知るか。俺が知ってるのは、この三年間の評議委員会だぞ。それ以上の何物でもない」

振り返ると貴史も真剣な顔して頷いている。

「同期の野郎面子は俺と天羽、更科、それと立村、お前だ。それ以上何か変わったこと、あるのか？ それ以外のバージョンなんて、想像する必要、いまさらあるか？」

難波はもう一度、唇をとがらせるようにして、キセルをふかせるポーズを取り、足を元に戻した。ゆっくりと立ち上がり、貴史にも「じゃあ、そんなところで」と声をかけた。

「とにかく、放課後、評議委員会と生徒会の臨時会議がある。場所は三Aだ。とにかく来い」

言い残し、難波はそそくさと教室から飛び出した。同時にチャイムが鳴り、貴史も仕方なさげに立ち上がった。一步、上総に近づき、穏やかな目で見つめた、

「とりあえず、俺もあのなんだ、そのなんとかに出るから、お前も来い。難波言いたかったの要はそれだけみたいだぞ」

「お前もか」

「まあそういうとこ、じゃな」

張り倒された直前の眼差しとは全く違っていた。背を向けたまま戸を開け放ち、貴史は片手を振った。

——何を言いたかったんだろう？

しばらく上総は席についたまま、ぼんやりと天井を見上げていた。蛍光灯の光が相変わらず真っ白で、目が少しだけ重くなる。

杉本はまだ戻ってこなかった。

生徒会とのかかわりがいろいろ面倒だとは聞いていたけれども、天羽が評議委員長である以上簡単にひねることができたのではと思っていた。実際上総を相手にする時よりは、きちんとした態度だったと聞いている。しかし、なぜ評議委員長をわざわざ呼び出し、そんなにはっきりと「大政奉還」を急ぐのか、このあたりが上総には解せなかった。

いや、わからないわけではない。

たぶん、急いでいるからなのだろう。

早く、評議委員会を「ただの学級委員会」として扱うために。

だから生徒会も、早めに天羽の古傷をあばいたり、三年たちの醜聞を明らかにしようとしたりするのだろう。賢いやり方だ。本当に佐賀はるみがそのことを計画したのか、それとも裏に水鳥中学の佐川が糸を引いているのか、それはわからないが。

——けど、それを止める義務も、俺にはない。

間違っって評議委員になってしまい、最後まで上総が完走したために崩壊した、現在三年評議委員会。かろうじて天羽や新井林によって形は保たれている。でもそれだけだ。上総のまづいてもってやらかしたよしなは消えることなどないだろう。何よりも現在の菱本学級・D組を本来ひっぱるべき羽飛・清坂ラインに切り替えられなかったのは、「評議委員会」が部活化された組織だからだ。

同じ過ちを、犯してはならない。

上総は左手にボールペンを持ち、ノートにぐるぐると円を描いた。

いきなり評議委員会にひっぱりこまれる貴史には悪いが、今さら上総が混じっても何がどうなるとも思えない。もともと生徒会の連中は上総を最初から見下しているし、いまさら平の評議委員となった上総にそれほどの関心もないだろう。あえていえば杉本梨南の保護者として立ち回っている立村先輩、くらいの認識だろうか。最近は血迷って騒ぎを起こしてばかりいる、典型のおばか三年評議の代表とでも思われているだろう。

だが、天羽は違う。

もともと天羽は、評議委員長になるべき存在だった。結城先輩の頃から目をかけられていて、本条先輩が上総をひいきさえしなければスムーズに委員長指名が行われていたはずなのだ。そこに割り込んだのが上総である。そのあたりの事情もすでに、周囲の噂は流れているだろう。先輩へのすれ違い時にする礼の数も天羽に比べると上総は断然少ない。

絶対、評議委員長としての格は天羽の方が上だ。

もし上総が評議委員長の段階で生徒会長たちが引き摺り下ろそうとしたとしても、実は対してインパクトがなかったのではないだろうか。もともと力のない評議委員長なのだし、たとえ降ろ

されてもそれがどうしたで終わってしまう。生徒会長はたまたま、出来そこないの評議委員長と当たったから余裕で勝ったのであって、もし本気でまっとうな人間がぶつかってきたらどうなるかわからない。そう思われている可能性は高い。

だが、天羽だったら？

——天羽は倒しがいのある評議委員長だ。俺なんかを蹴落とすよりも、ずっとインパクトをあてられる。もしも、あいつがやらかしたいろんなことを暴露されたとしたら、俺が引き落とされるよりも、ずっと評議委員会の転落ぶりを見せ付けられるというわけだ。

轟さんが心配していたのは、そのあたりだろうか？

——そこを狙っているのか、佐川は。

本当なら、「佐賀生徒会長は」と続けなくてはならないところだけど、上総はあえて「佐川」の名前を重ねた。

——もし、天羽が西月さんをこっぴどく振って、その恨みでもって追いかけてきて、それで大事件に繋がったのだ、ってことになったら。たぶん天羽はずたずたに切り裂かれたまま卒業するはめになるよな。けど、もしもだ。

もしも、そうでなかったとしたら？

杉本の言い分を信じて、轟さんの推理を裏付けられたとしたら？

もしも、西月さんの行動した理由が天羽と関係なかったとしたらどうなる？

もしも、杉本に対して生徒会の女子たちがしたことが本当だとしたら？

上総は書きかけの英語答辞用原稿を一度閉じた。一案が浮かんだ。

——放課後、藤沖に答辞原稿をもらってこよう。三年A組に、あいつ来るよな。

「杉本、ひとつだけ確認したいんだけど、いいか」

教室を出る前に上総は杉本梨南の耳にささやいた。まだ教室には駒方先生が他の生徒たちと教卓で話をしている。一年の生徒だから上総たちの会話を気にする様子はなく、声を潜める必要もないのだが、念には念を入れておいた。

杉本もかばんに荷物を一通りしまい終え、上総の側に接近してきた。

寄り添う、のではなく機械的に張り付くような感じだった。

「何か御用でしょうか」

「うん、ひとつだけなんだけどさ」

もう一度周囲を見渡した。本当はもっとべったり側にくっついて話し掛けたいのだが、さすがに人目はばからずというのは抵抗がある。駒方先生が口でこそ何も言わないものの、さりげなく上総と杉本の様子を伺っているのを、なんとなく自分でも感じていた。

「生徒会室に近江さんはいなかったのか」

「A組の方はいらっしゃいました」

杉本はいつもの一本調子な口調で答えた。あえて濡れた感情を干したような言い方だった。

「お前と佐賀さんが話をしている間、近江さんもそれを聞いてたのか」

「聴力が失われてなければ聞いてらしたのでは」

——やはり近江さんが混じっていたのか。

「その後で西月さんと話をしたんだな」

「はい」

それだけわかれば十分だ。上総は杉本を真正面から見下ろし、しばらく言葉を捜していた。見つからない。何かを伝えたい気はするのだが適当な言い方がどれなのかわからない。

「杉本」

「はい」

これから自分がしようとしていることをもし杉本が知ったら、なんと言うだろう？

止めてくれるだろうか。それとも、軽蔑して一切無視するだろうか。

「評議委員会に行ってくる。藤沖から当時の原稿もらってくる」

結局伝えられなかった。

「そうですか、いってらっしゃいませ」

特別杉本もなにも感じていないようだった。それならそれでよい。上総はカバンとコートを両腕に抱え、廊下に出た。教室に比べると空気は若干、冷えていた。

——これ以上、落ちるところはないんだ。

難波、貴史、そして杉本の言葉を聞いて、授業中気付かれないように計画を練っていた。自分でもどうしてこんな、自虐めいたやり方が頭にひらめいたのかわからない。一年前、宿泊研修の

バス内で起こした脱走劇の際も、まる一日計画を立てる時間があった。プラスとマイナス両方を掛け合わせ、さらに本条先輩や天羽に相談する余裕もあった。今はたった一時間少ししかなかったというのに、もう自分の中で決断してしまっている。どうしてそこまで出来てしまうのだろうか。

——もし、今俺が考えていることを杉本が気が付いたとしたら。

もう一度上総は思いを巡らせた。

——もう二度と、口を利いてくれないだろうな。たぶん、目もあわせようとしないうだろうな。

そっと口元だけでつぶやいた。

「それでも、まあいいか」

今の上総が求めているものは、杉本からの深い尊敬ではない。そんなのはすでに関崎以外に向かうはずもない。一緒にいられる空間だけでもない。どうせ後一ヶ月で卒業だ。

だけど、杉本がひとりっきりになってしまう間、責めたてる誰かを追い払うための虫除け、それくらいはしたっていいだろう。杉本に永遠に嫌われてしまったとしても。

季節はずれの蚊取り線香をつけて去るのも、また良しだ。

上総はかばんから黒い手帳を取り出しブレザーのポケットにつっこんだ。前髪はいつものように軽く上にあがるようにしてあるが、それも軽くかき回した。確か三年A組の教室に集まっていると聞いている。評議と生徒会以外にも、次代を背負うらしい人材も顔をそろえていると聞く。ギャラリーも問題なし。あとは、演じるだけだ。

——もう捨てるものなんて、何もない。

階段を昇ると、一階の踊り場に南雲が突っ立っていた。

何か物思いにふけているようで、窓をぼけっと眺めていた。

人の想いを邪魔するほど野暮な性格ではない。声をかけずにそのまま二階へ上がった。

三年A組の教室前に立つ。

去年、本条先輩のいたクラスということもあり、しょっちゅう出入りしていたものだった。

——本条先輩、どうしてるかな。

もう二度と連絡できない自分の立場。だけど一番最初に上総の存在を認めてくれた人だった。本条先輩がいた頃は、出入り口に立っているだけですぐ「おい、そんなところに突っ立ってるんじゃないやねえよ。こっちこい」と呼び込んでくれたのに。今は自分で覚悟を決めて足を踏み入れないといけない場所になっている。上総は深く息を吸い込んだ。いつものように扉のノブへ手をかけようとした。その前にノックをしようと指を鉤型にし、すぐにやめた。

——もう、捨てるものなんて、何もない。

軽くノブをひねった。音は聞こえない。ほんの少し細く開けた。女子の何か叫んでいる声がある。つま先をドアに差込むと上総は一気に蹴り飛ばし、その片手で抑え、まずは一声。

「遅くなりました。どこに座ればいいですか？」

普段の自分にはない、隠れていた鋭い声が出た。

知らない奴が背中に張り付いた。

自然と笑みも洩れている。教卓になぜか座っている佐賀はるみと、その脇で髪のを掻き毟っていたらしい天羽、苦虫噛み潰した顔をしている難波、びっくりまなこの更科、じっと真剣な眼差しを送ってくる轟さんと眠そうな顔の近江さん、奥の席でくっつきあっている美里と貴史、その他見知った面子が顔をそろえていた。近江さんはいなかったが藤沖も反対側の席で両腕を組んでいる。上総はまず、一人一人をじっくり目で追っていった。

「立村先輩、もう始まっておりますが」

一瞬だけ驚いた顔を見せたがすぐに冷静に戻ったのだろう。佐賀はるみが教壇の椅子から穏やかに答えた。周囲がざわめき立つが、決して「立村先輩？」などといった個人名が浮かぶことはない。ただ評議委員たちも生徒会役員たちも、またその他の連中もみな、わさわさと何か言葉を発しているだけだった。聞き取る必要はない。

ブレザーポケットの手帳が少し重い。上総はポケットにまず手をつっこみ、手帳を握り締めた。肩をいからすようにしてそのまま教壇にのぼり、意識して大またで佐賀生徒会長に近づいた。教壇の上から見下ろした景色は、一年前のものと代わらないけれども、ただ向けられた視線の刺がサボテン状態だった。奥の席で美里と貴史が身振り手振りで、「あんたやめなさいよ！」とばかりに合図しているがそんなの知ったことじゃない。こちらから挨拶にいくだけのことだ。

「詳しい事情はよくわからないけど、一応俺も評議の端くれだから、後ろに座ってるけど、文句ないでしょう？」

教室中に聞こえるように、これも声を張り上げる。

「あんた今更何しに」

素早く立ちはだかろうとするのは、予想通り新井林だった。相変わらずのスポーツ刈り頭を数回ぐるぐる回し、佐賀はるみの前、教壇の前に張り付いた。次期評議委員長、そして佐賀はるみの用心棒。一年前だったら上総もびっくりとひきつって、一歩、二歩、退いただろう。たとえ一年上だとしてもそんなの関係ないのだから。でも今はそんな弱い自分であってはならない。

——俺には、やらねばならないことがある。

「一応、年上を敬えてことを忘れるな。伊達にお前を仕込んだわけじゃないだろう」

——実際仕込んだわけじゃないけどさ。

はったりだ。しかたない。くくっと後ろの方で笑いをこらえる人物あり。見知らぬ男子女子たちだった。上総は教壇で佐賀はるみの隣に立ったまま、新井林を見下ろした。

「最後の評議委員会、出たって問題ないだろう」

「今までずっと放置しといて今更先輩面するんじゃないぞ！」

おや、もうとっくに敬語が消えている。こいつは佐賀はるみに関係する出来事ならば何一つ遠慮することのない男だし、これもしょうがないことか。こっくり頷き、上総はもう一度笑顔をしらえた。いつものように口元だけほころばせるのではなく、満面の作り笑顔を浮かべた。こんなに笑ったの、生まれてからほとんどない。

「悪いけど、そこ、どいて」

新井林の肩を力込めて押しやった。さすがに委員会と生徒会とが交じり合った環境の中、新井林がパンチを食らわすことはできなかったようだ。一番後ろの席に向かうと、そこには美里と貴

史が席を並べて座っていた。さっきから一番後ろに鎮座ましていた。ひょいと後ろを振り返ると、轟さんが無言で上総の様子を伺っていた。

「お前、来たのか」

「なんとなく、来たくなったからきたってわけだけどさ」

貴史の返事にいいかげんな言い方で答えた。いわゆる「軽い奴ら」ののりである。上総の自己表現辞書には入っていないパターンの行動だ。しかもへらへら笑いまでセット。明らかに貴史も美里も、同じリズムで瞞を吊り上げた。机を両手で思い切り叩く美里が、声だけ低く続けた。

「立村くん、何よいきなり！ あんたって今ごろ、どうして」

「だってさ、羽飛が来いっていうからしょうがないしさ」

今まで美里の前で、こんないいかげんな態度を取ったことはない。

その点重々承知している。

あえて今、ここで言い放ってしまっているのか、迷うのを上総はやめた。

自分の本能に任せて、やりたいようにやるだけだ。あとは、すべてを背負うだけ。

「だから、悪いけど羽飛の隣に行くから、それでいいだろ。椅子だけでいい。どうせ清坂氏、自分でノート取ってるだろうし、俺が書いたもんなんて役立たないだろ」

「立村お前、何考えてるんだ！ 委員会、みんなお前のこと待ってたってのにな！」

血を昇らせたのか、次は貴史が上総の頭を軽く小突いた。まだ手加減している。ということは冗談でやっているかと判断したのだろう。周囲はまだ、息を呑んで上総を見つめている。いきなり立ち上がり、

「ありま、立村ちゃん、待ってたぜ。まずは落ち着けや」

天羽が片手で難波を制しつつ、上総の隣にしゃがみこんだ。相変わらずのくったくない笑顔だがその裏に、どろどろした家庭の事情が絡みついていることを上総は知っている。口にはしなないが、忘れはしない。思わず正気に戻りたくなるが、かろうじてこらえる。

「悪いけどさ、俺も話終わったらさっさと帰るからさ。送らなくちゃなんない相手がいるからさ」

「はあ？」

聞き返そうとしたのは天羽だけではない、難波、更科、轟さん、貴史、美里も一緒だった。口を開きかけた天羽を制したのは上総ではなく、生徒会役員の方だった。佐賀ではなく、もうひとり、おかつ髪にヘアバンドをかけた女子が、ひきつり気味に声を挙げた。

「時間が限られておりますので、先に進めさせていただきます」

「どこまで話進んでいるのか、聞いていいですか」

上総は退かなかった。

——今だけは絶対に、退かない。

明らかに驚いたのかその女子……顔を見て思い出した。去年副会長を務め、現在は書記に回っている生徒会役員の二年だ。名前は度忘れしたが、確か一緒につるんでいるのが上総の過去を暴き立てて名をはせた風見百合子であることは知っていた……は鋭い視線でにらみつけてきた。この会合には教師が混じっていない。それでもしっかし押しえがきいているのはやはり、佐賀を始

めとする生徒会役員たちの力なのだろうか。

「他の方に確認されたらいかがですか」

つとんげんな返事が返ってきた。隣で貴史を迂回するように、美里がノートを差し出そうとする。いつもならそれをチェックしあうだろう。頼っている。でも今はする気もない。

——清坂氏、今までありがとう。

これだけを心中呟いて、上総はまたいかげん野郎の笑顔でめいっばい答えた。もちろん片手でノートは美里に押しやった。

「時間がないんでさっさと教えてくれたってかまわないでしょうに」

後頭部を今度は手加減なく殴られた。貴史の仕業だ。こちらにも言い返しておく必要がある。椅子を引き出して隣に置き、上総はにっこりと更科的「子犬の笑顔」で立ち向かった。

「痛いな、まあいいよ、とにかく俺はやることやったらさっさと帰るから、そのつもりでな」

「帰るだと？ 立村！」

振り返りさらに握りこぶしを振り上げようとする難波を、今度は轟さんが押さえた。上総にちらと視線を送り、

「時間がないんだから、早く早く」

もう一度、轟さんは上総の顔を見据えると自分の席に着いた。

この交流会が行われるきっかけとなったのは、おそらくこの前起きた評議委員三年たちの修羅場事件の影響だろう。難波もそんなことを匂わせていたし、轟さんも天羽も同じことを話していた。現在の段階で上総が知っていることはほんのわずかだし、その情報を元に動いたとしてもそれが真実だという保証はどこにもない。

嘘を決してつかない杉本梨南の言葉だけ、それを信じたかった。

たとえそれが思い込みだとしても、杉本梨南の訴える痛みをそのまま受け止めたかった。

——杉本だけは、絶対に。

上総は考えることをやめた。本条先輩の威勢堂々たる立ち振る舞い、羽飛や天羽、新井林たちの男子らしい態度、難波の一途な暴走、更科のチワワな笑顔、そして美里のまっすぐな眼差し。三年間受け止めてきたことをこの五分間ですべて出し切る、そう決めた。

一生、軽蔑されてもいい。上総はすべての責任を全身で取る。

あきれ果てた顔で佐賀と話をした生徒会役員女子は、目の前の席に座っている男子に何か話し掛けていた。上総の方へ冷たい視線を送ってきたのはおそらく、霧島さんの弟である副会長だろう。いつもならば「お前の姉さんは大丈夫なのか？」と問いたいところだが、轟さんの注意もあるしここはこらえておく。上総は全く気付かぬふりをして足を組んだ。頭に手を組んでひっくり返りたいけれどもさすがに理性が働いた。

「今、天羽評議委員長に、今後の評議委員会に関する位置付けを確認していたところですよ」

——ジャストタイミングか。

霧島弟が、少し甲高い声で上総に返事した。かすかにばかにしたような響きを感じるのは背が

少しそりかえっていたからだろう。気にはしない。上総はわざと大きく頷いた。

「そうか。つまり今後、評議委員会を生徒会のみなさん、どうしたいわけなのかな」

またざわつく。ひとりおいて隣から、「立村くんいいかげんにしなさいよ!」、そう叫ぶ声がある。無視してよし。一切動かず上総は、教壇の佐賀はるみに向けて言葉の弾丸をぶつけるタイミングを待った。

「立村先輩ならそのことをご存知のはずです。生徒会としてはこれから先、評議委員会のみなさんが中心となって開いてきた交流会を、今度は私たちの手で運営したいと考えてます」

「それで? 天羽、お前なんて言った?」

不意を突かれた風に今度は天羽が上総に向き直った。椅子を直した。

「まああれだ。俺もそのことには異存がないんだが、ただ、俺たち評議委員会には経験つつう財産がてんこもりだろ? だからなあ、ここんところで、協力しやしませんかとだな」

「新井林、お前は?」

すでに敬語をとっぴらったはずの新井林も、先ほどの上総豹変に戸惑っているのかまた丁寧語を使い始めた。

「女子中心の生徒会では荷が重いつてというのが俺の考えです。経験のある評議委員会が今年一年手伝うのが自然だと、俺は思います」

「じゃあなんで、それが議題になつてるわけ?」

いつもの穏やかな言い方では飲まれてしまう。隣の羽飛からカンペンケースを奪い取り、上総は机をこつこつ叩いた。

「あ、俺のもの何するんだ、こいつ、手癖悪すぎ」

「誤解招く表現するなよな」

すぐに返し、上総は足を組みなおした。椅子だけだからそのあたり丸見えだ。膝の上にはコートを重ね、さらにカバンを載せた。

「新井林の言い分も、天羽の考えも俺は正しいと思うけど、生徒会のみなさんは何がご不満なわけ」

「私が聞いたところによりますと、評議委員会がすべて行ってきたことを、四月以降はすべて私たち生徒会が引き継ぐということになっていたようですが。藤沖先輩、そうですね」

元生徒会長藤沖は上総を一切見ず、佐賀に向かい頷いた。ちなみに説明したのはヘアバンドをかけた女子の方だ。佐賀ではない。

——一切あの人、あの女子に全部投げてるな。

新井林があれだけ屈辱的な立場に立たされているにもかかわらず、相変わらず佐賀はるみのナイトでいる事実を上総は確認した。つまり、悪役を他の生徒会役員……ヘアバンド女子であり、霧島弟であり……に振り、佐賀はるみ自身はおとなしい女子のふりをしているというわけだ。もしかしたら杉本との一件もそうか もしれない。佐賀は杉本とかつての親友として話をしたように思っているが、例のふたりプラス風見百合子が結託して何かをやらかしたとしても不思議はない。さらに杉本の話では、その場に近江さんがいた可能性もあるという。

近江さんはもともと美里のような賢い女子が好きな人である。賢い＝佐賀はるみのような女子に

関心を持たないとも限らない。

——裏を取る時間がほしいよな。

悔いた。今更どうしようもないとは思う。自分がこれから導火線に火をつけようとしている爆弾が、実はスカだったとしたらどう始末すればいいだろう。杉本の言い分を鵜呑みにしただけと馬鹿にされ開き直られたら。自分がかまわない。どうせ高校に行ってそれきり、軽蔑男の三年間を耐えればいい。

でも、杉本は？

嘘つき女子、血迷った馬鹿男子にしつこくまとわりつかれただけの馬鹿女子と物笑いにされるだけかもしれあにじゃないか？ そんなことをして本当に、本当にいいのか？ 自分自身はもう捨てるものなど何もないからこうやってふざけたまねしてられる。でも、誇り高いいくさおとめ、杉本梨南にこれ以上の地獄を 味合わせていいものなのか？

——せめて同じ学年だったら。

どうしようもないことばかりが頭の中を駆け巡る。

上総は何度か首をぐるぐる回した。肩を交互に自分でもんだ。落ち着きない風に見えるだろうが、それも作戦のうちだ。

「藤沖、悪いんだけど、俺そんな話したか？ 新井林と次の代で協力しあえばそれでいいって話はしたけどな」

半年間全く無交渉だった相手に声をかけるのは、自分にとって身を切るような恐怖だったはず。なのに、なぜか顔をゆがめてにやけていればいくらでも口から飛び出す。そうだ、この調子でいけばいい。

藤沖はかすかに首を動かしたが、すぐに黒板へ目を戻し、

「こいつとしゃべることはない。話を続ける」

佐賀に指示を出した。元生徒会長、権力、健在だ。

「はい。わかりました」

すずやかに返事をした佐賀はるみは、上総にこっくりと頷きながら、

「私も本当は、評議委員会のみなさんにお手伝いしていただきたいのですが、先生たちのご意見が」

言葉尻を引き取り、教卓前の席に陣取っている霧島弟が甲高い声で続けた。

「先生たちは評議委員会よりも生徒会の方に、どんどん活動してもらいたいみたいなことを話しましたよ」

「それはどうして？」

しらけていく空気も怖くない。上総は負けじとトーン高めに言い返した。

「私たちもその辺はわかりませんが、ある先生が言っていましたよ」

さらにストロークを返してきたのはヘアバンドの女子だった。

「先生が言う以上は、それに逆らうことはできないと、私も思います」

——もったもた。

まずはこの辺で様子見をしようと心積りし、上総は更科特有の子犬笑顔を浮かべてみた。と同

時に

「うるさすぎるぞ、立村」

藤沖から真四角の体躯を上総のいる方へ向け一喝された。

「お前いったい何しに来た。真剣に話をしようとしているのになぜ茶化す。つたくたまってるんじゃないのか？ いいかげんにしろ！」

しかも下ネタつき。

普段なら上総の一番苦手なシュチュエーションのはずだった。

「茶化してなんかいないけどな。あとでお前から答辞の原稿をもらうつもりではいるけど、もうできた？」

こいつはおそらく、四月以降応援団の団長として活躍することになるだろう。嫌いな奴じゃなかったけれども、嫌われてしまったのだからしかたない。もう二度と会話を交わすこともないだろう。ならば、とことん演じるだけだ。上総は足を組みなおし、ぐるりと男子女子を見渡したのち、言い放った。

「そうだ、藤沖悪いけど、俺は毎日、風呂場とベッドできっちりと抜くもの抜いてるよ。心配してただかなくても結構。あっちの欲求不満が原因じゃあないから、その点誤解なきように」

「馬鹿が！」

今度こそ藤沖は無視を決め込み、再び背を伸ばし両腕を組んだまま黒板に向かった。

本条先輩からは「下ネタをぶちかます時は、女子がいばっている時に不意打ちをかましたい場合の最後の手段だぞ」と言われていた。当時は何を言っているのか全くわからなかった。でも今、目の前の女子たちが顔をしかめて「やらしい、何考えてるんだろう」といわんばかりの視線でもって上総を射ているのを確認し、その意味がかすかにわかりかけてきた。

——先生たちに受けのいい女子中心の生徒会連中をまず動揺させる、まずはそこからだ。

生徒会優位で進んでいる話し合いを、まずはかき回そう。

もうひとつ、火薬を仕込もう。

生徒会女子たちが杉本に対して行ったことすべてを、関係者たちの目の前でさらけ出すチャンスを上総はもう少し、待つことにした。たぶん、それほど時間はかからないだろう。目をちらちらさせる女子たちの様子を確認し、上総は静かに微笑んだ。

天羽と佐賀との間でどんなやり取りが行われていたのかを、まずは確認したかった。自分で計画したこととはいえ、あれだけ顰蹙買う言動をやらかしていたら上総に教えてくれる奴がいるわけもなく、しばらく口を閉ざした方がいいと判断したからだった。

——天羽としては、「ただの学級委員会」に押し込められる前に最低限の権利を確保したいはずだ。

——それと、新井林も。

足を組んだまま、上総は両手を組み合わせてじっと耳を澄ませた。

隣から視線がちらちら、細い光の糸みたく飛んでくるのを頬で感じていた。

——気にしている暇なんてない。

E組で見送ってくれた杉本の瞳が脳裏にちらついた。

実質、話を進めているのは佐賀生徒会長ではなく、おかつぱ髪のヘアバンド女子だった。

「私たちが決めているわけではないので、事実だけお伝えしますが」

上総の乱入でだいぶ苛立ちも増したよう。頬のあたりをかすかにくぼませながらその女子は座ったまま天羽に告げた。

「先生たちは、現在の生徒会にかなり期待してくださってますし、実際四月以降の行事に関しては私たちが担当することで決まりだとおっしゃってます。新入生を迎える会もそうです。去年までは評議委員会さんの方ですべて担当していただきましたが、まだメンバーが整っていない段階でそういう大きな行事を担当するのは無理があるのではないかということです」

「いやあ、そんなことはなかったよなあ。なあ、難波、更科、そうだろ？」

あえて上総に振らないのは、天羽も雰囲気波立たせたくないのだろう。

更科がまずこっくり頷き、例の子犬的笑顔を振り撒いた。上級生ゆえにその効果も半減しているのが残念だ。

「そうそう。もともと評議委員会はみな気心しれてたから、細かいことはどんどん三月のうちに片付けてたし、かえて生徒会の方が大変なんじゃないかなって俺は思いますよ。俺たちは一年付き合ってるけど、生徒会のみなさん、半年しか」

言いかけたところをばしりと叩く。霧島弟が立ち上がった。

「それは去年たまたまでしょう。ま、去年の段階で、一人すごい騒ぎで入れ替わりがあったってことは聞いてますがね」

かなり甲高い声で耳障りだった。どうも声変わりがまだ終わっていないらしい。女子と混じってもそれほど違和感はない。

「その後は櫛の歯が抜けるがごとく、ばりばりと評議委員さんたちが入れ替わって行って、チームワークを取るのが大変だったんじゃないですか。それも、最後は委員長までも」

「私も同感です」

おかつぱ髪のヘアバンド女子は少し上目遣いで霧島弟を見やり、大きく頷いた。ちらと上総の

方にも鋭い視線を送り、すぐに戻した。それが合図になったのか、教室内全員の視線が上総に集中し、またひそひそ声が沸いた。

「まあまあ、それはいいとして」

天羽が穏やかに話を戻そうとした。明らかに生徒会側の優位が確立された以上、天羽評議委員長としては現状維持を保つしかないと判断したのだろう。同じ立場ならば上総もきっとそうするだろう。もう少し様子を見ることにした。

「立村、黙れよ」

なんもしゃべっていないというのに、なぜか貴史がじろりとにらむ。

「何もしゃべっちゃいないのにな」

まずはこいつに言い返すだけ、に止めておいた。

——しかし、面白いよな。

たぶん、上総の意識している中では生まれて初めての傍若無人なこの振る舞い。やらかしてみまではかなり心臓どきどきものだったが、いざ口にしてみたところ面白いくらいあふれ出てくる。扉を蹴飛ばした段階で、すべてのいじいじした背後霊みたいなものをおっぱらったようなものかもしれない。普段だったら決して口に出せないような下ネタまでさらっと飛ばしてしまっただけからはもう、何も怖いものなどなかった。

——本来、俺のいるべき場所に戻るだけであって、それ以下の何ものでもないんだしな。

おそらく、美里には愛想つかされるだろう。視線の痛さでそれは覚悟している。

貴史には次の日一気に三年D組で言いふらされるだろう。それも重々承知だ。

天羽、難波、更科は「なんで余計なことしにきたんだ！」とばかりに激怒するだろう。なんで上総を引きずり込んだかを、今ごろきつと、鬼のように後悔しているに違いない。

両腕を組んだまま黒板をにらみついている藤沖も、四月以降は絶対に上総を黙殺しようと決め込んでいるに違いない。そりゃそうだ。

かなりマイナスの部分だけが浮き上がってくるこの事態。いつもだったらなんとか最小限で食い止めようとするだろう。それをしようとは思わずに、他人事のように面白く眺めている自分が、上総には信じられなかった。

——杉本には今後無視されるだろうが、まあいっか。

一瞬、ちくっとするものがある。すぐに打ち消した。

——英語科で関崎情報を流すからって言えば、すぐにご機嫌直すさ。まあいいや。

「まあまあ、生徒会のみなさん、まずは評議委員会の立場もわかってくれるとうれしいなあということでもいいっすか？」

天羽が頭をかきながら立ち上がった。事態收拾に向けてようやくいい案を思いついたらしい。

「最近の評議がころころ入れ替わっているってのは全くもってその通りで、お恥ずかしい限りなんですけどね。だけどご存知っしょ。去年から俺たち評議委員会では、生徒会と委員会同士の風通しをよくするためにあえてそうやってるってところを、ですなえ」

「あえて、ですか？」

「そんなわけないでしょう。よほど人間関係でごたつかない限りは代わらないのが今までの評議委員会だったんじゃないですか」

ヘアバンド女子と霧島弟が重ね重ね言う。天羽は落ち着いて交わした。

「団結力が必要な集団ですから、ベストな人材を要所要所で入れていくってのも、またひとつの方法ではないかなということです。あ、それとですねえ、みなさん勘違いしてるようですが、評議委員長が代わった件については別になあ、個人のつるし上げなんかじゃないってどうして何度言ってもわかってもらえないのか、俺にはそこんところ、ちょっと、謎」

——まあ実際、つるし上げだからな。

上総にまた、視線が集中する。天羽が語るのも無視して、一年、二年、三年の殆どが上総をやぶにらみに見据えた。知らん顔して上総は様子見に徹した。

「たとえば前の年、本条先輩がしきっていた頃ならまた話は別なんですよねえ。ありゃあ、あの人にくっついていくのは普通の奴じゃあ絶対無理。もし今回みたく切り替えなんぞしたらああた、一発で終わっちゃいますよねえ。だから俺もそれはそれでいいと思いますしかし。俺たちの代で言えば、もし前評議委員長のままで持って行って、そのまま終わっちゃった場合だと、残りの面子のやる事がなくなっちゃう可能性、出てきますわな。立村ともそのあたりきっちり話をしたんですがね」

——話なんてしてないだろうに。

天羽のでっち上げにはあきれるといよりも感心する。くちばしをはさまないでおこう。

「つまり俺たちの代で言えば、みな三年連中はそれぞれの個性ってかそういうものが豊富だったことで、全員の個性を幅広くですね、生かすような形に持っていきたいってこと。それでまず前期は立村が基盤をこしらえて、評議委員会同士の外部交流会なんぞを行って盛り上げて、後期は俺こと天羽忠文がですね、ゆっくりと生徒会のみなさんと協力してさらにすばらしい青大附属の交流をおこなっていこうじゃありませんか、と、ま、そういったところですよ」

「私が聞いた話とは全然違いますね。どこでそういう話になったのでしょうか」

すぐに切り込んだのはヘアバンド女子だった。ちっとも驚かずに、間髪入れず、

「評議顧問の先生から聞いたところによりますと、ちっとも三年の評議委員がまとまらなくて大変だったので、あえて選挙を行っただけだということでしたが」

ここでも「先生」だ。

——やたらと「先生」の話を持ち出すよな。

おそらくこのあたりに、生徒会役員の強気な態度の理由が隠されているのだろう。だいたい上総もわからないわけではなかった。もともと評議委員会では顧問の介入が殆どなかったはずだった。少なくとも上総が評議委員長でいた時まではそうだった。しかし、生徒会長が佐賀に決まり、評議委員長が天羽となった段階で、やたらと大人たちの助言が増えて来ていたのは感じていた。すでに書記だった上総に影響はなく、主に天羽がひとりでその「助言」を聞いて頷くだけだったので、さほどの心配はしていなかった。

——けど、生徒会側は、違うのか。

今まで顧問教師の委員会に対する影響が薄かった分、生徒会にはうるさいくらいチェックが入っていたと聞いたことがある。藤沖が生徒会長だった頃も、かなりうざったそうに肩をすくめていたものだった。当時、上総も本条先輩から「うるさい先公がいなくてその点、評議はやりいいぞ」とか言われていたし、実質その通りだとも思っていた。

——もしかして生徒会側は、先生たちのしつこい介入を、利用したのだろうか？

上総は喋りつづけている女子を無視して、教壇でちんまり座っている佐賀を正面から見据えた。小首を傾げ、時折口元に手を当て考え込んでいる。殆ど言葉を発せず、心配そうに発言者を見つめている。生徒会長の堂々たるオーラは感じない。

——先生たちがその時に発言したことを、生徒会側の都合いいところだけ取り出していく、ってことじゃないのかな。

天羽がいくら評議委員内の内部事情について熱く語ったとしても、評議委員はともかくとして他の外部関係者には伝わりにくい。しょせん、自分らは中学生なのだから。

しかし、生徒会側の訴える「先生の発言」は、中学生ではなくれっきとした大人の言葉だ。

正直、上総からしたら先生だって勘違い熱血野郎も混じっているのだからあいつらをひとくくりに「大人」と言ってほしくないと思う。思うのだが、それは上総自身の考えであって他の人たちには通じないだろう。

——大人は強い。簡単には勝てない。中学生は弱い。

もし生徒会側が「大人」の介入利用を意識的に行っているとしたら、評議委員会にもう勝ち目はない。新井林には悪いが、四月以降はただの学級委員長としての意識を持ってもらうしかない。子どもたちだけの楽園と、大人の後ろ盾を得た生徒会と。もし今の上総が評議委員長だったら、もっと別の切り込み方もあっただろうがそんなできないこと考えてもしょうがない。まずは見守るだけである。

「本日、評議委員会のみなさんにご同席いただいたのは、私たち生徒会に先生たちがこっそり教えてくれたことを、できるだけ早くお伝えしたかったからなんです」

ようやく、佐賀はるみが発言を始めた。

決して感情をもちにあらわすわけでもなく、静かに、それでもかすかな笑みを浮かべている。「今渋谷さんと、霧島くんが話してくれましたように、実は私たちの間でもこれからどうすればいいのかと、困り果てていたところなんです」

そんなの聞いちゃいないとばかりに、霧島弟がつっかかろうとするのだが佐賀はるみは首を小さく振り微笑んだ。

「私たち、今まで、どういう風にすればいいのかと藤沖会長にお尋ねしたり、先生たちに相談したりしてはいたのですが、それがよくなかったのかもしれない。いつのまにか先生たちが先の予定を組まれてしまったんです」

——責任転嫁ときたか。

教師たちがすべての予定を組み、「こうしなさい」と命令したとすれば、生徒会側の責任ではなくなるわけだ。なるほど、そうすれば結局「しかたなく頭を下げざるを得なかった生徒会」

が「うるさい評議委員会」にお願いして身を引いてもらおうとしているふうに見える。

——天羽の奴、どう思ってるんだろう？

そっと天羽、難波、更科の三年三羽ガラスを見守る。

天羽はさほどいらだつわけでもなく、シャープペンをぐるぐる回している。

難波は完全に機嫌を悪くしているのが見え見え。指を何度もぼきぼき折っている。きっと音がしているに違いない。

更科は頼杖をついて、いつものきょとんとした眼差しで周囲を見渡している。

それぞれがそれぞれに、思うところもあるのだろう。

——まずは佐賀さんの言い分を全部聞いた上で。

上総は次の行動を決めることにした。

「今回あえてこのように、生徒だけの集まりを開くことを先生たちに許していただいたのは、そのあたりにも、理由があるんです」

佐賀はるみはさらに小首を傾げ、そっと耳元の丸い編み込み髪に手を触れた。中国娘風の良く似合う髪型だった。思わず咳払いするのが新井林か。

「本当だったらきちんと、先生たちが評議委員会のみなさんに説明を行って、今後は生徒会中心で持っていきましようって話をしてくださる、そういうはずだったんです。でも、私」

また言葉をとぎらせると、次は口元にそっと手を当て、くしゅんとくしゃみをした。

「ごめんなさい、私、うまく言えなくて。でも私、それって評議委員会のみなさんに対して、失礼なことじゃないかって思えてならなかったんです。だってそうしたら私たち、せっかくここまで私たちに協力してくださった評議委員会のみなさんを裏切ることになってしまいます。私、それだけは、どうしても、したくなかったんです。私、だから」

「よっくわかったでしょう？ 天羽先輩」

いきなり割り込んだのは例のヘアバンド女子だった。なんだかこの女子は、天羽に対して激しい敵意をむき出しにしているような気がした。誰か注意でもしないのか？ 元生徒会長の藤沖あたりでも。まったくその気はなさそうだった。佐賀の言葉をさえぎるようにして、ヘアバンド女子は一気にまくし立てた。

「いいですか、今回のこの会は、佐賀さんのおかげで成り立ってるんですよ。本当だったら評議委員会なんてさっさと終わってしまっただけなんですよ。特に最近あんなごたごたがあった以上、先生たちの判断で本来の職務を全うする集団に戻ってもらってよかったんですよ。それを、佐賀さんがいくらなんでもそれはって言い張ったから、私たちもしかたなく、そうしてるんですよ。いいですか。私たちは、本当だったらこんなこと、しなくてよかったんですよ」

またざわめくが、今度はどちらにも顔くわけでもない。ちらちら周囲を見渡しつつ、様子を伺っているかのようだった。一、二年の評議委員たちがどう反応しているかを見守ると、たいくつしてきたのか手紙をこっそり書きながら折紙風に畳み込んでいる女子を発見した。一年だった。またその隣ではつぶして眠りこけている奴もいる。こいつは運動部と聞いているのでおそらく疲れているのだろう。とがめる気はないが、しかしこれだけ生徒会の厳しい言葉が続くにもか

かわらずみな興味を示さないのは、どうでもいいからなのかもしれない。だんだん力が抜けていく。

「ですから私たちとしては、みなさんにここではっきりと約束していただきたいんです」

——宣言ってなにをだよ。

膝を組み直すタイミングを計りながら、上総は前かがみになりコートを抱いた。

ヘアバンド女子は少し反り返るようにして、唇をまっすぐ結んだ。

「これから先、先生たちがいろいろなことをおっしゃるでしょうがそれを佐賀生徒会長の責任にしてぶつぶつ言うのはやめていただきたいということです。天羽先輩、先日からずっとお願いしてましたけれども、なぜ会長のやり方を責めようとするんですか？ 会長は観た通りおとなしい感じだし、どこかの誰かとは違って押しも強くありません。でも、青大附中のことを一生懸命考えて、それから私たち生徒会のこと、もちろん委員会関係の人たちのプライドも慮って、それで一生懸命うまくいくようにしてるんです。佐賀さんが生徒会長になってから、目立ったトラブルって、これまでありましたっけ？」

その言葉はじわりと上総の胸に響いた。

——ないな、表向きは。

「評議委員会は今まで特別な地位に置かれてましたけれども、話を聞けば内部でいろいろなごたごたが起こってしまい、先生たちの手を借りなくてはいけないほど困った事態に陥っているという話も、この前噂で耳にしました。そうですよね、霧島くん」

かなり不快そうに霧島弟も頷いた。

「僕はもっと詳しいことを知ってますが、あえて評議委員会の名誉のために控えます」

上総は難波の方をちらと見た。あいつが一番の火薬庫であることを知っている。もし霧島姉のことを口にしたら、奴がどう出るか上総には読めない。うつむいてノートに何かを書き付けているが、それが何かもわからない。

「現在青大附中において誰がリーダーになるべきか、それをここではっきりさせる必要があると私は思います。もちろん、今まで評議委員会が行ってこられたことを否定はしませんが、現状維持のままでは全く何も変わりません。先生たちの考えを最優先に考え、これからは生徒会長である佐賀さんを中心とした生徒会執行部をもっと盛りたてて頂きたいのです」

——新井林はどう出る？

上総が読めない男子がもうひとりいた。

次期評議委員長になるはずの新井林は相変わらず背を向けたまま、佐賀の方を見つめている。ただ他の男子連中が「見据えている」のに対し、新井林の目つきはどことなくいらただしげだった。何かふたりきりで話し合ったことでもあるのだろうか。気にかかる。

天羽が立ち上がった。いつものように「まあまあまあ」と片手で周囲を制するポーズをつけながら、

「そうそうかっかしなさんなって。ま、生徒会のみなさんが一生懸命やってくれてるってことは俺も感謝してますが。まあ評議委員会の連中ってのは、血の気が多いうっていか、生まれながら

にドラマチックな奴が多いっていうか、とにかく個性派の集団なもので事件が多発するってのはしょうがないことなんですわな。なあ、更科？」

いつもなら「なあ、難波？」と声をかけるはずなのに、あえて逸らした。更科もにこにこ頷いた。

「俺たち評議委員会、厳密に言うと今の三年世代がとんでもないキャラの持ち主だったことは認めるし、先生がたにあきれられたってのも、まあしょうがないかってことで、おっけとしますわな。ただ、それはあくまでも、俺たち三年の話であって二年とは関係ねえんじゃえかなあ、と、評議委員長として思うんだがどうですかねえ？ 会長？」

にやりと天羽は口元を緩めた。佐賀会長はふっと小首を傾げた。

「ごめんなさい、私にはそれ以上、先生たちを止めること、できそうにないんです。だって私たち生徒会は、先生たちのいいなりなんです。むしろ、止めることをお願いしたいのは、私たちの方なんです、でも」

じいっと次に、佐賀は新井林の方へ首を傾げ直した。

「どちらがよくてどちらが正しいとか、そういうのはうまく言えないんですけども、ただ私、今までずっと先生たちの言う通り、あと渋谷さんや霧島くんたちに手伝ってもらったりして生徒会長を務めてきましたが、一度も困ったことが起こってないのは本当なんです。もちろん、最初のお話通り生徒会と評議委員会が協力する形でのやり方で進めてもいいかと思ったのですけれども、そうするとやり方がそれぞれ違うのでまた、トラブルが起きてしまいそうな気、するんです。だから」

最後にじっと天羽へ頷きながら、

「だから、私、このままみんなが喜ぶ形で進めるのなら、先生がたの言う通り、そのまま生徒会が今まで評議委員会のしてきたことを預かる形にするのがいいかになって思ったんです。私、間違ってるでしょうか。それの方が誰もけんかしないですむし、誰も悪者にしなくてすむし、きらわれないですむし。傷つかないですむのではないのでしょうか」

——いかにも、先生たちの御用機関だった過去を利用した、評議委員会のおとり潰し劇か。

他の連中がどう思っているか、上総は読み取るのをやめた。

本当だったら誰か、噛み付いてもいいはずなのだ。新井林も四月から「ただの学級委員長」で納まってしまいう以上悔しがって文句たらたらでもいいはずだ。天羽も、更科も、難波も、いやいや曲がったことの大嫌いな美里も、賢い轟さんも、それなりに言い分があるはずだ。なのに、みな黙っている。口を出そうとしない。

美里に目を走らせてみると、隣の貴史に何かを一生懸命ささやき声で弁じている。声は聞こえないようにしている様子がいつもらしくない。轟さんは黙って天羽を見守っている。この前話してくれた通り「天羽を守りきる」ことにこの人は今の時間を使いたいのだろう。近江さんは相変わらず退屈そうに頬杖をついて窓辺を眺めている。この人にとっては評議委員会という場所がすでにどうでもいいところだったのだろう。

——天羽がどう考えているか知らないが、でも、このままだったらあいつの立場はずたずただ

轟さんが話してくれた天羽の現状を思い出しつつ、上総はいそいで足を組みなおした。耳をかきながら、今行動すべきことを選び出そうとした。佐賀の言葉はまだ続く。

「私、今までたくさんトラブルの経験をしてきました。それでいつも思っていたのですけれども、一番最初のきっかけが起こった時、誰かが我慢して問題を起さなければ、大抵の場合ものごとってそれだけで終わってたんです。だから私、いつも自分のところで問題が大きくならないようにすればいいって、思ってたんです。もちろんそればかりじゃいけないっていうのもわかってましたし、生徒会長になった以上それなりに覚悟はありました。問題が起こる以上は、ちゃんと対処しなくっちゃって、思っていました。でも、本当はみんな、仲良くしていたいんじゃないかなって思うんです。変なことなんて起こさないで、みんな仲良く楽しくしていたいんじゃないかなって」

上総はもう一度佐賀はるみの顔を観察した。何度も片手を耳に当ててポーズを取っている姿に何かひっかかった。

「今回は先生たちが、半ば強引に評議委員会の人たちに話をつけるからっておっしゃってくださったのですけれども、私あえてそれ、断りました。それって失礼だと思うんです。でも、よくよく考えるとそれの方がみんな仲良しでいられるはずなんです。生徒会が努力してみんなを率いるようにして、評議委員会のみなさんはクラスをまとめることに専念していただいて、それぞれがやるべきことをきっちりやるようにすれば、きっと、青大附属はいい学校になるんじゃないかってそういう気がするんです。私も評議委員だったことあるのでそれはわかります。だから、なおさら、私思うんです。評議委員として、クラスのみんなを笑顔にすることが一番大切なことじゃないかって。そのことに集中してもらう方が、きっとみんな、幸せになるんじゃないかって思ったんです。ですから、私は」

ざわめいた声もすでに止んでいる。居眠り中の委員連中を除いてみな、なんとなく納得しそうな顔をしている。三年評議連中のうち更科と難波が何か言い合ってるがそれも聞こえないように潜めている声。美里が筆記用具を持って大きく口を開けて羽飛にささやいているが、あえて上総に聞こえないようにしているひそひそ声。

——これは評議連中に天羽、黙るように指示したな。

——それか、他の連中があえて黙りつづけることを選んだか。

理由には簡単に辿りつく。生徒会連中の裏声を聞き取っているからだろう。

それぞれすねに傷のある身。

天羽は西月さんをめぐるトラブルで近江さんを巻き込みたくない。

難波は霧島さんの自殺未遂を巡る複雑な気持ちを抱えている。家庭内で最大の情報源とされる霧島弟に弱みをこれ以上握られるのはごめんだらう。

美里も頭のいかれた元評議委員長の彼氏でこれ以上傷つくのはごめに決まっている。

新井林も自分のプライドよりも、追い詰められたように振舞う佐賀はるみの方が大事に決まっている。二年評議連中はすでに後期でメンバーがだいぶ代わっている。思ったほどの団結力はない。気持ちとしては半ば、ただの学級委員に納まっているはずだ。

——もしここで天羽が言い返したとしたらどうなるだろう？

すぐに答えが出た。救いようがない。

——一貫の終りだ。

西月さんと霧島さんの自殺未遂事件、そして天羽を頂点とした近江さんと西月さんとの三角関係、ついでに上総自身の杉本梨南誘拐事件、これだけ短期間に派手なことをやらかした三年連中の巣窟だった評議委員会。

教師たちが不安がるのも無理はない。

運悪く天羽がその長であったのも問題に輪をかけた。

メンバーの質も学年が代われればまた変わると言う人もいるけれど、大抵の場合はそのバックグラウンドとなる場所に問題があると判断するだろう。佐賀やヘアバンド女子……確か渋谷と呼んでいた……は正論である。プライドはずたずたにされかねない評議委員の面子を保ってくれた生徒会に一票投じていい。

だが佐賀、渋谷のふたりは肝心なことを忘れている。

——あの事件を起こすきっかけは誰にあったんだ？

——西月さんをあそこまで怒らせるきっかけって、誰が作ったんだ？

してやったりとばかりに目配せしあう渋谷と霧島弟、その他の生徒会役員たちの視線に何かを感じる。残念ながら上総には、「嘘を決してつかない。約束を破らない」杉本梨南しかよりどころがない。西月さんがなぜ、生徒会室に乗り込んでいこうとしたのか、少なくとも西月さんを激昂させる言葉を生徒会室内で発した人間がいたからだろう。いったいそれが何なのか、わからないのが悔しい。せめて西月さんの忠実なる僕、片岡とコミュニケーションを取っておけばよかった。

——佐賀さんたちが杉本に、関崎の入学に関する忠告をしたのは事実だろう。

——それを聞いた西月さんは、きっと杉本をかばうために抗議しに行ったんだろう。

——その場に近江さんがいたとしたら。

近江さんに聞いてみたいがたぶんそれも無理だ。天羽に殺される。

はっきりしているのは、西月さんの行動に天羽は一切かかわっていないという点だ。

轟さんも西月さんの性格上、天羽を恨んで半殺しにするようなことはないと言っていた。

もちろんきっかけは天羽が西月さんを嫌って振ったことにあるけれど、それと一連の事件とは直接関係がない。何よりも西月さんも霧島さんもすでに評議から外れている。渋谷が勝ち誇って言い放つ言葉に、評議委員会を見下すだけの根拠はないはずだ。

——けど、この場にいる奴らはみな、天羽を中心とした三角関係のもつれだと勘違いしているに違いない。みな、そういう風に思ってるらしいしな。でも、生徒会側が「三年評議の問題」として訴えていることは、評議委員会とは関係ない。天羽にも関係ない。評議から降りた人同士のトラブルであって、それ以上の何者でもない。天羽の評判を落とすような言い方をされる必然性なんて、ないはずだ。

もう「学級委員」でいいと思っている他の評議委員連中のことなどどうでもいい。

次期評議委員長の新井林が覚悟しているなら、それ以上手を出す気はない。

ただ、このまま生徒会役員たちの言う通りの「トラブルだらけの評議委員会」たるイメージを他の生徒たちに植え付けたくはない。三年間、評議委員会という楽園で上総が得てきたものをすべて、否定されたくはない。たとえその場所が更地になろうとも、そこで精一杯努力を重ねてきた三年評議連中の名誉を守り、もうひとりの想いを。

——守りたい。

天羽が片手を挙げてゆっくり立ち上がろうとしたのを上総は制し、合図もせずにコートを貴史の座っている机に載せた。

「おい、いきなりびっくりさせるなや」

「立村くん！」

美里と貴史の声が同時だった。聞き流し、そのまま上総はまっすぐ佐賀会長の座る教卓に向かい足を踏み出した。

「立村先輩」

「立村、あの馬鹿が！」

「ホームズ、落ち着け、さっきも言っただろ様子見だよ」

「立村くんって一体何考えてるのよ！」

「あんた、礼儀ってもんを考えろってんだ！」

さまざまな声が評議委員三年組を中心に飛び交うものの、すぐにひそひそ声に取って代わられた。無関心層の答えだった。

掃除後の緑色つややかな黒板を眺め、上総は来た時と同じように佐賀の脇に立ちふさがった。

「悪いんだけど、いくつか訂正したいんだけど、いいかな」

佐賀はるみは前の席で何か言いたそうな渋谷と霧島弟、そして般若状態腰を浮かしかけている新井林に向かい、指先をちょんちょん震わせた。「ちょっと待っててね」という風に制した。

「間違っていることがあればもちろん直します。立村先輩、お願いします」

上総をそっと見上げるようにして、佐賀はるみはまたほつれ毛を直した。

周囲が息を呑み見守っているのが肌でじんじんと伝わってくる。今まで評議委員長として壇上でこんなに注目されたのは初めてかもしれなかった。上総はしばらく佐賀はるみを見下ろし、その側で嘔み付きそうな顔でにらんでいる新井林に視線を向けた。みな、上総の一挙一動を注目している。

——すごいよな。佐賀さんからみだとみんなそうなんだ。

これが上総の人徳でもなければ能力でもないことを、自分がよく知っている。

相手があの、佐賀はるみだから、出来損ない元評議委員長の自分がどう出るか興味津々なだけだ。

しかも最後の最後に自分のやってきたことに泥を塗ろうとしているありさま。

——ばかばかしいか、それもよしだ。

いつか同じ感情にとらわれたことがある。二年近く前の宿泊研修三日目のことを思い出し、上総は思わず口元をほころばせた。

「笑ってるんじゃねえよ」

小声で吐き捨てるように呟く新井林。

上総は一呼吸置いたのち、教卓に片手を置いた。いかにも因縁をつけるような、チンピラっぽい態度を演じてみよう、そう決めた。

「まず、一点目なんだけど」

ゆっくり、しくじらないように切り込もうと思った。

「評議委員の入れ替わりが激しいとか、先生たちの言いがかりとかいろいろ話はあるようだけどこちらには全然流れて来ていないんだよな。なのになんで、生徒会がいきなり割って入ろうとしたのか、そのあたりが今ひとつぴんとこないんだけど、どうだろう」

「今話したじゃないですか」

すぐに割って入る声があり。渋谷の鋭い一声だ。

「今、私も会長もお話した通り、今後私たち生徒会が中心になっていく以上、あとあとと言った言わないのトラブルがないように」

「いやそういう意味じゃなくてさ。悪いけど、俺は会長と話をしたいんだ。君は黙っていてくれるかな」

上総は突っぱねた。あえてここで「僕」ではなく「俺」という一人称を通すことで抵抗をなくした。

「俺が知りたいのは、先生がたの言い分は正直どうでよくて、なんでそこまで強気で出られるのかってことなんだよな。だって、佐賀さん、半年前まで何も知らなかったのにいきなりどうして、って思わなかったのかな」

「もちろんそう思っていました。でも、すぐに覚えられました」

いつもの愛らしい口調で佐賀は答えた。くるりと周囲を見渡して、
「みんなが支えてくれましたから」

かすかに微笑んだ。なぜか新井林の方を見はしなかった。

「そうか、ならなおさら不思議なんだけど、どうして評議委員会を利用しようとあえてしなかったのかな。もったいないだろ。今まで交流会は評議委員会がメインでやってきたわけだし、その他の行事だっていろいろとさ。でも、あえて天羽からそういう話を聞こうとしないで一方的に先生方の意見ばかり取り入れるのは、少しちがうんでないかって気がするんだけどな」

「お話は聞くようにしました。主に天羽先輩から教えていただきましたけど、でも」

佐賀はるみは小首を傾げ、ちらっと新井林に視線を向けた。

「どうしても、それだとけんかになってしまいそうなことになりそうで」

「誰と」

「先生たちとです。どうしても意見が合わないというか、生徒たちばかりで進めると誰かが必ず暴走してしまうので大人たちがきちんと立ち会える場所でやるべきだとか。私もそう思うんです。そうしないと裏で何があっても、真面目にやっている人たちは太刀打ちできませんから。私、去年それ、本当に強く感じたんです」

言葉を切り、上総の目をじっくり覗き込んできた。

——去年、それ、な。

思い当たる節はある。あえてその例を出さなかったのが武士の情けなのだろうか。さて、そこまで考える暇はない。上総は聞き流した振りをして次に切り込んだ。

「当時の評議委員長として詫びを入れておくよ。それはそうとして、佐賀さん、今の話だと評議委員会で得たことはあまり役立たなかったってことになるよな」

「そんなこと言ってません」

いきなり新井林が腰を浮かせそうになるのを、天羽が「動くな」と制した。

「私はただ、評議委員会のやり方ですと続けていくと、またたくさん犠牲者が出てしまうと思うんです。どんなに一生懸命やっても、ひとりの人が嫌ってしまったために追い出されてしまい、心に重たい傷を負ってしまう人だっているでしょうし、本当は二年からもっとやりたかったのに、結局くだらないことであきらめなくちゃいけなくなってしまうかもしれませんし。それに、私、立村先輩が委員長の頃しか評議委員のお仕事できませんでしたがけれども、本当だったらもっと、女子の先輩たちが活躍してもいいはずなのに、どうしてさせてあげられなかったのだろうっていつも思っていました。清坂先輩や近江先輩のような人がどうしていつも、立村先輩や天羽先輩の後ろに回ってしまうのか、それがかわいそうでなりませんでした」

——かわいそう、か。

わからないわけではないし、その点において上総も反省すべきところではあると思う。

しかし、ここで注意したいのは佐賀が指した女子の名前である。

——清坂氏と近江さんを出して、あえて目立っていたはずの霧島さんをひっぱりださないのはやはり、そうか。

つまり、佐賀は最初から、霧島さんを相手にしていなかったということになる。

単純に今評議委員会のメンバーとして参加していないから、というのもあるだろうが。

「評議委員会と生徒会が一緒になって活動するというのはいいことだと思いましたし、私も協力するつもりでした。もちろん今でもその気持ちは変わってません。でも、立村先輩が最初の段階で持ち出した案のままだと、ただ評議委員会と生徒会が一緒になるだけで、生徒会ができることが何もありません。うまくいえないんですけど私たち、生徒会役員としてやれることをしたかった、という気持ちはあります。他のみんなもきっと同じだと思います。でも、生徒会が評議委員会と同じことをするのだったら何にもならないし、それに先生たちをまた意味なくないがしろにしてしまうのも、なんだか申し訳ないなって気がするんです」

「やたらと先生たちのこと持ち出すのはなんでかな？」

上総は少し前かがみになり、佐賀はるみの顔を見据えた。おびえることなく佐賀も応じた。

「私、評議委員のころは気付かなかったんですけどけれども、先生たちは生徒会を通していつも私たちを見守ってくれていらしたみたいなんです。このまま評議委員会の人たちがつっぱして、取り返しのつかないことになってしまったら大変だということで、いつも陰で見守ってくれていたんだなってことが、生徒会に入ってからよくよくわかったんです。私は知らなかったんですけど、二年前の本条先輩が評議委員長だった頃からずっと先生たちはノータッチでいる方がいいという雰囲気になってしまい、そこで割り込むと本条先輩が不良になってしまう可能性あったので遠目で見守ろうってことに決まったらしいんです」

「それは本条先輩に対して失礼じゃないかな」

思わず声が荒立った。抑えようとはしなかった。だが怒鳴りはしなかった。奥歯をかみ締めた。佐賀は全く動じる様子を見せずに続けた。

「私もそれ、先生たちに教えていただくまで知らなかったんです。これ、ここで話しているのかわからないのですが、先生たちは本条先輩の力を買っていたというよりも、本条先輩がこれ以上道を踏みはずさないようにするために、評議委員会を利用したというだけだったらしいんです。同じことをずっとしていたけれども、それがだんだん別の方向に進んで来てしまい、このままではただのクラブになってしまいそうだから、きちんと誰かが守ってあげなくてはならないという雰囲気になってきたようです」

「別に守ってもらわなくてもいいけどな。それで」

「つまり、私たちは本来すべきことに専念して、やらなくてもいいことはすべて先生たちにお任せしたほうがたくさんの人たちを喜ばせられるんじゃないかなって思ったんです。だって、この前も同じことになってしまいましたし。辛いことを生徒たちがやるのではなくて、先生たちに、たとえば、その、E組を作るきっかけになってしまったことのように」

片手を握り締め、危うく持ち上げそうになる。上総は唇をかみ締めた。

「去年の段階で、俺が交流サークルをこしらえようとしたらあっさりと学校側の方針で、E組作りに持っていかれてしまったって言う、あれだな」

「そうなんです。私、あの時、本当に申し訳なかったんです。梨南ちゃん、いえ、杉本さんに対して、クラスから追い出す形になってしまい、本当に心が痛かったんです」

——嘘つけ、それで一番いい思いしたのは君だろうが。

上総が心で激しく罵るのを気付いているのかどうかは知らない。全く驚かず、冷静に交わす佐賀に、上総はかすかに焦りを感じた。ちっとも怖がらず、口では謙虚さを絶やさないのに妙な威圧感があるのはなぜだろう。周囲もそのまま見守りつづけている。もちろん天羽が抑えているのもあるだろうが、誰一人割り込もうとしない。できないのか。

「もし、あの時、もっと別のやり方を評議委員会がしていたらまた話は変わったと思うんです。たとえば、直接先生たちと相談する形にすれば、もっとうまくいったと思うんです。これ以上誰も傷つけないでことがすんだはずなのに、自分たちだけで計画したがためにこういうことになってしまったというのが、私にはとても、辛くて、悲しかったんです。さっき私が言ったことと重なるんですけど、もしあの時、先生に告げ口する勇気があれば今のように梨南ちゃん、いえ、杉本さんを傷つけないですんだはずなのになって、今でも思います」

上総は指先で教卓を軽く叩いた。こつこつ響いた。

一時間前までずっと一緒だった、杉本梨南のまっすぐな瞳を思い出した。あの眼差しのもとにすぐに戻りたい。まだ教室に残っているだろうか。雪の降りしきる中、一緒に肩を並べて家まで送ってやりたい。そのまままたどこかに連れて行きたい。こんなところで生ぬるいやり取りを続けるのはうんざりだ。

「佐賀さん、それなら聞くけど、どうしてそんなに人を傷つけないんだったら、評議委員会のごたごたをさらに引き起こすきっかけ、作ろうとしたのかな。俺が聞きたいのはそれだけなんだけど、どうなのかな」

「ごたごた？ なんでしょう、それは」

初めて佐賀が戸惑いの表情を見せた。

「つまりさ、佐賀さんが言うには、生徒会と教師連中が固まってやれば、今まで評議委員会のしでかしたような不始末を一切起こさないですんだってことになるよな。実際、俺が委員長だった頃にやらかしたことについては一切言い訳する気ない。少なくとも去年の十一月までのことについてはな。だけど、今回、こういう風な席を用意しなくてはならないくらいのことになったきっかけって言うと、単刀直入に言うとなんか？ この前の騒ぎのことか？」

切り込んだ。三年生席からかすかに切り立った声が聞こえた。

「立村、やめろ」

難波だった。上総もそれは覚悟の上だった。ちらりと目を合わせ、首を振った。

「反応があったってことで進めるけど、はっきり言って三年同士でどろどろな出来事があり、そのあたりで先生連中が介入しようとしたってことだよな。確かにそれは納得するよ。子どもだけでは解決できない、大人が割り込むことでしか片付かないことも、確かになるよな」

前の席でこぶしを握り締め、いざ、勝負とばかりににらみつける新井林。後ろの席で頬の筋肉を片方だけあげてそっぽむいている霧島弟。天羽の様子は相変わらず他人事のように。

「ただ、悪いんだけどそれは評議委員会と直接関係のない出来事だったともいえなくはないのかな？ 今まで佐賀さんが話してきた内容だけで判断すると、評議委員の三年連中は救いようのない間抜け連中だったと思われそうだけど、ひとつひとつ分析してみると、違うだろ？」

いざ、戦わん。上総はもう一度教室全体を見渡し、最後に窓を眺めた。雪が降り始めていた。これが終わったらすぐにE組に戻り、杉本を連れて帰ることにしよう。十分以内で切り上げよう。

「ここで名前を出さないでおくけれど、きっかけは単に、佐賀さんと評議以外の女子とのいさかいがきっかけだろ？ 俺もそのあたりは裏を取ったけど、ずいぶん酷いことを言うよな。悪いけど、ありもしないことを言うのはどうかと思うけどな」

「ちょっと待ってください。それは今回の話とは関係ありません」

見かねたのか渋谷が立ち上がり、上総をまっすぐ指差した。杉本と同じしぐさではあるけれども、渋谷の眼差しと一緒にやはりいらいらする。

「悪いけど、関係あるんだ。しつこいようだけど話を続けさせてもらえないかな」

まだ言いたいことあるらしい渋谷を無視し、上総は続けた。やめる気なんてない。

「女子同士の口げんかに口を出す気はないよ。あとでしっぺがえしを食うからな。ただ、なぜそういうことを生徒会室の中でやらかしたのかってのがまずひとつ。悪いけどそれから一連の出来事は、そこから始まったわけだから生徒会のみなさんの責任は大きいわけだよな」

「それは全く関係ないことではないのでしょうか？」

佐賀は相変わらずの静かな口調で答えた。

「おそらく立村先輩のおっしゃていることは、杉本さんに私がアドバイスをしたことだと思うのですが、おっしゃる通りそれは友だちとしてのことであって評議委員会関係のことではありません。それは渋谷さんの言う通りこの場では関係のないことだと思います」

新井林が首をひねっている。ぶっこわれんばかりの目で難波がにらみついている。轟さんが落ちていたようすでノートに何かを書き込んでいる。最後列で美里と貴史が同じ筆箱の端と端を握り締め上総を見つめている。

「そうだな、本来なら関係ないよな」

もう一度上総は教壇をこつこつ叩いた。

本来なら正論である。

——委員会がらみの場において直接関係のない出来事を持ち出し話を無理やり広げようとするのは、最低のやり方だ。

上総もそれはよくわかっていた。本条先輩にも何度も説教された。他の連中がしようとしたらさりげなく注意をするようにしていた。元評議委員長としてそれは許されざることだった。

そんなことをかまっている余裕なんてなかった。

第一、もう評議委員でいられる時期はあと一ヶ月なのだ。

しかも、すでに上総は他の連中から「評議委員」であること自体を放棄していると思われるはずだ。

最後の最後だし顔を出してきた程度、とでも思われていただろう。何かに取り付かれたのかいさなり正論の生徒会に噛み付いているおろか者とでも思われているだろう。

もう四月以降、高校でふたたび評議委員になろうなんて野心は持ち合わせていない。英語科に

は藤沖もいる。関崎だって入ってくる。その他知らない奴らでやる気十分の連中がうじゃうじゃいるだろう。もう上総が無理に評議委員という場所を求める必要もないわけだ。

なら、ここで「元・評議委員長」として行動しなくたっていい。

評議委員長として、よりも、自分は立村上総として、全身全霊でもって勝負するのみ。

——評議委員失格、それでいい。晩節を汚す、おおいに結構。

上総はもう一度手をひらいて教壇にべたんと置いた。

「関係ないんだけど、俺はそのこと、話したいんだ」

じんわりと佐賀はるみを見下ろした。

「わかりました、おっしゃってください」

新井林と渋谷のふたりに手でそれぞれ制するしぐさをしたのち、佐賀はこっくり頷き耳もとに手を当てた。

「佐賀さんが杉本に話したことなんだけどさ、半分以上あれ、でたらめだよ。水鳥の奴のことなんだけどさ、俺の友だちだしこの前確認したらさ、青潟東受けるらしいよ」

「あの、ことですか」

明らかに佐賀は不意を突かれた風に口籠もった。

杉本梨南の関崎に対する恋心を、ここで暴露するつもりはない。佐賀にだけわかるようにまずは匂わせるに止めた。一瞬とはいえ、効果あり。上総はさらに続けた。

「それと、もし佐賀さんがあの場で杉本に変なことを話していなかったとしたら、たぶん元評議連中のトラブルは起こらなかったはずなんだ。佐賀さんの言う通り、これはプライベートなことだしそれ以上は言わないけどさ。ただ、さ、これは、やっちゃあいけないことだと思うよ。少なくとも生徒会長の立場で、生徒会室の中で、関係ない生徒を脅すってのはどうかと思うな」

「私は脅してません。梨南ちゃんがそんなことを言ったのですか」

「言うわけないだろ。杉本は事実しか言わない」

つっぱねた。すごんでしまったのは無意識だった。

「ただ杉本の話とその他いわゆる三年評議のどたばた劇の噂を重ね合わせた結果、もしあの時生徒会のみなさんが杉本に変なことを吹き込んだりしていなかったら、ひどい結果にはならなかったはずなんじゃないかな。そう思えてならないんだ。もし杉本が、まだ入学すると決まっていない奴に生徒会がらみで近づくなとか、脅されていたとしたらこれは人道的にやってはいけないことだと俺も思うんだ」

「ですからそれは私と梨南ちゃんとのプライベートな話であって」

「だったら、評議関連のいろいろな出来事も、思いっきりプライベートな話だろ？」

正論を言っているのは佐賀の方だ。それは重々承知している。

だが、ここで議論を戦わせる理由は白黒はっきりさせるためではない。

——俺は負けたっていいんだ。

「もともと評議委員会は裏でいろいろ後ろ暗いことしてきた集団だし、それを先生たちにつっこまれるのならそれはしょうがないと思ってるさ。認めるし、それなら来年以降のことは何もくちばしはさむ気なんてない。ただどう考えても、生徒会のみなさんがやってることは、ひとりの生

徒を集団いじめしているようにしか見えないんだよな」

「ふつうに話をすることがなぜいけないのでしょうか。私にはわかりません。それに、こんなくだらないことで時間をつぶすのはもったいないことではないのでしょうか」

相変わらず佐賀の表情は乱れなかった。言葉に時折「梨南ちゃん」と杉本の名を呼んでしまうところだけが、陰りだった。

「ああ、俺もこんなことさっさと終わらせたいからな。とにかく佐賀さん、あの時にもし佐賀さんが杉本に、関崎が青大附高に入学してきても絶対に近づけないとか言ってなかったら、それをかばおうとした元評議委員たちが暴走することもなかったわけだしさ。あ、それともうひとつ言っておきたいんだけど、この一件で天羽のことが散々噂になっているようだけど、それ、全く持って大嘘だから」

「俺……？」

とぼけた顔で天羽が上総に声をかけてきた。悪いが無視。相変わらず机につっぷして眠っている近江さんをちらと見た。

「なんかさ、噂によると天羽の色恋沙汰が原因でどたばたやってるって話になって、先生方もそれ本気で信じているようだけど、ほんとのところは違うだろ」

上総は片手を教卓に置いたまま、朗々と言葉を放った。

「天羽の人間関係とは一切かかわりなし。単に、佐賀さんが生徒会室で杉本に、まだ来ることが決まってない奴に近づくなとかわけのわかんないことを話したのがきっかけだよ。もしそれさなければ、ここまで天羽をつるし上げることもなかっただろうしな。杉本に恨みがあるのはわからなくもないよ、けどな、佐賀さん、それは一人の人間として、今更やってはいけないことなんじゃないか？ そうだな、人間としてもそうだけど、少なくとも生徒会室の中でそれをすべきではなかったんじゃないのかな」

もう一度、上総は教室を見回した。反応を見た。難波と美里のふたりがナイフを振り上げそんな瞳でじりじり見つめているのが目だつだけ。天羽はじっと上総の出を待っていて、更科は難波を止めようと腕をまさぐっている。美里の宥め役は今のところ貴史、予定通りだ。二年以下の評議たちはあえて声も出さずに静止状態だった。意外にも、新井林もそのまま硬直していた。

そろそろけりをつけよう。人間として最低なやり方なのは百も承知。

上総はゆっくりと身をかがませ、止めの一言を準備した。渋谷が割り込もうとするのを「悪いんだけどさ」

チンピラ風に、鼻でせせら笑うような態度でもって。佐賀にしか聞こえない声でささやいた。

。

「そのやり方、やっぱり、佐川に習ったわけ？」

きょとんとした顔のまま、相変わらず動揺を見せずに見つめ返す佐賀の目の前で、新井林が立ち上がった。とうとうやられる。そう思った。

——言いたいこと言ったし、一本くらい歯を折っても、まあいいか。

「あんだ、評議委員長だったのに、何考えてるんだよ」

すでに敬語なんて尻尾にもくっついていなかった。新井林はこぶしをつくり仁王立ちでいた。唇をまっすぐに結ぶと、細かく首を振った。

「立村さん、あんたはさ、あの本条さんが認めた評議委員長だったんだろ？　なんでこんな最後の最後に恥さらしな真似しやがるんだよ」

上総は返事をしなかった。すでに新井林に話すべきことはない。次期評議委員長、自分以上の素質を持った奴にこれ以上何も言えはしない。ただ黙って視線を向けるだけだった。

「こんなわけのわからねえことしやがって、もうやめろってってるだろ！」

——なぜ、殴りにこない？

そのまま上総は新井林を見つめたまま、様子を伺った。

いつもの新井林なら、一発くらいストレートパンチを食らわせるはずだ。

今自分がしていることは、当然そうされて当然のことばかり。

最愛の佐賀はるみを、いけ好かない出来損ない先輩が侮辱しているわけなのだ。

いつのまにか教室内の観客たちがひとり、また一人と立ち上がり新井林の周りを囲もうとしている。二年評議連中だった。肩に手を置いて「おい、やめろ新井林」とかささやく奴もいる。すでに上総は蚊帳の外っぽい。一年評議たちが相変わらず呆然としたまま隣の席同士で話をしている様子だった。近づいてくるのは生徒会連中たち。黄色いヘアバンドの渋谷が上総に近づき、「いいかげんにしてください！」

そう怒鳴った。目の前の新井林が奴にしては淡々と訴えてるのと正反対なのに、全く伝わるものがない。響きを感じない。そのまま無視して通した。

「あんだ、ちょっと黙れ。俺は立村さんと話してるんだ」

「評議委員会っていったい、何考えてるんですか。だから先生たちが早くつぶしたがってるんだわ。佐賀さん、いいかげんこんなのやめましょう。霧島くんも手伝って」

「くん付けで呼ばないでください」

「そんなのどうでもいいでしょう」

目の前で渋谷と霧島弟のふたりがいきなりわけのわからない口論を始めている。いったいなんでこんなくだらないことになっているんだらう。聞き流しつつ、上総は新井林の顔に何が浮かんでいるかを読み取ろうとした。なぜ、なぜ殴らない？

「弱い者いじめ、とか言ってるけどさあんだ、あんだが今してることだってそうじゃないか？　あんだがこんなまん前で、ひとりの女子をつるし上げてるのもいじめじゃねえのかよ。それって、正々堂々たる態度じゃねえよな」

——正々堂々か。違うよな。

「人間として、それは間違ってる。絶対に、どんな理由があろうとも、絶対に間違ってる」

新井林は何度も繰り返した。仁王立ちのまま顔を火照らせたままに。

「どんな理由があろうとも、あんだのやってることは間違ってる。そうだよ、立村さん」

——間違ってるか。そうだな、俺もそう思う。

「あんだ、同じ事、俺に言ったこと、どうして忘れてるんだよ、なんでこんなこと、最後の最

後に、なあ、あんたもうやめろよ」

——間違っているしちっとも正々堂々じゃないよな。

心の中で何度も相槌を打った。

——だから、殴っていいんだよ、新井林。お前にはそうする権利がある。

全く動こうとしない佐賀の落ち着きぶりにどこかでいらだちつつ、上総は新井林が飛び掛ってくるのを待ちつづけた。室内騒然とし、この状況をうまく納められるのは果たして誰なのか、上総はその人物が立ち上がるのを待った。ゆっくり三年連中の固まった席に目を向けると、相変わらず難波が罵詈雑言を吐き散らしているのが聞こえた。更科ひとりでは宥めきれず、なんと轟さんが軽く難波の頭をはたいた。少し落ち着いたようすではある。美里の面倒を見ているのはてっきり貴史だけかと思いきや、何時の間にか起きた近江さんがしっかりと片腕を押さえ、耳元に何かささやきかけている。爆弾二個ともしっかり押さえつけられている。残されているのはひとり。

「立村」

教室内の空気を一気に鎮めたのは、天羽の一声だった。

良く通った声だった。

難波も、美里も、そして新井林もみな口を閉じ、そのまま天羽にすべてを集中させていった。その流れは太く、たっぷりしているように感じられた。上総は手を教卓から下ろし、そのまま天羽が来るのを待った。ちらと佐賀を見下ろすと、小首を傾げたまま、新井林に指先で、座るように指示をしていた。従わずに突っ立っているままの新井林が、

「あの、天羽さん」

ぼそっと呟いた。

天羽はまっすぐ上総に向かって歩いてきた。正面に立った。新井林に、

「お前も座れ。まだやることがある」

有無を言わさぬ口ぶりで告げた。次に教卓奥の佐賀はるみに向かい、

「まだ話は終わってないんで、これからまとめるといたしやしょうか」

わざとらしい丁寧な口調で告げた。最後に上総へ目を移すと、

「もう、帰っていい」

一言だけ、搾り出すように呟いた。眼差しに怒りはなかった。とんでもないことをやらかした同期の評議委員をしばきたくなるような気持ちはなさそうだった。かすかに潤んでいるように見えたのは気のせいだろうか。

「はっきり言えよ」

危うくチンピラ口調が抜けてしまいそうになる。まずい。最後の最後まで演じきろう。

上総は口を一度きっちり引き締め、天羽を促した。

「俺にどうしろっていうんだよ」

目と目が合い、何かがかちんとぶつかり、答えが伝わったような気がした。

「立村、もう、評議委員会、こなくていい」

一瞬だけ天羽の唇が震えた。その後、教室の誰にも伝わるような太い声が響いた。

扉を指差し、ぐいと上総を顎で指した。

「あとは俺がすべて片付ける」

上総にだけ見える程度の首の振り方をし、天羽は頷いた。

——こいつはわかってる。大丈夫だ。

とてつもない混乱の状況を収められるのが、誰なのか。

この場を納めるのに一番ふさわしい相手が誰かなのか。

それを意識の真中において、上総はすべてを演じた。

教壇の上でちんまり座り、何がなんだか分からない顔をしたまま平然としている佐賀はるみ生徒会長ではなく、さんざん色恋沙汰の極悪人と叩かれてきた天羽 評議委員長が、生徒会がらみで誤解を招いたひとつの出来事を片付ける。それを事実として証明すれば、天羽が青大附中において最高の評議委員長だったことが 全校生徒の前で明らかとなる。

——天羽ならできる。絶対にできる。俺には決してできないことだけど、天羽ならば。

——それに轟さんもいる。難波もいる。更科もいる。清坂氏も羽飛もいる。

最後まで佐賀はるみの態度は一貫していた。全くといっていいほど動揺せず、小首を傾げたまま渋谷、霧島弟と目配せしながら

「立村先輩のお話すべて聞かせていただきましたが、それは梨南ちゃんの言い分でしかないのでしょうか？ どう考えても私、先輩のおっしゃる意味がわかりません」

知らない振りを通そうとしているのだろう。もうこれ以上上総は、佐賀はるみにかかわる気などなかった。何を訴えようが、ちらつかせようが、彼女には何も怖いものがないのだろう。目の前に新井林がいて、そこで佐川の名前を聞かせても、佐賀はるみの落ち着いた表情に曇りはなく、「何でこの人、一人で騒いでいるんだろ」と言いたげな態度を崩さない。こんな女子に杉本が勝てるわけがない。

もう上総のすべきことはひとつしかない。評議委員会よりも、なによりも、たったひとりで戦うしかない杉本梨南を見守るだけだ。

「黙れ」

厳しい一声を発したのは新井林だった。そちらの方に驚いた。

「お前、自分の立場わかってねえだろう！」

「そんなことないわ」

さりりと交わすと、佐賀はるみは上総からきびすを返し、天羽に向かいこっくりと頷いた。

「では、立村先輩がお帰りになったら、もう一度お話をまとめたいのですがよろしいですか？」

天羽も「かしこまりやした、じゃあまずは皆の衆、控えおろう！」

わざとらしいおちゃらけ口調でもって空気を和ませた後、上総に二本指で敬礼のサインを送ってきた。

上総はもう一度教室の中をぐるりと見渡した。ひとりひとりを見つめる余裕はなかった。すべての人物に白い雪が降り積もり、ひとつのシルエットに替えて行くかのようにだった。天羽も、新井林も、佐賀も、美里も難波も、すべてが。

「わかった、それじゃ、あとはよろしく」

いいかげん野郎の演技を貫徹しよう。鼻でひとつ笑った後、上総は帰り際天羽の肩を強く叩き、美里たちの座っている席に戻り、素早く荷物を抱えた。そのまま背を向けた。

誰も引きとめる気配はなかった。すれ違った際、藤沖の舌打ちと、まだぶつぶつ言っている美里と貴史の声とが耳元を掠めた。

扉を閉め、ひんやりした空気をゆっくり吸い、上総は振り返らず三階の階段を下りていった。窓から見える雪は激しく降り積もっていた。たった三十分くらいしか経っていないはずなのに、枝がこんもりと白く覆われていた。

三年間の枝葉すべて抜け落ちた日々、今すべて雪で埋められていき、やがて純白の闇に染まっていくようだった。

コートを羽織るとかえって身体が冷えてきたような気がした。

「杉本、いたか」

一階E組の教室に向かい、扉を開けた。駒方先生も狩野先生もいなかった。暖房がよく効いた部屋の中で杉本だけが、ぽつんと席に着いたまま本を読んでいた。

「ひとりでいたのか」

「はい」

上総は腕時計を覗き込み、あの修羅場からまだ三十分も経っていないことを確かめた。

「待っててくれた？」

「そういうわけではありません」

相変わらずそっけない返事だが、上総が来るのを待ってすぐにかばんの整理をし始めたところみると凶星のようだ。本をしまい込み、黒いコートを羽織り、その上に白いストールを重ねた。

「帰ります」

「一緒に行こう」

杉本はそっと顔を見上げた。特に何らかの表情は窺い知ることができなかったけれども、拒絶はしなかった。

「終わったのですか」

「うん、終わった。本当に終わった」

次いで出た言葉は、勢いだった。

「髪の毛、ほどけば」

また杉本は怪訝な顔をして上総を見上げた。くいとかみ締めたような口元と、それでいてまっすぐな瞳とがかすかに揺れていた。

「わかりました」

「ほら、寒いからさ」

「脈略がありません」

そう言いながらも杉本は耳元に手を伸ばし、ゴムをゆっくりとひっぱっていった。一気に解けた髪が広がり、ふんわりとウェーブを描いた。先に扉を開き、上総はそっと杉本を先に押し出した。廊下に出たとたん、目の前の窓枠いっぱい張り付いた白い膜のようなものが飛び込み、いつのまにかうっすらと蔭をこしらえているように見えた。

——たった三十分しか経ってないのに、こんなに降ったのか。

生徒玄関まで出て行ったが、まだ評議連中も他の委員の連中も見かけることがなかった。

かすかに吹奏楽の音色が聞こえるだけで、人気もなく静まり返っているだけだった。

当然、三年A組の教室で見かけた奴らもない。

——これは弾劾裁判にかけられるな。

二年生側のすのこから降りてきた杉本を待ちながら上総は、廊下の奥を眺めやった。

自分が今回しでかしたことは、おそらく評議委員会始まって以来の大騒動であっただろうし、しかも元評議委員長の醜態というすさまじい副題までついてしまう。生徒会と評議委員会との共同活動を目的としたにもかかわらず、結果としては生徒会側の大勝利に終わってしまったというオチがつく。元評議委員長がいきなりチンピラまがいの言葉を口にしつつ、可愛い女子の生徒会長を脅し、周囲を硬直させ、評議委員会自体に泥を塗ったありさま。これは許されることではないと思う。

「杉本、今、女子で友だちとか誰かいるのか」

「学校の中で、ですか」

雪に覆われ、時折つま先がつるんとすべりそうになる砂利道を歩きつつ、上総は尋ねた。杉本も流したままの髪の毛を軽く押さえながら答えた。

「花森さんとは文通してます」

「あの人ががんばってるよな」

共通の話題。花森なつめのその後は上総も知っていた。

「あと、他には誰かいるのか」

「いたはずですが忘れまして」

いないとは答えなかった。

「西月さんと霧島さんとは」

「おふたりだけかもしれません」

杉本は小首を傾げつつ、白い手袋に覆われた指を三本折って見せた。

——これは、まずいな。

三年たちの評議委員会騒動によって、失われたものが大きすぎたことを、上総は改めて感じていた。佐賀はるみが顔色一切変えずにやってのけたことは、決して杉本梨南の想い人から遠のけることだけではない。すべての友だち、女子との繋がりを断ち切らせてしまうようなのだっただろう。

——あと一ヶ月、そのことについて少し考えないとな。

評議委員会を混乱に陥れた張本人としての自分は、天羽なり難波なり好きなように弾劾にかけてもらてかまわない。喜んで受け入れよう。しかし、まだやるべきことが残っている。

「杉本、それならいつもひとりってことか」

「そうです。でも平気です。本があります」

「いつも本ばかり読んでいるわけにはいかないだろ。西月さんも霧島さんも卒業してしまうしさ」

「そうですね、おふたりはもう、青潟には戻ってこられません」

杉本は断言した。やはり、気付いているのだろう。

「ふたりがそう言ったのか？」

返事をせず、杉本はうつむき、そのまま真っすぐ校門に向かって歩いていった。

——俺が卒業するまでに、杉本にもっと居心地いい場所を見つけてやる必要がある。

いい方法はないだろうか。上総はしばらく無言のまま、杉本と肩を並べて歩いていた。空から

舞う雪が杉本の髪の毛に降りて、そのまま留まっていた。まだ、手を伸ばして払ってやるほど、今の自分は杉本の側に近寄れない、それが歯がゆかった。

——立村くん！

誰かが窓辺から叫んでいる。上総の苗字だった。

「立村先輩、お呼びです」

杉本が立ち止まり、くるりと周囲を見渡し、すぐに声の発信地を見つけ出した。

女子の、それもはっきりしていて少し甘い、聞きなれた声だった。誰かはすぐに気付いていたけれども、答えたくない。上総は首を振って杉本を促した。

「いいよ、さっさと行こう」

「いいえ、呼ばれたら当然お返事されるべきではありませんか」

杉本は固い表情を崩さず、さっと指を指した。自転車置き場の最奥、職員室の隣窓だった。

「でも、いいよ」

「くだくだおっしゃらないでください。呼ばれたらきちんと返事をすべしと、先輩は習わなかったのですか。すぐにお戻りください。しかも」

さらに杉本は上総の腕をひっぱり、自転車置き場からずると窓辺まで引きずっていった。もちろん男子の腕力で引き剥がせる程度のものだが、それでも杉本の握り締める指先がちくりとする。

「痛い、やめろよ、お前なんでそんなに力あるんだよ」

「とにかくいらしてくださいませ！」

さっきほどかせた髪の毛で今度は杉本の表情が読み取れない。

「清坂先輩がお待ちなのですから、万難拝しても行くべきです」

——清坂氏か。

上総は観念した。やはり、これ以上逃げるわけにはいかない。

評議委員会、生徒会、三年D組の前で上総はぶっ壊れた男として行動してきたけれども、杉本の前だけはみっともない真似をこれ以上さらしたくなかった。

「わかったわかった。杉本、ちゃんと話すから、少し待っててくれないか」

「なぜですか」

そっけなく杉本の答えが返った。

「いや、一緒に帰るつもりだから」

「おふざけにならないでくださいませ。清坂先輩があんなに叫んでいるのに、どうして立村先輩はそんなに非常識なことができるのでしょうか。先輩、ご存知ないのですか。一番立村先輩を心配されてらしたのは、清坂先輩なのです」

抑揚のない静かな言葉でもって、それでも杉本は彼女なりの腕力でもって上総を引きずっていった。上総が真正面から受け止めたのは、職員室隣・一階の窓から身を乗り出さんばかりに叫んでいる美里の姿だった。

五メートルほど近づいたところで、美里がひょいと窓を乗り越え、外に飛び降りた。

動けず、上総が立ち止まり、杉本もそれに従った。

美里の足元は白い上靴のままだった。

「立村くん」

真正面から見据えた美里の瞳は、鋭く、大きく、潤んでいた。

「なんで呼び止めたか、わかってるよね」

上総も頷いた。杉本をちらと横目を見た。腕から手を離し杉本は美里に目を向けた。

「話、聞いても、いいよね」

「もう話すことなんてないだろ」

口だけあの時の不良っぽさに戻そうとした。うまくいかなかった。杉本と目が合ったからだ。美里は口元をほんの少しだけ上げて、笑った。

「無理しないでいいよ。もう、わかってるのにね」

「無理なんかしてないだろ」

コートのポケットに手を突っ込んでみた。新井林や本条先輩がやっているように、雪を蹴飛ばしてみた。杉本のきつい視線が飛んできた。やはりうまくいかない。

「悪ぶったって、似合わないよ。ばっかみたい」

美里は素早く駆け寄ろうとして、ふと足を止めた。杉本の方に顔を向けた。

「杉本さん、これから帰るの」

「はい。私ひとりで帰るつもりです」

上総から一歩離れて、ぐいとにらみつけた。いつものまっすぐな眼差しだ。そのまま美里の側に駆け寄ると、その手を取り両手で握り締めた。

「あとは清坂先輩のお仕事ですね」

「ありがとうございます。杉本さん、でも、本当にいいの」

わけのわからぬ顔のまま杉本は頷き返した。本当によくはないのは上総の方だということを、どうして気付かないのか、単に鈍感なのか、わからない。いらだつのも上総の方だった。

「帰るなって言ってるだろ」

「いいえ、帰ります。私の仕事は終わりました」

「仕事って、どういう意味だよ」

「はい、清坂先輩と仲直りするのための、お仕事です」

白いショールを杉本はしっかりコートの衿までもっていき、ぐいと締め付けた。上総の側にもう一度寄ると、反り返るくらいのけぞりながら、

「清坂先輩のお気持ちをお察しできない立村先輩でしたら、もうお話する気はございません」

きっぱり言い放ち、そのまままっすぐ歩いていった。

「おい、杉本、待てよ」

一切振り返らず、かといって走ることもなく、杉本は毅然と背を向け立ち去っていった。雪が時折降りかかる解いた髪の毛、少し風で乱れていた。

そういえば、杉本は美里と陰でいろいろと打ち合わせを行っていたというのを聞いたことがあった。この前杉本とふたりで逃避行しようとした時も確かそうだった。美里に連絡を入れて、青湯駅へ迎えにきてもらうように頼んだこともあったらしい。ちらと聞いてはいたのだが、あえて聞き流してしまったのは無意識なのかもしれない。上総は頭をひとふりして、もう一度美里の前でチンピラ風情を演じることに決めた。

「どうせもう話すことなんてないだろう」

少し藪にらみにしてみた。美里は全く動じず、カバンをかかえたまま上総の正面に立ちはだかった。

「立村くんがなくても、私はあるの」

「もう、俺は評議委員会にこなくていいってことになったんだから、もう用はないはずだろう」

「あるよ、あのあとどうなったか知りたいでしょ。評議委員として、話すことだってたくさんあるのに。どうして正面から見ようとししないのよ。立村くん、こっちを見なさいよ」

「見る必要なんてないから」

あえて横を向いた。美里の視線を受け止めてしまったら最後、自分が崩れてしまうのがわかっている。側に杉本がいればそれでも背をすっと伸ばそうと思えるけれども、もう限界に近い気持ちを立て直すなんてことはできない。美里も上総の視線がずれるたびに細かく立ち位置を変えた。うざったいくらいだった。

「もういいかげんにしろよ。俺は話すことなんて何もないって言ってるだろう」

「立村くん、今、評議委員会の方が生徒会側を圧倒してるってこと、聞きたくないの？」

いきなり本論に入ってきた。美里らしい。はっきり言いたいことを直球で投げ込んでくる。上総は黙ったまま、美里にしゃべらせるべきかを考えた。雪を蹴飛ばしてさっさと帰るか、それとも話を聞くべきか。チンピラごっこをそのまま続けるのならこの場から離れて、美里からあっさり愛想をつかしてもらう方が楽なのだ。でも、

——清坂氏をそこまでしてばかにしていいのか？

どこかで情が混じる。迷っている間に美里はまくし立て始めた。上総がいなくなるのを恐れるように、息もつかせずに。

「立村くんが言いたいこと言って教室出て行ってから、さて元のペースに戻そうと天羽くんが割って入ったけど、生徒会側はなんでもなくて顔して評議委員会の情けないところをいっぱいあげつらったの。私たち、否定できないことばかりだし、嘘なんてつけないよね。だから私も黙ってるしかなかったけど、そしたらね」

ここで息次ぎ。上総が横目で美里を見やると、またそこからマシンガントークをぶっぱなす。「琴音ちゃんが立ち上がったのよ、いきなりね。私、しばらく琴音ちゃんと口利いてなかったからわかんなかったけど、『評議委員会の三年がどうのこうのというトラブルは一種のプライバシーの問題であってそのことを今回の議題と絡めて話し合うのは根本的におかしい。同時に生徒会の間でいろいろなやりとりがあったとしてもそれを出すのもまた別の問題のはず。もっと簡単な話し合いでどうして進められないのか』って言い出したのよ。琴音ちゃん、自分からべらべ

らしゃべる子じゃないし、今までいたのかいないのかわかんないまま卒業しちゃうのかって思ってたけど、とんでもないよね。『評議委員会の経験と生徒会の団結力を利用してもっと素晴らしい行事を組み立てられると思ったから、立村くんはそういう話を持ち出したのに、いきなり関係のないことを持ち出して個人攻撃をするのはおかしい。先生たちはもちろん生徒会を応援するだろうしそれはそれでいいけれども、どうして今までの経験を評議委員会側から教えてもらおうとしないのか。生徒会だけが先生たちの援護射撃を受ける形で活動したとしても、今度はそこから追い出された評議委員会を始め他の委員会たちが孤立してしまうし、同時にかわかっていなかった生徒たちが取り残されてしまう。まずは、互いの経験と情報を交換するところから始めていくのが、大人たちも納得する流れなのではないか』って。よくわかんないけどそんなことをぺらぺらまくし立てたの」

——轟さん、とうとう動いたか。

轟さんの行動力を知っている上総としては、美里の思い込みが意外ではあったけれども、それは仕方のないことなのだろうとすぐに考えなおした。あえて、「不細工・出っ歯」のイメージでもって頭脳明晰さを隠し通してきた人なのだから、それは織り込み済みなのだろう。

「天羽は」

するっと抜けるように流れた呟きを、美里が拾い上げさらに続けた。

「天羽くん、頷きながら聞いてたよ。難波くんもばつの悪そうな顔してたけど、けどなんでだろ、男子たち全然驚いてなくて、黙って琴音ちゃんの発言聞いてたのよ。これって変だよ。立村くんも知ってたの？」

いきなり問われた。頷くしかなかった。美里は一瞬、言葉を失いすぐに補給した。

「いいよそんなの責めないから。女子は女子同士でやりあうのが一番いいんだなって思って、私も参戦しようと思ったけど、貴史と近江さんに止められたからなんにもできなかったよ。その方が迷惑じゃなくてよかったんでしょ。どうせ立村くん、私が何かしようとする露骨にいやな顔するもんね」

「そんなことしてないだろ」

「してる、いま思いっきりしてる」

ぐさりと突き刺さる言葉でいっぱいだ。身体の中は飽和状態だ。でも貴重な情報が含まれているのも確か。ふたたび降り始めた雪を眺めながら上総はそっと、冷たいひとひらを飲み込んでみた。

「とにかく、琴音ちゃんオンステージ。琴音ちゃん、さらに佐賀さんに向かって、『ただ、立村くんが言ったことがもし間違っていると断言できるのならば、ここではっきりと答えるべきでしょう。ここで聞いたことを百パーセント否定できるのならば、はっきりと証拠を持って返事をしておいた方が、明日以降くだらない噂に悩まされないですむんじゃないでしょうか』って。そういうことなのよ、つまり。立村くんの言ったこと、嘘だって百パーセント、否定できなかったってことだよ。佐賀さんは」

——そうか、そうきたか。

さすがだ。美里のつかかりながらも飛び出す言葉の端々に、上総の計算通りの流れが生まれ

ていたことにびっくりしつつも、ほっとしていた。佐賀生徒会長にぶつけた上総の言葉は、杉本梨南と水鳥中学の佐川に関することに関していえば全くのがせねたではない。新井林には可哀想なことをするかもしれないが、実際のところは否定できない事実のはずだ。

——全くのでっちあげだとすれば、堂々と否定すればいい。

「それで否定できなかったんだな、生徒会長は」

また美里の息を呑む気配がした。見たわけではないのでわからない。

「そうよ。琴音ちゃん、さっきあんたが言ったこと全部頭の中に入れてみたいで、ひとつひとつ、そうね、杉本さんのこととか、関崎くんのこととか、それと関崎くんの友だちのこととか、私は全くわかんないことだけどあんたが言ったこと全部をひとつひとつ確認しながら佐賀さんに聞いていったのよ。繰り返し確認するようなものよね。あんたがばっかみたいな格好して言いたい放題やった時よりも話が整理されてて、みんなによく伝わったわよ」

「そうなんだ、ちゃんと、繰り返ししてくれたんだ」

さらにまた一息、奇妙な間が空いた。すぐに消えた。

「いつのまにか天羽くんたちのことなんてどうでもいいって感じになってね。そしたら、いきなり新井林くんが立ち上がって、『俺の顔を立てて、どうかこれ以上会長を責めるのはやめてくれ』って、いきなり頭を下げたの。琴音ちゃんによ！」

——新井林がか！

美里と正面で見詰め合った。

いつのまにか美里の両目が潤みきっていた。

見つめてしまった自分が甘かった。下手な演技がほどけてしまった。

「新井林が、そんなことしたのか」

「そうよ。『もうこれ以上、佐賀会長を責めたてるのはやめて、もっと互い協力しあう方法について語り合いたいです。だから、もう、どっち側の攻撃をするのもやめにしてしまいましょう』って」

上総は空を見上げた。白い雪粒が次から次へと全身揺らしながら降り注いできた。目に飛び込み、きゅんと冷たく刺さり、偽の涙目になる。誰かの代わりに泣けとばかり、責められているようだった。

——新井林がそこまでするとは……！

去年の三月に、上総が本条先輩に呼び出しを食らい、新井林の前で一発張り倒されたことがあった。佐賀はるみと水鳥中学の佐川を巡るごたごたででまかせを流した罪について、非公開の『弾劾裁判』を起こされた時のことだ。

あの時、本条先輩は両方の言い分を聞いた後、上総をひっぱたいてそれで終わりにしてくれた。たぶんあの時、上総が完全に自分の間違いを認めたふりをし、丸く治めようとしたのにあわせてくれたのだろう。全く遺恨もなくその時は終わった。本条先輩はともかく、新井林の目にあの

時涙が浮かんでいたのはなぜなのかわからず、そのままにしていた。

でも、今思えば。

——あいつは、気付いていたのかもしれない。

ついさっき、佐賀を新井林の目の前でさんざんぶっていたというのに。

いつもだったら思いっきりのされても言い訳できないことやらかしたというのに。

なぜ新井林は上総を殴ろうとしなかったのか。

——やはり、あいつは、知ってたのか。

真実はわからない。新井林の正々堂々たるまっすぐな気性からすればまずありえないことだろう。でも、そういう信念を曲げざるを得ないくらいの何かを、佐賀はるみは持っていたのだろう。完全に嘘だとわかっていても、それがどんなに屈辱的な答えだったとしても、新井林は心底、最後の最後まで佐賀はるみの騎士であり続けた。そういうことになる。

「結局ね、それでみな丸く収まったのよ。そうよね、私たちはどうせ三年、もう卒業しちゃうし関係ないし、琴音ちゃんの言う通り三年のごたごたなんて、生徒会にも評議委員会にも関係ないことだもんね。先生たちは心配するかもしれないけれどもそんなのどうだっていいことよね。生徒会主導でやったとしても、みんな二年生同士なんだから情報を仲良く交換すればいいことだもんね。どっちが上とか下とか気にするよりも、そっちの方がいいに決まってるもん。生徒会の子たちも、新井林くんが両手を広げて佐賀さんを守ろうとした姿見て、それ以上何も言えなかったみたい。だから、私も決めたの」

「決めたって？」

硬く喉が凍りつくような感覚。美里に返した言葉が、硬かった。

美里のおかっぱ髪に、うっすらと花びらめいた雪が舞い降りて、ひとひらこぼれた。

「立村くん、もう、ふつうの立村くんに戻ったね」

口元をこすり、目尻を同じ手の甲で押さえると美里は顔を上げた。

「もう立村くんのこと、ああしろこうしろなんて言わない。もう放っとく。私と付き合いしたくないんだったらそれでいい。評議やりたくないんだったらもうそれでいい。ひとつだけお願い」

両手を組み合わせ、祈りのポーズでもって、美里は呟いた。

「卒業まで、三年D組で一緒に過ごしたい、それだけ。三年D組に、帰ってきて」

上総はしばらく答えず、じっと美里の両手を見つめていた。

——やはり連れ戻そうとするのか。

「戻ったってなんになるんだよ」

「なんかなんなくちゃ、いけないの？」

「これ以上問題を起こす俺が入っていても、うんざりするだけだ」

「そんなこと、言ってないじゃない！」

激しく被りをふる美里に、どうしようもなくいらだつ自分を押さえられない。足元の雪を蹴った。せめてもの、嫌な奴演出を繰り返した。隠れ演劇部評議委員会の名をもって。

「どうせ、あの熱血担任が、クラス齒抜けのまま卒業するのは嫌だから、無理やり俺を連れ戻そうとするんだろう。みんな聞いてるんだろ、あいつから」

「聞いてないよ、なんでそんなこと言うのよ！」

美里がとんと足踏みをした。雪がさらに白く降りかかる。身体が燃える。

「俺が杉本連れてどっかに逃げようとしたことだって、知ってるんだろ。狩野先生に捕まえられて説教されたことだって、俺が小学校の時どれだけ卑劣なことやらかしたかも、みんな知ってるよな。それから今日みたいに、さんざん狂ったことしでかしたことだって、みんな清坂氏は知ってるだろう」

「そんなこと、今さら知られてなんだっていうのよ！ みんな、あんたのこと手のひら返したみたいに冷たくした？ した奴いたかもしれないよ、けど、私だって貴史だって、みんなあんたのことを嫌いになんてならなかったじゃない！」

——やっぱりわかってもらえないんだ。

今更ながら同じことを繰り返さなくてはならないのが辛い。自分がだんだん冷静になってくる。目の前の美里が憤れば憤るほど、白い雪の山でもって互いが引き裂かれていく。

「あと一ヶ月しかないだろ、俺はもう、評議委員としても使い物にならないし、それに、今の三年D組は清坂氏と羽飛でうまく回っている。そうだろ。清坂氏、よくそれは自分でもわかっているだろ？ 一年の初めからこうなっていれば、こんなことにならないですんだんだ。俺がこんな風にでしゃばらなければ、こんなにたくさんの人傷つけなくてもよかったんだしさ」

「ばっかみたい！」

同時に美里の潤んだ瞳から、涙が滴り落ちた。

スキーの跡のように、まっすぐ。そのまま上総の胸元にむしゃぶりつき、激しく揺さぶった。「そこまでよくわかってるんだったら、どうしてそれを見るの怖がって逃げてるのよ！ そうよ、その通りよ。今の三年D組、うまくいってるよ、すごくて。すごくて、そう、私、こんなに楽しさせてもらったの初めてってくらい、今うまくいってるよ！ 女子だって男子たちと仲良くやってるし、立村くんがいないほうが確かに、トラブルおきてない、そうよ！」

「だろう、だから」

「黙ってよ！ そうだよ、貴史ともし一緒に組んで評議やってたら、こんなにいろんなこと起こらなかったかもしれないよね。うん、そうだよ、立村くんとこんなに話すことなんて絶対なかったし、貴史とグループ違ってたかもしれないし、私も顔と名前しか覚えてもらえなかったかもしれないよね。けど立村くんだって評議になってなかったら、本条先輩にも可愛がってもらえなかったし、杉本さんとも出会えなかったかもしれないんだよ」

声を出せない。思わず上総は美里の背中を片腕で支えようとした。気づき、すぐに手をぶら下げた。ぬくもりがじんわりと伝わってくる。かすかに花の香りがした。

「評議やってなかったら、きっと私、立村くんは何にもしゃべらないつまらない男子だって思ってたかもしれないもん。あとで加奈子ちゃん経由の噂を聞いて、そのまま鵜呑みにしてたかもしれないもの。それに、もし今みたいに酷いこと言われてても、一緒に悪口いっていじめてたかもしれない。私、立村くんみたいに気持ち、細くないもん、そうよ、貴史と一緒に立村くんをい

じめてたよ、きっと。嫌な子になってたよきっと。みんなも同じ考えだって思い込んで、絶対に嫌ってたよ。でもね」

涙でぐしゃぐしゃの顔をそっと上げ、上総を見上げた。

「それって、絶対違うよね。私、立村くんと話をいっぱいすることが出来たから、気付くことできたんだよ。くだらないこと言い合って盛り上がるのも楽しいけど、黙って一緒にいてくれて、おなか痛い時にそっと荷物もってくれたり、顔も知らない女子のためにバス脱走してまで連絡を入れようとしたり、今みたいに嫌われものの杉本さんを守るために、エッチなことまで平気で言ってみようとしたり、そんな人がいるんだってこと、知ることができたの。立村くんがいたからなんだよ。そのまんま、ほんとに、そのままできてくれたからなんだよ」

「俺は何もしてないよ、清坂氏がよく受け取りすぎてるだけだよ」

胸のぬくもりで、さっきまで抱えていた覚悟が解けてしまいそうだ。上総は慌てて首を振った。

「だから、私ね、好きとか嫌いとか、そんな『つきあい』がなくなっただけで、クラスメートとしての繋がりもなくなっちゃうのは絶対いやなの。私、知ってるよ。立村くんが私のことなんてどうでもいいって思ってること」

「どうでもいいなんて思っていないよ」

「違う、私、立村くんが杉本さんのこと好きなこと知ってるよ」

「いや、そういうのはまた違うって」

何か美里は無理やり「好き」の一文字で物事を納めようとする。違和感がある。何度も首を振りつづけた。

「けど、そんなの私、どうだっていい。私も、みんなも、きっと立村くんがクラスに戻って来てくれればそれ以上のこと何にも求めてないよ。立村くんがいたから起きたたくさんの出来事、もちろんいいことばかりじゃなかったかもしれないけど、でも、いなくて何にも起こらなかったより、ずっとましなもの。私、立村くんと一緒に卒業式の整列の時、並びたい。評議委員の仕事なんてしなくていいけど、最後の締めだけは絶対、立村くんと一緒にしたいの。だって三年間、一緒にやってきた相棒と並びたいって、それ、変じゃないよね」

もう一度、美里はしゃくりあげながら呟いた。

「立村くんは、クラスにいるだけでいいの、それだけでいいの」

——これが精一杯なんだよな。

美里の言葉を上総は静かに受け止めた。

一緒に降りかかる雪の粒とともに、すうとため息をついた。

——いるだけでいい、って言葉がどれだけ残酷な言葉か、きっと清坂氏にはわからない。

——いるだけじゃだめなんだ、価値がなくちゃいけないんだって。

たぶん、その気持ちを理解し合えるのは杉本梨南ひとりだけだろう。

菱本先生も、貴史も、そして目の前の美里も、一瞬たりとも疑うことなく訴えてくれている言葉。だけど、何もできないまま突っ立っていた自分が受け入れられたことなんて、一度もない

。何一つない。受け入れてくれて、その後なんのとりえもないとわかった段階で放り出されそれで終わってしまった。それが上総と杉本との行き着いた先だった。

——きっと、そんな経験ないんだろうな。

どんなに成績を上げようとしても、どんなにうまく馴染もうとしても本当の自分が現れた瞬間にすべてを失ってしまう。今はまだ、美里も懸命に上総を引きとめようとしてくれているけれども、互いに理解しあうことはきっと難しいだろう。いるだけでいい、放っといてくれる、そう言いながらずっと突き刺すようなメッセージを送られる苦痛。わかってくれと訴える方がわがままなのだろう。

ずっとE組に隠れたまま、卒業式だけ顔を出してそのまま高校に進学し、あとは嫌われ者に戻るだけ。教室の隅っこで本を読むだけの三年間を過ごせばいい。小学校時代の自分に返るだけのことだ。それまでの間は杉本の側で甘ったれたり、髪の毛を愛でたりしていればいい。ささやかな安らぎだけど、高校以降自分に与えるつもりを罰を考えれば、許されることではないかと思っていた。だから嫌われ者になったとしても、悔いはなかった。だからあんなこともこんなこともできた。

——だけど、今まで清坂氏が俺にしてくれたことを考えれば、決して許されないことだよな。

貴史と美里が初めて仲間に加えてくれた時、やっと地獄の日々から抜け出せる、純粋にそう思った。あの時の真っ白くのびのびした気持ちを、そう誓った日。一生忘れない。

あのふたりがいたから、上総は間違った形で評議委員になってしまっても、なんとか歩いてこれた。すべてを清算し、杉本の今後を考えつつも、決して忘れてはいけない一線だ。

どんなに三年D組の教室が息苦しい場所だったとしても、どうしようもなく逃げ出したくなったとしても、上総には三年D組と、美里に対して責任を取る義務がある。

顔はべとべと、てかっていた。髪の毛が乱れていた。

「私もね、大丈夫だから」

そのまま上総の前でごしごし目をこすり、

「今度好きな人ができたら、立村くんがどんなに止めたって無駄、速攻別れるから安心して」

確認するかのように一言一言、美里は尋ね返した。

「三年D組に、帰ってきて、くれる？」

できることを、まずはひとつ。残りはあとで、考えよう。

上総はひとつ、頷いた。

美里は本当に、上総を放っておいてくれた。

約束した以上は三年D組の教室に入らねばならないし、それなりの覚悟もしていた上総だった。どんなに美里が「立村くんはいるだけでいいの」と言ったところで、そうは問屋が卸さないだろう。あれだけ騒ぎを引き起こし、最後には下品きわまるやり方で古巣の評議委員会をひっくり返した張本人。担任、およびクラスメートの思いやりも受け取ろうとせずに引きこもる哀れな元評議委員長。こんな奴を誰が受け入れようと思うか。そう聞きたい。

そして、実際その通りだった。

誰一人上総には声をかけてこなかった。

そっと教室に足を踏み入れた時、誰ひとり、上総に視線を向けてこなかった。

びくつきながらもそっと、かつての自分の席に座り、隣の古川こずえに、

「悪いけど、ちょっと私の英語のプリント、目、通してくれる？ 一応今日提出しなくちゃなんないんだけどさ、英語科進級用の補習用なんだけど。立村が問題ないって言うんだったら、そのまま出しちゃうつもりなんだけどね、ほら」

下ネタとは全く関係のない話題で声をかけられた。それだけだった。

反対側の隣席には南雲がやってきた。

「りっちゃん、おはよ。俺も悪いけど、英語の訳、今日あてられてるんだ。見てくんないかなあ」

単純に英語翻訳機としての活用のみ、してくれた。本当に、それだけだった。

「わかった。順番でやってく」

上総はこずえの差し出したプリント内容を瞬時に読み取り、いくつかの間違いをシャープペンですぐに訂正した。赤ペンなんて使わない。次に南雲の差し出したノートを指でなぞり、半分以上の文章を訂正した。もちろんこちらもシャープペンだったのだが、

「いいよ、りっちゃん、ボールペン使って。それの方が俺、見やすいし」

「じゃあそうするよ」

筆入れから赤ボールペンを取り出し書き込もうとして、インクがかすれていることに気が付いた。まだしっぽまでインクが入っているというのに。何度かノートの端でとんとんペン先を叩いていたら、今度は一気ににじみ、赤い染みをこしらえた。

「なんか、やらしいよね、まるでさ」

目ざとく見つけたこずえは、にんまり笑って赤い点を指差すと、

「ロストバージンの後のおふとんって感じだよねえ」

いつもの調子で漫才をかましてきた。とてもだが答える気分ではない。南雲がかわりに受けてくれた。

「俺たちも成長したっすねえ、姐さん。なんてったって、これが初めてのお赤飯ではないってところが、みそっすよねえ」

ありがたい。言いたいことはよくわかる。こずえも満足げに南雲の肩をぽんぽん叩き、
「実戦経験、ある奴はやっぱり、わかるよねえ、南雲はあんた、やっぱり大人よねえ。立村、あんたも少し見習いな」

結局はいつもの「朝の漫才」になってしまった。上総は両方に視線をさっと流し、無言で濃く赤ペンを入れ始めた。

美里は、本当に一切話し掛けてこなかった。

さすがに貴史が物言いたげに上総の席へ近づいてこようとするのだが、無意識に身構えてしまうのがわかるのか、

「貴史、あんたちょとこっち来なさい」

ぴしりと美里がすぐに止める。

「なんだよ、お前何もなあそんな腫れ物に」

「だまらっしゃいっての！」

平手で肩をはたき、美里が素早く貴史の側に近寄り、自分の側に座らせる。

「わかったわあった。ったくなんだよなあ」

上総をちらりと見やると、肩をすくめそれでも素直に天井を見上げ、美里の言う通り話を聞くそぶりを見せた。

心臓の音が少し、穏やかになるのがわかる。

ボールペンの先が少し、固くなっているのか、力が入っている。

「はい、これできた」

まずこずえにプリントを渡し、次に南雲へノートを押しやった。

「サンキュ。いやあん、こんなに一杯間違ってたってわけ？」

「俺が間違ってるかもしれないけど」

こずえは頭をかかえる真似をした。秋に比べるとだいぶ伸びた髪の毛を、つんつん自分でひっぱった。不ぞろいだ。

「なんかねえ、毎日、こうよね。英語科ってたかが英語の点数それなりに取れた奴がいくとこだと思ってたけど、こんな補習地獄に陥るなんてさ、私も思ってなかったよね」

「毎日、こんなプリント出るのか？」

上総は尋ねた。E組に逃げ込んでからというもの、それなりに課題のプリントは渡されていたけれどもそれほど難しいと感じなかったから負担には思わなかった。例外、数理系のものもあるが。反対側で南雲も両手を合わせて、

「りっちゃん、あんがとさん。俺も古川のねーさんと一緒に、ただいま英語の地獄体験旅行中」

「あんたはそれだけじゃないでしょうがね」

「それはまあそうっすが」

けらっと笑い、南雲は素早くノートをしまいこんだ。四角いものを取り出した。

「じゃ、りっちゃんにお駄賃どうぞ」

「何それ」

「去年のベスト洋楽ヒットアルバム。テープに吹き込んだいたんだよね」

ここ数年のものをまとめて貸しレコード屋で借りては自分でカセットテープに吹き込んでいたのだが、どうやら南雲も同じようにしていたらしい。そろそろ欲しいとは思っていたのだが、最近のごたごたでつい忘れがちだった。そうか、もう出ていたのか。

「ありがとう。遠慮なくいただいていいかな」

「いいに決まってるじゃん。ね、りっちゃん、また後で、英語のリーダー訳、よろしく」

上総は銀色のカセットテープをカバンにしまいこみ、今度は自分のノートを広げた。そろそろ今度は、例の英語答辞を準備しなくてはなるまい。本来なら昨日、藤沖から半分無理やりに日本語原稿を奪い取ってくるべきところだったが、そんなことすっからかんに忘れていた。ばかやらかした挙句さっさと飛び出した上総に、藤沖がいくらなんでも喜んで自分の答辞原稿を渡すとは思えない。仕方ない。これは子どもの特権を駆使して、英語の先生経由で手に入れてもらうしかないだろう。その段階で英訳は終わっているだろうし。

——けど、どんな内容なんだろうな。また心にもないこと言わないとまずいのかな。

思いつくまま、英語の単語を連ねていくと覗き込んだこずえがため息をわざとらしくついた。「あんたと比較されるってのは結構しんどいよねえ。まるでさ、なんか女子が恋する少女のポエム書くみたいなのりで、単語綴ってるじゃん」

「なにそれ、ポエムって」

よくわからないことをこずえは言う。眼を向けず、上総は受け流そうとした。

「別にいいけどさ、あんたもいいかげん気付いてやんなよ。いつものようにガキみたいなことするんじゃないよ」

「いつものようにっていったい」

——あ、そうか。ガキみたいなことやらかしてるか。

言葉を飲み込むと、こずえはしてやったりとばかりにさらに続けた。

「まあ、あんたもそれなりに大人になったのねってことが、この前聞いた話でよくわかったからね。姉としてもそれ以上何も言わないけど、ただね」

一呼吸置き、上総の耳元にささやいた。吐息がかかった。

「卒業までは、美里の立場も汲んでやんなさいな」

「何それ」

低く、上総も尋ね返した。また心臓が震え出す。弱々しい鼓動に聞こえた。南雲の方をちらと見やるが、奴は本気で頭を腕で抱え込み「ひゃー、わからねー」と意味不明な言葉を呟いている。大丈夫、聞かれてない。

「美里、あんたに近寄ってこないでしょ」

「わかんないけどさ」

「近寄ってこないのよ。美里なりの気遣いだってこと、わかってやんなさいよ。それと、他の子たちもあんたに声掛けてこないでしょ」

上総はこずえを見返した。何か、ぴんとくるものがある。

「一切あんたにかかわらないようにって、美里が頼み込んでるんだからね。ま、そのあたりの事情は私の知ったことじゃないけど、それ、受け取ってやるだけの器量を持ってって言いたいところよ。毎日ちゃんと抜くところ抜いてすっきりさせるくらい大人になってるんだったらね」

「すごい失礼な言い方だよな」

「今更何言ってるの。ほら、先生来たよ」

こずえと相変わらずの下ネタ応酬……一方的にかまされているのは上総の方だが……がさえぎられ、菱本先生が教室に入ってきた。教科書は手元になく、プリントの束ばかりだった。いつものように評議委員に号令の合図を促した。上総に気付いてはいないようだった。

「じゃあ、号令」

——やはり言わないとまずいか。

上総が息を呑んだとたん、すぐに貴史の声が飛んだ。

「起立、礼、着席」

——やっぱり、羽飛なんだ。

三年間、上総の役割だった号令だが、すでに本来やるべき奴が受け持っているということだろう。わかっているくせに、またがくがくきているのはなぜだろう。上総はあえて振り向かず、席に着いた。同時に菱本先生と目が合った。上総の方からすぐに逸らした。また何か言われるのだろうか、わからない。

「今日は全員揃ってるな。よし」

こちこちに身体を硬くして待ったにもかかわらず、菱本先生のお言葉はあっさりしたものだった。上総にそれ以上しつこく声をかけるでもなく、かといって無視したわけでもない。

——前からこうしてくれればよかったんだ。

今までだったら、

「おい、立村、やっともどってきたか。よし、ほら、まずは他の連中にあやまれよ。みんな心配してたんだぞ。お前がいつ戻ってくるか、なんでこんなに傷ついたので、気になってなんなかったんだぞ」

とか言われていたというのに。学習能力が少し高まったのかもしれない。

——本当に、誰も何も言わないよな。

上総は黙ってそれを受け止めた。やはり美里も、何も言わなかった。

本当に美里は、一日何も、上総に話し掛けてこなかった。

——こんなに呼吸しやすいなんて、思わなかった。

南雲やこずえと会話を交わす以外、全くといっていいほど、クラスの連中とは口を利かないですんだ。もちろん、無視するわけでもないのだが、とりたてて怪訝な視線を向けるでもなく、ただ「ああ、いる」程度のものだった。男子たちに関しては殆どそれが徹底されているのだが、さすがに女子は一部、ひそひそ話をする子もかなりいる。そんなのは以前からのものだから、傷つ

く必要も特にない。上総はただ、学校を休む前よりも他の連中と交わす会話が少なくなった、それだけのことだった。

いわば、ひとりぼっちの時が増えた。それだけだ。

——しゃべらなくていい。話し掛けなくてもいい。

放課後の鐘が鳴るまでの間、上総の口にした言葉は「はい」「わかりました」それだけだった。授業で当てられることも今日はなくて、黙ってノートに向かっているだけだった。休み時間、本当だったらE組に逃げ込みたいところだったが昨日のことを考えると、杉本に冷たくあしらわれるのも予想がつくのであきらめた。

やはり美里は、ちらと視線を投げるだけ。近づこうとする貴史、奈良岡彰子、その他の連中を制する形で見守っているだけだった。

黙っていることがこんなに楽だとは、思ってもみなかった。

「りっちゃん、今日、これから暇？」

上総がようやく普通の会話を交わしたのは、放課後に入ってからだった。さすがに耐えかねてE組へ向かおうと思った矢先のことだった。

「暇だけど」

短く答え、上総は南雲の笑顔に頷いた。

「そっか。ひとつ、お付き合いしてもらってよいっすか」

「いいよ」

そういえば昨日、やたらと暗い表情で窓の向こうを眺めていた南雲とすれ違ったっけ。その時の様子を上総は思い出そうとし、すぐに断念した。今、ここにいる南雲にそんな重たいものは一切感じない。いつものさわやかな笑顔のまんまである。たまたま胃が痛かったのかしたのだろう。

。

「じゃあとりあえずさ、茶室、いこか」

「茶室？」

上総は雪景色を廊下の窓から眺め、いぶかしく尋ね返した。

だって南雲に似合わない世界だ。茶道の授業は組み込まれているし今年も行われたけれども、結局和菓子の食いまくりのために存在するようなものだった。南雲も女子たちから和菓子の差し入れをたんまり頂戴し、大喜びで食っていた。それだけしか認識がない。

「あすこだと今の時期、人、いないじゃん」

やっと気付いた。そうか、内密の話か。図書館だと人目につくし、校舎内だといろいろトラブルもあるってことか。わかるわかる。上総はすぐに頷き、生徒玄関へと向かった。

——予想外だったな。

誰かが上総にアクションをしかけてくるとは思っていた。貴史か美里、もしかしたら二人で。さらに奈良岡彰子か古川こずえあたりがおせっかいをしてくるかもと。考えが甘かった。南雲が一番、そっとしておいてくれそうな人物だったから気にしてなかったのだが、やはりそういうことになるわけか。

——しょうがないか。言うこと言うしかないよな。

髪の毛さらさら状態で、完璧違反マークがつくはずなのに注意されていない南雲は、やはりクラスの規律委員だった。評議委員が注意できないことも、規律委員ならチェックできることが、確かにある。

雪を踏みしめると、石畳が時折つま先の方から顔を出す。だいぶ凍り付き、泥がほんの少しだけ混じり灰色に染めている。こつこつ鳴るのはスパイクの跡か。上総は南雲の後ろに従ってそのまま茶室に向かった。

——去年か、おととしか。

新井林と決闘の場に赴き、結局こぶしを握り締めただけで終わった日があった。

——その前の年か。

その奥で雨音を聞きながら、美里を膝をかかえ語り合った日があった。

空を見上げるとまた、小粒の雪がはらりと降りてくる。また寒くなりそうだ。

その間、南雲は口を利かず、時折天を見上げてはおちゃらけ調子で「はああ」とため息をつくだけだった。やがて到着した茶室の前には人気もなく、南京錠がしっかりかかっていた。南雲は驚きもせずさっさとポケットから合鍵を取り出した。どこで手に入れたかは聞かずにおこう。規律委員会たるもの、それなりにルートはあるはずだ。

「ま、入りまひよ。ふたりきり、しっぽりと」

「なんかよくわかんないな」

顔を見合わせ、笑った。かすかに照れているようすだった。

雪囲いを済ませた庭と、その脇の小さなくぐり戸。そこから身体をよじって入る。茶室そのものには鍵もかかっておらず、入り放題。よくここで打ち合わせをしたりもしたものだけれども、今日はさすがに門に鍵がかかっている。誰かが出入りするとは思っていないだろう。

「ここ、地下室、あるよな」

「りっちゃん知ってるんだなあ」

「一応、話でさ」

確か、畳の一枚をひっぺがすと階段が隠れていて、物置場になっているはずだ。

「本条先輩が教えてくれた」

「ひゃあ、じゃ本条さんきつと、そこでいちゃいちゃしたことあるんだなあ」

雪の白さに土が混じった色がさあっと目の前に走った。そんな気がした。

「わかんないよ、そんなの」

「いちゃいちゃ、できれば、それに越したことはないよなあ」

南雲はまたわけのわからない呟きを残した後、先ににじり戸を開き、靴を抱えてもぐりこんだ。

「ばれてももう、高校進学が取り消しになる時期でもないし、まあいっかってとこだけどなあ」

「ばれてまずいこと、してるのか？」

「やっぱし、不純異性交遊ってのはまずいよなあ」

何言ってるんだろう。すでにそちらの方は経験済み、しかも下手したら本条先輩並って奴が。上総も南雲の後に続き、きちんと靴の雪と泥を一緒に落とした。

歩きつづけたせいかそれほど寒くはなかった。轟さんと話をした時よりはさすがに冷えているけれどもまだぬくもりが残っているのは、誰か午前中使ったのだろうか。掃除で出入りしていたのかもしれない。何はともあれ、かすかに種火程度の温かみが嬉しかった。手袋ははめたまま、上総は南雲の斜め前で膝を抱えた。南雲もジャンパーを羽織ったまま、片膝をまず立て、その後で崩してあぐらにした。座禅を組むようにきちんと整え、両手をべたりと畳につけた。もちろん手袋ははめたままだった。またため息をひとつ。

「高校では茶道の授業ってあるのかな」

「あるらしいよ。言ってたよ」

誰が、とは野暮なので聞かない。

「じゃあまた、正座と和菓子の日々が続くのかな」

「俺、できたら栗羊羹希望」

しばらく南雲に関係のないことを話し掛け続けた。なんとなくだが南雲の態度が、どこことなく重たいところがあるのはなんでだろうか。しばらく顔を合わせていなかっただけに上総も解せないところがある。

——なんか、あったんだろうな。けどなんだろうな。

こちらからは聞かないこと決めている。南雲は次に、正座し直し、天井を見上げた。つられて上総も見上げるとみしりと何かが鳴くような音がした。

「誰かいるのかな、ねずみかな」

「雪じゃねえの」

あまり風情のない会話をまた交わした。

「ここ、りっちゃん、よく来るだろ」

「うん、そうだね」

一度は涙を目いっぱい貯めたまますれ違ったこともあった。思い出したくない記憶が雪ときりきりした風とともに蘇ってくる。思わず目を押さえた。

「わりと人もいないからさ、よく内密の話をする時とかに使うな」

「清坂さんとは、どうなのかなあ」

南雲だって知っているはずだ。あの時、南雲がこっそりクラスの男子連中に緘口令を布いてくれたことを、上総は今も感謝している。あられのようなひゅうひゅう攻撃に遭わずにすんだおかげで、美里との交際を自然に始めることができたから。

——ま、それがよかったかどうか、は、俺が決められることじゃないけどな。

上総が黙っていると、南雲はいきなりひょいと顔を上げた。片膝を立てて、そのまま伸ばした。

「りっちゃんってさ、わりと女子の涙に弱い方かなって、突然思ったんだけどな、どうかなあ」

そんなこといきなり言われてもわからない。南雲は一呼吸「はあ」と吐いた後、また続けた。

「本当はこうしたいああしたい、って思ってもさ、『お願い』って泣かれると思わず頷いてしまうタイプじゃないかって気、するんだ。俺だと泣かれても、『悪い、ごめんなさい』で逃げちまうけどなあ」

「泣かれると、か」

昨日の帰り際、美里に捕まってコートの中にもたれられた時。あとでコートに触れてみたら、少し雪とは違った感触が残っていた。涙よりも、密着されたあたたかみか。あえてそこに触らないように、コートをたんすにしまい込んだ。今朝同じコートを着るのが気恥ずかしくて、つい短いピーコートを選んできてしまった。

「弱い、かもな」

やはり昨日の一件はすでに、南雲に届いているのだろう。つっこまれるだろうか。上総は膝をしっかりと腕で抱えて防禦の姿勢を取った。いわゆる「あんざ」である。

「俺は、笑顔に弱い」

「え？」

予想を反した答えが返ってきた。思わず腕が緩んだ。上総は南雲の顔をまじまじと眺め直した。またため息をひとつ。これで何度ため息を吐いているんだろう。数えてやりたいくらいだ。南雲がこんなに「はああ」を繰り返すのを、上総は三年間一度も見たことがない。

「笑顔で、さっぱり、答えられると、弱い」

「何かあったのか」

また天井できりきりと音がした。雪の重みかねずみの運動会か、わからない。

「振られちった」

おどけて、にやっとまずは笑った南雲。上総はその目を横からのぞき見た。

「あの人にか」

ゆっくり尋ねた。南雲とは長い付き合いだ。現在の南雲の恋愛状況は気付いているつもりだ。南雲は首を振った。

「違うのか？ でなかったら」

——外で出会った人かな。なぐちゃんは結構、外でつきあってる人がいるらしいしな。

まるで本条先輩の恋愛路をなぞっているような気がしてきた。南雲はさらに首を振った。

「りっちゃん、もっと素直に考えよう」

ばらしたいのか、それとも隠したいのか、よくわからない口調でもって南雲は続けた。

「彰子さん、に、振られちまった、ってことよ。要するに」

「え？」

まっすぐ足を伸ばし、一度南雲は背を畳につけた。腰から足をそのまま、直角に天井へ伸ばした。五秒くらいそのままにした後、ゆっくりと膝を曲げながらおろし。睡眠時の体勢のまま、

「こんな話って、ありがよ、ったく、わけわかんねえ！」

右手を額に乗せ、そのまま南雲は最大級のため息を吐いた。そのまましばらく動かなかった。喉仏のところがかすかに震えていた。

——え？ だってちょっと待てよ。奈良岡さんのこと、なぐちゃんってもうどうでもよかったんじゃないのか？ だってさ。

上総の記憶違いでなければ、南雲は去年の秋以降、奈良岡彰子との交際を仮面で行うように心していたはずだ。一言で片付ければ「心変わり」。もちろん周囲には「青大附中一番のラブカップル」に見せかけていたけれどもそれは、奈良岡がいきなり振られて周囲から物笑いになってしまうのを避けるため、むしろ友情に基づいた行為のはずだろう。知っているのは上総と、高校にいる水菜さんという陰の彼女、それからほんの一部の仲間内だけのはずだ。当然、奈良岡彰子も知らなかったはずだ。南雲さえ口走らなければ。

——中学卒業まで待って、そこで自然消滅の予定だったんじゃないのか？ 奈良岡さんも、例の医学部進学専用の高校に合格してるしさ。違ったのか？

くしゃみをいきなり二発かまし、南雲はそのままばたと倒れたまま呟いた。

「本当に好きだったのは、三年間、あいつだったんだとさ」

話が読めず、どうつつこんでいいかもわからない。上総は黙ったまま南雲の顔にかぶさるよう、見つめた。目が合うと、少し潤んだような瞳を向けてきた。

「よりによって、なんで、あいつなんだよ、俺何やってたんだよ、もう」

「あいつって、誰？」

直接答えず、南雲はさらに目を潤ませたまま早口に続けた。

「たまたま、水菜さんと一緒に歩いてたところ、すいの奴と彰子さんと、すれ違っちゃって、ここでもう年貢の納め時かって思って、彰子さん呼び出したわけ」

「それいつ」

「昨日。廊下」

ずいぶん人目のつくところで、そんな修羅場じみた話をしようとしたものだ。

「二階階段の踊り場か」

「そ、りっちゃん、俺とすれ違ったの気付かなかっただろ」

——気付いたけどそんな声かけられるかよ。

やはり何か不穏なものを感じたのは、正しかったのだろう。上総は頷いた。

「まあ、昔の彼女でってこと言おうとしたらさ、彰子さんの方からさ、『よかった、安心した』だってさ。てっきり強がってるのかと思って、俺なりにきちんと誠意みせねばなって思ったらさ」

南雲はまた、両目に手を当てて

「うわ、まじい、なんだよこれ」

身体をよじらせた。

「なんと言ったと思う？」

上総は首を振り、続きが語られるのを待った。

「『私、本当に好きな人、誰だか、やっと気が付いたんだ。あきよくん、ごめんね』」

「本当に好きな人？」

声音を真似るように、南雲は横たわったまま女言葉を使った。

「『私、入学した時から、羽飛くんのことが好きだったんだなって、今年に入ってやっと気付いたんだ。あきよくん、本当に、ごめんね』だってさ」

——羽飛のことを？

南雲以上に上総の方が混乱してきていた。思わず腕を揺さぶった。

「羽飛のことがって、けどお前たち仲良かっただろ、今はともかく、前からさ」

「俺のことは大切なお友だち、これからも一生友だちでいたいんだってさ。できたら彰子さんファンクラブの野郎たちと一緒にみんな仲良く盛り上がっていきたいんだってさ」

「けど」

「これから卒業する前に、悔い残さないように、あいつにきちんと正面切ってラブレター書くんだってさ、なんだよ、ちくしょう、なんだよいったい。俺、いったいなんだったんだよ、たく、いったいわけわからねえったらねえ！」

膝を抱え、横たわったまま南雲は背を向けた。ジャンバーの肩のところが、揺れていた。

まずは、波乱のきっかけを訊ねなくては。沈黙が長く続きすぎると、身体が氷柱になってしまう。

横たわったまま果てている南雲を横目に、上総は斜め方向を向いたまま質問した。

「先輩と一緒に歩いているところを見られたのか」

「まあ、そんなとこ。厳密に言うと、向こうもすいと歩いていたからおあいこ」

——そういう問題じゃないと思うけどな。

胸に納めるべき言葉は納め、上総は短く問うた。

「ばったりってわけか」

「そう。水菜さんが気を利かせてフォローしてくれたんだけどさ、やっぱりそろそろこれはまずいんじゃないかって思って、俺なりの判断で彰子さん呼び出したってわけ」

——それならやっぱり、さっさと別れるつもりだったんじゃないのか？

上総にはどうも解せなかった。

すでに南雲は中学三年・夏の段階で奈良岡に対して愛想尽かしをしていたはずだ。もちろんいろいろなからみもあって、卒業まではこのままにしておこうという考えはあったかもしれない。しかし、もう卒業間際だ。奈良岡は青湊を離れる。南雲は自由になる。それならば、それでわりきっていいのではないだろうか。若干トラブルが発生するかもしれないけれども、そこは南雲なりにうまくごまかすこともできるだろうし。少なくとも後腐れなくことはすむはずだ。

——なんでこんなに落ち込んでるんだろう？

謎だった。

気持ちの残らない相手に浮気現場を見られたからといって、そこまで脱力状態になるものだろうか。目の前で転がっている南雲ときたら、見るからに人生終わったような顔をしている。放置しておいたら干からびてしまうんでないかと思うくらいに。

あえて奈良岡彰子の話題を振らず、上総は水菜さんについていくつか訊ねることにした。

話は時折出ていた人ではあるけれども、実際に存在するのかすらあやふやな存在だった。南雲の本命とは言うけれども、中学一年の頃に一度付き合いその後自然消滅してしまった関係、それが縊りを戻すのならば相当な理由があるのだろう。

「彼女は、何か言っていたのか？」

「『気にしなさんな』って、頭、ぽんぽん」

南雲の狼頭をぽんぽんする、女子高生。なんだか想像すると笑える。思わず笑いを噛み殺した。

「それなら、もともとそういう関係だったってこと、知ってるのか」

「知ってる。俺、全部話したもん」

南雲は大の字に寝そべった。寒くないのだろうか？ 気になる。身体を縮こまらせている上総ですら、足先、指先が凍りそうだというのにだ。

「うちの事情もさ、いろんなこともさ、ぜーんぶ、しゃべってる」

「それなら、かなりいろいろと知っているってことなんだな」

「そ、ほんっと、この半年で俺と水菜さん、裏表全然ない付き合いしてる」

——だから、かえってよかったんじゃないのか。

やはり納得いかない。水菜さんの話で少し光が差ししてきたような口調も、すぐにかちんと凍る。たとえば池の水面に映った太陽が光り、また曇る、そんな感じだ。

「でも、それならいいきっかけだったんじゃないのか」

「だよなあ、俺もそう思ってたんだ。だから、呼び出したってわけ。さっさと本当のことしゃべって、そのあとで今までありがとうって言うつもりでいたんだ、俺なりにさ。そしたら、あの笑顔満開な顔でさあ」

「羽飛が好きだと言われた」

「そういうこと。よりによってだぜ？ 俺と奴との関係をよく知ってるはずの彰子さんがだぜ？

これって嫌がらせとしか思えないだろ？ 俺もそう思ったよ。思ったけどさ、話聞いたら全然そんなことなくってさ。俺、撃沈しちゃったってわけ」

「嫌がらせじゃない？」

ますますわからない南雲の言い分。奈良岡彰子の性格を考えると、今までやさしくしてくれた南雲へ感謝を込めて、あえて振ってあげただけと考えた方が自然だ。しかし、そう考えるとさらに謎が深まる。

——なぜ、羽飛なんだ？

奈良岡彰子という人はもともと、ぽっちゃりふっくら一重瞼のお嬢さんで、性格もまんまるの笑顔と愛嬌の持ち主だ。よっぽど女子趣味の悪い男子でなければ、きっと嫌いにはならないだろう。誰にでも明るく呼びかけて、落ち込んでいる子がいれば近づいていって肩を抱いて慰めて、その一方で笑顔満開に周囲を和ます。今まで上総の知っている限り、奈良岡彰子に悪印象を持っているのは三年C組の女子一部と、杉本梨南くらいだろう。三年C組の女子集団に関しては、単に南雲の恋人というやっかみ感情が殆どだが、杉本は奈良岡の性格そのものをすべて「白々しい」と看破している。恐らく周囲からは「お前の方が心ゆがんでいる」と斬られているだろうが、上総には杉本の感じるものがなんとなくわかる。

——いい人だから、悪い人の気持ちが、きっと永遠にわからないんだろうな。

いじめられたらかばうこと、それは正しい。

でもあえてかばわれたくない子の気持ちはきっと彼女に理解できないだろう。

「お願い、ほっといて」そう冷たく答えなくなる人間の感情が存在することなんて、わからないだろう。

それがいいとか悪いとか、そんなのはどうでもいい。上総はただ、ほっといてほしい時に百パーセントの想いでほっといてくれる人の方を選びたい、それだけだ。

——ほっとかない主義の羽飛なら、確かに合っているかもしれない、けどさ。

でも、なぜ、羽飛貴史なんだろう。

南雲とは三年来の天敵、一年時の宿泊研修夜からトラブルが発生していることを上総は聞き知っている。いまだに三年D組の男子グループそれぞれの首領としてメンチきり合っている状態は

、卒業まで続きそうだ。

奈良岡彰子もちろん、そのことは知っているはずだ。

なにせ、南雲にとことん愛されていたはずの、彼女なのだから。

それをあえて敵方の羽飛に走るとは。

「なんで、羽飛なんだろう」

思わず唇から洩れた言葉を、南雲が拾うように指先でつまむ真似をした。

「彰子さん曰く、入学式からの一目ぼれだったらしいんだよなあ。俺の出番、最初っからねえ」

どうしてこんなにぺらぺらしゃべりたがるのか、南雲は逐一丁寧に説明しだした。天井が相変わらずみしみし言うのは、どこかで誰かが聞き耳を立てているのだろうか。そんなわけ絶対ないからこそ、上総は頷いて聞いた。

「俺が彰子さんに、目、つけたのは入学式の時だったっての、リっちゃんにはしゃべったろ。けどさ、たまたま彰子さんは羽飛と隣り合ったかなんかしてたんで、一発で好みだって思ったらしいんだ。今思えば、って言ってたけどなあ。けど、小学校の男子連中がファンクラブをこしらえるような状況においてだよ、そんな意識できる状態じゃねえってことで封印しちゃったらしいんだあ」

そんなのよく記憶しているものだ。女子の認識が上総にはよくわからない。黙って聞いた。

「そのうちさ、彰子さんと水口がふたりで勉強し出しただろ。家庭教師とかいう名目でさ。彰子さんち、いろいろ家庭の事情があるんだけど、水口の父ちゃんが彰子さん一家の人柄に惚れてなんとしても息子と同じ高校に進学させたいって、奨学金出すって話をし出したんだって。すげえよな。で、受けてみたら受かっちゃまったと」

それは知らなかった。単純に奈良岡は母の眼科病院を継ぐために進学するのだと思っていた。もちろん修学旅行時の大事件は知っていたけれども、それ以上の関心は持たなかった。

「まあ、水口やその他のみなはんたちと話しているうちに、彰子さんもいろいろ考えるところがあったみたいでさ。自分が青大附属でやりのこしたことがないかどうか考えてたら、あらら、本命が羽飛だったってことに気付いちまったってわけ。彰子さん、丁寧にぜーんぶしゃべってくれたよ。隠せよ、おいってつっこみたくなるくらいにさ」

水に浮かんだ太陽がすぐに雲で覆われた、そんなため息ふたつ。

「彰子さんのやり忘れたことってのは、大好きだった羽飛に告白することだったんだってさ」

——羽飛に告白たって、でも、あいつの趣味は鈴蘭優だろ？

ますますわからない。貴史の女子趣味が三年間全く変わっていないことを上総は知っている。大親友と銘打つ美里は例外としておいても、女子のタイプはひとえにアイドル・鈴蘭優ひとすじ。過去三年間、「羽飛先輩、好きです！」コールを何度されたかわからないが、全部振り切っている現実を、奈良岡彰子が知らないわけないだろう。

「鈴蘭優に勝とうとした、わけないよな」

「そりゃあ、ああた」

南雲は口をぱっくり開けて笑った。いきなり咳き込んだ。

「彰子さん、言ってたよ。付き合うとかそんなのどうでもいいんだってさ。まずは言いたいことを全部伝えて、すっきりしたいだけだってさ」

「じゃあ、振られること覚悟で？」

「それも全く問題外。彰子さんはただ、『好きです！』を伝えて、それで完結させたいみたいなんだよなあ。女子って考えてること、さっぱりわからねえ」

——いや、そういうことなら、なんとなく。

不意に蘇った記憶。

修学旅行四日目、朝。

——私は立村くんのが好きなの。ただそれだけ。付き合うとか付き合わないとかどうだっていい。

轟さんが、前歯を少し剥き出しにして言い切った時の記憶だった。

あの時以来、轟さんは上総に恋愛的なにかを一切求めてこなかった。

「あのさ、なぐちゃん」

上総は恐る恐る自分の意見を発することにした。

「きっと奈良岡さん、誰も傷つけないんだよ」

「へ？ 俺もう、ハートブレイクずっとたなんですけど」

「誰にも、重たいもの、残したくないんだよ。付き合うとか付き合わないとか好きとか嫌いとか、そういうもんじゃなくってさ」

もう一呼吸。喉がかすかにひりっときた。

「俺が羽飛の立場だとしたら、伝えられただけでそれ以上のもの何にも求められない方が、気楽だし、助かるよ。それになぐちゃんだってさ、もう、関係ないってことになってるならそれの方が楽だろうしさ」

「思いやり、ってことか？」

「さあ、俺にはよくわからない」

わからない、と口には出しておいたけれども、上総なりの答えは出ていた。

はたして奈良岡彰子が、永年の恋人だった南雲に対してどういう感情を持っているかは判断しかなるけれども、少なくともA組恋愛事情のような修羅場にしたいと思っているわけではない、それだけははっきりしている。同時に、気持ちよく卒業できるような形を、自分なりにこしらえておきたい、そういう思いやりも隠れているような気がする。

頭の中だとどンドン湧き出る言葉が小さく固まっていってしまう。口に出すだけ出してみよう。

「まず、相手がなんで羽飛なのかってことだけど、これはすべて俺の憶測だけど」

いったん断った後、思いつくまま並べた。

「たぶん、あとくされがない奴だからじゃないかな。一番自然なのが水口とか、そのファンクラ

ブの連中とか、そういうラインだろうけれど、もしそうなったらあとあとやっかんでしまうというか、トラブルになりやすいというか、そういうのが、あるんじゃないかな」

「やっかみ？」

「そう。羽飛だったらまず、奈良岡さんがタイプじゃないことくらいみな知ってるし、もし話を持っていったとしてもすぐに『俺は鈴蘭優一筋だから』の一言で終わるだろうし」

「鈴蘭優、ねえ。ロリコンとしか思えないなあ」

「その辺の事情はノーコメント。羽飛の性格を考えると奈良岡さんをずたずたに傷つけるような振り方はしないし、たぶん普通の友だちとしてうまく流していけるんじゃないかって気がするんだ」

「そうなのか？」

疑問ありげな口調だが、もともとの天敵同士なんだからしかたない。

「奈良岡さんもそのあたりをまず考えたのと、あとなぐちゃん、個人のこともそうかな」

「だからなんでそんなことする必要あるんだよなあって」

このあたりも憶測のみ。そ知らぬ顔で上総は続けた。

「たぶんだけど、奈良岡さんはなぐちゃんに高校生の人がいる以上、その人と仲良くしてもらった方がみんな幸せになると判断したんじゃないかな。だって、大切な友だちだとか言ったんだろ？ 俺には少し理解しがたい思考回路だけ」

「理解しがたいって一体なんだかなあ」

「とにかく、みんなが仲良く、誰一人落ちることなく、暖かい気持ちで卒業式を迎える方法として、奈良岡さんはすべて計画し、なぐちゃんに自由になるよう、プレゼントしたって考えた方が、俺としては自然だな」

——自由。

どれだけ渴望しても、なかなか手に入れにくいしろもの。

上総が何度も求めても、結局あいまいなまま手をぶら下げるだけにとどまったしろもの。

はたして奈良岡彰子の頭の中に何がうごめいていたのかはわからない。現場で何が起こったのかも見ていないのだからしかたない。上総が記憶しているものは、今目の前で南雲が、思わぬ伏兵に元恋人を奪われてしまったと、頭を抱えている姿のみ。

どうしてとっくの昔に心の離れた恋人を追いかけたがるのか、正直、上総にはわからない。

ただ、それが、急所蹴り一発食らわれた以上の衝撃として、南雲に残っていることだけは、痛いほど伝わる。

ならば、せめてある程度の救いを見出すことが、上総にできる唯一の行動ではないだろうか。人一倍、感じなくてもいいことばかり感じてしまう自分が、大切な友だちの間に手を伸ばす、たったひとつのやり方ではないだろうか。決してずかずか入り込み慰めあうのではなく、自分なりに見出した答えを、告げるのみ。

「だからなぐちゃん、今から水菜さん？ その人と連絡取って、のんびりすればいいんじゃない

かな。そんなに話をし合っているんだったら、かえってそれの方がいいだろうし」

——それに、たぶんそういう関係なんだろうし。

南雲は首だけ上総の方に回した。背を向けたままの上総も、ほんの少しだけ顔が向かい合うように座り位置をずらした。

「まあなあ」

「もしあれだったら、今日これから、街に行くの付き合うよ。俺は見てるだけだけど」

「街？」

「ほら、正月に行ったとこ」

屈辱の過去だが、今の上総には無理にそこへ顔を出してどうのという気はなかった。

そんな手間のかかることするくらいだったら、暇見つけてE組に出かけて杉本梨南を捕まえ、話し掛けている方がずっと楽だ。

——きっと、それなりに楽しい過去だってあるんだろうし、そこで気を紛らわせるのも。

「りっちゃん、あのさ」

しばらく黙ったまま、南雲は足を数回、ばたばたさせた。口を切った。

「やれるんだったら、やってるけど、やれないから、こうしてるわけ」

「やれない？」

かなり露骨な言い分に、上総は全身、南雲に向けた。

「そ、やれないの」

「なんで」

「やったら、病人増やしちまうから、やっぱし、それはまずい」

「病人ってなに」

南雲はいきなり身体を起こし、片膝を立て、早口に口走った。

「早い話、そっちの病気、持ってるわけ。ストレス解消、しょうがねえよ、ったく」

言われている意味が最初、全くわからなかった。

「そっちの病気って、何かまずいのか」

「やることによって相手に移してしまう可能性大、ま、命には別状ねえけど、女性には確実にやばい置き土産、やっちまうからなあ。りっちゃんも保健体育、やったろ」

「置き土産？ 移す？ 保健体育？」

「本条さんにもさ、早く病院行って来いって言われてるけどなあ。やっぱし、やだろ。あすこもろに医者に見せて、弄繰り回されて、すっげえ痛い思いするらしいしさあ」

指差した後、南雲はまた膝を素早く引っ込めた。

「どういう事情にせよ、俺はこれ以上、どうしようもないってわけ」

「ちょっと待て、つまり、そういうことか」

南雲の明るい口調がそぐわなすぎる。上総は声を潜めた。天井の雪による軋みにも、聞かれたくない。たどり着いた答えを口に出すだけ、出してみた。

「いわゆる、性病って奴か？ まさか、梅毒とか、淋病とか、そういう奴か？」

答えが返ってこない。上総はもう一度天井を見上げ、白い息を吐いた。

もちろん保健体育の性教育部門はしっかり勉強している。青大附属の保健体育は他の中学に比べてかなり深いところまで……たとえば、行為の方法うんぬん……しっかり試験に出すし、性病に関する問題も学ぶ必要がある。照れもあってなかなか友だち同士でも口には出さないが、なんてたって上総にはその手の話には大先輩たる本条里希がいる。当然、具体的な事情や話題も、こちらが求めなくても出てくるわけで、上総は自然とその手の話を耳にすることが多かった。それはよい。いいことだ。

しかし、話と実際とは、違う。

「なぐちゃん、非常に聞きづらいんだけどさ」

「いいよ、なんでも聞いてみ」

開き直っているのかどうかわからない。南雲は他人事のように頷いた。当然、いつものさらっとした笑顔なんてない。

「鼻とか、耳とか、大丈夫？」

「なんで？」

「いや、あの、崩れてないからその辺が」

「りっちゃん、いきなりすごい想像してるなあ」

膝を叩いて笑う南雲。首を振った。ふんわり顔が和んだ。

「そんなことになってたら、俺、とっくにここになんていないじゃん」

「それから、やたらと、痛いとかそういうのもないのか？ ほら、なんというか、膿がつくとか、なんとかって」

「ああそれも大丈夫、ってか、やたらと小便する時、ちょこっとひりっとするだけ。ちょっと前まではまあなんかな、ってところあったけど」

「いつくらいから？」

南雲は指をくわえるようにして目をあちらこちらにさまよわせ、

「修学旅行の後、かなあ」

「ってことはかなり前じゃないのか？ まだ、その状態が続いてるってことだろ？」

「うーん、そうだけど、原因はわかってる」

とりあえず一番怖い、梅毒でないことは判明した。ちなみに保健体育の教科書には、鼻が露骨に変形した、目を隠した顔写真が掲載されていた。あれは怖かった。

「原因って？」

「ちょいとはめはずしちゃってさあ。修学旅行の後さ、ばあちゃんが死んじゃって、ちょっと、ストレスたまってたってのもあってさ」

不謹慎なことを言うものだ。けどもう半年以上経ったのだし、南雲を可愛がっていたばあちゃんも許してくれるだろう。見た目にはそれほど衝撃もなく、葬式の際も笑顔だった南雲だが、やはり、くるものはあったのだろう。責めることはできなかった。

「ま、あれが初めての経験だったもんでさ。なっさけねえことに。つつい味しめちまったのが

今思えば、まずかった」

「相手は」

「知らん。どっかのOLさんか女子大生か、わからねえ。顔も覚えてねえもん。ただ、その後片手の指以上の女の人と、ってのは、やっぱしなあ」

「そんなのって、そんなにって」

こういう時の反応を、どう返していいのか上総にはわからなかった。

南雲がすでに女性経験を済ませているのは知っていた。相手が奈良岡でないことは確信していたし、たぶん水菜さんか街の年上女性だろうとは思っていた。しかしシチュエーションまでは聞いていなかった。時期も子細は聞いていない。祖母の死で打ちのめされた南雲が、自暴自棄になったとしても、不思議はない。ないがしかし。

「……そのこと、誰か知ってるの」

「かの大先輩にご相談」

「本条先輩か？」

南雲は頷き、股間を軽くはたくようなしぐさをした。

「どうも思い当たる節があったみたいでさ、思いっきりここんとこ殴られた」

「急所を狙われたのか」

「まあ、無事。ちゃんと仕事はしてくれる」

——仕事かよ。

頬がてらてらしてくるのを覚えた。念のため確認したい。

「もう、することないのか」

「できねえよ。自覚症状あるのに、罪もないおねえさんたちに病原菌撒き散らせませんわな。あとはずうっと自家発電。あ、もちろんちゃんと手を洗って消毒してまっせ。やはり人間として、まずいしねえ」

——やっぱり、なぐちゃんは、いい奴だ。

上総は肩で深く息を吐き、少しだけ口元をほころばせた。釣られて南雲もいつものさりりとした笑顔を見せてくれた。

しかしだ。

——それって、半年間放置しておいて、いいのか？

過去に学んだ保健体育知識をひっかきまわしてみる限りだと生命の危険を脅かすものではない病気らしい。もし鼻がもげるような状態だとしたら、こうやって笑っていられるわけがない。南雲の性格を考えてもそれほど大事件だとは思っていないようすだ。

「病院、行ったの」

重たい雰囲気ではないので、軽く訊ねられた。

「やだよ、行けるわけねえもん」

「そういうのって、どこで見てもらえばいいんだろうな。いや、別になぐちゃんのこと責めてるわけじゃなくて、俺自身も今後、そういう時どうすればいいかな、とか思って」

「泌尿器科行けて本条先輩言ってたよ」

——本条先輩も言ってたのかよ！

あの本条先輩が勧めるくらいだ。上総は絶対的確信を得た。

「なぐちゃん、余計なこと言ったらごめん」

冷たい空気を口の中で少しだけかみ締め、はっきり伝えた。

「病院、行ったほう、絶対いいと思う。本条先輩の言う通り」

南雲はまじまじと上総の顔を眺めり、今日何度目かのため息をまたついた。

「なにされるか知ってるの、りっちゃん。もろ、見られるんだぞ。いじくりまわされるしさ、薬飲まされるしさ、それに、金かかるしさ」

「どのくらいかかるの」

「わからねえけど、一万以上かかるんじゃないかなあ。俺、そんな金、ないんだよなあ」

「保険証使えば」

「りっちゃん、保険証の裏にもろ、『泌尿器科』って判子押されるしさ、なによりも今切実なのは、俺、うちのどこに保険証しまってあるのか、わからないんだわ、はああって感じ」

——そういうことか。

腑に落ちた。当たり前だ。風邪と同じ感覚で、親に保険証貸してもらえるような状況じゃない。

次にため息を吐いたのは上総だった。

上総の家では、いつでも保険証を取り出して病院に駆け込めるよう、置き場所もきちんと決まっていた。母がいた頃はそうでもなかったのだが、現在男二人暮らし、しかも上総のようにしょっちゅう熱を出してはひっくり返っている場合、父がいない時に万が一のことがあっては大変だ。両親の了解のもと、かならず保険証を居間の食器棚引出し二段目に納めてある。しょっちゅうお世話になっているものだから、保険証の裏は見事に判子の羅列である。もっとも泌尿器科が載ったことはなく、ほとんどが内科・消化器科だった。

しかし南雲の場合、親が保険証をしっかりと管理しているわけだから、本人が理由を告げて貸し出してもらおう以外に方法はないはずだ。もし上総が南雲の立場だったとしてだ。まさか「どうもあすこが痒いんで、検査受けに行ってもいいっすか」なんて聞くことが普通できるだろうか？一発二発どやされるのは覚悟としても、「どうしてそういうことになってしまったのか？」と問われた場合、見られたくない過去がぼろぼろ湧き出てくるわけだ。

——そりゃ、知られたくないよな。

だけど、このまま南雲が知らん振りしつづけるのも、やはりあまりよくないような気がする。女子たちのように「早く行きなさいよ！」とわめくのは上総の趣味じゃないし、かえってむかつかれるのが関の山だ。だが、やはり知ってしまった以上、いい方法をつい探してしまう。男子のプライドを損ねないようにして、お勧めする方法は。

白い息に浮かんだ思いつきを、上総はふんわりと言葉にした。

「俺のうちにある保険証、なぐちゃん、貸そうか？」

「貸すって、おいおい、いったいなんざんすか」

ふざけてごまかそうとする南雲に、そのままほわりと上総は続けた。

「うん、なんとなく思いついたんだけど、俺の父さん名義の保険証、今すぐ持ってこれるから、使えばいいかなって。どうせ裏は病院の判子でいっばいだし、ひとつかふたつ泌尿器科が入っても、ばれないよ。それに、もしばれてももう俺、この学校で札付きだって証明されてるから、父さんに張り倒されるだけですむし。そのくらい、慣れてるから」

「それって思いっきり法律違反だと思うなあ」

さらにふざける南雲に、上総はそのまま頷いた。

「思うけど、使い物にならなくなる前に直した方が、たぶん、高校入ってからストレス溜めずにすむよ。もう何も気遣いする必要なくなったんだし、やりたいこと、したほうが楽じゃないかなって、ちょっとだけ思ったんだ」

南雲はしばらくげげんな表情をした後、茶室入って以来の満開な笑顔を浮かべた。

いきなりだった。雪の中から桜の花がいきなり咲き乱れたようだった。

「りっちゃん」

立ち上がり、膝と尻を払うようなしぐさをした。上総の隣にしゃがみこんだ。

「ありがとさん」

また、今度は甘えた風に首を傾げた。いきなりの幼いしぐさに上総は戸惑った。顔に見入るだけだった。背中に回って来て、いきなり肩をぼんぼん叩いた。

「本条先輩にも、りっちゃんにも言われちゃったら、やっぱし、年貢の納め時ってどこっすか」

「いやそんなこと言ったつもりじゃ」

「法律違反をりっちゃんにさせるわけには、やっぱりいかないなあ。規律委員長としてはさ」

まったくその肩書とは似合わない口調で南雲は続けた。

「やっぱしそろそろ、いろいろまじいかなと思ってたんだわな。けど、りっちゃんのお言葉で覚悟、ついたってとこで」

立ち上がり際に靴を持ち、膝のところでまた払った。

「うちの親に、保険証請求することにする。決心、たった今、ついた」

「決心って、けど」

「いいのいいの、りっちゃん、いいの」

なんだかかえって上総が余計なことをしてしまったような気がしてきた。一番自分でされたくないことを、よりによってなんで南雲にしてしまったのか。頭がぐるぐるする。頬が火照ってくる。首を振って上総も、後追い立ち上がろうとした。手を差し伸べられた。ぐいとひっぱられ、しっかりと立った。

「感謝、感謝、サンクス」

小さい声で南雲は床に向かって呟き、ゆっくり顔を挙げるとささやいた。

「りっちゃんがもどってきてくれて、よかった」

もちろん、笑顔は満開のままだった。凍り付いて今にも雪に押しつぶされそうな茶室の中で、桜吹雪が南雲に降り注いでいる幻を見た。南雲がその苗字の通り、まだ青澗にはたどり着かない桜前線を、苗字で背負ってこの茶室に持ち込んでくれた、そんな気がした。

内部進学者がほとんどの青大附中生にとって最近の関心事といえば、

「いったいどんな外部生が入学してくるのか？」

だろう。毎年三年生たちがありとあらゆる手を使い、ある時は職員室に、またある時は他中学の友だち経由でいろいろと情報を集め出すのがこの時期だった。去年は上総を始め、他の評議連中たちもスパイにこき使われたものだった。もっとも上総は諸般の事情で小学校時代の人脈が一切使えず、主に天羽、難波、更科 ががんばることとなったはずだ。

「今年はどんな奴が入ってくるのかねえ」

「けど英語科二人だけでしょ、それも野郎ばっか」

こずえが他の男子たちと喋っているのが聞こえた。

「だから、気になるじゃない。変な奴だったらやだし！」

「あまり期待しないほうがいいよ。言っちゃなんだけど、ひとは立村と友だちみただし」

——なんで俺の名前を出すんだ。

文句を言いたいところだが、古川こずえに歯向かうと倍返しされるのが目に見えているので、あえて黙っていた。教室には十八人。四月からクラスメートとなる予定の生徒が顔を揃えていた。まだ二人の外部生が混じらない中、今日から三回に渡って四月以降の英語科オリエンテーションが始まる。

すでに一クラスしかない青大附属高校英語科だからこそ、できることだ。

もし普通科クラスの連中集めてそんなことしたら大変だ。誰と誰をどうしてくっつけてくれないのかなどと、クラス替えののりで大騒ぎが始まる。直訴する奴 もいるかもしれない。だから普通科に関しては卒業式後春休みを利用する形になるらしい。その際は入学予定の外部生も混じる形となる。

「諸君、ええっと、いいかな」

恰幅のいい、腹の少したるんだ感じの、英語科担任・麻生先生が教卓を叩いた。

「まずは先日の宿題プリント、採点済みの奴を机に広げなさい」

みな、様子を伺いつつ机から取り出した。必ず持ってくるようにとの指示が出ていた。こずえが頭を抱えていたプリント類がこれだった。すでに採点されて返されているものなので、赤ペンでたっぷり書き込みされているものだ。もちろん点数も入っている。上総はすべて満点を取っていた。でも、右端の点数部分は三角に折って隠した。

「これから君たちの手で、この紙に写しなさい」

かすかなざわめきが起こった。さらに配られたのはコピー用の方眼紙だった。上総の前に座っている藤沖が挙手し、質問した。

「なぜですか」

単純な一言だが、麻生先生はそのままいかつい顔を向けて答えた。

「問題の答えを、すでに君たちは知っていることになる。それはわかるな」

「はあ」

「だが、これから入ってくる新しい仲間たちふたりは知らないわけだ」

「はあ」

全くわけがわからない。上総も心の中で「はあ」と呟くしかない。

「入学式後すぐに行われる新入生実力試験において、戸惑うことになるのは想像つくな、藤沖」

「はい」

少し、ぴんとくるものがあった。上総も頷いた。

「レベルとしてはこのくらいの内容だし、もちろん解けないこともないだろう。だが、やはり外部入学のふたりはここに座っている十八名よりも大きなハンディを背負っているわけだ」

「はい」

「だからいろいろ聞いてくるだろうし、教えてほしいとも思うだろう」

「はい」

「だからその時には、君たちが完璧に教えてあげられるよう意識してほしいということだ」

麻生先生は二重顎をさすり、今度はクラス全員に呼びかけた。

「いいか、今はみな、三年來の仲間だし、おそらく新たに三年間付き合っていくことになるだろう。もちろん、顔を見知っている仲間というのは安心感もあるし、心通じ合うものもある。だが、四月になると全く知らないふたりが英語科の仲間に加わるわけだ。もちろん入学試験を通過してきたのだし、青大附高英語科を志願してきた以上、覚悟もあるだろう。だが、うちうちで固まり続けて、内部から上がってきた自分たちが一番偉いのだという自己満足だけはしてはならないんだよ。いいか、これだけは最初に言っておきたい」

両手を教卓に着き、脂ぎった顔を左右に回しながら、

「新しく加わるふたりを暖かく英語科の一員として迎えるために、わからないことがあったら助けよう、とする意識をこれから持ってもらいたい。このプリントレベルの問題で悩んでいたら、君たちの方から『ここはこうだよ』とやさしく説明することができるように、今からすべての問題と答えを、右、左に分けて写しなさい」

よくわけのわからない風に、藤沖は「わかりました」と答えた。

たぶん誰もよくわかっていなかっただろう。

英語科クラスのミーティングは一時間、手書き作業のみで終わった。

——やっぱり俺は、教師運最悪かもな。

見知った数人の男子連中とは言葉も交わしたけれども、目の前に座っている藤沖と最悪の関係である以上、何も言えない状態だった。三年D組からの英語科進学者は古川こずえと上総のみ。将来の進路が若干狭まるから……文系のみになりがち……という理由で、大抵の男子は普通科に進学したはずだ。一番多いのはやはり、中学入試の段階でトップ生徒をまとめたとされるB組の連中で約半数、残りはA、C組に分かれている。最低でもクラス三十人はいるはずと見積もっていたが、いろいろな事情もあって二十人学級となってしまったらしい。

上総はしばらく手書きの原稿を眺めやった。

頭の中には一応、イメージがある。

——関崎が俺に説明してほしいがわからないだろう？ そんなこと、聞きたくないよな。

麻生先生と顔を合わせたのは今日が初めてだったけれども、どうも現在の担任・菱本先生と同じ匂いを感じたのは気のせいだろうか。体型こそずんぐりむっくり型で、たぶん四十代前半、女子受けはしそうにないが既婚者らしい。外見は全く似ていないけれども、同じ暑苦しい情熱を教育に注ぎたがり、さらには、

——頼みもしないことを、どんどん押し付けるタイプとしか思えないよな。

今の手写し作業だってそうだ。もちろん新しく入ってくる二人の外部生に対して思いやりを持つことは必要だと思う。美しい考えだ。上総もそれには異存がない。

しかし、なぜその後でご丁寧にも「教えてあげる」ことをせねばならないのか。

教える必要がないくらい頭のいい奴が……少なくとも関崎はそうだ……入ってくるというのに、いかにも内部生が「私はお前らよりも進んでいるからほら、教えてやるぜ」みたいな態度で接するというのはどういうものだろうか。少なくとも上総はされたらかなりむかむかするだろう。立場上、あわせなくてはならないのも承知しているから「ありがとう」くらいは言うだろうが、それでも求めていないのに押し付けられるのはたまったものではない。

——そりゃ、聞かれたら俺も話すけど、求められていないのにべたべたしろっていうのは納得いかないな。

上総は一呼吸置いて問題と解答を写し取り、かばんにしまい込んだ。先に前の藤沖が立ち上がった。上総の横をすり抜けようとした。呼び止めた。

「あの、さ」

「何か用か」

言葉を発するのも無駄という風に、顔をしかめ藤沖は答えた。

「答辞のことなんだけど、元原稿、もらえるか」

「先生方にとっくに渡してある」

「あの、だから、日本語版の原稿」

昨日菱本先生を通じて、英語翻訳バージョンの原稿はもらった。そのまま読め、というご沙汰だった。しかし一通り目を通して見たけれども、どうも上総にはぴんとこない。ありふれている言葉だらけというか、いかにも先生たちが言ってほしいことをまとめただけというか、こんなつまらないことをあの藤沖が書くとは思えない内容だった。もちろんそのまま暗誦すればいいんだったら楽だが、一応正式な原稿と読み合わせだけはしておきたかった。

「何のために必要なんだ」

「やはり、答辞だからきちんと納得しておきたいかなと思って」

藤沖はしばらく上総をにらみつけていた。

先日の、生徒会と評議委員会をめぐるごたごたの会合後遺症だろう。本当だったら一切顔もみたくないに決まっている。しかし、四月以降のクラスで名前順に並ぶと、どうも藤沖の背中を上総がじっと追わねばならない立場となるわけだ。一切口も利かないで三年間過ごすのは、改めて思う、針のむしろだ。

「あとで先生に渡す」

「できたら今度のオリエンテーションで、いいかな」

恐る恐る上総は顔色を見た。ふっと最後にまたひとにらみし、藤沖は後ろの扉から出て行った。とりあえず、なんとか会話は成立した。

上総は素早く荷物を片付けると、もうひとりの男子を探すことにした。

「立村、誰探してるのさ」

「ほら、あの、A組の、ええと二番の」

思いっきりこずえに後頭部をはたかれた。痛い。まだクラスにたくさん人が残っているというのに。

「なんだよ、暴力反対」

「いいかげん名前覚えなさいって。ほら、片岡でしょ。あんたが藤沖と語らってる間に、ものすごいスピードで教室から出てったよ」

「そうか、ありがとう」

ものすごいスピードだったら上総も、同じスピードで追いかけていなければならぬまい。

「ちょっとなに焦ってるの。なんか用事あるの」

「あるから急いでるんだって」

悪いが今日はこずえの相手をしている間はない。上総はかばんと手提げ一式をかかえると、廊下に飛び出した。こずえも追いかけてはこなかった。

藤沖と一通り会話すること。

まずは今日、自分に課したひとつめの課題をクリアした。

自分なりに毎朝、これだけはきちんとせねば、と定めた課題を用意するようにしていた。これは狩野先生からの提案だった。

「毎日ひとつでいいんです。自分がやりとげたと思えることをしてみてください」

たとえば、と付け加えた。

「苦手な人に朝の挨拶をすとか、嫌いな食べ物を残さず食るとか、そんな程度でいいです。無理をしない程度に、でも少し高いハードルだな、と思えるものを毎日書き出し、やるように心がけてみてください」

「思いつきません」

上総の言葉に、狩野先生は頷き、最初の課題を与えてくれた。

「まずは藤沖くんから、答辞を受け取ることから始めたらどうでしょう」

きっと藤沖との険悪な関係を知っていたのだろう。高すぎるハードルだった。一週間くらいのびのびにしていたけれども、なんとか今日、花丸つけられる状況となった。声をかけさえすればなんとか反応は帰ってくる、それだけは確認できた。

——けど、この状況が三年も続くのか。

気が重いことには変わらない。上総は頭を数回振って、次の課題へと向かった。

——さて、片岡を探すか。

三年A組、英語の試験では万年二番をキープしている片岡司。

周囲の噂は決して芳しいものではないが、その存在はいつも意識していた。

上総の英語限定三年連続トップを脅かすことはなかったけれども、最後の学年末試験では一気に点数を上げてきている。片岡の名が英語上位成績者に入るようになったのは、三年になってからではないだろうか。それまでは上総も片岡のことをいわゆる「下着ドロ疑いをかけられた奴」としか認識していなかった。

片岡が頭角をあらわしてきた頃というのは、天羽と西月さんとのトラブルが起こった時期と重なっている。確か修学旅行前に西月さんと正式に付き合いだしたと聞いている。ということは。

——西月さんがカンフル剤ってことか。

天羽が以前、話していたのを小耳にはさんだことがある。

「片岡はおもしろい奴だぞ、あおると一気に舞い上がっちゃう。めんこいぞ」

西月さんに片岡をくっつけようと仕組んでいる最中だったと思われる。

当時は上総も複雑な気持ちを押さえられずにいたのだが、今こうして見るとこの片岡という男子、相当な根性の持ち主だというのがわかる。天羽に嫌われた女子を今だに、こうやって守ろうと努力しつづけているわけだ。しかも自分には「元下着ドロ」という汚名が残っている。すすぐことの出来ない罪を背負いつつ、しっかり西月さん一筋に尽くしつづけている。西月さんの悪口をささやく奴は数多いが、片岡のことをけなす奴は男子にほとんどいないのではないだろうか。女子はさておいてもだ。

——ということは、今も、そういうことか。

轟さんから教えてもらった話と、天羽の告白をそれぞれ組み合わせて考えてみると。

——たぶん片岡、あいつが一番、今回の事件で最も近い情報を得ているはずだ。

今日、放課後、なんとしてもやり遂げたいものはひとつ。藤沖との不毛な会話ではなくて。

——片岡を捕まえて、話をしよう。

上総はコートを着ながら廊下を小走りにすり抜けた。下級生の女子たちが、

「あの馬鹿評議委員長がさ」

とかささやいているところなんて、もうかまっている暇ない。

上総と同じくらいの背丈で、たぶん整列する際には片岡のすぐ後ろに並ぶことになるだろう。今日の面子を見回した限りだと、たぶん上総は男子の中でも前の方に回されるに違いない。

——結局、いつになったら背が伸びるんだよ。牛乳飲めば伸びるなんて嘘だろ。

舌打ちしながらすのこで靴を履き替えた。外は雪も止み、ひさびさに明るい日差しが氷柱を溶かしているようだった。ついでに砂利路もぬらしている。靴がかなりぬめってしまう。

——まだ帰ってなんていないのかな。

上総はまず、生徒玄関の砂利道を見渡した。かろうじて背中を見失わずにすんだのは、別の人

物がご丁寧にも苗字で呼びかけていたからだった。上総の横を泥水はねちらかしてすっとんできたのは、女子だった。髪が長く、背の信じられないくらいに高い女子。確か、A組の人のはずだ。

「かたおかー！ ちょっと待ちなさいよー」

呼びかけられた片岡らしき人影が、校門のところで立ち止まった。手を振るわけでもなければ、返事をするわけでもなかった。ただ黙って、突っ立っていた。その女子が近づいてくるのを待っているところを見ると、逃げる気はたぶんないのだろう。

——まずいな。あの人離れてくれないかな。

上総は女子の後姿を直視した。

これから片岡に声をかけたいところなのだが、できれば男子同士ふたりきりで語りたい。

向こうがどう思えばわからないが、上総としてはなんとしても。

女子の方が明らかに握りこぶしふたつくらい背の高いタイプ。確かA組の女子だった記憶はあるのだが、関心のない人間の顔は覚え不上総の認識力ゆえ名前が出てこない。

——とにかく、離れてくれるといいのだが。

校門を出ていく二人を、まずはつけていくことにした。

——西月さんがなぜ、近江さんにああいう行動をとったのか、その理由を知りたい。

すでに学校内では「天羽評議委員長を巡る三角関係の惨劇」として噂されているようだった。休み時間、図書室などで下級生たちがしゃべっているのを耳にするくらいだから、かなりの情報が洩れているのだろう。そしておそらく、先日上総が打った芝居もからんで、いろいろと話もふくらんできているに違いない。

上総が知っている情報といえば、杉本、天羽、難波、そして轟さんたちから教えてもらったことくらいだしそのほとんどは評議委員サイドのものばかりだ。また杉本も事を計る前の西月さんと接してはいたけれども、肝心なその現場を見ていない。

唯一、正確な情報を知っているであろう、近江さんに直接聞き出すことができないのはまた当然のことでもある。天羽に今度こそ、半殺しにされる。

となると、上総が行き着いた先は、西月さんの今後を見守ることになるであろう、片岡しかいなかった。

轟さんが教えてくれた情報が変わっていなければ、西月さんは四月以降、片岡の実家に身を寄せることになるはずだ。もちろんその事情を知らないなんてことはないだろう。たかだか息子のつきあい相手というだけにもかかわらず、そこまで面倒を見ようなんて、よほどの覚悟がないとできないことだろう。そのあたりの事情を探るのは控えたい。西月さんだって、片岡だって口にしたくないはずだ。

だが、それでも最低限のことは、知っておかねばならない。

上総は目で片岡とたっぱのある女子のふたりを追いながら、頬を軽くこすった。

——轟さんが言う通り、西月さんの動機が天羽と関係ない、ということさえわかれば、あとは話が簡単になる。生徒会が勝手に物事を決めつけたということで、みそをつけることになる。

先日上総がかきまわした結果、喧嘩両成敗といった形でオチはついているはずだ。

だから、あと一押し。

誰か事情をよく知っている「と、思われる」人間から言を取って、

「やはり生徒会側が余計な手回しをしたせいで、評議委員会人間関係に波紋を広げてしまった」という結論に持っていければ、少なくとも天羽の立場は守られる。

そしてなによりも一番大切なことは、

——杉本がやっと、生徒会の被害者として認められる。

上総は素早く後を追った。約五メートルほど離れる形で、文庫本を開いたふりしながらゆっくりと歩いた。目の前では片岡ともう一人の女子が、肩を寄せ合って歩いている。天羽、および轟さん情報によれば、片岡の西月さんに対する忠誠ぶりはもう、誰の目にも明らかだという。もちろん上総も何度か目にしているし、そのことに疑いはない。しかし。

——それって全く違うってことないのか？

——だってあのふたり。

いや、単なる同級生、友だちなのだろう。上総は頭を切り替え、もう一度ちらりと視線を送った。いきなり女子の方が光る小物を取り出し、天に向けた。光が反射した。

——こんなところで化粧するのか。

女子はわからない。そういえば美里も、やたらと鏡を持ち歩いて、人のいないところで一生懸命覗き込んでいたものだった。自分の顔を見てそんなに楽しいのだろうか、男子同士で話したこともあった。だから杉本にも修学旅行の土産に手鏡を選んだ。

先頭、足早に林の向こうに方向転換した。駆け出すことはしないが、気付かれた可能性は高い。

——まずいな。

この展開ならば、まずは引き返すのが上総の判断だ。

だが、時間がない以上、しかたがない。

上総が青大附中三年生でいる間に、ある程度の形をつけなくてはならない。もう半月もないこの状況。上総はもう一度大股にふたりを追いかけた。

露骨に尾行していると思われないように、ときおり靴の紐を結び直したりして時間をかせいだ。ようやく前方のふたりも疑いを解いたらしく、ゆったりと林の中に歩いていった。冬場で雪は膝近くまで積もっていた。学校でも冬の間は通行禁止と定められているはずなのだが、どうやら人通りができる程度の雪道はこしらえられているようだ。脇にうずたかく、雪かきした後の山が出来上がっている。木々の葉が雪でまぶされていて、風でときおりはらりと落ちる。

——これ以上追いかけると、完全にばれるな。

上総は足を留めると、そっと側の木の陰に隠れた。万が一見つかったならば、

——奥の喫茶店に呼び出されていて用があるんだ。

そう言い訳するつもりでいた。見え見えだけどしかたない。
なんとか、片岡ひとりになってほしいのだが。

遠ざかっていくふたりが、ふと、立ち止まり、一対一で話をしている風に見えた。
女子の方が指を反対側の道路に指して、何か言っている。

片岡も頷いている。

やがて、背の高い女子は雪を跳ね飛ばしながら、向こう側の砂利道に向かって走り出した。
——完璧だ。チャンス到来。

片岡ひとり、取り残された。そのままいきなり道の端にしゃがみこみ、ひとつくしゃみをした。
ちらと、上総の方を眺めやった。

完璧、目が合った。発見された。

——行くしかない。

「ごめん、少しいいかな」

かつての評議委員長風の言い方でもって、上総は腰低く片岡に呼びかけた。

「少しだけ、聞きたいことがあるんだけど、いいかな」

片岡は黙って上総を見つめていた。上総が一步一步近づくたびにその視線の意味が読み取れてきた。明らかに片岡は、ぶっこわれそうな眼差しで上総をにらみつけていた。

尾行されていたらそりゃあ面白いわけがないだろう。片岡の憤りも上総に想像がつかなくはない。事情が事情ならばもっと別のアクションもあっただろうが、今の上総にはそんな時間も余裕もない。

「あのさ、いいかな」

片岡はしゃがみこんだまま、まだぎらついた瞳を向けてきた。

いったいなんでそんなに恨みがましい眼差しを向けるのだろう。

——英語の順位抜けないのがそんなに悔しいのかな。

上総の思い当たる節といえばそのくらいしかない。

殆ど会話も交わしたことがない。天羽と西月さんがらみのこともいろいろあって、顔を合わせることはそれなりにあっただろう。しかし、うらまれるようなことはしていないはずだ。上総は一度頭を後ろにのけぞらせ、腰をかがめた。片岡の斜め前に立った。

「すぐに終わる。少しだけ、教えてほしいんだ」

片岡は一切返事をせず、ただじっと上総をにらむだけだった。

「西月さん、今、元気なのかな」

切り口がまずかった。口にしてすぐにしくじった、そう思った。

——そうだよ、西月さんの件、表向きは内緒になってるんだ！

すっかり評議委員長時代の勘が鈍っている。以前だったらこんなへましなかったのに。

上総は素早く立て直すよう心した。目の前でまだ身をこわばらせ、近寄せまいと防禦の姿勢を崩さない片岡を宥めるため、言葉を選んだ。

「実はさ、西月さんがいつも可愛がってた後輩がいるんだけど」

一度言葉を切った。まだ緩めない口元。

「知ってるよな、あの、杉本って女子。E組にいつもいて、髪の毛いつも西月さんがすいてやってた女子なんだけどさ。知ってるよな」

何度も確認しようとするが、片岡のかたくなな態度は崩れない。思案した。

「杉本が、西月さんいなくなって以来全く元気がなくなって、俺としても少し心配になったから、ひとつ相談したくなっただけなんだけど」

杉本のことくらい知らないわけないだろうに。どうしてこうも言葉を発そうとしないのだろう。もぐりこむにもとっかかりが得られない。焦る気持ちを押し隠し、上総は続けた。

「生徒会がらみでいろいろと噂を流されてるし、酷いこともいろいろ言われているようで、西月さんも辛いだろうなって思う。俺も、評議委員会で一緒だったし、だから、あの」

どうすればいいんだかわからない。片岡の態度は一貫して「にらむ」のみ。それ以上の感情表現はない。こういう相手の心を解きほぐし、上総の言いたいことを伝えるにはあと、どのような言葉を発すればいいのだろう。

「できれば西月さんにそのこと、伝えてほしいんだ。あとさ、ひとつどうしても頼みたいことがあるさ」

本題に入ろうと決めた。もう、目の前の男子が銅像と化していようがかまわない。

ものを言うつもりがないんだったら、上総は言いたいことを伝えるだけだ。

破れかぶれ、失うものなんて何もない。

「噂に聞いていると思うけど、今、西月さん、生徒会がらみでいろいろといやなこと言いふらされているんだ。あの、つまり、三角関係っていうか、とにかく聞くに堪えないことばかり言われていて、人間としてどういうものかって感じの話題ばかりなんだ」

反応は、ない。

「たまたま杉本が、西月さんとその事件の前に接した最後の目撃者ってこともあって、最近は向こうにもいろいろな攻撃を仕掛けられているんだ。何をって言われてもうまく言えないんだけど、天羽の取り合いだとか、その」

完全に失言だ。慌てて取り消したいところだが、その方法がわからない。

焦りすぎて、言葉をしくじった。上総は首を振って、消しゴム代わりにしようと決めた。

「いや、これはあくまでも噂なんだ。だけど、杉本から聞いたところによると、西月さんを怒らせた理由っていうのは、どうも杉本のことらしいんだ。杉本に生徒会側が、いいがかりをつけて、それを聞いた西月さんが近江さんに何か文句を言いについて、ってことらしいんだ。つまり、変にいやらしい話じゃないってことなんだよな。生徒会側が余計なことを杉本に話したから、お姉さん代わりに西月さんが抗議に行っただけなんだよな。後輩を心配するあまり、ってことなんだよな」

言葉を重ねて、たっぷりミルクフィューユ状態にしてみた。クリームをたっぷりのせて、甘く、甘く。

「だから杉本も心配してるんだ。本当のことを誰も知らないで、一方的な色恋沙汰で西月さんの名誉が傷つけられるんじゃないかって。だから、ひとつ頼みたいんだけど」

いよいよ本題に入る。答辞の原稿を整理するように上総も言葉を選んでいった。

「片岡、たぶん君が一番、西月さんの本当の姿を知っているんだと思う」

風が強く吹いた。上から白い雪のかけらがさくりと落ちた。

「どういうことになるのかとか、これから先、西月さんがどういう道を選ぶのかとか、俺は知るつもりもないし、できればそっとしたって気持ちの方が強い。けど、青大附中の中でこれ以上の名誉毀損だけはさせたくないんだ。評議委員の仲間として、だから」

落とすために、最後の一語を。

「君の言葉で、西月さんの本当の気持ちを、他の連中に伝えてもらえないか」

——どうしてだろう。全く反応ない。

言葉を連ねれば連ねるほど、薄っぺらくなっていくようだった。

どうしてかわからない。

目の前の片岡が一切動じずににらみつづけているからだろうか。

自分の言葉に若干の嘘が混じっているからだろうか。

いや、嘘ではない。評議委員会仲間の西月さんの名誉を守りたいというのは本当だ。

でも、それ以上に何か、自分をごまかしているものが見え隠れする。

目を瞑りたいのに、それができない。見えてしまう。まるまると。

——頼む、OKしてくれ！

上総は祈った。膝を着き、見上げた。

少しだけ彫りの深い目元と口元が、子どもっぽく見えた。

「もちろん、全校生徒に、全校集会で話すとか、そんなことじゃないんだ。ただ、生徒会関係者のいるとことか、あと教室とか、そんなんでいいから、実際は噂と違うんだってことを、言ってほしいんだ。そうすれば必ず西月さんの名誉は守られるから」

「関係ない」

初めて片岡は答えた。

「もちろんいきなりだし、無謀な頼みごとだってことくらい、俺もわかっている。だけど、このままだと、完璧に西月さんが誤解されたままになってしまうし」

舌がもつれた。OKを取らずに引っ込むわけには絶対行かない。

西月さんの名誉はもちろん、それにつながる杉本のプライドも、そしてこのままだと生徒会が丸儲け、馬鹿な評議委員会三年連中の修羅場として片付けられてしまう。

すべてを取り戻すためには、たったひとり、部外者である片岡の一言が必要なのだ。

最後の大逆転を引き起こすための、最後の一手。

——これが成功するのなら、俺はもう、誰と口を利かなくたっていい。

上総は両手をつき、膝からつたわってくる冷たい感触と同じ速度で頭を下げた。

「頼む、一言でいい、ほんの一言でいいんだ。そう言ってほしいんだ」

「だから、関係ないんだって」

「君しかいないんだ、頼む」

「関係ないだろ」

片岡はなんとかの一つ覚えのように「関係ない」を繰り返した。それ以外の言葉は見つからないのだろうか。西月さんを思い続けて、とうとう実家にまで連れ帰ろうとするような奴が、そんな「関係ない」なんてわけがない。それとも、すでにこいつの心の中で西月さんへの気持ちは冷め切っているのだろうか？ 天羽や南雲と同じ現象だろうか？ 上総の読み違いなのだろうか。わからない。ただここでひくわけにはいかない。

「頼む、それだけでいいから」

上総は片岡の足元に手を伸ばした。もちろん腕を取って頼むつもりだったが、片岡がいきなり立ち上がり逃げ出そうとしたから結局、足にまとわりつくはめとなった。片岡も転びかけて上総の頭を思いっきりはたく格好となる。痛くはなかった。

「だから、もう一度、話だけ」

「関係ないっつらないんだって！」

少しだけ、片岡の感情が泣きそうにゆがんだ。緩みが出たと、上総は読んだ。

「もしそれが終わったら後は俺のことどう考えてもらってもいい、ただ西月さんの」

「だからお前には関係ないだろ！」

とうとう片岡は目を潤ませ、絶叫した。誰もいない林の中、薄暗い木々の下に、上総は立ち上がり片岡の腕を離さずにいた。

「関係あるんだ、だから」

いきなり肩にぼん、と手がかげられた。

「とりあえずおふたりさん、ゲームセット」

振り返った。片岡が上総の背中を見るようにして、

「桂さん」

そう呟いた。背中ごしには、黒ぶちめがねをかけ、髪の毛が七・三分けのやたらポマードくさい太った男性がにやにやしながらふたりを見つめていた。

「司、お前は車に乗ってる。俺はこちらのお兄ちゃんに話がある」

「けど、でも」

「お嬢もいるからさっさと行ってろ」

二言三言、会話を交わした後、上総をじいっと眺めた。

「子どものけんかに大人が出るなんぞ野暮だとは思うんだが、一言付け加えておくと、順番を君、ひとつ間違えてるんじゃないかな」

「あの、別に、そんな」

どもり、息を呑む。適当に手を払いのけたくても、できない。威圧感。見た目は軽いのになんでか動けない。桂さんと呼ばれた男性はもう一度上総の肩を叩くと、

「今の話は、どう考えても、まずはあいつと友だちになってから、持ち出すべきものじゃないのかなあ。もちろん、君がどういう事情で今持ち出さねばならなかったのか想像できないわけじゃないんだけどね。これ以上司が誤解しないように、まずひとつだけ確認すると」

いきなり桂さんは上総から手を離れた。

「君は、その杉本さんって子のために、司に頼み込んでるわけでしょう？」

表情は笑顔のまま変わらない。息が止まりそうで、何か言おうと舌で言葉をまさぐるけれども出てこない。

「君が聞きたいのは、小春ちゃんの名誉じゃなくて、別の子のために、なんとかしてほしいって頼んでるわけなんだよなあ、そうだよなあ」

首を振ってみた。

「君は本当に、その杉本さんって子のことが、好きで好きでたまらないんだよなあ」

こわばって揺らしたい首が動かない。

「大人にはそんなのまるみえなの。まあ、とにかくだ」

今度は両肩に手をかけ、上総を軽く揺らした。後ろからがっちり押さえられふりこの気持ちとなった。

「なら、まずはその子に告白して、それから司と友だちになるとかさ、まあまずはそれっしょ。」

好きな子の恋話は男も女も仲良くなってから語るのが一番。いいかい、友情ってのは、焦るもんじゃない。あせりなさんな、なあ。司、安心したか、さあ行くぞ」

——何言ってるんだ、この人。

背中を最後に一発張られた後、上総は言葉を見つけられないまま、ぽかんと二人を見送っていた。黒い背広になぜか似合わないぴちぴちのジーンズ姿、真っ黒いマフラー。なんだかよくわからない格好の男性は、片岡の肩をさっきの上総に対してと同じようにぽかぽか叩きながら、林の向こう側へ去っていった。

——なんだよ、なんだよいったい。

上総はふたたび、雪に崩れ落ちた。膝を突いたまま、動けなくなった。

——西月さんのことなら、無我夢中で守ろうとする奴だ。

天羽も、また他の連中もそう話していた。そこに上総は賭けた。

心の中でシュミレーションしてみて、まず大丈夫だと確信していた。

多少は嫌がられるかもしれない。時間をかけなくてはならない。もちろんそれがベストだということは重々承知していた。でも、今まで集めた情報から考えると片岡の想いの深さは上総の想像を絶するほどであり、おそらく魔法の言葉「西月さんの名誉のために」と付け加えれば、最後はきっと頷いてくれるだろう。そう信じていた。

なのに、なんで横槍が入ってしまったのか。

——あの人、なんだよ、いったい、変なこと言うなよ。なんで、なんで俺が。

膝からじわりとしみてる雪。

言われた時は何一つ、怖くなかったのに、なぜ今になって効いてくるのだろう。

——好きとかそういうのじゃないって、どうしてみんな俺のことを誤解するんだよ！

上総は何度も首を振った。

違う、違うと呟いてみた。

——決め付けるなよ、そんなんじゃないってのに。

ただ、杉本をひとりぼっちでさまよわせたくない、他の連中からこれ以上軽蔑されないようにしてやりたい、ただそれだけなのに、誰もがみな、上総の気持ちを恋心という枠の中に当てはめてしまう。関崎のことしか考えていない杉本梨南は、上総の行動が恋愛感情抜きだとわかっているからかろうじて近づくことを許してくれている。苦労しているというのに、どうして周りにはまた杉本が逃げ出すような情報を撒き散らそうとするのだろう。わからない、なにもかも、上総にはわからなかった。

最後には、上総自身にも「好きで好きでたまらないんだよなあ」と、呪いをかけていったあのメガネ男。あの言葉が、すり抜ける耳元の風に混じって繰り返される。

——好きで好きでたまらないって、なんだよ、それ。

——違うって、違うって。

耳を押さえた。首を振りつづけた。外の風は吸い込んだ息と混じり、身体を駆け抜けていくようだった。吸えば吸うほど、身体が冷える。

——好き、ってなんだよ。好きなんかじゃないんだって。

雪がまた、溜めた木々の葉から振り落とされた。今度は上総の頭にささっとかかった。

——本条先輩や、」天羽や、難波や、更科や、なぐちゃんや、あいつらみたいなこと、したいんじゃない。ただ俺は、杉本にとって一番いい方法を考えたいだけなのに、どうしてだよ。好きだとかなんだとか、俺になんてそう、思わせようとするんだよ！

いくら叫んでも、わめいても、その言葉がすでに自分のものじゃない。

なにかに、上総は、押さえつけられているようだった。誰とか彼とかいうのではないものに。膝からゆっくり濡れた感触が上半身へ上がってくる。それと同じようなものが、今の上総の中に染み入って、芯から凍らせていく。「恋」とか「愛」とか、知りたくもない概念をいっぱいいっぱい、押し付けていく。

——違う、違うんだ、違うんだって！

どうしてこんなに自分が揺れているのか、わからない。

靴下はすっかり濡れてしまった。スニーカーの上からも染みていくもの。

上総は立ち上がり、指先を片手でそれぞれ握り締め、感覚を元に戻そうとした。

震えが止まらない。

——とにかく、これで、ひとつの道が閉ざされたってことかよ。

片岡を通じて西月さんの名誉を守らせ、その延長上で杉本を生徒会側の手から守るという計画は水泡と化した。あのメガネ男が言うように、片岡と友だちになってから相談するのが一番だとはわかっているけど、そんなことする余裕がないからああしただけじゃないか。歯噛みしたいくらい悔しいがしかたない。片岡のことを「司」と名前と呼んでいたところみると、たぶん兄かいとかかのどちらかだろう。そんなことどうでもいい。最悪の印象を与えてしまった以上、上総はもう片岡と無理にコミュニケーションを取る必要はなくなってしまったわけだ。あの男がわけのわからない言葉で上総を動けなくしてしまったのだから、しょうがない。

——もう、時間がない。あと、どうすればいいんだろう。本当に、どうすれば。

精一杯考えて出した手段が、あっさり覆われてしまった。もう万策、尽き果てた。

当然降ろされるべくして落ちた評議委員長。どうしようもない。

——こんな時、本条先輩だったら。

じわりと涙が沸いてくる。右手の甲で瞼をこすった。ひっかかるようで、また視界が曇った。何ヶ月か、記憶の奥にしまい込んでいた呼び名を、上総はもう一度唇に乗せた。

「本条先輩だったら」

細い銀縁めがねをかけたまま、そりかえるように他の生徒たちを見渡し、

「それじゃ、いくぞ！ お前ら、俺の言う通り動けば完璧だ！ わかってるよな！」

指をはるか向こうに指して、最後に上総へ目をやり、

「立村、お前は俺の側にいろ。俺のやり方を見てろ」

他の評議委員たちが散らばる前に、脇へ上総の居場所をこしらえてくれた人だった。

あの人ならば、おそらく今、上総の崩れかけた理由も理解してくれるだろう。

まかりまちがっても杉本との繋がりを「恋愛感情」なんてくだらない理由でまとめたりしないだろう。上総の一番ほしい形で、答えをくれるだろう。

でも、あの人に会う権利が今の自分にあるだろうか？

——狩野先生は本条先輩に会えとか言ってたけど、そんなのできるわけない。

絶対にこちらからは連絡を入れない。きちんと、申し開きができるようになるまでは、顔も合わせない。そう決めていた。いつか、きちんと本条先輩に土下座して、評議委員会の崩壊に関しての詫びができるようになるまでは、決して会わないと、そう心していた。

でも、本条先輩以外、あと、今の状況を救ってくれる人はいない。

先生たちは上総の求めている答えじゃないものばかり押し付けるだけ。好きだ、恋愛だと決め付けてその中で答えを出せと訴える。そんなものじゃない、杉本があのまま、関崎のことを想い続け、そのことを生徒会を始めとする連中に邪魔されないように守る方法が納められている場所は、おそらく本条先輩の脳みそだけだ。

完璧すぎる存在、いつかそうありたかった先輩、だけど果たせなかった自分。許されるわけもない。ならば最後の手段だけ、別れの餞別に求めよう。

——杉本にしてやれる、最後の手段を、本条先輩はきっと知っている。土下座すればきっと、教えてくれるはずだ。先輩は、そういう人だ。

軽蔑されてもいい、あの藤沖のように一生口を利いてもらえなくてもいい。

本条先輩のアパートは、学校からさほど遠くない場所にあった。以前南雲が、「俺のうちの近くなんだけどね、本条さんの住んでたうちとちょうど学区がずれてたから同じ学校にはならなかったんだ。けど遊び仲間としてはしょっちゅうつるんでたよ」

などと話していた。上総はぼんやりと歩き回った。自転車置き場に戻るのも面倒だし、どうせだったらバスで帰ってもいい。なにより、あの人がいつ戻ってくるかわからない。

——泊まってくるのかな。

ありえないことではない。

上総は手をすり合わせ、アパートの赤錆手すりにもたれた。階段に腰掛けた。さっきぬらした膝と足首とがやたらと冷える。

——やっぱり、部屋の中ってジャングルなのかな。

何度か去年出かけた時、本条先輩のアパート内がいかにも男子専用の部屋とばかりに散乱していたのも記憶に新しい。もっとも本条先輩自身は几帳面なので、部屋の中はさほどちらかっていなかったが。靴下を汚さずしてまず本条先輩の部屋に入り込めるかどうか。

——いや、それよりも。

本条先輩は帰ってくるだろうか。

南雲や狩野先生を通じて、本条先輩のあまり順調でない高校生活情報は聞き知っていた。

上総にも全く感じ取れないわけではなかったけれども、あの本条先輩に限ってなにかしくじったとかそういうことがあるとは思えなかった。たぶん、高校の上級生とけんかしたとか、誰かの彼女を奪う形になってうらまれたとか、その程度ではないかと思う。そして、そういう程度のことならば青大附中時代もしょっちゅうあったのではないだろうか。そんなことをしても、すぐに持ち前のカリスマ性でもって片をつけてしまう、それが本条先輩のはずだった。

上総は空を見上げた。かすかにまだ青空が覗いていた。

三月だけに、さほど暗くない。

——本条先輩のとも、三月は暇なのかな。うちの学校みたいに。

もしかしたら追い返されるかもしれない。

青大附中評議委員会の長に指名されたくせに、すべてをなくしてぼろぼろになっている上総を軽蔑するかもしれない。それは覚悟の上だった。もちろん、これっきり、縁を切られてしまうのも予想はしている。だがしかし、

——今の俺には、本条先輩の才知が必要なんだ。

——でないと。

コートのポケットに片手をつっこみ、なんどか握りこぶしをこしらえた。手袋を通してさらに冷気が迫ってくる。歩いている時はさほど気にならなかった濡れた雪、ゆっくりと染み渡ってきた。

卒業するまでに、なんとしても杉本をなんとかしなくては。

階段を降りてくる気配がした。鉄の階段を派手な音させて降りてきたのは、何度か見覚えのある人だった。上総の横を通り過ぎようとして、ふと振り返った。

「あれ、君は？」

上総はこっくりと頭を下げた。本条先輩のお兄さんだ。確か青湊工業高校に通っていると聞いている。それ以上のことも、もちろん聞かされている。髪の毛が肩まで伸びているのだが、鼻の下あたりが青く剃り挙げられているのとあいまって、少し不思議な雰囲気が出た。なんと言えいいのか、「男子っぽくない」匂いというのか。そういえばすれ違った時の香りも、女子に近い花の匂いが漂っていた。まだ残っている。

「里希の友だち、だよな」

「後輩です」

「立村くん、だよな」

お兄さんは、改めて上総の前に近づき立ち止まった。

「里希を待ってるの？」

もう一度、上総は頷いた。

「なら、呼んでこようか」

お願いします、そう答えるべきか上総は迷った。お兄さんが「呼んでくれる」場所かどうか、正直判断できなかったからだった。なにせ本条先輩の放課後さまよう場所といえはいわゆる街中、デートコース、および女子の部屋。ありとあらゆる乱雑な世界への通り道。

「ありがとうございます、けど、先輩が帰ってくるまで待ちます」

「でも寒いだろ」

「寒いけど、いいです」

「なら、うちに入れば」

上総は首を振った。それはできない。

「風邪引くよ。そんなかっこうで待ってたら」

「先輩、迷惑だったら困るから」

思わずこぼれた言葉を拾い上げたのか、お兄さんは首を振った。ずんぐりむっくりしたその体型と、口調のやさしさとが重ならない。一年前だったか、もう少し前だったか、本条先輩とふたり、駅前近くの広場で、この人をペンライトで追い見守っていたことを思い出した。

「それはないよ。だって、里希は電話でしょっちゅう、君のことを話してたよ」

「電話？」

この兄弟、日常会話、室内で電話を使用しているのか？ いわゆる「親子電話」か？

上総が戸惑うのにすぐに反応したお兄さんは首を振り、やさしく笑った。

「君が最近どうしているかどうか、ここ半年くらい、いろいろなところに電話して、聞いていたよ。本当に心配しているんだということがよくわかるよ、一緒に暮らしているとね」

「それは違うと思います」

お兄さんはきっと勘違いしているのだ。半年くらいというと、上総が評議委員会の長から野に

降りて、それ以来墮落しきった生活を送っていた頃と重なる。たぶん、天羽や南雲あたりから情報を集めて、憤っていた可能性の方が高い。

「とにかく、今日は里希、すぐに帰ってくるはずだから、家に入っててくれないかな」

「でも」

「とにかく里希の部屋で待っててくれないかな」

お兄さんの押しの強さは、簡単に跳ね除けられないものだった。

結局上総は折れ、お兄さんの後ろについて、アパートの戸に手をかけた。

——予想通りだな。

部屋の荒れ果てた状態は日々パワーアップしていたらしい。上総が最後に見た部屋の様子だと、それでもまだ廊下には歩く空間が存在していたけれども、やたらと卵の殻とか、こぼれたコーヒーの跡とかが残っているのには閉口した。狭い玄関から本条先輩の部屋に続く通路を通り、案内された。灯りがついていないので、昼間でも暗く何も見えない。

「じゃあ、その辺に座ってて。コーヒー出すから」

「あの、いいです」

「いつものことだから」

かいがいしくお兄さんは背を丸め、部屋の戸を閉めた。

本条先輩の部屋の中をぐるりと見渡し、上総は改めて正座しなおした。

相変わらずこぎれいにまとめられた部屋だったが、かなりきっちりと参考書やノートが整えられているのが目立った。かつての本条先輩だったら勉強関係のプリントやノートのみ、ばらっとまとめていたはずなのだが。そのあたり心境の変化があったと見ゆる。

六畳の洋室には黄色いたんすとやたらと低い位置のベッドが場所を取っていて、かなりの圧迫感があった。その奥に小さなラジカセ一台、カセットテープを入れっぱなしのまま。上総は側に落ちていたカセットテープの箱をつまんでみた。背には、「青潟東高校演劇部地区大会用テープ」と殴り書きがなされていた。

——先輩、演劇部だったんだよな。

すっかり忘れていた。聞いていたはずだし、もちろんそのあたりの話もしていないことはなかっただろう。しかし上総の記憶には殆ど残っていなかった。本条先輩が演劇部で活躍するのはごくごくあたりまえのことであり、あらためて驚くべきことではない。南雲がちらっと、「演劇部をやめたらしいよ」と話していた時も、どこことなく他人事のように受け止めていたようだ。自分の精神状態ももちろんよくなかったのはわかってはいたけれども、それ以上に、「うまくいかない本条先輩」の図が思い描けなかった。

音を鳴らしてみようか。

そっと再生ボタンを押そうとした時、戸が開いた。慌てて指をひっこめた。お兄さんが穏やかな表情で缶コーヒーを持ってきてくれた。

「これ、飲んでて」

「ありがとうございます」

そのまま受け取り、両手で抱えた。缶が熱い。手袋で覆った。

「あの、これ、わざわざ外で？」

買ってきてくれたのだろうか。お兄さんは頷いた。

「自動販売機、すぐそこにあるからね。あったかいほうがいいしね」

上総はもう一度、お礼を言った。

「ありがとうございます」

お兄さんが部屋の中を見渡し、カーテンリングのゆるみを直した。指先がマニキュア塗っているかのように光っていた。見た感じどう考えても「男」なのに、しぐさひとつひとつがやわらかい。

「あの、本条先輩は、お元気ですか」

「やっぱり会ってないんだ」

背を向け、次に窓の水滴をティッシュで拭き取りながら、お兄さんは呟いた。どうリアクションしていいのか迷い、上総も言葉を濁した。

「あの、はい」

「よく来るんだよ。里希の青大附属時代の友だちはね」

窓を開け、今度は外側を拭き取った。

「なんでかな、今の学校の友だちは全然来ないな」

「そんなわかるんですか」

「なんとなく雰囲気だね」

どんな雰囲気なのだろう。自分もかもし出しているのだろうか。上総は腕を数回はたいた。

「やっぱりあいつは、青大附属に進めばよかったんじゃないかって思うよ」

「でも本条先輩は」

お兄さん、あなたのために、弟である本条先輩は公立を選んだんですよ。なんてことは言えない。口をつぐんだ。窓のサッシを新しいティッシュでこすりながら、お兄さんはさらに続けた。

「今の里希にとっては、ものたりないんだと思うな」

「何がものたりないんですか」

「やることなすこと、みんな枠の中ってのが、あいつにはがまんできないんだろうな」

たとえば、と言いながらティッシュをかためて捨てた。

「あいつ去年まで演劇部にいて、今は完璧帰宅部なんだけどね。高校演劇のお約束のようなものにととう馴染めずじまいだったみたいなんだ」

「でも先輩は、三年間ビデオ演劇の主演張って」

馴染めないなんてありえない。忠臣蔵の主演を張ったのは誰なんだ。上総は当然言い返そうとした。お兄さんは首を振った。

「高校演劇の規則とか、そういう細かいものじゃないんだよね。たぶん大抵の大人が求めている規格に里希が合わないんだよ。いわゆる『高校生らしさ』が、あいつにはないからね」

——大人が求める、「高校生らしさ」。

上総の耳にぴんと、細い電線が一気に突き刺さったような気がした。アンテナかもしれない。電波かもしれない。何かが脳を駆け抜けた。

お兄さんの言葉は、反対側の窓拭きを続けつつもまだ終わらなかった。

「兄貴の僕が言うのもなんだけどね、里希はうちの兄弟の中で一番大人びた奴なんだよ。末っ子なんだけどね。頭の回転が速いというのもあるけれど、人間関係のいろいろな機知とか、悪知恵とか、とにかく『高校生らしい』奴じゃないというのはなんとなくわかるんだ。たぶん名前と年齢を隠して話をすれば、あいつのことを誰も高校生だとは思わないだろうし」

「でも青大附属では全く問題ないんじゃないかと」

上総が口籠もりつつ尋ねると、お兄さんも頷きつつ、

「そうだよ。あの学校だけは、里希を『中学生らしく』ない中学生として受け入れてくれた、たったひとつの場所だったよね」

——中学生らしくない中学生。

——大人が求める、いわゆる規格。

お兄さんはいきなり話の矛先を変えた。上総にちらっと流し目を。

「僕は青大附属の環境を里希の口からしか聞いてないし、わからないけどね。あいつが一年の段階で学校を追い出されずにすんだのは、駒方先生と結城くんが里希のことをあのまんま、受け入れてくれたからじゃないかなって思うんだ。一年の頃の噂、聞いたことないかい」

上総は首を振った。聞いたことがないわけではないが、いまひとつ「噂」の域を出ない内容だったので自分の脳内でさっさと破棄していたはずだ。

「初体験したのが小学校六年の頃だったとかさ、部屋の中に女子連れこんでたとかさ、そういう話とか聞いただろ。大抵だったら、ひくよね。結城くんにも初対面の席で、『あんたいかにも童貞っぽい顔してますね』とか言い放つたらしいしね。結城くんもああいう性格だから、笑って流したらしいけど」

——本条先輩だったら、そのくらい言うだろうな。

リアルにその場の映像が浮かんできた。思わず笑った。

「結城先輩はいい人です」

「ほんとだよ、里希の恩人」

——結城先輩が？

信じられなかった。あの、アイドルグループ「日本少女宮」追っかけの、一応現在の評議委員会を打ち立てたとされる、あの結城穂積先輩が。あの人の性格が温厚でかつ、人畜無害だということは上総も知っていた。しかし、それだけのカリスマ性があるとは思えない。本条先輩はいつも、結城先輩をひっぱる格好だったはずだ。

恩人というなら、むしろ結城先輩から見た、本条先輩じゃないだろうか。

本条先輩のお兄さんは、上総の前に座り込むと、大きく伸びをした。

「立村くん、君から見たら、里希は生まれてから一度も先輩なんていないような顔していると思っているだろ。まあ僕たちに対してもあんな調子だからね。上の兄貴たちなんて、里希に敵わないもんだからもう、あきらめてるところもあるし。そんな中でたったひとり、あいつの首根っこを押さえて、全力で守ってくれたのが、結城くんなんだよ。僕と同じ歳のはずなのにね、すごいよね」

「守るって、どうやってですか」

「まず、クラスの中で同級生たちとバトルを繰り広げていて、居場所がなくなったあいつを、評議委員会に引き取ってくれたのが、結城くんなんだ。もちろんそれは、担任の駒方先生が評議委員会の顧問だったというのもあるらしいけどね。それに、そうだね、里希の彼女たちについて、いろいろとトラブルが続いた時に大人の手を借りて片付けるように努力してくれたのも、結城くんだった。あればかりはさ、大人でないとどうしようもない問題だったからね」

「大人でないと、って」

まさか、妊娠させたとか、そういうことだろうか。まさか。いつも避妊やら性病やらで気を付けるよう上総に説教していた本条先輩が、そんな失敗するわけがない。

お兄さんはそこまで詳しいことを語らなかった。

「里希も最初は反発していたけどね。ゆっくり、ゆっくり、結城くんが里希のことを理解するよう努力して、時には家に連れ帰ったりして、いろいろ解きほぐしてくれたんだね。夏休みに入ってからだよ、あいつが今の本条里希として、立ち上がったのは」

「今の、先輩？」

「そうだよ。僕が知っている限り、里希は、あのままだったら学校に行く気もなくなっていたんじゃないかな。結城くんが里希の『中学生らしく』ないところを全部受け入れてくれたから、だろうな。里希もそんなこと死んだって言わないだろうけど、きっと心の奥底では感謝していると思う」

ほら、飲みなよ、という風にお兄さんは上総の持つ缶をつついた。

信じられない。

上総の中で繋がった電極が、まだびりびりと音を鳴らしている。

なによりも、これって聞いていいことだったのだろうか？

なぜ、お兄さんはそこまで話してくれるのだろうか。

「けどね、あれは青大附属だったから、それと結城くん、あと駒方先生に守られていたから許されていたんだろうな。僕も似たような経験してきたから少しだけ、あいつの気持ちがわかるんだよ。里希の『中学生らしからぬ』行動や気持ちをそのまま受け止めることは、簡単なことじゃないんだな。結城くんが、里希を周囲の反対押し切って評議委員長に押し出したのも、そのあたりだと思う。ビデオ演劇とか、怪しいお茶会だとか、公立の中学じゃ絶対やらないような企画を立てて、里希が退屈しないような場所をセッティングしてくれたのは、青大附属でなければできないことだったし、それにね」

上総がプルトップを指にひっかけたまま聞いていると、

「里希は末っ子だから、自分が一番、自分が偉くないとだめなんだ。うちにいる時は僕がいたから、それもうまく満たされていたけど、学校だとね、なかなかそうはいかない」

「先輩、そんな人じゃ」

お兄さんはかちかち、コーヒーの缶をまた叩いた。

「立村くんの家に里希が初めて遊びにいったことがあっただろう。泊まってって、そのあと帰ってきたこと。里希が夜ふらふらしているのはいつものことだから驚かなかったけどね、次の日からあいつ、一気に態度が変わったよ。うちに帰ってきてからね、なんというか、堂々としたっていうのかな。弟がいる以上、いい兄貴にならなくちゃって感じでね。一言で言ってしまおうと責任感が出てきたというのかな。今まではどんなにあいつががんばってもガキ扱いしかしてもらえなかったけれども、これでもう、一人前だったのかな。今さっき、結城くんを恩人だと言ったけど、よく考えると今の里希をこしらえたのは立村くんなのかもしれないね」

「そんなことないです」

上総は被りを振った。

「そんな、俺なんか頭も悪いし、何もできないし」

「僕にはよくわからないけれどもね。ただ、言えるのは、立村くんと離れてから里希はもう、あの頃のようなバリバリ野郎ではなくなったってことだね。もちろん青大附属の友だちとつるんでなにかしている時はあのまんまだけど。東高（とんこう）には高校生らしからぬ本条里希をそのまま迎え入れてくれる場所はなかったみたいだし、結城くんのようにしっかりと導いてくれる先輩も、面倒みたくなるような後輩もいないわけ。今の里希はそうだね、中学一年一学期の、荒れ狂っていたあいつと同じだね。もっともおつむはそれなりに成長しているからけんかを無駄に売ったりしないけど、別のところでしっかりきているみたいだしね」

お兄さんがそこまで話した時だった。

張り裂けんばかりに戸が全開し、振動たっぷりに閉まった。

「里理！ お前何訳のわかんないことこいつに話し掛けてるんだ！ 余計なことするんじゃないねえ！」

白いジャンパーに銀のネックレスをじゃらりと下げた本条先輩が、血相変えて立ちはだかっていた。髪の毛の根元をゆるく逆立てているせいか、かつての姿よりも子どもっぽく見えたのが意外だった。本条先輩は言葉よりも先にお兄さんへ近づき、軽く一発二発、頭をはたいた。目つきは全くゆるんでいないが、手加減はしているようだった。

「さっさと出て行け！」

「行くよ。じゃあ、ごゆっくりとね」

「てめえと違うんだこいつは！ ったく、この変態野郎が！」

全く驚く気配もなく、お兄さんは立ち上がった。

「何もしてないよ」

「ったく」

やはりあの人は本条先輩よりひとつ上だということがよくわかった。

さすがだ、扱い慣れている。

お兄さんが自分の部屋に戻り、戸が静かに閉まった後、初めて本条先輩は上総に視線を向けた。驚いてはいなかったようだった。ひとつ、きちんと頭を下げた。

「お久しぶりです」

「俺に言うことはそれだけか」

「申し訳ありません」

「口先だけで言うんじゃないねえ！」

怒鳴り声は覚悟の上だけど、びくりと身体の奥から震えるのは自分の弱さ。本条先輩はさっきまでお兄さんが座っていた場所に片膝を立ててゆっくり上総の顎に指をかけた。

「いいか、よく聞け」

もう片方の手を広げ、指折りながら数えていった。

「南雲も来た、天羽も来た、新井林も来た。難波と更科は結城先輩経由で話を持ってきた。他の元評議同期連中からもたっぷり情報をもたらした。だがな、肝心要のお前だけ、なんで何にも言わないんだ？」

「だから今」

「いいかよく聞け」

静かだけど、芯から怒りを押さえているような眼差し。

「今晚は寝させない。覚悟しろ」

指先は冷たくなかった。

上総は頷き、本条先輩直々の取り調べを待つことにした。

本条先輩も腹がすいていたのか、まずいったん部屋を出て、台所から何かを持ってきた。ついでに石油ストーブのレバーを「点火」まで回し、ジャンバーを脱いだ。真っ黒のフィッシャーセーターが覗いていた。

「食ってねえのか」

「給食は食べました」

「ったく、どういう生活してたんだ」

「天羽たちの言う通りです」

返事するだけはした。それが礼儀だった。本条先輩は持ってきた箱の中からりんごを取り出し、上総に投げて渡した。

「そのままかじれ。ま、お前みたいにお上品なお坊ちゃんには向かない食べ方だろうがな」

挑発するような眼差しでにらんできた。上総も受け取り、しばらく指先で皮をこすった。

「いただきます」

本条先輩を見据えたまま、上総はそのままりんごの皮に歯を立てた。まだ熟れていないのか、硬くて歯の間がきしきしした。垂れてくる露をなめながら、それでも目は本条先輩に向けたままでいた。そんなの知ったことかとばかりに本条先輩もひとかぶりした。

「さっきも言った通り、俺は全部、天羽たちから事情を聞いている」

上総がりんごの芯まで全部食べ尽くすのを見極めた後、本条先輩は口を切った。

「俺が卒業してからの青大附中評議委員会はどうだっていいことだ。お前が仕切る以上、口出しはする気はない。ないんだがな」

二口目をかじった。

「黙ってても俺の方に全部情報が流れてくるってのはどういうことだ？」

「先輩を信頼しているからだと思います」

尋ねられたことには即答えた。

「俺よりも、本条先輩の方が信頼できるから。だから新井林も」

「黙れ。すべてはお前の推測だろ。事実だけを言え」

「でも、事実」

本条先輩はベッドに座り込み、床に正座している上総を見下ろした。

「俺の聞いたことがすべて事実だとしたら、お前はどうか反論するつもりだ？」

「認めるまでです」

「そうか、あんなことこんなことも全部事実だって認めるのか」

「はい」

「何を聞かされているかどうか、確認しないのか」

「天羽たちが嘘を言うわけじゃないです」

舌打ちし、本条先輩は枕を上総に投げつけた。受け止め損ねて顔に当たった。こけた。

「腹にそれ、かかえてろ」

言われている意味がわからない。黙ってかかえていると本条先輩は続けた。

「お前の答えひとつによっては、肝心要のあすこが使い物にならないくらい、一発ぶちかますかもしれないからな」

上総はじっと本条先輩の目を見据えた。

——本気だ、先輩は。

本気であろうがなかろうが、上総にはもう頼る場所がここしかなかった。

「いっちょ、いくか」

にらめっこの後、本条先輩はゆっくりと膝を広げ、上総に向かいかがみ込んだ。

「今から俺がお前のやらかしてきたことを一言一句すべて確認してやる。文句言いたきゃその場で抗議しろ。もっともそれを俺が受け入れるかどうかはさだかじゃねえ。話は基本として、すべて正しいという前提のもといくからな。覚悟しとけ」

「はい」

上総は静かに頷いた。

「まず最初に、お前がなぜ、あんなへまをやらかしたのかだ」

本条先輩は一瞬も目をそらさなかった。瞬きすら、気付かない。

「最初はお前にもそれなりに考えがあるんだろうとは思っていた。いきなり評議委員会と生徒会とをドッキングさせたいとか、他の学校と交流したいとか、わけのわからないこと言い出した時に、俺も止めるべきか何度か考えた。だが評議委員会の今後がどういう風になるか、想像つかないものを見たいって気もしないわけじゃねえ。ということで、放置しておいたら、あららなんだこれは」

言葉もない。目をそらさずに耳を傾けた。

「まずお前、なんでさっさと新井林の彼女の本性を暴露しなかったんだ？」

「事実関係が証明されなかったからです」

短く答えた。

「去年の今頃だったな。新井林の彼女が二股かけてるかなんかしてるって噂を、お前が撒き散らして、それでごたごたしたってことあったな」

「はい」

「じゃあ、なんでお前、言うべきことをあの段階で言わなかった」

「あいまいだったからです」

あいまいなんかじゃないけれども、言い逃れされてしまえば何も言い返せない。結果として残っているのは、新井林の前で本条先輩に張り倒されたということだけ。他中学の関係ない生徒を上総がストレートパンチ食らわせたという罪と、後輩の大切な人を罵倒した罪のふたつにおいて

。

「俺がそのこと気付かなかったと思ったか」

「話しませんでしたからわからなくて当然だと思います」

端的に答えようとして、舌をかみそうになった。

「そうか、ずいぶん見くびられていたもんだな」

初めて本条先輩は自分から目をそらした。

「悪いがお前の猿知恵はみなお見通しだってわけだ。新井林もな同じってことよ。みいんな、ご存知のことをだ、お前ひとりがかぶってたってわけだ。ご苦労なこった」

挑発すれすれのせりふをぶつけてきた。ここで言い返すべきか、それとも問い返すべきか。上総は黙った。まずは時を待とう。

「まあ、それはお前がそうした方がベストだと判断したのなら、それは俺も口出しする気ない。所詮俺は公立に行っちゃった人間だ。後輩連中に口出しする権利はなしだ。さて、次にだ」

もう一度、上総にかがみこんだ。唇結んだまま上総も見返した。

「天羽たちの許可も得てるんでまずは事実関係だけ並べるか。お前、なんで天羽に評議委員長の座を譲ろうとかいう間抜けなこと思いついたんだ？」

「間抜けではありません」

「天羽曰く、ストレスがたまっただろうって言ってたが、そんなとこか」

「違います」

いったい天羽も何を考えているのだろうか。本条先輩に相談しに行くのは一種の義務だししょうがないけれども、もう少し言い方があるだろうに。憤ったって仕方ないけれど、そう思わずにはいられない。

「まあ、天羽はしっかり自分の勤めを果たしてるしな。お前の途中で投げ出した『青大附中評議委員会、生徒会への大政奉還』も無事やり遂げそうな予感ってやつか」

「はい」

「なんでお前、評議委員会のせっかく手にしてた特権を全部、手離そうとしたんだ？ 俺にはそこところもよくわからんが、難波が言ってたらしいな。『奴は なにかかしら自分が得をしそうになるといつつも逃げ出して、周りの奴らに大盤振る舞いするくせがある』ってな。さっすがホームズ、いいとこついでるもんだ」

さらに難波もまたわけのわからないことを言い出すものだ。ホームズなんて名前を返上しろと言いたい。妄想をぶちかますのはやめてほしいものだ。上総の反論はすべて腹の中で、吐き出すわけにもいかない。妄想そのものを本条先輩はさらに打ち出してくる。

「実際、天羽を長にしたいっつう声があったのは事実だ。お前もそのくらい重々承知していたはずだ。上の先輩どもからも実際、抑えがかかっていたのも認める。だがな、なんで俺がお前を評議委員長に指名したのか、その意味を全く認識してねえのか！」

「申し訳ございません」

「あやまってりゃなんでも片がつくと思うな！」

初めて小突かれた。殴られるかと思ったが、さすがにそこまではいかなかった。

「いいか、少なくとも俺がいた頃の評議委員会は、生徒会の権力なんてどこ吹く風ってことで好き勝手できる楽園だったはずなんだがな。結城先輩の部活動代わりで出来上がったのがなさけねえ話だが、下手なクラブよかずっとましってな。演劇もバンドも茶会もデートも、そりゃなんで

もできる、パラダイスだ。しかも顧問なんてセットでついててやりたい放題なもんだから、余計なバリアの張られている生徒会よかずっと面白いってのは当然じゃないのか？ お前にもその面白さがわからなかったわけねえだろ。だから三年間も評議委員の座を守ってきたわけだろ？それが不満だったのか」

「不満じゃありません、ただ」

「ただ？」

やっときっかけがつかめそうだ。逃しはしない。指先でつまんだままのりんごの柄を、じりじり回した。

「先輩たちの創立した委員会最優先主義が間違ってるとは思いません。そのままの方がよいと思ってる人もいるはずですよ。でも、それだと、途中で興味を持った生徒が参加できなくなるし、一年の段階で自分の場所ではないと気付いた人が抜け出せなくなる恐れもあります。だから、あえて、俺はそうしただけです」

「後悔してねえのか、こういうありさまで」

「はい」

言い切った。「大政奉還」、そのこと自体には悔いがない。

本条先輩も戸惑った風に唇を尖らせ、もう二口、りんごをかじった。前かがみのままだった。「お前のご立派な理想のもと、さて『大政奉還』がなったと思ったら、あっさり女子の生徒会長に乘っ取られて、あららってまに身包みはがされあらたいへん、さてそのあたりはどう言い訳する？ お前なりにやることはやった、男子連中も女子連中もよく手伝ってくれた、だが肝心要の委員長を評議委員全員のまん前で否定されちまってどうする？」

「それが答えなんだからしょうがありません。受け入れます」

唇をかみ締め答えた。

「お前、最初から、どうにかしようと思わなかったのか」

「思いません。思ったとしても、委員全員の意味がそうだったし、他の生徒たちもみな同じこと考えていると思います」

「だからなおさら、考えることないのかよ！」

「何を、考えればいいのですか」

「お前が出来損ない評議委員長だというのはよくわかった。わかっているからこそ、どうしてそれを隠そうとしなかった？ こういう時こそ、天羽、難波、更科の力を借りて好きなように操って、自分の居場所を守るのが当然じゃないのか？」

本条先輩はどこまで知っているのだろうか？ 天羽はとにかく、難波と更科のふたりが、最終投票で上総に入れなかったことを知っているのか。力を借りる由もないことをどうしてわかろうとしてくれないのだろうか。

「俺がやるよりも、天羽がやったほうがすべてうまくいくからです」

「それは認めよう。あもちゃん、えらいわたく」

あっさり受け入れられると、ちくりとする。割り切れてないのだろうか。

「天羽ひとりで奮闘してるってのはよくわかる。あいつもいろいろ事情を抱えながら、まあ大変

だわな。新井林の彼女とやりあうのも、天羽の方が適役だと言うのも認めざるをえねえって奴か」

独り言、「健ちゃんは全然気付いてねえみたいだがな」と、呟き、
「あの佐賀はるみて子、実はとんでもない魔女っ子だな。お前、いつから気付いてた」
「おととしからです」

思わず口に出てしまった。まずかった。

「新井林も今だに信じられねえって思ってるようだが、事実、そうだもんしょうがないわな。二股しっかりかけて、利用できるところはしっかり利用して、そいでやりたいことをいつのまにかやりとげてく、そういう賢い女子がいたとはねえ。清坂ちゃんも相当なもんだが、あの子はその上を行くな」

否定すべきだろうか。本条先輩もやはり、佐賀はるみを評価しているという事実、喉がひくひくしそうになる。おととしの冬、杉本がらみの問題で佐賀はるみをじっくり観察した時に感じた、ねばっこいゼリーのような感覚を、この人には理解してもらえないのだろうか。

「そういう子がいるにもかかわらず、なんでお前、警報を出さなかったんだ？」

「出す必要なありません。なるべくしてなったのだから、しかたないです」

「気付いてたんだろ？ あの子がただもんじゃないってことをだ。もし評議委員長が『せっかく持ってる権限をお返しします』なんて寝ぼけたこと言ってたら丸ごと食っちゃうような子だつてことをだ。まあ、新井林の四月以降は公私ともに、ストレス溜まるだろうがその辺は心配しちやいねえ。奴はお前よか、ずっと大人だ。ガキじゃねえ」

いつもの「ガキ」と云う言葉に、またぐさりと刺された。

「更科も言ってたぞ。『佐賀があれだけの賢い子だとわかっていたら、俺たちが二年の段階でもっと打つ手があったはずだ』ってな。『たとえば、キリコ弟と一緒に取り込んで、評議委員会をもっと守り立てるチャンスにすべきだった』ともな。そうだそうだ、キリコちゃんあの子、大丈夫か。自殺未遂だったんだな。そりゃあ、死にたくもなるわな」

天羽も難波も酷いが、更科もそれに輪をかけて残酷なせりふを吐いている。佐賀はるみの賢さを気付いて評議委員の中心として迎え入れるということは、すなわち杉本の能力自体をすべて否定することになる。実際、もう評議委員会は否定してしまっているようなものだが、あの段階で杉本を弾き飛ばすことができるわけない。

「要するにお前は、自分より賢い奴の存在には鋭く反応するが、それを利用しようとか、仲間として受け入れようとか、そういうとこまで頭が働かなかつたっつうことだな。そうだろう」

「俺は、そんなこと」

言いかけた。今度は軽くぶたれた。少し力が入っていたが痛くない。

「自分より賢い奴を、味方につけて楽しく過ごすのが本来の評議委員会だろ。それになぜ気づかなかつた？ 天羽も、難波も、更科も、お前の判断には首をひねってた。なんで自分をあそこまで袋小路に追い詰めようとするんだってな」

「追い詰めてません、あるべき姿に戻るべきだと思ったから、そうしただけです」

「あるべき姿ってなんだ？」

息が詰まりそうだ。吐きそうだ。腹の中のりんごがぐるぐる言っている。

「本来、やるべきことをする奴が、きちんと当然与えられる場所に、行くべきだってことです」

「お前はそういう存在じゃあなかったってことか」

「はい」

「選んだ俺の立場はどうなる？」

はっと息を呑む。喉に染みる。冷たい。

「俺がお前をなぜ押したのか、それも否定するってことか？」

首を振ろうとする、でも動かない。口に出したら壊れそうになる。狩野先生も似たようなことを言っていたではないか。本条先輩を否定することになると。でも、事実なのだ、しょうがない。どんなにあがいても、自分のなりたい自分にはなれない。本条先輩のように人をひきつける力を持ってない。何一つ、満足に守れない。こんな奴が評議委員長になんてなる権利なんてない。それどころか、本条先輩の側に近寄ることも許されないはずだ。

「南雲がため息ついてたぞ。あいつもお前のこと心配してだな、いいかげん評議委員会ってところから解放してやるべきじゃねえかってな。まああいつのことだから、解放された段階でさっそくいろいろと悪さのレクチャー準備をしてたんだろうが、それもまあそれ。南雲の苦労も半端じゃねえからな」

南雲だけは上総の味方でいてくれると思っていたが、やはりそうなのか。ずしんと、心の奥が大きな石で埋もれていき、やがて感情が消えそうになる。

「もうひとつだ。お前、この三ヶ月ほど三年評議連中にとんでもないことが起こってたのに、どうして自分のことしか考えようとしなかったんだ？ こういう時こそ、指名された人間のやるべきことをすべきだったんじゃないのか？ 女子同士のバトルやら、自殺未遂やら、ごたごたが起こってるのになんでお前、自分のことしか考えようとしなかったんだ？」

「それは」

責められてもしかたのないことだ。上総はうつむき、指先を見つめようとした。すでに部屋の中は闇で、カーテンなしの窓からは街頭がひとつまたひとつ点き始めていた。

「生徒会もありゃあな、ずいぶんな手を使うとは思ったが、表向きはちっとも悪いことしてないんだ、責められることはない。西月ちゃんもキリコもなあ、悪い子じゃあないんだが、あの魔女っ子後輩に勝てる器じゃあない。しかも、最初から勝ち目のない相手を敵に回そうとしてるんだから大変だ」

「勝ち目のない相手、って」

第一、先輩はどこまで気がついているのだろうか？ 佐賀はるみ率いる女子生徒会役員たちが、杉本梨南をしたたかに傷つけたことを知っているのか。たぶん本条先輩は杉本に関して高い評価を与えていないはずだし、大したことじゃないというのかもしれないが。

「今の天羽の彼女も、まあなんてっか、女子が好きってあまりいい趣味じゃねえな。里理の女版か。人それぞれまあよろしいが、タイミング悪すぎるなあありゃ。最初は清坂ちゃんがお気に入りだったらしいが、今度は佐賀に接近してるんだもんな」

——近江さんが佐賀さんに接近？

問い掛けたいのに本条先輩はひとり語るだけ。

「佐賀の相談事を女子の先輩としてしっかり聞いてたら、たまたま西月ちゃんに聞きつけられて問い詰められて、最後に傘で追いまわされてって展開とはな。俺も思わなかった。お前のお気に入りのががつりいじめられていると勘違いしたみたいだな。事實はひとつで、天羽の彼女が『親切の押し売りをすることによって、どれだけの人が迷惑を被ったのか反省しろ』らしいがな。天羽の彼女もかなり面白い子だが、ひとつ詰めが甘かったとこだけ指摘しとつか。つまり、人間は感情の生物だってことを気付かなかったっつうことをだ」

「感情の生物？」

「そうだ、お前がよくわかってるはずだ」

指をさっと鼻先まで突き刺した。

「人間はな、事実をありのままに告げられると、逆上しちまうってことだ。西月の場合はまさにその通りだった。天羽の読みも正しかった。口が利けなくなったのは可哀想だが、天羽の方から見れば精一杯だったろう。だがな、どんなに正しくても、言ったらすべてお仕舞いになる言葉があるんだ、わかるか」

「わかりません」

思わぬところで飛び出した西月さんの件。

問われても答えられない。知らなすぎる。

「西月の場合は、わかりやすいよな。天羽の気を惹くために別の男子と付き合っただけで機嫌を取ろうとしてたら奴じゃあなくなつてむかつくわな。学校が合わないだけで休んでいるのに、うざったく迎えに来られたらさらに消えろっていいなくなるわな。同じように霧島キリコも同じもんだ。難波に言っただけ。『馬鹿を馬鹿 といったら逆上するから使うな』ってな。全く効果ないようだが、じゃあないか」

全くわからないことを続ける。そして、

「お前も同じだ」

再び指を差し直した。本条先輩の眼差しが低く伝わり、ぐいと上総に刺さる。

「立村、俺が渡したのものよりも、ずっとそんなに、なのか」

「え？」

問い返した。意味がわからない。

「俺と結城さんが作り上げてきたパラダイスを、なんでお前、そんなにあっさり捨てられるんだ」

「だから、俺にはそんなことできない」

「黙れ！」

言いかけた上総が、もう一度口を開こうとした瞬間、

「お前杉本のためにはそこまで、捨てられるのか！」

天井が見えた。頬と耳とが熱かった。たぶん、張り手をかまされた。

完全に暗闇の中、瞬きつづけている電灯が、窓から覗いていた。並んでいる灯りの中で窓の脇から見えているそれは、紫色の芯をちらちらさせながら輝いていた。

本条先輩の姿は見えなかった。ただ、叫んでいる。自分の身体が揺さぶられている。

「お前、前から言ってたな。杉本のことは好きじゃないとか、ただ自分と感覚が通じるだけなんだとか、わけわからねえこと言ってたな。気付かないわけねえだろ！ 天羽も、難波も、更科も、他の連中も、可哀想に清坂ちゃんも、みんなとっくの昔に気付いてたってのに、肝心要のお前だけが全然とんちんかなことばかり言ってたからな。ああ、俺も気付いたよ。南雲もいいかげん、解放してやれって言ってたしな。だがな、お前だってわかってただろ。あの子に惚れたら最後、すべてがなくなっちゃうってな」

「そんなんじゃないです！」

「黙れ！ もう聞き飽きたぞ、『好きなんかじゃなくて』って言い訳はもうたくさんだ。他の連中の話を聞いて、どっちの方向から見たところで、答えは一緒だ。『立村が杉本に恋焦がれてすべてをなくしちゃった』ほら言ってたな、お前の母さん関係の日舞だったか、それにあるいわゆる『二人椀久』ってのか？ 惚れた女に入れ揚げて、座敷牢に閉じ込められて、気がおかしくなっちゃって妄想の中で女を追っかけるっていう、あれだ。わかるか、お前、まさにそれなんだ。気がついてねえだろ」

「それは違うんです！」

自分でも驚くほどの声が出た。戸の向こうで耳を澄ませる気配がする。里理さんか。

「ごまかすな！ 俺も杉本みたいな子は本当言うともっと誰かが面倒見てやるべきだとは思う。思うが、それは大人の領分だ。お前なんかそんなことしようとしたら最後、せっかく手に入れた評議委員会も、味方になりそうな連中も、お前のことをめちゃくちゃ惚れてくれている清坂ちゃんも、みんな無くすってわけだ。それくらい、お前も気がついてただろ？」

「だから、好きとかそういう感情じゃ」

「黙れ黙れ黙れ！」

床に押し倒された。足をばたつかせたが本条先輩の腕力には勝てない。自然と涙があふれた。押さえつけられたまま、真上に本条先輩の黒っぽい輪郭を見た。息だけが臭い。

「お前は気付かなかったかもしれないがな、杉本のいることでお前の様子がだんだんおかしくなってることに、早い段階でみな気がついてたんだ。俺だけじゃない。結城さんを始め上の連中がな。お前が杉本をいったん、評議委員長にしたいなどと寝ぼけたこと言い出した時には、世紀末かと思ったが、すぐに現実が凌駕してくれると思ってたし俺はなんも言わなかった。新井林の腕を見てたら勝ち目ないのは見え見えだったからな。お前も杉本のことをあきらめて、素直に受け入れてくれたもんだと俺も甘く見てたのが失敗だったってことだ。もうお前、杉本の存在自体が、逆上しちゃうそのものだったんだな」

「だからそんなんじゃ」

「これ以上口利いたら、今度は頭を床に叩き割るぞ」

浮き上がらせて、とんと倒した。

「俺が命賭けて作り上げたもんを女に狂ってぶち壊しやがって！」

「狂ってなんかいません！」

上総の訴えも聞き入れようとしな。本条先輩の腕らしきものが、何度もぶるとゆれる。
「そんなにお前は評議委員長に指名されたくなかったのかよ、周りの連中がお前をバックアップしようとして懸命だったのも、迷惑だったのかよ、もういじめられないですむようにって他の連中が応援してたのも、すべて、処分かよ！」

何を言っているかわからない。力が抜けた状態で、上総はなるがままになっていた。
「完璧に、俺の読み通り、立村、お前は青大附中で万人に認められる評議委員長になるはずだったのに、なんで、そうならなかったんだよ！ これ以上お前、小学校の頃みたいにおどおどして泣いてたいのか！ 完璧にガードを固めて、俺の教えられることは全部注ぎ込んで、清坂ちゃんみたいな可愛い彼女もいて、もう二度とお前はあの頃に戻らないですむはずだったんだぞ！ なんでだよ、なんでお前、よりによって素っ裸になっちゃった？ 貯めてた貯金全部使い果たして、それでもまだ、杉本を追っかけるのか？ 今は他の男しか見てないあいつを、なぜお前、そこまでして追っかける？」

「だから俺は、そんな意味で、恋愛とかそういうんじゃ」
声を絞り出した。どんなことがあっても認めてはならない。杉本への気持ちが「恋愛」なんてものではないと。それだけは誤解されたくなかった。あっさり否定された。
「お前はここまで墮ちる男じゃねえんだぞ！ ここまで惨めに成り下がりやがって、そんなことしてまで杉本を追っかける気持ちがだ、どうして恋愛感情じゃないって言えるんだ？ ふざけるな！ お前の辞書ではどう書いてるかわからんがな、ナポレオンの辞書を含めてみな、俺たちはそういうのを、『女に惚れてる』っていうんだぞ！」

本条先輩の言葉はところどころ途切れていた。
「そっか、お前の地雷は、杉本に惚れてるってことか。そういやあ前から、付き合うとかなんとかいうと怒ったよな。じゃあなんで清坂ちゃんを捨てて杉本と付き合おうとしなかったんだ？ 杉本がお前なんか興味ないからか？ 興味もってもらえないならせめて追っ払われない距離にいたいからか？ それでお前は優柔 不断とか言われてるわけだ。こんな惨めな思いをしてまで、杉本が欲しいのか」

ふと、腕が緩んだ。静かに上総を横に寝かせた。
「それとも、それがほんとの、お前の欲しいものだったのか」
ぽつり、一言ずつ、かすれた声だった。
「俺が用意したものより、杉本ひとりが、そんな欲しかったのか」

首を振ろうとした。闇の中、本条先輩の表情は読み取れない。ただべたっと、座り込んでいるのだけが伝わってくる。
「俺は、間違ってたのか」

本条先輩が背を向け、じんわりと何か呟いているのが聞こえた。ただその意味はわからない。横たわったまま、上総はそのシルエットを追っていた。

静かだけど、まだ頭は混乱している。本条先輩の発した言葉と荒れ狂わんばかりの揺さぶり。まだおさまらない涙が、まだ流れてくる。どうして泣いてしまったのだろう。本条先輩の前では

死んでも涙を流したくなかったのに。

「先輩」

そっと声をかけた。返事はなかった。上総は身を起こし、もう一度正座した。

「先輩がそう思うなら、思っています」

まだ目じりに溜まるものを手の甲でこすった。

「ひとつだけ、最後に教えてください」

「最後、だと？」

声がとがっていた。上総は頷いた。きっと本条先輩は気がついていないだろう。慌ててつないだ。

「先輩はすべてご存知だから、余計なことはもう言いません。ただ、一つだけ教えてください。俺が卒業した後、杉本をどうすればいいですか。どうしたら、うまく青大附中の生活を乗り切らせることができますか」

無言のまま、黒いシルエットが揺れた。

「そんなの知るか」

「俺の頭ではいい方法が思いつきません。もうこれ以上俺は本条先輩に頼つつもりはないし、今日で最後にするつもりです。ただ、卒業までにどうしても、杉本のことだけは俺なりにきちんと決着をつけます。これ以上評議委員会を混乱させるつもりもありません。それだけどうか教えてください、お願いします」

「お前、認めるのか」

動かないシルエットのまま、本条先輩が問うた。

何を認めろというのだろう。

何を、どう、受け入れろというのだろう。

「教えてやったら、お前は杉本におぼれてること、認めるのかって聞いているんだ」

静かな響きが部屋の中に染み渡った。ふと、気がつくとき頬のところにストーブの温みが広がっていた。そういえば本条先輩はさっき、「点火」までレバーを回した後、通常の「中火」に直してないはずだ。がんがんに燃えているはずだ。

——認めれば、教えてくれるのだろうか。

そのために来たのだ。すべてのプライドを捨てる覚悟で来た。最後の最後に残っていた、尊敬する人の存在すら抹消するために、ここに来た。

「その通りです」

だから答えるしかなかった。喉が詰まった。

会話が途切れ、ふたりはただ黙ったまま膝を抱えていた。

タイミングを計りたくともお互い折れる気なんてさらさらなし。

上総がちらっと本条先輩の方を覗き込むたび、一切無視して背を向ける。その向け方は露骨すぎる。真っ正面から背を向ける。

——どうしようかな。

「トイレ借ります」

まずはこちらの方から空気を変えよう。上総はいったん部屋を出た。頭をすっきりさせようとトイレに立った。

「立村くん」

一呼吸おいてトイレから出たら、そこには長髪の里理さんが不安げに待っていた。

「里希に、さうとうやられた？」

上総は頷いた。無理に頬のえくぼをこしらえてみた。うまく行かず泣き顔に代わってしまった。

「そうか」

「すみません」

「それはそうと、まずは腹の中に何か入れた方がいいね。実は今、僕もうどんをこしらえようと思っていたところなんだけど、素うどんではよければ作るよ」

「あ、でも」

言葉をさえぎり、里理さんは首を振った。

「腹がすいたら戦はできないだろ。まずは少し、里希と時間をつぶしてて」

そういえば給食のあとのりんご以外、胃の中には何も入れていなかった。

「すみません」

上総はぶっきらぼうに一言付け加え、戸を開けた。本条先輩の返事はない。出ていけとは言われなかったのだから、それだけでもまだましと思う。「今夜は帰さない」だったのだから、むしろ怒るかもしれない。黙っててもいい。まずは部屋にいよう。

「電気、つけますか」

「付けろ」

冷たい言葉が返ってきた。上総はコードをひっぱった。闇の中だと重たく迫ってくる本条先輩の背が、蛍光灯の白い光に照らされていつのまにか、生々しい姿になって迫ってきた。

「お待たせ、ふたりともまずは水入りだね」

里理さんがどんぶりにほんとの素うどんを盛り、持ってきたのはそれからすぐ後だった。

「勝手にもってくんよ！」

荒々しく本条先輩が怒鳴った。

「立村くんがおなかすいているってきいたからね」

なんとも思わない風に里理さんは流し、床にそのままおぼんを置いた。三膳。どうやら里理さんもここでご相伴するつもりらしい。

「なんでてめえがこんなところにいるんだよ！」

「いやね、ちょっとさ、おせっかいしてやろうかなと思ってさ」

ちらっと上総に視線を送ってきた後、里理さんは自分の分のどんぶりを抱え、しゃぶるようにすすった。

「里希、お前さあ、そういえば千草ちゃんの話はどうなったのかな、この前結城くんと話をしていたね、気になったんだ」

「るっせえって！」

「この前、会ってきたんだろ？ 千草ちゃんのこと、立村くんには話してないのかな」

上総は目立たぬように首を振った。「千草ちゃん」って誰だろう？ たぶん、二股かけている彼女のどちらかの名前だろう。同年齢か、それとも年上か、その辺はわからない。あれから先、別れたかどうかはわからない。上総は決してそのことについて、口にしないようにしてきたから。「恋愛感情」なんてわけのわからないものを、触れたくない。

「里理！ いいかげんにしねえとぶっとばすぞ！」

「それはやだ。けどさ、里希がなんで一番めんこがっている立村くんには話さないのかなって思ったんだよね」

「お前女々しいこと言うんじゃない！」

「しょうがないよ、俺、女々しいんだからしょうがない」

冷静に交わしつつ、あっという間に里理さんは食べ終えた。まだ上総が一本、二本と、麺をいじくっている間に。

「さっきまでちらっと話を聞いてたんだけどね、里希はどうして本当にしゃべらなくちゃいけないこと、話さないのかねえ」

「なんだよそれ、これは俺とこいつとの問題だ。てめえが割り込むんじゃない！」

「だって語りたことって、結局は、千草ちゃんの話をする事でまとまりそうな気がするけどなあ。立村くんもそう思わないかな」

——だって、千草ちゃんなんて人、俺知らないもの。

里理さんは平らげた後、まだ手のついていないどんぶりを本条先輩に運び、ベッドの上に注意深く置いた。

「こいつみたいなのバブバブに何語れってんだ！」

「里希だって本当はバブバブだった時期があるだろう？ 思い出して語ればいいよ。盗み聞きした限りで言うのだ」

「盗み聞き？」

声音が変わった。

「里希が千草ちゃんにしていたことは、たぶん立村くんがそのなんとかちゃんにしていたことと、ほとんど変わらないんじゃないかって気がするんだよね。里希、そのことを話せば、いいんじゃないのか」

「根本的に違うってるだろが！ 俺に命令するんじゃないやねえ、男好き野郎のくせに！」

「そうだね、でも、好きな気持ちは誰だって変わらないよ」

後ろを向いたまま、それでも手を伸ばす本条先輩。里理さんと同じように、一気に平らげた。口に物が入っている間に、里理さんはゆっくりと声をかけていった。

「千草ちゃん、知ってる？」

「いいえ」

答え方によってはぶっちぎれそうなので、短く答えた。里理さんも頷いた。

「この子、ご推察の通り、里希の恋人だったんだ」

「どっちの」

吹き出す里理さん。うんうんと頷いた。

「小学校の頃と同級生だった子だよ。里希の初体験の相手」

「余計なこと言うなっの！」

立ち上がり、本条先輩が里理さんの胸倉をつかんだ。でもやっぱり、驚かない。

「千草ちゃんのことさ、一年の時、結城くんが割って入った時のこと、覚えてるか」

「だからお前出て行けよ」

「出て行かない。里希よりも、立村くんが知る必要のある話だと思うから」

首を振ると、本条先輩はじっと上総をにらみつけた。

「こいつのどこがだよ」

「里希、僕が見ている限り、あの時の里希と今の立村くんは同じ状態だと思うよ」

手を振り払い、里理さんは上総の肩と頭を軽く抑えるようにし、

「千草ちゃんと縁を切れって周囲から迫られて、それでも絶対、最後までお前、千草ちゃんを守ろうとしただろ。結城くんが心配していたけど、しっかり自分なりのやり方で、守っただろ」

「気持ち悪いこと言うんじゃないやねえ！」

でも本条先輩の態勢が少しずつ緩んできている。

上総にはそれがはっきりと浮かび上がった。細い、ロープが里理さんの手を通じてたらたら揺れているかのようだった。

「AVのお姉ちゃんさせられてた千草ちゃんと青大附属のエリートとだったら、別れろってそりゃあ言われるよ。結城くんも、駒方先生も、」みんな里希を説得してただろ？ その時、どうして里希は千草ちゃんを最後まで守ろうとしたか、それを語ってやるべきじゃないかなあ」

「余計なことばかり言うんじゃないやねえよ！ そんなのこいつとどう関係あるんだ！ いいかげん割り込むな！」

とうとう本条先輩は里理さんをすごい勢いで張り倒した。ぱしっと音が聞こえた。しかし、恐

るべし里理さん、転がるや否や、すぐに立ち上がり、頬をさすりながら、

「それじゃあ、僕の知っている範囲内で、千草ちゃんのことを立村くんに話そうか。立村くんこっちおいで」

おいでといわれたからには近づくしかない。上総はよろよろと里理さんの隣に座った。

「こんな暴力男に殴られつづけるよりも、わかりやすい話をしてやるほうが、君のためにはいいと思うからね」

「黙れ！ 黙れ黙れ黙れ！」

里理さん、にやりと笑った。

「立村くん、僕の部屋においで。教えてやろういろいろと」

「やめろ、変態野郎！」

腕をひっぱり外に引き出そうとする里理さんにくっついていこうとした。すると、いきなり本条先輩が上総のもう片方の腕を一気にひっぱり返した。脱臼するかと思った。すぐに里理さんが手を離したので、ぺたっとしりもちをついてしまった。

「てめえ、こいつはな、女が好きな奴なんだ。妙なこと吹き込みやがったら、ただじゃおかねえからな！ それとだ、立村」

ぐいと、上総を見下ろした。上総も受け止めた。

「なんだよ、その反抗的な目つき」

「自然な目です」

「まったく、こんななさけねえ顔なんて俺がしたことあるって言いたいのかよ、里理！」

無言で、でも笑みを湛えたまま、里理さんは廊下に引っ込んでいった。

——そういえば、本条先輩から具体的な彼女の名前、教えてもらったことがない。

上総はそっと記憶を巻き戻してみた。そう、いなかった。

どうしてだろうか。一年の頃は、エッチな話を持ち出されるとつい一歩引いてしまっていた。二年の頃は関心だけはあふれ返っているくせにそれを表出しするのが怖かった。そして三年の時は？

——本条先輩から、ハウツーはいっぱい教えてもらった。けど、本条先輩自身の経験は、ほとんど聞いてない。

病気を移さないようにするためにコンドームを使えとか、抜くときはできれば好きな女子の写真でやれとか好きな女子にはもっと積極的になれとか、美里は悪くないが杉本はやめろとか、そういう話はたくさんしてくれた。素直にそれを受け止めていた。南雲は信頼できるからもっと仲良くしろとか、男子連中とは腹を割ってスケベ話しろとか……でも、本条先輩がかつて、どのようにやってきたか、そんなのは聞いたことがなかった。

南雲あたりだといろいろ細かい事情を聞いているらしい。演劇部からみの話もそうだし、恋愛関連の話もちょこっとだけ耳にする。

でも、弟分の上総には、一言も、教えてもらえていなかった。

「本条先輩」

「なんだ」

吐き捨てるように本条先輩は答えた。片方の手で髪の毛をかき回し、もう一度後ろをむいたまま突っ立っていた。

「ごめんなさい」

うまく、どう伝えればよいかわからなくて、思わず詫びの言葉が出てしまった。はたして何にあやまりたかったのかわからなかった。それは本条先輩もいっしょのようで、

「なにいきなりあやまる」

返答が返ってきた。

どう言えばいいのだろう？

本条先輩に、今自分が頼ろうとして、期待した答えを返してもらえる可能性なんてあるのだろうか。

それとも、里理さんの話していた千草さんの話にヒントがあるのだろうか。

「俺が頼るのは、やはり、ご迷惑でしたか」

次に口からこぼれたのは、まったく予想もしていない言葉だった。

「俺は、本条先輩にくつつきすぎて、かえって重荷になってましたか」

「いきなり何言い出す」

本条先輩は振り返った。じっと上総を見下ろした。そのまなざしには、戸惑いの色が浮かんでいた。蛍光灯の下のせいか、さっぱり、汗臭さが消えていた。

「本条先輩なら、何でも知ってると思ってたし、きっとわかってもらえると思ってました。でも、俺がそう思い込んでいただけだったら、ごめんなさい」

「俺が無能とでもいうのか」

「違います！」

何か、自分の考えていた方向とは違う言葉が漏れ出す。上総は首を振った。目を上げたまま訴えた。

「本条先輩は、俺のことを弟分だって言ってくれてたし、評価してもらえてたと思ってたけど、きっと他の奴らより、頼りないって思われてもしょうがないんだって、今やっと気がつきました。思い上がってました。ごめんなさい。俺は」

「おい、もう一度言ってみろ！」

本条先輩がしゃがみこみ、上総の胸倉を再びつかんだ。激しくののしろうとする気配がする。上総はその格好のままさらに首を振った。

「だって、そうじゃないですか。本条先輩、俺に、その人の名前なんて話したこと、一度もなかったし」

「その人の名？ さっきあのおかまボケが言ったことか！」

上総は頷いた。千草さんという名が頭をよぎり、そして消える。

「何が起こったかとか、本条先輩がどんなに大変だったとか、今までぜんぜん知らなかったし」

「知る必要ねえことをなんでお前に話すか！」

「けど、天羽や南雲には話してたわけですか！ 俺は先輩が演劇部で苦労してた話なんてほと

んど、南雲経由でしか聞いてないし」

「俺が苦勞？ そんなのするか！」

「今、帰宅部だとかいう話も、さっき里理さんが教えてくれたからだし」

「あのボケ野郎があっ！」

いきなり本条先輩は机の上の筆箱を床に叩き落した。

「俺には何にも、そんなこと、教えてくれたことなかったですよ。やっぱりそれは、俺が頼りなかったからですか。もともと評議委員長としての能力が乏しかったってこと、わかってたからですか。だから俺よりも、他の奴の方が」

「黙れ黙れ黙れ！」

いきなり本条先輩は上総を揺さぶった。

「何訳のわからなねえこと言ってやがるんだ！ ったく女々しいぜ。里理もそうだがお前、何女の腐ったようなこと言ってるんだ！」

「だって、そうじゃないですか！」

不意にまた、涙がこぼれてくる。

「俺が一方向的に信頼してたつもりでしたけど、本当は俺、何も本条先輩から、認められてなかったわけだし」

「信頼？ どういうことだ？ てことは何か？ 俺がお前を信じてなかったってこと言いたいのかよ」

「信じられるだけの、能力も価値もなかったわけだからそれはしょうがないし」

今まで見えなかった本条先輩の裏側を垣間見た時、自分の信じていた姿が少しずつ崩れていくのに戸惑っていた。

本条先輩という、完璧な存在の裏のひび割れ。

千草さんのことも、また、演劇部のことも、上総は上っ面でしか知らなかった。

語ろうとしないから、そのまま知らんぷりでいいと思っていた。

でも、天羽や南雲のように、語ってもいいと先輩が判断した奴にはたくさんしゃべっているくせに、上総には語る事がなかった。

——俺には、何ひとつ、本条先輩の本心を、教えてもらえていなかったんだ。

ぽろぽろ涙が溢れ出す。

自分にとって唯一完璧な存在だった人、その人に認められたい、認められた、そう信じて評議委員会に携わってきた。期待を裏切ったと思ってきた。

でも、最初から、それは違ったのだ。

——本条先輩は最初から、俺のこと、評価しちやいなかったんだ。南雲、天羽よりずっとはるかに。

「いいかげんいじけるのもいいかげんにしろ！」

頬をはたかれた。

「しゃきっとしろしゃきっと！」

「だって本条先輩は」

「どっかの女子連中みたく、秘密を打ち明けあうことが友情の証とでも思ったか！ ねちねち告白ごっこすることが親友のしるしとでも思ったか！」

本条先輩の手がもう片方の頬を打った。

「いいか、立村、よく聞け」

両手で胸倉を押さえるように、捕まれた。顔を再接近してきた。本条先輩のまなざしには、かすかに光るものが混じっていた。

「過去の女のこともなんか話して、なんになる？ 俺のみっともねえ過去のこともなんかしゃべってお前のなんに役に立つ？ 俺が結城さんと馬鹿やってたころの話べらべら話してどこが面白い？」

「けど、南雲や天羽には」

言いかけた。揺さぶられて声が出ない。

「俺はあいつらに評議委員長の指名、したか？ お前だけだろうが！ お前ひとりだけだつての！」

「けど、それは違うと」

「違わねえんだよ！」

ふたたび、力がえりのところにこもった。本条先輩の声はかすれていた。

「お前、じゃあなにか、俺がだらだらみっともねえがきんちょの頃の話聞かせて、面白いと思うか？ 今日はあいつ、昨日はこいつって女遊びしていた頃の話して、露骨に逃げたのお前だろ？ 結城さんにみっともねえくらいひっぱられてたなんてこと聞いて楽しいか？」

頷いたけれど、つたわらなかったのかもしれない。本条先輩は続けた。

「だろ、だろが。お前の性格じゃあ、俺の武勇伝なんか興味ねえだろ。だからしゃべらなかつたそれだけだ」

「けど、他の奴には」

再び言い募る上総を本条先輩は無我夢中で揺さぶりつづけた。

「俺がそんな奴だって聞いたら、お前、俺についてくる気になったかよ！」

——俺についてくる気になったかよ！

はっと、本条先輩の手が緩み、言葉が途絶えた。

ぱたりと上総は横たわった。同じ衝撃が走った。

——俺についてくる気になったかよ！

本条先輩が、まさか。

おびえていた？

上総に嫌われるかもしれないとでも、思ったのか？

そんなことありえない。だって本条先輩は、完璧な人。こんな完璧な人が自分を必要としてく

れるわけがない。その証拠に、千草さんの話もなにも教えてくれなかったではないか。そう思っていた。

けど、違うのか？

本条先輩は、上総に嫌われたくないから、黙っていたのか？

本条先輩の方が、上総の方をうかがっていたのか？

それだけ、大切にしてもらえる存在だったのか、自分は？

混乱する。上総はしゃくりあげながら首を振った。

「そんなことないです。絶対に」

「嘘吐け！ おどおどびくびくして、俺の昔の女の話聞いて、こいつばかかって顔してたの、お前だろうが！」

「そんなこと言ってません」

「裏方ばっかやらされてやさぐれてるとでも聞いて、ざまあみろとでも思ったか！」

「そんなこと、絶対に思ってなんか」

「じゃあ俺に何を言いたいんだ？ 俺を頼る振りして、実はこいつ何にもできねえのかと物笑いにでもするつもりか！」

信じられなかった。本条先輩の口から出てくるべき言葉ではなかった。上総はかぶりを振った。声を出せず何度も身体ごと揺らした。

「そんなんじゃない、そんなんじゃないから、俺は先輩のこと」

「じゃあなんで、こうなっちゃう前に」

上総の肩を無我夢中で揺さぶる本条先輩。その目から、何かが転がり落ちた。確かに見た。

「どうしていっちゃん最初に、俺のところに来なかったんだ！」

隠せないくらいの、大粒の涙だった。

もう、言葉はなかった。上総は息を呑んだまま、ただその頬にかかるものを眺めていた。

——本条先輩が、泣いてる。

絶対にありえないと思っていた。

こんなこと、言われることなんて永遠にないと思っていた。

でも、本条先輩の口元と、瞳に、確かな答えが刻まれていた。

——本条先輩が、まさか。

狩野先生の口にした言葉が蘇った。上総と話をしたがつている、それも友だちとして。そんなありえないこと、信じてなんていなかった。

でも、今日の前にいる本条先輩は、かつて自信たっぷりに振る舞い続けていた青大附中評議委員長のものではなかった。——俺に嫌われたくないからって、そんな、そんなわけない。だって本条先輩になんて、俺は評価される価値なんてないし。

静かに上総は混乱していった。中学時代の三年間、もし本条先輩が側にいなかったらと考える

だけで、ぞっとする。もし評議委員になっていなかったら、今までかろうじて自分のものであった人間関係も友情も、なにひとつ手に入らなかったのだから。役立たずの自分でも評議委員長としての価値があると認めてくれた、それがどれだけうれしかったか、たったひとりの人に認められたくていままできた。そんな人がだ、今の、すっかり落ちぶれた自分のことをそんな大切に思ってくれているわけがない。第一、何ができるというんだろう？

上総は顔を上げた。失敗したとばかりに頬をこすってそっぽを向く本条先輩に、何か言わなくてはと頭を回転させた。うまい言葉が見つからなかった。

でも、選んだ。

「俺、本条先輩と、対等になれるまでは、絶対に会わないと決めてました」

「はあ？」

「認めてもらえるまでは、会わないことにしてました。けど」

まじまじと本条先輩は上総を見返した。

「今の俺でも、本条先輩、話をしたいと思ってくれますか。俺のこと、こんなままでもかまわないうって言ってもらえますか」

「何言ってるんだ、お前」

「俺は、本条先輩と、友だちみたいに、話をしてもいいって思ってもらえる日まで会わないって決めていました」

瞬間、本条先輩の手が、頬を直撃した。何が起こったかわからなかった。今日張られた手の中では一番きついものだった。

「ばっかやろう！」

まだ本条先輩のまつげと鼻脇には濡れた跡が残っていた。上総は身体ごと本条先輩が近づいてくるのを感じ、そのままにした。

「お前、一応は後輩だろ」

両手を上総の肩に置いた。さっき揺さぶられたのとは同じポーズだったけれど、重たかった。静かに石のように。

「お前の方から、来たっていいだろうが」

また一粒、二粒あふれ出る。かすれた声、かすかに首を振り覗き込んだ。

「お前の方から、来いよ」

なんで今まで気付かなかったのだろう。

今まで上総は本条先輩に見捨てられたものだと思いきっていた。

価値のない自分は今もう、本条先輩に近づいてはいけないもんだと思っていた。

南雲や天羽のように、対等に評価してもらえてないと感じていた。

だから、完璧な評議委員長にならない限り、絶対に会わない、そう決めていた。

違った。本条先輩は、上総に会いたかったのだ。

どう考えても疑いのない想いが、伝わってくる。否定できない。

単純すぎる、ただそれだけのこと。

ただ、上総が一方的に本条先輩を撥ね付けていただけのこと。

傷ついていたのは上総ではなく、本条先輩だった。

——俺に、今、何ができる？

上総はしゃくりあげながら、ようやく一言しぼりだした。

「本条先輩、今からでも、いいですか」

もう一度、涙目の本条先輩に問い掛けた。

「今から、全部、話聞いてもらって、いいですか」

「あたりめえだろ！ 今夜は寝させないって、言っただろうが！」

がしがしと再び本条先輩は肩を揺らし、上総の髪の毛に手を置いて激しくかき回した。

「仕切り直しだ、おい里理、なんか食べ物と飲みもん、持ってこい！」

その夜、上総は初めて、千草さんと本条先輩との物語を知った。

かつての上総だったら、きっと逃げ出していたような内容だっただろう。

あまりにもエロティカルで、グロテスクで。

ただ、本条先輩の物語るものを黙って受け止めるだけだった。

——それしか俺にはできないけど、いいのかな。

本条先輩は上総を脇におき、ただ語りつづけた。

「立村、今話したこと、全部理解できたか？」

上総はふとんから顔を出したまま、首を振った。本条先輩は頬を四角くして笑った。

「だろうな。まあいいや。お前にはまだ早すぎるよなあ」

かなりむっときて、上総は顔をこわばらせたまま黙っていた。

「そう怒るな怒るな。けどな、ひとつだけ覚えとけ」

柔和な口調で、本条先輩は付け加えた。

「女とやっちゃうのは、小学生でもできる。けどな、やらかした後の後片付けは、大人の手を借りないとできねえよ。お前は大人連中と上手にやりあえないから、きつとしくじっちゃう。だから急いでやるな。お前がひとりで始末できることだけ、やってろ」

やっぱり上総を子ども扱いしているのだろう。悔しくて黙っていた。

「俺が自分で片付けてうまくいったことってのは、ひとつだけだ」

頭を軽く撫でまわされた。

「千草を、児童相談所に逃がしたことだ。あれだけは俺の手柄だったと思うぞ」

本条先輩の語った物語は、上総の脳みそで消化できる類のものではなかった。

ストーリーそのものが、いわゆる妄想のひとつに過ぎないように、でも本条先輩は決して嘘をつかないから信用しないといけなくて。

しかも当てはめられた言葉はすべて醜く汚い泥水のようなもの。

耳をふさがず、ただ流しこむことでしか、上総はその言葉を受け入れられなかった。

「俺は、本条先輩の話すべて信じます」

それしか言葉を返せなかった。それでいいと、本条先輩も頷いてくれたから。

「俺が小学六年の時に初体験したってのは、前も話したからわかってるだろうが」

感情を交えずに、とつとつと語っていく本条先輩。

「卒業までは、とにかくさるみたくやりまくってたのも事実だ。だが、あいつに生理が来てからはもう一度もやっちゃいない。俺もそれなりに、はらませちゃうのはまずいってガキなりに理解してたからな。千草もなんにも言わなかった。自然消滅の予定だったんだな」

千草さんという人がどんな子なのか、今ひとつ上総にはイメージが沸かなかった。普通の会話だったら、「どういう人なんですか？　きれいな人なんですか？　誰に似てますか？」くらい聞かだろう。そうできない何かが漂っていた。

「だがな、やりまくった以上置き土産ってのもあったわけだ」

まさか、妊娠させたなんていわないだろうか？　背筋がぞっとした。本条先輩のようにしつこく避妊やゴムについて説教する人が、しくじるとは絶対に思えない。それ以前に、そのあたりの注意だってきっちりしていただろう。

「お前、腹ぼっけにさせたと思ってるのか？」

慌てて首を振った。

「そっちについては俺もしつこく本を読んだりビデオを見たりして、注意していた。やらせてもらうのは、赤飯までと決めてた。けどな、俺はとんでもないミスを犯していたって訳だ」

「なんですかそれは」

想像つかず上総は仕方なく尋ねた。

「まず、仕事する場所がな、やたらとかゆくなっちゃまったというのがひとつ。いわゆる性病だな。お前も保健体育で習っただろ？」

梅毒やら淋病やら、そのあたりだろうか。身体をこわばらせて聞く。

「千草は親にこき使われて無理やりロリコンビデオに出演させられていたから、たぶんあいつの親父経由のもんだとは思う。それが、たまたま、結城さんと駒方先生にばれちゃまったってわけだ。うちの兄貴、あ、里理の方じゃなくて、上の二人にも報告されちゃまって、結局俺は十二歳にして病院送りってわけだ。いやあ、あんときは人生真っ暗だったな」

聞いたことがなかった。この前南雲がやはりいわゆる性感染症らしきものにかかると頭を抱えていたのを思い出した。あれからちゃんとあいつ、病院に行ったのだろうか。親に話したのだろうか？ そういえば本条先輩にもどやされたと言ってなかったか？

「すったもんだがあつたがなんとか、病院の薬でなんとか治ってはいおしまい。だったらいいんだが、先生たちから千草についてしつこく聞かれてな。まあ中学生の不純異性交遊がばれたこともあって、たぶん俺は追い出されると思ってた。だが千草の存在をばらすわけにはやっぱいかねえだろ。あいつだって、学校では女子中学生を普通にやってるんだ。妊娠させたわけじゃねえし、あえて声に出すこともねえ。俺はそう判断して、あいつのことを隠しとおしたわけだ。まあ、あとで聞いたところによると、とっくの昔に見つけてたらしいがな。ガキだった俺は、あいつの存在をばらさないのが一番いいんだと思ってたわけだ」

ロリコンビデオ？ あいつの親父経由？ 話がつながらない。硬直している上総にさらに続けた。

「お前も知ってるだろうが、結城さんって人はすごい。俺が無意識にしゃべったことをうまくつなげて、千草のことを聞き出したらしい。駒方先生もなんだかん だ言って俺の過去を洗い出したりして、まあいろいろあった。俺が隠しとおしてきたことはとっくの昔にばればれ。情けねえったらねえよな。その上で、お互いはなれた方がいい、つまり別れる、ってしつこく攻め立てるんだ。結城さんが露骨にそんなこと言ったわけじゃねえ。とにかく、評議の仕事を手積みしてきた、ってだけだ。時間ねえよな。性欲、すべて評議委員会に費やされたっつうのが現実だな。それでも千草のことは絶対黙っているつもりだったから、俺は俺なりに納得はしてた。それで間違いはない、そう思ってたんだよな」

「間違っていないと思います」

「間違ってたんだよ、それが」

怒らず、おだやかに続ける本条先輩。口調がりんとしてきた。

「俺はてっきり、千草と俺を手切らせて、優等生の枠の中に押し込もうという大人のやり口だと思込んでいたんだが、どうやら違った」

「どう違ったんですか」

「千草を救うためだったんだよな。ったく面目ねえ」

初めて本条先輩は舌打ちした。

どうやって救うというのだろうか？ 本条先輩は、公立中学に進んでいる千草さんに傷をつけないようかばっただけではないのか。

「ちょうど去年の一月くらいだったか。千草が俺を訪ねてきてさ、俺の責任じゃないからねって言い残して帰っていったんだ。何も、ほら、二年もそっちの方はごぶさたしてるわけだしな、もちろん話をする機会はあったけど、俺も別の彼女がいたしな。千草に関してはなんてかその、特別な友だちっぽい関係であってなんも色気のないつながりになってたんだ。俺はとっつかまえて詳しい話を聞いたんだが、そんな時、初めて知ったのはな。あいつ、いわゆる子宮がんの初期段階っていう診断を受けたらしいんだ。駒方先生が千草に会いに行ってくれてさ、婦人科の検査を受けさせたらしいんだ。もちろんすでに、俺のことは洗いざらい調べ尽くされてな。こんなの、一教師がやっていいのかいって突っ込みをしたくなるんだが、駒方先生あのりじゃあ文句も言えねえ。で、その子宮がんの初期段階ってのは、セックス経験がないと基本としてならならしいんだな。俺もその辺はよくわからんが、つまりそういうことだ。あいつのエロ親父と俺以外、基本として千草とはやってないわけだから、俺と千草の父さんがあいつを病気にしちまったってことになるわけだ。千草もそのあたり、なんでそういう発想になったのかわからんが、とにかくそれは俺の責任じゃないと言いに来たわけだ」

妊娠かと思ったが違っていた。やはり、そのつながりが上総には理解できなかった。

「駒方先生は千草を入院させるかなんかさせようとして、直接親父さんに話をしようとしたらしい。千草としてはそれこそノーサンキューだ。たとえエロ親父であっても、あいつにとっては親なんだからな。ろくでもないことがおこるに違いないと思って断ろうとしたらしい。だが駒方先生はいったん決めたことをがんとして譲ろうとしない。それでなんとか俺に、駒方先生を黙らせてほしいと頼みにきたんだ」

現状維持を求めたということだろう。

「さて、お前だったらどうする？」

「たぶん、先生を説得したと思います。自分が説得するって言い張って」

「お前ならそうするだろうな」

本条先輩はぼそりつつぶやいた。

「しょうがねえから、その夜、俺は、千草を親戚のおばさんところに逃がした。駒方先生に割り込まれるのもいやだし、かといって病気をそのままほっとくわけにもいかねえだろ。だったら、一刻も早く青瀉から逃げだして、あいつの納得する形で決着をつけるほうがいいという俺の判

断だ。無事千草は脱出成功し、とりあえずまともな病院に行って診察を受け一年浪人する形で高校に進学したってわけだ」

「先輩、それはすごい」

「だろ、俺もそう思う」

自画自賛。

「だが、一年たった今改めて考えてみると、俺はもう少し早く、決断すべきだったと思う」

「決断ですか？ でもそれは」

「もしもだ、駒方先生が千草を病院に連れて行かなかったら、千草はへたしたらがんを見つけられることがなかった可能性が高いだろう。十五でふたりの男とやりまくってる中学生なんて、ふつういねえだろ？ 病院になんていくような玉じゃねえし。けどもし、俺が早い段階で口を割ってたら、あいつはがんになる前に脱出することができたかもしれないわけだ。駒方先生は俺がそういう性病にかかっちゃったことを知って、千草も同じ病気じゃねえかと疑ったらしいんだ。それでなんとかして、千草を探し出して病院に連れて行かせようとしたはずだ。俺もあいつとまだやりまくってるって風に言いつづけてきたからな。結局俺は、あいつを大人の手にゆだねなかったことによって、病気を発見す時期を遅らせちゃったということになる。俺自身、千草を守るためと決め付けていたにもかかわらず、あいつの命を危険にさらすはめになっちゃったと、そういうわけだ」

理解できたとは、とてもいえない。

上総はただ黙って聞いていた。

「けど、もう間に合わないところまできちまってて、しかも千草の親がロリコンビデオの親玉と来たら、先生の言葉をすんなり聞いてくれるとは思えないだろ。それはあいつとつきあった俺がよく知ってる。だから俺は、駒方先生には悪いが別ルートからあいつを救い出す手はずを整えたってわけだ。俺の知っているデータをもとに、な。それは間違っていないと思う」

本条先輩は一気に話し終えた後、上総の肩を叩いた。

「立村、お前は隠しておきたいんだろ。だけどな、思い切って手放しちゃうのも手だぞ。俺が千草にやったように、ただ両手で守りつづけることによって、悪い病気の発見を遅らせるよか、思い切ってぱあっと空に解き放ちちゃうってのもありだぞ。鳩飛ばすみたいにな」

「解き放つって、どんな風にですか」

「そうだな、たとえば」

あお向けになり、本条先輩は天井を見上げた。大の字になった。手が上総のかぶっていたふとんにかかった。

「どんなに駒方先生がああだこうだ言って千草を説得したとしても、千草は動かなかった。もし俺が早い段階で動けって言ってたらまた別かもしれんが、結局動くのはあいつ自身だ。誰も、無理やり動かすことはできねえ。それに千草も、あんなことこんなことされていても、やっぱり親なんだろう、一緒にいると言い張りやがった」

「その、あぶないビデオとか撮られていてもですか」

信じられなかった。ふつうだったら、逃げるだろう？ 本条先輩は頷いた。

「環境を変えたくねえんだろう。だから、俺は無理やりあいつを汽車に乗せた。そうしないとおそらく、千草はあのまんまだったろう。俺がどんなに千草にかまおうとしても、いつのまにか病気が悪化して行って、手遅れになっちゃっただろう」

本条先輩の言うことは難しすぎた。

矛盾しているようにも思えた。

「解き放った方がいい」というけれども、本条先輩がその千草さんにしたことは力づくですべきことを命令したようなもの。放っておけというわけでもないだろう。かといって、何もするな、というわけでもないらしい。

「先輩、俺にはまったく、わかりません」

「そうだな、わからねえだろうな。俺も、わからん」

暗闇の中、かすかな街灯の瞬きを眺めながら、上総は本条先輩のシルエットを追った。

「立村、お前のことだ、杉本が心配でなんねえんだろ。隠すなよ。言わないでもいいから黙ってきいてろ」

黙ったまま、聞いていた。

「お前がひとりであたふたしたって、杉本は動きたいと思わない限り、お前の言うことなんてきかねえよ」

「でも」

「いいから聞け。だからまずは放っておけ。その代わりに、お前の言いたいことだけはきっちり言っとけ。俺に聞かないでも、言うべきことはどっさりあるだろ。ま、杉本の気性を考えれば受け入れるかどうかはわからんが」

頷いた。たぶん、聞いてくれることはないだろう。どうすれば聞いてもらえるかを知りたかったのだが。

「ただ、杉本の気持ちが変わって助けてほしいと思った時、お前に手助けを求められるような路だけこしらえとけ。今のお前にできることったら、それだけだ」

「手助けを求められるような、路、ですか」

ますますわからない。

「そういうことだ。今のお前の状況を見る限り、まずつきあっちゃまえとは言えねえし向こうが受け入れるとも思わない。お前にも杉本にもプラスになるとは思えねえ。だが、一年、二年、また三年後どうなるかわからんだろ。俺に千草が行動を起こしたのは、一年以上経ってからだ。それまで、まずは待て」

「待って連絡がなければどうなるのですか」

「それは、その時だ。お前と杉本の間にとえはわかるような暗号を用意しておくとか、いざとなったらこっちに来いとか、だな。時間はかかるだろうから、お前もそれまでに、十分守ってやれるような力をつけとけ。そうだな。俺ももし一年早く千草のことが判明していたとしたら、

青湯から逃がすという判断ができたかどうかわからん。幸いっつうかなんつうか、杉本の件は緊急ってわけじゃあねえだろう。霧島キリコや西月ちゃんの話とは違ってな。だったら、まずはお前が男になれ。それが一番手っ取り早いんだ」

「それは、やっぱり、早く経験しろってことですか」

夜の闇で大胆なことを口に出してしまった。ペしっとたたかれた。

「これが南雲や天羽なら当然そう言いたいところだが、お前は別だ」

「どうしてですか」

笑いをこらえている気配がする。またガキっぽいと馬鹿にされてしまうのか。

「さっき言ったろ。やるのは小学生でもできるが、その後の後始末は大人を巻き込んで片付けないとなんねえって。お前にはまだ、できねえよ。たぶん天羽も、南雲も、できねえだろ。だから苦労してるわけだ」

「後始末ですか」

「妊娠させちゃうかもしれねえし、もしかしたら千草みたいになるかもしれねえ。悪い病気もらっちゃう可能性だってあるし、まあいろいろある。今のお前にそれを背負うだけの力がないってことさ」

だんだんねむけも混じってきたせいか、本条先輩の言葉は意味不明になってきていた。

「おぼっちゃんにわかりやすく言うと、杉本が助けを求めたくなるような男になって待ってろってことだ。まあそれは俺がどうしろこうしろって言うわけにはいかんからな。自分で考えろ」

今夜は寝させない、と言っておきながら、本条先輩はかくっと目を閉じてしまった。

上総はひとり、本条先輩の言葉をかみ締めながら、眠気でもうろうとしたまま考えていた。

——杉本が助けを求めたくなるような男になって待ってろ、って。

本条先輩もやはり、上総が杉本のことを想いつづけているのだと認識している。それを否定することはしないけれども、ただ本条先輩が思っているような気持ちとはかけ離れているような気もしていた。

——じゃあ、やはり俺は、杉本に言いたいこと全部言って、さっさと離れるほうがいいんだろうか。

本条先輩の本心はやはり、上総と杉本梨南を引き離したいのだろう。

なんとかして周りをかためて、杉本にこれ以上苦しい思いをさせたくない。そういう気持ちもある一方で、本条先輩の言う通り流れに任せるしかないというあきらめもある。ならば、やはり本条先輩の言う通り、杉本が上総を頼ってくれるまでの間、放置しておくのが一番よい方法なのだろうか。

——わからないよ、本条先輩に聞いて、かえってわけわからなくなったよな。

もし本気で付き合いたいとか思っているのだったらやり方は簡単なのだ。「四月からつきあってくれ」と申し入れればいい。だけど、それでは片がつかない。どうすればいいのだろう。杉本にどうすれば、「いつでも頼ってくれ」という感情を伝えられるのだろうか。

「本条先輩」

寝てるかもしれない。おずおず、呼びかけてみた。返事がない代わりに、本条先輩のかぶっている蒲団が少し動いた。

「先輩は、彼女に、そういうこと伝えたんですか。何があっても待ってるってことを」

ふわあ、とあくびをする気配。

「聞くのは野暮ってもんだろ」

「だってわからないから」

「お前ならわかるだろ。たとえば杉本にしかわからないような暗号みたいなのが」

「暗号って？」

眠そうな声がまた響いた。

「それくらい自分で考える。お前らふたりっきりで話したことがねえわけじゃあねえだろ。そのくらい分かり合えない相手なら、それだけのことだ」

それきり、本条先輩は口を閉ざした。本当に寝てしまったのかどうかはわからない。

七十パーセント以上が未知の世界の言葉だった。上総には意味を捕らえることができなかった。

——つまり、こういうことか。

息を殺し、ぐいと窓の街灯を見つめる。

——俺の言いたいことを全部言ってしまった上で、あとは杉本のやりたいようにやらせるということか。でも、見捨ててないってことだけを、誰にも気付かれないように、暗号で伝えろということか。

本条先輩は上総に、本当だったらさっさと杉本を切るように命令したかったのだろう。

でも、そうできない以上、切り捨てた振りをして、そっと陰で見守れといたかったのではないだろうか。

そうすれば、いつか、杉本の方から救いを求めるサインを送る時がくる。

その時まで、うまく受け止めて守るだけの素養を見につける。それが「男になれ」という意味なのかもしれない。

かつて本条先輩が千草さんという人に、してやったように。

杉本の方から変わろうとする時を待ちつづけること、それが本条先輩のアドバイスだとするならば、上総はそうするしかない。

上総は起き上がった。膝をふとんのうえから抱えた。

——杉本に伝えられる、ふたりだけの、暗号のようなもの。あるだろうか。

目を閉じ、上総は何度も杉本と語った二年の日々を思い起こした。

不思議と、その時語り合った会話のひとつひとつが湯気のように浮かび上がり消えていく。

とっくに忘れていたはずなのに、なぜだろう。ポストカードをぱらぱらぱら撒いていくように

、たくさんの記憶が溢れ出してきた。初めて会話を交わした時のこと、偶然とはいえ初めて胸に触ってしまい眠れなくなった夜のこと、そしてふたりきり車の中で、そっと持たれて目を閉じた日のこと。どうしてそうしたくなったのかは覚えていないけれど、ただその時のぬくもりはすべて身体が覚えている。

——卒業式までに、俺なりの方法で、一番杉本にとってベストなやり方を捜してみよう。

思い出していくと時々胸が締め付けられそうになる。なぜだかわからなかった。まどろみながら上総は、きついまなざしでにらみつけるように見つめる杉本梨南の瞳と、瞼の裏で対峙していた。

三年D組として、最後のロングホームルーム直前昼休み、上総が席に着くのを待っていたかのように貴史がやってきた。手元の英語答辞をチェックし直そうと机の上に置いただけだったが、ちらと貴史は視線を走らせ、

「立村、いいか？」

がしっとまず一声を。

答えず上総は見上げた。今までぼさぼささせていた前髪後ろ髪、全部びしっと決めていた。単にスポーツ刈りよりちょっと長めにした程度だったが。しかし襟足寒そうだ。まだ三月だし、風邪を引きそうな髪型だった。

「今、話して、いいか」

「いいよ」

少しつかかった口調なのは、上総にこんなしゃちほこばった言い方したことないからか。少なくとも上総の記憶にはこういう態度の貴史は残っていない。いつのまにか隣の席についた南雲が、わざと無視した顔してそっぽを向いている。このふたりの関係も三年間、全く変わらない。とうとう最後まで天敵のままで終わるのだろう。

貴史はちらちらと教室内を見渡した後、また一呼吸置いた。唇を結び、ぱっと放った。

「来週の卒業式の後なんだけどな、クラスの打ち上げ、やるだろ」

出るだろ、ではなかった。返事はせずに次の出方を待つ。

「本当だったらお前と美里が仕切って会場とかそういうところ押さえるんだろうが、立村、今、そっちまで手、回らないだろ」

とりあえずは頷いておいた。隣の南雲がひょいと頬杖をついて様子を伺う気配ありだ。

「これ、菱本さんも言ってたんだけどな、もしお前がそっちの方しんどいようだったら、俺と美里であと一週間、評議関連の仕事、全部仕切ることにするけど、どうする？俺はかまわないんだ」

「もうとっくに任せてるだろ」

いささか唐突で、腹が立つというより驚くだけだ。もうすでに上総は、三年D組の評議委員としての存在価値を無くしている。仕事自体がもう残っていないからこそ、この前のように生徒会へ殴り込みをかけられた。そういう計算がないわけではなかった。しかし、卒業式後の打ち上げまでは計算していなかった。そうそう、心にもない御礼を担任・菱本先生に述べるという義務もあるのだが、それは美里がなんとかしてくれるだろうと心積もりしていた。そうだ、まだ評議委員としての仕事は残っていたわけだ。

ただ、すでにクラスのまとめ役としての業務は、貴史が担当してくれていた。美里がこの前話していた通り、貴史と組んでロングホームルームを仕切るたび、三年D組の雰囲気ぐんと良くなっているのも上総は感じていた。うまくいえないが、笑顔が自然に出て、一緒に盛り上がって楽しく行こうと叫びたくなる、そういう表情が自分以外のすべてクラスメートに出ている。読み取れるからこそ、上総だけひとり、息を殺して見守るのみだった。

「なりゆきでそう見えるかもしれねえけど、評議はお前だろ、三年間」

「いいよ、羽飛に任せる」

はっと気がついた。いつのまにかクラス全員がふたりをじいっと見つめている。

——これってなんだろう？

しかも、一言も発しない。

ゆるんだ卒業式一週間前の雰囲気とは思えない、きりきり感が漂う。上総も思わず教室内を見渡した。貴史と同じ風に首をぐるりと回した。

——そういうことか。

次の、上総のせりふを待っているということか。

もう一度、貴史を見上げると、やはり真剣な顔で見下ろしている。にらんではない。ただ真面目というのが貴史には似合わないように思える。ついでに美里の顔も探してみたが、やはり他のクラスメートと同じく、じいっと見つめるだけである。

ここで思いっきり「ざけんなよ！ お前がやってるだろうが！」とわめくのも一興、また「やはり最後は俺がきっちり締めたいから、悪い、俺にやらせて」と言い出すのも一興。でも、それは上総の選択肢になかった。三年D組、後期のクラスにおいて、一番しっかりとまとめて理想の形に完成させていったのは、羽飛 貴史の力に他ならない。何を今更。

上総がここですべきことは、ひとつだけのはずだ。

だからそれを、きちんとした。

「これからの一週間は、羽飛がクラスを率いる方が必ずうまくいくはずだと俺は信じてる。それだけの力があることも、俺が一番よく理解している。だから、あとのことはすべて、羽飛、お前に任せる。俺はここで、黙って見ている」

空気がほよん、とやわらいだ。誰かが教室の隅で微笑んだのだろう。たぶん一、二℃は室温が上がったはずだ。貴史が上総の顔を見下ろしたまま、

「本当に、俺で、いいのか」

また真面目な顔で尋ねてくる。嫌がらせではないことをこの場でしっかり見せる必要がある。上総は大きく頷き、無理やり笑顔を作った。うまくできなかったが、たぶん形は笑っているように見えるはずだ。

「俺は信頼してるから」

両肩をぼこぼこ叩かれるのは予定外だった。貴史は怒らなかった。似合わぬ真面目顔をそのままにして、軽く揺さぶった後、

「立村、サンクス、あとは俺に任せる」

最後にもう一度肩を叩いた後、教壇に上がっていった。それを待っていたように美里が付き従った。すぐにチョークを持ち、扉を覗き込むようなしぐさをする。すぐに菱本先生が入ってきた。最初に上総へ視線を向けた理由がわかりかねた。

「菱本先生、じゃあこれから、最後のロングホームルーム、行くけど、OK？」

くだけた口調、一緒にほっぺたも砕けた。貴史が美里と目で合図を送り合った。

「よし、任せたぞ！ 羽飛、清坂！」

また上総の方へ静かな目を向けてきたが、もう無視していたのでそんなの関係なかった。

実質は羽飛・清坂体制で仕切られているけれども、名目上はまだ立村・清坂として通っている。そのことは上総も理解していた。それを踏まえてなお、実際は羽飛を評価している三年D組のクラスメートたち。菱本先生を始め、貴史・美里も腫れ物を触るように接して来ている。ただ、他の連中からするとそのことに違和感を覚えずにはいられないだろう。現実問題、誰よりも信頼され、上総が評議委員でいた二年半より貴史の半年間の方がぐっと中身の濃いものであるのも、見ればわかる。

だからだろう。

——最後の一週間くらい、誰もが納得した形で、羽飛にクラスのトップとして立ってもらいたい。

そういう気持ちが菱本先生およびクラスメートたちに湧いていたとしても不思議はあるまい。上総も異論を唱える気もない。そう読まれたのだろう。

——俺があと一週間、英語の答辞に没頭している間の代行ってことならば、誰の顔もつぶさずにすむ。今までだったら馬鹿ばかりやっている評議委員の後釜ってことでしかたなく羽飛が穴埋めしているように見えただけでも、その心配もないというわけか。

上総の立場も崩さないまま、三年D組最後の一週間はしっかり、完璧な形で仕切られることになる。もう他人事のようにだった。上総は貴史が教壇に立ち、美里が丁寧に黒板へ文字を書き込んでいく様を眺めていた。かつては自分のいた場所かもしれないが、あそこはやはり、羽飛貴史のためのものであったのだから。それを待っていたのは菱本先生を始め、クラスメートみな願っていたのだから。

「ええと、てなわけで、いきなり卒業式後の話となるんだけど、いいか、先生」

「お前らそのことしか考えてないのかあ？」

がくっと肩を落とす菱本先生。貴史は頭をかきながら、

「だってさあ、こういう全員揃っているところで決めねえと、また心配だろ？」

「なにがだ」

「俺たちがアルコール入ったところでどんちゃん騒ぎして、補導されて、『青大附中三年D組卒業式後のご乱行』なんて新聞一面に載っかっちゃったら、先生もやだろ」

「お前ら、想像力豊か過ぎるぞ」

そこで美里が割り込んだ。

「だから、ここで決めるんです。先生、いいですよ」

「わかったわかった。最後だししっかりやれ。俺は口出さんぞ」

——口、出させないようにできるわけだ。

今まで上総が壇上で案を出した時はしつこいくらい菱本先生が、「おい立村、あとこれが足りないんじゃないのか、お前もう少ししゃきっとしないか！ 周りに押されてるんじゃないぞ」とか文句を言うのが常だった。それを前もって押さえられるのがやはり貴史の腕なのだろう。

お許しが出たところで貴史はさっそく壇上真中に戻り、
「それじゃあ、まず卒業式後の打ち上げなんだけどな、どこでやるかってことなんだけど、今評議委員会の中でもいろいろ意見が出てるわけで、まず」

——そんなの聞いてないぞ。

本条先輩から聞いたところによると、表向きの打ち上げは教室内でこじんまりと終わらせ、裏打ち上げを有志たちでそれこそアルコールプラスした形で行うという話だった。それにのっつて貴史も考えていたのではないかと思ったのだが。

「俺としてはさ、教室でクラスの連中だけとじわあっとやるのも悪くないけど、どうせ俺たち四月から別々のクラスになっちまうわけだろ？ それにこのクラス、三年間同じだったし顔もほとんど替わらなかつたわけだろ？ だったらさ、そんなこじんまりとしたやり方よりも、他のクラス合同でなんかばあっとやろう ぜって話が出てるんだ」

「全クラスって、A B C Dクラス—まとめにして？ 百二十人くらい？」

奈良岡彰子が脳天気な質問を投げかける。相変わらずだ。南雲から聞かせてもらった恋愛のどんでん返しがはたしてどう影響しているのか、気にはなる。隣の南雲の様子を覗き込むが、あからさまに気にならない顔しているのはかえって傷口に塩をもみこまれているのを隠しているかのようだ。

「そうそう、そういうことなんだけど、でも、そんなたくさん入らないのは私たちもわかってるので、せっかくだったら全クラス、それぞれの教室に誰でも入れるような形にして、三年生限定の学校祭みたいなのにしたらどうかなって、今思ってます」

美里がすぐに答えた。すでに案としては上総の知らないところでまとまっているのだろう。

「それか、せっかくだったら教室を一部屋にしぼって、ぎゅうぎゅう詰めで作るってのも手だと俺は思うなあ。先生だったら、どっち選ぶ？」

さりげなく菱本先生に話を振る貴史。ちらりと見たところ、菱本先生も口出したそうなのをがまんしていた様子、すぐに食いついてきた。

「教室も悪くないがなあ。どうせなら借りる教室を家庭科室とか技術室とかそのあたりにしてだ。二クラスくらいを一部屋に入れて、あとはみんなで盛り上がるってのはどうだ？」

「二クラス、かあ」

首を傾げる美里に菱本先生はわかりやすく説明しようとする。

「四クラスとなると、人の波で誰が誰だかわからんだろ。大学でも卒業式の後謝恩会ってのがあるんだが、あれが殆ど何がなんだかわからん状態で、盛り上がったという感じがつかめぬままお開きになるのがいつものことなんだ。だが羽飛、清坂の言う通りクラスの連中三十人だけで盛り上がるだけというのも、もったいないよな。それこそ他のクラスの奴と触れ合うのもよいし、また教師の立場としてもこれから先、自分の生徒以外の奴と繋がりができるのも嬉しいことだ。ということでだ。俺としては大きい教室を借りてそこで、二クラスずつって形にした方がいいんじゃないかと思っている」

「なるほどなあ、先生、サンクス」

ここでもし上総が受けたとしたら「そうですか、わかりました」とあっさり流すだろう。

きっちり笑顔満面で「大人もまんざら捨てたもんじゃねえよな」と返す貴史にかないっこない。

「じゃあさ、先生、その教室ってさ、今から借りられるかなあ？」

さっそく交渉が始まる。一週間前に教室予約をするというのは通例だし、先生が言い出しっぺである以上通らないこともないとは思わないが。

「わかった、俺が話しとこう。ただなあ、他のクラスの兼ね合いもあるから、そこんとも相談する時間をくれ。どうだ、そんなとこで」

「ありがたやあありがたや！ やっぱ菱本先生、やるじゃん、さっすが、一家のパパ！」

隣でしょうもない掛け声をかけているのはおなじみ古川こずえだった。いつものことだがうるさいものだ。上総は無意識のうちに音声を遮断していた。

「羽飛、じゃあこれで決まりってことで、よい？ 次は食べ物調達だよね。この辺は女子の管轄だし、手伝うよ」

「うんにゃ、その前にもうひとつやるべきことがある」

もったいぶって貴史が首を振った。どことなく天羽の態度に似ていた。

「その会に、何人くらい、出られるかってことだよなあ。あとただ食べ物食ってるだけじゃあわびしいから、なんかクイズ大会とかビンゴゲームとか、そんなことの準備もせねばならないしなあ。これから一週間、超特急でやらねばならないんだけども、誰か手伝ってくれる奴、いるか？ あんまりたくさんじゃなくていいんでさ」

じわり、上総の勘に響いた。隣の南雲を見やったが、相変わらず知らん振りだ。

「じゃあ、私が手伝うよ」

速攻手を挙げたのは奈良岡だった。予想はしていた。

「たぶんこれで、私が青大附属と一緒に盛り上がるの、最後だもん。ぜひ手伝わせてほしいな。そうだ、私、クッキーとカップケーキくらいなら用意できるよ！」

隣の南雲が、

「それだけで十分ご馳走だよな」

呟いているのがわびしい。聞こえなかった振りをした。さらに音声遮断している隣からも、

「美里、私も立候補！」

声がした。もちろんこずえだろう。この人が立ち上がらないわけがない。

——古川さん、奈良岡が羽飛に対して何か、思ってるってこと、気付いてるのかな。

上総の読みが間違っていなければ、三年間一途に貴史を想って来たのはおそらくこずえだけのはずだ。奈良岡がいきなり割り込んできても、その気持ちが揺らぐとは思えなかった。それならばこちらとしては永年の付き合いゆえにこずえを後押ししてやりたいような気もする。ただ、今のところ、奈良岡を露骨にライバル視しているようには見えないので、たぶん気付いていないのだろう。ならば、余計なことを言う必要もない。

「立村、あんたは？」

「遠慮しとく」

いきなりこずえがシャープペンシルを手の甲に突き刺すような真似をしてきた。慌てて引っ込

める。同時に頭の中の応援体勢も引っ込めた。

「なあに、あんた最後なんだよ！ どうすんのさ、きっちり男らしく締めたいと思わないわけ？」

「英語答辞の関係で今、大学の方に行ってるから、たぶん余裕ない」

事実なのでそれだけ告げた。こずえはしばらくふくれつつらをしていたが、何か得心した風に頷いた。

「あんた、何考えてるかわかんないけどさ。打ち上げにだけは来なさいよ」

返事をせずに時計を覗きこんでいると、さらに追い討ちをかけるように、

「今、羽飛や美里がなんであんた抜きで一生懸命打ち上げのこと決めてるか、理由くらいわかってるよねえ」

聞きたくもない。わかりきっている。でもこずえは容赦ない。

「あんたがひとりになりたいってこと、受け入れる覚悟があるんだよ、ふたりとも」

「そんなの、古川さんが勝手に思っていることであってさ」

「そうだね、私が勝手に想像してることもかもしれないけどさ。ただあんた、このまま浮いたまま三年D組から出て行くのはいやでしょうが。私たちだってやだってこと、わかるでしょうが」

「別に浮いているとは思わないけど」

心とは裏腹の言葉を吐いた。実は漁業で使うブイのようにぶかぶか浮いている。

「とにかく、出るだけは出なさいよ。あとでさっさとどっか消えても知ったことじゃないし、どうせ私に四月からいやみいっぱい言われるだけなんだし」

「覚悟してます、その辺は」

同じ英語科進学者がいるというのは。

よりによって古川こずえだというのは。

——また朝の漫才が日々繰り広げられるということだな。

これから先真っ暗闇な英語科生活が始まろうとも、唯一光が見えている、そんな存在なのだ。ありがたいと思わねば。上総は密かに、こずえ発貴史宛への応援事業をたくらもうと決めた。

「じゃあ、卒業式打ち上げの委員は俺、美里、そいで姐さんと古川、以上でオッケーか？」

みな黙っていた。女子だけが積極的に手を挙げたようにも見えるが、単に他の奴らは委員会関連でそれぞれ忙しいというのが本当のところだろう。上総が混じっていないことに関して誰も発言する人がいなかったのが救いだった。

「では緊急の集まりってことで今日の放課後、よろしくな」

「はい！」

はしゃいでいるのはやはりこずえである。

「それともひとつ。一緒に組むクラスは先生の方から決めてもらうってことでいいかなあ。一番楽なのはいつも体育や家庭科が一緒なC組だけど、それだけだとつまらないって人もいるだろうし。だったらもう、ロシアルーレットって感じで決めちゃった方がいいと思うんだけど。どうですか？」

それもそうだ。上総も同意した。男子はとりあえずどこのクラスと組もうが知ったことじゃないが、女子の場合簡単にそうもいかないのだろう。あとでぶうぶう文句をたれられてもたまったもんじゃないし、それなら思い切って責任を菱本先生に押し付けるというのも手だ。

「誰も反対意見出さないようなので、これで決めます。あと、ええっと、何決めるんだっけ、貴史」

もうすでに壇上の二人、名前呼び合っている。もともと幼なじみなのだから、それが普通といえば普通なのだけでも、先生の前では一応「羽飛くん」と呼ぶようにしていたはずだ。もっとも貴史は別で、あだな、およびファーストネームで呼び習わしている。それがいやみにならないキャラクターというのもあるのだろう。

「肝心なこと忘れてるっての、おいおい」

教壇を叩きながら、貴史はもう一度真正面に向いた。

「当日、なんか卒業式の後用事がある奴って、いねえよな？」

上総は唇を噛んだ。

——出るしかないんだよな。

予定では、さっさと抜け出すつもりでいた。しかしそんなこと、許されるわけもない。

一応は評議委員、一応は三年D組のクラスメンバー、仕方のないことなのだ。

隣で誰かが身動きする気配がした。こずえではない、ということは南雲しかいない。

「あのさ、悪いんだけどさ」

片手を挙げ、反対の腕は机にべたっとくっつけたまま、

「俺、この日、どうしても都合が悪くてなんないんだけど、それってまずいつか」

「南雲くん？」

ちょっとびっくりした風に美里が南雲を見つめた。貴史も言葉を出すのを迷っている。天敵最後の戦いになりそうな予感で、またクラスの空気がびしっと締まった。こういう時に手助けするのが菱本先生であり、担任でもあるわけだ。

「どうした南雲、用事でもあるのか」

「いやあ、すみません。実は俺の家の難しい事情がいろいろありましてですね。どうしても家族一丸の会議を開くことになっちゃってるんですよえ」

——家族会議？

南雲がそこまで家庭の事情を口にしたことはなかった。さらに続いた。

「ほんと、うちの恥をさらすようで悪いんですが、人生においてかなりいろいろ恥ずかしい問題が起こってるもので、詳しいこと、言えないんですよ。ほんっと、申し訳ないんだけど、この日はまず卒業式で幕ってことにしていただけないかなあと、思うわけっす」

軽く口にはしているけれども、南雲の目は真剣だった。

何かある、のは確かだろう。嘘ではないだろう。

「それと、もうひとつなんですけど、これは規律委員長としてのお願いをばよろしく」

「ほうほうなんだ」

さらっとした笑顔のまま、南雲は次に貴史の方へ視線を向けた。

「俺の場合はまだ口に出せたけど、人それぞれ家庭事情とか、その他いろいろ事情のある奴がたくさんいると思うんですよ。俺ももし、本当のことずらっと並べろって言われたら、ぎゃあとか言って逃げますし。たぶん、この中にはそんなこと言えないで悩んでいる奴もたくさんいると思うんですよ」

「何言いたいんだ！」

貴史が気色ばむ。あいかわらずいつものパターンに収まりそうな予感。南雲は落ち着いている。ちゃらちゃら口調ながらも言いたいことはきっちり言い放つのが南雲流だ。

「当日になっていろいろ事情のある奴も出てくると思うんで、この場で全員参加を前提にしちゃうのはどうかと思うんだよなあ、俺としては。そうじゃないっすか？ むしろ、参加できると確信している奴の数だけまず確認して、人数分の食べ物なりカップケーキなりクッキーなりを用意してもらい、当日参加可能な奴を数人プラスする形でまとめたら、いかがっすか？ それの方があせらないでいいと思うんですがねえ、いかがっしょ」

貴史の顔は明らかに血が昇っている。

「そりゃあそうだが、だが最後だろうが、全員出るのがほんとだろうが！」

「だから、いろいろ家庭事情で出られない奴のことも、考えてやったらどうっすかって言ってるの」

「それでも都合つけるのが卒業生だろうが！」

「あのさ、お前言える？ ちょっとやばいとこの病院で手術しねばならなくなっただんで、俺、欠席しますとかさ。妹の近親相姦疑惑でもって裁判がありますのでいかねばなりません、ごめんって普通言えるか？ 言えないだろ？ まあこれはたとえ話にしても」

南雲にしては珍しい、きつい口調だ。ちりばめた言葉もまた、生臭い。

「人にはそれぞれいろんな事情があるし、できたら言いたくねえこともあるんじゃないかって俺は思うわけ。別に豪華なオートブル用意するとかそんなんでもないんだろ？ その辺でクッキーとかそんなもの用意する程度だろ？ だったらあとで飛び入りした奴にも土産にできるし、腐るものを用意するわけでもないんだし、なあ、俺そう思うんだけどみな衆、どうおもいまっか？

最後は冗談めかした言い方でもって、クラス全員に促した。

「南雲くんの意見もそうだなって思うよ。貴史、とりあえず、当日確実に参加できる人の数だけ取ってみようよ」

不承不承、貴史が投げかけた質問に、上総はあえて手を挙げないでいた。

「じゃあ、当日、確実に参加してオッケーって奴、どんぐらいいる？」

——なぐちゃん、助かった。感謝する。

思わず南雲と視線がかち合った。今の時間初めて、上総に南雲は微笑んだ。

一週間で卒業といったところで、校舎が替わるだけのことであってそれほどの感慨もない。女子たちなどはみな、ノートに寄せ書きをしたりプレゼント交換みたいなことをしているようだが、男子にそんなのは関係ない。一部、男子が呼び出されて、なにやら女子に告白らしきことをされている現場を見かけたことがあるが、それはいつでもやっていることだろうしものめずらしくもない。

——しかし、どちらにしてももうここにはいづらくなるわけだ。

上総はいつものように、E組の教室にいた。

杉本梨南の前に、机をはさんで座っていた。

ロングホームルームが無事終了してから、十分後のことである。

「立村先輩、どうなさったのですか」

卒業間際で好き勝手に遊んでいる三年と違い、二年はそれなりに学業もやることがある。教科書を広げコンパスと定規を斜めに置き、杉本は上総の顔を真正面から見据えた。

「そろそろ卒業式の答辞の準備しないとき」

適当にごまかし、上総は英文の連なるノートを広げた。すでに藤沖からもらった卒業答辞の英訳は終わっていて、何度か英語科の先生からも朗読のレッスンは受けていた。ほぼ、満点ということであとは予行練習の際に最終チェックをとという話になっている。また、大学の大嶋教授にも一応目を通してもらっているので文法からみの間違いはないはずだ。

「まだご準備されてないのですか」

「最後のつめがさ」

ここもごまかした。杉本に話すことでばれるとは思いはしないが、できれば当日まで隠しておきたい気持ちがあった。杉本のことだ、曲がったことは決して許さないだろうし、これから上総がたくらんでいるいくつかのことを知ったら、また厳しく糾弾するかもしれない。

ノートに綴ったものとはまた別の英文を、上総は頭の中に思い描いた。

——大嶋教授にもう一度、チェックしてもらおうか。

すでに時間も空いているということで、大嶋教授は快く上総の相談に乗ってくれた。

かなり御歳にも関わらず、上総の考えたひとつの企みに、にこやかに頷いてくれた。

たぶん、気づかれぬうちに、うまくいくはずだ。

「杉本、どちらにしても、卒業式は参列するよな」

「義務ですから」

「そうか、それならいいんだ」

——最後の、俺と杉本との、共同作業だ。

本人がどう思おうが、上総にとって最後の、意思表示の機会だ。

あえて今のところは何も言わず、上総はまず、杉本に軽くちょっかいを出してみることにした。

「あのさ、杉本」

「なんですか」

「あと一週間もしないうちに俺も卒業なんだけど」

「義務教育でよかったですね」

「何か、その、言葉などないのかな」

もちろん冗談。期待などなし。杉本をぽんと叩いて出てくる言葉は、しょせんこんなもの。

「高校は単位を落としたら終わりらしいと伺っております。留年しないように努力なさってくださいませ」

数学でそのあたり、非常に不安な部分もあるのだがその辺は知らん振りだ。

「一応はお前、後輩だろ。何か先輩に対して一言とかさ」

「ずうずうしいことをおっしゃらないでください」

きた、「ずうずうしい」と切り返された。

杉本の口から「立村先輩、この二年間本当にありがとうございました。第2ボタンいただけませんか」なんて展開を期待するわけがない。ブレザー制服でよかったと思う。それに加えて杉本が、涙を流して「蛍の光」を歌うなんて絶対にありえない。ただ同じ敷地の校舎移動というそれだけのこと。センチメンタルな物語なんてお呼びでない。

「あれ、何にもくれないわけ？」

「何がほしいんですか」

「杉本が俺にやりたいと思うもの」

つくづくあきれ果てたとばかりに杉本は、上総をにらみつけた。いつものように、視線は石のように、猫の瞳。

「高校数学の問題集すべて解いた答えを、手書きでノートに写して差し上げましょうか」

「じゃあ俺はお返しに、関崎の生徒手帳表書きをコピーして渡そうか」

唇を尖らせた。一本取ったか。

しばらくくだらないことばかり話し掛けているうちに、杉本の方がだんだんうんざりしてきたらしく、

「立村先輩は卒業式が近づくとつれてどうしてこうも幼児化されるのでしょうか。退化とも申します」

厳しい言葉できっぱり断ち切られた。

「幼児化ってのはないんじゃないのか」

「ならなぜ、こうもあきれ果てるようなことばかりおっしゃられるのですか」

「杉本が面白いかなと思って」

「私はこんなことで喜んだりいたしません！」

教室には駒方先生がさっきまでいたのだが、上総が現れたのを見計らいすっと姿を消していた

のだった。だから教室ではふたりきり。遠慮なく言葉を交わせる。

上総は机に直接座り直し、見下ろした。

「そういえばここには他に、誰もこないのか」

「先ほど霧島先輩がいらっしゃいました」

先輩、ということは、姉の方だろう。二、三度顔を見かけていたけれど、事情が事情なだけに声をかけてはいなかった。

「霧島さん、元気だったか」

「元気なわけがないでしょう。お心もう少しお察しを」

一本調子な声で梨南は答えた。今日の髪型はひさびさのお下げだった。お下げは決して女子の髪型として見かけるのがそう珍しくないのだが、杉本の場合ほつれ毛を一切出さずに、太く編み込んでいるのでいわば編み込みパンを耳からぶら下げているようにも見える。かぶりついてやりたくなる。

「そうか。霧島さんか」

「霧島先輩からいろいろお話は？」

問われて首を振った。

「いや、もともと霧島さんとは評議以外で話す機会少なかったしさ」

苦手ではあった女子である。

「そうですか。ではあのお話もご存知ないのでしょうか」

「あの話ってなんだよ」

少し、握り締められたような厚みのある口調。杉本は頷いた。

「そうですか、ご存知ないのですか」

「だからなんだよ。もったいぶらずに言ってくれよ。どうせ俺は鈍いんだ」

軽口にも杉本は動じなかった。しばらく机の上に手を置いて指先を噛み、

「わかりました。私も先輩にお伝えすべき言葉がございます」

「え、なに？」

もちろん、期待など、していない。

「少しこちらでお待ちいただけますか」

また、堅苦しい言葉遣い。

「なんだよいきなり」

こちらもいきなりで居心地悪い。

「今から参ります。先輩にお伝えすべきことを用意いたしますので」

一度きちっと立ち、一礼をし、杉本は鞆を置いたまま、教室を出て行った。取り残されたのももちろん上総だけだった。

——何考えてるんだいったい。

外を眺めた。雪が降ったり止んだりまた降ったり繰り返す。三月にしてはぐずついた天気が続いていた。それでも放課後に入る頃にはうっすらと積もった雪も解け、スニーカーで問題な

くあっさり歩くことのできる路だった。

——杉本のことだからな、何するかわからないぞ。

もう一週間しかこの場所にいられない。そのことがわかっているからこそ、上総は日常の拠点を三年D組の教室ではなくE組に定めていた。さっき行われた貴史と美里主催の卒業式打ち上げのことなど、思い出したくもなかった。まずE組にもぐりこめば、しばらくは落ち着いていられる。杉本もどちらにしても二年B組にまだ戻る気配もないので、話す相手はひとりだけですむ。駒方先生は意識の中でいないことにすればよい。

上総は机に置いたままのノートを閉じ、もう一度ぱらりとめくった。

——立村先輩。同じ内容の原稿を読まれるのでしたらたとえば、古文や漢文で読み上げるというのも一つの手ではありませんか」

——古文や漢文？

——つまり、英語と言っても日本語と同じくどんどん言葉が変わっていったはずですよ。どうせでしたら、英語の古文のような形で、原稿を手直しされてはいかがですか？

——ということは、なにか？ 杉本、俺に『平家物語』とか『源氏物語』ののりで堂々と読み上げろってことか？ みんなあきれろぞ。さすがに俺もそこまで。

——私は思いついただけです。たいしたことではありません。

確かこの教室で出た言葉だった。今と同じようにふたり向き直って。

せっかく自分なりの英文原稿をしたためて読み上げようと張り切っていたにも関わらず、藤沖のあっさりした内容を先生たちの手で英訳されたというつまらぬ事実。別に学年トップを譲らなかった英語順位を誇るわけではないけれど、昨年の本条先輩の大演説と比べたらスケールも小さい。第一、英語の答辞なんて喜んで誰が聞くかと言いたい。みな、寝るに決まっている。青大附中の生徒だから英語のヒアリングが抜群というのももちろんいるだろうが、興味ある話題ならともかくすでに日本語訳の用意された英文を、もう一度聞きたがる奴もそういないだろう。

どうせ、誰も聞いている奴なんて、いないのだ。

なら、こっちで利用してやろう。

本条先輩の部屋に泊まった次の日の放課後、上総はすぐに大学英文科の大嶋教授を訪ねた。

確かハーディ著「テス」をテキストにして受けた授業で、十九世紀と現代英語とは若干違いが出てきているという説明を受けた記憶がある。ノートにもその旨メモが残っていた。

だったら、当然、英語にも日本語でいう「古文」があるはずだ。

古文とまでいかなくとも、十九世紀くらいだったら、まあ「源氏物語」とまでいかなくとも、漱石、鷗外くらいの古い言葉遣いには近くなりそうだ。

だったら？

——これを言い出したのは杉本だ。

——だから、俺はそのアイデアをいただいて、そのまま卒業式にて読み上げる。

誰も気づくわけがない。気づくとすれば英語科の先生たちか、あとは帰国子女の生徒か、そのくらいだろう。どうせ誰も聞いていやしないし、壇上を降りた瞬間上総はもうお役ごめんなのだ。英語科でももう明るい未来は期待できないのだし、それなら当然、開き直って好き勝手やらせていただくのも、また面白い。誰にも気づかれぬよう、そして杉本にだけのメッセージを伝えるのもよし。もちろん杉本が十九世紀の英語の違いなんてわかるわけもないので、その辺はどうにかして伝えるすべを探すとしよう。

——まずは、卒業式前にメモでも渡しておくか。

上総はその手段を少し考えることにした。まだまだ時間がかかりそうだと、甘く見積もっていた。扉が再び開くまでは。

「杉本、なんだよいったいもったいぶってさ」

一緒に入ってきた相手を見て、上総は思わず机から降りた。

近江さんが相変わらずのたわし頭で、つまらなさそうな顔をしながら入ってきた。

後ろからすぐに杉本もついてきていた。

近江さんはすぐに上総に気づき、

「あら、委員長、お久しぶり」

あっさりともまずは挨拶をしてくれた。この人は上総が委員長から下ろされた後も、つい口癖で「委員長」と呼ぶ。一度注意したのだが、「だって天羽くんを委員長だなんて呼べないでしょ」とあっさり交わされ、それっきりとなった。天羽経由で聞く話によると、お付き合い状況も上々の様子、さらに深く突っ込んで聞けはしないけれども、例の事件の後遺症も思ったより残っていない様子だった。

「近江先輩、よろしいですか」

上総が返事をする前に杉本が割って入った。

「私、先輩がご卒業される前に、ひとつ確認をさせていただきたいのです」

「なにかしら」

退屈そうな口調は相変わらずだった。暇な時はいつも文庫本をぱらぱらめくり、頬杖つきながら空を眺めているのが近江さん流だった。それでいて授業は押さえるところしっかり押さえているから成績はまんざら悪くない。天羽によると、付き合ってからすぐ、近江さんは落語、漫才、その他日本の伝統演芸をこよなく愛するマニアと化したとか。自分で直接通信販売の専門雑誌を揃えたり、修学旅行では美里とこずえを連れて新人芸人の野外ステージを観に出かけたりしたとか。もしかしたら天羽を越しているかもしれない。

杉本はそんなことを聞きたくて、近江さん呼び出したのか？

否、それはありえない。

表情を伺うため首を曲げてみると、杉本の口許は完全にとんがり、言葉の弾丸をすでにぎりぎり前歯の位置まで収めているように見えた。

——あいつなに、言おうとしているんだ？

ぴんとくる、激しい冷え。

上総があらためて近江さんを見ると、こちらはいたって冷静沈着。溜息なんぞ着いている。

「杉本さん、私忙しいんだけど、早めに終わらせていただける？ 予定があるのよ」

「ではすぐにおっしゃっていただけますか」

女子への態度は穏やかな杉本なのに、近江さんへぶつける言葉はどこか唇の端からつばと一緒に吐き出しているような感じだ。

「話によるけど」

「近江先輩は、西月先輩に、何をおっしゃられたのですか」

問い、ではなかった。確認口調だった。堅い、言い方。

「杉本、お前」

一瞬にして上総は杉本の真意を理解した。

——まずい、杉本、近江さんへ西月さんの仇打ちしようとしている。

続く思惟も、また自然に。

——勝ち目ないぞ、絶対に！

これは止めなくてはならない。

急いで杉本に近寄ろうとした。すぐに杉本から片手で制された。

「おだまりくださいませ。今から立村先輩が証人です」

「やめろよ、こんなところでさ」

「先輩もお知りになりたいのでしょう。西月先輩と近江先輩との間でどのような会話が交わされたのか。当然ではありませんか」

「でもここで話すべきことではないよ。近江さんも」

近江さんは答えず、でも顔色は全く変えずに杉本を見つめ返していた。悪びれる様子もない。

「言いたければ言えば」

「では言わせていただきます」

上総なんてどうでもいい、とばかりに杉本は片手を下ろすと、近江さんに真正面、一步、近づいた。瞳はさっきの石のよう、でも脂ぎったようにてかっていた。

「なぜ、近江先輩は佐賀はるみと一緒に生徒会室にいらしたのですか」

「ああ、あれね」

頷きつつ、やっぱり面倒そうに近江さんは答えた。

「佐賀さんたち、話していると面白いし、女子として賢い人だし、そういうわけでお近づきになっただけよ」

賢い、というところにかすかな力が入っていた風に聞こえた。

「そうですか。ではなぜ、西月先輩にあんな酷いことおっしゃられたのですか」

「あら、聞いたの」

「霧島先輩から伺いました」

きりっと唇を引き締め、でも瞳はぎらついたまま、指をまっすぐ指した。

「近江先輩は、西月先輩に、おっしゃったそうですね。天羽先輩だけではなくて他の先輩に対し

ても、精神的に追い詰めて退学させたではないかと」

「ああ、そのことね」

否定しなかった近江さん。頷きつつもさらに、

「その他に聞きたいこと、なんでもどうぞ」

余裕を持って続けた。杉本に勝ち目がないのは重々承知だけど、上総も今は、観客になることを選んでいた。どちらにしてもいずれは近江さんに確認をしたいことであつたし。天羽の顔も考えて時期を見計らっていたとはいえ、向こうから話してくれるのならばそれはそれでよい。杉本をかばうのは後からでもよい。どうせ注意したとしても、止まりはしない。

——よし、言いたい放題、言わせてやるか。

「先輩はおっしゃられたそうですが、これは事実でしょうか」

杉本は目の縁をめいっぱい見開いたまま尋問に入った。

「西月先輩が私のことで生徒会役員たちに抗議に行かれたのは存じております。もしあの場所に近江先輩がいらっしゃらなければ、西月先輩はあんなにもお怒りにならなかつたはずですよ。それに近江先輩が火に油を注ぐような発言をされなければ、西月先輩は傘など持ち出さずに論理的にお話されたはずですよ」

「論理的、ねえ」

冷笑、ひとつ。杉本だけが言葉を無理やり押さえつけ、重たい石を抱えているかのように話しつつける。

「私が霧島先輩から伺ったことをすべて申し上げます。そのことにおいてイエスかノーでお答えいただけますか」

近江さんは答えず、「さあどうぞ」とばかりに教卓へ肘をついた。

「まず、西月先輩が私のために一生懸命メモで抗議をしていた時に、近江先輩は西月先輩に向かってこうおっしゃったそうですね。『いくら杉本さんのことが可愛いからといって、親切の押し付けのし過ぎじゃないの』と」

かすかに笑いを浮かべる近江さんだが、すぐに表情を元にもどし溜息をついた。

「西月先輩をご存知の通り口が利けませんのでメモで一生懸命言い返そうとしたらしいとのことですが、さらに近江先輩はおっしゃられたそうですね。『一年の頃、登校拒否になった同級生を追い掛け回して、結局退学させてしまったのは、西月先輩のせいなのだ』と」

「正確ね、その通りよ」

顎先で頷いた。近江さんにとっては何も悪いことを言った記憶などない、といった風だった。傍で聞いている上総からすると、これはかなりまずい展開なのではとも思うのだが、女子同士の会話には男子に理解できない細かい針が飛び交っているらしい。

「その、退学された方が本当にそんなことをおっしゃったか、証拠もないのにそんなことをおっしゃるのですか。それは名誉毀損ではありませんか」

「名誉毀損じゃないわよ。私、その人のこと、知ってるもの、同じクラスだし。委員長も、ご存知でしょう」

ちらり、柔らかい反応で受ける近江さんに、上総も靴の先を見つめるしかなかった。

——二年の宿泊研修の時のこと、言ってるんだな、この人は。

狩野先生の義妹、そして奥さんの妹、三年A組の生徒。条件は整っている。

上総の脱走事件を、知らないわけがない。

「湊さんのことよ。夏休みに湊さんと会う機会があって、すべて教えてもらったというわけよ。別に私はどうだっていいし、心に納めておけばそれでよかったのだけど、西月さんの言い分があまりにもね、酷すぎたのよ。佐賀さんもあんなこと、メモで渡されたら傷つくはずよ。上級生が下級生に対して、そこまで言っているのかしら、と思っただけよ」

「でも、その湊先輩とおっしゃる方は、西月先輩を憎んでらしたわけでは」

「憎むというより、怖がってたわね。善意の押し付けで息が詰まりそうだったらしいのよ」

「西月先輩が心から、学校に戻って来てほしいという気持ちで、毎日湊先輩のお家に通いつづけておられたことを、罵倒されたわけですか」

「違うのよ、わかる？ 杉本さん」

なんでこんなくだらない話を、と伝わりそうな態度で、ふらんふらんと体を揺らした。

「湊さんはもともと青大附中が肌に合わなかったのよ。でも、同じ中学の生徒がいるのだからがんばって通いましょうと私のように割り切ってたわけよ。そしたらね、西月さんがしつこいくらい湊さんに近づいて、あれやこれや世話を焼くから、彼女まいてしまっただけ。学校を休んだ段階で、早く公立に転校しようと思っていたらしいけれど、もちろん学校側では説得するでしょう。その間、応援なのかなんだかわからないけれど、西月さんは毎日しつこく張り付いて、手紙を渡したり、挨拶をむりやりしたりと、がんばられたというわけ」

「そのどこが悪意なのですか」

怒りを発せず、押さえる杉本の言葉。

「杉本さん、あなたも同じタイプね」

大きな溜息をついたのは近江さん。

「あなたにとって西月さんの『善意』がありがたかったのは、人それぞれよね。でも、中には余計なお世話と振り切りたいタイプの人もいるというわけ。そうね、杉本さんが懸命に、佐賀さんにサービスを続けたけれども、彼女にとっては苦痛だったのと同じことね」

杉本が息を呑んだ。

——やはり、勝ち目ないって言っただろ！

もう少し子細を聞きたい。しかし杉本をこのまま泣かせていいのか。迷う。

タイミングを計る、という名目で、上総はもう少し黙って様子を伺った。

「湊さんの問題は結局、二年の秋に退学して公立に戻ることで解決したわよ」

きっぱりと答え、また首をくねらせた近江さん。上総にも視線をちらと向けた。

「その際、西月さんには一切湊さんの本心を伝えることなくごまかしたけれども、今思えばあの段階できっちりうちの担任が叱っておけば、第二、第三の湊さんが現れることもなかったのよね」

」

「どういうことですか」

「そうよ、あの時に、湊さんを退学させた理由のひとつに、西月さんの過剰な親切が挙げられるわけなのだし、そのターゲットとなった湊さんが消えた後次の相手がどうしても必要になるでしょう？ わかるわよね」

杉本が黙りこくっている。どうやら、理解しかねるようだ。

「わからないかもしれないけれども、運悪く次のターゲットは、天羽くんと杉本さんだったというわけ。もちろん杉本さんは西月さんの親切をまっすぐ受け止めたようなのでそれはよかったけれども、天羽くんにとっては地獄だったというわけよ」

「でも、純粋な親切をあんな形で仇で返すとは」

「仇ではないのよ。あとで知ったことだけど、A組の人たちみな、わかっていたのよ。西月さんがどうしてもあんなに一生懸命自分をアピールしたかったのか。うざったかったのか。だからそれぞれ、うまく防禦していたのに、天羽くんだけどうしても避けることができなかった。だから、可哀想だけど乱暴に振るしかなかった。私のことは別よ」

全く納得いかないといった風に杉本は口を尖らせ目をこわばらせた。

「その後のことは、おそらく霧島さんをご存知ないでしょうね」

自分で話をつなげていく近江さん。全体として怠惰な風情は変わらない。肘をついたままの教卓に手を置くと、

「さすがに三年同士の話を二年の前で話すのは失礼だと思ったので、別の教室に移動しましょうと伝えてそうしたのだけど、まあね、まさか傘を持って振り回すとは思ってなかったわよ。言っておくけど、天羽くんがらみの色気あふれる話題はひとつもないわよ。期待していた杉本さんと委員長には悪いけど」

「近江さん、それ、本当か」

ようやく上総も、言葉をはさめた。

「それが、原因だってことは、狩野先生もみな知ってるわけなのか」

今度は近江さんが上総に向き直り、また微笑んだ。

「そうよ。ちょうど彼女が持っていた傘、先がとがっていて危険だったのよ。これは男子に取り押さえてもらうしかないと思腹をくくって、天羽くんたちのいる教室に逃げたのが正解だったわ。私から言わせていただくと、たかがその程度のこと、それも事実を伝えただけで逆上するとは思っていなかったけれど、でも、それはしかたのないことよ。私ももう少し場所と時間をわきまえばよかったし。なによりも湊さんの件に蓋をしたうちの担任にも問題があったわけだし」

ね、と、相槌を求める首の角度。頷きたくなってしまう。こらえた。

「私はその話をきちんとしたことを、間違ったことだとは思っていないし、今杉本さんに問い詰められても恥ずかしいと思わないからこうしてきたわけ。ただ、西月さんにいまさらそんなことを伝えても無駄だということも感じたわ」

「無駄？」

「そうよ、委員長。どんなに正論を伝えたところで、受け入れたくない人には受け入れたくない

現実なのよね。小さな親切大きなお世話、って、わからない人には一生伝わらない。何度繰り返しても学習できない人もいる。今回私が読みを間違えたのは、正論を伝えても、その人にとって受け入れたくないことは相手を叩きのめしても認めない人がいるということよ。そうね、私もまだ、西月さんを、話の通じる人だと思っていたからなのかもしれない」

「通じない人だった、というわけか？」

近江さんの言いたいことがわからないわけではない。上総も菱本先生でいやというほど経験している「過干渉」。西月さんがひとりならずふたり、三人目と犠牲者を生み出していったのだという、近江さんの主張に頷きたくなる。でもここでこくっとやってしまったら、杉本を心から可愛がってくれるやさしいお姉さん像を傷つけることになる。

「認めたくないのよね、きっと。だから半永久的に、彼女は自分の親切が正しいんだと言い続けるわね。別に私にはもう、関係ないけど。でも、余計なおせっかいをしてしまったのは、反省よ。喋りすぎたわ、もう行くわ」

近江さんがこんなに話したのを聞いたのは初めてだった。

杉本の糾弾に一切動揺しないで冷静に交わす、近江さんの姿。

時折たらたらと身体を揺らしつつ、溜息交じりで。

「これ、天羽知ってるのか」

「だって見てたもの、しょうがないじゃないの」

上総は杉本の震える肩を、じっと見やり、

「杉本、もういいだろう」

それだけ伝えた。その後、近江さんに、

「あとで、その時の子細を教えてくれないかな」

真面目に尋ねた。

「明日でいいかしら。今日は用事があるのよ。人と逢う約束があるの」

「いいよ」

近江さんは杉本を一瞥し、扉に手をかけた。とたん、女子がひとり、その向こうに立っていた。上総のよく見知った女子だった。

「近江先輩、ここでお話が終わるまで待ってたんです」

耳の上ふたつ編み上げた髪の毛が中華娘風。ひとりしかいなかった。佐賀はるみ生徒会長だった。用心棒の新井林はセットではなかった。耳元に手を当てるしぐさをし、側にいる杉本梨南には一瞥もくれず、

「一緒に連れてってください」

くうっと顔を見上げ、近江さんに訴えた。近江さんもまんざらではなさそうな顔で、肩に手を置いた。

「そうね、もちろん連れて行くけれど」

「で、思ったんですけれど、私」

次に佐賀が視線を向けたのは、杉本ではなく、上総だった。

「今の話、すべて聞かせていただきました。すべて事実だとわかってます。もし梨南ちゃんが変なことしそудだったらすぐに先輩を守るつもりでした」

「そんなあぶないことないわよ」

美里にもこんな風にやわらいだ表情を見せていたような気がした。やはり、天羽の話した通り、近江さんは女子好きなのだろうか？

「梨南ちゃんとはまかく、私、今のお話、きちんと立村先輩に話しておくべきだと思ったんです。これから私たちと一緒に、その説明、聞いていただいたほうがいいと思うんです」

「委員長を連れてくの？ 『アルベルチーナ』に？」

少し鬱陶しそうに首をめぐらせた。上総と目が合った。

「私、それの方が、いいと思うんです。立村先輩にも、きちんと卒業前に、お話すべきことが生徒会長としてありますし」

佐賀はるみはやはり杉本を切り捨てた眼差しで、上総にきりっと見返した。

あの日、とことん叩きのめすため乗り込んだ教室で、ちっとも動じなかった佐賀はるみが、初めて上総に挑戦状を差し出した瞬間だった。

——これは、受けるしかない。

腹をくくった。上総は無言でそれを飲み込んだ。

女子ふたりが相談しあっている中、杉本が、

「佐賀さんは何を非常識なことを！」

激するのを上総は押さえていた。

「杉本、わかった、あれをすべて俺に聞かせたかったってことだよな」

「当然ではありませんか。間違っただまの情報を、立村先輩が認識して、可哀想な西月先輩の名誉を傷つけることにはしたくないのです」

「わかった、俺は西月さんの理由がよくわかったよ」

「だったら、きちんと他の人たちにも発表すべきです、火をつけたのは近江先輩だと」

上総は首を振るしかなかった。

「かえってそれはまずい。今の話聞いた段階だと、たぶん西月さんの方が立場悪いよ」

「どうしてですか。善意を裏切られただけだというのに」

「一般的には近江さんの意見が正しいとされているんだ、だから」

だから、と繰り返し、すぐに続けた。扉付近のふたりに聞こえるよう、両肩に手を置いて、杉本を見つめながら。

「だから、今から、近江さんたちについていって、詳しい話を聞いてくる。それから、ゆっくりこれからのことを考える。杉本、だから、今の話は誰にもまだ言うなよ。必ず、俺がいい方法、考えるからさ」

女子ふたりが、上総と杉本を静かに見やった。

生徒会長の提案、もしかしたらすべて図られていたことなのかもしれない。あまりにもこれは、タイミングが良すぎる。しかも、なぜ佐賀が杉本の件にここまで割り込んでくるのか。杉本が近江さんを引っ張ってきた時に、すでに互いに計算した後だったのかもしれない。そこにはめ込まれた自分、役立たずの元評議委員長。可愛い生徒会長に歯向かって返り討ちされた哀れな評議委員。苦笑するしかかった。

渡されたバトンは受けるしかない。

佐賀はるみに上総は、作り笑いで答えた。

「その『アルベルチーヌ』って、どこにあるのかな。今から自転車でそこに行くけど」

「駅前です、でもわかりづらい場所です」

「なら、どこで待ち合わせする？」

近江さんより先に、一歩早く佐賀が返答した。

「駅前でお待ちしてます」

「立村くん、なんでここにいるの？」

自転車であくせくと青淵駅まで漕いだ後、佐賀たちに言われた通り改札前できょろきょろしていたら、声をかけられた。青大附中の生徒はひとりしかうろついていなかった。

轟さんだった。めずらしく黒いスカートなんぞはいている。

「いや、ちょっとさ」

まさか、近江さんと佐賀生徒会長に捕まって待ち合わせだなんてこと、言えるわけがない。こちらのほうで切り返すことにした。

「轟さんこそ、どうしたの」

「待ち合わせ」

ぶっきらぼうに言い放ち、轟さんは腕時計を覗き込んだ。バンドの皮がだいぶ剥けているのが目立つ。小ぶりのデジタル時計だった。

あまりしつこく尋ねるのもしたくないので、上総は頷いて自分の時計に目をやった。父から十四才の誕生日にもらった、銀色の白っぽいものだった。腕だけがやたらとがっちりしているけれど、手首が細すぎてぐらぐらするのが難点だった。

「誰と待ち合わせてるか、当てていい？」

迷うように首を傾げた後、轟さんはいつものように上総の顔を覗き込むようにして尋ねた。

「いいけど、当たらないよ」

「近江さんでしょう」

「当たっているようだけど、ちょっと外れてるかもな」

内心の動揺を抑えつつ答えるしかない。なんで知っているのだろう。いくら推理力抜群の轟さんとはいえ、いきなり美里や杉本をすっとぼして「近江さん」と指名するのはどういう根拠があったの事だろうか。駅の改札前に偶然いるのなら、それはちっともめずらしいことではないけれど。

「そうなんだ、じゃあ、私と同じところに行けてことかもね」

「轟さんも？」

今度は上総が驚く番だった。

「まさかさ、近江さんと待ち合わせってことか？」

「そういうことよ。ちゃんと私服に着替えて来いって命令されてるし。おそらく校則違反になって停学くらいそうなところでお茶しましよってことじゃないの」

「じゃあ俺もこの格好だとまずいのか」

上総は当然、制服のままだ。コートはシャーロック・ホームズ風のコートで黒。

「とりあえず、脱がなければいけないと思うけど」

しばらく無言でふたり見詰め合うしかなかった。気まずすぎる。そのうち仕方なさげに口を開いたのは轟さんだった。

「近江さんと直接、話をしたいと言ったのは私よ。そしたら向こうの方からふたりで会おうって

ことになって、近江さんとここで待ち合わせるってことになってたはずなのよ。確か、『アルベルチーヌ』って喫茶店だったかな。だけど私もそんなお高そうな喫茶店入ったことないし、じゃあ連れてってよってことになって今日待ち合わせるって話だったのよね。でもなんで立村くんも混じってるのよ、ねえ」

「俺だけじゃない、生徒会長も一緒だ」

事実だけ伝えたと、轟さんはしっかりと足を踏ん張り両腕を組んだ。女子っぽくない仕種だった。

「なんで、佐賀さんもくるわけ」

「最初から佐賀さんも近江さんと一緒にくるようなこと話していたけど」

「まあ、立村くんが混じるくらいだから、佐賀さんが入ってきてもおかしくないって、ことか」

独り言を呟き、しばらく轟さんは上総の顔をじっと眺めた後、

「どう出るかわからないってことね。しょうがない。じゃあ立村くん、いきましよう」

「どこへ？」

「『アルベルチーヌ』っていう、お金のかかりそうな店よ。行き方知ってる？」

「知らない」

だからてっきり近江さんがいるもんだと思っていたのだ。轟さんは納得顔で頷いた。

「私、場所わかってるから。そんな駅から遠くないよ。じゃあ、討ち入りしますか」

「ほんと、そんな感じだよな」

討ち入り、まさに轟さんの言葉は芯をついていた。

——しかし、なんでだろう。

杉本をなだめて、近江さんと佐賀生徒会長ともう一度確認をした時もやはり、

「青潟駅前の改札口でお待ちください」

の一言だった。

「天羽先輩に気づかれると、近江先輩にご迷惑がかかりますから」

とのことだった。なるほど、それはわからなくもない。天羽の近江さんに対する執着振りには目に余るものがあるし、納得だ。

しかしなぜなのか。

なぜ、轟さんなのか。

私服で来るようにと轟さんには指示が出ていたという。ということは、最初から轟さんと近江さん、そして佐賀生徒会長とが落ち合うことになっていたのだろう。上総が混じるというのは予想外の出来事のはずだし、轟さんの反応を見る限りそれは正しいとみていい。

——けどなんで、俺を改札に行かせた……？

読めなかった。上総はまず、駅の外に出た。この前杉本と一緒に改札をくぐりぬけたのとは違う行き先だった。轟さんがきょろきょろしながらバスロータリーの向こう側を指差し、

「とにかく、あそこを渡ろうよ」

たったか歩いていく。地図もないのに、すでに頭に入っているらしい。

「轟さん、いいかな」

「なに？」

「どうして、近江さんと話をする必要があるのかなと思ってさ」

「卒業間際だし、高校まで面倒なこと持っていきたくないからね」

「天羽は、知ってるの」

一瞬、轟さんは立ち止まった。手を振って否定した。

「言ったら最後、『俺も入る』とか言って聞かないでしょうよ。まさかと思うけど天羽くんには話してないよね」

「ああもちろん」

ここに来るまでの展開を轟さんに話しておいたほうがよさそうだ。上総はかいつまんで杉本と近江さんとの対決を説明した。

「……なるほどね。とうとう言っちゃったんだ」

溜息をつく轟さんに、上総も釣られて白い息を吐いた。黒く濡れた道はしっかり雪も掃けていて、街路樹の根元にちんまりと灰色の山が積み上がっていた。

「杉本曰く、霧島さんから聞いたとか言ってたな」

「ゆいちゃんもゆいちゃんだけど、しょうがないか」

「轟さんだったらどうしてた？」

「もちろん、地獄の底まで抱えて持ってってたわよ。もっともゆいちゃんと小春ちゃんとは、一緒に運命を共にしようって約束したふたりだし、私たちに彼女たちの繋がりを想像するのは不可能よね。女子のぺたぺたした友情っていうの？ なんかねえ」

轟さんには苦手な世界かもしれない。上総も頷いた。横顔の頬が真っ赤に火照っている。いわゆる「りんごのほっぺ」に見えた。

「とにかく、状況がかなり大きく変化しちゃったというわけよね。杉本さんが小春ちゃんの暴力事件に関して詳しく知っているということは、当然小春ちゃんの全面的味方だろうし、もっと言っちゃえば小春ちゃんの味方だってことは、近江さんのことをとことん嫌うってことだろうし」

「でも近江さんの話を聞く限り、この事情をばらしても、西月さんが有利には絶対ならないような気がするよ」

上総はA組の女子にまつわるいざこざよしなを思い起こしながら自分の意見をまずは述べた。こればかりは上総もどうしようもなかった。自分が一年前の夏引き起こした、宿泊研修のバス脱出事件。あれもきっかけは菱本先生の血迷った行為からきたものだけど、それからさらに紐を手繰っていくと西月さんのよけいなおせっかいからなる行動に繋がっていく。もし西月さんが毎日その、湊さんという女子の家に通ったり待ち伏せしたりなどしなければ、おそらくここまで話がこじれることもなかっただろう。また西月さんがこの事件の後、湊さんを追い詰めたのが自分であると自覚する機会を得られたとしたら、その後の天羽とのごたごたは起こさずにすんだかもしれない。さらに、今回の近江さんへの行為も未然に防げたかもしれない……。

「そうだね。私もそう思う。でも、人間、神さまじゃないからそこまで読めないよ。天羽くんの神さまだって止めることができなかつたんだよ。そうなるしかなかったんじゃないかな」

轟さんはクールに答えると、ふと足を止めた。

「ここだよ、『アルベルチーヌ』」

見ると、上品な雰囲気の一軒屋が目の前に立っていた。轟さんにくっついて歩いていたせいかわ、いつのまにか人通りの少ない住宅地に入り込んでいたらしかった。残雪はすべて煉瓦の間分まで取り除かれている。窓からかすかに光るこんもりしたランプの灯り。扉の真上にフランス語で「アルベルチーヌ」と綴られている。

「立村くん、『アルベルチーヌ』って何？」

「たぶん、プーストの『失われた時を求めて』の中に出てくる登場人物だったと思う」

かすかに記憶している世界文学全集のあらすじをさらってみる。母に読むよう命じられた「失われた時を求めて」だけでも、あまりに長すぎるのとあまりに退屈な話ばかりで上総は後ろの解説しか目を通していなかった。ただ、「アルベルチーヌ」というのが主人公「私」の恋人であり、いろいろな事情を背負った女性であるということは覚えていた。

「そうなんだ。じゃあフランス料理を出すのかな」

「まさか。いくら近江さんでもそんな高いところに連れてきやしないよ。第一、清坂氏もよくここで話をしてたらしいよ」

思わず「清坂氏」と呼んでしまった。もう「さん」でいいのに。

「ふうん、そうなんだ。それにしてもあの子たちまだかな。どうでもいいけど、やたらと寒いよね。こんな格好でなんでこなくちゃならないのやら」

——こういう店なら、そうせざるをえないよな。

一応、青大附属中学において、帰り道の道草はよろしくないとされている。が、大人が同伴している場合や、いろいろ事情がある場合はその限りではないともされている。守っている奴なんてほとんどいないはずだ。ただ、制服のまま入るのはやはり、ちょっとまずいかなとも思う。

「俺も着替えてきたほうがよかったか」

「コート着たままにしていればいいよ」

轟さんは上総をじっと眺めた後、建物に視線を走らせ、また戻した。

「立村くんならここ浮かないですむよ。きっとね」

しばらく入り口から離れた街路樹でふたり、まだしきれなかった事情の説明などをしていた。

「立村くん、それはそうと、ゆいちゃんのこと聞いた？」

「聞いてないけど、もう学校に戻って来ているんだろうな」

「そうか、知らないんだ。ついでに難波くんのことも聞いてないよね」

「あいつとはほとんど無視状態だしな」

実際、難波とはもう会話を殆どしていない。たまに更科経由で様子を伺うだけだ。

「難波くんね、毎日ゆいちゃんの家に通ってるらしいんだ。これ、生徒会の子たちにもばれてるから一応立村くんも知っておいた方がいいと思うんだ」

まじまじと上総は轟さんの顔を見返した。嘘ではないという証拠に、ごくりと喉を動かし頷いていた。

「なんで霧島さんの家に通うんだ？」

「ゆいちゃんを守るためらしいよ。本人はそう言わないけど、生徒会側ではそういう判断みたい」

「よくわからないな。それこそ西月さんがその湊さんにしたのと一緒だろ」

「そこがね、男子と女子の差なんだろうね。私たちももう卒業してしまうし、下級生のことなんて面倒見ていられないんだけど、最後の最後に難波くんも彼なりにけじめをつけたわけだし、それはそれでよかったのかなって気はするんだ。いろいろあったにせよね」

だから、と轟さんは上総にぎよろ目をやさしく使い笑顔を見せた。

「立村くんだけがどたばたしたわけじゃないんだからね。みんなおあいこ。そんなもんだよ」

「あとは更科だけか。無事なのは」

「更科くん？ まあいろいろあるにせよ、更科くんのはねえ」

言葉を濁したところを見ると、やはり奴にもいろいろ事情があるのだろう。噂に聞いた都築先生のことだろうか？ いや、あれは噂だろう。単に懐いているだけだろう。年齢差が離れすぎてるじゃないか。まさか。

「相手が大人だし、その辺は綺麗にするでしょうよ」

危険なのかなんなのかわからないようごまかし、轟さんはゆっくりと白い息を吐いた。

「難波くんの話に戻るけど、私たち三年には影響ないよ。ただね、生徒会にはゆいちゃんの弟がいるということも、一応頭の中に入れておいたほうがいいかもしれないよ。ゆいちゃんはもう、半年前の元気なゆいちゃんと違うんだから。もう、陰で杉本さんをかばってあげられないよ」

「それはそうだな」

上総もそれは心配していたことだった。だからこうやって行動しているわけである。

「難波くんの様子を見ると、もう後輩たちの面倒なんて見てられるかってくらい、荒れてるし。ゆいちゃんのことしか見てないし。だからもし、これから先、生徒会の子たちが杉本さんに対して何をしようとしても、誰もかばう人がいないんだよね」

「だからさ」

何かを口にしようとしたとたん、唇の皮が少し裂けてぴりりときた。なめてみたらしょっぱい味がした。血が出たのだろう。手の甲で口を拭った。

「私が今わかる範囲でいうと、難波くんの行動は弟くんにもばれてるし、あまりいい顔はされてないと思うんだ。天羽くんもこの前立村くんが援護射撃してくれたおかげでプライドなんとか保っているけど、三年評議連中がね、こんな調子じゃあね。もう自分たちで身を守るしかないんだよね」

——やはり、俺にできることってもう、ないのか。

本条先輩の口にした言葉、「杉本が助けを求めてくるような、男になれ」しか。

——なれるわけないだろうが。

体温が下がってくるにしたがって、自分の心もちもつい、凍りがちになる。

「だから、こっちでやれることだけさっさとやってしまおうと思ったらね、こーんなお高そうなお店に呼び出されたってことよね。だいたい近江さんたちの思惑、わからなくもないけどさ。女

子らしいやり口だよね」

吐き出すように轟さんが、店の入り口に向かいささやきかける。

ぴんとこない。

「思惑ってなんだろう。単に、近江さんの趣味ってだけじゃないのか」

「ここで近江さんと天羽くんがデートしているところ想像できる？ 私、天羽くんの近江さん絶賛を毎日聞かされてるんだけどねえ。デート先はほとんどが寄席か祭りの若手芸人路上ステージくらいよ。私たちだってそのあたりでいいでしょうにねえ」

さっぱりわからない。とにかく上総は適当に相槌を打っておいた。

ちょうど十分くらい待たされたらどうか。上総は気づかなかった。轟さんが、

「とうとうお出ましょ。あら、ずいぶんおめかししておいでになったこと」

さっき上総たちが歩いてきた道を、真っ黒いドレスらしき格好でお出ましになったのを発見するまでは。近くまできたので、まずは片手を挙げて合図した。

「轟さんと話したけど、本当に俺が入っていいのか」

まずは近江さんに確認した。目の前にで黒いニットのワンピースを纏い大きなストールで身を包んだ近江さん。こういう格好でお出ましとは想像していなかっただけに、言葉がつい、堅くなる。その隣で反対に、真っ白いおそろいのニットワンピースとピンクのストール姿の佐賀はるみ生徒会長も、りんとしてそこにいる。上総たちに一礼をしたものの、言い訳をすることもない。それどころか冷静に、

「やはり一緒にいらしてくださいでしたね」

優雅に微笑んだではないか。思わず上総はチンピラ仮面を被り直したくなかったのだが、残念ながら近江さんの前でそこまで自分を崩したいとは思えなかった。

「話があるなら、やはり賢い人と一緒にするのも悪くないしね」

「いつもの先輩ですね」

切り返すあたり、先日の遺恨、残っているとみた。

「話はまず、中に入ってからにしましょ。佐賀さん、一緒に行きましょう」

上総と佐賀とのにらみ合いを制するような形で、近江さんはゆっくりと「アルベルチーナ」の入り口まで向かい、そっと覗き込んだ。大きく佐賀さんにのみ頷き、

「ソファーが空いてるわ。運がよくてよ」

そっと腕を取るようにして、ふたり入っていった。

「私たちも入るしかないよね」

「ついていけばわかるか」

特に来いとは言われなかったが、話がある以上はついていくしかない。ソファーがあると喜んでいる、ということはおそらく、上総と轟さんの席も用意されているということだろう。上総は轟さんの片腕をエスコートするように取った。少なくともはた目には、レディファーストを実行しているように見えるように。

——なんというか、品のない雰囲気だな。

自分でも「品のない」なんて言葉が沸いて出てくるとは思わず、上総はもう一度口を手の甲で拭いた。近江さんと佐賀生徒会長が寄り添ったままで店奥のソファまで歩いていく。それについていくかどうか迷っているうちに、ウエートレスらしき女性から声を掛けられた。

「お連れさまはソファの方にいらっしゃいましたので、どうぞそちらへ」

ちらと轟さんに視線を向け、すぐに背を向けて行ってしまった。

「ほんと、高そうな店だよな」

きょろきょろ、しつこく首を回す轟さんの背を軽く押した。

「とにかく向こうに行ったほうがよさそうだ」

決して店内の調度品が安っぽいわけではない。女子の好みそうな細かい彫りの入った椅子や木製のテーブル、ぱっと見には華やかに見える。天井からぶらさがる大きなシャンデリアも、いかにもろうそくがついていそうな風に細工されたものばかりだった。「アルベルチーナ」というくらいだし、当然フランス文化の影響が強いものばかりなのだろう。調度品が悪いわけではないのだ。ただ、それぞれの席に座っている客……ほとんどが女性だが……のしぐさがどうにも、怪しいのだ。

——なぜ、あんなに密着しなくちゃなんないんだ？

決して、ソファでふたり仲良く腰掛け、上総たちを視線で呼んでいるふたりに対して思ったわけではない。轟さんに向けるお客たちの眼差しが、明らかに値踏みしているというか、にらみつけているというか、「場違い」といわんばかりにふたりひそひそ話をし始める。かと思うや今度は上総の顔に遠慮のない視線を向け、不思議な笑みを浮かべる。もちろん女性だけの環境は上総も、母の習い事関連でしょっちゅう出入りしているからそれが珍しいとは思わない。女子特有のねちとした雰囲気は体験済みだ。

——でも、あんな顔してなぜ俺を見る……？

——俺が何か無作法な真似でもしたってのかよ。

学校の女子たちが、「あの馬鹿評議委員長がねえ」と囁くのに近い、ひそひそ話なのだが、どうもそれとも感じが違う。肌でそれを感じるしかないの、うまく説明ができない。ただ轟さんは明らかに不快を感じたようだった。

「悪かったわね、場違いよね」

「そんなことないよ」

しばらくよそ者とばかりじろじろなめずりまわしていた女性客たちも、上総たちが席に収まった後は関心も薄れたらしく、それぞれのお相手と一緒におしゃべりを再開した。と思いきや、いきなり女同士で唇を重ねている客もいる。

「委員長、驚くのも無理ないわね」

近江さんは手馴れた仕種でメニューを開いた。白いレースの表紙で、中は深緑の皮張りだった。ケーキ、紅茶、コーヒー、それぞれ揃っている。

「ここのケーキは美味しいけど、どうしようかしら、佐賀さん？」

「先輩にお任せします」

「なら、このふわふわしたシフォンケーキがよいわよ。大ぶりだから、私と半分こしましょう。もちろん紅茶はミルクティーがいいわよね」

「私、あまり詳しくなくて」

「いいのよ、どうせどれも美味しいから」

華やかな小花模様のちりばめられた二人がけのソファ奥にふたり、そして上総と轟さんが真向かいの椅子にそれぞれ。優雅な仕種で肩を寄せ合いメニューをめくるふたりを、上総はしばらく凝視していた。このふたり、上総と話をしている間は確か制服だったはずだ。当然学校で着替えるなんてことはできないし、となると外で着替えてきたのか？ それに色違いながらもお揃いの服ということは、やはり打ち合わせかなにかしてきたに違いない。きっとそうだ。

「委員長、コート脱げば？」

「それはまずくないか」

コートを着たまま座った上総に近江さんは、やはり甘い視線で勧めた。

「大丈夫よ、さっき店の人に伝えてあるから。委員長、ここでは私の弟ってことにしてあるから」

くすりと佐賀さんが笑いを噛み殺す気配がする。思わず上総も心臓が競りあがりそうになる。周囲に知らない人ばかりだけに、文句言うにも小声になる。

「なんで弟にならなくちゃならないんだ」

「ごめんなさいねえ、古川さんの十八番とっちゃったみたいで。でもそうしないとこの店、男性出入りができないのよ。私たち、少なくとも高校生以上には見える格好できたのよ。そうしないと、委員長交えて話もしづらいし。それに」

唇をぎゅっとかみ締めたまま、拳固をテーブルに置いている轟さんに首を傾げた。

「轟さんひとりだと、やはり、話しづらいでしょうしね」

上総は轟さんに顔を向けてみた。

「とりあえず、なんか注文するか」

「一番安い飲み物でいいよ」

厳しい顔つきは変わらず、轟さんもコートを脱ごうとしなかった。佐賀がやはりにこやかな表情で促した。

「お茶を飲むと汗が出ますし、お脱ぎになられたほうがいいですよ、轟先輩」

「ご忠告ありがとうございます」

唇一本結びのまま、轟さんはゆっくりと学校指定のPコートを、座ったまま脱ぎはじめた。黒いセーターに黒いスカート、そこには若干手首部分に毛玉がまつわりついていた。目の前の近江さんと佐賀生徒会長の纏っているものとは明らかに質感が違った。

「悪いけどメニューを貸してくれないか」

見ないふりをして上総はメニューを近江さんから受け取った。たぶんこの店の雰囲気からすると、よく友だちと出かけるようなハンバーガーショップとか「リーズン」とかとは価格設定も違うだろう。思った通り、メニューには「紅茶（ダージリン・ウバ・アッサム・ルフナ・キーマン・アールグレイ・イングリッシュブラックファースト・オレンジペコー

) などなど、選択の種類だけがやたらと多いものがずらっと並んでいた。コーヒーも、フレーバーティーも、やはり同じ。ケーキも横文字だらけの説明ばかりだ。写真のようなものはなく、すでにどういうものを食べたいのかイメージしていないと、注文できそうにない。

そして、一番気になる価格は。

——二倍くらいはするな。

悪いが中学生の分際で日常的に払えるものではない。紅茶一杯八百円、ケーキ一皿七百年なんて、そうそう出せるものではないだろう。幸い上総は、ここ数ヶ月殆ど使っていない小遣いを使えばそれでいいが、轟さんにはどうだろう。

「俺と一緒にのものがいい？」

堅い頬と口のまま、身構えている轟さんに、上総は頷いてみせた。もちろん、他の男子評議たちが今まで轟さんにしてきたように、この場は上総が持つつもりでいた。

「でも、いくらくらい」

「いつも轟さんには世話になってるから、この場は俺が払う」

「そんな悪いよ、高すぎる」

「この前コーヒーおごってもらった分だし、あとでまた缶ジュース御馳走してくれればいい」

簡単に説明し、上総は素早くメニューから選んだ。

「ダーズリンをふたりぶんで」

「ミルクとお砂糖は？」

近江さんが尋ね返した。悪いがその辺はきっちり、母にしつけられている。上総はきっぱりと答えた。

「ダーズリンはストレートで飲むほうがいい。もしミルクティーにするつもりでいたら、最初からウバカアッサムを選んでいよう」

まずは最初の一発、ジャブを送っておいた。

「よくご存知ね、まあいいわ。私たちはウバでミルクたっぷり、それとシフォンケーキを一皿」

特典何も感じないかのように近江さんは、気の抜けた声でウェイトレスに注文した。

コートを脱ぎ青大附属の制服のままでいた上総だが、どこことなく周囲の視線が自分に集まって来ているのに居心地の悪さを感じていた。それはある程度仕方のないことだとはわかっている。第一この店の客層が女性しかいない。上総以外男性は見受けられない。しかも、口移しで飲み物を飲ませたり、お互いスプーンでアイスクリームを食べさせあったりと、普通の喫茶店ではまずしないようなことをみなしている。非常に、落ち着かないものがある。

それぞれの前に並べられた紅茶カップと紅茶ポット、そしてケーキ一皿。

「まずはこちらで、美味しいうちに」

「そうだな」

轟さんに上総は素早く、合図をした。

おそらく轟さんのことだ、こういう場所には慣れていないだろう。

「飲むのはどうでもいいんだけど、今日の目的だけさっさと片付けてもらえないかな」

一口申し訳程度に口をつけると、轟さんは背を伸ばし、じっと目の前のニットドレス姿のふたりを見つめた。

「ゆったり話すためにここに来たんじゃないの。ここだとうちの学校の生徒はめったに入っていないし、内輪話もしやすいし。佐賀さんに同席してもらったのは、やはりいろいろと公平を期すためってこともあるしね」

「じゃあ、まずひとつ聞きたいんだけど」

ゆったり甘い雰囲気をもとにぶち壊すような口調で轟さんは突っ込んだ。

「近江さんはなぜ、小春ちゃんをあんな形で、叩きのめしたのかを知りたいのよ」

「さっき委員長にも話したことの繰り返しになるけれど、深い意味はなくてよ」

気取った口調を一切変えず、同じテンポで近江さんは紅茶カップを口に運んだ。よくよく見ると、ふたりともうっすらとピンクの口紅を引いている。おそらく、顔全体に化粧を施してあると見た。どことなく、ふたりだけがふわりと空気の中に溶け込み、上総と轟さんのふたりだけが子どもの場所に取り残されている、そんな感じがした。

「たまたま生徒会室で、杉本さんが文句をつけにきたのを聞いていたし、明らかに生徒会のみなさんが考えていることが正しいと私も判断したから、納得していただいだけよ。委員長には話さなかったけれども決して私、杉本さんに文句は言わなかったわよ。佐賀さんがあっさりとしたしなめたので、言い返せなかったみたい、杉本さんはさっさと帰ったしそれで終わりだと思っていたわけ」

「つまり、杉本と生徒会のみなさまがたがやりあっているのを」

「違います」

佐賀はるみがきっぱり否定した。

「梨南ちゃんが一方的に私たちのところへやってきて、『私は関崎さんがこの学校にいる限り顔を出さないし会う気もない』と宣言しただけです。私も、それは友だちとしていいことだと思いました。だからそうなの、って受け入れただけです」

「話が違うな」

どちらを信じるかは最初から上総の方でも決まっている。おそらくその前段階で、杉本に対し「関崎が入学してきた段階で、余計な手出しはしないように」という愛の籠った忠告があったのだろう。それにプライドをいたく傷つけられた杉本が逆襲しようとしたという。しかしそれを逆手に取られて、杉本は身動き取れなくなってしまった、そう考えるほうが妥当だろう。

「俺が知っている限りだと、関崎が合格する前に、生徒会の人たちから杉本に対し、もしあいつが入ってきても余計なちょっかい出すな、と警告したらしいがな」

「それは梨南ちゃんサイドの意見でしょう。私、梨南ちゃんとはお付き合い長いのでよくわかってますけど、梨南ちゃんは自分の都合のいいように話を組替えるくせがあるんです。立村先輩もその辺はおわかりでしょうに」

どことなく佐賀の言い方には、上総限定で厳しく叩きのめそうとする雰囲気が漂っている。当然、遺恨があるのだが。

「関崎さんは最初から青大附高を第一志望にされてました。でも、梨南ちゃんのしつこい行動で

少し閉口されてらしたことも伺ってました。だから、友だちとしてそれはしてはいけないことだとアドバイスしただけです。本当の友だちだったらそうでしょう。梨南ちゃんはもう私のことを嫌ってます。でも、私にとっては小さな頃からずっと一緒に過ごしてきた大切な幼なじみです。彼女がこれ以上、大好きな人に嫌われていくのを見るのが辛かったです。男子の立村先輩にはおわかりにならないでしょうが」

「関崎の第一志望は青潟東だと、俺は本人から直接聞いたが」

「先輩と関崎さんとは親友ではないでしょう？」

かちっと、音がする切り返し。

「私、親友である佐川さんから伺いました。これは新井林くんも知っていることです。やましいことなんてありません」

「そうか、公認か」

「立村先輩が一方的に疑っているだけであって、他の誰も、そんなくだらない話信じてません。先輩の方こそ、ありもしないことを私に対して言いふらされてらっしゃるんじゃないですか」

「私は、決して、そんないやらしいことをしていないのに、なぜそんな失礼なことをたくさんの人の前で言い放たれたのか、今でも理解できずにおります。健吾……新井林くんも、同じ気持ちだと、思います」

——嘘だろ、とっくにばれているからこそ、あいつは佐賀さんをかばったと言うわけだ。

佐賀の口調は教室にいる時より、かすかに興奮気味に聞こえた。隣で近江さんがそっと、手を握り締めるのが見えた。上総の隣ではそれを見てしまった轟さんが眉をひそめていた。

もうとっくに決着がついていることを、なぜ穿り返さねばならないのか。

そんなことを感じつつ、上総はしばらく佐賀生徒会長との丁丁発止を続けていた。

隣で紅茶にも手をつけず、ことさえあれば口を挟もうと戦闘態勢に入っている轟さんを隣に、やたらと楽しげに微笑みつつ、スキンシップを楽しんでいるかのような近江さんを前にして。

「立村先輩にこうやってお話するのも最後だと思いますので、私なりに梨南ちゃんの今後についてお伝えしておきます」

きりっと、言い放った佐賀を上総はいつもの自分で受け止めた。

「四月から、梨南ちゃんは三年B組の生徒として教室に戻るはずです。E組というところに置かれていたのは松山先生たちの意志だったかもしれませんが、けどそれだと、三年間一緒にやっついこうとする生徒たちの意志をも無視することになるんじゃないかなってことで、新井林くんと一緒に話をしたところなんです」

やはりそういうことか。いつまでもE組に置いておくわけにはいかないだろう。

上総もそのあたりはわからないでもなかった。おそらく杉本も、ある程度は聞かされているのだろう。どちらにしても、上総が卒業した後、 magari なりにも杉本には「クラスメート」なるものが存在する形となる。それはそれでめでたいことなのかもしれない。

佐賀は目の前に出てきたケーキを無視し、ニットの袖口を軽く摘むようにして続けた。

「でも、梨南ちゃんがそのままずっと馴染めるかどうかはわかりません。もう、今のB組は梨南ちゃんの居ない状態で十分落ち着いてますし、本当のところ梨南ちゃんには二度と戻って来てほしくないと思っているような感じです。男子はもちろん、女子もそんな感じです」

「そうだろうな」

表向きの友好関係なんて杉本だってほしくないだろう。天敵たちに取り仕切られた環境のもと、杉本はどういう風に過ごせばいいのだろうか。今の自分に重ねて考え、上総は少し笑った。逃げればいいことか、と。

「立村先輩、私、これだけはお伝えしておこうと思っています」

「早く結論だけ言ってくれればいいのに」

「私は、立村先輩が梨南ちゃんにしてあげたことのほとんどが、間違いだったのではと確信しているんです」

あどけない口調ながらも、半年の間に佐賀の言葉には引くところのない威厳が漂っている。これはどこからきたものだろう。上総は暫く聞きながら考えていた。自分には得られなかったけれども、新井林や天羽、なによりも本条先輩の内には備わっていた何かだった。

「ここであえて、近江先輩と轟先輩の間に入れていただいたのは、青大附中の関係の方が他にいらっしやらないところで、どうしてもお話をさせていただきたかったからです。これは、生徒会長として、と同時に」

いったん言葉を切り、小首を傾げ、つないだ。

「梨南ちゃんの、もと親友としてです」

そばで険しい眼差しをむけた轟さんに、佐賀は可愛らしく微笑みを投げた。近江さんはさっさと白いシフォンケーキを口に運び、

「轟さん、私たちの話はとりあえず、委員長たちの会話が終わってからたっぷりしましょうよ」
どこふく風とばかりに、またこの人も微笑んだ。

「私は梨南ちゃんがこれから先、三年に入ってどういう風に過ごすのか、わかっていません。ただどうしてもこのままだと、いろいろ問題を起こしてしまうだろうという気はしています。梨南ちゃんは私のことはもちろん、新井林くんに対しても、また桧山先生に対しても、みんなを敵だと思っています。だからたぶん、B組は荒れてしまうだろうという気はします。私はだから」

ポットにお湯を差すようなそぶりをするウェイトレスが、上総に目と留めて、いきなりはにかむようにして引っ込んでいった。何か悪いことしただろうか。気をとられたがすぐに佐賀へと向き直り聞いた。

「梨南ちゃんがこれからB組でどうすれば、穏やかに過ごしていけるかを考えていました。評議委員になってからずっとです。友だちに帰ろうなんて思ってませんし、梨南ちゃんだってそんなことはいやでしょう。本当でしたら花森さんがいればまたそれでもよかったのですけれども、彼女が転校したのって立村先輩のアドバイスがあったからなんですよ」

いきなり忘れていた花森なつめの話題を振られ、戸惑った。

彼女は相変わらず青湯から離れた花街で、芸事の修行をしていると母から聞いている。

「別にアドバイスだなんて大それたことした覚えはないけど」

「噂で聞きました。立村先輩が、花森さんに、転校を勧めてたらしいということですよ」

「やりたいことをやるのはいいことだとは伝えただけさ」

でも、あとで慌てて止めたという話は伝わっていないらしい。別にここで伝える必要もない。上総は佐賀に、思いたいようにさせておいた。

「もし、立村先輩が本気で花森さんの転校を止めていただけていれば、梨南ちゃんは二年の段階であんなひとりぼっちになることもなかったと、私は思います。たぶん立村先輩は善意で花森さんの芸者修行をお勧めになられたのでしょうけれども、結果、梨南ちゃんはたったひとりぼっちになってしまいました」

「ひとりぼっち、なのか？」

一応は西月さんをはじめとした三年女子評議たちが杉本を守っていたはずだが。

「先輩たちがいらっしゃらなくなったら、もうひとりです。現実問題として、もう誰もいません。だからなんです。梨南ちゃんをB組に戻してあげてほしいというのは」

「佐賀さん、まずは紅茶、冷めないうちにどうぞ」

脳天気にな江さんが、薄手のごてごてしたカップに紅茶を注いだ。さっき上総も口にしながら、正直言ってまずい。こんなので七百円以上もぼったくるなんてなんだか勘違いしていると思う。ケーキを頼んではいけないが、それ以上に美味しいとはたぶん思えないだろう。上総はそれほど舌が肥えている方だと思わないが、もしここに母を連れて来ていたら、おそらく店の責任者

を呼び出してこんこんと説教をすることだろう。

「ありがとうございます」

仕種だけはお上品に、両手を添えて佐賀がカップに口をつける。細身のニットドレスがしっかりと張り付いていて、さりげなく身体のふくらみが強調されている。見た感じ、上総が想像していたよりもこの人の体型は大人なのかもしれない。隣で座っている近江さんが比較的でこぼこの少ない竹のような身体つきなのに対して、なにかを誘うような感じがどこことなくした。視線を紅茶に逸らし、隣の轟さんに目で合図をした。とりたてて何かを、というわけではない。

「梨南ちゃんにもう一度、普通の中学生生活を味わってもらいたいし、それで一緒に卒業したいし、それで少しでもいやな思い出を忘れてほしいんです。そのために私は、もと親友として出来る限りのことをしたいと思っています。今まではしようとしてきましたけれども、立村先輩をはじめ上の先輩たちが邪魔をされておられたので、どうしてもできませんでした」

「俺が、邪魔をしたと？」

いきり立つのを抑えつつ、上総は問い返した。佐賀も恐れなかった。

「はい。私も何度か、先輩にお話すべきだとは思ったのですが、私の方が間違っていたらいけないと思ってずっと抑えてきました。でも、この半年の出来事をずっと見てきていて、やはり間違いは今のうちに正すべきだと思ったんです」

「間違い？」

今度は轟さんがかりっと噛み付くような口調で問い返した。佐賀は轟さんにも頷いた。

「関崎さんのこともその一環でした。立村先輩はおそらく、梨南ちゃんのために少しでも繋がりをこしらえてあげようと努力されておられたのだと思います。もちろんそれは梨南ちゃんのためになるから、と思われておられたのでしょう。でも、私たちからすればそれは逆効果だと思うんです。まず、立村先輩が梨南ちゃんの面倒を見れば見るほど、梨南ちゃんが全校生徒から嫌われていっているという事実を、ご覧いただけたらと思うのです」

「よくわかってるよ、君に言われなくても」

抑えるのもかなり苦しい。上総はだいぶ冷めた紅茶を半分飲んだ。苦いだけだ。

「もっと言うなら、西月先輩や霧島先輩にだけ可愛がってもらっても、梨南ちゃんの立場はちっともよくなりません。むしろ、他のたとえば清坂先輩たちのグループに可愛がってもらえたのでしたらまた話も違ったと思うのですが、あのままだと梨南ちゃんは嫌われものチームの一員として扱われてしまうだけなんです」

「それは西月さんたちに失礼だろう」

「いいえ、そうは思いません。梨南ちゃんと仲良くしたいという同学年の女子も全くいないわけではないのに、先輩たちがバリアを張った形になったので、梨南ちゃんは一層ひとりになってしまったのではないかって気がするんです。それでは、これから先、大変です」

佐賀の言い分は当たっている。

——その通りかもしれないな。

認めざるを得なかった。嫌われ者同士のカップルとしてくっついたとしても、結局居場所はど

こにもないわけだ。上総がさんざん杉本を振り回してあちらこちらに連れまわしたとしても、卒業したら最後、杉本ひとり取り残される。誰一人仲間の居ないまま。だから上総なりにいろいろと手を尽くしてきたつもりだった。本条先輩に相談したのも、片岡を捕まえて西月さん情報を仕入れようとしたのも。しかし、すべてが破綻に終わった以上、今受け入れるのは佐賀の案だけなのかもしれない。目の前のごてごてした口ココ調のティーカップを見下ろしながら、上総は溜息をついた。

——杉本にもう一度、同学年の友だちを作ってやるには、佐賀さんに任せるしかないわけか。

上総の表情を読んだのかどうかはわからない。佐賀の言葉は全くぶれず、凜としたままだった。

「関崎さんのことを私が梨南ちゃんに忠告したわけではありません。ただ、水鳥中学サイドからは関崎さんが青大附高を第一志望にされておられること、また梨南ちゃんの気持ちを受け入れる場所はないということ、すべて伺っておりました。これは健吾……新井林くんも知っていることです。でも梨南ちゃんの気性を考えるとそれを受け入れてもらうのは難しいとも思っていました。だから、私なりに一度、もと親友として話をしてみようと思ったのです。叶わない人ばかり追いかけてないで、たとえば、秋葉くんみたいに梨南ちゃんを好きになってくれる人のことを見てあげたほうがいいということです」

「秋葉、って誰？」

「学校祭で梨南ちゃんを追いかけていた男子です。先輩、ご存知ではないのですか」

思い出した。どこか幼い、どう考えても中学生とは思えない言動の奴だった。

「それは友だちでなくては話せないし、同時に嫌われる覚悟がなくてははいえないことだと思っておりました。だから私なりにはっきりと伝えました。その時梨南ちゃんはかなり怒りましたけど、やはり考えるところがあつたのか、いきなり生徒会室に飛び込んできて私の意見を受け入れたと伝えてくれました。真剣に話をすれば、わかってくれるものだと思いのほうが感動しました」

そうか、そういうことか。ここで、西月さんと近江さんとの暴力沙汰に繋がっていくわけだ。上総はちらりと近江さんに頷いた。ケーキを綺麗に半分分けにしてある。幸せそうに近江さんは紅茶に耽溺していた。

「その後で、西月さんが抗議しにきたというわけだな」

「そういうことになります。立村先輩は先日、あの場所で、私たち生徒会が梨南ちゃんを叩きのめしていじめたような発言をされましたが、現実はそのことになります。これは生徒会が、というわけではなく、私と梨南ちゃんの幼なじみ同士の真剣な話し合いであって、そこにたまたま渋谷さんや風見さんや近江先輩がいらしただけのことです。私が梨南ちゃんにしてあげられるたったひとつのことを、精一杯私なりにしただけのことです。もちろん梨南ちゃんは傷ついたと思います。でも、三年以降のことを考えるとそうするしか私には路がありませんでした」

「誰かの差し金でもないのかな」

佐川の匂いをちらつかせてみた。すぐに却下された。ちっとも動揺せず。

「それも、誤解を招いてしまうお話です。私は確かに水鳥中学の生徒会の方々とお付き合いがあ

りますし、その延長で佐川さんともお話してます。でも、百パーセント佐川さんと新井林さんと私、で話をしていますので、立村先輩が想像するようはことは全然ありません。第一、私と佐川さんが陰で付き合っているなんて、そんな噂、どこから出てきたのでしょうか。立村先輩が一方的に流しているだけではありませんか。それは、立村先輩の想像であって、証拠なんてなにもないのに」

「ないとは言わないさ。現場にいたのは俺だから」

「去年、本条先輩の前で間違いを認めていただいたはずですよ。私、これは女子としてとても恥ずかしいことですので、本当でしたらあの場にいた人たちの前ですべてを間違いだと言っていたかったです。新井林くんにとめられたので我慢しました。でもまた同じような話を持ち出されるようでしたら、私は公の場で百パーセント否定します。それ以上にもっと大きな問題があるのに、私はそれを隠しているのですから」

「大きな問題？」

「これは佐川さんから伺いました。無実の罪で立村先輩が、佐川さんに暴力をふるったということです」

ああそれか。そんなこともあった。右手の握りこぶしをテーブルの下でこしらえてみた。

人を殴りつけた時の、身もひきさかれんばかりの激しい痛み。甦ってきた。

「佐川さんも関崎さんもそのことを知っていながら、黙ってくれています。それを立村先輩はもっと、厳粛に受け止めるべきだと私は思うのです」

嘘だろ、いくらでも証拠を出せるはずなのに、なぜ思い切った手が打てないのだろう。佐賀はあえて勝ち誇ったそぶりを見せずに、淡々と語りつづけている。わき目もふらずただ佐賀をにらみつけている轟さんは、その話にも驚きを一切見せなかった。

「私も、もう二度と立村先輩が私にぶつけたありもしない出来事のあれやこれやを気にするつもりはありません。これは轟先輩にもお話した通りです。実際佐川さんと私が陰でこそこそと付き合っていたとかいう話にもしなったら、現在の交際相手である新井林くんがどんなこと言うか、想像つかないわけではありませんし、なによりも私はそんな人を裏切るようなことを決してしておりません」

「断言、できるわけか」

切り込んでみた。綿にナイフを差し込んだみたいに、たよりなく拠れた。

「はい、当然です」

——この鉄仮面、いったい、どこで手に入れた。

ちょうど一年前の出来事だった。水鳥中学の佐川と、当時評議委員だった佐賀のふたりがたくらんで杉本に大恥をかかせようと計画していたはずの事件。上総は自分なりの推理でもって、ふたりの密会している場所を突き止め、現場に乗り込んだはずだった。そして、後一步で動かぬ証拠を押さえられたはずだった。関崎にぎりぎりのところで止められあえて武士の情けをかけたゆえの、この始末。

——全く、俺はどうしようもないよな。

上総は笑うしかなかった。

佐賀の罪悪感に訴える手段をとって見たものの、すでに生徒会長として敏腕を振るっている彼女に出来そこない評議委員長だった上総が勝てる見込みもなかった。また、あったとしてもそれがどうだというのだろう。この場所で佐賀を追い詰めたところで、それこそ「証人」と言えるのは轟さんだけ。見た感じだと近江さんと佐賀とは共同戦線を張っていきそうな気配ありだ。轟さんが上総をひいきしているのは知れ渡っている。となると、誰一人信じてもらえない、そういう結論となる。

「ちょっと聞きたいんだけど、佐賀さんずいぶん自信持って否定できるのね」

轟さんは唇をずずっと鳴らして紅茶をすすった後、がしゃりと置いた。

「立村くんがその佐川という人を殴ったというところも、佐賀さん見たわけなの。それだって証拠がないじゃないの」

「あります」

「ふうん、なに」

「佐川さん、あの後、病院に行ったらしいです。前歯、折れそうだったそうなので」

——嘘だろう？

「たぶん、病院に直接いけばわかるはずですよ。それに関崎さんもちゃんとその場で見ていらしたそうなので、嘘を仰らないとすれば絶対に知っているはずですよ」

「そうなの、でもずいぶん佐賀さんって、いろいろなこと聞いてるんだね。私もかなりいろいろ噂聞いているけど、ここまで詳しくないよ」

さりげなく探りを入れてくれた。感謝したいけれど、佐賀にそれは通用しなかった。

「新井林くんがすべて教えてくれました。もちろん今は立場もあるのでそんなこといいませんが、あの頃は私も何も知らなかったのよ。立村先輩がこの前話されたことはみな、新井林くんがすべて否定してくれます」

「どっちもどっち、証拠なんてあってないようなものってことね」

「轟先輩、あと少しだけ、立村先輩とお話させていただきます」

いいですか？と確認を取ろうとはしなかった。静かに、でもきっぱり撥ね付けた。

「どうせ最後だものな」

負け戦でも、逃げはしない。上総は轟さんに紅茶を継ぎ足した。ちっとも香らない紅茶が、ティーカップの中に少し黒く残っていた。

「話を戻します。私は今まで立村先輩から何を言われても黙っていましたが、これからはそうするつもりです。それは、梨南ちゃんが可哀想だからです。梨南ちゃんはおそらく、あのままだとB組から弾き飛ばされたままになるでしょうし、男子たちからも嫌われたままでしょう。松山先生も正直なところあてにはなりません。そうになると、私が梨南ちゃんの前親友としてすべきことをしなくてはならないと思います」

「すべきこと？」

こくと頷くと、やはり一年年下の女子だと感じる。言葉とは裏腹に。

「はい。梨南ちゃんをまず、修学旅行でクラスに再び馴染ませることと、別の友だちを作ってもらおうこと、それともうひとつは、立村先輩に頼ることを教えることです」

「俺に頼らせる？ まさか」

本条先輩も同じことを言っていたような気がした。ばかばかしい。杉本の性格上、簡単に上総を頼ろうだなんて甘いことを考えるわけがない。もっとも本条先輩の言うことならば受け入れましょう。いつか、上総を認めてくれる日まで努力せよ、というただそれだけのことならば。しかし佐賀の言い方にはどことなく湯気のようなものを感じる。

「先輩は梨南ちゃんのことをあれこれとお世話してらしたので、もちろんそのお気持ちは理解しているつもりです。そのために梨南ちゃんが一層嫌われたのも事実ですけども、仕方ないことだとわかっています。本当に好きな人に頼ることができれば梨南ちゃんもこれ以上、他の人たちに迷惑をかけることはないと思うのですが、それは難しいことです」

「関崎じゃだめだってことだな」

「その通りです」

あっさりとは肯定された。

「私にはわかるんです。女子同士ですから。梨南ちゃんに関崎さんのような真面目な人は向かないんです。梨南ちゃんの理想は、頭がよくって、運動神経もよくって、それに一生懸命な人なんですけれど、きっとそれは無理です」

「それ、元親友として言うてはいけないことじゃないのか」

「いいえ、だから言えるんです。本当のことはいつかきっちりと話さなくてはならないんです」

矛盾を感じつつも上総は黙った。

「私、ずっと前から思っていました。もし、立村先輩が梨南ちゃんのことを大切にしてくれるのだったら、今までのことはすべて水に流したいって。だって梨南ちゃんのことをいつも見つめてあげてるのって先輩だけなんです。梨南ちゃんはまだ、自分に合わない人ばかり追いかけてますけれど、いつか気づくと思うんです。一番大切にしたいって思っているのは、立村先輩だけなんです。だから、私、そのことを言いました」

「ちょっと待てよ！」

慌てる。完全に何か勘違いしている。誰も彼もなぜ、上総をありふれた恋愛関係の中に置こうとするのだろう。腰を浮かしかけて紅茶がカップからこぼれた。しかたなく座り直した。

佐賀は全く揺れもせず、驚きもしなかった。揺れているのはカップの中の紅茶だけだった。

「先輩がもし、梨南ちゃんを大切に守ってくださるのなら、私は精一杯、梨南ちゃんをクラスから浮かないように努力します。決して私が手を回したとか思われないようにします。梨南ちゃんに嫌われたままでも私、かまいません。これは絶対に、私でないとできません。だって梨南ちゃんと私は、小さな頃から一緒だったのですもの」

両手を添え、佐賀はティーカップをゆっくり持った。指先が光っていた。自然のものではない、透明なマニキュアを塗っているようだった。

——どうすればいいだろう。

数日、頭を悩ませていた問題にひとつの答えが提出されたわけである。

上総なりにいくつかのヒントを得たけれども、結局決定打は見つからずとうとう卒業一週間前となってしまった。自分がいなくなり、E組からB組に戻される杉本の立場を考えれば、もちろんこのままだと取り残されるのは目に見えているだろう。佐賀の言うことは間違っていない。むしろ、ありがたく佐賀の申し出を受けるべきだとも思う。

それができないのが自分の「ガキ」たるゆえんなのか。

——もし、ここで俺が席を蹴って立ったらどうなるんだろう。

上総はもう一度佐賀の方をちらちらと眺めた。どうしてあんなにも自信を持った態度で接することができるのだろう。以前、杉本の側で戸惑いの表情を隠さなかった佐賀はるみではない。たとえ上総が下品な口調で脅迫したとしても、全く驚く気配も見せないだろう。

——生徒会長になったってことが、そんなに自信となったのか？

——それとも、あの佐川の口添えなのか。

わからない。上総からしたらどちらも正しくて、どちらもあいまいなままだ。

百パーセント、佐賀と佐川のふたりが繋がっていたことは確信しているけれども、言われてみれば一切証拠は残っていないのだし、諦めるしかない。

「佐賀さん、さっき言った条件なんだけどさ」

紅茶を一杯、飲み乾した後、上総は尋ねた。

「決して佐賀さんが、杉本をかばったとかそんな風に思わせないでやる自信あるのかな」

「どういうことでしょうか」

「つまり、杉本の顔をつぶさない形で、ちゃんと守ってもらえるのかなってことだけど」

自分が本当はしたかったこと。なによりも、たったひとりでやりたかったこと。

でも、一番頼りたくなかった、たったひとりの女子に頼るしかない。

唇を噛むしかない。

「簡単です」

あっさり、きっぱり佐賀はるみは答えた。唇の端には笑みが浮かんでいた。

「私は梨南ちゃんがどういうタイプの女子と仲良くなりやすいか知ってます。かつての私のようなタイプだったら、きっと梨南ちゃんは喜ぶと思うんです。それか、花森さんタイプの人で、できれば男子と何気なくうまくいきそうな人。そういう人たちならば、私、いくらでも知っています。私が頼んだと決して思わせないように、梨南ちゃんに友だちとして近づけること、簡単にできます」

「杉本は鋭いぞ。そんなの一発で見破る」

「いいえ、私なら大丈夫です。他の女子の先輩たちは梨南ちゃんが本当はどういうタイプを好きかわからないままいろいろ面倒を見てらしたようですけど、根本的にみな、わかってらっしゃらないと思うんです。それはしかたないんです。だって、たった二年しか梨南ちゃんのこと知らないんですから。立村先輩、ご安心ください。私、決して、梨南ちゃんのプライドを傷つけるようなことはしませんから。それは生徒会の人たちにも厳しく伝えておきます」

——ここで勝負に出るか否か。

答えるのをためらった。

佐賀の提案に乗るのはひとつの手だが、素直に受け入れてしまっているのだろうか。

——まだ信用できないな。裏には佐川がいる。

突然、ティーカップががしゃんと鳴った。落としたわけではない。轟さんが乱暴にソーサーへ置いたのだ。

「悪いんだけど私も話、早くしてほしいのよ。佐賀さん」

轟さんがわってはいったのは、佐賀が声高に杉本の今後をうれいた時だった。

「今日は私が近江さんに確認させてほしいということで呼び出したわけ。少し話をさせてちょうだい」

いったん休止符。目と目で合図をした後、上総はしばらく俯くことにした。

轟さんのカップはすっかりからっぽだった。もう二杯くらい飲んでいるはずだった。

近江さんは軽く佐賀の肩に触れて制したのち、尋ねた。

「轟さんはいったいなにが知りたいわけ」

「近江さん、私が不思議に思っていたのはなんでいきなり湊さんのこと小春ちゃんに持ち出したのかってことよ」

完全に話は、杉本梨南のことから離れた。時間稼ぎ、深い感謝。佐賀が不服そうに首を傾げ、甘えるような態度で近江さんを見上げた。

片手をぺたっとテーブルに置き、轟さんの攻めが始まった。

「悪いけど小春ちゃんふくめてもう湊さんのこと忘れてるし、近江さんだってつきあいなかったよね。なのになんでそんな情報得られたわけ。私、すごく不思議なのよね。話聞いて私も初めて、その湊さんって子のこと思い出したくらいだし」

「あら、湊さん、うちの担任のところによくくるのよ。お姉ちゃんも可愛がってるし。青瀉ではとにかく私とは友だちよ。そうね、A組の女子で友だちと言えるのは、彼女だけかもね」

意外な事実だった。

上総は記憶の端においやった一年以上前の夏の日を思い出した。宿泊研修三日目の、バスを脱出したきっかけの、名前を知らない女子のことを。

「委員長には悪いんだけど」

近江さんは白いクリームをフオークで運びつつ、手を組み合わせた。

「湊さんってどんな子が知らなかったでしょう。私も今年の夏に湊さんと会うまでは、ああいう子だとは思わなかったわよ。けっこうさばさばしててね。話が合うのよ」

「そんなのどうでもいいんだけど」

「要は仲良しと遊びたかっただけなのに余計なことされて見切りをつけただけ。どう考えても西

月さんがやめさせたようなものよ。本来なら、高校入試のことを忘れていられる環境を取り上げられたのをみてね、なんかね、湊さんが不憫になっただけ」

「自分が行きたくなかったからやめたってそれだけなのに、ずいぶん近江さんって肩入れするのね」

鋭くつつこんでいく轟さん。

「そうね、なんでかわからないけど、それだけいい子だったってわけよ。そうそう、お姉ちゃんが言うには、もしも早い段階で私が湊さんと話をする機会があれば、きっと彼女はこの学校に残っていたんじゃないかってね。もちろん同じ学校の子もいたわよ。でもね、なんでかわからないけど、気が合っちゃったんだもの、しょうがないわよね」

「それ、天羽くん知ってるの」

「さあ。女子同士のお友だち関係なんて、私、話す趣味ないし」

ということは、おそらく何も知らずにいたというわけだ。天羽は。

「そこでいろいろ聞かされたわけ。いかに西月さんが湊さんを追い掛け回して神経ずたずたにされたのかってことをね。委員長ならその辺わかってもらえと思うけど、西月さんのやり方というのがとにかくすごすぎて、しかも表向きは評議委員の模範行動だから止めるわけにもいかない。困るわよね、それじゃ」

おちょぼ口でフォークを置き、

「佐賀さん、どうぞ」

促した。

「私もあまり人とかかわりたくないんだけど、これだけは言っておいた方がいいかしら」

「何を？」

「つまり、かかわらなくてもいいところでなんでみな、ちょっかいを出そうとするのかなってことよ。委員長もそのつもりはきつとなかったのでしょうけども、西月さんのようにかえってマイナスの方向へ針を動かしてしまったのかもしれないわね」

「え、俺が？」

すっかり耳をふさいでいたつもりだったのに、聞こえてしまった。顔を挙げると近江さんと佐賀のふたりがじっと上総を見つめていた。

「湊さんの件にしても、本当は委員長が無理に菱本先生といざこざを起さなくても、黙ってことは片付いたはずなのよ。それと一緒に。放っておいてくれればよかったのになら、湊さんもつくづく思っていたみたいね」

——俺が余計なこと、したっていいのか？

ずしんと言葉が響いた。肯定するかのよう、近江さんは頷いた。

「一番いいのは自然に任せることよ。無理に人をどうのこうのしようたって無理なものは無理。それよりも、なるようにまかせればいいのに。委員長も、もういいじゃない。やりたいようにやれば、ねえ」

——で、やりたいように今やっているというわけか。

上総は轟さんにもう一杯ポットから紅茶を注ごうとして、手を止めた。

「悪いけど、私は放っておくことできない性格だからね」

周囲の視線が轟さんに向けられていた。明らかにとげのあるものばかり。ウェイトレスが近づいて来て、

「恐れ入りますがお静かに願います」

と囁いてきた。それにプラスして上総の顔をまた覗き込み、俯いて去る。

「近江さんたちのしようとしていることって、放っておいてもらっても困らない人たちが得をして、かまってもらわないと困る人が損をする、そんなことばかりじゃないの」

「言ってる意味がわからないんだけど」

顔を見合わせ、ふたりが頷いた。ついでに、と上総に近江さんはささやきかけた。

「うちの姉はね、委員長みたいなタイプが好みなのよ。だからかしら、ここのお店のお客さんも委員長の顔が好きみたい」

「俺も近江さんの言っている意味が全くわからないよ」

ひくり、と息を飲んだ様子を、上総は頬のところで感じた。

轟さんが、ぎゅっと唇をかみ締めた。

ポットに差し湯してもらい、また紅茶を注ぎ直してもらった。

ウェイトレスからティーカップを受け取りながら、上総はもう一度轟さんの方を見た。

どうも、おかしい。うまく言えないのだが、なんとなくいつもの轟さんではないような気がする。近江さんの言葉がだんだん効いて来て胸がつまりそうなのを、上総は紅茶を口にすることで忘れようとした。飲み込んですぐに、轟さんの攻撃を見守った。

「私も、ここで聞いたことをおおっぴらにするつもりはないし、小春ちゃんがしたこともやはり悪いことには変わらないからこれ以上突っ込む気もない。けど、小春ちゃんが怒った理由くらいは想像つくんじゃないの。本当のことをなぜ言う必要があったわけなのか、私はそれを知りたいのよ。湊さんが小春ちゃんのせいで追い出されたのはよくわかったし、近江さんと相性の合う子だったってことも理解したわよ。ただね、あんまりにも出来すぎじゃないの？ 私の推理が正しいならばこれって、生徒会ぐるみの『犯罪』って言ってもおかしくないよ」

「犯罪？」

ふたりが口を揃えて「違うでしょ」といわんばかりの顔をする。轟さんは大きく頷いた。

「生徒会長さん、あなたはまず最初に、杉本さんと勝負付けを済ませるためにありとあらゆる手段をとったわよね。あなたのお得意な『証拠』は一応、私の方にあるけど、それを言うつもりはないわよ。たぶん次期評議委員長さんのご事情もあるだろうしね」

「証拠ってなんですか？」

「またも開き直る佐賀はるみだが、もしかしてこれは本気でそう思っているのかもしれない。全く戸惑う気配もない。」

「それは女子同士のやりとりで片付ければいいことよ。でもね、ずいぶんなことじゃないの。生徒会を通じてまず、杉本さんをE組からB組に戻そうと働きかけて、ただでさえ居心地の悪い場所に戻して、優越感たっぷりいろいろな面倒を見ようとするわけ？ これってふつうの女子だったらたまったもんじゃないと思うけども」

「轟先輩のような強い方にはたぶん、梨南ちゃんの方がおわかりにならないと思います」

「またもつっぱねる佐賀はるみ。しかし上総に対して話した時とは違い、全く激していない。」

「私が強い、ね。そう思われて光栄よ。そうしたら先生たちからも他の生徒たちからも、佐賀生徒会長は凄い凄いと褒め称えられるわけよ。まあ、今でも高い評価を与えられているってことよ。ついでに杉本さんをかばう立村くんを叩きのめせば誰も文句は言わないってわけ」

「叩きのめしてなんて、そんな。私はただ、梨南ちゃんのことを安心して任せられるのは立村先輩しかいないと」

「安心してかよ」

「大嘘つきやがって。そう言いたいのだが「アルベルチーヌ」内のお上品なムードには不釣合いな言葉でもある。上品というよりも、成金っぽさという方が近いと上総は思う。」

「立村くんは少し黙ってて。とにかく佐賀生徒会長率いる生徒会が、そこまでやる理由ってどこにあるわけ？ いくらなんでも、佐賀さんがかつての復讐を杉本さんにしたいんだったら、それは生徒会の外でいくらでもやればいいじゃないの。なぜ、立村くんや評議委員会、それに近江さんを巻き込んだわけ？ 天羽くんを叩きのめして、自分の彼氏が次期評議委員長になるのに立場がなくなるようなことするわけ？」

「ずいぶん誤解してるわよねえ、私は巻き込まれているわけじゃないわ」

めんど臭そうに茶々を入れるのは近江さんだった。さっき轟さんに言いたいことをすべて言い放ったせいか、もうどうでもいいという態度だった。この人は何事においても本気になるということがないんじゃないだろうか。銀のフォークで残りのケーキを食べ終えると、紙ナフキンで丁寧にクリームを拭い、包んで畳んだ。

轟さんはじっと近江さんに向き直った。

「気づいてないの？」

「気づくってなにを？」

「近江さんも、生徒会の駒にされてるってこと、気づいてないのかってことよ」

——ちょっと待て、どういうことだよ。

いくら黙っているといわれても、そういうわけにはいかないではないか。

上総は轟さんに質問を投げかけた。

「それ、どういうことだ？」

「つまりね、こういうことよ」

ゆっくり深呼吸し、轟さんは残りの紅茶を一気に飲み乾した。気合付けだ。

「佐賀さん、あなたも気づいてないかもしれないけど、あの風見って子、なんであんたにいろいろ吹き込むのかよく考えてみなさいよ。佐賀さんがしていることはね、要するにみんな、あの風見さんって女子がたくらんでいることであって、それ以上の何ものでもないわけよ。どうしてそんなに言うこと聞いて、操られているのか、それが不思議よね」

——風見？

思い出したくない名前だった。風鈴によく似た横広がりのきっちりした髪の毛を振り振りしつつ、あの時上総の過去をすべて暴いた、二年の女子の苗字。

上総は言葉も出ないまま座っていた。ウェイトレスが皿を下げていった。

「ついでに言うけど、この場所を指定したのも、風見さんの仕業じゃないの？」

「『アルベルチャーヌ』を、ですか？」

さすがに佐賀も少し驚いたのか、口をかすかに尖らせた。

「そうよ。私が近江さんと佐賀さんに直接話をしたいと申し入れた時、ふつうだったら学校の中か学食か、せいぜい『リーズン』あたりにするのが普通よね。人にいくら見られたくないからといって、こんなお茶が七百円近くもする中学生のお財布にやさしくない場所、指定しないよね。もちろんあんたたちおふたりにとってそのくらいはたいしたことないのかもしれないけど、私や立村くんがこういうところで支払えるだけのお金、持っているかも想像できなかったわけなのかな。さっきの杉本さんの話ならいくらでも頭が回転するくせに、どうして私たちのお財布の

ぬくもりには興味を持たなかったんだろ。違和感ありありよね」

「轟さん、それどういうことだよ」

訴える意味がわからず、上総は問い掛けた。

「つまりね、立村くん。このふたりも操られてるってことよ。この半年近く、私たちは、二年の風見って子の手玉に取られて右往左往していたってわけ。しかも、おめでたくもその傀儡になっちゃった佐賀さんがそのことに気がついていないのよ。もっとも私がそのことに気がついたのはつい最近だし、今更どうしようもないけど」

「傀儡ってなんですか？」

佐賀のぼわんとした問いを轟さんは無視した。

「辞書を引いて調べなさいよ。近江さんが言う通り、湊さんって子が小春ちゃんを嫌っていて逃げ出したのも事実だろうし、佐賀さんが杉本さんの面倒をみなくちゃって思ったのもまた嘘じゃないでしょうし。そんなのはどうでもいいのよ。ただ、なんでそこまで風見さんは評議委員会を嫌ったわけなのかな。そうだ、立村くんを一方的に攻撃して評議委員長から下ろそうとしたこともあったわよね。まさか立村くんを叩きのめすため？ それもちょっと違うよね。なんか、風見さんって人、人を混乱させて楽しんでいるって気がするんだけど、違う？ それに最後は」

言葉を切った。ぐるりと周囲を見渡した。

明らかに浮き上がっていることを、自覚するかのようには身震いした。

「『アルベルチーナ』だか、指名したのは私を追い詰めるためでしょう？」

「そんなことはありません！」

あわてて否定する。近江さんも続ける。

「さっき言ったじゃないの。私たちここ好きなのよ。それだけよ」

「でも、勧めたのは風見さんじゃないの。ここだったら私みたいな貧乏人が萎縮してしまい、びくついて何も言えなくなるに決まってるからってこと、思ってたんじゃないの」

轟さんは、息もつかせず言い放った。

「対等な場所だったら私もいくらでも文句言えるけど、こういうお上品でお財布の中身が心配になるようなとこだったらびくびくしちゃうから、何も言えなくなるだろうってことで。しかも最後には、立村くんまで連れてきたわけ？」

「いやそれはたまたま」

上総が思わず口を挟もうとすると、轟さんは激しく机を揺らしつつ続けた。

「ほんと、女子のやりそうなことよね。敵ながらあっぱれよ。風見さんによろしく伝えておいてちょうだいよ。先輩たちを翻弄して、同輩たちを利用して、いったい何が楽しいのかって、一度さしで話してみたいわよ。そんなにいじくりまわしたいならなぜ、生徒会に立候補しなかったのか、その理由も知りたいところだけど、そんなの私には関係ないわよね。佐賀さんも近江さんも、ふたりともまだ気がついてないようだし、この調子だとこのまま利用されっぱなしだと思うけど、いかげん目を覚ましたらどう？」

「被害妄想もいかげんにしなさいよ。轟さん」

また眠そうな声で、片手では佐賀の肩に触れ、もう片方の手をテーブルの端にかけ、近江さん

が言い放った。

「私、利用されたなんて思っていないけど。ただ、もしそうだとしたら轟さんの方が策にはまっ
てしまっているんじゃないのかしら」

「策？」

問うたのは轟さんではなく、上総の方が先だった。佐賀は黙って近江さんを見つめていた。

「風見さんのことなんて全然話になんか出てきてないじゃないの。それなのに勝手に妄想を膨ら
ませておいて、自分がこの場所に似合わないもんだと決め付けてることを白状しているようなも
のなもの。轟さん、誰も『アルベルチーヌ』にふさわしくないなんて、言っていないのにどうして
そう思うわけなのかしら。もちろん、お茶もお菓子も、『リーズン』とかから比べたらかなりの
差があるけども。それにね、委員長？」

「なにか？」

「委員長って、こういうところ、来慣れているでしょう？」

上総は答えなかった。轟さんの不利になる発言は一切したくなかった。近江さんは返事を待つ
こともせず、轟さんに柔らかく話し掛けた。

「もしも、生徒会側でそういう策略を練っていたと仮定してもね。私は納得して今までのような
行動を取っていただろうし、少なくとも私自身は操られたなんて思っていないわよ。それに佐賀
さんも、そういう風なアドバイスを風見さんからされたかもしれないけれど、その行動を選んだ
のは佐賀さん本人じゃない。取り捨て選択はちゃんと自分でやっているはず。私からしたらむ
しろ、こういう場所でいきなり取り乱して噛み付いてきた轟さんの態度の方が理解できないわ
よね。堂々とすればいいのに。自然でいればいいのに」

もう一度、今度は佐賀に当てていた片手で、さらりと髪の毛を触れた。

佐賀は暫く黙っていた。

——そういうことなんだ。

一瞬のうちに、展開をすべて読み取った。

上総に与えられている能力のひとつ。

——杉本に関する話は二の次だったんだ。本来の目的は、轟さんを叩きのめすためだ。

なぜ、いきなり佐賀が、上総を「アルベルチーヌ」に引き入れようとしたのか。

なぜ、轟さんをこの場所で居心地悪い思いをさせたのか。

日々、粗大ゴミ置き場で物を拾っては古道具屋に売り払ったり、他の男子たちからジュース
をこっそりおごってもらわない限り評議委員会では肩身の狭い思いをしていたという轟さんのこ
とだ。いくら「アルベルチーヌ」の紅茶がまずくて調度品がやすっぽいものであっても、彼女の
目には超高級品に見えただろう。そしておそらく、七百円以上の紅茶やケーキなどは、全く触れ
る機会のないものだったに違いない。

これがもし、杉本だとしたら全く抵抗なくティーカップを口に運び、

「こんな美味しくない淹れ方をしてもったいないですね」

くらい言い放つだろう。

見た感じ、近江さんと佐賀は「アルベルチーナ」の雰囲気完璧親しんでいる様子だった。もちろん中学生の小遣いで気軽に行くことができるとは思えないが、今日のところは金銭的な不安もなく楽しんでいるのだろう。しかし全く予告もせず、いきなり轟さんを連れ込み、最後には。

——俺を引きずりこんだというわけか。

女子三人での話し合いならともかく、轟さんにさらに肩身の狭い思いをさせるための大道具として、利用されたに過ぎない。はたして目の前のふたりが轟さんの気持ちを読み取っているかはわからない。轟さんの読み通り、風見百合子の口添えで指定しただけなのかもしれない。もっというなら佐賀に関して言えば佐川が裏に回っていたのかもしれない。轟さんが上総に好意を持っているらしいということを知っているとも思えない。思えないが、もしすべてを知って演出したとしたら。

——もう、俺たちふたりに勝ち目はない。

としたら、次に上総ができることはひとつしかなかった。

「もういいよ、轟さん」

上総は首を振った。これ以上負け戦を続けるわけにはいかなかった。自分が罵られるのならばそれはしかたのないことだ。しかし、轟さんはもう、すでに、蜂の巣にされてしまっている。もう手の届かないものを見せ付けられている。

「なんでよ」

「話はもうついている。佐賀さん、せっかくだけどさっきの杉本に関する案、俺は受け入れる気さらさないからさ」

まずはきっちりと断っておく必要がある。財布を取り出した。二人分の支払いはたぶん間に合うだろう。中身を確認した。

「杉本には俺が自分なりできっちりとすべきことをするし、心配してもらう必要なんてない。佐賀さんも俺がどう動くかなんて考えないで、やりたいようにすればいい」

「それでいいのですね」

全く動揺せず、佐賀は頷いた。表情は変わらない。穏やかなまま。

「君たちが、佐川と相談していろいろたくらむんだったらそうすればいい。俺もやりたいようにやるだけだ。どうせ俺は、君たちからみたら出来そこないの先輩なんだろうけど、それなりに自分なりの考えもある」

「梨南ちゃんのために、私は申し上げたつもりなのですが」

「あとは杉本がひとりでなんとかすればいい。俺はやりたいようにやる」

ちょっとしつこすぎるかもしれない。だが、過保護なやり方で攻めようとする佐賀に対抗するには、ただひとつ「放置」しかない。

本条先輩も言ったはずだ。

杉本が、上総を頼ってくるまで待つしかない。

——だから、俺は待つだけだ。

「ここに二人分の代金置いとく。あとで払っておいて」

もう何も話すことはなかった。上総は立ち上がり、轟さんを促した。まだ文句を言いたそうな轟さんだったが、

「ここを出よう」

上総の囁きに溜息を吐き、捨て台詞を言い放った。

「ふたりとも、自分の頭で物事考えなさいよ。近江さんも、天羽くんのこと少し考えなさいよ」

「大丈夫よ。今日、轟さんと話してみて、天羽くんのことには心配しなくてもよさそうだとわかったから」

かみ合わない返事を、軽やかに近江さんはした後、上総にまた耳元で手を振った。

「何がなんだかわかんないけど」

完全に会話は崩壊したまま終結した。佐賀生徒会長だけが無言で頭を下げた。

帰り際、通り過ぎる席からちらちらとまた、上総への視線がまとわりついた。居心地悪かったのは轟さんだけではない、上総もそうだった。しかも最後に、何を勘違いしたのか妙に熱い囁きが耳に入ってきたではないか。

「すごい美少年よね」

「本当ね。漫画に出てくるみたいな感じよね」

——誰か他の奴、その辺にいるのか？

何度見渡しても、上総以外の男は誰も店内にはいなかった。

ウェートレスの、また奇妙な眼差しから目をそらしつつ上総は「アルベルチーナ」を出た。外はすでに真っ暗闇と化し、空気もまたぴんと締め付けられるような冷ややかさが広がっていた。上総は轟さんに振り向いて、少し待つよう合図をし、すぐ側の自動販売機まで駆け寄った。ホットとアイス、両方のタイプで缶コーヒーが並んでいた。もちろんここはホットでいくのが筋だろう。二本購入した。

「轟さん」

「ありがとう」

熱い缶を手袋越しに手渡した。

「これで口直しすればいいよ」

「あ、でも、あとでお金返さないよ」

「いいよ、どうせこれが最後だ」

轟さんは歩きながら上総を見上げ、大きく溜息を吐いた。

「最後の最後でしくじったって感じよね。立村くん、申し訳ないよ」

「謝るのは俺の方だと思う」

本来、あの場所にもし、上総が顔を出していなければ、轟さんが追い詰められて思わぬ暴走文句を吐き出すこともなかっただろう。むしろ彼女の冷静な頭脳であのふたりをぐうの音も出ないくらい叩きのめすことも可能だったはずだ。

「さっきの話は、私にとってはちゃんと裏付け取ったことだけだね。でも、あのふたりにはもう

、通用しないってことかもね。完全に洗脳されちゃってる」

「もういいよ」

風見がどうか、佐川がどうか、そんなのはもうどうでもよかった。

ただ、轟さんの受けた傷の痛みだけが、じんわりと上総に伝わってくるかのようだった。

「俺は、轟さんの誠意をちゃんと受け取ったつもりだからさ。それだけでいい」

「そっか」

缶のプルトップをゴミ箱に捨て、轟さんはそっとすすった。

「立村くん、やさしいね」

「そんなでもないけど」

「つらい思いをした人には、すごくやさしいよね」

いきなり轟さんが呟いた。毒が含まれている言葉に聞こえた。

「つらい思いって？」

「そう、つまり、今の私とか、修学旅行中の美里とか、あの事件以降のゆいちゃんと小春ちゃんとか、天羽くんとか」

上総は立ち止まった。言われている意味が珈琲の熱さと同じく飲み込めなかった。

「だから美里は今でも立村くんのことがあきらめられないんだ」

「そんなわけじゃないと思うけどさ」

轟さんは静かな口調で続けた。

「ほんとうに、これが最後かもしれないけど、私はこれ以上つらい思い、したくないんだ」

「どういうこと」

「今、やっと気がついたんだ。美里がなんで、立村くんのことずっと好きでいるかって。辛い時に優しくされると、どうしても誤解しちゃうんだよね。立村くん、今の美里はある意味、幸せそうに見えるよね。D組、クラスもまとまってていい雰囲気だしね。羽飛くんも元気だし。だから、楽しそうに見えるよね」

どう答えればいいのかわからなかった。女子というのは理解できないけれども、今の轟さんもやはりつかみきれない。

「私も、幸せになりたいよ。さっきまで目の前に並んでいた、あのふたりみたいに楽しく、お金のことなんて気にしないでケーキ食べたいよ。だから大学に入ったら絶対司法試験受けて、絶対お金稼いで、絶対整形手術してやるんだ」

激しい口調が一瞬だけ、すぐに穏やかに戻った。上総の顔に笑いかけた。またしゅうしゅうと前歯の間から息が洩れた。

「でも、そうしたら立村くんは、私にやさしくする気、きっとなくするよね」

「別に優しくするとかしないとか考えたことないけど」

「いいよ、気づかなくて」

とぼとぼ、轟さんは先を歩き始めた。

「女子の中で、幸せになってもやさしくしてあげたくなる子って、きっと立村くんにとっては、杉本さんだけなんだと思う」

追いついた上総の顔を見ずに呟いた。

「私もいつか、そんな人見つけるよ」

缶コーヒーを飲み終えた轟さんは、ゴミ箱に缶を放り込み、そそくさと背を向けた。

「ありがとう。じゃあ、またね」

さりげない挨拶が、なぜかきっぱりしすぎているような気がした。

上総は片手だけ挙げ見送った。すぐに角を曲がったのか、闇へと轟さんの姿は吸い込まれていった。

青潟大学附属中学の卒業式に悲しみの溢れる場面はほとんど見られない。

上総の記憶する限りだと、去年本条先輩が会場を退出する際に、一部の女子たちが集まってプレゼントらしき包みを持って走り寄っていったくらいだろうか。あれだけ派手な卒業式答辞をやってのけたのだ、ファン心もそれはさまざまだろう。

もちろん陰ではドラマもあるのだろうけれども、下級生だった上総の目に留まることはほとんどなかった。少なくとも今年のように、口に出せないいくつかの悲劇を抱え込んだまま、涙を流す権利も得られずに消えていく人々がいた学年は、そうそうないだろう。

たとえば。

——ねえねえ、あの南雲先輩、彼女とふたりっきりで涙流しながら、別れを惜しんでいたみたい。

——えー、あのぽっちゃりした人？ ひとことでいってデブ？

——そうなのよ。なんかね、手を握っちゃって、あの南雲先輩にじいっと見つめられててね。でも彼女の方は全然、あのまんまにここにこしてたのよ。なんでだろう。あの南雲先輩が血迷ってあんな人選ばなければ、絶対男子に相手になんてされないタイプなのにね。

——ほんと、謎な人たちだよ。あーあ、南雲先輩みたいな人に、じいっと見つめられるなんて、夢みたい！

とか、

——ほら、C組の霧島先輩、いるでしょ？

——うんうん、あの頭が悪すぎて、青大附属から追い出される人でしょ。霧島くんがあんなにかっこいいのにね。顔しかとりえない馬鹿って感じ？

——さっき、三年の教室に入っていったわよ。なんかすごい騒ぎだったみたい。なんでもね、最後の挨拶で「私がこの学校にきたことがすべての間違いでした。生まれたことをお詫びします」とか言って、殿池先生慌てちゃって。

——わかってるじゃあん。

——でしょ？ あんな頭の悪い人を先輩としてあがめなくちゃいけないってのがなんかの間違いなのよ。霧島くんかわいそう。先生たちは大人だから本音言えないけど、私たちからしたらわかるよね。そうよ、裏口入学した罰が当たったのよ。

とか。

上総には今、どうでもいいことではある。

卒業式前日に更科からとくとくと愚痴をこぼされたので、C組においてどういう展開があったのかは聞いている。だが、それがなんだというのだろう。どんなに殿池先生が霧島さんを慰めたとしても「青大附属」から追い出されることは事実。それをひっくり返せない以上、何を言っても利く耳を持たず口を閉ざした霧島さんを、責めることはできない。

「そりゃあ、キリコが青大附高に進学したかったのはわかるけど、それはそれでしかたないんだよ。別に成績が悪かっただけであって、人間性を否定してるわけじゃないのにな。評議委員会からも下ろしたといっても別に、そういう事情だったら人前にさらされるのは惨めだろうなってことであえて切り替えただけなのに。なんか、キリコ、完璧いじけてしまってたさ。『私はこの場所に存在してはいけない人間でした。生まれてきたことをお詫びします』とか言うんだもんな。別に言っていないよね。立村、どう思う？」

後片付けに振り回されている更科には申し訳ないが、霧島さんの気持ちは事実を認めただけのもの。だから、受け入れざるをえない。

「そっとしておけよ」

それだけ答えた。

さて、もうひとつの噂、こちらはすでに上総が、隣の席で南雲本人から事情を報告されている。上総から聞きだそうとしたのでは決してない。やはり卒業式前日放課後、掃除をしながらぼそっと呟いたのを拾い上げただけだ。

「りっちゃん」

柄の長いほうきを持ってひたすら床をなでまわしている上総に、南雲は雑巾をぶら下げたままぼそっと呟いた。

「人生、終わったな」

「なにがだよ」

「俺ももう、目の前真っ暗。ざまあないよな」

手を止めて、上総は向き直った。南雲の顔は頬がくぼみ、一段と野性味を増していた。卒業式近くになると男子女子関係なく髪型がきちり整ってくるものなのだけど、南雲の様子はいつもどおりのままだった。

「ほら」

握り締めたもう片方の手には、住所を書き記したらしいカードが一枚。

青潟市内ではない。桃色の名刺サイズだった。

「どうした」

「彰子さんからもらった」

「じゃあ、よかったんじゃ」

「よくねえよ！」

小声で南雲は舌打ちした。

「むこうさん、ぜーんぶ俺のこと知っててさ、これからも友だちでいようねってさ。青大附高の

連中情報を俺に送るようになってさ」

「いやだから、それはそれで」

あれから何度か南雲は奈良岡彰子と縊りを戻すつもりでアプローチしているらしい。もっとも失恋のショックで暴れているのは南雲だけであって、奈良岡自身は「振った」という認識を持っていない様子だった。だから平気な顔して「友だち」ののりで新しい住所を渡したりしたのだろう。それはそれで進歩だと思ったのだが。

「お互いの夢に向かってがんばろうねってさ。高校進学したらいっぱい勉強して眼医者さん目指してがんばるんだってさ。けどさあ、医者になるためにそんなに、すべて捨てる必要あるのかよ。なあ、どう思う？ りっちゃん？ お友だちとしての文通だけだぞ」

上総なりに解釈すると、

「将来の夢に向かってお互い、切磋琢磨いたしましょう。友だちとしてこれからもよろしくね。男女のお付き合いは勉学の邪魔になるから、すべて封じ込んで、がんばろうね」

この二行に尽きると思う。

「でもそれはそれでいいんじゃないかな。だって」

「よくねえよ、まったく、だって考えてみろよ！ すいと一緒なんだぞ。寮生活なんだぞ！ あいつがさあ、また色気つきやがったらどうするんだよまったく！」

それ以前に、年上の高校生彼女の話はいったいどうなったのだろう。

上総は頷きながら、いまだ立ち直れていない南雲を見つめた。

◇

卒業式当日、上総は八時きっかり、体育館へと向かった。

前日から泊り込んでいた母に無理やり髪の毛をいじられて朝の一戦を交えた後、いつものように自転車に乗り込んだわけだった。今日が特別な日、という認識は全くなかった。ただ校舎を移動するだけのことにしか思えなかった。いつものように、評議委員会のイベント準備に朝早く出かけるだけのこと。

——息が白いな。

まだ暖房がまったく効いていない館内に入り、上総は入り口で立ちすくんだ。

——もう椅子、セッティング、終わってるんだな。

毎年恒例、卒業式前の準備は下級生がすべて行うことになっていた。自分たちの席はもちろんのこと、卒業生分の椅子もみな、前日にみな運び終える手はずとなっていた。上総も去年はそうだった。椅子を何度も三階の三年生教室から運んで筋肉がひくひくしたものだだった。

——なんか、妙な感じだよな。卒業式なのに、何にもしないのって変だよな。

入学式以来の「もてなされる」という感覚が、肌に馴染まない。上総は首を何度か回した。ゆっくりと中央に用意された通路を歩いてみた。すべて焦げ茶のじゅうたんがぴったりと貼り付けられている。滑らないように両面テープで貼り付けられているはずだ。卒業生入場の際に足をとられてこけるなんてことは、なさそうだった。

卒業生というお客さんを、在校生がおもてなしするために色々な準備を進めてくれている。すでに椅子は全員分運び込まれていて、舞台前方に三年席、向かって後ろ側に在校生席、そして二階のギャラリー席には父母一同が座る手はずとなっている。三年の席は横一列に男子女子と分かれていて、舞台の壇、そこからまっすぐ下りることができるように低めの脚立が用意されている。男子と女子の間をすうっと歩いて自席に戻る形となっている。

そのあと川向こうといった感じで、二年だけ席が用意されている。やはりークラス、男女の間に通路が設けられていて、壇上までこげ茶のじゅうたんが用意されていた。

いつぞやは新井林と対決するきっかけとなった場所、また杉本梨南が初めて関崎の姿を見つめた場所。休み時間はバスケットボールで汗を流したりもして、吹き抜けの二階から古川こずえに「立村、あんた何やってるの！ 早くボール奪いなっ！」などと怒鳴られた場所でもある。本条先輩の側にくっついて舞台の端に突っ立っていて、貧血起こして倒れ、結局本条先輩の背中に背負われて保健室に運ばれたこともある。

——俺の席はここか。

まずは自分の座るべき席を確認した。木の背もたれを叩いた。上総の席は前方から向かって右側男子席、出席番号順に座るとなると必然的に通路脇。しかも後ろから二年生たちの視線もたっぷり受けるはめになるといういわば「さらしもの」の場所だった。

——本当に、らしい位置だよな。

振り返り次に、斜め右側の女子席を見やった。二年女子たちの固まる場所だ。

——「す」だと、だいたい真中らへんか。

杉本梨南は二年B組の女子席に回されるはずだ。いくら一年間E組通いだっただといえ、籍は一応、B組のまま。おそらく向かって左隣には「さ」で始まる苗字の佐賀生徒会長も座っているだろう。

もう一度、通路ど真ん中から今度は壇上を見上げた。

四列目の席から見上げると、思ったよりも舞台が大きく写った。

先日から何度か予行演習を行っていたので、式の流れや要領はつかんでいた。ただ答辞、送辞、その他いろいろな挨拶類は時間の都合もあって当日のみのぶっつけのみだった。すでに上総は大嶋教授に「十九世紀の英語バージョン」で仕上げた答辞暗誦を一通り聞いてもらい、たっぷり駄目出しをしてもらっていた。ついでに桧山先生をはじめとする青大附中英語科の教師一同を集めた席でも何度か「正式バージョン・藤沖の答辞英訳版」の読み上げを行っていた。とりあえずは問題ないと褒めてもらえた。大嶋教授は大学教授だし、中学の卒業式に顔を出すような人ではないだろうし、おそらく上総の計画は誰も気付かぬうちに達せられ、自分だけ満足して終わるだろう。

上総は鞆に用意した答辞を、もう一度畳み込んだ。二種類用意してあった。

一応、英語で書かれた文は学校に残していく予定で、読み終えた段階でマイク脇に畳み、そのままステージを下りることになる。その分の答辞にはちゃんと上に「答辞」と明記してあるが、

もう一通何も書いていないバージョンを用意してある。内容は同じものなので間違えても困りはしないのだが。

——入場する時には忘れないようにしないと。

これから自分が考えているたったひとつのことを完遂するために。

誰にも伝えていない、自分なりの答えを。

「立村、おはよ」

視線をずっと壇上に向けていたせいで、貴史が近づいてきたのに気がつかなかった。慌てて頷き挨拶代わりにする。美里はついてきていなかった。声はもちろん貴史なのだが、見た目妙にさっぱりしている。たぶん後姿だけだったら気付かなかった可能性大だ。髪の毛がとことんスポーツ刈り、なんだか見た目、新井林に似ていた。

「お前、今日終わったら、打ち上げ出るだろ」

すぐに本題へと入っていくのが貴史流だ。何度も断ってきた誘い、でも飽きずに声をかけてくる。上総は昨日と同じく黙って首を振った。

「いいだろ、三年D組これで最後だろ、三年連続評議のお前が出ないとしまらねえよ」

「両親が来るからそちらに付き合うことになってるんだ」

例の「三年D組打ち上げパーティー」の件だ。結局D組とB組が合同で、教室を借り切る形でジュースで乾杯、という流れに決まったそうだ。A組とC組は西月さんやら霧島さんやらのこともあって、とてもだけど「卒業おめでとう！」と盛り上がる雰囲気ではないのだそうだ。B組については轟さんが難波の存在をほとんど無視し、昨日今日の段階ですべての手はずを整えてしまったとも聞いている。料理なんてご立派なものはないにせよ、缶ジュースとスナック菓子くらいは大目に見ましよう、という学校当局のお許しも得た。三年D組打ち上げチームとB組轟さんとのタッグが大成功したといえるだろう。

その努力には拍手を送るけれども、もう近づきたくない空間がひとつ増えるのもなにか辛い。どうせ終わったらそのままずっと校舎から離れればいい。また三週間近くしたら高校に顔を出すのだから。

「お前なあ、なんでそんなに意地張るわけ？」

「そういうわけじゃないよ」

事実、父と母がこなくてもいいのにわざわざ息子の晴れ舞台を酷評するために吹き抜け二階父母席に陣取るとは聞いている。朝から最悪の気分で罵りあいしたわけだが、三年D組で息苦しい空気を吸うよりは、あの母親の方が扱いよいかもしれない。

「あーあ、けどさ、これで卒業かよ。まじかよ、すげえおもしれかったよなあ。最高のクラスだったぜって、そう思わねえか？」

「どうせ校舎が変わるだけだろ」

「まあなあ。あっそだ、立村、お前、英語で答辞読むんだろ。どうだ、自信の程は」

貴史は上総の隣でのほほんとした口調で続けた。珍しく話を逸らそうとした跡が伺える。気を遣われているのがありありとわかる。

「準備はしてきた」

「お前さ、うちのクラスふくめてみな注目されてるぞ。目立つしなあ」

「羽飛の方が目立つだろう」

あっさり切り返した。

青大附中の卒業式は毎年、クラスの評議委員かそれに準ずる生徒が男女一名ずつ、壇上で代表として、卒業証書を受け取る形式となっている。ひとりひとり受け取るのだと時間がかかりすぎるのと、毎年その際に代表の生徒が受けを狙うギャグを一発かますのが通常だからだった。

本来ならば上総も三年D組評議委員として美里と一緒に受け取りに行くのが筋だった。しかし英語答辞を優先するため、貴史にその仕事を譲ることになった。菱本先生からの提案だったけど、これは素直にありがたいと頷ける。去年卒業した先輩たちのように、壇上で「これからえびぞりやります！」とか「これからカラオケ一発歌います！」とか校長と肩組んで歌ったり、そんなアホな行動を取らなくてもいい。

ちなみに本条先輩も卒業生代表答辞を担当したため、三年A組卒業証書授与代表は他のクラスメートに任せていた。あの答辞で、ギャグを交えた卒業証書授与のパフォーマンスなんて一気に色あせたのは言うまでもなかったが。

貴史は頷きながら、顎を撫でた。

「せっかくだ、これはとことん、やることやらねばな。最後だし、目立つしかねえしな」

「お前、何やるつもり」

思わず尋ねてしまった。にっこり、貴史は歯を見せて笑った。

「去年がなあ、いわゆる受け狙いの一発ギャグばっかだろ。同じことやっちゃったら結局は二番煎じだし、このあたりは美里を始め、他の卒業証書授与チームの連中と相談中。今のところ、正統派、青年の主張でいくかってのが濃厚」

「好きだな、みな」

「天羽にギャグ勝とうって根性が、まず間違ってるだろが」

「いえなくもないな」

ぼそぼそ話しつつ、上総は貴史の横顔を改めて覗き込んだ。どうやら顔もしっかりそってきたらしく、にきびがところどころつぶれていた。それでいて背もすっかり、上総より頭ひとつでかくなっている。もう背の順番でいくと、はるか後方に貴史が位置するようになっている。残された上総は相変わらず真中らへんのままだった、いや男子の中ではかなり、低い方かもしれない。

「羽飛、どうしてここ来たんだ」

さりげなく上総は尋ねた。あっさり貴史も答えた。

「立村、ここにいるんじゃないかってな」

それ以上続けずに、貴史は体育館出口へと向かった。

また誰もいなくなった後、上総は二年生女子の席が並ぶ中央通路へ足を向けた。

二年女子、最前列は二年A組、次いでB組、C組と続く。

——杉本は、この辺か。

だいたい女子先頭から五番目くらいだろう。B組女子に、やたらとあ行、か行で始まる女子がたくさんいなければ。上総は右腕を伸ばしてみた。手が届くか、確認したかった。握手できそうな距離だった。

まだ、今日の計画は、杉本にも話していなかった。打ち明ける気はあったのだが、上総自身がこの三日ほど、英語答辞準備に追われていて気がつけば杉本と三日ほど顔を合わせていなかったというそれだけのことだ。

——まあいいか。それはそれで。

できれば卒業式後、二言三言でもいいから話をする時間があるといい。

それを終わらせない限り、たぶん上総の中での「卒業式」は終らない。

貴史には申し訳ないが、卒業おめでとうの気分で盛り上がる気にも、やはりなれない。

じっと椅子の一点を見つめていると、また男子の声が遮った。聞き覚えある声だが、今度はきっちり丁寧語を遣っていた。

「立村さん、おはようございます」

振り返ると今度は、新井林健吾がばか丁寧に礼をしていた。直立不動。

「どうした」

「今日の送辞、俺が読みます」

両手をぴたりとつけ、いかにも敬礼しそうなポーズで、新井林は告げた。

「答辞って、でも確か」

佐賀生徒会長が生徒代表として読み上げるはずと聞いていた。プログラムにもそうあるはずだった。新井林は首を振り、上総の隣に立った。

「佐賀……あいつ、二日くらい前に熱出して学校休んじゃってて。たぶんインフルエンザかなんかだと思うんです。こんな寒いところで耐えられるわけねえし、休めって言いました」

「そうか」

短く答え、考える間を取った。「アルベルチーナ」での会合から即、倒れたというわけか。

でも新井林にはその「アルベルチーナ」で上総と顔を合わせた旨は伝わっていないらしい。

「で、あいつから俺に、代わりに読んでくれと頼まれました」

「そうか、そうなんだ」

曖昧な返事を繰り返しつつ、新井林の真意を探った。貴史にしろ、新井林にしろ、なぜ上総を追って体育館に集まってくるのだろう。

「けど、あいつの原稿をそのまま読むのは男として納得がいかねえんで」

顔を緊張させつつも、新井林は力をこめて言い切った。

「昨夜、徹夜して書き上げました。それだけです」

「それだけって」

上総が問うのを振り切るようにして、新井林もまた、出口へかけていった。

——そうか、新井林が答辞を読むのか。

アクシデントとはいえ、少し気が楽になったところもある。

次期評議委員長として四月以降は、完璧に仕切っていくであろう新井林。最初は出来そこない先輩の上総に噛み付くわ罵倒するわでてこずったものの、最後はこうやって……内心どう考えているかわからないけれども……先輩を立ててくれた。最近は奴の最愛なる彼女、佐賀はるみをさんざんなぶったにも関わらず、きっちりと挨拶に来てくれた。

誰もかれも、上総よりはるかに背の高い男子たちばかりだった。

——やっぱり、俺は取り残されてるよな。

上総はまた白い息を吐いた。もう一度、杉本の座るであろう席に目を向けた。

おそらく佐賀は式に参列しないだろう。きっと空いた席は、壇上から見えるだろう。その側にたぶん杉本がいるだろう。目印は空席ひとつだ。

——今日は、俺のできることを、完璧にやり遂げる。それから。

予定を答辞の後に組み込んだ。席にはまだついていない、杉本梨南の席に向かい、もう一度手を伸ばした。入ってきた時よりも、素手に触れる空気がぬるんでいた。

赤と白のリボンでふわりと花のようにあしらったコサージュが手渡された。胸章の一種なのだけど、青大附中の卒業生は毎年これを使用するのが伝統だった。少し華やか過ぎて男子には抵抗があるのだが、青大附属の生徒である以上しかたない。本条先輩の時は答辞を読み終えた後に胸からそれを引きちぎり、いきなり三年生席にむけてブーメランよろしく放り投げた。

——きっと本条先輩、あの時投げた花、ちゃんと前から計画して細工していたんだな。自分でブレザーの胸ポケットにつけながら、上総は去年の式を思い出していた。

——でないと、こんなに軽い花、あんな遠くまで飛ぶわけじゃないか。誰があのコサージュ、拾ったんだろう。先輩のファンだった下級生女子が数人、飛びついてきたというのは覚えているんだけどな。誰だろう。

あの時の大騒ぎは、一種のコンサート会場そのものだった。ただそれでいて本条先輩は会場を混乱させようとはしていなくて、ちゃんと他の同期評議たちに指示して、落ち着かせるように手はずを整えていた。それゆえにあれだけのおふざけも最後はしっかと締まり、前代未聞ながらも思いの深い卒業式として記録されたはずだ。

「立村、今日はお前の晴れ姿だな」

いきなり天敵・菱本の声にはっと顔を挙げた。

菱本先生がにっと笑って見下ろしていた。むかつくこの姿勢。上総は座っていじいじと安全ピンと格闘している。その側でりゅうとした背広姿の菱本先生はくやしいくらい男前だった。普段のただらしたトレーナーとチノパン姿とは全く異なるものだった。おそらく杉本梨南が今日の菱本先生を見たら、ためらうことなく褒め称えるに違いない。だんだんいらいらしてくる。なんだかやたらと斜めになるのはなぜだろう。

「期待しているぞ。みんなな」

お説教は卒業式終わってからひとくさり、また打ち上げ会で本格的なのを一本、用意してきているらしい。貴史経由の噂でちらと聞いた。今はまだ、ひとりひとりにねぎらいの言葉を掛けつつ、三年間のぎっしり詰まった思い出の三年D組をかみ締めているに違いない。知ったことか。

——俺はあんたの顔をもう二度と見ないですむだけでラッキーだと思ってるさ。

もちろん口には出さず、返事もせずに、上総はコサージュつけに専念している振りをした。

「おおい、清坂」

「はい」

その場に立ったまま、菱本先生は美里に声をかけた。

「ちょっとこっちに來い」

「なんですか？」

手でさらに「こいこい」と呼び寄せると、それ以上は何も言わずにまた別の生徒に話し掛けはじめた。目の前から消えてくれることが上総にとっては一番嬉しいことなので無視したまま、上

総は安全ピンをさらに指先に差した。痛いけど表情に出さないようにするのは、子どもの頃から慣れている。

「立村くん、ちょっと来て」

美里が上総の席に立ったまま、そっとささやいた。

たぶん、あの雪の放課後以来、口を利いたのはこれが最初だろう。二週間以上経つとすでにいろいろの出来事も、少しだけ凍って匂いも打ち消されている。一時期は全身から炎が滾りそうだった美里の表情も、今はすっとさっぱりした二次元の絵に戻っていた。上総にとっては接しやすい雰囲気でもある。立ち上がった。

「何か、用？」

「後ろの方に来て」

他の連中もなにかれとしゃべりあったり、サイン帳に書き込みをしあったりと、三年D組としてやるべき仕事を片付けていた。隣の南雲は東堂とふたり、何か抱き合ったりいきなりポーズ取ったりして写真撮りしたりしているし、貴史は金沢の完成させてきたクラスポートレートを観ながらなにやら批評していた。偉そうに見えるが口は出さない。上総がひさびさに美里と二人、ロッカーの前に移動しても誰も反応する者はいなかった。

「ちょっと花、貸して」

言うが早く、美里は上総の手からコサージをひったくった。指がちくっとまた痛んだ。

「そのまま、じっとしてて。手、下ろして」

目を上総のブレザーポケットに移して、美里は心もちかがみこむ格好になりながら、コサージを上手につけてくれた。上総がつけようとするとうどうしても斜めに曲がってしまうのに、美里が手早く直すとあっという間に出来上がってしまう。

「ごめん」

「こういう時は、ありがとうございます」

「ありがとう」

たしなめられるのもまた、いつものことだった。

さっぱりとした口調もまた、変わっていなかった。

ふと、何かを言わねばならないような気がした。

「清坂氏」

そそくさと自分の席に戻ろうとする美里に、上総はもう一度繰り返した。

「本当に、ありがとう」

美里は背を向けたまま、片手を挙げて了解の意を伝えてきた。そのポーズは本条先輩か、また貴史と同じものだった。

曖昧なまま、美里との付き合いも自然消滅しようとしている。

このことだけが、まだ上総にはひっきりとして残っていた。

美里はあの、生徒会がらみの大騒ぎを引き起こした日に上総に、

「もし別に好きな人が出来たら、自分の方から立村くんを振る」

と言い放った。その言葉を軸にして、上総は自分なりに現状維持をしつづけることを選んだ。つまり、

「清坂美里と立村上総は現在付き合っているけれども、近い将来清坂美里に別の彼氏が出来て別れることになるだろう」

というシナリオをこしらえたわけだ。たぶんそれは現実となるだろうし、それまでは無理に波風立てなくてもいいだろう。美里がそれを望んでいるのならば、上総は黙ってそれに従うのがベストだろう。

——付き合い、なんて言葉、なければいいのに。

何度思ったかしのれない。「付き合い」という言葉、それさえなければ上総はこんなに混乱をきたさなくたってすんだのかもしれない。「友達でいる」ことと「付き合い」こととを隔てる川は、どうしてこんなに深いのだろう。

——恋愛感情なんて言葉、なくなればいいんだ。そうしたら。

上総は自分の席に戻る途中で、奈良岡彰子が楽しげに男子たちのサイン帳へひまわりイラストでメッセージを書き込んでいる姿を目に留めた。南雲があれだけずたずたに傷ついているのをどこまで理解しているのかしのれないが、少なくとも彼女には「友情」と「恋愛」がイコールで繋がっていて、それは奈良岡の体型と同じようにずんと揺らぐことなく残っているのだろう。

——みんな大好きだよ！ 私の友だちはみんないい人ばかり！ 奈良岡彰子

その一行で済ませられる彼女の思考。少しうらやましく思った。

ノート一冊に書き尽くせないくらいの溜息を隠している南雲の本心を知るだけに。

「卒業生のみなさんは、廊下に整列してください」

校内放送が流れた。卒業式の開始時間は十時からで、その前に下級生たちが入場し終わっているはずだった。その後、卒業生の父母たちが体育館を見下ろす格好で吹き抜けの場所に席を取り、三年生たちが入場してくるのを待っている。もっとも卒業式といったって、附属高校に入学するだけと割り切って、最初から来ない人も多いと聞く。

——だから来なくていいって言ったんだよな。

今朝の口げんかの原因はそこだった。母がなぜわざわざ家に泊まりにきてまで卒業式出席に拘るのか、理解できなかった。そのことをきっちり説明して、来なくていいと言い放ったとたん母に火が回り、機関銃攻撃されたというわけだ。最後は父が割って入りしかたなく早朝の登校となったわけだが。はたして両親はどのあたりにいるのだろう。やはり、上総が壇上で英語の答辞を読み上げるのを面白げに眺めて、駄目出しをするのだろうか。くさくさする。

「出席番号順だぞ、わかっているな」

しつこい。よくわかっている。何度も予行練習でそうやったじゃないか。

うんざりして菱本先生をちらと眺めた時、ぴんときた。

——あの野郎、もしかして、さっきもか。

美里にいきなり声をかけて上総の方へ呼んだのは、もしかして。

——あいつの企みだったのかよ。

よく考えれば、「もう放っておいてあげるから」と約束してくれた美里が自分の方から近づいてくるようなことは、たぶんしないはずだった。それをわざとらしくそうしむけるとは、天敵・菱本、最後まで上総と戦うつもりようだ。

——まったくどいつもこいつもな。

余計なことを考えるよりは、菱本先生の暑苦しい善意にいらだっている方が気も紛れる。上総は男子列の一番うしろに並んだ。前には貴史が立っていた。特に何かを話すこともなく、男女一列ずつでそのまま階段を降りていった。

「それでは卒業生入場です。拍手でお迎えください」

体育館奥からかすかなアナウンスが流れている。これは放送委員会の担当だった。以前は評議委員会がすべてまかなう形となっていたのだが、上総が評議委員長だった頃にそのあたりの業務を放送委員会に一任するようにしたはずだった。天羽が特に仕事を取り返したわけでもなさそうなので、そのままになっている。

A組から順に、男女一緒に入場となる。茶色のじゅうたんの上をきっちりと整列したまま歩いていき、それぞれの席についた。D組も特段問題なく、男女別々、それぞれ両翼となる形でおさまった。

上総の席は、卒業生席際奥で、かつ通路側すぐ側だった。後ろを振り返らなかったのが確認はしなかったが、たぶん杉本が壇上から向かって斜め後ろ左の女子席に混じっているはずだった。

校歌斉唱、校長挨拶、青潟市教育委員長挨拶、その他何人かの挨拶が続いた後、ようやく卒業証書授与となる。去年もそうだったのだが、細かい挨拶関係はまず生徒の集中力が続いている最初の方にまとめてしまい、後半は青大附属独特の明るいのりで盛り上げていこうという趣旨らしい。今回上総は英語答辞の関係もあり全く情報を得ていなかったが、貴史や美里たち卒業証書授与役の連中はいろいろ集まって相談をしていたらしい。そして何かをたくらんでいるらしい。去年のようにお笑い一発芸をかますわけではなさそうだと、今朝話してはいたのだが。観客として上総も興味がないわけではない。挨拶の後、十分程度の休憩が入り、終わった後貴史も美里も戻ってこなかったところみると、何か考えてはいるようだ。

A組、天羽と近江さんも見当たらない。

B組、難波と轟さんもいない。

C組、更科たちも。

「ねえねえ立村、羽飛たち何やるか聞いている？」

「はひふへほ」の順番でいくとちょうど斜め前となる古川こずえが振り返って尋ねてきた。

「さあ、古川さんの方こそ聞いてないのか」

「それがさ、内緒なんだって。美里も教えてくれないしねえ。あっそっか。あんたも知らないってことになるよ、本当に誰も知らないんだねえ。公開本番なんてあるわけないし」

「古川さん！」

声を尖らせてしまう。ここはまずいだらういくらなんでも。ひとつ席を置いて南雲がにっと笑いかけてきた。

「卒業証書、授与。三年A組」

「はい！」

体育館入り口から天羽のでかい返事が響いた。戸はかすかに空いているのだが、天羽たちの姿は見えなかった。ふつうに入ってくるのならばまる見えのはずなのに。わざわざ半開きにして姿を隠し、返事だけしているというところにぴんときた。少しざわめく気配が体育館内に漂った。A組連中の他、みな興味津々といい風に腰を浮かせている生徒もいる。なによりも上から覗き込もうとしている、あぶなっかしい父母たちの姿が怖い。降って来たらどうするんだ。

「さてはもしや」

ひとつ置いた席で南雲が上総に近づき、つんつん肩をつついた。

「りっちゃん、言わなかったけどさ、そういえばうちの規律の後輩たちがさ、天羽たちに呼ばれていたのは気付いてたんだよなあ」

「規律がか」

上総は確信した。これは絶対に、ひとつしかない。

——天羽、そして羽飛が組むとしたら！

「えー？　ということはさ、南雲、規律委員会が絡んでるってことだともしかして」

「そういうこと」

上総が答えを囁こうとした瞬間、答えが全員、身をもって現れた。

館内大爆笑と同時に、あふれんばかりの拍手が彼ら、彼女らに降り注いだ。

慌てて上総も手を叩いた。こうきたか。

A組、天羽は若草色の着物に同色の羽織姿で登場した。その隣には制服のままでいながらも洗面器ほどもある太鼓を打ち鳴らしながら、それでも機嫌よさげに寄り添う近江さんの姿があった。太鼓持ちを気取っているのだろうか。さすがに近江さんまでおそろいの和服姿というのには無理があったのだろう。天羽の片手には棒らしきものが握られていて、さらに懐からは白いものが畳み込まれている。

「天羽らしいな」

「落語家さんって感じだよ。天羽、なっかなかやるじゃん」

「よくもまあなあ」

こずえと南雲がこくこく頷きつつ、さらに後ろの二組目を興味深げに観察した。

「B組は、あれ、あのコートどうしたのさ！　立村、あんたのじゃないの？」

上総もB組コンビの仮装姿にしばし言葉を失った。そりゃそうだ。

——あれ、俺のコートだろ！

B組、難波は上総がふだん使用している例の「シャーロック・ホームズ風とんびのコート」

をしっかりと、ご丁寧にこげ茶の帽子と杖を持ち、パイプを口にくわえたまま天羽の後ろを歩いている。寄り添うのはもちろん轟さんなのだが、こればかりは普通の黒いスーツにやはり黒い帽子。ふだんの格好で皮の鞆を持って卑屈な格好で追いかけて歩いている。戸惑うものの、すぐにキャラクターは判明した。

「轟さん、ワトスン君だな」

「これは二重丸！ ナイスアイデア！」

天羽の格好には疑問を呈していた南雲も、B組コンビの設定には拍手にボーナスを加えていた。

「仮装ときたらな、難波にさせなくちゃ嘘だよねえ、りっちゃん」

「だけどなんで俺のコートがあそこにあるんだよ！」

「推理はあとあと、ほら、C組もきたよ」

こずえに促されて、少し離れたところから現れたC組カップルをまた眺めやる。どうやら、一組目が壇上に上がるの見計らって二組目が中に入る、というタイミングを決めているらしい。きわめてきちりとおさまっているのが笑える。

「あれって、なんだいったい」

「難波の真似なんだろうけど、ねえ」

いや、シャーロック・ホームズではないだろう。

「なんであいつ燕尾服なんか着てるんだ？」

C組、更科は小さい身体によくぞ見つけてきたというような燕尾服をまとい、頭にはシルクハットを載せ、ご丁寧にそれを脱ぎお辞儀をした。一緒に連れ歩いているのはもちろん、後期限定女子評議委員だった阿木さんなのだが、彼女も大柄とはいえない姿なのに肩を丸出しにしその上に白いショールを羽織らせてもらい、しずしずと歩いている。壇上に向かうところで曲がる時に観察した。どうもかなり長いドレスを無理やり引きずっているようだ。誰かの貸衣装であることに間違いはない。

「マイフェアレディってどこっすか」

「その辺はノーコメントで」

「悪いけど更科がああの格好だと、チャップリンだよな」

古川こずえの名言に、上総たちだけではなく他の連中もこらえきれず椅子をひっくりかえす寸前になりつつ笑いこけていた。C組連中のひゅうひゅう声が高まり、それ以上の会話が不可能になってしまった。

「さて我らがD組は？ 聞いてないの？ ほんっとにあんた！」

「聞いてねえよ、だってあいつら秘密主義なんだぜ」

自分のクラスだというのに南雲の関心度は一気に下がったらしい。両腕を組みそれでも「お手並み拝見」とつぶやいたまま椅子にもたれた。すでにA組、B組、C組の二人組は壇の前で横一列に並んでいる。さて、C組の「マイフェアレディ」と「チャップリン」が定位置につき、最後に我らがD組の登場を待つのみとなった。まだ興奮さめやらぬ館内に、いきなり笛の音色が響

き渡った。放送委員会をおそらく使ったに違いない。スピーカーからだ。

ぴーひょろ、ぴーひょろ、ぴーひょろろ。

「おい、あれってもしかしてさ」

「もう三月だってのに、あいつらいったい」

現れたD組コンビの姿に上総はぽつっと呟いた。

「なんで獅子頭なんだ」

D組、羽飛貴史、という前に現れたのはお正月の獅子舞用獅子頭を被って、くるくる回りながら入場してきた謎の生物だった。緑の布に渦巻きの紋らしきものが染め抜かれ、何者かが動かしているのはわかる。貴史が入っているというのは想像がつく。しかし、いくら奴の背が百八十センチ近くあるとしても、まさか入り口に頭をぶつけそうなほどたっぱがあるとは思えない。休憩時間中に三十センチ以上伸びるなんてことは、考えられないし考えたくもない。

獅子は何度か頭を振るような仕種をし、しゃがみこんだり立ち上がったりと忙しい。とりたてて何かをするわけではないのだが、かっくんかっくんと首を振るだけで場が盛り上がる。D組連中ほぼ総立ち、拍手喝采の中で上総だけが座り込んでいた。

——清坂氏はどこだ？

貴史がD組クラス男子代表とすれば、美里が女子代表のはず。その美里がいないということは。

いきおいよく壇上前のじゅうたんを駆け抜けていき、向かって左端の位置につくと、獅子は頭をもう一度派手に振り、「どうも、どうも」と挨拶を父母たちにした。と同時に、さっとその獅子が小さく丸まった。一頭が、分割された。赤い頭を外し、ひょいと貴史に渡したのは確かに美里だった。貴史が自分の肩をもむような仕種をし、妙に笑いを誘った。

重かったんだろう、きっと。

「なるほどね、ふたり、一組」

「そんな露骨にクールに言わないでもいいでしょうが、ねえ、立村もそう思うよねえ」

上総は黙って頷くだけにとどめた。貴史の肩に肩車してもらって、獅子の頭を振りつづけられるような奴は、青濁中どこを探したってひとりしかいやしない。

派手な演出の授与者入場に先生たちも苦笑しつつ拍手を送ってくれていた。

憤って「やめろ！」とかわめく大人もいなかった。

誰も、ヒステリックに「どういう教育してるんですか！」なんて叫んだりしなかった。

「それでは、卒業証書授与に参ります。代表の生徒は壇に上がってください」

場が落ち着いた後、厳かにマイクで促され、八人はそのまま校長先生のいる壇の上に昇った。一組ずつ前に出て行き、拍手とともに全員分の卒業証書を受け取るのだ。

——もし、俺が何ごともなく評議委員長のままでいたとしたら。

——英語の答辞なんてやることにならなかったとしたら。

これからの卒業証書授与は自分の役割だったはずだ。まちがっても今のような仮装入場なんて演出を考えたりはしなかっただろう。できるだけ無難に終わらせるよう心を砕いたことだろう。しかし、誰がこんなこと思いついたのだろうか？ここまで考えてふと、上総の記憶にちらつく蝶のようなものを見た。

——これってもしかして、おととしの、全校集会の時の、あれか？

左の耳に神経を集めた。もちろん感じることはない。ただ確かに二年女子の中で、杉本は座っているはずだし、あの場面をしっかりと見守っていたはずだ。同じくじゅうたんをしいた体育館の中でスポットライトを動かしながら、二年前の六月、上総は杉本梨南から新井林健吾と佐賀はるみを巡るいざごぎについて初めて打ち明けてくれた時。新井林が佐賀をエスコートし、その手に騎士のごとくかがみこみ、口付けをした姿をふたりで見つめたはずだった。そう、杉本が企画した青大附属中学ファッションショー。その場にいた天羽たちが今こうやって、焼き直してくれたのがその場面。

——杉本、見ていたろうか。

振り返ることもできず、上総はそれぞれのクラス代表が証書を受け取っていく姿を見つめ続けるだけだった。やがてD組まで終わり、特に目立った一発ギャグを放つこともなく終わろうとした寸前、天羽と貴史がいきなりすすっと舞台のど真ん中に進み出て、

「では、みなのお客、まずは卒業を記念して、三本締めと参りますか、ではみな起立！」

先生たちの驚きなんて全く無視したまま両手であおった。貴史も一緒に手を叩きながら、「先生たちも、お父さん、お母さんも、どうぞ一緒に！ ほらほらほらほら、みんな立てよな」

相変わらずの明るい声でもって、二階席に呼びかける始末だ。爆笑と同時にがらがらと椅子を押しやる音が響き渡った。しかたなく上総も立ち上がった。なんだか空気が明るくふわふわしていく中、自分だけが重たいままだった。

天羽がふたたび、音頭取りに戻った。そういうことになっていたのだろう。

「では、お手を拝借、いよーおっ！」

ちゃちゃちゃん、ちゃちゃちゃん、ちゃちゃちゃん、ちゃん

「よおっ！」

ちゃちゃちゃん、ちゃちゃちゃん、ちゃちゃちゃん、ちゃん

「いよっ！」

ちゃちゃちゃん、ちゃちゃちゃん、ちゃちゃちゃん、ちゃん

交互に合いの手を入れる天羽と貴史。手締めをしている間にいつのまにか他の代表たちも集まって来ている。美里も、近江さんも、みな揃っていた。みな楽しげに笑いあい、時折手を振っていた。難波だけがポーズを取って意味不明の笑いを取っていたけれども、おそらく本人は気付いていないだろう。明るく笑顔なのはやはり更科だった。シルクハットをなぜか二階席に向かって放り投げた。たぶん、誰か受け取り役の人がいるのだろう。

「ありがとうございましたあっ！」

最後の締めはやはり天羽だった。

今回、本当は天羽に卒業生代表の答辞を読ませるという話があったらしい。前回の答辞が本条先輩だったこともあり、評議委員長を代表にするのが筋ではという意見が通っていたからだった。しかし天羽は何か考えることがあったらしく、あえてそれを断り卒業証書授与代表を選んだ。なぜなのか理解できなかったけれども、今この手締めを見せてもらってすべて納得した。天羽は、この瞬間にすべてをかけていたのだ。きっと。

——あいつらしいよな。

上総はゆっくりと両手を打ちならした。

——天羽は後期評議委員長であることよりも、三年間A組の男子評議だったことが一番の誇りだったんだ。俺なんかと違って、評議委員長の座になんて、あいつ、拘ってなんていなかったんだ。だから、なんだ。

卒業式典はまだまだ続く。次は在校生代表の送辞のはずだ。二年男子席から人が動く気配がした。予想通り、新井林健吾が右端の通路に出て、桧山先生と何か話をしながら待機していた。

式典前に手渡されたプログラムには、「在校生代表送辞 2年B組 佐賀はるみ」と印刷されていた。

「在校生代表送辞。二年B組。新井林健吾」

訂正の放送がなされた後、新井林健吾が威風堂々脇から壇に上がった。周囲からはやはりざわめきが広がり、中には「あら、女の子じゃなかったの」と囁く父母の声も上から聞こえてきた。

「りっちゃん、知ってた？」

静まり返る直前、南雲が上総に尋ねた。

「一応な」

予定では三分程度で終わるはずだと聞いている。原稿は新井林が用意したのか、それとも佐賀が書いたものを読み上げるのか、それはわからない。もっとも新井林の「正々堂々」たる言動を知っている上総としては、おそらく前者のくくりであろうと見積もっている。さすがに本条先輩のような派手な演技なんぞは見せないだろう。ただ新井林の場合、いろいろな場面において、大勢の前で演説をぶつことが多々あった。緊張して声が上ずるなんてことはない。たぶん誰も、あいつがしくじるなんてありえない。

上総は両手を膝に置いたまま、背を引いて壇上の新井林健吾を見上げた。

新井林は送辞の細長い原稿を開き、机に広げ、マイクに覆い被さるようにして、

「三年生のみなさん、ご卒業おめでとうございます」

まずは無難に祝いのことばを述べた。さっと顔を二階席に向けた。

呼吸ひとつおいて、

「本来ならば、ここで青澗大学附属中学生徒会長である佐賀さんからお預かりした原稿を読み上げるところであります。今日は予定を変更し、あえて僕なりの言葉で卒業生のみなさんへのメッセージを伝えさせていただきます」

いきなり新井林は机の上に広げた原稿らしきものを、さっとひっくり返した。

両手をマイク挟むようにしてとんと突いた。

いきなり目をぱちぱちさせている先生たちが、それでも身動きできずにいる。

——新井林、あいつ、根回ししてないのか！

上総は桧山先生の姿を探した。どうやら口を半開きにしつつも、やはり教師らしく落ち着いた様子だった。ということは、もしかしたら桧山先生にだけ話をしておいたのかもしれない。また桧山先生も新井林の意気に共感し、応援して送り出したのかもしれない。

その音を拾い、一瞬マイクがハウリングした。掛け声が上総の後ろ側、二年生男子席の方からかかった。

「よっしゃ、健吾、いいところ見せてやれ！」

女子席からは拍手が沸いた。そこから伝染するかのようになり、一年、三年席、そして二階の父母

席を合わせて嵐のように館内を覆った響き。頭に降り注ぐ拍手になぜか、身体がこわばってきた。背中から心臓あたりにその感覚を受け止めた。新井林ひとりの言葉でもって、なぜここまで、空気がふくらんでいくのか。熱くなるのか。

——あいつなんで、俺に挨拶してきたんだろう。

今朝、新井林が上総に対して示した、後輩としての凜とした姿。

壇上で言葉を発しようとしている新井林に、上総は目を瞑りたくなかった。もちろん、目を閉じず、そのまま新井林の即興送辞を受け止める準備をした。

「僕は在校生代表として、この場を借りて、卒業生みなさんに伝えたいことがあります」

評議委員会において、何かの意見を口に出す時と同じく、新井林健吾は両手を机の上におき、身体を支えたまま前かがみとなった。視線は三年生席を指している。心なしかその目は、中央通路端に席を置く上総の方に向けられているような気がしてならなかった。

「僕たちは、もっと早く、あなたたちと真剣に、すべてにおいて話をしたかったと後悔しています」

佐賀はるみが生徒会長として用意したとは思えない「送辞」を、新井林は全身刃にし、寄らば斬るその気合を滾らせ、語り始めた。

先生たちもみな、見守る方を選んだようだった。やはり本条先輩の前例があつてこそだった。

「僕は主に評議委員会において、それを感じてきました」

言葉をとぎらせながら新井林は続けた。

「一年の頃から僕は、この学校がぬるま湯につかった退屈な場所だと感じてきました。評議委員会に参加し、たくさんの先輩たちと接する機会を得て話をするたびに、どうしてみな本当にやりたいことを見つけ出そうとしないのか不思議でなりませんでした。それが青大附中のカラーだとしたら、僕はそのいいかげんなカラーを塗り替えたい、そう思って今まで評議委員会に携わってきました。そして、それはある程度、成功していたと思います」

——確かにな。今では「青大附中スポーツ新聞」来年から部活動化されるし。

「がむしゃらに青大附中の評議委員会、およびこの学校をよくしたいという思いで僕は走りつづけてきたつもりでした。それについてこれないように見えたたくさんの生徒たちに怒りを覚えたこともありました。また、全く考え方の違う先輩たちを軽蔑したこともありました。ですが、今になり、僕は激しく後悔しています」

——何をだよ。

後悔するようなことなんて、していないじゃないか。

新井林はずっと、通路側男子席向きに身体を向けた。ほんのかすかな角度だった。

「きちんと、僕は先輩たちと、腹を割って話すことを求めるべきだった、それを先輩たちが卒業する直前まで気付かなかったことに、僕は憤りすら感じています」

堅苦しくも、また一方で正直すぎる語り口に、上総は戸惑っていた。いつもの新井林が口にするようなことでは決してない。男子同士でここまで本音を話そうとするのもふつういない。もちろん、全校生徒を前にした送辞として、はたしてこれがふさわしいものなのかどうかもわから

ない。なぜこんなに、感情を吐露しようとするのだろうか。しらじらしいお祝いの辞でなぜ、まとめようとしないのだろうか。

新井林は一呼吸置くと、今度はぐいと、顎を引き背を伸ばした。原稿を読む気配はなかった。

「僕がこの学校で今学んでいることは、自分の正義がすべて正しいわけではないという、大変簡単な真理です。僕自身、この学校に入ってからたくさん考え方の違う先輩たち同輩たちと出会い、いろいろとぶつかり合ったりもしてきました。最近だと、生徒会と評議委員会を通じての激しいやり取りなど、僕にとっては納得いかない考え方をも、受け入れざるを得ない場面に直面したりもしました。しかし、それは僕が一方的な考え方しかできなかつたから、理解できなかつただけであつて、もっとたくさんの方を見方を学ぶことができているならば、もっと理解し合えたのではないかと、そう思えてならないのです」

——一面的な考え方、か。

まるで自分に向かって言われているような言葉だ。自意識過剰と笑われそう。上総は新井林の言葉をもう一度理解しようと勤めた。いつのまにか隣に戻って来ていた貴史が、たいくつそうにふくらはぎのところを搔いていた。

「正しいことは必ず守られなければならない、そう思い込んでいた僕でしたが、評議委員会で出会った幾人かの先輩たちによって学んだことがあります。僕にとって真実がひとつであっても、見方と考え方と経験が違えば、また新しい考え方が生まれてくるということです。そしてそのことを理解するために、僕は先輩たちと戦うよりも、もっとしなくてはならないことがあつたのに気付いたのです」

——なんだよそれ。

ちくちく、心臓のところが刺されるような痛みがある。季節はずれの蚊のようだ。

「それは、先輩たち、あなたたちともっと、話をするべきだったということです」

一秒黙り、また続けた。

「考え方が違う人、善悪自体の認識が異なる人、たくさんの方がいる中で、僕はひとつの真実だけを信じてつっぱしってきました。しかしそれによって、全く違う真実を持った人を蹴散らしただけなのではないかとか、もしかしたらこれから先全く考え方の違う人たちと出会った場合、ただその人たちを無視したり軽蔑したりしていけばいいのかとか、いろいろなことを考えました。僕にはまだ、その人たちとどう接していけばいいのかとか、そういう人たちとどうやっていい関係を結んでいけばいいのかとか、まだ理解できていません。そういうことを、僕はもっと、たくさんの方において、先輩たち、特に評議委員会の先輩たちに教えを乞うべきだったと、今更ながら反省しています」

評議委員会、という部分で、少しスピードを落とした。ほんのわずか、上総が気付く程度だった。

「本来ここでは、みなさんのご卒業をお祝いすべき挨拶を行うべきでした。それをあえて代役の僕が変更し、好き勝手なことを発言してしまったことに対しては、会場すべてのみなさんにお詫

びします。ただこれだけはどうしても言っておかねばならないと思ってます」

そろそろ締め合図だろうか。新井林は一気に言い放った。

「三年生の先輩たちに、僕はまだまだ学びきっていないことが山のようにあります。ですからこのまま拍手で見送るようなことは決してしません。かといって青大附中に戻って来てほしいとも思いません。僕たち下級生たちはこれから、青大附中をよりよくするために盛り上げていこうと心に決めています。先輩たちからもっと聞きたかった話、学びたかったところを僕たちの方から押しかけていって、とことん腹を割って話をさせていただきたいと思ってます。この学校が附属でよかったと、僕は心から思ってます。今、気がついたことは遅すぎるといえば遅すぎますが、でも、あえて僕は先輩たちにこれから、たくさんのことを学び合いたい、そう思っています。ご卒業おめでとうございます、そしてこれからも、どうか僕たちと一対一で向かい合い、正々堂々と本音をぶつけ合える関係でいてください。僕達下級生たちも遠慮はしません。これからも、よろしくお願いします。在校生代表、二年B組、新井林、健吾」

マイクに頭をぶつけそうなくらいの礼を深深とした。天から地から、嵐のような拍手と二年生サイドから「健吾かっこえー!」「新井林、男だ、決めたな!」などなど、ふたたびコンサート会場の乗りが甦った。二階席ではオペラ会場のアンコールを求める客のような顔して、「ブラボー」とか叫んでいる父母もいる。何かを勘違いしているようだった。はたしてあの集団の中に、我が父母は混じっているのだろうか。

——完璧だ。

上総は拍手をしながら、腹から溜息をついた。

隣で貴史が、振り返ってきたC組の男子を相手になにかしゃべりかけているが、聞き取れなかった。新井林が壇上で丁寧に、読まなかった送辞をたたみなおし、それをマイク脇に置いた。真正面を向いたまま、正面の階段から下りてきた。体育館最奥をじっと見つめつつ、茶色いじゅうたんを少しだけ歩き、ふと立ち止まった。三年男子席に少し寄るような形で、B組のあたりだろうか。藤沖の席が空いているのが斜め右に見えた。

新井林が真正面から視線を、じっと上総に向けた。三年D組男子席、最後尾。

上総と一点のずれもなく視線をかち合わせた。

拍手のざわめきが一瞬、はたと止んだ。

直立不動の姿勢をとったまま、新井林は上総に九十度、体を曲げて一礼した。一秒、確かに動かなかった。その後静かに背を伸ばすと、そのまま二年男子席へと戻っていった。

「立村、ずいぶん、やるじゃねえか」

くいと肘でつかれた。我に返った。新井林が礼をしている間からたった今まで上総の中で体内時計が止まってしまったようだった。貴史がにんまり笑って親指を立てている。

「苦労したかい、あったじゃねえか」

「そんな、違うだろ」

険の奥にまだ、新井林の凜とした眼差しが残っている。なぜ、あんなことをしたのか、わかるようでわからない。感じてはいるのだが、それを正確にあらわす言葉を、上総は知らない。気付かないのか貴史はさらに言いたい放題つぶやいている。

「あの新井林をだぞ。敬語遣わせてな、『さん』で呼ばせてな、最後はきっちりこうやって礼させたんだぞ。こりゃあ上出来だと思うんだけどなあ」

「違うよ、ただ評議委員会の先輩だったから」

「だったらなんで天羽に挨拶しなかったんだ？」

「天羽はA組の先頭だから」

「だからお前は最後までガキのまんまだっていうんだよ。ったく、先が思いやられるぜ。古川じゃねえけどお前、お坊ちゃまのまんまだなあ」

——勝手にガキ扱いするなよな。

今日は卒業式だ。自分の出番も近い。だから文句も言わず、黙って流す。

上総は内部の胸ポケットにしまいこんである二通の英語答辞を、そっと押さえた。コサージはまだ、ずれていなかった。

やはり新井林には、かなわない。

去年の自分を思い起こすと、その答えしか出なかった。

本当だったら自分が、本条先輩に対してそうすべきだったこと。

本条先輩がずっと、上総に求めていること。

結局上総は、多くのものを失って初めて、そのことに気付いた。自分の稚拙な自尊心にかこつけて、頼るべき時に頼らなかった、それゆえの結果が今の自分だ。後悔はしてない。でも、もし一年前の自分に、新井林や天羽と同じく振舞えるだけの器量があればと思わずにはいられない。さっき証書授与の三拍子でよぎったものが、新井林の言葉と一緒に甦ってきた。

——俺はやっぱり、あいつには、かなわない。

なぜか悔しさはなかった。ただ、とつとつと、言葉がよぎるだけだった。

——新井林がもし、おしかけてきて俺と突き詰めて話をしたい、そう言ったら、きっちりを受け止められるだろうか。あの完璧な新井林に。俺の欲しいものをすべて持っている後輩に。こんなどうしようもない馬鹿先輩に対して、礼のできるあいつに。

上総はもう一度、唇をひきしめた。まだ誰もいない壇上を見上げた。

少しざわめきが残っている段階で上総は席から離れた。次の次が自分の英語答辞となる。すでに左端に並べられた椅子には、藤沖が腰掛けている。両手を膝に置いたまま握り締め、心を落ち着けようとしている様子だった。元生徒会長なのだし、こいつも壇上で話をするのはなれていないはずだ。緊張しているのだろうか。

話し掛けるわけにもいかず、上総は胸の隠しポケットから、答辞を取り出した。二枚重なったのを藤沖に見られ、ちらとげげんな顔をされた。言い訳する必要がないのが救いだっただ。

正直なところ、藤沖の読む予定の原稿はありきたりの内容だった。いわゆる、先生たち、およ

び父母への感謝をさらさらと述べたにすぎないものだった。藤沖の国語能力でいくともっときちんとした内容を書くことができると思うのだが、おそらく何らかの圧力がかったのだろう。もしかしたら上総の英語答辞で訳をこしらえるため、あえて易しい文体にする必要があったとか、そういった兼ね合いもあるのかもしれない。

——さて、俺はどうする。

女子席側で上総はまず、三年A組女子の一席が空いているのを確認した。西月さんの分だ。やはり来なかったのだろう。次にB組女子の真中らへんに目をむけた。轟さんが上総の方にちらと視線を送り、親指を立てて笑ってくれた。こちらも頷いた。もっと後ろ側をみやると通路側に近い席で霧島さんがなぜか、髪の毛を長くたらしただまま座っていった。胸元のコサージュを覆うくらいの長髪で、少しウエーブがかかっている。少し俯き加減だった。最後に女子席、D組に目を向けようと思ったが、下手に視線がかち合うとまずいのであえて見ないことにした。

「卒業生代表答辞、三年B組、藤沖、勲」

マイクで名を読み上げられた藤沖は、すっと立ち上がり、静止した後、きちっと足をかけて回り壇に上がった。すぐに答辞の原稿を開こうとする手の動きを見せた。さっきの新井林と同じような目線で二階席を見上げ、次にまた一階席を見渡した。心臓がまた、ちくりとしてきたのは気のせいだろうか。上総も息を飲み見守った。何かが起こりそうだ。

——まさかと思うが藤沖、新井林に釣られてなんてことないよな。

上総の予想は、卒業式典関連に関していえば、すべて完璧に、当たっていた。

「在校生のみなさん、先生、および父母のみなさん！」

こんな読み始めではなかったはずだった。藤沖もやはり、答辞原稿を見ず、マイクをいきなり片手に持ち、大きく深呼吸をした。その音を拾って、さっきの新井林よりもひどいハウリングの音が響いた。

「先ほどの在校生代表、新井林くんの熱く激しい言葉に、僕は本来自分がすべきことに気がつきました。今日話すつもりでいた答辞の原稿は、本日ここに納めて帰ります。今日は僕なりに、新井林くんを含めたくさんの人たちの前で、本当の意味での答辞を述べたいと思います。諸先生には、ご迷惑をおかけします。申し訳ございません！」

口から流れ出した言葉に嘘はなかった。上総が手元に持っている、英語の日本語訳とは全く異なる内容が藤沖の唇から流れ出し、しっかりとマイクで受け止め、体育館全体に響き渡っていた。もはや誰も驚かない。これが青大附中の卒業式。来賓も父母も、もちろん教師たちもみな、藤沖を見守り応援しているのが伝わってきた。

「僕はこの青潟大学附属中学に入学してから三年間、たくさんの思い出を作りました。何よりも思い出に残っているのは、ほぼ二年半関わってきた生徒会活動につきます。今だからいえますが、僕にとって生徒会というのはいわば応援団を作るための足がかりのようなものであり、そこにすべてを費やすだけのエネルギーは持っていませんでした。ですが、偶然生徒会にかかわり、たくさんの人たちとの出会いによって、僕はかけがえのない友情と学びを得ることができました」

さすが生徒会長、いつもの全校集会と同じ乗りだった。腹から堂々と声を出しつつ、決してマイクに余計な音を入れずに話している。

「僕が入学した当時、生徒会はいわば、先生たちの御用機関と呼ばれていました。つまり、先生たちの言うことだけをそのまま素直に実行するだけの存在と蔑まされていたのが、現状でした。また、すでに卒業された先輩たちが培った委員会活動の歴史に押しつぶされ、生徒会はなかなか自立できない状況にありました」

否定はしない。評議委員会に全権を乗っ取られていたようなものだ。それにしても藤沖は何を言い出すつもりなのだろう？ なんとなくいやな気分がするのは、上総がまがりなりにも評議委員だからだろう。

「僕は最初、青大附中に応援団を設立するつもりで生徒会に関わりました。しかし、生徒会の活動を通じ、本来全校生徒のために活動すべき生徒会や委員会活動がただ一部の生徒たちのサークルとして成り立っていることに危惧を覚えました。部活動で本来行われるべき内容を、青大附中では委員会が受け持っていました。委員会は一クラスに二人ずつ、となると本当に参加したい生徒が零れ落ちている可能性もないとはいえません。それは生徒会も同じです。役員選挙で落ちてしまえばそれまでです」

藤沖はしばらく、青大附中独特の生徒会および委員会活動について語りつづけた。すでにそれだけで予定の時間を軽くオーバーしている。喋り出したら止まらないタイプの男ではないのだが、やはり、新井林の送辞で火がついてしまったのだろう。観念するしかない。

——まあいいさ。これが青大附中なんだしさ。俺はやりたいことをするだけだしさ。

最初から上総は、人前でばれてしまうようなパフォーマンスなんてするつもりはない。誰にも気付かれないように読み上げるだけだ。ことは、その後だ。

青大附中内のいわゆる「大政奉還」。

生徒会に評議委員会が、学校の中心部としての権限を「譲り渡す」ということ。

上総の計画では合同でやろうという案だったはずだが、佐賀はるみ生徒会長の下で全権争奪に近い状態になった事実。全校生徒のどのくらいが知っているのだろうか。藤沖も勢いづいているとはいえ、かなりごまかしつつ語っていた。生徒会が生徒会らしく、自分たちの意志で動くことができるようにするために、委員会の上層部と相談し、全員手と手を取り合い、

「参加したいメンバーがみな、いろいろな形でやりたいことに没頭できるよう、僕は精一杯の努力をしたつもりです。もちろんそれがすべて正しいとは思えません。ですが、今の僕にはこれができる限りのことだったと、言い切りたいと思います」

とりあえず、聞いてはくれているようだ。上総ひとり、いじけたくなるのをこらえている。

「さきほど、新井林くんは僕たち三年生に向かい、『もっと腹を割って話をしたかった』という強烈なメッセージを残してくれました。自分自身を振り返ると、出来る限りのことをしたとはいえ、下級生のみなさんにそこまで真っ直ぐ向いていたかどうかは疑問です。おそらく、新井林くんもそのことを訴えたかったのでしょう。どうだよな、新井林？」

いきなり藤沖が呼びかける。新井林の顔は上総の席からは伺えなかった。

「今、この場で僕、藤沖勲は、この場にいる全校生徒、および父母のみなさん、および先生たちに誓います。そして新井林、お前も聞け！」

拳を振り上げ、ゆっくりとそれを開き、「選手宣誓」のポーズを取った。

「この三年間で語りきれないことがあるのなら、俺は正々堂々、受けて立つ！ いつでも追いかけて来い。そして、その時は俺たち卒業生一同も、さらにパワーアップして後輩たちを迎え入れ、とことん腹の底まで語り合うことを、誓います。三月十五日、卒業生代表、藤沖、勲」

繰り返された拍手だけではない。その奥からさらに猛獣の吠えるような声が低く聞こえてきたようだった。足を踏み鳴らす生徒もいる、その奥にはさらに二年 全員が総立ち状態だった。男子席端の来賓たちも、先生たちも、みな藤沖に向かい惜しみない拍手を送っていた。もちろん二年 B組男子全員も、率先して立ち上がっている。難波が気合一発、

「藤沖、よくやった！」

感極まった声で絶叫している。

——難波、あいつあんな事する奴じゃないのに。

やはり真中の段を降りて藤沖が席に戻ろうとするのを B組男子たちはみな、握手と背中たたきあいでもって迎えていた。藤沖もまた、ああいう風な迎え入れ方をされるタイプの男ではなかったはずだった。少し照れくさそうに笑いつつ、握手に答える藤沖。

——誰もが、みんな、大人なんだ。

上総はそのざわめきから完全に離れたところで座っていた。生徒代表の答辞はあと自分だけだった。英語答辞の原稿を膝に置いたまま、上総は二年生の女子席にそっと目をやった。ここから杉本梨南の姿を見つけ出すことはできなかった。が、顔を戻す拍子に三年 D組女子席中央に位置する美里と、完璧目が合った。周囲の盛り上がりとは珍しく離れたところで、美里も上総に唇一本結んだまま、頷いてくれた。

——ありがとう。それから、ごめん。

胸のコサージュに手を触れ、すぐに上総は立ち上がった。騒ぎを静めるのにまた時間がかかりそうだった。しかしマイクでのアナウンスはその雰囲気を一掃してくれた。

「英語答辞、卒業生代表、三年 D組、立村上総」

溜息のような、どことなく曇った雰囲気が館内全体に漂うのを感じた。

二通の答辞原稿を片手に、上総は舞台脇の階段を踏みしめた。

前もって貴史には、

「まかりまちがってもはやしたり掛け声かけたりしないように」

と、言い含めておいた。ついでに南雲にも。舞台上から壇に向かい、さっと体育館内を眺め回した時、誰一人そのようなことをする奴はいなかった。新井林、そして藤沖、ふたりの送辞答辞勝負が強烈で場の盛り上がりも半端でなかっただけに、その静けさは際立った。いわば、ごく普通の集会に逆戻りしたというべきか。

フライパンに残っている油がたちたち鳴る程度の、ささやき声のみ。見知った顔ばかりが並ぶ三年席、ぽつりぽつりと知った顔が覗く二年席。上総はすぐに、二年女子席の二列目中央に目をやった。そこしか、視線を向ける気はしなかった。自然と身体が斜めに向いた。

片手に持っていた二通の答辞原稿を台に置き、うち一通を黒塗りの盆に載せた。

新井林がへたくそに畳んだらしい膨らんだ送辞と、藤沖が一切手をつけなかった答辞とが二通重なっていた。その上に上総はきちんと、そろえて載せた。

——俺は、自分のやりたいことを、し通すだけだ。

全校生徒のことなどどうでもいい。クラスの連中がどう思おうが関係ない。いっそ白けてみな眠ってしまっても構わない。ただひとつだけ、自分のできること、残せることをするだけだ。

上総は原稿を開かぬまま、マイクに向かい、原稿をそのまま暗誦した。

ごく簡単なことだった。

英語に限らず他国語を話す時には無意識のうちに、言葉の周波数を切り替えてしまう装置が、自分の中に備わっている。それさえきっちりとあわせれば、口で話していることとは別のことをひとりで考えられる。誰でもそういうものだと思っていたがどうやらそれは上総だけの能力らしかった。

——僕はこの学校に入り、たくさんの思い出を得ることができました……。

藤沖が本来、壇上で話すべき内容だが、あまりにも簡単でかつあっさりした内容に拍子抜けしたのを覚えている。結局、新井林に挑発されるような形で内容としても完璧すぎる答辞を返した藤沖。本来話すべき内容がついさっき語ったものだとするならば、今上総が無意識のうちに語りつづけている内容は全く意味ないものに違いない。

——学校祭、体育大会、修学旅行、そこで語り合った友との語り合い、また先生たちから教えてもらったたくさんの学び……。

現代英語とは異なる前置詞と熟語をいくつか取り混ぜつつ、もう一方の意識で上総は様子を伺った。観客たる三年生は特に上総の企みを見抜くでもなく、ぼんやり拝聴しているだけ。また、二年たちも「あいつ違う発音してるぜ」みたいなつつこみを入れる気配もない。おそらくこの学校には帰国子女がかなりいるはずだし、わかる奴には明らかに違いがわかるはずなのだが、まったく反応する気配もない。

——僕は、この学校に入ることができて非常に嬉しく思いました……。

頭の中のテープレコーダーを回しつつ、視線を三年席女子に向けた。ひとり、しっかり耳を澄ませてくれている人がいるはずだった。

——僕たち三年生は、あなたたちが教えてくれたたくさんの教えと愛情を胸に、三年間守ってくれたこの学びやから旅立ちます。お父さん、お母さん、そして先生諸氏、僕たちをいつも見守ってくださってありがとうございます。また一緒に学んだたくさんの友へ、どうかこれからも歩いていきましょう。

実に単調で、つまらない内容だ。藤沖よ天晴れだ。よくぞこんな意味のない美辞麗句を破り捨てて、自分の言葉で答辞を述べたものだ。素晴らしい。勝手に回る口をそのまま動かしつつ、上総はもう一度、三年と二年それぞれが座る席に目を走らせた。

何度か、評議委員長として見下ろしたことのある光景だった。

高みから見下ろす快感に、いつのまにか慣れていたのかもしれない。マイクにしっかりとおさまり響いていく声は、自分が聞きなれているものと違っている。練習どおり、張りのある声で体育館内に響き渡っている。

そろそろ締めだ。上総はもうひとつ息を次いだ。

ここからの部分にあえて、手元の答辞に記述されていないものだった。

大嶋教授にも、あえてこの部分は十九世紀の英語訳をいれてもらわなかった。あくまでも上総のアドリブで行くつもりだった。誰にも見せていない、中学二年レベルの英作文程度。難しい単語なんてひとつも使っていない。青大附中の英語授業でヒアリングをそれなりに経験している生徒ならば、かならず伝わる言葉のはず。

現代英語、きわめて教科書通りの言葉で、きちりと伝えたい言葉だから。

上総が口を開こうとしたその刹那、いきなり右側の教師席に動きがあった。発しようとした声よりも、その動作にみな、どよめいた。

——何があった？

喉を震わせる直前で止めた。

誰かが貧血でも起こしてぶっ倒れたのだろうか。最初そう疑った。次の推理に移る前にその立ち上がった教師が、天敵・菱本守だと認識し、ターゲットが自分だと確信した。

——最後の最後まで、なに邪魔する気なんだ！

菱本先生が上総にからんでくる時はいつも、正義の味方らしい顔を用意してくる。だから周囲の連中はみな、受け入れない上総が悪いと一方的に攻め立てる。違う、菱本先生は誰もが納得いくような用意をすべてした後で、たっぷりと上総を幼児なみに扱おうとするだけのことだ。三年間、飲み込まれぬようありとあらゆる策を練ってきた上総だけでも、今この演壇でたったひとり、取り残された自分、どうやって身を守ればいいのかのさう。

放送委員に声をかけ、素早く司会用のマイクを受け取っている。

二階席でもまた、父母の囁き声が降り注ぐ。

「今、会場にいらっしゃるみなさんに、どうしてもお伝えしたいことがあります」

聞き飽きた、鬱陶しくも暑苦しい、青春野郎の発言が響く。教師の言葉には誰も逆らえない。上総も最後の言葉を伝えられないまま、立ちつくすだけだった。

「会場のみなさんの中には、今、立村くんが暗誦した英語答辞の言葉遣いに一部、疑問を感じた方もいらっしゃるかと思います。実は今回、英語答辞を作成するにあたり、青潟大学文学部教授でいらっしゃる大嶋先生のご教授を仰ぎ、現代英語とは若干異なる、十九世紀初頭の古い言葉遣いを用いることにいたしました。そのため、現在の英語教育では学ぶ機会のない古い単語なども混じっております。このアイデアは、読み上げた立村くんの発案です。教師として、また、担任として、非常に、嬉しく思うことのひとつであります」

ひとりで感極まっている様子は、口許のがさがさ音でもって伝わってくる。髭、きちんとそってきたんだろうか、マイクが雑音をしっかり拾っている。呼吸の音すらくっきりと聞こえるのが耳障りだ。

「父母のみなさまおよびご来賓のみなさまからも、なぜ今回、英語答辞を、というお声をたくさん頂戴しましたが、三年担任たる私といたしましては、青潟大学 附属中学において、素晴らしい語学能力を持つ立村くん到最后をきちんと締めてもらうことにより、ひとつの学びの集大成をみなさまにご覧いただきたかった、その思いがあります」

全身がこわばってくる。しかし動けない。上総は片手を机に置いた。二通の原稿のうち、一通は持っておける予定のもの、しっかり持ち直した。ざわめきとかすかな拍手の気配を感じるが、まだしゃべり足りないであろう菱本先生の言葉を館内一同、みな待っているかのようだった。

——あの野郎、最後の最後まで邪魔しやがって！

殺意とは、この刹那に沸いたものを意味するのかもしれない。

身体の中でふつつつと沸いてくる荒々しい心臓の鼓動と、顔まで昇ってくる血液の流れとが混じりあう。あと一センテンス残っているというのに、なぜ菱本先生はこんなわけのわからないことを言い出したのだろうか？ いや、なによりも。

——なんで大嶋先生と相談したこと、ばれてるんだ？ 誰が、ばらしたんだ？

考えられないことではない。もちろん大嶋先生は青潟大学の教授であり、当然中学教師たちとも接点はあるだろう。確か、英語科の桧山先生が大嶋先生のもとで卒論を書いたとも聞いている。「E組」が学校不適合者の溜まり場だけではなく飛び級授業の受け皿として考えれば、そこから大学の先生たちと話を通じさせることが、ないわけでもないだろう。

もちろんそれはしかたないのかもしれない。しかし、なぜ。

——なぜこんな場で、こんなお涙頂戴のことしゃべらなくちゃならないんだ。

——壇上では何もなく、終わらせるつもりだったのになんでだよ！

あくまでも壇上では、静かに十九世紀初頭の英文で読み上げ、気付かれぬうちに舞台から降りるつもりだった。しかし、このままでいくと上総は、「優れた語学能力を見込まれて、今回あえて用意した卒業式用の余興」として見られることになる。それも担任、菱本先生が三年間苦勞して育て、なんとかここまで育てくれたという感動のもとにだ。

わからないわけでもないし、しかたないことでもある。覚悟はしている。ただ、あの天敵・菱本

の手のひらで転がされたままというのだけは。

——冗談じゃない。あいつにだけは幕をひかせたくない。

上総は握り締めた片手をゆっくりと緩めた。

——俺がすべての片をつける。邪魔するな。

備え付けのマイクを両手で外した。

「菱本先生、まだ終わっていないのですが、続けさせていただいてよろしいですか」

腹の奥底まで怒りを押し込み、上総は呼びかけた。

本当の意味での驚きなのか、天から地から、沸いてくるざわめき。

片手に持ち替えたマイクを近づけた。本条先輩から習った通り、口を近づけ過ぎず、雑音を拾わぬように、そして息を吸い込む音が響かないように。

英語はもう使わない。日本語でいく。

「今、菱本先生にご紹介いただきました通り、僕が今、読み上げた英文答辞は、大嶋先生のご指導のもと、書き上げたものです。大嶋先生には僕のわがままを受け入れていただくことができ、大変感謝しております。ありがとうございます」

いきなり日本語で語り始めた上総に、また私語交じりの空気が揺れた。

「ただ、これだけは付け加えておきます」

英文にまとめた一センテンスを、日本語訳にして即興で述べた。

「国語における古文のような文体で答辞を作成してはどうか、と提案してくれたのは、二年B組の杉本さんです。僕自身はただ与えられた英文を読むだけでは満足できないという感情しか持っておりませんでした。具体的な形として提案してくれたのは、杉本さんのお蔭です。誰よりも、この場で杉本さんに感謝を述べたいと思います。ありがとうございます」

二年女子席、舞台から見下ろして右側前方中央。

杉本の姿は探さなくてもすっきり見えた。

いつものポニーテールで、きっと無表情のまま舞台をにらみつけていたに違いない。

目の雰囲気も口許も、上総の視力では捉えきれないけれども、それだけは感じ取れる。

「三年D組、立村上総。以上」

言い切った後上総はマイクを両手で、元に戻した。机から一歩足を引いて、一礼をした。片手には一通分の答辞原稿を持ち、もう一通は黒い盆の上に残したまま。拍手が父母席中心に鳴り響いているのだけは背中を感じ取れた。あの中に両親が混じっているだろうか。はたして帰ってから母に妙なこと言われないうだろうか。知ったことじゃないが、今日はひとりで街に繰り出して時間をつぶして帰ろうと決めた。父母席および教師席、来賓席の先生たちがスタンディングオペレーションをしている中、生徒たちの席だけが質の悪い不協和音交じりの拍手を溢れさせていた。拍手の質、それはさっき、新井林と藤沖、また卒業証書授与の際の盛り上がりと比較すればよくわかる。大人には理解できない程度の、あきれ返った雰囲気と哀れみとが交じり合った、壊れた空気だった。

——あとは、俺の計画通りだ。狂いなし。

正面の階段を降り、来賓席と教師席に一礼をした。

菱本先生がいきなりハンカチを取り出し目を拭っているのに呆れかえった。完全に勘違いしている。訂正してやりたいところだがそんなの計画に入っていないので無視した。ちらと、狩野先生と目があった。笑いはないが、やわらかいものがすうっと流れてきたような気がした。一度背を伸ばし、上総はこげ茶色のじゅうたんを踏みしめた。一切、横に視線を逸らすことなく、ただ一点の場所を目指した。

早朝に確認した、杉本梨南の席。

女子二年生席、向かって右側、だいたい中央。隣の席は佐賀はるみだから空いているはずだ。目印はいらない。

杉本の姿がだんだん近づいてくる。顔もくっきりと見える位置に近づいてきている。

上総は両翼の三年生席までまっすぐ突っ切り、一度立ち止まった。平和な明るさに満ちている二階席に比べてなぜ三年席の、特に女子席が不穏げなのか、理由がわからないわけではなかった。しかも三年女子席の最後尾はD組だ。美里が座っている。おそらく、上総を見つめているに違いない。それをわかっていて、なぜ今からそれをしようとするのか。

——清坂氏、これで本当に最後だ。許さなくていい。ごめん。

何度も繰り返した詫びの言葉を、もう一度心に呟いた。

——みんな、俺のことを受け入れてくれるとか、何もしなくてもいいとか、そのままの俺でいいからもどってこいとか、やさしい言葉をかけてくれた。それはありがたいと思っている。三年間、仲間に入れてくれたことも、本当の俺には手に入れられなかった夢みtainな学校生活を送らせてくれたことを、感謝している。それは本当なんだ。だけど。

美里に言うのでもなく、誰に言うのでもなく、それは杉本以外の館内参列者すべてに。

——けど、俺はどんなに努力しても本条先輩のようにはなれなかった。

切々と響く、重たい言葉。

——今の俺のままでいいって羽飛、清坂氏、南雲、天羽、他の友だちみなそう言ってくれたけど、俺はそれが耐えられなかったんだ。贅沢かもしれないけど、俺は、やはり本条先輩のような、りりしい、人の上で堂々と歩いていこうとする、そんな人になりたかった。

胸が詰まる。言葉はぐるぐると頭の中を回転しつづけている。どこか切り離された自分の身体が二年女子席正面まで向かい、二列目にちんまり腰掛けているポニーテールの女子の前に立っていた。もちろん、一列、A組が邪魔する格好になる。

——どんなに、まわりの素晴らしい友だちがみな、俺を認めてくれても、俺だけはどうしても許せなかった。それがわがままだって、みな言うけれど、喉から手が出るほど欲しいものが得られない惨めさはたぶん、俺自身と杉本しかわからない。

杉本梨南がどんなに自分の能力を認めてほしかったか、切望していたか、どうして誰も気がつ

いてやれなかったのだろう。懸命に面倒をみてくれた駒方先生すら、結局は杉本の求めている「刺繍の腕」「家事能力」「美味しい珈琲や紅茶の淹れ方」などを褒めるにとどまり、学年トップの成績は一切評価しようとしなかった。成績よりも、人間性。それはおそらく正しいことなのだろう。それはよく承知している。でも、今の杉本が欲しいものはそんな奇麗事じゃない。上総が代わりに用意しようとした甘ったるい慰めでもない。杉本はただ、自分の持つ学業能力であり、明晰な頭脳を周囲に認めてほしかっただけ。できるならば、なりたい自分であった佐賀はるみと、その自分であれば愛されたはずの新井林健吾、そして完璧な理想像である関崎乙彦に、評価してほしがっていただけなのだ。

初めて出会った時から、わかりきっていたこと。

上総では身代わりになれないことだった。

——俺だったら、杉本に全部、欲しいもの、用意してやれるのに、俺ではだめなんだ。

——あいつが欲しがっているもの、全部、俺はわかっているのに。

——杉本が欲しいのは、能力があるっていう、そのお墨付きなんだ。俺が欲しがっていたものと、一緒なんだ。

わかっている。わかっている。それを求めること自体がふたりの我儘だと。

「ありのままの立村くんが」「ありのままの梨南ちゃんが」みな素晴らしいと口々に言う。

その人たちが見る自分像が、どれだけ上総と梨南の求める姿とかけ離れているか、どれだけそれが絶望的なことか、きっとわからないだろう。

その現実を上総は静かに諦め、大嫌いな「ありのままの自分」を受け入れてくれる人たちと接し続けることになるだろう。いつか本条先輩のようになりたい、その夢を忘れるよう勤め、貴史や美里が評価してくれる大嫌いな「ありのままの自分」に慣れるよう努力するだろう。それが大人になるということならば、それもしかたのないことだ。新井林や天羽、藤沖が見せた男らしさを見据えた今、上総ひとりが足踏みしているわけにはいかないのだから。欲しいものはもうもらえないのだ、しかたないのだと。

杉本にこれから与えられるのは、佐賀はるみに代表される「守ってあげるべき存在」としての友情、そして思いやりのみだろう。佐賀は生徒会長として、また元親友として心配りをしてくれるだろう。そして、誰もがその行為を認め、拍手することだろう。どんなに杉本が「そんなものほしくない！」と叫んでも、大人にならなくてはいけない以上、受け入れるしかない。悔しいけれども、それが現実だと上総は気付いている。自分が満足できない「思いやり」であっても、これから先杉本は、溜息とともに受け取る笑顔を身につけなくてはならない。百パーセントの「頭脳への評価」の代わりに、「手芸の才能」「お茶の才能」といった杉本にとってはどうでもいい能力への評価でもって、がまんしなくてはならない。どんなにくやしくても、これから大人になっていく上で、受け入れなければこの社会では生きていけない現実なのだ。

上総はこれからそれに耐える覚悟を持ち、生きていく。おそらく杉本も続かざるを得ないだ

ろう。だけどせめて卒業式というこの場において、欲しくて欲しくてならなかった「価値」を杉本にだけは渡したい。しょせん幻かもしれないけれども、新井林の言葉にも、関崎の眼差しにも、しょせん届かないだろうが、上総は欲しいものの姿かたちをすべて知っている。だから、全力でかき集めて、手渡したい。。

——ここにいる奴らが誰もお前のことを馬鹿にしようとも、俺だけは、杉本のことを百パーセント、認めているから。

言葉にすれば陳腐になるだけ。だから控える。それから。

杉本梨南に声をかけた。

「杉本、立って」

素直に二列目の杉本が立ち上がった。式典中だ。さすがに罵倒はされないだろうとは思っていた。感情のない顔のまま、杉本は上総へまっすぐ視線を向けた。想像していた通り、厳しくにらみつけるような眼差しのままだった。

気の利いた言葉なんて、口にする気もなかった。

挟まれているA組の女子たちがげげんそうに上総を見上げている。その頭越しに上総は腕を伸ばし、片手の答辞原稿を差し出した。

「ありがとう。感謝する」

そこまで言ったとたん、背中の重たい空気とさっき余計な茶々を入れた菱本先生への怒りと、ほんの少し残っていた照れとが一気に拭われたような気がした。

杉本が口をゆっくり開き、大きな瞳をぱちぱちさせながら、

「ありがとうございます」

抑揚のないまっすぐな発音で答えた。口許には笑みもない。いつものままに見えた。

ただ両手で押し頂くように答辞原稿を受け取ってくれた。

胸のリボンに触れるくらい、抱きしめるようなしぐさをした。今まで上総が見たことのない動作だった。じゅうたんの上で踏みしめてきた菱本先生の無作法なフェイントも、両翼からなる三年生たちの微妙な空気も、これから自分が与えられるであろう軽蔑も、その瞬間すべてがとけさり、ふうっと杉本とふたりだけ包まれてそこにいるような気がした。

天と地、それぞれ温度差のある拍手がふたたび館内で溶け合った。

肩の力が抜けたまま思わずこぼれた笑みを残し、上総は自席に戻った。あえて三年D組女子席に視線は向けなかった。向けなくともそこからもれる薄雲のような湿気は背中にまとわりついてきていた。女子たちが決して上総のした行為を許していないのは覚悟の上だった。隣の貴史が厳しい顔でもって口を開いたが、すぐに閉じた。

——もう悔いはない。ありがとう。

上総は目を閉じ、背中であまりつく薄雲を斬り捨てた。

たぶん両親に捕まったら詰問されるだろうし、教室に残っていても女子たちの冷たい視線に耐える気にどうしてもなれない。かといってこれから始まる他クラス合同のお別れ打ち上げ会に流れるのは絶対にいやだ。

最後の三年D組ロングホームルーム。上総はこずえと南雲の間に座った。菱本先生が目を真っ赤にしながらか卒業証書をひとりひとりの机に置いていく。とりたてて上総に対してだけ、という感情吐露はなかったのどほっとしつつ、同時に渡された卒業証書入れに丸めた。

「と、いうことでだ。三年間、みんな、ありがとう！」

言葉を詰まらせ、感無量なのかまた目を拭いつつ、菱本先生は全員に視線を回した。

「語りたいたことはたくさんあるし、かといってしゃべっているとたぶん延々と続くだろうしなあ。ほんと、このクラス、いろいろあった。個性が強すぎる連中ばかりで、最初はどうなるかと思ったが、本当にみな、よくまとまってくれた。ありがとう、ありがとう」

——まとまったわけじゃない。

上総は時計の針を眺めた。

菱本先生の感慨なんて無視していればいい。この先生はどこまでおめでたいのだろう。第一、このクラスが最後の最後でまとまったのは貴史と美里の功績であり、また個性が強い連中……南雲なり、水口なり、金沢なり……の突出したものもあったのだろうし。女子たちも結局のところ、美里とはあまりうまくいっていなかったようだが、そんなのもあまり気にする必要はなかったのだろう。菱本先生にとっては、大人の見た目でまとまっていればそれで大満足なのだろう。ひねくれているといわれようが、それが本音だ。

「みんな、本当に、いろいろあつたらう？ 勉強もそうだし、部活もそうだし、委員会もそうだしな。時には暴走しちまうこともあつたらう。俺も若かったから感情ぶちまけて怒鳴ることもあつた。手を出してしまうこともあつた。けど、一瞬たりとて俺はお前たちのことを忘れたことはなかつた。これは本当だぞ。三年間、一瞬一秒たりとも、三年D組の連中の顔を忘れたことはなかつた」

——それが重たいっていうんだよ。

自己陶醉もいいかげんにしてほしかった。上総にとっての担任とは、事務仕事をちゃっちゃか片付けてくれればそれでいい。きちんとテストの点数を間違いなくつけ、面倒な提出物をきっちり片付けてくれさえすればいい、それだけの存在だった。しつこく、自分たちの日常を見張るような奴には吐き気がする。

——とはいえ、もうこれで終わりだし。

上総はもう、この場に残る気などなかつた。話に一段落ついた段階で、荷物をまとめてさっさと外に飛び出すつもりでいた。できれば母に見つからぬように。もちろんそれが一番の難関であることは承知しているが。三年D組の廊下でさぞみな、待ちくたびれているであろう父母のみなさま。

いきなり、貴史が口笛を吹いた。と同時に上総を覗いた全員が立ち上がった。露骨にひとりだけ座りっぱなしなのも目立つのであえて続いた。

「菱本先生、てなわけで、お説教は次回に続くってことで」

ちらりと美里へ視線を流す。美里も足元をまさぐるようにして、巨大な袋をかかえてきた。だいたい美里の腰丈くらいはあるんじゃないかというほどの、まるっこい包みだった。

「これ、おちびちゃんに、プレゼントです。三年D組一同から！」

真っ白い包みにこれ見よがしの赤いリボンがでかでかと張り付けられていた。どこに隠していたのだろう。「三年D組一同」とは言うけれども、上総にその手の集金は回ってきていない。

「なに？」

「先生、開けてみなよ」

隣のこずえが掛け声をかけた。ということはこの人も知っていることになる。

「なんだよあれ」

耳元で尋ねてみるが一切無視された。ついでに南雲にもちらと視線を送ってみたが、多数派に属しているらしく上総に返事をしてくれなかった。

菱本先生は一度、びくっと身を引いた後、すぐに両手を伸ばし、教壇から降りてそれを受け取った。「ありがとう、ありがとう」言いながらまた涙ぐんでいる。気を利かせたつもりか奈良岡がハンカチを持って教卓の上に置いた。手がふさがっている菱本先生には、それを使うこともできなかつたらしい。思いっきり顔の造作が崩れているような気がしたのは気のせいかな。鼻をすすり上げ、まずは教卓にプレゼントを置いた。

「じゃあ、開けるな」

ばりばり、それでも丁寧にシールのところを探しつつはがし、そこから出てきたものとは。

「カンガルーか！」

隣の南雲が手を打った。指でピストル、ばんと鳴らした。

「ナイスアイデア！ 一本取られた！」

「なんでカンガルーなんだ？」

こずえとは違い、南雲はにやっと笑いすぐに答えてくれた。

「ほら、カンガルーのポケット見てみろって」

「ポケット……？」

身長約八十センチほど、愛嬌のある大きな眼と、やたらとでかい三日月型の腹ポケットには、小さめのカンガルーの子どもが顔を出していた。さすが「できちゃった結婚」の象徴たる菱本先生への、強烈な皮肉だ。いや、提案した連中は純粋な気持ちと言い張るのだろうが。

少しだけ、溜飲が下がったような気がした。

「うちの子が喜ぶなあ。ありがとう、ありがとよ」

「じゃあさ、先生、みんなで記念撮影しましょ！」

すでに菱本先生のお涙頂戴劇場第一幕を終わらせる必要を感じたのか、美里が立ち上がるやいなや教壇の前に立った。勢いよく貴史も駆け寄った。

——もうとっくに、卒業アルバム用の写真、撮っただろ？

疑問が湧くものの、余計なことは考えたくないので言うなりになるしかない。どうせあとわずかの時間だ。それさえ耐えればいい。それさえ。

気が重くなりつつも、上総は他の男子女子に混じり、教壇の一番後ろに立った。絶対に菱本先生の隣なんぞには行きたくない。端、端を選んだ。美里は前列の中央に、その隣に貴史が、上総の隣にはなぜか南雲が、こずえは貴史の斜め後ろに、それぞれ位置どった。

「で、誰かにシャッター切ってもらいましょうか。外のお父さんお母さんの誰か」

美里が後ろを振り返り、貴史の隣にカンガルーと鎮座ましてる菱本先生に尋ねた。

「そうだな、おい、立村、お前のご両親にお願いできないかな。さっきお会いしたぞ」

——こいつ、最後の最後の最後まで！

すでに両親が菱本先生に挨拶したということか。あの両親、特に母親ならやりかねないとは思っていた。さぞ面倒をかけた馬鹿息子について白々しくお礼を述べたに違いない。卒業式典の英語答辞で、何を感じ極まったかいきなり茶々を入れるわ、こちらで望んでもいない説明までたらたらしまくり、最後は上総に対して「こんなにお前のこと、心配してるんだぞ」と押し付けがましいことをしでかそうとする。

もちろん、素直に言うこと聞く気はなかった。もうここにいる三年D組の生徒たちとは疎遠になるのが……こずえを除いて……目に見えている。それならもう無視したっていいだろう。

美里がいきなり上総に声をかけてきた。すっと、用意してきたインスタントカメラを取り出して、

「立村くん、悪いけど、シャッター押してくれないかな？ 二枚撮って、それで終わりにしようよ。ね」

一瞬だけ不協和音のようなものがひそひそ声に混じったけれども、すぐに止んだ。かわりに集まったのは、上総へ向けられた女子たちの吐息のみ。その意味はすでに、英語答辞の後から感じて知っている。

——清坂氏、先読みしたのか。

「そうする、貸して」

上総は素早く美里からインスタントカメラを受け取り、壇から降りた。

「おい立村、別の奴にも頼めよ。お前入らないと」

「いいんです。立村くん、写真嫌いだから」

きっぱり答えた美里の口調に、菱本先生も、貴史も、誰も逆らえなかった。

「それでは、二枚、連続で撮ります、いいですか」

フィルムを巻きなおし、フラッシュを用意し、二回、適度な間を開けて連写した。

最後の一枚、美里にピントが合ってしまったかもしれない。誰も気付いていないだろうが。

「そいじゃ、みなさん、三年間、どうもありがとうございました！ 菱本先生も、がんばって子育てアンド子作りパート2に励んでくださいってことで！」

みな一斉に「どうもありがとうございました！」と貴史の合図に合わせて、最後の礼をした。この場を締めるべき人間がきっちりと締めた。上総はその中で言葉を発することなく頭を下げた。感涙おさまらぬ菱本先生の下へ女子たちが集まり、男子連中が友だち同士語り合うのを尻目に、上総はすばやく教室奥のロッカーへ駆け寄った。さっきの卒業式で無断着用されたコートはやはり入っていなかった。それだけは返してもらわないと困る。寒くて外に出られやしない。まだ桜も咲かぬこの時期に、高熱出してぶっ倒れるのだけはごめんだ。

しかたなく上総は、貴史を呼び止めた。珍しく、南雲に話し掛けている様子だった。上総が近寄るのに気付いてすぐに南雲の方が離れたのも不思議なことだ。

「あのさ、羽飛」

「今日、これから来るだろ」

「いや」

短く答え、上総は用件をすぐに伝えた。

「さっきの俺のコート、どこやった？」

「ああ、あれな。おおい、美里、立村のコート返してやれよ」

やっぱり美里とつるんだわけだ。予想通りとはいえ、溜息が出る。すぐに美里が、教卓の女子集団から分裂して駆け寄ってきた。手にはもちろん、ない。

「立村くん、ちょっと待ってて。今取ってくるから」

「今取ってくるって」

「難波くんに預けっぱなしなんだ。ごめんね」

さらりと答え、美里は素早く教室を飛び出していった。

そうだった。ホームズの衣装だったんだ。

——清坂氏とも、もうこれで最後だよな。

実際もう、自分の方から振り捨てておいて、勝手な言い草だけでも。

——もう俺の人生でこんな奇跡的なこと、もう起こらないよな。

クラスで人気者の、ちょっとおせっかいだけど、にこにご笑顔で上総のことを思ってくれた女子なんて、金輪際現れないに決まっている。ずっと演じつづけられればよかったのに。美里や貴史と同じ土壌から生まれてきたんだと、知らん顔できればよかったのに。

でも、もうそうできない。

繰り返す思う。

——俺は、この学校に入ってはいけない人間だったんだ。

——杉本と同じように。

それでも、数日しないうちにオリエンテーションで顔をまた合わせるだろう。その時にはもう、暗黙の了解で三年D組の繋がりは途切れ、それぞれ新しい環境で友を作るだろう。こずえ経由で美里と交流することはあるかもしれないが、今までのように真剣に上総へつかかかってきたり、話し掛けてきたりすることはないだろう。

それを望んでいくせに、なぜ、背中が冷えてくるのだろう。

「じゃ、あとでな」

「うん、わかった」

貴史は上総に、大して気を悪くしたとも思えない顔で頷き、すぐ菱本先生の下へ駆け寄っていった。ちらと聞いた話だが、上総以外にも打ち上げに出ずさっさと帰る奴はいるようだった。露骨に顔を合わせたくない、というわけではなくて、単に家庭のご事情とかで。南雲も確かそうではなかっただろうか。声を掛けようかと思いきや、扉側に見覚えある二人組を発見し、身構えた。

——なんで来るんだよ。

父と母が、にっこり微笑んでいた。一番怖い、その表情。逃げるしかない。上総よりも先に、菱本先生に何度も礼をしていた。ああ、早く、コート戻ってこないかな。

「立村くん、はい、これ！」

反対側の扉から美里が駆け寄り、小声で上総にコートを手渡してくれた。

「ありがとう」

「じゃあね、またね」

忙しげに美里も、さっさと教室から出て行った。たぶん打ち上げ準備だろう。みな忙しい。父と母に追いかけられぬうちに上総は退散することにした。

コートを持ったまま、三年D組の教室を抜け出し、それぞれの教室での喧騒を眺めた。廊下には父母の集団がだんご状態で移動していた。C組を覗き込むと、霧島さんを囲んで女子たちが泣きながらサインをもらっている様子が伺いしれた。片割れの更科の姿は見当たらない。とおもいきや、廊下で女子たちに囲まれている。こいつもまた女子受けがいいらしい。本命は都築先生だということを、どこまでみな知っているのかはわからないが。

三年B組を見やった。父母が集うのはどこの教室も同じだけれども、打ち上げ会場として使われることもあり椅子と机がすべてコの字型に並べ替えられていた。轟さんと難波が手際よく指示を出しているようだった。が、いきなり轟さんに話し掛けられた難波が教室を飛び出していったのはなぜだろうか。上総が目で追うと、やはり思った通りだ。C組の前でそおっと扉ごしに覗き込んでいるではないか。

三年A組。できれば狩野先生にはもう一度挨拶をしておきたかった。もちろん今は不可能だと承知している。天羽の姿を探すと、あいつはまだ若草色の和服ひとそろい脱いでいない。そのまま、げらげら笑いながら男子たちにギャグをかつとばしている様子だった。近江さんの姿はなかった。上総と同じく、この喧騒から抜け出したに違いない。

狩野先生はいなかった。同じく、各クラスに必ずいたはずの、父母の集団も、いなかった。

すれ違う見知らぬ父母から、「英語答辞、かっこよかったわよ」とか声をかけられたり、見知らぬ男性数名から「大嶋先生に評価されるとはたいしたもんだ。これからもがんばれよ」と褒め

られたり、全く上総の伺いしれぬところにおいて、あの英語答辞の評判を知ることができた。最後の数行センテンスに関しては、生徒以外それほど興味を持っていないというのが救いだった。何せ、三年D組の雰囲気といったら、「公開の場で清坂さんという公認の彼女を振るなんて！」といった非難の空気で一杯だった。覚悟はしていたけれども、誰一人ひきとめようとせず、写真撮影の際も上総を中に入れようという声がほとんどなかったことからしても、よくよく伝わって来ている。やはりいいないほうが、いいのだと思う。

——しかし寒いな。

上靴をビニール袋にしまいこみ、生徒玄関でコートを手織った。難波の奴、ひとことくらい「借りたぜサンキュー」とかあったっていいのに。まあいいか。肩の部分がケープ風に二重に繕われていて、見た目よりもかなり暖かいコートだった。シャーロック・ホームズだと揶揄されてもこのぬくもりには敵わない。だったら着てみる、と言いたかった。

すれる音が、いつもの布っぽい感覚ではない。変だ。

上総はすばやくポケットをまさぐった。右手には何も出てこず、左手の方から少し長めに折りたたんだ封書がひっかかりつつ出てきた。

——なんだよこれ。

周囲の生徒・父母たちの視線から隠すようにして、上総はもうしまいこもうとして、やめた。持った感じがどうも、自分の読み上げた英語答辞と同じような分厚さでかつ、長すぎて下手したら落としそうだった。突っ込んだ主が誰かは大体見当がついているけれども、いろいろと繋がりのある人たちに読まれたら、どちらも恥ずかしい、そういうものだろう。

——とにかく、どこか一人になれるとこ、ないかな。

いつもなら「おちうど」に避難するという方法を取るだろう。しかし、下手したら両親がそこで久々に食事をするかもしれない。最悪のパターンも考えられる。また茶室という手もあるが、おそらく卒業式、あちらこちらで別れの挨拶と告白なんぞかましている人たちとぶつかったら申し訳ない。どこか、いいところないだろうか。上総は数秒だけ考えた後、決めた。

——体育館裏の、体育準備室。あそこなら大丈夫だろう。

コートと靴と卒業証書を一式抱え、上総は体育館へと向かった。

桜どころか、まだ雪が体育館裏にはたっぷり残っていた。溶けかけているせいか、古い落ち葉の腐りかけたものなども黒く浮かんでいる。まだ新しい煙草の吸殻が落ちているのはちょっとまずいんじゃないだろうか。上総はつま先で煙草の跡を雪で隠した。すぐに体育準備室の建物内に入ることにした。

ほこりっぽくてむせそうで、しかもジュースの空き缶があちらこちらに放置されている。これもやっぱり、ばれたら学校側の締め付けがうるさくなりそうだ。気をつけろと言ってやりたい。まずは荷物をおき、壊れたベンチに腰掛けた。まだ身体が温まっている間に上総はポケットをまさぐりなおした。

——清坂氏だろうな。

やはり二年前の秋だったか、美里と意見の食い違いで絶交寸前までいった時、こういう感じ

で「計画書」を手渡されたことがある。受け取って読んだ時、気の重さこそ感じたけれども、想われるゆえの義務のようなものも意識し、結局元の繋がりを保つことにしたはずだ。何を言っただろう？

——俺と清坂氏にしかいえない秘密をひとつだけ持とうって、確かな。

あの時、その秘密の対象となったのは、美里の場合だと幼なじみの藤野詩子のこと。

上総の場合だと、本条先輩の進学先が公立だったということと。

今思えば、他愛のないことばかりだった。結局その秘密がどれだけ大きく膨らんだかといえ、ごくごく小さなシャボン玉程度。あっさり割れて、消えてしまい思い出すこともなくなった。第一、そんな美里の「計画書」だったか「提案書」だったか、そのことすら忘れかけていた。この手紙さえ受け取らねば。

——ごめん。たぶん今の俺は、何が書いてあっても、受け取れない。

英語答辞の場で、はっきりと杉本梨南への感謝を告げてしまった今では。

そっと開き、少しづつあつめの折りたたまれたものを取り出した。

表書きをちらと見て、もう一度見返した。

——嘘だろ？

何度もその名をなぞった。そこに直筆で……それこそ達筆なり……どでかく綴られた名前と、さっきまで話をしていたあいつの顔とが重なり合わなかった。

——羽飛、貴史って、羽飛がかよ？ あいつが、手紙なんて、書くのか！

年賀状すらも、「今年もヨロシク！」の一言で簡潔に終わらせるはずの貴史が。

その文字は、今まで上総が見慣れていたいいかげんな筆遣いとは違っていた。

力強く、跳ねるところは跳ね、ひっぱるところはひっぱり、落ち着いた筆圧で綴られていた。

今まで一度も、貴史の文字をこうやって見たことは、かつてなかった。

——立村へ

ではじまるその文面を、上総はじっと目で追った。

——お前がこの手紙を読むのはたぶん、家でだと思う。だから捨てたかったら捨てていいし、文句言いたかったら電話かけてきていい。どうでもよかったら忘れてもらっていい。こんなこっぴどかしい手紙を書くのは俺も、人生においてたぶん最後じゃないかと思うので、とにかく読んでもらうだけ読んでもらえればそれでいい。お前もこういうべたべたしたのりが嫌いなのはよく承知しているけれども、どうせ卒業するんだし、一回くらいはあっていいだろってことで、こう書いている。少し我慢して読んでくれ。

まず最初に、俺は立村と友だちになれて、よかったと感謝している。

こうやって書くと照れくさいけれども、本当だ。

入学式の時、出席番号が続いただけだといえればそれまでだけでも、本当に立村と話が出来て、お前と一緒にD組にいられて、よかったと思っている。

何よりも、俺はお前から、信じられないほどたくさんのことを教わった。

口で言っても嘘くさくなるだけなので、全部書く。

去年の秋から今日までの間、俺は美里と一緒に三年D組を仕切ることになった。

最初は、立村が立ち直るまでの間だと思っていたわけなんだが、結局今日までこういうこととなってしまった。もちろん、予想もしてなかったことだったし、いったい何をやればいいのか自分でもわけがわからなかったというのが本音だ。

◇

ここまで読み、上総は咳きこんだ。

いじけて八つ当たりして、周囲に迷惑を掛けつづけていた自分の醜さに胸のむかつきを感じた。

。

◇

といっても、何をやったわけでもない。既に天羽はどんどん準備を進めていたし、生徒会との兼ね合いなど面倒なことはみんな片付けてくれた。俺はただD組のことだけ考えていればよかった。天羽や難波、更科には押し付けてしまって悪かったと思うが、しょうがないだろう。ただ、その分D組を見直すことはできたんじゃないかと思う。俺なりに毎日、このクラスに足りないものはなんだったのか、立村はこのポジションで何をしていたのか、真面目に考えた。時には金沢や水口、その他いろいろな連中と話をし、確かめた。

そこで得た結論なんだが、俺は今まで、立村に面倒なことを押し付けて、本来すべきことを放棄していたんじゃないかってことだ。

◇

——本来すべきこと、気付いたか。
肺の方だろうか、ちくりとする。上総は読み進めた。

◇

立村、お前はよく言っていた。俺が一番評議にふさわしい人間なのではないかとか、しょっちゅう話していたのを覚えている。そのたびにいつも、俺は腹を立てていた。なんで自分の力に自信が持てないんだろうかと、何度かぶん殴ってやろうと思ったものだった。結局俺がお前をぶん殴ったのは二回くらいで、それで考え方を換えさせることができたかというところとわからない。それはどうでもいい。

まず俺が最初に手をつけたのは、女子連中の分裂状態をなんとかすることだった。
このあたりは菱本先生もかなり頭を悩ませていたらしい。
ちょうど菱本先生に子どもが出来て結婚するとかなんとか話が出ていた時期だ。

◇

——あの男何考えてるんだって話だな。カンガルーかよ、全く。
思い出したくない、金輪際顔も見たくない男の顔が、浮かんだ。

◇

俺も時々、美里から話を聞かされていたけれども、そういうのは女子だけで片をつける問題だと思って無視してきた。美里も助けてほしいとは言わなかったし、もし助太刀するのならそれは彼氏であるお前しかいないと思っていた。

しかし、よく考えるとこれは、見殺しにするのと同じ行為ではないかと思う。
美里が言うには、お前がしょっちゅう気遣っているいろいろと手を回してくれてたらしい。
もちろん、お前にはそれが精一杯だったというのもわからなくはない。

ただ、この問題に関しては、立村よりも俺の方が適任だったということも、関わってみてよくわかった。

◇

——ああ、女子たちのいざこざな。
いろいろやかまれる立場の美里を、上総なりにかばう努力はしてきたつもりだった。
手紙で読む限りだと、貴史はそのやり方が手ぬるかったと言いたいらしい。

◇

言っておくが、それはお前がだめだからではない。俺がただ、美里と幼稚園の頃からのつきあいであって、詳しい事情をよく知っているからというそれだけだ。

詳しいことは省く。とりあえず問題は俺が間に入ってすぐ解決した。表向きは美里も女子たちとうまくいっている様子だし、これ以上は過保護なんで放置しておくつもりだ。

この一件で理解したのは、今まで俺が見て見ぬふりをして、立村にすべて押し付けてきたつけが全部まわってきたという事実だった。しつこく書くが、決してお前が評議委員として適任でなかったというわけではない。ただ、サポートする相手を美里にまかせてしまい、俺ひとりのほほんとD組で温泉気分でいたのは、間違っていたということだ。

俺はもっと、お前が口に出す前に、たくさんの手助けをするべきだった。

一番後悔しているのはそこだ。

せめて毎年、二回、評議委員なり規律委員なりなんなり、俺が代わってやるとか、そういう風にしてお前の負担を軽くしてやればよかったと思う。青大附中の委員会制度が特殊だから言うわけではないが、もう少し俺は友だちの立場ではなく、委員として積極的に参加すべきだったと反省している。

◇

——ちょっと待て。なんだよいったい。

書かれている文章の意味がよくわからない。頭を振った。冷たい空気が頬をすべった。

◇

俺が今まで部活にも委員会にも登録しなかったのは、とにかく面倒なことに巻き込まれたいかなかったからだ。まず先輩ぶっている奴らに頭を下げるのが面倒だし、また小学校の友だちと遊ぶ暇がなくなるのも我慢できなかった。その他いろいろあるけれども、そのことについても今は、間違っていたのかもしれないと思っている。

要するに、わずらわしいことをしたくなかっただけなんだなということだ。逃げてたということだ。だから、入学してすぐにお前を評議委員に推薦したわけだ。

でも、今思えば、俺が最初の段階で美里と組んで、評議委員になって、それからお前にバトンタッチというやり方をしてもよかったと思う。いきなり俺から美里を押し付けられるような形になって、さぞ驚いたと思う。本当にあの時は、俺なりにうまくいったと思っていたが、こういう結末になってみて初めて気付いた。俺が自分なりにやってきたことは、すべて「逃げ」であって、それ以外の何者でもないってことだった。

面倒なことをすべてお前に押し付けたせいで、美里もかなり神経が参ってしまったようだ。たぶん美里は表に出さないと思うし、聞いても絶対にそんなことないというに決まっている。だけど、美里の状態はかなりやばい。修学旅行のあたりから俺も変だとは思っていたが、このところだんだんエスカレートしている。もちろん、霧島や西月やその他いろいろなこともあって大変

なのだろうとは傍目からも思っていたが、実際お前のスタンスに立ってみて初めて見えてきた。

お前なりに、一生懸命努力してきたんだと思う。しつこすぎるようだが、責めてはいない。ただ、美里がしてほしいこととは違ってただけだ。

俺が勝手にその様子を伺うのをやめて、お前に美里の面倒を見るようにさせたつけど。

評議委員に無理やりお前を推薦したのも俺だったし、いろいろ小細工して美里と付き合うようにさせたのも俺の仕業だ。美里もそう望んでいたし、俺もそれの方がお互いいんじゃないかと考えていたのだが、肝心なお前の意志を考えていなかった。

本当に悪かった。ごめん。

◇

——なんでこんなに謝ろうとするんだろう？

貴史から受け取った手紙というのが、まだ信じられない。誰か、筆の上手な大人に書いてもらったものではないかという疑念が晴れない。だってあまりにも丁寧すぎるし綺麗すぎる。いつも貴史が書いている文字とは、全然違う。

注意深く、ひっかからないように心しつつ、読み進めた。

◇

俺は来月高校に進んだ段階で、まず部活動を始めるつもりだ。

委員会活動というのはちょっとだけ首を突っ込んでみたけれども、俺にはやはり性に合わない。立村がきちんと最後までお膳立てしてくれたからなんとかやっていけたようなものだが、俺はむしろイベントがあればひっばっていったりする方が向いているようだ。陰でこそこそと手回ししたりするのは、やっぱり苦手だ。

かといって、今までのようにのらりくらりと帰宅部でいる気もない。

先輩後輩のしち面倒くさい付き合いを考えると気が重いけど、そろそろ俺もそのあたりを克服するチャレンジをする時期かと思っている。

とりあえずはバスケ部と、あとは美術部に入ろうかと考えている。

◇

——美術部？ 嘘だろ？

信じがたい言葉だった。なぜ、この手紙には上総の知らない羽飛貴史がつまっているのだろう。

◇

お前には今まで話したことがなかった。正面切って話すのも面倒なので、ここで書いておく。

修学旅行の時だ。金沢が有名な画家のお坊さんと会いたがっていたことがあっただろう。あの時に俺も一口乗せてもらってなんとか金沢の思いを遂げさせたんだが、あの頃から俺は、いわゆる画家とか美術とかそういうものに関心を持つようになった。

夏休み以降、俺は金沢と一緒にいろんな美術館に通い、自分なりに勉強していた。つくづく、この時ほど、エレベーター式の附属中学に通っていてよかったと思ったものだ。受験のことなんて考えないで、好きなことに没頭できるのは幸せなんだなと感じていた。菱本先生にも修学旅行の時に言われたが、本当にやりたいものを見つけるというのは、楽しい。

お前に話さなかったのは、単にもともと立村が美術関係に興味がないと思いついていたからであって、隠したわけではない。美里にもそのあたりはきちんと話してある。だが、そのあたりからお前と話がかみ合わなくなったのも事実だ。もっとこのあたりで、そういう話をしておけば、また違った展開になったのではとも思う。

◇

三年D組の誇る天才絵描き、金沢と貴史が二学期以降意気投合しているのは気付いていた。ただ上総と話すのにうざったくなったのだろうと勝手に解釈していた。気にも留めていなかった。そんな心の動きがあったとは、全く感じていなかった。

話してもらったとしてもわからなかっただろう。

貴史たちと上総とは、美的観点が百八十度、違う。だけど。

こうやって文面で読むと、自分が認識していなかったかすかな切り傷がちりちりと痛み出す。——なんでだろう。そんなの、俺はどうだっていいのに。

◇

とにかく、俺は今までやるべきことから逃げていたということに気付いたわけだ。

もうひとつは美里のことだ。

こればかりは女子のことなので、俺もよくわからない。ただ美里は俺にとってかけがえのない親友だ。この辺は以前からいろんな奴に話しているので照れる気はない。

言い訳をさせてもらえば、俺が青大附中に入学した時、このままだと男子と女子同士でふつうの友だちとして付き合っていくのには無理があるのではという不安を持っていたというのがある。少しお前に話したこともあるが、小学校時代、俺と美里は担任やクラスメートの連中としょっちゅうバトルを繰り返し、そのたびにいろいろとトラブルに巻き込まれていた。面倒なことが多かったのと、これからふつうに話をしていくためには、告白して付き合うかなにかしないかだめなんじゃないかという雰囲気があったからだ。

そんな面倒なことをしたら、お互いにまた別に好きな奴ができた時、つまらない別れ方をしとせっかくの友情がなくなってしまう。俺はそれが何よりもいやだった。それは美里も同じ考えだったようだ。誰と誰が付き合うとか、ねちねちした話とか、そういうのから離れたかったようだ。あいつも根本的には俺と同じ価値観を持っている。

たまたま美里は立村のことを気に入ったようだし、俺もお前がすごくいい奴だとわかっていた

ので、三人で一緒につるんで遊べればそれでいいだろうと思っていた。そして最初はそのつもりでいた。たぶん、あのままの関係が一番俺たちには向いていたのだろう。

◇

自分の吐息だけが熱い。

耳鳴りのようなものが響く。

なぜかわからない。自分の奥底を殴る、何かがある。

◇

このことは、美里から何度も相談を受けていた。また俺もそれなりに考えた。結局のところ、俺も美里も、周囲の「付き合う」という面倒な話に巻き込まれないようにしたあげく、お前ひとりを振り回していたのではないかという結論に達した。

本当だったら、俺もお前も美里も、ちゃんと独立した付き合いができるはずだったにも関わらず、むりやり癒着させようとしていた。美里に関しては女子なんでもよくわからないところもある。だが俺が仕組んだことによって、結局お前が苦しむはめになったのは、悪かったと思っている。もっと早い段階でどうして俺は気付かなかったのだろうか、本当に悔やんでいる。悔やんでいるが、そんなこと振り返っていても、どうしようもない。そういうのは俺の流儀ではない。

そこで、ひとつ提案がある。

一度、俺たち三人の関係を中学入学式当時に戻したらどうだろうか。

美里から、お前の本心は聞かせてもらっている。いろいろぐちゃぐちゃ言っていたようだが、今ではあいつも、お前の気持ちを尊重したいと言っている。彼氏彼女の面倒な付き合いをしたくないならそれでいいと言っている。俺も、無理やり親友づきあいしたくないというお前の気持ちを尊重したい。これも本当の気持ちだ。

だが、立村が俺や美里にとって友だちになりたい奴であることも、否定できない。

お前は、お前自身が思っているよりも、心底いい奴だと思っている。

評議委員だとか、三年D組のクラスメイトだとか、美里の元彼氏だとか、そういう面倒くさい繋がりをいったん断ち切って、その上でもう一度、やり直したい。

そうする時期にきているのではないかと、俺は思っている。

最後に、三年間、お前を責め続けてしまい悪かった。

俺はいつもお前に、本音を話さないなどと責めたてていたが、本当のところを言うと、俺の方が何もしゃべっていなかっただけなのだ気付いた。

もう一度、きちんと、立村と向きあいたい。

お前が考えていることをもう一度まっすぐ受け止めたい。

もう一度、チャンスを与えてくれ。

この手紙を書いているのは卒業式前夜で、美里にも一通り目を通してもらっている。誤字脱字はかなり混じっていると思うが、どうせ答辞でもないのだからその辺は大目に見ろ。

それと、クラスの打ち上げのことだが、お前が出たくないことはよくよく承知している。美里とふたりで、そのあたりについては菱本先生に話をつけてある。

俺は、三年D組から卒業したその後、あらためてお前と会いたい。

もちろん美里も連れて行く。

その上で、もう一度、本当の友だちとして、三人で付き合っていきたい。

その時にはもちろん、面倒なこと抜きにしてだ。

美里の方はまだひっかかるところがあるかもしれないが、もしそれが苦手なようだったら俺がうまく調節していく。あいつもお前のことを、人間として好きだと今は言っている。お前がうざったくならないような繋がりを、もう一度構築できるはずだ。

あいつはそういう女子だ。俺が保証する。安心しろ。

以上、俺の言いたいことはこれで終わる。

羽飛 貴史

◇

知らなかった。

——羽飛がこんな綺麗な文字を書く奴だったとは。

手からこぼれて落ちた。冷えてきた指先と身体が凍り付いていきそうだった。

何も、本当に何も、知らなかった。

たった半年、上総の代役をやっただけで、こんなにたくさんの学びを得て、ほんの少し金沢の手伝いをした程度で自分のやりたいことを見出している。

上総が三年間、懸命にあがいて求めていた答えを、貴史はあっという間に得て、同時にそれを自分の身につけている。

貴史の書いた通りだった。

——俺は三年間、何にもできなかったっていうのに、羽飛は。

本来評議をやるべきは貴史なのだと、上総は口すっぱく言い続けてきた。

そのくせ、その居心地の良さを手放したくなくて、しがみついていた。

いくらでも軌道修正するチャンスはあったのに、そうしなかった。

どうしてそうしなかったのか、今ならわかる。

——羽飛と清坂氏、あの二人から見捨てられなくなかった。

もし上総が評議から外されたとしたら、自分の居場所がなくなってしまう。それは覚悟していた。もう今もないだろうと思っていた。まぶしすぎるあのふたりにつながっていくには、要求された「付き合い」をこなすしかないと思っていた。

それができなくなった段階で、上総の方からふたりを断ち切ろうとした。

美里が嫌いだったからではない。そのことだけは確信している。

友だちを、失いたくなかったから。

小学校時代の、あの惨めな日々に戻りたくなかったから。

あのふたりと久々に再会した時、なぜか小学時代のいじめっ子たちと重なりパニックを起こしたのも、それかもしれなかった。杉本梨南に過剰なほど張り付き、自分でもどこか壊れているのではと思うくらいに執着したのも、貴史や美里から、嫌われてしまったことを確認したくなかったから。

貴史は「面倒くさいことから逃げていた」と何度も書いていた。

——違う。

ふと、暖かいものが頬に伝わった。誰もいない。

手紙を床に落としたまま、上総は両手で顔を覆った。覗き込むのはワラジムシくらいだろう。だから、顔をどろどろにってしまうほどぬらしても、かまわなかった。

上総の一番戻りたい場所が、あの中学入学式の日だったから。

声を殺さずにしばらく顔を覆っていた。頬は気持ち悪いくらい濡れたがすぐに乾いた。顔をこすり、ふうっと息を吐いた後、上総は足元の手紙を拾い上げた。きちんとたたみなおし、元のよう形を整えた。

——羽飛貴史。

何度見ても、その文字、あの貴史の書いたものとは思えなかった。

時計を覗きこんだ。クラス合同打ち上げ会もそろそろ終わりに近づいているはずだった。小耳に挟んだ情報によると、あまり長い時間拘束できない人が多いもので、希望者であってもせいぜい一時間弱でおひらきにしようということに決まっていたはずだった。もっとも上総のようにこうやって、さっさと逃げ出している奴らもいないわけではないだろう。

まだ、いるだろうか。

手袋をはめ直した。今まで一度もこんな友情満ち溢れた文面を読んで心揺さぶられたことなくせに、なぜだろう、どうしようもなく奥底から動かす流動物のようなものが感じられる。なんだろうか。うねっている。

目を落とし、その手紙を鞆の中にしまいこんだ。立ち上がり、上靴のありかを確認した。

——一言、ふたりに伝えなくては。

体育準備室から一步出ると、そこにはうっすらと綿毛のような雪が積もっていた。ちょうど上

総が籠っていた時間帯に降ったらしい。上総の他に足跡はなく、おそらく誰にも気付かれていないことが推察された。ほっと一息ついた。

もちろん、例の打ち上げ会に出るつもりはない。そろそろお開きの頃だろう。

ただ、その時に入り口で貴史と美里にだけ挨拶して去るくらいは許されるかもしれない。

女子たちが露骨に上総の参加を拒んでいた雰囲気を読み取っているならば、きっと引き止めることもないだろう。ただ一言だけだ。

——ありがとう、と。

グラウンドをつっきる格好で歩いていくと、おそらく打ち上げが終わって間もないのか他クラスの連中がだらだら歩いているのが見えた。知らない女子たちだった。ちらと上総に気がつくと、またひそひそ話をする。武勇伝は増えたけれども、それでなにも言うことはない。

上総はそのまま砂利路を歩きながら、上靴を片手にぶら下げた。

D組は上総を除いて、団結力の強いクラスだ。菱本先生に対して、上総以外はみななついていたはずだ。だからだらだらと語り合っている可能性が大だ。そこに混ぜ込まれることはないと感じたかったが、いざとなったら逃げるしかない。たとえあの手紙を読んだ直後とはいえ、菱本先生への嫌悪が薄れたわけではない。英語答辞を邪魔された恨みを忘れたわけではない。

青い空からまた、光る雪が降り注いできた。頬で受け止め、一呼吸おいてから上総は玄関に入ってしまった。

三年D組の教室前に立った。廊下にももれてくるはしゃぎ声でもって、いかに打ち上げが盛り上がっているかがよくわかる。扉は前も後ろも開けっ放し。他クラスの連中が出入りするかと思いきや、どうやらD組オンリーの盛り上がりには徹しているらしい。入ることはできないだろう、想像はつく。

コートを羽織ったまま、上総は後ろの扉に近づいた。できるだけ姿を隠していたところだが、そんな都合のいいことが通用するわけもない。すぐに発見された。

「立村くん！」

よりによって相性の悪い女子に見つかったものだ。片手にクッキー、片手に紙カップを持ってうろちょろしている奈良岡彰子と鉢合わせしてしまった。

「どうしてさっさと帰ったの？ 先生が心配してたよ。早く入ったほうが」

その声で一瞬静まったのは女子たちのざわめきだった。次によってきたのは我らが下ネタ女王・古川こずえだ。つかつか近づいてくるやいなや、予告もなしに額をはたかれた。

「あんた、さっさと入って、食うもの食いなさいよ。どうせ朝ろくに食べてこなかったんでしょが！」

「余計なお世話だ」

この人にはいくらでも言い返せるのに、奈良岡に対しては思いっきり無視してしまう。自分でもバランス悪い受け答えだと感じるのだが、しかたない。

「まあよかったよね、これで全員揃ったし。せっかくだしね」

「あれ、南雲は？」

ちらと覗き込むと、南雲も帰る帰るといっていながらしっかり残っている。

これはどうしたことだろう？ 結局逃げたのは、自分だけだったということか。南雲は東堂を相手に、やはりケーキにかぶりついていて。まだ上総に気がついていない様子だった。

「彰子ちゃんがね、愛の力で説得したのよ。愛よねやっぱし」

「羽飛はどこにいるかな」

「羽飛？ 呼ぼうか？ そんな過保護なこと、誰がやるってのよ！ ほらさっさと行きな！」

こずえに無理やり腕を取られ、上総は引きずり込まれてしまった。絶対に越えたくなかった一線。また空気が静まった。

菱本先生がカンガルーのぬいぐるみの後ろから顔を出した。

「立村、戻って来てくれたか！」

——あんたのためにじゃないさ。

罵りたいのを耐えた。お菓子の匂いがする教室の中を上総はぐるりと見渡した。

さっきまで盛り上がっていたはずなのに、一気に黙りこくる女子たちの七割方。

卒業式典直後の生ぬるい嫌悪感がじわじわと伝わってくる。

責めるわけではないけれども、なんでいるのか？と問いただきたい顔で、女子たちがみなにらんでいる。身体がこわばった。動けなかった。頬に涙が残っていないだろうか。慌ててこすった

。

——なんのために俺はここに来たんだ。ばかみたいだ。なんで、血迷ってしまったんだろう。背を向けようとした。言い訳で言いつくろうとした。

「あの、忘れものを取りに来ました」

そんなものない。予定を変更して、すぐに飛び出そう。貴史への言葉なんて、電話でも、手紙でも、それで十分だ。美里にも。足をもときた方へ戻そうとした時だった。

「先生、悪いけどさ、俺と美里、これから立村と三人で、打ち上げやりに行くんだ。ということで、お先に抜けさせてもらうわな。あとでそのあたり、よろしく」

貴史が美里を伴い、前の扉から顔を出した。すぐに入って行って、菱本先生に頷きながら告げた。いきなりざわめく教室内。奈良岡がきょとんとした顔をして、

「あれ、でもそれは」

「姐さん、本当に申し訳ないんだがさ、残りの司会は予定通り、南雲とふたりで組んでくれねえかな。よろしくたのむわ」

有無を言わさぬ口調ではあった。後ろで美里が両手を合わせて「お願い！」としている様子を見ると、打ち合わせしていたようにも見える。動けないまま上総は貴史の言動を追っていた。一步、下がった。室内で暖かいはずなのに、体育準備室の中と同じくらい震えがきた。

ふたりは上総をじっと見つめた。

「立村、行くぞ」

貴史が真正面まで近づき、そっと肩を抱くようにした。とたん、震えが止まった。感情よりも身体が貴史に従った。

美里も頷くと上総の後ろにつき従うような格好となった。その様子は伺えなかった。上総は貴史に導かれるように、そのまま廊下へと連れられていった。三年D組の生徒としての出入りは、これで最後、それにしては互いにあっさりした別れだった。

「りっちゃん、あとで電話するよ」

南雲のおだやかな声がかかった。

いったん立ち止まり、上総は振り返らずに頷いた。

「羽飛、あのさ」

「もういい、わかってる」

気がつけば、貴史との背丈は顔の半分近く差がついていた。もちろん高いのは貴史の方。入学式の頃はほとんど同じくらいだというのに、どうして三年でこんなに差がついてしまったのだろう。上総が何かを言おうとするたびに、貴史が制した。後ろにいるはずの美里も何も言わなかった。生徒玄関で靴を履き替え、貴史に付き従うように三人歩いていった。

何度も歩いた道のはずだった。珍しくもない三人の下校風景。

ただ、違っているのは三人とも何も話そうとしないことだった。

「学生食堂に行くか」

後ろの美里に呼びかけるようにする貴史、それにさらりと答える美里。

「そうだね、それがいいね」

会話はそのまま続かず、また三人、歩いていく。

青空に舞った雪はすでに止んでいた。大学へ向かう路なりに、つぼみだけが桃色の桜の木が並んでいた。確か入学して二日目くらいに記念写真を撮ったのもこのはずだった。

「貴史、ここ、少し花、咲いてるね」

いきなり美里が、濃い目の桜が開きかけた木に近づき、くるっと上総たちの前に立ちふさがった。

「あんれま、雪降ってるのに、ごくろうなこった」

「あれ、知らないの？ この色の濃い桜ね、毎年咲くのが早いんだよ」

「俺たちが入学した時もそうだったか？」

「そんなの見てないよ、知らないよ」

相変わらずの軽いのりでのトークが続いた。まだ美里は上総の方を見ようとしなかった。目が合いそうになると、さりげなく逸らした。いつのまにかその、ほころびかけた桜のところで三人、立ち止まった。

「立村くん、さっきのカメラ、持ってる？ ちょっと貸して」

黙りつつづけている上総の前で、初めて美里が口を切った。

「カメラ……？」

「ほら、さっき教室で記念撮影したじゃないの。その時に私、渡したよね」

「ああ、あれか」

二回シャッターを押し、すぐに鞆か何かにしまいこんだはずだった。開けて探すとすぐに見つかった。インスタントカメラのレバーだけ巻きなおし、美里に手渡した。

「ありがと。じゃあさ、貴史、ちょっとあんたどきな」

「すげえ言い方だなあ。ったくお前もぜんっぜん、女っぽくなんねえなあ。優ちゃんの方がずっと」

「それ以上言ったら、即座に雪の中に蹴り飛ばすからね」

文句言いつつも貴史は上総の隣から離れた。なんだか頼りない気持ちが沸いた。

「立村くん、そこの木のところに立って」

「なんで？」

「撮ったげるんだから」

なんでだろう？ きよろきよろと上の桜と貴史の顔を交互に見やってしまった。美里が片手で「だめだめ、動かないで」と合図を送ってくる。真正面だった。

「ほら、さっき立村くん、写真の中、入らなかったでしょ」

「別にそれはそれで」

「うん、クラス写真は無理に入らなくていいよ。立村くん入りたくないこと、わかってるからね。ただ、なんとなく」

貴史に視線を送りつつ、美里は頬にふたつえくぼをこしらえ、一言一言切りながら言った。「立村くんは、こういうとこで、ひとりで、撮ったほうがいいなって、私が思ったの」
言われた意味がすぐに飲み込めず、ただ直立不動の態勢を保った。美里の言葉はまだ続いた。「私も、そうしてほしいんだ。今私が撮ったら、今度は立村くんが撮って。で、貴史は私が撮ってやるから」

すぐに貴史の茶々が入った。

「なんで俺だけ『撮ってやる』なんだ？ すげえ差別」

「うるさいわね。あんたはどっちにしても写真に写りたがり野郎だから」

しばらく美里と貴史の間で漫才じみたやり取りが続いた後、とうとうシャッターを押す瞬間が来た。

「じゃあ、立村くん、そのままでね」

フラッシュらしき白い光が、外の光に紛れてちらりと走った。

とたん、さっきからどろどろと泳いでいたあふれ出そうなものが、つつと流れて落ちた。

思わず貴史を探した。

「はとば」

はあ？とばかりに肩を竦め、にやにやしなながら近づいてきた貴史が、ぴくっと引きつるのを上総は間近に見た。

「りつ、むら、お前」

それ以上は何も言わせなかった。いつものように自分をコントロールしようとも思わなかった。まるで女々しいと馬鹿にされてもそれでよかった。美里が近寄ってくるのを背中を感じる。女子の前でみっともないくらい泣きじゃくるなんて、金輪際したくなかったことだった。

貴史の肩に右手を置こうとし、もう片方の手から鞆を取り落とした。

「羽飛、ありがとう」

反対側の肩に額を押し付けたまま、上総はその五文字だけを何度も繰り返した。喉が詰まり、言葉が出なくなりそうでも、舌先でなんどもつないだ。ありがとう、ありがとう、ありがとうと、それだけを呟き続けた。

「ったく、何だよお前、もっと早く言えっての、なあ」

笑いでごまかそうとする貴史の声が、どことなく低く穏やかだったのに、思わず甘えていた。しばらく上総はそのまま、貴史に抱きつくかっこうで、そのままだった。

「立村くん、行こう」

しばらく時が経った。美里がぐもった声で、上総に囁いた。隣にいるのだろうか。ぬくもりを感じた。顔をあげ、慌てて目をこすった。同年代に泣き顔をさらけ出すなんて小学校時代以来かもしれなかった。照れくささも交じり、美里から目をそらそうとした。留めた。

美里の頬にも伝わるものが確かにあった。貴史が空を見上げているのは照れ隠しだろうか。

「私たち、もっかい、友だちとしていっしょにいられるよね？ 立村くん？」

頷いた。美里にも伝えておかねばならないことだった。

「清坂氏が、それで、よければ」

「よくないわけ、ないじゃない！ もう、ばかなこと言わないでよ！」

怒った風に口を尖らせた。それでも潤んだ瞳は隠そうとしなかった。

「付き合うとか付き合わないとか、そんなのどうでもいいよ！ そんなことより、こうやって三人でくだらないことやって遊んでいるだけで、私いいもの。貴史、あんたと同じだよ、そうだよね」

「俺は優ちゃんと……」

涙ぐんだまま美里は貴史を音がなるほど頭をぶった。

「一生やってなさい！ もう、こういうお馬鹿は置いといて、さあ、早く行こうよ！」

「行く？」

美里は上総の腕を取った。いきなりで抵抗する余裕がなかった。貴史もにやっと笑うだけだった。

「生協の食堂に行こうよ。ほら、三年前と同じく！　そこで、仕切ちなおそうよ！」

「ああ、なるほどな」

貴史が腕を組みうんうんと頷いた。上総に親指立てて、すぐに方向転換した。

「てなわけで、卒業式二次会開始だ！　さあ立村、今日はとことん語ろうぜ。付き合えよ」
ふたたび肩を組まれた。引きずられるように上総は、学生食堂に向かい歩き始めた。

貴史と美里、初めて友だちになってくれたふたり。

こんな他愛のないやりとりだけでいい、それが上総のほしかったものだった。

本当はふたりとも、上総から欲しいものがたくさんあるはずなのに。

それは絶対に返せないものなのに。

それでも、ふたりは上総に、友だちでいようと言ってくれた。

——中学入学のあの頃から、やりなおそうと言ってくれた。

いとおしさも、熱い友情も。

何一つ満足に返すことのできない自分に。

「清坂氏、言い忘れてた」

「なあに？」

何気なく問い返された美里に、上総は、まっすぐ目を見つめて告げた。美里にそうするのはかなり勇気がある。杉本梨南に対してはにらまれても全く怖くないのに。

「三年間、ありがとう」

「違うでしょ、これからもよろしく、でしょ」

胸のコサージュを直してくれたのと同じような言葉を、美里はあっさり返してきた。

貴史に聞かれているのも全く照れなく、美里は続けてささやきかけてきた。

「立村くんがこれから誰を好きになっても、つきあったとしても」

かつて何度も、美里の口から発せられていた言葉だった。

「私と貴史は、絶対に嫌いになんてならないからね。立村くん、大好きだよ」

そこまで言うと美里は勢いよく学生食堂に向かい走り出していった。

聞こえぬふりをしていたのか、貴史が口笛を吹く。

先に駆け出していった美里と、それを追いかける貴史。

「さ、いくぞいくぞ、辛気くさいことは抜き抜き、立村、ほらほら」

「そうだね、貴史、今日は特別にお小遣いもらってるんでしょ。おごってくれるよね！」「たかるのかよ、こいつ」

二人の相変わらずの切り返し合いを、今の上総は素直に笑って見ていられた。

——清坂氏、今はまだ、想ってくれる気持ちに対して、友だちとしてしか答えることができない。それは俺がまだまだガキだからだ。けど、いつか俺が大人になったら、きちんと伝えるべきことを伝える。それまで時間がかかるかもしれないし、清坂氏の期待した答えを出すことはできないかもしれない。もしかしたら別の女子を選んでしまうかもしれない。けど、どんな結論に達しても俺は清坂氏のことを嫌いにはならない。嫌いになんてなるわけがない。生まれて初めてできた友だちを、嫌いになるわけじゃないか！

カフェテリアの隅で席取りに成功し、手をふる二人組を追いかけてながら上総は、言えずじまいだった言葉をそっと繰り返した。

上総はカフェテリアテーブルの窓辺から、もう一度中学校舎を眺めた。

そこにはまだ、杉本梨南がいる、新井林健吾がいる、その他たくさんの縁をもらった後輩たちがいる。

反対側の高校校舎には美里が、貴史が先頭切って突っ走っている。他の同学年の連中がいる。先輩たちがいる。上総自身も、あと二週間後にはそこの住人になる。

新井林が送辞で語ったように、これから後輩たちとの繋がりは切れることがないだろう。杉本梨南に関しても、また同じことだろう。同じものを見つめている杉本と上総自身。本当だったらそこにこもっていたかった。でも、そういうわけにはいかない。

雪が解け、桜が満開となり、英語科で関崎と再会し、藤沖や片岡と険悪な関係が続ける日々がやってくる。英語科担任となる麻生先生ともこれからなにやら不吉な予感がする。だけど、立ち止まるわけにはいかないのもわかっていた。貴史が、美里が、そして周りの友だちがみな、上総より早く大人になっているのを見れば、追いかけないわけにはいかない。

早く追いつかねば、いつか杉本梨南が助けを求めてきた時に救うことのできる男にはなれない。

美里の一途な想いに誠実なイエス・ノーを出す人間にはなれない。

「清坂氏」

上総は先にお菓子とお茶を持って帰ってきた美里に声をかけた。

出入りしている大学生たちがげげんな顔をして上総を見た。無視して続けた。

「さっき言ったことだけど、俺も、同じだから」

「え？ どういうこと」

答えず、上総は手を差し伸べた。握手の意志はなかった。ただなんとなくそうしたくなっただけだった。美里がそっと同じように手を差し伸べるのと同時に、後から戻ってきた貴史もにやにやしながら手を出した。

「もう一度、心機一転、ニューディール政策、巻きなおしてとこだ。高校編第二幕、開く、ってな。立村、いいか、ほら、よっしゃ！」

貴史の派手な掛け声に笑いを堪えきれず、思わず顔がほころんだ。

今日笑ったのはたぶん二回目だろう。

三つ巴。三人の右手が重なり合った。

——羽飛、そして清坂氏。俺を好きになってくれたこと、嬉しかった。ありがとう。

——だから、早く、大人になる。ふたりに、追いつく。

貴史と美里、相変わらずのはしゃぎ声を聞きながら、上総はふたりへの答辞を、胸内でそっと読み終えた。

これから三人だけの、入学式典が始まる。

——終——

寒明け前

<http://p.booklog.jp/book/78013>

著者：舞夜じょんぬ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/maiyoruaogata/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/78013>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/78013>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ